

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第139集

六里遺跡・稻荷遺跡 (第1分冊)

2017

岐阜県文化財保護センター

ろく り
六里遺跡・稻荷遺跡
いな り
(第1分冊)

2017

岐阜県文化財保護センター



六里遺跡第2調査面全景（北東から）



六里遺跡第3調査面全景（東から）



土器埋設遺構 (SJ11) 検出状況（北から）



都荷遺跡発掘区東部全景（北西から）



六里遺跡出土遺物（古墳時代）



稻荷遺跡出土遺物（古代）



六里遺跡出土遺物（埋設土器）

序

大野町は、岐阜県南西部の揖斐郡に属し、根尾川と揖斐川に挟まれた平地と北部の山地からなる地形が特徴です。大野町は、国史跡「野古墳群」、県史跡「亀山古墳」や「北山古墳」を含む上磯古墳群など著名な古墳のほか、古代以来の条里地割が残るなど、歴史的な遺産が多く残る町です。

このたび、岐阜県揖斐土木事務所が行う県単街路事業に伴い、大字六里及び小衣斐に所在する六里遺跡・稻荷遺跡の発掘調査を行いました。六里遺跡は大野町の中央や東寄りの平地に位置し、大野町教育委員会の条里地割復原根拠となった地名から町史跡に指定された「条里跡」が含まれます。稻荷遺跡は六里遺跡の東に位置し、町北部の牛洞から南流する三水川の右岸に沿って位置しています。いずれも、平成16年度から20年度に大野町教育委員会の遺跡詳細分布調査によって発見された遺跡です。六里遺跡は「条里跡」の公園整備事業に伴う調査に統いて2度目、稻荷遺跡は初めての発掘調査となりました。

調査の結果、六里遺跡では中世以降の水田遺構や条里地割に伴う溝などの生産域、古墳時代の竪穴建物や掘立柱建物などの集落跡、縄文時代晩期の墓域の可能性がある土器埋設遺構群を確認しました。特に縄文時代晩期の遺構は大野町で初めての発見であり、また、厚い堆積土で覆われていたため保存状態が良く、貴重な調査事例となりました。稻荷遺跡では奈良時代から平安時代にかけての竪穴建物などの集落跡を確認し、大野町域における条里地割の施行を考える上で重要な資料をえることができました。本報告書が、広く県民の皆様に活用され、埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史的研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成に当たりまして、御理解と御協力をいただきました関係機関並びに関係者各位、大野町教育委員会、地元地区的皆様に深く感謝申し上げます。

平成30年1月

岐阜県文化財保護センター

所長 羽田 能崇

例　　言

- 1 本書は、岐阜県揖斐郡大野町大字六里・小衣斐に所在する六里遺跡(岐阜県遺跡番号 21403-11403) 稲荷遺跡（同 21403-11401）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、県単街路事業に伴うもので、岐阜県県土整備部揖斐土木事務所から岐阜県教育委員会が依頼を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘作業は、八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに平成 26 年度に実施した。整理等作業は、宇野隆夫帝塚山大学教授の指導のもとに平成 28 年度に実施した。
- 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第 1 章第 2 節に一括して掲載した。
- 5 本書の執筆は、六里遺跡については長谷川幸志が行った。稲荷遺跡については、佐竹正憲の所見をもとに長谷川が執筆した。また、編集は長谷川が行った。
- 6 発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影、出土遺物の洗浄・注記などの支援業務と整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、株式会社イビソクに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 プラントオバール及び花粉分析、樹種同定及び放射性炭素年代測定（AMS 法）、鉄滓成分分析は、株式会社パレオ・ラボに委託してを行い、分析結果報告を第 5 章に掲載した。なお、分析にかかる経緯や考察について、一部長谷川が加筆した。また、第 5 章第 1 節は長谷川が執筆した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。
- 近藤大典、竹谷勝也、中村健二、藤澤良祐、松本泰典、渡邊博人、大野町教育委員会
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第VII系を使用する。
- 11 土層及び土器類の色調は、小川正忠・竹原秀雄 2002『新版土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次 (第1分冊)

巻頭図版

序

例言

目次

第1章 調査の経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の方法と経過.....	3
第2章 遺跡の環境.....	12
第1節 地理的環境.....	12
第2節 歴史的環境.....	14
第3章 六里遺跡の調査成果.....	20
第1節 基本層序.....	20
第2節 遺構・遺物の概要.....	25
第3節 第1調査面の遺構・遺物.....	35
第4節 第2調査面の遺構・遺物.....	64
第5節 第3調査面の遺構・遺物.....	171

報告書抄録

目次 (第2分冊)

第4章 稲荷遺跡の調査成果

第1節 基本層序
第2節 遺構・遺物の概要
第3節 古墳時代及び古代の遺構・遺物
第4節 その他の時代の遺構・遺物
第5節 遺物包含層出土遺物

第5章 自然科学分析

第1節 分析の概要と成果
第2節 花粉分析及びプラント・オパール分析
第3節 炭化材樹種同定及び放射性炭素年代測定
第4節 鉄滓の成分分析

第6章 総括

第1節 六里遺跡・稻荷遺跡の堅穴建物について
第2節 六里遺跡の土器埋設遺構について
第3節 六里遺跡・稻荷遺跡の出土土器について
第4節 土地利用の変遷について

引用・参考文献

写真図版

挿図目次

第 1 図 渋跡位置図	2	第 43 図 SI 2 及び SK 7 遺構図	69
第 2 図 試掘坑と発掘区の位置	2	第 44 図 ST 3 遺構図①	71
第 3 図 発掘区地区割り図	5	第 45 図 SI 3 遺構図②	72
第 4 図 大野町の地質（山地）	13	第 46 図 SI 3・SI 4 出土遺物	72
第 5 図 大野町の地質（平地）	13	第 47 図 SI 4 遺構図	73
第 6 図 大野町の遺跡	16	第 48 図 SI 5 遺構図	74
第 7 図 発掘区周辺の空中写真	19	第 49 図 SI 6 遺構図①	76
第 8 図 発掘区周辺の復原条里地割	19	第 50 図 SI 6 遺構図②	77
第 9 図 発掘区西端の土層	20	第 51 図 SI 6 山土遺物	78
第 10 図 六里塚跡上層柱状図	23	第 52 図 SI 7 遺構図①	79
第 11 図 基本層面及び調査面模式図	24	第 53 図 SI 7 遺構図②	80
第 12 図 遺構属性模式図	27	第 54 図 SI 7 遺構図③	81
第 13 図 第 II 群繩文土器の分類①	30	第 55 図 SI 7 出土遺物	82
第 14 図 第 II 群繩文土器の分類②	31	第 56 図 SB 1～SB 3 出土遺物	83
第 15 図 繩文土器深鉢底部分類及び磨石・叩石類使用痕 分類模式図	33	第 57 図 SB 1～SB 3・SA 4 遺構図①	84
第 16 図 水田区画及び畦畔①	37	第 58 図 SB 1～SB 3・SA 4 遺構図②	85
第 17 図 水田区画及び畦畔②	38	第 59 図 SB 1～SB 3・SA 4 遺構図③	86
第 18 図 水田区画及び畦畔③	39	第 60 図 SA 1～SA 3 遺構図	88
第 19 図 水田区画及び畦畔④	40	第 61 図 SD 9～SD 14 遺構図①	90
第 20 図 畦畔及び構造遺構の長軸方位	41	第 62 図 SD 9～SD 14 遺構図②	91
第 21 図 水田区画及び畦畔出土遺物	41	第 63 図 SD 10 山土遺物	92
第 22 図 坪壇構造遺構群遺構図	43	第 64 図 SD 13・SD 19 出土遺物	93
第 23 図 SD 6 覆片等検出状況	44	第 65 図 SD 11・SD 12 山土遺物	94
第 24 図 SD 6 出土机	44	第 66 図 SD 21～SD 25 遺構図	96
第 25 図 坪壇構造遺構群出土遺物	45	第 67 図 SD 21～SD 25・SD 15 出土遺物	97
第 26 図 第 1 調査面遺物包含層出土遺物	47	第 68 図 SD 15 遺構図	98
第 27 図 第 1 調査面発掘区全城図削付図	52	第 69 図 SD 26 遺構図	99
第 28 図 第 1 調査面発掘区全城図分割図①	53	第 70 図 SD 26 主な遺物の出土位置	100
第 29 図 第 1 調査面発掘区全城図分割図②	54	第 71 図 SD 26 出土遺物①	101
第 30 図 第 1 調査面発掘区全城図分割図③	55	第 72 国 SD 26 出土遺物②	103
第 31 図 第 1 調査面発掘区全城図分割図④	56	第 73 国 SD 27～SD 29 遺構図	105
第 32 国 第 1 調査面発掘区全城図分割図⑤	57	第 74 国 SD 27・SD 28 出土遺物	106
第 33 国 第 1 調査面発掘区全城図分割図⑥	58	第 75 国 SD 30・SD 31 遺構図	106
第 34 国 第 1 調査面発掘区全城図分割図⑦	59	第 76 国 SD 30・SD 31 出土遺物	107
第 35 国 第 1 調査面発掘区全城図分割図⑧	60	第 77 国 SD 35・SD 38 遺構図①	109
第 36 国 第 1 調査面発掘区全城図分割図⑨	61	第 78 国 SD 35・SD 38 遺構図②	110
第 37 国 第 1 調査面発掘区全城図分割図⑩	62	第 79 国 SD 35・SK 34 出土遺物	111
第 38 国 第 1 調査面発掘区全城図分割図⑪	63	第 80 国 SD 39 縱構図	113
第 39 国 SI 1 遺構図①	65	第 81 国 SD 40・SD 43 遺構図	113
第 40 国 SI 1 遺構図②	66	第 82 国 SD 41 縱構図	115
第 41 国 SI 1 遺構図③	67	第 83 国 SD 39～SD 43 出土遺物	115
第 42 国 SI 1 出土遺物	68	第 84 国 SD 42 遺構図	116
		第 85 国 SD 44・SD 46 遺構図①	118

第 86 図 SD44・SD46 遺構図②	119
第 87 図 SD44 主な遺物の出土位置	119
第 88 図 SD44 出土遺物	120
第 89 図 SD45 遺構図	121
第 90 図 SD47・SD48 遺構図	123
第 91 図 SD49 遺構図	124
第 92 図 SD50 遺構図	126
第 93 図 SD54～SD60 遺構図	127
第 94 図 SD61 遺構図	129
第 95 図 SD45・SD49・SD50・SD54・SD67 出土遺物	130
第 96 図 SN26・SN27 遺構図	131
第 97 図 SL1 遺構図	132
第 98 図 SK8・SK9 遺構図	133
第 99 図 その他の土坑遺構図	135
第100 図 故郷跡溝跡群・焼土焼構・土坑出土遺物	136
第101 図 BN15～B020 上坑群の配置	137
第102 図 第2調査面遺物包含層出土遺物	139
第103 図 第2調査面発掘区全城図分割図	158
第104 図 第2調査面発掘区全城図分割図①	159
第105 図 第2調査面発掘区全城図分割図②	160
第106 図 第2調査面発掘区全城図分割図③	161
第107 図 第2調査面発掘区全城図分割図④	162
第108 図 第2調査面発掘区全城図分割図⑤	163
第109 図 第2調査面発掘区全城図分割図⑥	164
第110 図 第2調査面発掘区全城図分割図⑦	165
第111 図 第2調査面発掘区全城図分割図⑧	166
第112 図 第2調査面発掘区全城図分割図⑨	167
第113 図 第2調査面発掘区全城図分割図⑩	168
第114 図 第2調査面発掘区全城図分割図⑪	169
第115 図 第2調査面発掘区全城図分割図⑫	170
第116 図 SJ1・SJ2 遺構図	172
第117 図 SJ3・SJ4 遺構図	174
第118 図 SJ5・SJ6 遺構図	177
第119 図 SJ7～SJ9 遺構図	178
第120 図 SJ10・SJ11 遺構図	181
第121 図 土器埋設遺構出土遺物①	182
第122 図 土器埋設遺構出土遺物②	183
第123 図 土器埋設遺構出土遺物③	184
第124 図 土器埋設遺構出土遺物④	185
第125 図 土器埋設遺構出土遺物⑤	186
第126 図 土器埋設遺構出土遺物⑥	187
第127 図 SL2～SL4 遺構図	188
第128 図 SD62 遺構図	191
第129 図 SL2～SL4 及び SD62 出土遺物	192
第130 図 SK106・SK112・SK113 遺構図	194
第131 図 SK115 遺構図	195
第132 図 その他の土坑遺構図①	196
第133 図 その他の土坑遺構図②	197
第134 図 土坑出土遺物①	198
第135 図 土坑出土遺物②	199
第136 図 NR1・NR3 土層断面図	201
第137 図 NR1・NR3 土坑出土遺物①	202
第138 図 NR1・NR3 山上遺物②	204
第139 図 NR1・NR3 土坑出土遺物③	205
第140 図 遺物包含層（VIa層）出土遺物①	209
第141 図 遺物包含層（VIa層）出土遺物②	211
第142 図 遺物包含層（VIa層）出土遺物③	212
第143 国 遺物包含層（VIa層）出土遺物④	213
第144 国 遺物包含層（VIa層）出土遺物⑤	214
第145 国 遺物包含層（VIa層）出土遺物⑥	216
第146 国 遺物包含層（VIa層）出土遺物⑦	218
第147 国 遺物包含層（VIa層）出土遺物⑧	219
第148 国 遺物包含層（VIa層）山上遺物⑨	221
第149 国 遺物包含層（VIa層）出土遺物⑩	222
第150 国 遺物包含層（VIa層）出土遺物⑪	225
第151 国 遺物包含層（VIa層）出土遺物⑫	226
第152 国 遺物包含層（VIa層）出土遺物⑬	227
第153 国 遺物包含層（IV・V層地）出土遺物⑭	229
第154 国 遺物包含層（IV・V層地）出土遺物⑮	231
第155 国 第3調査面発掘区全城図分割付図	251
第156 国 第3調査面発掘区全城図分割図①	252
第157 国 第3調査面発掘区全城図分割図②	253
第158 国 第3調査面発掘区全城図分割図③	254
第159 国 第3調査面発掘区全城図分割図④	255

表目次

表 1 大野町の遺跡一覧	17
表 2 六里遺跡種別別遺構検出件数	26
表 3 六里遺跡出土石器点数	28
表 4 六里遺跡出土石器及び遺物 簿表	33
表 5 SD6 出土坑及び横木集計表	45
表 6 第1調査正田地区一覧表	48
表 7 第1調査面耕畔一覧表	48
表 8 第1調査面耕畔状遺構一覧表	49
表 9 第1調査面土坑 簿表	49
表 10 第1調査面出土土器總表①	49

表 11 第1調査面出土土器観察表②	50	表 41 第2調査面出土土器観察表①	157
表 12 第1調査面出土土製品一覧表	51	表 42 第2調査面出土土製品一覧表	157
表 13 第1調査面出土石器・石製品一覧表	51	表 43 第2調査面出土石器・石製品一覧表	157
表 14 第1調査面出土金属製品一覧表	51	表 44 第2調査面出土金属製品一覧表	157
表 15 SD6出土灰一覧表	51	表 45 第2調査面出土木製品一覧表	157
表 16 第2調査面窓穴建物一覧表	140	表 46 SD4出土灰一覧表	157
表 17 第2調査面窓穴建物カマド等属性表	140	表 47 各グリッドにおけるVla層出土土器の量	207
表 18 第2調査面窓穴建物主柱穴一覧表	140	表 48 第3調査面土器埋設構造一覧表	232
表 19 第2調査面窓穴建物埋構一覧表	141	表 49 第3調査面焼土遺構一覧表	232
表 20 第2調査面窓穴建物その他の灰面遺構一覧表	141	表 50 第3調査面土器埋設構造一覧表	232
表 21 第2調査面掘立柱建物及び柱穴列の柱穴一覧表①	141	表 51 第3調査面土坑一覧表	232
表 22 第2調査面掘立柱建物及び柱穴列の柱穴一覧表②	142	表 52 第3調査面出土土器埋設構造①	233
表 23 第2調査面面状遺構一覧表①	142	表 53 第3調査面出土土器埋設構造②	234
表 24 第2調査面面状遺構一覧表②	143	表 54 第3調査面出土土器埋設構造③	235
表 25 第2調査面面状遺構一覧表③	144	表 55 第3調査面出土土器埋設構造④	236
表 26 第2調査面面状遺構群一覧表	145	表 56 第3調査面出土土器埋設構造⑤	237
表 27 第2調査面土器遺構一覧表	145	表 57 第3調査面出土土器埋設構造⑥	238
表 28 第2調査面土坑一覧表①	145	表 58 第3調査面出土土器埋設構造⑦	239
表 29 第2調査面土坑一覧表②	146	表 59 第3調査面出土土器埋設構造⑧	240
表 30 第2調査面土坑一覧表③	147	表 60 第3調査面出土土器埋設構造⑨	241
表 31 第2調査面山土土器観察表①	147	表 61 第3調査面出土土器埋設構造⑩	242
表 32 第2調査面出土土器観察表②	148	表 62 第3調査面出土土器埋設構造⑪	243
表 33 第2調査面出土土器観察表③	149	表 63 第3調査面出土土器埋設構造⑫	244
表 34 第2調査面出土土器観察表④	150	表 64 第3調査面出土土器埋設構造⑬	245
表 35 第2調査面出土土器観察表⑤	151	表 65 第3調査面出土土器埋設構造⑭	246
表 36 第2調査面出土土器観察表⑥	152	表 66 第3調査面出土土器埋設構造⑯	247
表 37 第2調査面出土土器観察表⑦	153	表 67 第3調査面出土土器埋設構造⑯	248
表 38 第2調査面出土土器観察表⑧	154	表 68 第3調査面出土土器埋設構造⑰	249
表 39 第2調査面出土土器観察表⑯	155	表 69 第3調査面出土土製品一覧表	249
表 40 第2調査面出土土器観察表⑰	156	表 70 第3調査面出土石器・石製品一覧表	250

挿入写真目次

写真 1 六里遺跡調査前状況	3	写真 6 遺構剥削作業状況（稻荷遺跡）	6
写真 2 稲荷遺跡調査前状況	3	写真 7 景観写真撮影状況（六里遺跡）	6
写真 3 重機による表土剥削状況（六里遺跡）	4	写真 8 八賀晋氏による指導（六里遺跡）	8
写真 4 遺物包含層剥削状況（六里遺跡）	4	写真 9 タイムスリップ探検隊の様子（稻荷遺跡）	10
写真 5 遺構検出作業状況（稻荷遺跡）	4	写真 10 現地見学会の様子（稻荷遺跡）	11

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

六里遺跡及び稻荷遺跡は、揖斐郡大野町大字六里を中心とした地域に所在する。

今回の調査原因となった県道 273 号線の拡幅工事予定地が、「一ノ坪・大前町遺跡」等に隣接するため、大野町教育委員会が平成 25 年 1 月に試掘・確認調査を実施し、工事予定地内にも埋蔵文化財包蔵地が広がることを確認した。この結果により、隣接する周知の「一之坪・大前町遺跡」と「六里遺跡」及び確認した範囲を「六里遺跡・六里遺跡と旧河道を挟む位置で確認された集落跡については、周知の「里山稻荷神社遺跡」に含め、遺跡名を「稻荷遺跡」として、今回の調査を実施することになった（第 1 図）。

大野町教育委員会が実施した試掘・確認調査では、県道建設予定地内に試掘坑を計 10 箇所設定した（第 2 図）。TR 1 では遺物包含層、TR 2・3 では溝状遺構（六里遺跡 SD42・SD45・SD50）、TR 8 からは溝状遺構（稻荷遺跡 SD7・SD10）、TR 9 から竪穴建物（SI10・SI11）が検出された。これらの結果と、平成 24 年度に大野町教育委員会が実施した条里公園造成に伴う発掘調査の結果を踏まえ、条里公園北側の隣接地及び TR 1 から TR 4 まで（六里遺跡 2,322 m²）と TR 5 から TR 9 まで（稻荷遺跡 1,091 m²）について、保護措置が必要な範囲とされた。

平成 25 年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会において、工事内容が道路敷設であり「恒久的な工作物」とみなされることから、岐阜県発掘調査適用基準（平成 13 年 3 月 16 日岐阜県教育委員会教育長決定）に基づき、試掘・確認調査で埋蔵文化財が確認された施工範囲を対象として発掘調査が必要な旨の意見が示された。

本工事については、文化財保護法第 94 条第 1 項の規定に基づき、揖斐土木事務所長から岐阜県教育委員会教育長（以下「教育長」という。）あてに埋蔵文化財発掘通知（平成 26 年 1 月 10 日付け揖斐第 318 号）が提出され、同条第 4 項の規定に基づき、教育長から同事務所長あて発掘調査実施勧告（平成 26 年 2 月 19 日付け社文第 4 号の 225）を通知した。同事務所長は発掘調査の実施を決定すると共に、その実施を教育長に依頼し、教育長はセンターに実施を指示した。センターは調査着手後、発掘調査の報告（平成 26 年 5 月 9 日文財セ第 9 号）を教育長に提出した。

2 第1章 調査の経過



第1図 遺跡位置図（平成8年国土地理院発行1:50,000地形図「大垣」をもとに作成）



第2図 試掘坑と免掘区の位置（試掘坑位置図提供：大野町教育委員会）

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査の方法は、以下のとおりである。

グリッドの設定 遺物取り上げ等に用いる調査グリッドの設定は、平面直角座標系第VII系に基づく一辺5mの区画とした（第3図）。X=-59,500、Y=-48,900を原点として以東を割り付け、南北をA～T、東西を1～20に分割した。六里遺跡の発掘区は東西の長さが200mを超え、さらに稻荷遺跡を含むため、100m毎に大区画（A～E）を設定し対応した。以上により、六里遺跡の発掘区はAN 1からC0 2、稻荷遺跡の発掘区はDM 8からE010に含まれる。

発掘作業準備 発掘作業に先立ち、発掘区南側に隣接する水田に取水管から水を引き込むための取水管と発掘区と水田の境となる畦畔を設置した。また、六里遺跡のBN 4からB0 5グリッドには、水田への進入路となる仮設道を設置した。取水管及び仮設道の下については、水田への導水終了後に調査を実施した。また、仮設道を設置したことにより発掘区西の堆土置き場へ掘削堆土を搬出できなくなつたため、仮設道撤去までの間、条里公園北側の発掘区内に堆土の仮置き場を設置して対応した。

掘削作業 表土掘削は、現代耕作土とその敷土であるI層を重機で除去した後、II層を人力で掘り下げ、遺構検出を行った。

六里遺跡は、試掘・確認調査の結果を受けて当初発掘区全域を対象に3面調査を行う計画であったが、表土掘削後の検討で、AN10以西には、中世の水田層であるIII層が存在しないこと、縄文時代晚期の遺物を含む層がIV層とV層に分かれること、この堆積が仮設道の東に広がらないと判断したことから、それぞれの堆積範囲を想定した4面調査に工程を変更した。

第1調査面では、III層が残存するAN10グリッド以東の調査を行った。第2調査面では、III層を人力で除去後にその下層の遺構検出を行った。この際、第1調査面で調査しなかったAN10以西についても同時に調査を進めた。その後第3調査面の調査としてAN14～AP17グリッドのIV層除去を開始したところ、第2調査面で検出していたSD35が完全に掘削できていなかつたため、断ち割り調査を実施した際、SD35埋土の東西に縄文時代晚期の遺物包含層であるVIa層や土器埋設遺構（SJ 4）を確認した。これを受け他の場所でも土層確認を追加で行い、AN 8グリッド以西とSD44以東では



写真1 六里遺跡調査前状況（東から）



写真2 稲荷遺跡調査前状況（西から）



写真3 重機による表土掘削状況（六里遺跡）



写真4 遺物包含層掘削状況（六里遺跡）



写真5 遺構検出作業状況（稻荷遺跡）

VI層が確認できなかったため、VI層の堆積範囲のみ限定して調査する方針に再度変更した。しかし、この時点でも西へ向かって縄文時代晩期の地形が高くなると想定しており、重機掘削によりIV層・V層を除去するまで、遺構面を把握することができていなかった。周辺の水田への導水終了に伴い、仮設道や取水管下、排水管配設場下における第1・2調査面の調査終了後にIV・V層を重機で掘り下げ、VIa層を人力により掘削した。この段階で漸く縄文時代晩期の遺構が立地する面がほぼ平坦地、東西を自然流路で挟まれた中洲状の地形であることが判明し、第3調査面の対象範囲を確定した。

稻荷遺跡では、当初からIII層基底面のみを調査する予定で、II層まで重機を使って除去する計画であった。しかし DM20～E0 4 グリッド付近の重機掘削作業において多量に遺物が出土し、当初考えていたII層の厚さについて再検討する必要が生じた。後の確認によって稻荷遺跡におけるII層は残存状態が悪く、遺物包含層であるIII層（六里遺跡のII層に対応する層序）が発掘区全体に残存していることが判明した。しかし、重機掘削ではII層とIII層の判別が難しく慎重に掘り下げを行ったため、旧地形が低い発掘区西部ではII層が一部残った状態で人力掘削を開始することになった。この結果、遺物包含層掘削過程においてIII層上面から大甕群の痕跡（SM 1）を検出した。

遺構は小規模な遺構については半割、溝状遺構や竪穴建物は土層観察孔を残して掘削を行い、埋土の堆積状況を記録したのちに、半割した残り、あるいは土層観察孔を除去して遺構全体の掘削を行った。

記録作業 検出した遺構は、土層堆積状況と平面形について、手測り測量とデジタル測量を併用した図化及び写真撮影により記録した。ラジオコントロールヘリコプターによる発掘区全景の写真撮影は、六里遺跡は3回（第1調査面、第2調査面2回）、稻荷遺跡は1回実施し、六里遺跡の第3調査面のみ脚立を用いた。



第3図 発掘区地区割り図

6 第1章 調査の経過

出土遺物は、遺物包含層出土遺物をグリッド単位、遺構出土遺物を遺構単位で取り上げた。当初は遺構出土遺物について全点原位置測量する計画であったが、遺構埋土中に含まれる遺物に細片が多いことなどから、残存状態が良いものや出土状況の区面作成を行うなど出土位置が特に重要と考えられるものののみを原位置で取り上げた。



写真6 遺構掘削作業状況（稻荷遺跡）



写真7 景観写真撮影状況（六里遺跡）

2 調査の経過

調査の経過は、以下のとおりである。

(1) 六里遺跡発掘作業（平成26年度）

第1週～3週（4月13日～5月3日） 14日から民地との境の仮設畦畔、取水管設置作業等準備工を開始した。28日から重機による表土掘削作業を開始した。

第4週（5月4日～10日） 9日に表土掘削作業を終了した。

第5週（5月11日～17日） 12日から人力による排水溝掘削作業などを開始した。遺物包含層掘削作業は16日から実施し、AN10 グリッド付近から東に向かって進めた。

第6週（5月18日～24日） 20日にAN10～AP13 グリッドの遺構検出作業を実施した。AN10～AP11 グリッドには、上面を第1調査面と想定していたIII層がなく、第2調査面で調査を予定していた堅穴建物等を検出したため、東へ遺構検出作業を進めることにした。23日に発掘区ほぼ中央のB0 4 グリッドまで遺構検出作業を終了した。

第7週（5月25日～31日） 29日から基本層序見直しのため、排水溝をさらに深く掘削する作業を実施した。

第8週（6月1日～7日） 発掘区南壁が降雨などの影響により大きく崩落し、詳細な土層観察を行なうことが不可能となった。崩落部分を構造用合板や杭で補強し、土層観察は調査を進めながら適宜実施する事にした。4日から条里公園進入路の西側に位置するAN 1～AP 2 グリッドの調査を開始し、6日には遺構検出作業まで終了した。

第9週（6月8日～14日） AN 1～AP 2 グリッドの遺構掘削作業を実施した結果、ほとんどが古墳時代に属するものであることが判明したため、一旦当該地区的調査を終了した。10日には坪塙溝群（S0072等）を検出した。

第10週（6月15日～21日） 17日に第1調査面の遺構検出作業を終了した。引き続き水田遺構

や溝などの遺構掘削作業を行った。

第11週（6月22日～28日） 24日に八賀晋三重大学名誉教授が現場に来訪され、発掘調査の指導を受けた。25日に第1調査面の遺構全景写真を撮影した。その後、SD 6の横木取り上げ、畦畔跡の解体など補足調査を行った。

第12週（6月29日～7月5日） 7月1日に、発掘区東端から第2調査面の調査を開始した。

第13週（7月6日～12日） BN18～CO 2グリッドまでの遺構検出作業を終了した。この際、畝状遺構（SN26）や多数の土坑群を検出した。その後、西に向かって作業を進めた。この頃、雨天による排水作業が調査に支障をきたすことが多くなった。

第14週（7月13日～19日） BN15～B017グリッドの遺構検出作業が終了し、SD59などの溝群を確認した。

第15週（7月20日～26日） 雨天や発掘区の冠水により作業休止になることが多いかった。

第16週（7月27日～8月2日） BN12～B014グリッドの遺構検出作業を終了した。これまでに検出したSD59などと主軸方位が異なる溝（SD50等）を検出した。

第17週（8月3日～9日） BN 6～B0 9グリッドの遺物包含層掘削作業を実施した。5日に安八郡中学校社会科研究会が現地見学、海津明誠高校生徒が発掘体験（主に稻荷遺跡）、7日から奈良大学学生1名が職業体験を行った。

第18週（8月10日～16日） BN 6～B0 7グリッドの遺物包含層掘削作業を実施した。13～15日は夏期休業により作業を休止した。

第19週（8月17日～23日） BN 6～B0 9グリッドの遺構検出作業を実施するとともに、発掘区中央の仮設道西側の遺物包含層掘削作業及び遺構検出作業を開始した。BN 6～B0 9グリッドは溝以外明確な遺構は見られず、土層確認のための断面調査によって第2調査面の溝群に先行する自然流路が存在したことが判明した。この自然流路から西側は旧地形が徐々に高くなり、AN20～B0 4グリッドから多数の重複する溝や柱立柱建物（SB1）を検出した。22日に不破郡小中学校社会科研究会が現地見学のため来訪した。

第20週（8月24日～30日） 西側に向かって遺物包含層掘削作業を進めるとともに、溝群や掘立柱建物の柱穴を中心に遺構掘削作業を進めた。AO18～19グリッドから堅穴建物（SI 7）を検出した。

第21週（8月31日～9月6日） 坪境溝群の調査のために、Ⅲ層を残していたBN10～B011グリッドの遺物包含層掘削及び遺構検出作業を実施し、坪境溝下層にも先行する溝（SD49）が存在したことを確認した。AN14グリッドから東の遺構検出作業を終了し、溝群や掘立柱建物の遺構掘削を継続して実施した。4日には八賀晋三重大学名誉教授から発掘調査に関する指導を受けた。

第22週（9月7日～13日） AN14グリッド以東の遺構掘削作業を進めるとともに、先に検出していたAN10～A013グリッドの再検出作業を実施した。これにより、排土仮置き場や取水管下を除く、第2調査面の遺構検出作業を終了した。

第23週（9月14日～20日） 堅穴建物や溝などを中心に遺構掘削作業を行った。溝跡には古墳時代だけでなく、平安時代のものも含まれることを確認した（SD30等）。

第24週（9月21日～27日） 24日に第2調査面の遺構全景写真を撮影し、補足調査を実施した。



写真8 八賀晋氏による指導（六里遺跡）

く、これまで考えていた第3・4測査面の深さや範囲の見直しが必要となつたため、トレンチ調査等による下層確認を行つた。11日には大野町教育委員会との共催で現地見学会を開催し、110名の参加を得た。

第27週（10月12日～16日） 水田への導水が終了したことに伴い、14日から取水管下の調査を開始した。16日から排土仮置き場から排土を撒出し、17日に表土掘削作業を開始した。

第28週（10月19日～25日） 20日に表土掘削作業を終了し、同日から当該箇所の遺物包含層掘削作業を開始した。西側から続く遺構の他、AN 8～AP 9グリッドにかけて里境と考えられる溝群を検出した。AN 6～AP 8グリッドは土地改良や抜根によって基盤層まで削平されており、SI 3は、周溝や主柱穴のみ残存していた。AN 4～AP 4グリッド付近からは、東西方向の溝群（SD12・13）と竪穴建物（SI 1）が重複している状況を確認した。

第29週（10月26日～11月1日） 遺構掘削作業や取水管下の調査を行つた。

第30週（11月2日～8日） 4日から発掘区中央に設置していた仮設道を撤去するとともに、その下の表土掘削作業を開始した。また取水管下の遺構検出作業を実施し、取水管下になっていた掘立柱建物SB 1や竪穴建物SI 7の一部についても調査した。5日には、仮排土置き場の下を対象とした、遺構全景写真を撮影した。6日からIV・V層を除去するための重機掘削作業を開始し、7日に一旦終了した。なお、11月4日からセンターにおいて、出土遺物の一次整理作業を開始した。

第31週（11月9日～15日） 10日から第3測査面の遺物包含層掘削作業を開始した。排水溝掘削作業により、AN19グリッド以東が自然流路（NR 3）であることが判明したため、AN18グリッドから西へ掘削を進めた。10日にAN18グリッドからSJ 9を検出したのを皮切りに、AN15からAN18にかけて土器埋設遺構が次々とみつかった。13日に重機掘削作業を再開し、ほぼ平坦に西へ遺構面が続く状況を確認した。第3測査面の遺構掘削作業を開始し、土坑SK115の掘削中に、土器埋設遺構SJ 5の南側から石刀（357）が出土した。また、14日に実施したAN13～A014グリッドの遺物包含層掘削作業では、多量の土器が出土した。12日に株式会社パレオ・ラボが花粉分析及びプラントオパール分析のための試料を採取した。

第32週（11月16日～22日） 17日に重機掘削作業を再開し、自然流路（NR 1）のあるAN8グリッド

第25週（9月28日～10月4日） 補足調査を継続するとともに、AN14～A017グリッドから第3測査面の遺物包含層掘削作業を開始した。

第26週（10月5日～11日） 第3測査面の遺物包含層掘削作業の過程で、第2測査面で調査したSD35がさらに大きく深い溝であることが判明した。そのため当該遺構周辺の断ち割り調査を実施したところ、第2測査面の約80cm下から、土器埋設遺構（SJ 4）を検出した。これは23年度の試掘坑より深

ド付近で遺物がほとんど出土しなくなることから、第3調査面の調査範囲の西限とした。またこの結果、土器埋設遺構群が展開する平坦地は、流路に囲まれた中洲状の微高地である事が判明した。18日に西端の土器埋設遺構であるSJ 1を検出した。19日には第3調査面の遺構検出作業をほぼ終了し、遺構掘削作業を実施した。

第33・34週（11月23日～12月6日） 土器埋設遺構を中心に調査を行った。

第35週（12月7日～13日） 土器埋設遺構の調査を実施し、9日に第3調査面の遺構全景写真を撮影した。また、発掘区北壁の土層断面図を作成した。

第36週（12月15日） 発掘区壁面の土層図作成作業が終了し、現地作業を完了した。

第36週以降 12月16日からセンターにて記録類の整理作業を開始した。出土遺物の一次整理作業は1月15日まで行った。

（2）稻荷遺跡発掘作業（平成26年度）

第1週～6週（4月13日～5月24日） 14日から民地との境の仮設畦畔、取水管設置作業等準備工を開始した。

第7週（5月25日～31日） 26日から表土掘削作業を開始し、29日に作業を終了した。

第8週（6月1日～7日） 3日から排水溝掘削などの人力掘削作業を開始した。

第9週（6月8日～14日） 12日から発掘区西端のDM 9～D010グリッドの調査を開始し、遺物包含層掘削作業を行った。発掘区壁面の土層観察中に坪境推定位置の近辺で、Ⅲ層上面から掘り込まれた遺構を確認したため、条里プランに関する遺構である可能性を鑑み、当該範囲についてⅢ層上面での調査を行うことにした。13日に発掘区全域の土層観察、土層断面の図化を終了した。

第10・11週（6月15日～28日） DM 9～D019グリッドのⅢ層上面での調査を進めた。坪境推定位置周辺で集石遺構（S0015）と杭穴と考えられる小孔を多数検出した。24日に八賀晋三重大学名誉教授が現場に来訪され、発掘調査の指導を受けた。

第12～14週（6月29日～7月19日） Ⅲ層上面での遺構掘削と並行し、発掘区西端から遺物包含層（Ⅲ層）掘削作業を進めた。

第15週（7月20日～26日） 22日にDM13～D015グリッドの遺構検出作業を終了した。遺構範囲が不明瞭なものが多かったため、段掘りを行い、輪郭が明瞭になったものと列状に配置されたものを遺構として調査した。また、DM14グリッド以東では基盤層が異なる（V層）ことを確認した。23日にSM 1付近の調査を終了した。25日にDM15～D019グリッドの遺構検出作業を終了し、畝状溝跡群（SN1）を検出した。

第16週（7月27日～8月2日） 28日から畝溝群の調査を始め、31日に終了した。30日にタイムスリップ探検隊（美濃）を開催した。

第17週（8月3日～9日） この頃から北側用水路からの浸水が増えてきたため、DM20グリッド以東の発掘区北側で、排水溝掘削作業を順次進めた。5日に安八郡中学校社会科研究会が現地見学及び海津明誠高校生徒が発掘体験、7日から奈良大学生1名が職業体験を行った。

第18週（8月10日～16日） 土層確認作業の結果、DM19～D020グリッドでは河川堆積に由来する砂疊層（Ⅶ層）が地表に露出していることを確認した。13～15日は夏期休業により作業を休



写真9 タイムスリップ探検隊の様子（稲荷遺跡）

止した。

第19週（8月17日～23日） 21日からDM20グリッド以東の遺物包含層掘削作業を開始した。22日には不破郡小中学校社会科研究会が現地見学のため来訪した。

第20週（8月24日～30日） 27日にDM20～EO1グリッドの遺構検出作業を終了し、2軒の重複する竪穴建物（SI1・SI2）と複数の土坑を検出した。土坑の遺構掘削作業と並行して、EM2～EO4の遺物包含層掘削作業を進めた。EN3グリッドで

検出した竪穴建物（SI5）の埋土上から、須恵器甕（704）がまとまって出土した。

第21週（8月31日～9月6日） 2日にEM2～EO2グリッドの遺構検出作業を終了し、重複する2軒の竪穴建物（SI3・SI4）を検出した。SI1と周辺の土坑の調査を並行して進めた。4日に八賀晋三重大学名誉教授から発掘調査に関する指導を受けた。

第22週（9月7日～13日） EN3グリッドから東へ遺物包含層掘削作業を進め、10日にEM3～EO4グリッドの遺構検出作業を終了し、新たに2軒の竪穴建物（SI5・SI6）を確認した。10日にEM2～EM3グリッドで検出した土坑列の調査を開始した。11日にEM5～EO5グリッドの遺物包含層掘削作業を終了した。

第23週（9月14日～20日） 竪穴建物を中心に遺構掘削作業を進めた。17日から調査未着手だったEM8～EN10グリッドの表土掘削作業を開始し、18日に終了した。

第24週（9月21日～27日） 竪穴建物を中心に遺構掘削作業を進めた。26日にEM5～EO7グリッドの遺構検出作業を終了した。

第25週（9月28日～10月4日） 30日にEM8～EN10グリッドの遺物包含層掘削作業を行い、2日に遺構検出作業を終了した。

第26週（10月5日～11日） 竪穴建物を中心に遺構掘削作業を進めた。EM6～EO7グリッドで柱痕跡が残る土坑を複数確認した。遺構から出土した遺物の位置を全点原位置で測定することについていたが、8日から先述のとおり方針を変更した。9日から岐阜大学学生1名が職業体験を行った。11日に現地見学会を開催した。

第27～29週（10月12日～11月1日） 竪穴建物を中心に遺構掘削作業を行った。発掘区南側の水田への導水が終了したため、14日から取水管下の調査を開始した。21日からDM19～D020グリッドとDM15～D015グリッドの取水管畔を順次取り外し、23日に遺構検出作業を終了した。

第30週（11月2日～8日） 竪穴建物を中心に遺構掘削作業を進めた。6日からD012～D013グリッドの取水管畔撤去作業を開始した。SI13とSI15の調査時に、埋土下から2軒の竪穴建物（SI17・SI18）を検出した。なお、11月4日からセンターにおいて、出土遺物の一次整理作業を開始した。

第31週（11月9日～15日） 竪穴建物を中心に遺構掘削作業を進めた。12日にD012～D013グリッドの取水管畔撤去作業と遺構検出を終了した。同日、株式会社パレオ・ラボが花粉分析及びブ

ラントオパール分析のための試料を採取した。

第32週（11月16日～22日）堅穴建物とその付属施設の遺構掘削作業を継続して行った。19日に遺構全景写真を撮影した。また、発掘区壁面の土層断面図修正等を実施した。

第33週（11月23日～29日）27日にEM8～EN10グリッド付近の埋め戻し作業を行った。

第34週（12月3日）土層断面図修正作業が終了し、現地作業を完了した。

第34週以降 12月4日からセンターにて記録類の整理作業を開始した。遺物の一次整理作業は12月19日まで行った。

（3）整理等作業（平成28年度）

遺物実測や挿図作成等の整理等作業は、センターにおいて実施した。整理等作業時には、宇野隆夫氏（帝塚山大学）から遺跡全体の評価や総括に関する指導を受けた他、縄文土器や土器埋設遺構に関する指導を中村健二氏（財団法人滋賀県文化財保護協会）、松本泰典氏（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）、須恵器及び灰釉陶器に関する指導を渡邊博人氏、中近世陶磁器に関する指導を藤澤良祐氏（愛知学院大学）、墨書き土器に関する指導を近藤大典氏（岐阜県博物館）から受けた。また、六里遺跡の炭化材樹種同定及び放射性炭素年代測定及び鉄滓成分分析は株式会社パレオ・ラボ、六里遺跡及び稻荷遺跡出土金属製品の保存処理は株式会社イビソクに委託して実施した。

3 調査体制

発掘調査の体制は、以下のとおりである。

センター所長 宮田敏光（平成26年度） 羽田能崇（平成28年度）

総務課長 二宮 隆（平成26・28年度）

調査課長 成瀬正勝（平成26年度） 春日井恒（平成28年度）

調査担当係長等 吉田 靖（平成26年度） 三輪晃三（平成28年度）

担当調査職員 長谷川幸志（平成26・28年度） 佐竹正憲（平成26年度）



写真10 現地見学会の様子（稻荷遺跡）

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

揖斐郡大野町は、岐阜県の南西部、濃尾平野の北西端部に位置する。揖斐郡揖斐川町（旧谷汲村、揖斐川町）及び池田町、安八郡神戸町、本巣市（旧巣南町、旧真正町、旧糸貫町、旧本巣町）と境を接する。大野町の町域は、東西約 5.8 km、南北約 11.7 km、面積 34.07km²で、根尾川と揖斐川に挟まれたその平面形は逆三角形に近い。町域の北部と南部で明確に地形が分かれており、北部の山地（更地山、野村山、牛洞山）が揖斐川町との境界になっている。この山地は、美濃帯を構成する古生代二疊紀層に含まれ、その内最も広い分布域を示す根尾相に属する。根尾相は主にチャート・砂岩・粘板岩からなり、特に山地南麓の傾斜面には硬いチャート岩盤が露出し、急峻な地形となる。この斜面から落下した堆積物により形成された緩斜面（崖壁）上に、牛洞地区の各集落が立地する。

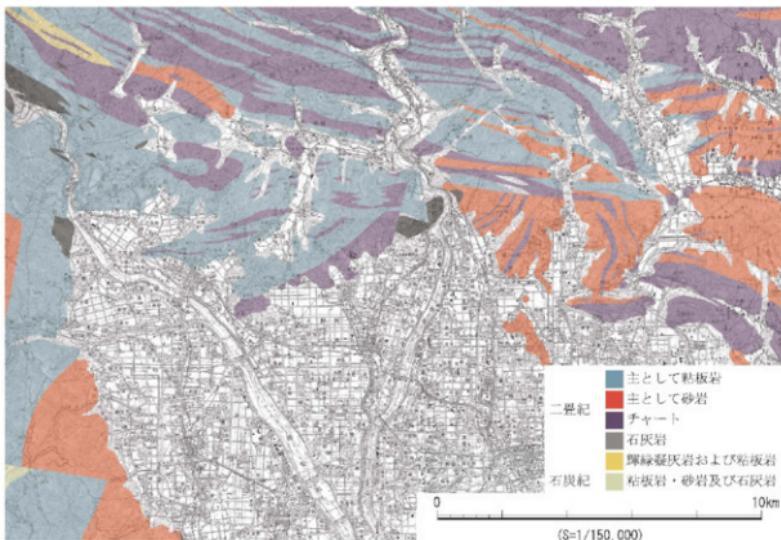
町域の大部分を占める平地は、黒野地区の低台地と根尾川及び揖斐川が形成した合成扇状地で形成される。黒野台地は六里遺跡・稻荷遺跡の東にあたる三水川の右岸に広がり、新生代第4紀の最終氷期に古根尾川などによって形成された洪積世に属する段丘面とされる。揖斐川・根尾川が形成した扇状地は、両河川が運んだ上砂によって形成された緩やかな緩斜面であり、沖積世に属する。根尾川扇状地は、本巣市本巣町山口付近を扇頂にして広がり、東は岐阜市黒野、西は大野町黒野の西端を流れる三水川を境としている。現在の根尾川はかつて藪川と呼ばれ、根尾川本流となつたのは享禄3年（1530年）の大洪水以降である。その結果、根尾川は扇尖を流下しなくなり、渴水期には水無川となる。一方、揖斐川扇状地は揖斐川流域に広がっており、大野町周辺では河川の分流による網状流路が発達した。揖斐川町や大野町の古い集落は、網状流路によって形成された旧中州の微高地に立地する。現況地形も、揖斐川から南東方向へ低くなつており、現在の用水路の方向もこれに影響されている。六里遺跡・稻荷遺跡は、根尾川扇状地と揖斐川扇状地の境付近に立地するが、用水の流水方向は揖斐川扇状地上にあることを示している。

揖斐川と根尾川は大野町座倉で合流するが、このあたりは地形が低く、頻繁に洪水被害にあった記録が残る。一方、六里遺跡の周辺（六里村）では、明確な洪水の記録は残っておらず¹⁾、調査でもその痕跡は確認できなかった。稻荷遺跡の東側を流れる三水川は、大野町牛洞に端を発する小河川である。牛洞地区は、現在でも地形が低く、かつて湖沼があったと推定されている。湖沼自体は陸地化したもの、扇状地による堆積は進まず、後背湿地となっていた。国史跡「野古墳群」を築いた集団は、この後背湿地での水田経営を生産基盤としていたという指摘がある²⁾。昭和57年3月までに施工された三水川の浚渫工事が完成するまでは、豪雨等により旧牛洞湖沼の範囲が頻繁に水没したという³⁾。

現在の大野町域は、昭和39年から60年にかけて実施された土地改良事業により広大な平坦地となっているが、今回の調査で確認した縄文時代晚期以来の遺構は、小河川や微高地に影響された土地開発の様相を伝えるものであり、土地利用の地理的な変遷を考える上でも重要な資料といえる。

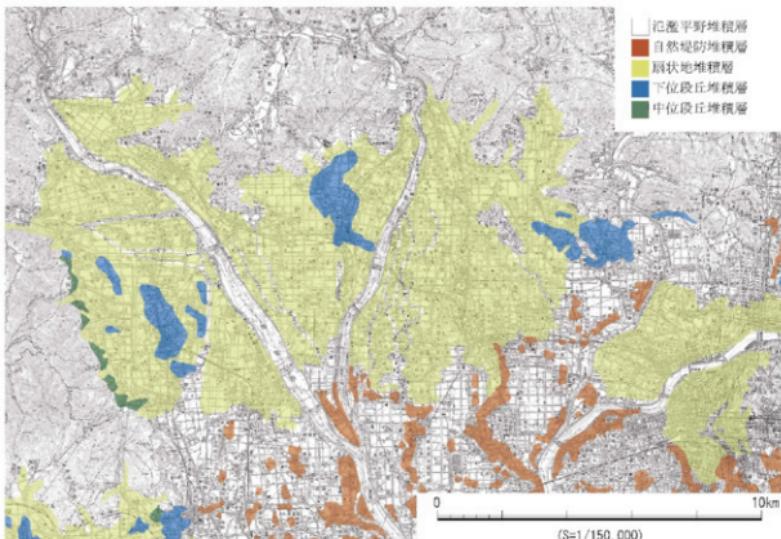
注

1) 烏本洋一 1985 「第4章第1節第4項 災害」『大野町史 通史編』大野町



第4図 大野町の地質（山地）

(小林勇他1970『岐阜県地質鉱産図』岐阜県 を再トレースし、平成14年発行国土地理院1:50,000地形図「大垣」に重ねて作成)



第5図 大野町の地質（平地）

(同上)

- 2) 八賀晋 2011 「第4章第1節 地形環境と開発」『大野の条里』大野町文化財調査報告書第6集 大野町教育委員会
- 3) 大熊賢昭 1985 「第1章第1節第6項 三水川と氾濫盆地低地」『大野町史 通史編』大野町

第2節 歴史的環境

1 大野町の遺跡

平成16年度から20年度にかけて実施された大野町の遺跡詳細分布調査によって、95箇所の埋蔵文化財包蔵地¹⁾が確認された。以下、時代ごとに町内の遺跡について記述する²⁾。

旧石器・縄文時代 旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代では、物干山遺跡（6）・カイト遺跡（5）・姥田遺跡（3）がある。物干山遺跡及びカイト遺跡は、大野町教育委員会が平成8年から9年間に調査を実施した。物干山遺跡では、早期から前期初頭の土器・石器が出土した。カイト遺跡では、竪穴建物の可能性がある遺構が確認され、中期後葉から末葉の土器が出土した。なお、「カイトから柚木洞にかけての一帯には、調査前に確認されたような径2～5m程度の凹みは隨所にみられ」（大野町教育委員会 2006）、この凹みが竪穴建物の痕跡である可能性が指摘されている。姥田遺跡では、試掘・確認調査によりTK217併行期の竪穴建物が検出された面の下層で縄文土器が出土しており、六里遺跡と類似する状況がみられる。この他、公郷八木地内において、砂利採取中に縄文時代中期の大型石棒が出土した。

弥生時代 古くから知られた遺跡としては、南山遺跡（8）があり、北山古墳（66、県史跡）・南山古墳（67、町史跡）を含む一帯を範囲とする。小川栄一氏の調査で、古墳の封土から弥生土器片・磨製石斧等が採集されており、昭和47年には南山古墳北側の農業用排水路工事で、多量の土器片や木製品が出土した。また、南山遺跡の東に隣接する滅失した笛山古墳（68）周辺でも町道建設時に遺物が出土した（笛山遺跡、7）。前述のカイト遺跡では、廻間I～II期の土器が遺物包含層から出土した。宮田遺跡（10）は河床や河川敷から須恵器や弥生土器が採集される遺物散布地で、河道が変化したことにより水中に没したと考えられている。この他、松山遺跡（11）や法政寺・御屋敷遺跡（12）では、弥生土器や古墳時代初頭の遺物を含む遺物包含層が確認された。

古墳時代 古墳時代には、上磯古墳群（64）や野古墳群（48）の他、町内各所で遺跡の分布がみられる。上磯古墳群は、現存する角山古墳（65、県史跡）・南山古墳・北山古墳のほか、大野南小学校地内にあつたとされる小古墳（上磯1・2号墳）、2基の円墳とされる笛山古墳からなり、4世紀に連続して築かれた首長墓群とされる。野古墳群は、400m四方に前方後円墳を含む古墳が密集する東海地方に類例のない遺跡として、昭和32年に国史跡に指定された。現在、前方後円墳8基を含む9基が現存し、8基の滅失墳が調査で確認されている。乾屋敷古墳（野6号墳）をはじめとする前方後円墳は上磯古墳群に後続する首長墓群で、5世紀代に連続して築造されたとされる一方、造出付円墳や小規模な円墳・方墳が同時期に築造されている。この他、押ヶ谷山頂に立地する押ヶ谷古墳（79）は全長43mの前方後円墳であり、この他カツラ山古墳（77）や丸山古墳（62）、大谷山頂古墳（76）等の北部山地に立地する古墳は、古墳時代中期以前とされる。古墳時代後期では北部山地等に群集墳が築かれ、前述の中古墳を含めて280基以上の古墳が分布する。この内の堂ヶ洞古墳群（52）2基（16・18号墳）、

三ヶ原古墳群（50）3基（3・5・6号墳）、カイト古墳群（49）37基（7～10・17・19・20・22・36～64号墳）の計42基を、大野町教育委員会が調査した。いずれも横穴式石室をもつ後期～終末期の古墳である。この他、根尾川左岸の段丘面に立地する十二塚古墳群（63）などが後期古墳として知られている。集落跡では、前述の堅穴建物を検出した姥田遺跡、同時期の溝状造構を検出した大藪遺跡（15）などがあるが、本格的な発掘調査では平成24年度の大野町教育委員会による六里遺跡の調査が初見であり、この際には古墳時代中期～後期の集落跡が確認された。

古代 古代では、町域全体で遺物の散布が見られる。著名な遺跡としては、川原寺式系の瓦が出土した大隆寺跡（82）がある。昭和43年の工場建設によって塔心礎が移動され、遺構の大半が破壊された。郡家遺跡（28）は、その地名から大野郡郡家に比定されており、古代から中世にかけての遺物が採集されている。また、古代東山道が大野町南端の下磯地区に位置していたことが推定されており、『和名類聚抄』の大野郡13郷の一つである駿家郷及び東山道大野駅が当該地に比定されている。発掘調査では、カイト遺跡から9世紀前半の火葬墓及び火葬施設が検出された。須恵器の蔵骨器の他、火葬施設に伴って和同開珎が出土した。また、同調査において抽木洞・布賀利神社遺跡（4）では、鍍金銅片や須恵器を伴う祭祀跡を検出した。布賀利神社は、『美濃國神明帳』の「従五位下布賀利明神」に比定されている。座倉遺跡（17）では、平成元年の大野町教育委員会による発掘調査でK-90号窯式期の灰釉陶器と美濃須衛窯V期の須恵器が共伴する堅穴建物などを検出した。また、前述の六里遺跡の発掘調査でも、10世紀前半とされる堅穴建物が確認された。

中世・近世 古代から引き続き町内の全域で遺物の散布が見られるが、明確な集落跡は確認されていない。前述の六里遺跡の調査で、中世前期と考えられる堅穴建物が検出されているのが唯一の事例である。この他町内には、中近世の城館や城跡に関する遺構や伝承が残る。相羽城跡（89）は、鎌倉初期に土岐氏の一族である齋庭光俊の居城となり、天文年間に垂井から長屋景興が移り住んだが、天文16年（1547）に斎藤道三によって落城したとされる。中之元城跡（92）は、字老町田の方1町の区画に比定されており、明応4年（1495）の土岐成頼の後嗣争いに端を発する船田合戦において、城主古田氏が攻められたおりに主戦場となったとされる。上之城跡（93）・下之城跡（94）はそれぞれ方1町、方半町程度の規模をもつ城館と推定され、宅地開発前までは、上之城跡に土塁が残存していた。大御堂城跡（95）は公郷にあったとされる城館で、竹中半兵衛の生誕地とされる。昭和49年の土地改良前までは土塁が残っており、隣接する竹中氏の菩提寺月真寺には、元亀3年（1573）銘の五輪塔（町史跡）が所在する。野村城跡（88）は、野村山山頂に築かれた山城であり、大谷山山頂古墳の墳丘を利用して曲輪が造成されている。文献では14～15世紀の状況を伝えるが、曲輪自体は戦国期のものと推定されている。織田河内守邸跡（91、町史跡）は大野町野に所在し、慶長6年（1601）から寛永8年（1631）まで、旧野村ほか1万石を領した織田河内守2代の屋敷跡である。現在でも土塁と水路（堀）が残る。また、現在の野村集落には、近世初期の城下町が存在したと考えられている。牛洞陣屋跡（90、町史跡）は、寛延2年（1749）に深坂から移転した旗本戸田相模守の陣屋跡で、現在でも石垣や削平地などの遺構が残存している。

六里遺跡・稻荷遺跡が所在する旧六里村は、近世には主に大垣藩領で、明治31年（1898）に黒野・相羽・下方・麻生と合併し、大野村となった。六里にはかつて根尾から運び出された段木（つだ、大垣藩が年貢の代替で徵収した燃料用の材木）の集積場があり、根尾から戸川に流した段木を人工の河



(平成14年発行国土地理院1:50,000地形図「谷汲」及び平成8年発行「大垣」)を元に作成

表1 大野町の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	六里遺跡	縄文～近世	集落跡他	52	堂ヶ森古墳群	古墳	古墳
2	稻荷遺跡	奈良～中世	集落跡・生産遺跡	53	鶴谷古墳群	古墳	古墳
3	蛭田遺跡	縄文 古墳	集落跡	54	宮西古墳群	古墳	古墳
4	榎木洞右賀利社寺遺跡	式古 云々 周代	散布地・社寺跡	55	宮東古墳群	古墳	古墳
5	カイト遺跡	縄文 平成	散布地	56	那伎古墳群（西ツ塚）	古墳	古墳
6	物干山遺跡	縄文 平安	散布地	57	中平古墳群	古墳	古墳
7	笠山遺跡	弥生	散布地	58	天王山古墳群	古墳	古墳
8	南山遺跡	弥生 古墳	集落跡	59	櫛富前山古墳群	古墳	古墳
9	麻町遺跡	弥生～平安	集落跡	60	井口山古墳群	古墳	古墳
10	宮田遺跡	弥生～平安	散布地	61	日合蒙古墳	古墳	古墳
11	松山遺跡	弥生～中世	散布地	62	丸山古墳	古墳	古墳
12	法政寺・御扇敷遺跡	弥生～中世	集落跡	63	十二塚古墳群	古墳	古墳
13	加納一ノ坪遺跡	弥生～中世	散布地	64	上嶺古墳群	古墳	古墳
14	板井町遺跡	弥生 古墳 平安	散布地	65	龜山古墳	古墳	古墳
15	大森遺跡	古墳	集落跡	66	北山古墳	古墳	古墳
16	宇津官道跡	古墳 中世	集落跡	67	南山古墳	古墳	古墳
17	座倉遺跡	古墳～平安	集落跡	68	笠山古墳	古墳	古墳
18	下轍東遺跡	古墳～平安	散布地	69	一ツ塚古墳	古墳	古墳
19	姫宮神社遺跡	奈良 中世	散布地	70	西ノ瀬古墳群	古墳	古墳
20	東ノ里遺跡	奈良 平安	散布地	71	洞山古墳群	古墳	古墳
21	加納神明神社遺跡	奈良 平安	散布地	72	室塚古墳	古墳	古墳
22	高見遺跡	奈良～中世	集落跡	73	駒越古墳群	古墳	古墳
23	黒野八幡神社遺跡	奈良～中世	散布地	74	河原口古墳	古墳	古墳
24	大神遺跡	奈良～中世	散布地	75	脇ヶ瀬古墳	古墳	古墳
25	小衣斐村ノ内遺跡	奈良～中世	散布地	76	大谷山頂古墳	古墳	古墳
26	公郷一ノ坪遺跡	奈良～中世	集落跡	77	カツラ山古墳	古墳	古墳
27	下轍西遺跡	奈良～中世	散布地	78	南押ヶ谷古墳群	古墳	古墳
28	那家遺跡	平安 中世	散布地	79	押ヶ谷古墳	古墳	古墳
29	宮通遺跡	平安 中世	散布地	80	竹洞古墳	古墳	古墳
30	石原遺跡	平安 中世	散布地	81	牛洞大谷古墳	古墳	古墳
31	大衣斐八幡神社遺跡	平安 中世	散布地	82	大隆寺跡	奈良～中世	社寺跡
32	社宮神社遺跡	平安 中世	散布地	83	領家東伴院跡	奈良～中世	社寺跡
33	牛洞駆原町遺跡	中世 近世	散布地	84	金剛寺遺跡	平安 中世	社寺跡
34	寺内遺跡	中世 近世	集落跡 社寺跡	85	三千仏遺跡	平安	中世
35	南谷古墳群	古墳	古墳	86	専大寺跡	中世	社寺跡
36	休名古墳群	古墳	古墳	87	東振寺境内遺跡	中世	社寺跡
37	南大門古墳	古墳	古墳	88	野村城跡	中世	城館跡
38	志名古墳群	古墳	古墳	89	伊羽城跡	中世	城館跡
39	西郡神社古墳	古墳	古墳	90	牛洞離屋跡	中世	城館跡
40	村ノ内古墳	古墳	古墳	91	穂田河内守邸跡	中世	城館跡
41	白山神社古墳	古墳	古墳	92	中之元城跡	中世	城館跡
42	善ヶ瀬古墳群	古墳	古墳	93	上ノ城跡	中世	城館跡
43	牛洞神社古墳	古墳	古墳	94	下ノ城跡	中世	城館跡
44	中ノ瀬古墳群	古墳	古墳	95	大御堂城跡	中世	城館跡
45	岩子古墳群	古墳	古墳	96	西尾氏の中之元離屋跡	近世	城館跡
46	祖浜古墳群	古墳	古墳	97	野村藩邸跡	近代	城館跡
47	大平山古墳群	古墳	古墳	98	西尾氏の五之里離屋跡	中世	その他の遺跡
48	野古墳群	古墳	古墳	99	鈴永氏の五之里離屋跡	中世	その他の遺跡
49	カイト古墳群	古墳	古墳	100	日根野氏の大衣斐離屋跡	近世	その他の遺跡
50	三ヶ原古墳群	古墳	古墳	101	加藤氏の公郷代官所跡	近世	その他の遺跡
51	物干山古墳群	古墳	古墳	102	野村藩邸跡	近代	その他の遺跡

18 第2章 遺跡の環境

川である段木川に取り込んで六里土場に集め、そこから船積みして大垣へ運んでいた。また、三水川は地下水位が高く水量が豊富であったため、昭和初期まで舟運が盛んであった。

注

- 1) 大野町教育委員会 2009『大野町遺跡詳細分布調査報告書 資料（考古）編』の一覧表に記載された遺跡数であり、その後の調査により範囲や遺跡名の変更が行われている。
- 2) 各遺跡の記述は、前掲書の他、以下の文献を参考とした。

大野町 1988『大野町史・通史編』

岐阜県教育委員会 2002『岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第1集（西濃地区・本巣郡）』

中井正幸 2001「前期古墳から中期古墳へ」『美濃・飛騨の古墳とその社会』東海の古代① 山脇洋亮

岐阜県 2003『岐阜県史 考古資料』

なお、表1の遺跡名、種別、時代と、図6の遺跡位置や範囲は、岐阜県教育委員会 2007『改訂版 岐阜県遺跡地図』を参考としたが、遺跡地図刊行後の改訂については岐阜県教育委員会社会教育文化課に確認した。

- 3) 「村野絵図」に描かれた12基と集落内の5基、調査で新たに発見された2基を含めた基数をさす。この内、絵図に描かれた2基が現在未確認であるため、野1～17号墳まで番号が付けられている。（大野町教育委員会 2009）

2 六里遺跡・稻荷遺跡と大野郡条里

大野郡条里については、大野町教育委員会による詳細な報告がある（大野町教育委員会 2011）。ここでは、発掘区周辺の推定条里地割について概観する¹⁾。

大野郡条里は、大野町から本巣市、瑞穂市にかけての平野部と、揖斐川町の山麓部に比定されている。遺跡の所在する「六里」は条里の遺称地名として古くから知られており、南に位置する「五之里」とともに、大野郡条里を復原する上での基準とされてきた。すなわち、大字五之里の東端と大字六里の西端が南北の同一線上にあることから、ここを里境として東西の割り付けが復原された。南北の条については諸説あったが、前掲書では『揖斐郡志』の「八条郷牛洞里」という記述や大野町北側谷部の小規模条里の検証により、谷汲盆地を1条とする復原案を採用している。

第8図は、上記のような経緯で復原された条里地割を発掘区に重ねた図である。六里遺跡と稻荷遺跡の発掘区には、「六里」と「五之里」を分ける里境や南北の坪境が含まれている。また、発掘区の大半は「一ノ坪」の範囲に含まれており、坪並が北西起点の平行式とされるため、12条5里6坪及び12条6里1坪から4坪について調査したことになる。今回の調査では、これらの地割の境が古来どのように表示されていたかを検証する事が命題の一つであり、調査の結果、里境及び坪境を示す可能性がある遺構群を検出することができた（第3章・4章参照）。

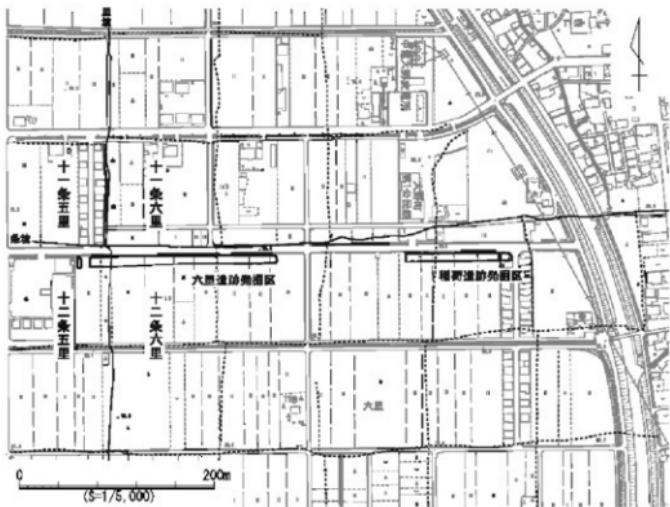
注

- 1) 記載にあたっては、大野町教育委員会 2011『大野の条里』大野町文化財調査報告書第6集を参考とした。



第7図 発掘区周辺の空中写真

(白枠が発掘区の位置、縮尺約1/5,000、昭和23年（1948）米軍撮影)



第8図 発掘区周辺の復原条里地割

(大野町教育委員会2011をトレースして作成)

第3章 六里遺跡の調査成果

第1節 基本層序

1 層序

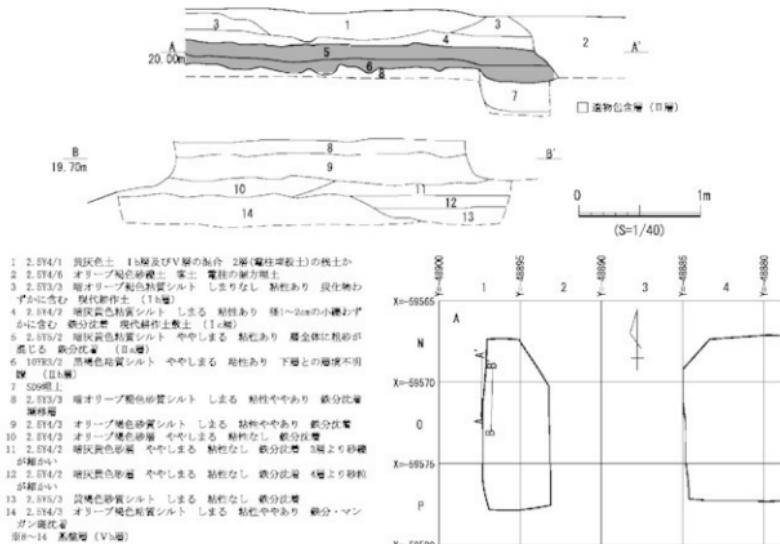
当遺跡は、掛斐川と根尾川に挟まれた沖積平地上に立地している。こうした地形の形成は河川の果たす役割が大きく、今回の調査においても自然流路の痕跡を各層位で確認している。現在は圃場整備され、ほぼ全面が平坦な耕作地となっているが、かつては河道や自然堤防などの起伏が残り、それを活かした集落や生産域が営まれていたと考えられる。

今回の調査では、最も深く掘削した第3調査面の発掘区壁面を基準に、I～VII層に基本層序を設定した。

(1) I層

発掘区内の表土を一括してI層とし、条里公園造成時の盛土をIa層、現在の水田耕作土をIb層、その下層の水田敷土をIc層として細分した。

Ia層は客土である。発掘区内にはほとんどかかっていない。Ib層は、発掘区全域に認められる。上面の標高は発掘区西端で約20.4m、東端で約19.9mであり、その比高差は0.5m程度である。発掘区周辺の水田は、比較的距離の近い東側の根尾川ではなく、西の掛斐川から取水しており、その水利の関係で東に向かって緩やかに地形が低くなっている(第2章第1節)。土色は暗灰黄色(2.5Y4/2)



第9図 発掘区西端の土層

や暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）で、砂や小礫、炭化物などの混じりが多い。I c層は、黒褐色（2.5Y3/2）で、しまりがある。

（2）II層

圃場整備以前の水田層と考えられる。土壤の分析によって、イネ科のプラント・オパールを多量に検出した（第5章第1節）。中世以前の遺物が大半であるが、耕作の影響から細片が目立つ。

発掘区南側の条里公園内に復原された「条里の坪境の水路跡」¹¹⁾やSD 6等の坪境構群は、この層の上面から掘り込まれている。圃場整備の際に土層の上面が削平されており、AN 9からAP10グリッド付近（第10図③）には、全く残存していないかった。色調は暗灰黄色（2.5Y4/2）や暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）で、鉄斑やマンガン斑が沈着する。「条里の坪境の水路跡」があるAN 6～AP6グリッド以西は、土層の色調はほぼ同じであるが、堆積が厚く粗砂の混入が目立つ。

発掘区西端の壁面では2層に分層できる（第9図、第10図①）ため、上層をII a層、下層をII b層とした。II b層は、II a層より若干黒っぽい色調で、基盤層との層界が不明瞭である。AN 6～AP 6グリッド以西が耕地となったのは、II a層の水田耕作が始まった大窓期以降と考えられるため、耕地として利用される以前の旧表土（古墳時代から古代の遺物包含層）がII b層である可能性がある。この場合、II層に含めるではなく、III層に対応する層序とすべきであるが、調査時には区別せず掘削しているため、便宜的にII層として取り扱う。

（3）III層

中世の水田層と考えられる。土壤の分析によって、イネ科のプラント・オパールを多量に検出した（第5章第1節）。室町時代以前の遺物が含まれる。

上面で第1調査面の水田遺構などを検出した。色調は黄灰色（2.5Y4/1）で、II層より白っぽい印象を受ける。土層中には粗砂が目立つ。圃場整備によりIV層上面まで削平されたAN 9からAP10（第10図③）グリッド付近以西にも広がる可能性は高い。条里公園整備に伴う調査では、「条里の坪境の水路跡」と重なる位置で中世前半の竪穴建物が検出されているため、その東側にあたる、AN 8からAP 9グリッドの南北構群まで広がっていた可能性があり、その場合、平安時代まで時代が遡る可能性がある。

BN 3からB011グリッド付近（第10図⑥）では、III層が2層に分かれているため、上層をIII a層、下層をIII b層とした。III b層は黒褐色（2.5Y3/1）で、やや粘質が強い。III b層の堆積範囲は、古墳時代以前の自然流路の影響で地形が低くなってしまっており、土壤の分析によって5,000個/g以上のプラント・オパールを確認した（第5章第1節）ことから、古墳時代から古代（条里プラン施行前）にかけての水田層が残存している可能性がある。

（4）IV層

AN 8からB0 5グリッド付近（第10図③～⑦）まで堆積が確認できる。この土層の上面で、第2調査面の古墳時代から古代にかけての遺構を検出した。

発掘区中央のSD44を境に色調が変化し、東側は若干色調が黒っぽくて粘質が強く（IV a層）、西側は黄褐色（2.5Y5/4）で、わずかに炭化物を含む（IV b層）。調査開始当初に、発掘区南壁の土層断面でIV a層がIV b層の上層であることを確認したが、壁面崩落等により記録を残すことができなかつた。また、発掘区北壁では、多数の溝が重なっていたため（B0 1・2グリッド）、堆積状況が確認で

きなかった。AN 8 グリッド以西では、後述する V b 層に入れ替わるように土層が途切れており（第 10 図③）、古墳時代の集落が立地する微高地を形成する堆積の一つと考えられる。

IV 層には、縄文時代晚期の遺物が含まれており、特に IV b 層からの出土が多く、第 2 調査面の遺構掘削や排水溝掘削などに伴って出土した。

（5）V 層

発掘区全域に対応する堆積がみられる。上面の標高が約 19.8 m から 19.3 m の高さでなだらかに東へ低くなる。IV 層が堆積しない範囲においては、第 2 調査面の古墳時代から古代の遺構を、V 層上面で検出した。AN 9 グリッド以東と AN 8 グリッド以西で様相が異なるため、前者を V a 層、後者を V b 層として、以下に記述する。

V a 層 堆積上面の色調は、場所にいかわらず黄褐色（2.5Y5/4）であるが、東へ向かうほど粘性が強くなり、前述の自然流路以東では粘土となる（第 10 図⑨～⑪）。微高地部分では、堆積が西に向かつて厚みを増し、土層の下半がオリーブ褐色（2.5Y4/3）の砂質になる（第 10 図③～⑦）。AN11 グリッド付近から以西の下層には、第 3 調査面で検出した自然流路（NR 1）の堆積がみられ、V a 層が AN 9 グリッドで V b 層に入れ替わる（第 10 図③）。縄文時代晚期の遺物を含むが、VI a 層の堆積範囲に限られる（第 10 図④～⑦）。

V b 層 一見安定した黄褐色の堆積であるが、第 9 図で示したように、流水による砂層やシルトの互層が観察される。微高地の形成過程で最初に堆積した土層と考えられる（第 10 図①～③）。なお、この上層から遺物は出土しなかった。

（6）VI 層

AN11 から A020 グリッド付近の間の NR 1 と NR 3 に挟まれた範囲に堆積する。色調は、還元的な灰色（7.5Y4/1）で、砂質が強い。VI 層と上層との層界は明瞭である。遺物を含む VI a 層と第 3 調査面の遺構面となる VI b 層に分層した。

VI a 層 多量の炭化物が混入し、縄文時代晚期の遺物を含む。VI b 層が土壤化した土層と考えられ、多量に炭化物と遺物を含む以外は、VI b 層に似る。

VI b 層 VI a 層を掘り下げると、土中の遺物や炭化物が少くなり土器埋設遺構等を検出したため、この面から下層を VI b 層とした。VI a 層との層界は不明瞭である。なお、第 2 調査面の SD35 掘方壁面では、下層の VII 層までの厚さは約 0.4 m である。

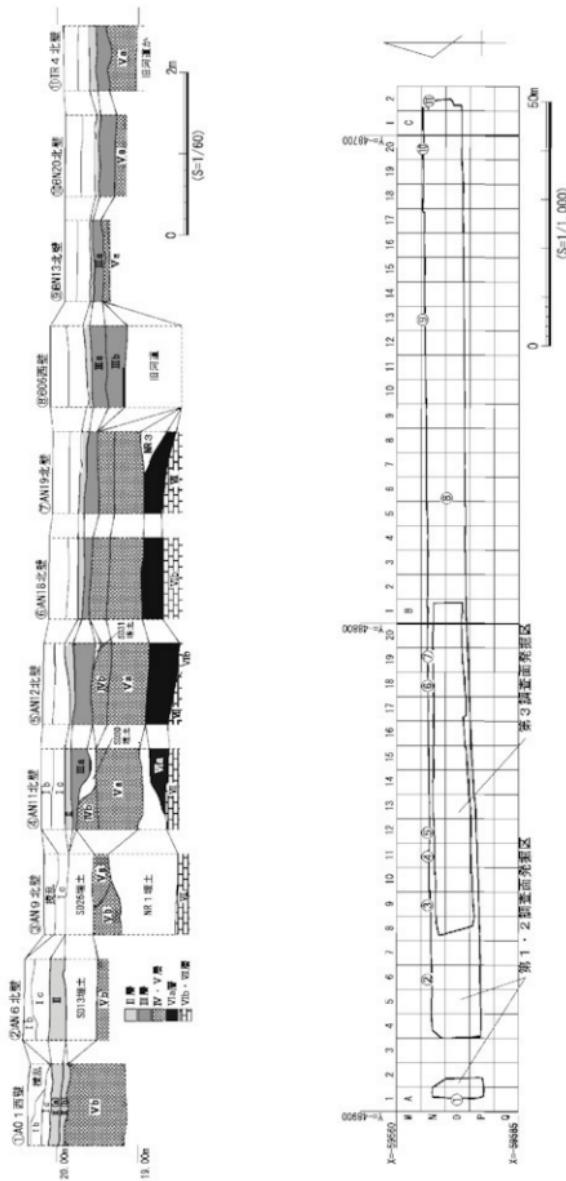
（7）VII 層

VII 層堆積以前の河床礫層である。第 2 調査面の SD35 や第 3 調査面の NR1・NR3 底面で確認した他、VI b 層上面でも部分的に露出が見られた（第 10 図③～⑦）。稲荷遺跡発掘区東部にも同様な河床礫層がみられるが、六里遺跡と同じ時代・時期の堆積物であるかは不明である。（第 4 章第 1 節）。

2 基本層序と調査面

（1）遺構検出面の定義

今回の調査における基本層序は、前述のとおり第 3 調査面の発掘区壁面を基準としている。しかし、場所によって存在しない土層があり、本来属していた土層を確定できない遺構が存在する。そのため、層序どおり土層が存在し、その上面で検出した遺構を「○○層上面」、それ以外は、その遺構を検出



第10圖 六里遺跡土層柱狀圖

した土層の上層を掘削後に検出したことを示す「○○層基底面」に属する遺構として区別した。

(2) 基本層序と調査面の関係(第11図)

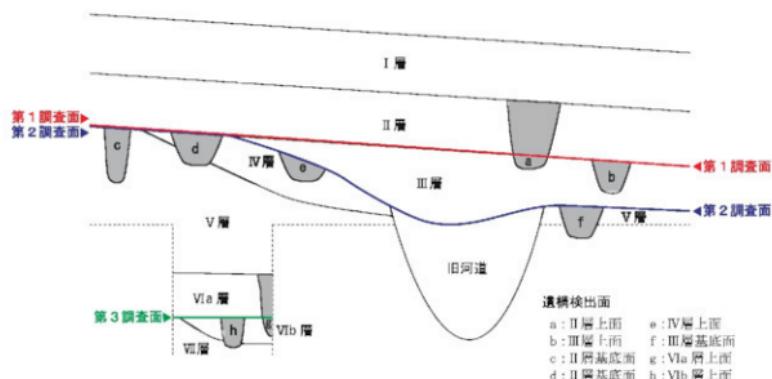
第1調査面は、II層除去後に検出した面である(第11図b)。主に中世の遺構を検出した。ただし、SD 6等(坪境溝群)のような明らかにII層上面に伴う遺構(近世~近代)も、この面で調査した(第11図a)。また、III層が存在しないSD 1以西のAN 1からAO10グリッド(第10図①~③)については、明確に中世以降に時期が降ることがわかる遺構がなく、SD 1のように第1調査面に所属する可能性があるもののみとした(第11図c・d)。

第2調査面は、III層除去後に検出した面である(第11図e)。古墳時代から古代にかけての遺構を検出した。AN 1からAO10グリッドのII層除去後に検出した遺構の大半はこの時期に所属するため、第2調査面で調査した(第11図c・d)。また、III層の下層にIV層がなく、V層が基盤となるBN 5からCO 2グリッド(第10図⑧~⑪)の遺構も同時に調査した(第11図f)。

第3調査面は、IV層及びV層を除去後、VIa層を掘削して検出した面である(第10図③~⑦、第11図h)。縄文時代晚期の遺構を検出した。なお、自然流路であるNR 1・3は、VIa層上面に属するが、第3調査面で調査を行った(第11図g)。

注

- 1) 大野町教育委員会 2013『大野町史跡条里跡(六里遺跡)』の発掘調査 平成25年度岐阜県発掘調査報告会資料



第11図 基本層序及び調査面模式図

第2節 遺構・遺物の概要

1 遺構概要

(1) 概要

今回の調査では、縄文時代晚期から近世にかけての遺構・遺物を検出した。第1調査面では中世の水田跡、第2調査面では古墳時代から古代にかけての集落跡と水田域との関連が考えられる溝状遺構、第3調査面では縄文時代晚期の墓域等を検出している。遺構の時期決定は、出土遺物や遺構の重複関係、埋土の類似性などから判断した。また、出土遺物が複数の時代にまたがる場合は、原則としてより新しい時期を選択したが、出土状況や出土量を判断材料としたものもある。本報告書では、上記の遺構のうち、遺跡の性格を反映する水田跡や建物跡、土器埋設遺構は、すべての遺構について詳述した。その他の遺構については、遺跡の性格を検討する上で重要なものや一括性の高い遺物が出土したものなど、特徴的なものについて詳述し、それ以外は一覧表に代えた。

(2) 遺構の分類

今回検出した遺構は以下の要件に基づき分類し、原則として各調査面における発掘区の西端から順に番号を付した。

耕作地（S N） 畦畔で囲まれた「水田区画」や畝溝状遺構群により「畑跡」と認識できる範囲を本類とした。なお、一覧表等では同じ略号を用いるが、本文中では「水田区画」「畝溝状遺構群」として区別する。また畝溝状遺構群を構成する溝状遺構は、「(付属する SN の番号) - D ●」として別に番号を付した。

畦畔（S M） 水田区画を構成する畦畔を本類とした。

溝状遺構（S D） 一定の幅で細長く掘り込まれた遺構を本類とした。

堅穴建物（S I） 堅穴状に掘りくぼめた掘方をもち、上屋の建物構造が想定できる諸条件を備える遺構を本類とした。明確な柱穴が存在しない遺構も一部含めたが、堅穴建物とした根拠について本文中に記載した。堅穴内で検出した壁際溝は「壁際溝」、カマドは「カマド」と記載し、複数存在する場合は番号を付した。また、床面で検出した主柱穴や土坑は、「(付属する SI の番号) - P ●」と表記した。

据立柱建物（S B） 柱穴が3基以上等間隔に並ぶ遺構の内、直角の配置が認められるものを本類とした。

柱穴列（S A） 柱穴が3基以上等間隔に並ぶ遺構の内、直角の配置が認められないものを本類とした。

焼土遺構（S L） 被熱が認められる遺構や埋土に多量の焼土や炭化物が含まれる遺構について本類とした。

土器埋設遺構（S J） 土器を埋設した遺構を本類とした。

土坑（S K） 上記以外の掘り込みについて、すべて本類とした。

自然流路（N R） 人為的に掘削されたものではない水路を本類とした。なお、第2調査面の B0 6 グリッド周辺の旧河道と思われる自然流路（第1節参照）は断ち割り調査の結果、遺構・遺物とも確認できなかつたため、基本層序V層と同様に扱い、本類に含めていない。

(3) 遺構の時代・時期

表2 六里遺跡種別別遺構検出数

調査面	SN	SM	S1	SB	SA	SD	SL	SJ	SK	NR	未分類・複数	合計
第1調査面	25	19				8			6		5	63
第2調査面	2		6	1	4	66	1		95		5	180
第3調査面						1	3	11	17	3		35
合計	27	19	6	1	4	75	4	11	118	3	10	278

今回の調査における時期区分の表記は、既存の編年研究等¹⁰を参考に下記のとおりとした。なお、V a期は当遺跡・稻荷遺跡共に遺構・遺物が全く確認できなかつたが、変遷を考える上で重要と考えるために設定した。

I a期 繩文時代後期

I b期 繩文時代晚期（縄文土器編年：稻荷山式）

I c期 繩文時代晚期（縄文土器編年：西之山式）

I d期 繩文時代晚期（縄文土器編年：五貫森式）

I e期 繩文時代晚期（縄文土器編年：馬見塚式以降）

II期 弥生時代

III期 古墳時代前・中期（土師器編年：廻間II式～宇田II式）

IV a期 古墳時代後期（須恵器編年：MT15～TK43型式）

IV b期 古墳時代後期（須恵器編年：美濃須衛窯II期後半・蘇原6号窯併行期）

IV c期 古墳時代後期（須恵器編年：美濃須衛窯III期前半・須衛65号窯併行期）

IV d期 古墳時代後期（須恵器編年：美濃須衛窯III期後半・那加5号窯併行期）

V a期 奈良時代前半（須恵器編年：美濃須衛窯IV-1期）

V b期 奈良時代後半（須恵器編年：美濃須衛窯IV-2・3～V-1期前半）

VI a期 平安時代前葉（須恵器・灰釉陶器編年：美濃須衛V-1期後半・K-90号窯式期）

VI b期 平安時代中葉（灰釉陶器編年：0-53号窯式期）

VI c期 平安時代後葉（灰釉陶器編年：H-72号窯式期～百代寺窯式期）

VII期 鎌倉～室町時代（山茶碗編年：第3型式～11型式・古瀬戸系施釉陶器編年：前～後期）

VIII期 戦国時代・安土桃山時代（大窯編年：1～4期）

IX期 江戸時代以降

（4）遺構一覧表

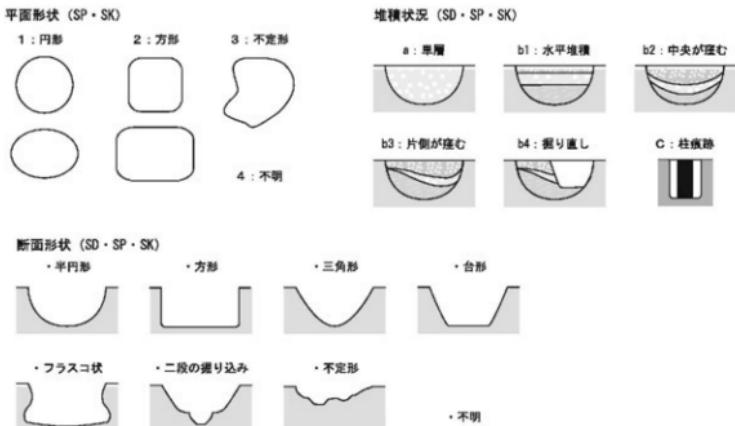
各遺構の位置や規模などは、遺構種別ごとに作成した一覧表で示した。種別毎で一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

検出面 第3章第1節の記載に基づき、遺構を検出した面について、略号で示した（「II層基底面」→「II基」、「III層上面」→「III上」等）。

平面形・堆積状況・断面形状 第12図の分類に基づき記載した。

規模 ()で示した数値は残存値を規模を示す。また、溝状遺構等の発掘区外へ続く遺構については、発掘区内で検出した規模をそのまま記載したものがあり、その都度表の欄外に示した。

長軸方位 長軸方向の方位を計測した。なお、計測値は、北から東西へ傾く角度を90°以内で示し、N - ●° - E (W)と表記した。



第12図 遺構属性模式図

切り合い 重複した遺構について、その遺構より新しい遺構の番号を「新」、古い遺構の番号を「旧」に記載した。

出土遺物 遺構内からの出土遺物の種別を、下記略号で示した。また、略号の後ろに破片数を併せて記載した。

J—縄文土器、H—土師器、P—須恵器、K—灰釉陶器、Y—山茶碗、T—山茶碗以外の中近世陶磁器、D—土製品、S—石器類、W—木製品（杭・横木）、I—金属製品、鍛—鍛冶関連遺物、C—炭化材・炭化物

2 遺物概要

(1) 概要

今回の調査では、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中近世陶磁器などの土器類と、土製品、石器・石製品、木製品（杭・横木含む）、金属製品等が出土した。その出土数は表3のとおりである。本報告書では、これらのうち、遺構の性格や時期などを検討する上で必要な遺物や、遺跡の性格を端的に示す遺物、分類別の代表的な遺物を中心に抽出して報告した。

(2) 出土遺物の分類（第13～15図）

縄文土器 今回出土した土器の大半は、東海地方の晩期の稻荷山式から馬見塚式に併行する時期の資料と考えられ、わずかに後期の可能性がある土器を含む。IV～VIa層の他、第2調査面の遺構埋土から出土した。第3調査面の調査で出土した資料は、遺物包含層を含めて原位置を留めているものが多いと考えられる。出土した土器の器種は、深鉢、浅鉢、蓋、注口土器等がある。以下にその分類について記載し、詳細な検討は第6章で行った。

第1群 縄文時代後期の土器

表3 六里遺跡出土土器点数

調査面	種別	縄文土器	弥生土器 土師器	須恵器	灰陶陶器	山茶碗	中近世 陶磁器	合計
第1調査面	重機剥削・排水溝等	54	476	108	79	170	154	1,041
	武船トレンチ	32	41	10	13	9	15	120
	挖乱	2	29	6	2	22	9	70
	遺物包含層（II層）	68	1,380	256	241	364	230	2,539
	SM	3	207	24	8	38	4	284
	SN	2	1,226	140	83	192	46	1,689
	SD	2	11	10	0	12	45	80
	SK	0	0	0	2	0	0	2
第2調査面	断剤・排水溝掘削等	62	88	36	13	10	5	214
	混乱	0	8	1	4	1	1	15
	遺物包含層（III層）	75	3,049	736	245	443	56	4,604
	SI	187	445	38	9	0	0	679
	SB	12	18	0	0	0	0	30
	SA	0	3	0	0	0	0	3
	SD	404	2,370	605	62	9	4	3,454
第3調査面	SN	1	13	6	1	0	0	21
	SL	0	8	1	0	0	0	9
	SK	18	62	12	0	0	0	92
	その他の遺構	0	10	0	0	0	0	10
	壁面成形・断剤等（IV～V層）	846	0	0	0	0	0	846
	遺物包含層（VIa層）	7,143	0	0	0	0	0	7,143
	SJ	5,345	0	0	0	0	0	5,345
合計	SD	303	0	0	0	0	0	303
	SL	117	0	0	0	0	0	117
	SK	583	0	0	0	0	0	583
	NR	980	0	0	0	0	0	980
	合計	16,239	9,444	1,989	762	1,270	569	30,273

※数値は接合前の破片数

時期判別可能なものとしては、凹線文系の深鉢と考えられる314と注口土器の180がある。この他細片などにも後期の遺物が含まれている可能性はあるが、判別できなかつた。

第II群 縄文時代晩期の土器

深鉢（A類）

底部から口縁部が開く器形をとり、口径より器高が大きい土器を「深鉢」として本類に含めた。外面に煤、内面に炭化物が付着しているものが多く、主に煮炊きに使用されたと考えられる。

1類 屈曲深鉢

底部から体部にかけて緩やかに広がり、頸部が括れて口縁部が開く器形をもつ深鉢で、頸部と体部の境目に明瞭な段が認められないものを本類とした。口縁端部を横ナデ等で尖り気味に調整し、口縁端部に指頭や棒状工具による連続押圧、ヘラ状工具による細かい連続刻みを施すものも認められる。稲荷山式に比定される土器群と考えられる。外面調整により、以下のとおり細分した。

a類 口縁部外面から体部まで横位又は斜位の粗い条痕調整を施すもの。

b類 口縁部外面に横位のナデ又はケズリ調整を施し、口縁部と体部の境が明瞭なもの。

2類 頸部屈曲深鉢

頸部と体部の調整の境が明瞭で、体部にはケズリ調整を施す。頸部が屈曲し、口縁部は直立気味になるものや外傾・外反するもの、内傾するものがある。口縁部外面には二枚貝による横位の条痕調整を施すものが多いが、ナデ調整も認められる。稲荷山式から馬見塚式まで、幅広い時期の内容を含むと考えられる。調整や文様により、以下のとおり細分した。

- a類 口縁部が直立気味で、体部に縦位のケズリ調整を施す。口縁端部外面には横位の条痕のほか、ナデ調整のものも認められる。
- b類 a類に突帯を施すもの。
- c類 口縁端部を面取りして連続刻みを施し、口縁部外面に横位の条痕調整を施すもの。刻みは押圧やヘラ刻み、二枚貝による刻みや押引が認められる。
- d類 c類に突帯を施すもの。
- e類 c類の口縁部内面に1条の沈線を施すもの。
- f類 e類の内、口縁端部に連続刻みを施さないもの。
- g類 f類の内、波状口縁をもつもの。
- h類 c類に類似するが、口縁端部の面取りが弱く、刻みを内面側に施すもの。
- i類 口縁端部を面取りせず、突帯を施すもの。
- j類 幅広の二枚貝押圧をもつ突帯を施すもの。
- k類 2類の内、上記に含まれない一群を一括した。

3類 砲弾型深鉢

底部から体部にかけて開き、口縁部が内湾気味で頸部の屈曲がない器形をもつ。外面調整等によつて以下のとおり細分した。b類は、器形が異なる2類と共通する外面調整が認められ、関連が示唆される。またd類は、程王式以降の条痕文系土器群の特徴と考えられる。

- a類 外面に斜位又は縦位の細かい条痕を施すもの。
- b類 外面の体部上半に横位の条痕、下半にケズリ調整を施すもの。
- c類 外面をナデやケズリによって調整するもの。
- d類 竹管状工具による粗い条痕を施すもの。
- e類 突帯を施すもの。

4類 変容壺

口縁端部に素文突帯、体部に二枚貝を押圧した突帯を付し、大型の変容壺と判断されるもの。今回の調査では口縁部と体部の一部のみ出土した。馬見塚式に特徴的な器形である。

5類 その他の突帯文土器

- 2～4類に含まれない突帯文を施す土器を一括した。
- a類 面取りした口縁端部に接して、断面が三角形の高い突帯を施すもの。
- b類 砂粒を多量に含む黒色の胎土をもつ器壁が薄手の土器で、細い刻目突帯文を付すもの。

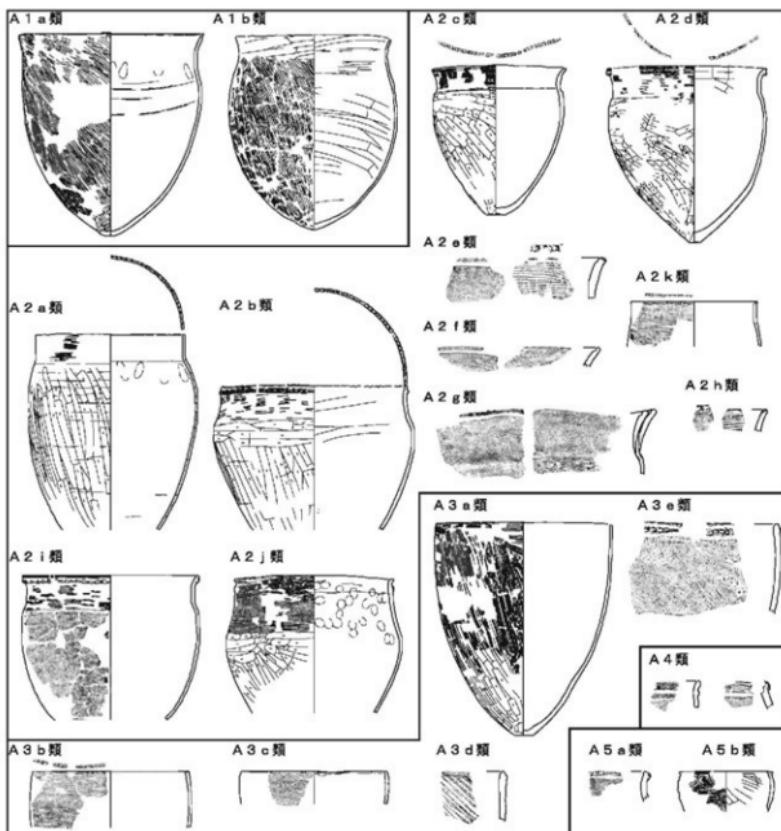
6類 その他の深鉢

1～5類に含まれないものや体部の破片資料を一括した。

7類 深鉢底部

深鉢底部の破片資料を一括し、器形によって第15図のとおり細分した。

- a類 尖底若しくは丸底となるもの。
- b類 尖底気味の体部に、狭小な底部を設けるもの。
- c類 b類の内、底面を意図的に大きく凹ませるもの
- d類 体部から底部が突出し、平底の形態をとるもの



第13図 第II群繩文土器の分類① (A類、完形・反転資料: 1/10、断面資料: 1/6)

●類 体部から底部の境が明瞭な平底の形態をとるもの

壺 (B類)

壺形の器形をもつ土器を一括した。調整等により、以下の4類に分類した。2類は「馬見塚F地點型壺」(豆谷 1994)と呼称される、五貫森式古段階に比定される土器である。

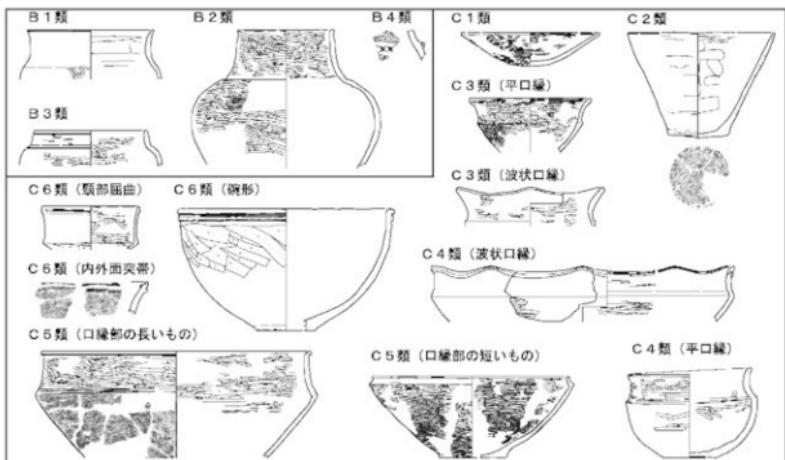
1類 口縁部が外反して体部上半が張る器形をとり、内外面にミガキ調整を施すもの。

2類 口縁部は内傾し、頸部と体部の境に浅い沈線を施すもの。

3類 口縁部と体部の境が有段となるもの。

4類 突帯を施すものを一括した。

浅鉢 (C類)



第14図 第II群縄文土器の分類② (S=1/6)

底部から口縁部が開く器形をとり、器高より口径が大きい土器を「浅鉢」として本類に含めた。そのため、煮炊きに使用された小型土器と供膳用の精製土器の区別はしていない。器形等により以下のとおり細分したが、各類に波状口縁になるものや小突起を付すものを含むなど多様性が認められる。5類は「逆「く」字形口頸部浅鉢」(泉 1990)であり、頸部の明瞭な屈曲と口縁部の内傾が特徴である。近畿の口酒井期に特徴的な器種であり、東海地方の編年では五貫森古段階に併行する時期の器形とされる（宮田 2007）。

- 1類 体部に丸みがある皿形・碗形の器形をもつもの。
- 2類 体部から口縁部にかけて直線的に開く鉢形の器形をもつもの。
- 3類 体部と口縁部の境が屈曲し、口縁部が外反及び外傾するもの。
- 4類 体部と口縁部の境が屈曲し、口縁部が外反及び内傾するもの。
- 5類 逆「く」字形口頸部浅鉢と考えられるもの。
- 6類 突帯を施すものを一括した。

異系統土器 (D類)

異系統土器と考えられる土器を一括した。断片的な資料が多いが、ミガキなどによって丁寧に調整され、赤彩を施すものが多い。器種は浅鉢や壺、注口土器などがある。

ミニチュア土器等 (E類)

ミニチュア土器や特殊な器形を有する土器を一括した。

弥生土器 壺類や壺などが出土したが、文様や器形が判別できる資料はごく僅かである。概ね、弥生時代中期後半の高藏式期から後期に属するものが認められる。

土師器 古墳時代から中世にかけて製作された素焼きの製品をすべて土師器とした。器種は、古墳時代の壺や壺類、古代の壺や瓶・鍋、中世の土師器皿や鍋があるが、細片については弥生土器が含まれてい

る可能性もある。既存の研究をもとに器種の判別を行ったが、古墳時代後期から古代にかけて製作された壺は、以下のとおりA・Bに分類した。なお、当遺跡ではA類のみ出土し、B類は稻荷遺跡で多く認められた。

壺A

口縁端部が面取りされ、短い摘み上げが認められる。頸部を2~3段に横ナデし、体部の内外面と口縁部内面にハケ調整を施す。胎土が赤味を帯びる特徴がある。内堀氏・井川氏の分類におけるA類に相当する（内堀・井川 1996）。長胴の大型品と体部の丸みが強い小型品があるが、器形が判別できる資料が少ないため分類しなかった。

壺B

口縁が「く」の字状に強く外反し、口縁部内面には横位、体部外面には縦位の粗いハケ目が残る。胎土には砂粒が目立ち、器壁が薄い。底面は平底となる。城ヶ谷氏によって「濃尾型」壺と呼称された一群（城ヶ谷 1996）で、内堀氏・井川氏のB類にあたる。

須恵器 当遺跡では、IV期以前の須恵器が主に出土した。V b期以降が大半を占める稻荷遺跡とは大きく異なる。器種は壺蓋・坏身などの坏類が多いが、壺類・壺などの貯蔵具も少なからず出土しており、ハソウや提瓶・横瓶が遺構に伴って出土した点にも特徴がある。器種分類や編年観は既存の研究を参考とした²が、比較的出土数の多い坏類については、下記のとおり分類を行った。

坏蓋A類

頂部に丸みがあり、体部から口縁部にかけて緩やかに屈折する。口縁部と体部の境が稜になるものや沈線・凹線状になるもの、境がないものなどがあり、産地の違いや時期差を示す。なお、同様の形態で環状の摘みを付すものは、有蓋坏蓋として区別した。

坏蓋B類

宝珠形摘みをもち、口縁部内面にかえりが認められるもの。

坏蓋C類

扁平な擬宝珠形摘みをもち、口縁端部を折り返してかえりとするもの。

坏身A類

受け部が斜上方又は横方向に突出し、そこから口縁部が立ち上がるもの。底部は丸みをもつものが多いが、中には平底風に底部を作出した、特徴的な器形のものも認められる。

坏身B1類

無台坏身のうち、口縁部と底部の境に丸みがあり、口径に比して器高が高いもの。坏蓋B類とセットになるとされる器形である。

坏身B2類

無台坏身のうち、平坦な底部から口縁部が直線的に開くもの。

坏身C類

高台を付け、体部と口縁部との境が屈曲するもの。

灰釉陶器 碗・皿類が出土した。稻荷遺跡で普遍的にみられるK-90号窯式期のものはほとんど認められず、大半は0-53号窯式期以降に属すると考えられる。

山茶碗 III層より上層で出土し、尾張型第4・5型式のものが目立つ。第7型式以降には東濃型もみら

れるが数は少ない。器種は碗又は小皿（小碗）があるが、尾張型・東濃型の片口鉢も認められる。

中近世陶磁器 常滑、古瀬戸系施釉陶器、大窯、瀬戸戸美濃、貿易陶磁器がある。いずれも、Ⅲ層より上層で出土した。器種分類や編年観は既存の研究を参考とした³⁾。概ね15世紀以前のもので、大窯期以降の製品は断片的な資料が多い。

土製品 純文時代に属するものは、管瓦2点、円錐形土製品1点、土器片を加工した加工円盤があり、いずれもVIa層から出土した。土製の玉は2点出土しており、37はII層、196は第2調査面のSK34から出土した。196は穿孔があるため装飾品の可能性がある。この他III層から瓦1点(265)、土鏡1点(266)が出土した。265は平瓦の一部で詳細は不明であるが、六里遺跡の西に位置する大隆寺跡(第2章第2節参照)との関連も考えられる。

石器・石製品　出土した石器・石製品の器種と石材を表4

に示した。I期に属するものが多いと考えられるが、第2調査面の遺構等から出土したものも少なくない。

剥片石器は、チャートや下呂石よりサヌカイトが多い。疊石器類の素材は、地形的な環境から容易に採取できたと推測される。磨石や石皿・台石類がほとんどで、打製石斧は少ない。この他、石棒・石刀類や小型の磨製石斧など、縄文時代晩期に属する可能性が高い石器も出土した。

今回の調査で最も多く出土した器種である磨石・叩石類は、複数の使用痕が残るものが多いため、下記のとおり分類（第15図）し、それぞれの個体に残る使用痕を遺物観察表に列記した。

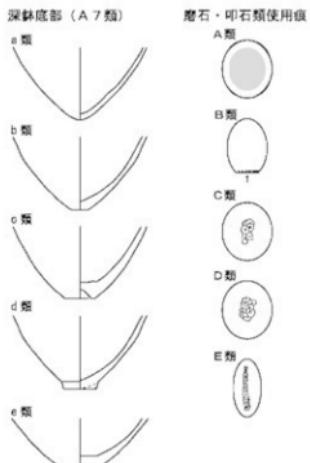
A類 檔面

B類 短軸側縁の滑れ状の敲打痕

C類 痕跡が條の横状に重なる敲打痕

D類 捕鉤状の破打痕

巨類 長軸側縁に連続する敲打痕



第15図 繩文土器深鉢底部分類及び磨石・叩石類使用痕分類模式図

表4 六里遺跡出土石器及び石製品一覽表

石器種別	円石	四角石	下凹石	チャート	圓石	曲面石	板状石	砂岩	細粒岩	安山岩	花崗岩	玄武岩	凝灰岩	流紋岩	总计	
砸石								2							2	
小形石製品	1														1	
石核	3	2													6	
スクレーパー	1	1	1												3	
石核	1														1	
砾	6		1	2											9	
剥片	13	6	2	2											25	
石刀・石棒頭				4	1										5	
骨製石斧							2								2	
打製石斧					2			1							3	
打製石斧成品か									1						1	
石皿・台石					1			2				1			4	
研石・叩石類								30			3	1	4	1	40	
打丸・鍼か					1										1	
加工のある石					1										1	
総計	1	1	241	91	41	131	31	21	341	11	11	31	21	41	11	101

木製品 IVa期のSD44から棒状木製品、III層から火付木が出土した。この他、SD44とIX期のSD6で、遺構の構造材として加工のある杭を多数確認した。

金属製品 銅製の銭貨3点、鉄製品5点、鉛玉1点がある。銭貨1点が第1調査面の水田区画内(SN21)から出土した以外は、いずれもII層から出土したため、詳細な時期は不明である。

その他 鍛冶関連遺物6点、炭化材・炭化物などがある。これらのうち、鍛冶滓3点、炭化材14点について、自然科学分析を実施した(第5章参照)。

(2) 遺物観察表

本報告書に掲載した遺物の観察表は、種別ごとに作成し、遺物番号順に記載した。種別により一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

出土位置 グリッド及び遺構番号⁴⁾を記載した。複数の地区(グリッド)、遺構から出土した遺物が接合した場合は、すべての出土位置を表記した。

出土層位 表土と遺物包含層から出土した場合は、基本層序名を表記した。排水溝掘削等による出土遺物など、所属層位が不明確なものは、複数の層序を併記した。また、遺構出土の場合は、埋土を深さ5cmごとに人工分層し、その取上層位を上層から順に「a・b・c・・・」と表記し、土層観察畦から出土したものは、その土層番号(1・2・3・・・)を表記した。なお、複数の土層から出土した遺物が接合した場合は、すべての層位を表記した。

大きさ ()で示した大きさは、土器の場合は復元長、その他製品については残存値を示す。

口縁部残存率 X/12のXにあたる数値を記載した。⁵⁾

底部個体数 2分の1以上残存している破片の個体数を「1」とした。

器面調整 磨滅等により不明な場合は、「不明」と記載した。

胎土・色調 胎土中の含有物は肉眼観察で判断した。色調は「新版標準土色模」(小山・竹原1995)に基づき肉眼観察で判断し、見本に近い色調のJIS notationを記載した。

(3) 遺物実測図について

本報告書に掲載した遺物実測図における使用痕等の表現は、右記凡例のとおりとした。

土器	石器・石製品
墨書き	砥面・磨面
墨底(転用窯)	
漆状付着物	木製品
朱墨・赤彩	炭化部分
煤(灯明皿)	欠損部分
タール(灯明皿)	樹皮

注

1) 土器類の器種分類や用語、編年観について参考とした

文献は第2分巻末に一括して記載した。

2)・3) 須恵器については渡邊博人氏、中世陶器について

は藤澤良祐氏の指導を得たが、最終的な判断は筆者が行った。

4) 遺構番号に付記した丸数字は、遺構を分割して掘削した際の出土地区を指し、4分割の場合は、北西から時計回りに①～④区とした。2分割や3分割の場合は、北(北西)に近い位置を①としている。

5) 口縁部残存率の計測は以下の文献を参考とし、12分の1木溝の破片は12分の1に切り上げ、12分の1以上の破片は小数点以下第1位まで計測した。

第3節 第1調査面の遺構・遺物

第1調査面の遺構・遺物としては、水田跡や溝状遺構などがある。

1 水田区画及び畦畔 (SN 1～19、SM 1～25、第16～21図)

検出状況 水田跡は、AN10 グリッド以東で検出した。今回検出した水田跡は、Ⅲ層上面で確認した水田区画と、区画間の空白部分を畦畔として検出した遺構である。水田区画内の堆積は、後世の削平によって、発掘区壁面の土層断面でも確認できないほど薄い。少しでも掘り下げ過ぎると判別不能となり、一部では区画として検出することができなかった。また、AN 9 グリッド以西は地形が高くなっているため、圃場整備の際に削平されたと考えられる。なお、SM 1 の西には、第2調査面において里境溝と推定した溝群 (SD21～25、第4節参照) があり、その出土遺物から、当該地の条里地割が施行された時期までさかのぼることが推定されるため、その位置まで水田域が広がっていた可能性がある。

検出した水田区画では、西端の標高が最も高く、最も低い東端との標高差は約 0.2 m である。大きな差はないように見えるが、これはⅡ層に伴う水田や圃場整備によって上面が削平されているためであり、西から東へ標高差を利用して取水・排水が行われていたと考えられる。

AN10 から AO11 グリッドで検出した SD 1 は、Ⅲ層堆積範囲の西限である SM 1 と同じ方向に設置された溝であり、SM 1 に伴う可能性がある。なお、SM 1 は第2調査面で調査した SD30 が同じ位置・方向で重なっており、前代から引き継がれた溝の地割を活かし、水田遺構の畦畔としたと考えられる。SM 1 を除いた南北方向の畦畔の長軸は、北から東へ 0～8° 傾き、東西方向の畦畔は東から南へ 1～4° 傾いてほぼ直交している (第16図)。

今回の調査では四方を畦畔で囲まれた水田区画を検出できなかっただため、一枚当たりの大きさは確認できなかった。東西の幅は 4～20 m まであり一定ではないが、SN 9・10 以西では幅 13.5～15 m で整然と区画されている。これは下層に古墳時代の集落跡が存在する範囲と一致し、前代から続く水田域と新規に開発された水田域をそれぞれ表している可能性がある。

発掘区に隣接する条里公園には「条里の坪塙の水路跡」(大野町教育委員会 2013) が復元整備されているが、この溝は現代の遺物を含むため、近年まで利用されていたことが判明している。第7図に示した空中写真では、この溝から SD 6 (次項参照) に対応する溝までの間が、ほぼ等間隔に三等分されているように見える。この間の距離は約 120 m であり、第7図の畦畔の位置は SM 6 と SM10 にほぼ一致する。SD 6 とこれに対応する溝の東側には 1 条の畦畔が確認でき、SM18 が位置的に近いと思われる。写真では他に畦畔が見られないため、SM 6・10・18 が区画として踏襲され、近年まで受け継がれたと考えられる。さらに、SM18 や SM 6、SD 6 は圃場整備後の畦畔とも近い位置にあり、現代まで踏襲された可能性もある。

遺物の出土状況 本遺構から出土した遺物は、検出した水田区画内から出土した遺物と、調査後に畦畔の基底部を除去した際に出土した遺物である。水田区画からの出土遺物は SN 9・10 グリッド以西に多く、遺構の下層に集落跡が存在する影響とみられ、畦畔の出土遺物も同様な傾向がある。耕作の影響からかほとんどが細片であり、まとまった遺物の出土状況は見られなかった。

出土遺物 繩文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶磁器、錢貨が出土した。特に土師器の細片が多い。このうち、図示可能なものを掲載した。

1～17が水田区画内、18・19が畦畔除去時に出土した遺物である。1・5は尾張型山茶碗の碗であり、底部内面が摩耗し、高台には僅かに粗穢痕が残る。5は1より高台が扁平で、底部と体部内面の境に段が認められる。2・19は東濃型山茶碗の碗である。2は底部内面に静止ナデ、底部外面に板ナデの痕跡が残る。18は高台が低く、底部外面のやや内側に付される。3は常滑の壺の口縁部である。大きく外反した口縁端部がT字状に拡張される形態を持つ。4は須恵器の壺身A類である。受部と身の境は明瞭で、口縁部は外反しながら上方に立ち上がる。6は古瀬戸系施釉陶器の擂鉢である。細片であるため攝目は確認できない。口縁端部が緩やかに内湾して立ち上がる。7・12は大窯の天目茶碗である。内外外面に鉄軸・体部外面下半に錦軸を施す。12の方が口縁部の屈曲が強い。8は灰釉陶器の皿又は小碗と思われる。高台は低く丸みがあり、体部下端に接合される。高台内に「〇」を描いたような墨書が認められる。9は須恵器の壺であるが砥石に転用されており、内面に明瞭な磁面が認められる。叩き目を残す外面にも摩耗がみられ、置き砥石として使用された可能性がある。10は貿易陶磁器の染付碗である。内外外面に呉須絵が描かれているが、詳細は不明である。11・17・19は土師器皿である。11は横方向の指ナデが明瞭で口縁部が外反気味になる。17は土師器皿で内面全体に煤が付着しており、灯明皿として使用されたと思われる。19は口縁部内外面に横ナデを施し、体部に段が形成されている。13は須恵器の壺蓋C類の擬宝珠摘みである。14は古瀬戸系施釉陶器の縁輪小皿である。口縁部の内外面に灰釉を施す。体部が短く、直線的に立ち上がる。15は錢貨である。北宋錢の「祥符元宝」(初鋤年 1008 年) (日本貨幣商協同組合 1993) と思われる。16は大窯の志野菊皿である。高台内を除く全面に長石釉を施す。

遺構の時期 出土遺物からⅦ期以降の遺構と考えられる。

2 坪境溝状遺構群（第 22～25 図）

第2章第2節で示した復原条里プランの、1坪と2坪の境にあたる場所から検出した溝状遺構であり、後述する里境溝状遺構群 SD21～25 の約 109 m 東に位置する。

SD 5・7

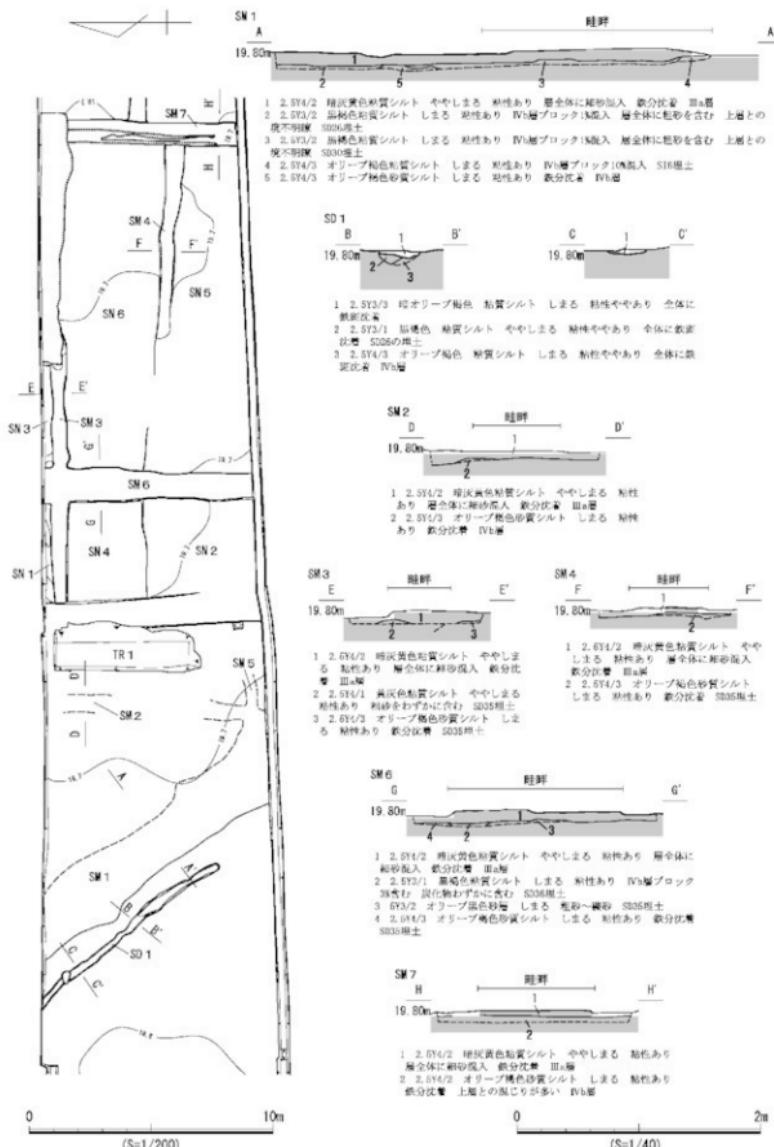
検出状況 SD 5・7 は、BN10 から BO10 グリッドで検出した。Ⅲ層上面で検出したが、南壁の土層観察で、SD 5 が II 層上面から掘り込まれた状況を確認した。SD 7 は、SD5 の土層観察で存在を確認し、その後検出した遺構である。後述する SD 6 の東肩に沿って南北方向に設置されている。この 2 条の溝はほぼ平行しており、重複しない。長軸方位は、畦畔と同様に東へ僅かに傾く傾向がみられる（第 16 図）。

堆積状況 SD 5 は、単層でしまりのない土で埋没している。SD 7 も単層で粗砂が均等に混じることから、自然堆積ではない可能性がある。

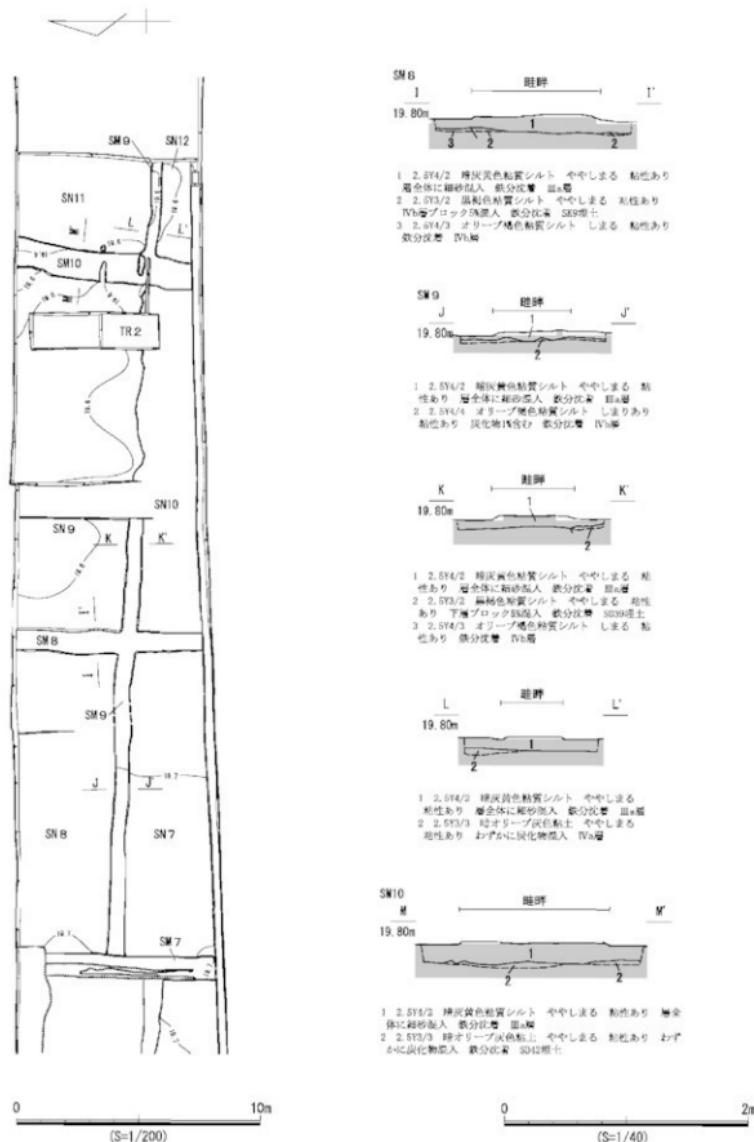
形状・形態 SD 5 は、断面形が逆三角形に近い形態をとる。II 層上面から掘り込まれた遺構であるため、本来の深さは倍程度はあったと思われる。掘削中に、SD 5 の底面から SD 6 の護岸のために設置された杭を確認したが、いずれも本遺構の掘削によって折損していた。なお、検出した底面に比高差がないため、流水方向は不明である。SD 7 は、断面形が半円形で、浅い。II 層上面から掘り込まれた遺構とすれば、SD 5 のような形態であった可能性も考えられる。

遺物出土状況 いずれも細片で、まとまった出土状況はみられなかった。なお、SD 5 からは、農作業用のマルチが出土した。

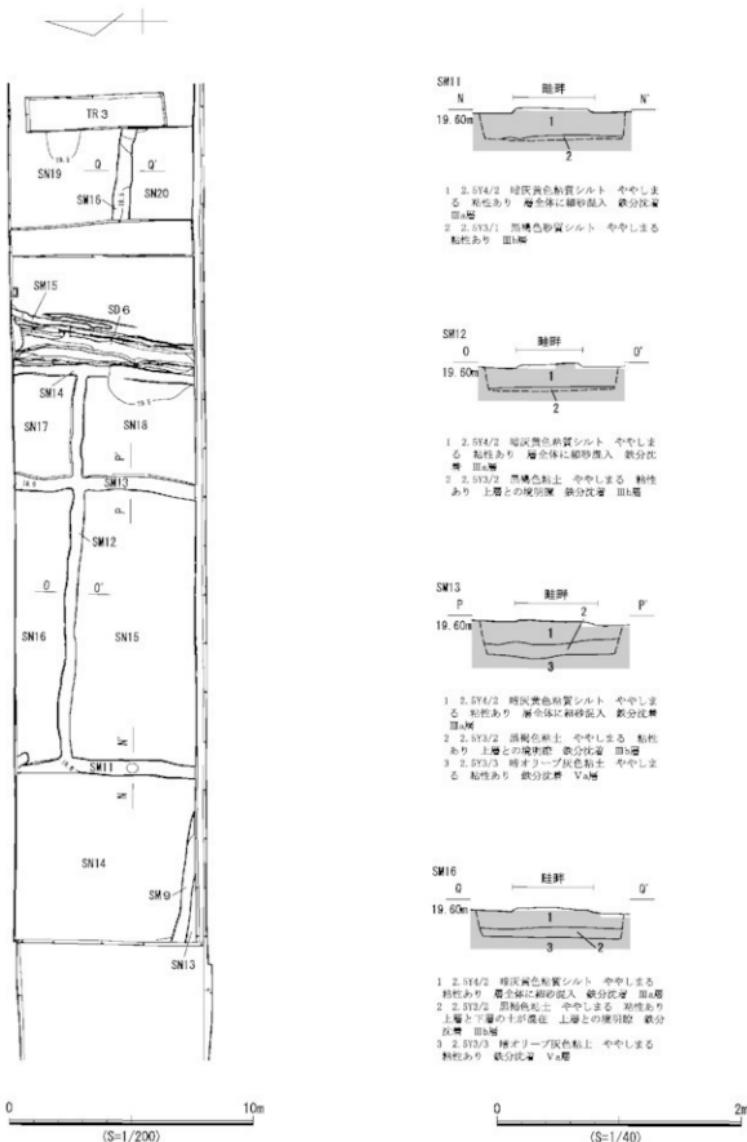
出土遺物 SD 5 からは須恵器、山茶碗、中世陶磁器、鍛冶滓の可能性がある破片が出土した。SD 7 か



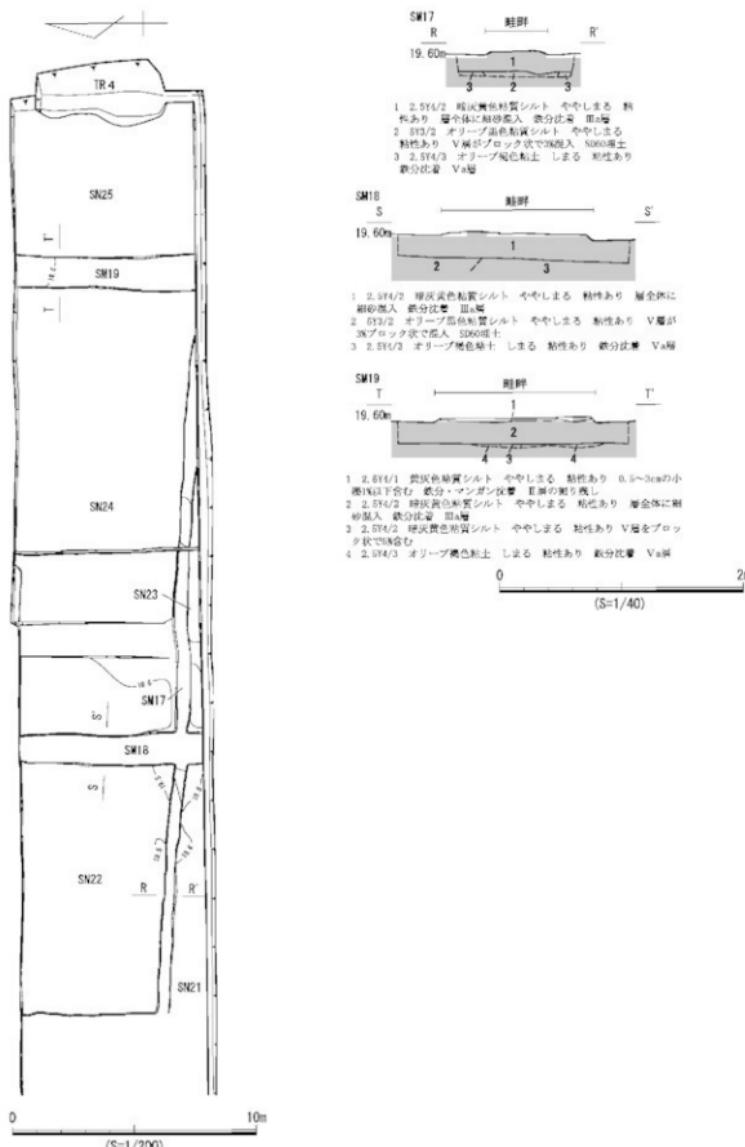
第16図 水田区画及び駐畔①



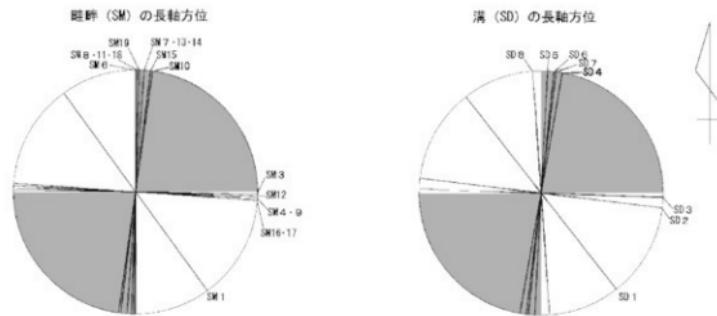
第17図 水田区画及び畦畔②



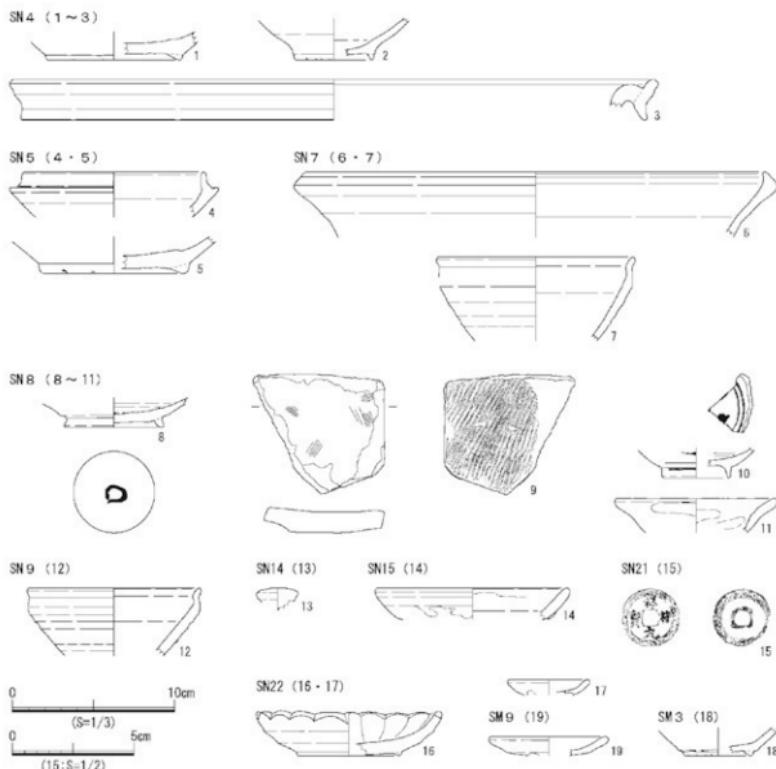
第18図 水田区画及び畦畔③



第19図 水田区画及び疊群④



第20図 畦畔及び溝状造構の長軸方位



第21図 水田区画及び畦畔出土遺物

ら土師器片3点が出土した。SD 5は近年まで使用されていた溝であるため、遺物の大半は混入と思われる。SD 5出土遺物の内、図示可能な1点のみ掲載した（第25図20）。

20は美濃窯の碗と考えられる。内外面に鈴釉が施され、体部外面下半には錦釉がみられる。近世のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。

遺構の時期 SD 5は圃場整備前まで使用された溝であり、米軍の空中写真（第7図）で確認できる、復原条里の坪境に位置する溝に相当する。SD 7は、その溝に先行する遺構である可能性がある。

SD 4・6

検出状況 BN10からB011グリッドで検出した。SD 6は、Ⅲ層上面で検出したが、SD 5と同様に、Ⅱ層上面から掘り込まれている状況を確認した。SD 5が遺構の中央、SD 7が東岸に重複している。SD 4はSD 6の東岸に平行して設置されており、南端が途切れる。長軸方位は、畦畔と同様に東へ僅かに傾く傾向がみられる（第20図）。

堆積状況 SD 4は、Ⅱ層に類似する黒褐色の埋土で埋没しており、場所によって底面に礫砂がみられた。SD 6は、重複するSD 5を挟んで東西で堆積状況が異なっており、西側が若干浅く（第22図溝2）、東側が深い（第22図溝1）。溝1の底面には、砂層がみられ、一定の流水があった可能性がある。その上層は砂が混入する粘質シルトで一括して埋没しており、人為的に埋め戻された可能性がある。

形状・形態 溝1・2の断面形は、半円形に近い形状をとる。南北の底面の比高差がほとんど無いため、流水方向は不明である。SD 6は、大きく分けて2段階の付け替えが行われている。溝1が古く、溝2が新しい。両溝ともに横木と杭による護岸がある。調査では、横木を3段階に分けて取り上げたが、第23図に示した「下層」が溝1の護岸に相当すると思われる。杭は、横木に打ち込まれた東側の列と、横木が無い西側の列に分かれているが、西側の杭列は、ほとんどが溝の底面付近で折損していた。溝2の設置に伴って折損したと考えられ、この両杭列の間が、本来の溝1の範囲と考えられる。なお、発掘区北壁付近には多くの杭が打ち込まれており、搅乱により詳細は不明であるが、流水を抑制するための、しがらみ状の遺構があった可能性がある。

溝2は、溝1の西側に設置されており、横木を入れながら溝1を埋め立て、溝2東岸の護岸としている。西岸には護岸を設置した形跡が無く、素掘りの状態であったと思われる。溝2に伴う横木は、第23図の「中層」・「上層」に対応し、その西側の横木が無い部分が、溝2の範囲であったと考えられる。

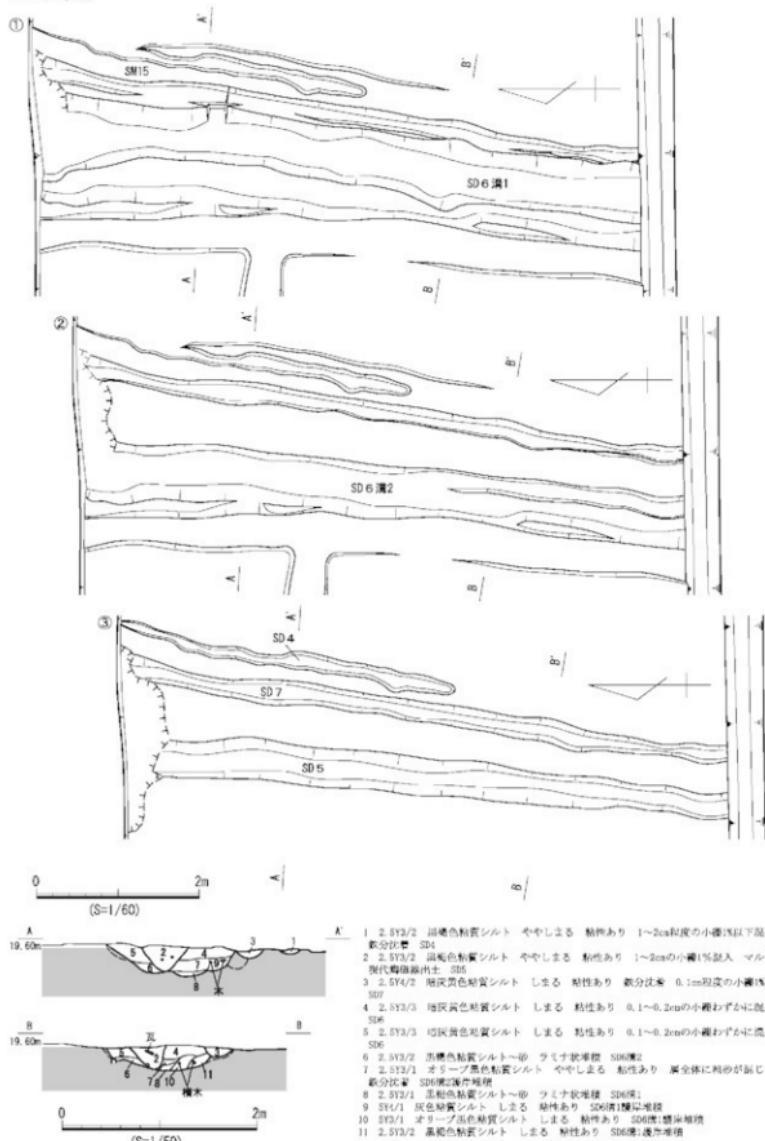
護岸に使用されている杭は、丸太材（第24図A）や枝材が全体の約57%を占め、切り出した竹をそのまま使ったものが約29%、丸太をミカン削りした角材（第24図B）が約13%みられる（表5）。いずれの杭も樹皮が残っており、建築部材からの転用などを示す加工は確認できなかった。杭の先端は、大型の刃物でそぎ落としたような簡易な加工が施されているが、全体の約44%は加工が無いか、若しくは確認できなかった。長さ111cm、直径7.8cmを測る大型の杭もあり、これらはV層下層の自然流路堆積まで達していた（第4節SD49参照）。横木は、溝の方向に沿って細く裂いた竹か木の枝を束ねたもので、竹製が全体の約81%を占める（表5）。

SD 4は、SD 6とやや離れた位置に平行して設置されていることや、非常に浅いことなどから、SD 6の東岸に沿う畦畔（SM15）に伴う耕作溝と推定される。

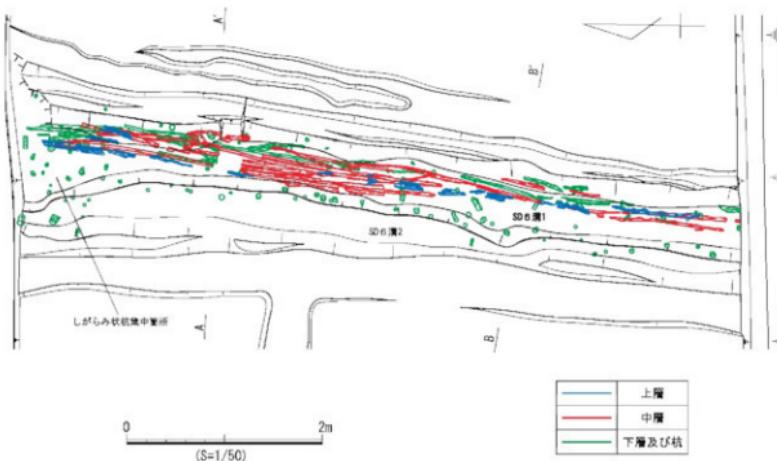
遺物出土状況 埋土中から土器の細片が出土したが、まとまった出土状況は見られなかった。

出土遺物 SD 6から須恵器、山茶碗、中近世陶磁器、土師器の他、近世のものと思われる瓦が出土し

SD4~7の変遷



第22図 坪境溝状遺構群遺構図



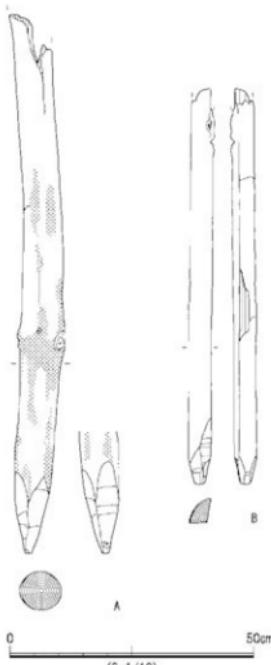
第23図 SD 6 護岸等検出状況

た。また、板状の木製品を数点遺物として取り上げたが、護岸施設の調査によって横木の断片であることが判明した。このうち、図示可能な2点を掲載した。21は尾張型山茶碗の碗である。高台の断面が逆三角形で、端部に粗びき痕が認められる。内面が著しく摩耗している。22は美濃窯の灯明皿と思われる。内面と口縁部外面に船袖を施す。近世のものと思われるが詳細な時期は不明である。

造構の時期 SD 6自体は、II層の水田層に伴うIX期の造構であり、改修を受けながら水路として利用され、SD 5・7に引き継がれたと考えられる。第1調査面で検出した水田造構の畦畔の状況から、第2調査面で確認したSD49に後続するVII・VIII期の溝が存在した可能性は高いが、後世にSD 6が設置されたことによって消失したと考えられる。

3 その他の遺構

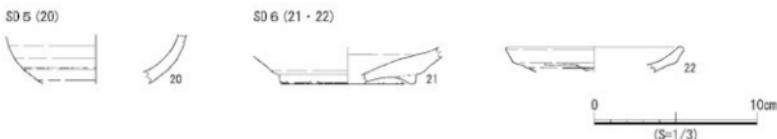
その他の遺構として、溝、土坑を検出した。溝は、いずれもII層と同質の埋土で埋没しており、SD 8を除き、主軸方位が畦畔の傾向と一致している。そのため、II層の水田耕作に関する溝と思われる。土坑もII層と同質の埋土で埋没しており、明確な掘方をもつものは認められなかった。



第24図 SD 6 出土杭

表5 SD6出土杭及び横木集計表

杭		先端の加工		合計	割合	横木	合計	割合
素材	形態	有	無又は不明			素材	合計	割合
木製	角材	7	6	13	13.3%			
	丸太材・枝材	45	11	56	57.1%			
	不明	1	—	1	1.0%			
竹製	—	2	26	28	28.6%			
	合計	55	43	98	100.0%			



第25図 塚墳清状遺構群出土遺物

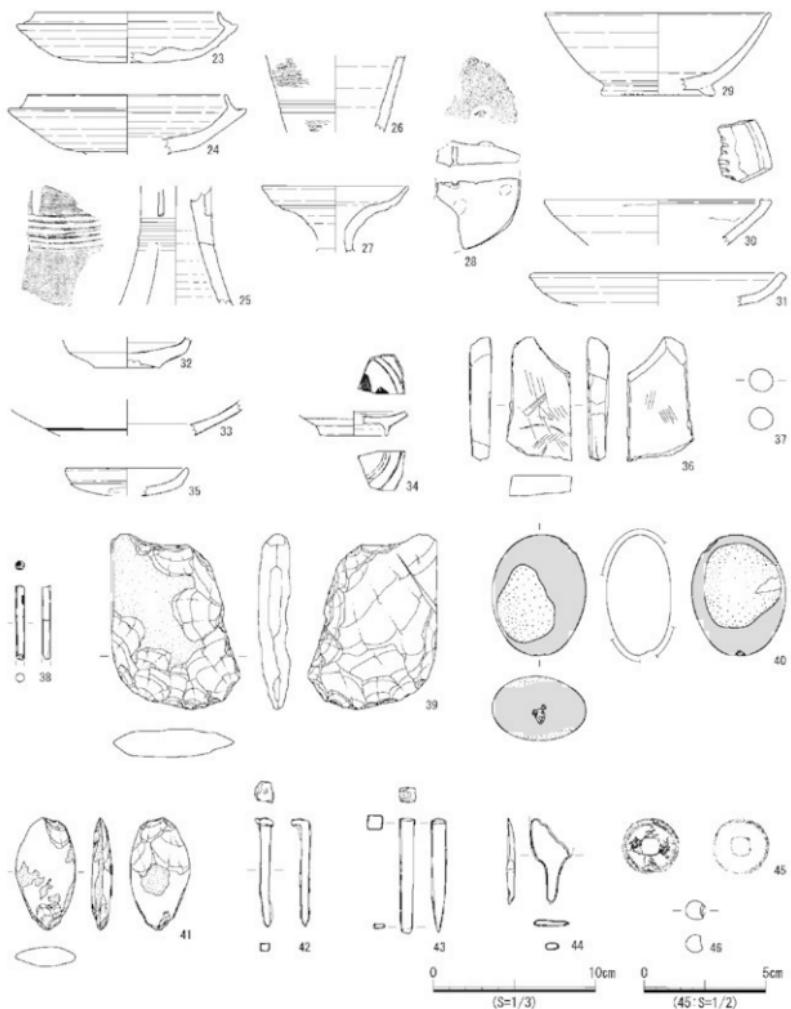
4 遺物包含層等出土遺物（第26図）

本項では、II層や表土等から出土した遺物を掲載して報告する。なお、一部のII層は、第2調査面の遺物包含層となっているが（第3章第1節参照）、煩雑になることを避けるため、本項に一括して記載した。

23～28は須恵器である。23は壺身A類である。口縁部は外反しながら内傾して短く立ち上がる。底面は扁平で、体部は直線的に開いて口縁部受部に達する。底部外面にはヘラ切り痕が残り、その周囲に回転ケズリ痕が残る。24は有蓋高杯の身である。底部外面に脚部との接合痕が残る。口縁部は直線的に短く立ち上がる。底部は丸みがあり、外面に回転ヘラケズリがみられる。25は高杯の脚部である。灰色の緻密な胎土をもつ。外面中央の横位多条沈線によって区画された下段に、櫛描による横位の波状沈線を施す。また、その上下の区画に透かしがみられる。26・27はハソウの口縁部である。26は器壁が薄く、青味がかった色調をもつ。横位の沈線文は2条で、上下の区画に櫛描波状文を施す。27は口縁部が内湾しながら緩やかに開き、頸部との境に一条の沈線を施す。美濃須衛産の可能性がある。28は須恵器の底部であり、円盤状に加工されている。焼成前の貫通しない穿孔やヘラ記号が残る。加工前の器種は不明である。29は東濃型山茶碗の碗である。やや厚手で、底部内面が摩耗している。30は古瀬戸系施釉陶器の鉢皿である。口縁部内面が張り出し、受口状になる。口縁部外外面に灰釉を施す。31は大窓の志野丸皿である。内外面に長石釉が施され、外面に回転ヘラケズリの痕跡が残る。32～34は貿易陶器である。32は龍泉窯系青磁皿で、文様を施さない。体部と底部内面の境が明瞭であり、底部外面の釉薬が掻き取られた蛇目高台をもつ。33は白磁の皿である。体部外面に2条の沈線を施す。34は染付碗である。内外面に呉須絵が描かれるが、細片であるため図柄は不明である。35は土師器皿である。口縁部外外面に強い横ナデが施され、体部外表面段が作出される。36は須恵器片であるが、9（第17図）と同様に砥石に転用されている。短軸方向破断面を除く4面に砥面がみられ、砥面の状態から、手持ち砥石として使用されたと思われる。37は土玉である。土師質で表面に指オサエや指ナデの痕跡が残る。

38～41は石器・石製品である。38を除き縄文時代の可能性がある。38は棒状の石製品である。表面に成形時の研磨痕が残り、端部が折損している。用途は不明である。39は打製石斧である。横長の剥片を加工し、刃部を作出する。側縁の加工は片側のみであり、ognate面がそのまま残る。また、基部の折損部位に摩耗が認められ、別の用途に転用された可能性がある。40は磨石・叩石類である。円錐のやや平坦な部分を除き、全面に顕著な磨面がみられ、端部の1箇所にのみ敲打によるとと思われるハガレが認められる。41は表面の風化が著しいため詳細不明であるが、打製石器の一種と考えられる。長軸の両端に両面からの加工が残る。

42～46は金属製品である。42は鉄製の釘である。頂部が折れて広い（平頭釘）形態をとる。43は釘と考えられ、角釘とは異なり先端が幅広になっている。44は鉄鎌の可能性がある鉄製品である。鎌身が柳葉型あるいは主頭型をとるが、大きく欠損しているため詳細は不明である。45は渡来鏡の「元豈通寶」（初銅年 1078）の可能性がある。46は鉛玉である。火縄銃の弾と思われ、使用によるものか表面に瘤みが認められる。



第26図 第1調査面遺物包含層出土遺物

表6 第1調査面水田区画一覧表

遺構名	地区割り		検出面	関連する 組群 (SM)	南北長 (m)	東西長 (m)	出土 遺物	備考
	東西	南北						
SN 1	AN	13~14	Ⅲ上	SM3 /SM6	0.30	4.10	Y1 H13	
SN 2	AO + AP	13~14	Ⅲ上	SM6	4.50	4.00	Y9 K4 P7 H31	北側唯群一部段差のみ
SN 3	AN	14~15	Ⅲ上	SM3 /SM6	0.30	4.30	T2 T3 H4	
SN 4	AN+AO	13~14	Ⅲ上	SM3 /SM6	3.00	4.20	T2 Y24 K7 P12 H98	南側唯群一部段差のみ
SN 5	AN+AO	14~17	Ⅲ上	SM4 /SM6 /SM7	3.90	13.30	T3 Y18 K20 P20 B100	北側唯群一部段差のみ
SN 6	AN+AO	14~17	Ⅲ上	SM3 /SM4 /SM6 /SM7	3.10	13.30	Y1 P1 H49 J2	南側唯群一部段差のみ
SN 7	AO	17~20	Ⅲ上	SM7 /SM8 /SM9	3.65	13.10	T4 Y18 S8 P3 B44	
SN 8	AN+AO	17~20	Ⅲ上	SM7 /SM8 /SM9	4.10	13.10	T5 Y52 S10 P22 B135	
SN 9	AN+BO	20~3	Ⅲ上	SM8 /SM9 /SM10	3.90	14.20	T13 Y13 K26 P27 H142	南側唯群一部段差のみ
SN10	AO+BO	20~3	Ⅲ上	SM8 /SM9 /SM10	2.55	14.20	Y3 K3 P3 H29	北側唯群一部段差のみ
SN11	BN + BO	3	Ⅲ上	SM9 /SM10	5.10	3.70	Y3 K3 P6 H57	
SN12	BO	3	Ⅲ上	SM9 /SM10	1.50	3.70	Y2 H5	
SN13	BO	5	Ⅲ上	SM10	0.40	2.80	H1	
SN14	BN + BO	6~7	Ⅲ上	SM10 /SM11	7.35	6.80	T3 Y16 K1 P6 H73	
SN15	BN + BO	7~9	Ⅲ上	SM11 /SM12 /SM13	2.90	10.90	T4 Y6 P5 B43	
SN16	BN	7~9	Ⅲ上	SM11 /SM12 /SM13	4.50	10.90	T2 Y1 P6 H9	
SN17	BN	9~10	Ⅲ上	SM12 /SM13 /SM14	2.60	4.00	T2 Y4 K1 P2 H13	
SN18	BN + BO	9~10	Ⅲ上	SM12 /SM13 /SM14	4.55	4.00	Y6 P1 H36	
SN19	BN + BO	11~12	Ⅲ上	SM15 /SM16	4.80	7.80	H3	
SN20	BO	11~12	Ⅲ上	SM16	2.50	—	Y6 P1 H6	
SN21	BO	14~16	Ⅲ上	SM17 /SM18	1.50	10.30	T1 I1	
SN22	BN + BO	14~16	Ⅲ上	SM17 /SM18	6.30	10.30	T4 Y2 P5 H15	西側唯群は段差のみ
SN23	BO	16~19	Ⅲ上	SM17 /SM18	0.50	10.70	P1 H1	
SN24	BN + BO	16~20	Ⅲ上	SM17 /SM18 /SM19	7.30	13.10	Y1 K1 P8 H40	
SN25	BN+CG	20~2	Ⅲ上	SM19	7.30	6.10	Y1 K1 P2 H9	

振野潤は検出した範囲

表7 第1調査面駐辟一覧表

遺構名	調査時 遺構番号	地区前り 東西	南北	複出 面	複出長 (m)	幅 (m) 上端	幅 (m) 下端	主軸方位	切り合 新 旧		出土 遺物
									SI 6	SK18	
SM1	S2	AN/AP	10'~12'	Ⅲ上	12.20	1.90	—	N 36° W			V2 K1 P2 H9 J2
SM2	S4	AO	12'~13'	Ⅲ上	—	0.70	—	—			H3
SM3	S15	AN	13'~16'	Ⅲ上	12.20	0.74	0.80	N 89° E			V5 P2 I23 (SM6との交点 H1)
SM4	S17	AO	13'~14'	Ⅲ上	7.50	0.56	0.64	N 87° W			V3 P3 H13
SM5	S3	AO・AP	13'	Ⅲ上	—	0.40	—	—			
SM6	S16	AN/AP	14'	Ⅲ上	8.40	1.32	1.40	N 0° —			V10 K1 P2 H33
SM7	S23	AN/AO	17'	Ⅲ上	6.90	1.12	1.20	N 4° E			V5 K1 P4 I28 J1 (SM9との交点 H1 H2)
SM8	S28	AN/AO	20'	Ⅲ上	7.60	0.97	1.06	N 1° E			V1 P1 H13 (SM9との交点 T1 K2 H3)
SM9	S38	AO・BO	17'~8"	Ⅲ上	45.00	0.48 0.54	0.62 0.66	N 87° W	SD3		V3 P7 I29 (SM10との交点 E3)
SM10	S35	BN・BO	3'	Ⅲ上	7.30	1.15	1.25	N 8° E	SD2 SD3 SK6		V4 K1 P1 H28
SM11	S61	BN・BO	7'	Ⅲ上	7.30	0.58	0.63	N 1° E			V1 K1 H1
SM12	S62	BN	7'~10'	Ⅲ上	15.70	0.46	0.53	N 88° W			V1 K1
SM13	S63	BN・BO	9'	Ⅲ上	7.30	0.57	0.65	N 4° E			K1 P1
SM14	S68	BN・BO	10'	Ⅲ上	7.40	0.40	0.47	N 4° E			
SM15	S73	BN・BO	10'~11'	Ⅲ上	7.60	0.68	0.60	N 7° E	SD4		
SM16	S78	BN・BO	11'~12'	Ⅲ上	3.70	0.58	0.64	N 86° W			
SM17	S79	BN	14'~20'	Ⅲ上	27.00	0.37	0.54	N 85° W	SD8		V1 H2 (SM18との交点 H1)
SM18	S80	BN・BO	16'	Ⅲ上	7.40	1.25	1.35	N 1° E			V1 Y1 H3
SM19	S89	BN・BO	20'	Ⅲ上	7.15	1.25	1.30	N 2° E			T1 P1 H1

表8 第1調査面溝状遺構一覧表

遺構名	地区割り 東西 南北	複出 面	堆積 堆積形	長さ (m)	幅 (m)		深さ (m)	主軸方位	切り合い 新 旧	出土 遺物	備考	
					上端	下端						
SD 1	AN・AO 10・11	II基	a	台形	9.25	0.33 0.35	0.28 0.26	0.03 0.05	N 38° N 83°	W W	H1 J1	
SD 2	BN・BO 3	II上	a	半円形	1.69	0.31	0.28	0.03	N 88°	W	SM10 P1 H1	
SD 3	BO	3	II上	a	半円形	2.28	0.13	0.09	0.02	N 10°	E	SM9 SM10
SD 4	BN	11	II上	a	半円形	4.16	0.21	0.14	0.04	N 3°	E	SM15
SD 5	BN・BO	10	II上	a	三角形	3.50	0.41 0.46	0.09 0.19	0.23 0.24	N 15° Y2 P2	E	坪塚清群 深治屋町遺物2
SD 6	BN・BO	10	II上	b4	半円形	7.50	1.30 (1.05)	0.89 0.49	0.30 0.28	N 6°	E	SD5 H1
SD 7	BN・BO	10・11	II上	a	半円形	3.67	0.29 0.27	0.08 0.07	0.10 0.10	N 7°	E	SD6 H3
SD 8	BN・BO	18	II上	a	半円形	8.30	0.21 0.12	0.10 0.06	0.05 0.04	N 4°	W	SM17

※「括弧」は検出した範囲で計測
※第2調査面の遺構との切り合いは省略

表9 第1調査面土坑一覧表

遺構名	調査時 遺構番号	地区割り 東西 南北	複出 面	平面形	堆積 堆積形	長軸 (m)	短軸 (m)		深さ (m)	主軸方位	切り合い 新 旧	出土 遺物
							上端	下端				
SK 1	SS2	AO・AP 1	II基	複円形	a	半円形	0.70	0.59	0.54	0.36	0.06	—
SK 2	SS1	AP 1	II基	円形	a	半円形	0.48	0.41	0.33	0.31	0.06	—
SK 3	S45	AO 2	II基	複円形	b4	二段	0.45	0.33	0.36	0.27	0.12	N 26° E
SK 4	S46	AO 2	II基	不定形	a	半円形	0.46	0.36	0.44	0.32	0.06	—
SK 5	S30	BN・BO 3	II上	円形	a	半円形	0.29	0.22	0.17	0.11	0.06	—
SK 6	S32	BO 3	II上	複円形	a	半円形	0.83	0.81	0.72	0.20	0.06	N 89° E
												SM10

表10 第1調査面出土土器観察表①

遺 物 番 号	理別	各種	出土位置		口徑/底径 (cm) 容積/最大径 (cm) 堆積 体積	堆 積 形	着土 (単位: cm)	焼 成	色調 (内面) (外面) (裏面)	表面観察 内面/外面	分類 ・ 時期	文様・ その他 (単位: cm)	非 目 録 番 号		
			出土区 域 グリッド	遺構 番号											
1	山茶窯	■	A014	SS4	■	—/(8.0) (1.7) /—	— · 0	壺(～6.0) の 良石をや かに含む)	良 好	2.87Y1/1 2.87Y1/2 2.87Y1/3	凹輪ナデ/回輪ナ デ/回輪丸切り 縁/貼り付け真台 縁	尾頭型 4~5型式	内面磨拭・高台に 凹輪底、内面自然 底	21	22
2	山茶窯	■	A014	SS4	■	—/(4.8) (2.6) /—	— · 0	壺(～6.0) の 良石をや かに含む)	良 好	1.89Y1/1 1.89Y1/2	凹輪ナデ/回輪ナ デ/回輪丸切り 縁/貼り付け真台 縁	尾頭型 4~5型式	内面わずかに自然 底・高台に凹輪底	21	22
3	菅原	■	A014	SS4	■	(29.5) /— (2.6) /—	1.0 · 0	壺(～6.0) の 良石をや かに含む)	良 好	2.87Y1/1 2.87Y1/2 2.87Y1/3 2.87Y1/4	凹輪ナデ/回輪ナ デ/回輪丸切り 縁/貼り付け真台 縁	井筒 6~7型式	内面自然底	21	22
4	飯庶窯	■	A016	SS5	■	(11.0) /— (2.6) /—(12.8)	1.0 · 0	壺(～6.0) の 良石をや かに含む)	良 好	2.87Y1/1 2.87Y1/2 2.87Y1/3 2.87Y1/4	凹輪ナデ/回輪ナ デ/回輪丸切り 縁/貼り付け真台 縁	内系 DN217付 行窓	21	22	
5	山茶窯	■	A014	SS6	■	—/(9.0) (2.5) /—	— · 0	壺(～6.0) の 良石をや かに含む)	良 好	2.87Y1/1 2.87Y1/2 2.87Y1/3 2.87Y1/4	凹輪ナデ/回輪ナ デ/回輪丸切り 縁/貼り付け真台 縁	尾頭型 5式	内面磨拭	21	22
6	古窯	■	A020 A019	SS7	■	(28.0) /— (4.0) /—	1.1 · 1	壺(～6.0) の 良石をや かに含む)	良 好	2.87Y1/2 2.87Y1/3 2.87Y1/4	凹輪ナデ/回輪ナ デ/回輪丸切り 縁/貼り付け真台 縁	古窯 後IV期 附	柱型及 び色調・紙 袋(S32/3) 外面部磨拭	21	22
7	大窯	天井系統	B02	SS8	■	(12.0) /— (5.2) /—	1.0 · 0	壺 —	良 好	2.87Y1/4 2.87Y1/5	凹輪ナデ/回輪ナ デ/回輪丸切り 縁/貼り付け真台 縁	大窯(解) 繁平	柱型及 び色調・紙 袋(7.5YR2/2) 外面部磨拭、内部 下部繊維	21	22
8	灰動 陶瓶	直立小瓶	AN08	SS8	■	—/(6.0) /— —	— · 1	壺(～6.0) の 良石をや かに含む)	良 好	2.87Y1/1 2.87Y1/2 2.87Y1/3	凹輪ナデ/回輪ナ デ/回輪丸切り 縁/貼り付け真台 縁	5-53小 口	内面磨拭・墨 青(○) か	21	22
9	瀬山窯	■	AN18	SS8	■	燕(7.4) /— (8.0) /— —	— · —	壺(～6.0) の 良石をや かに含む)	良 好	2.87Y1/1 2.87Y1/2 2.87Y1/3	凹輪ナデ/回輪ナ デ/回輪丸切り 縁/貼り付け真台 縁	瀬山窯	内面磨拭	21	22
10	宮内 陶瓶	青花 染付瓶	AN18	SS8	■	—/(4.0) (1.8) /—	— · 0	壺 —	良 好	2.87Y1/1 2.87Y1/2 2.87Y1/3	凹輪ナデ/回輪ナ デ/回輪丸切り 縁/貼り付け真台 縁	内各面磨拭、色 調(青花)、見 込み: 黄鉛釉	21	22	
11	土師器	■	AN19	SS8	■	(9.9) /— (2.1) /—	3.0 · —	壺 —	良 好	1.978Y1/1 1.978Y1/2 1.978Y1/3	凹輪ナデ/回輪ナ デ/回輪丸切り 縁/貼り付け真台 縁	21	22		
12	大窯	天井系統	B02	SS9	■	(10.6) /— (4.2) /—	1.0 · —	壺 —	良 好	2.87Y1/6 2.87Y1/7	凹輪ナデ/回輪ナ デ/回輪丸切り 縁/貼り付け真台 縁	大窯(解) 繁平	柱型及 び色調・紙 袋(7.5YR2/2) 外面部磨拭、神社	21	22

表11 第1調査面出土器観察表②

通 鑑 號	種 別	種 類	出土位置		口径/底径 /壁厚/最大径 (cm)	口縁部 残存率 (0/12) ・底部 破片数	土 質 (単位: m)	積 成	色 調 (内面) (外 面) (底 部)	基面調査 内面/外面	分類 ・ 時期	文様・その他 (単位: cm)	添 註 記	
			出土区 ・ グリット	遺構 番号										
13	須恵器	灰壺 (陶瓶)	B07	SN14	Ⅲ	直径2.5/ (1.4)/2.6	— · —	砂 —	良 好 好	— / 2.577/1	— / 回転ナデ	美濃式 後IV-3 か	探測自然剥 落	21 22
14	六角形 縁付小皿		B09	SN16	Ⅲ	(1.8) /— (2.0) /—	1.2 · —	やや粗 —	良 好 好	2.678/1 2.678/1 2.678/1	回転ナデ / 回転ナ	六角形 後IV期	輪文(2.85/3) 口縁部内外剥離	21 22
16	大盤	志野斑皿 ～9077	B015 B013 ～9077	SB22	Ⅳ Ⅴ	(1.4) / (6.2) /2.7 —	3.0 · 0	砂 —	良 好 好	— / 2.678/1 2.678/1	口縁部アクリ / 回転ナデ - 手切り ナデ附 - 足 付行窓台	大盤・附 後地	輪文及び色調: 内 外輪文(2.87/2) 外表面有裂隙	21 22
17	土師器	灯明皿	BN14	SN22	Ⅳ	(4.8) /— (1.0) /—	1.0 · —	砂 —	良 好 好	2.678/1 10756/2	不明 / 回転ナデ	内 外底深、炭化物		21 22
18	山茶碗	瓶	AN14	SN3	Ⅳ	— / (1.0) (1.7) /—	— · 0	砂 —	良 好 好	10758/1 10758/1 10758/1	回転ナデ - 神止 ナデ / 回転ナデ - 足 付行窓台	末濃式 8~9型	高台に輪文	21 22
19	土師器	豆	B08	SN9	Ⅳ	(7.0) /— (1.1) /—	3.0 · —	砂 —	良 好 好	10788/1 10788/1 10788/1	模オブ / 模ナデ - 押オサエ			21 22
20	須恵器 黒漆	丸瓶	S06	①	Ⅳ	— / (3.0) /—	— · —	やや粗 —	良 好 好	2.677/1 2.678/1	回転ナデ / 回転ナ - ラケイ ズ	輪文及び色調: 内 外輪文(7.05/4) 内外剥離		25 22
21	山茶碗	瓶	S06	②	4	— / (6.2) / (2.2) /—	— · 0	砂 (～ 内裏 - 棕褐色 土粒をわず かに含む)	良 好 好	2.677/1 2.678/1 2.678/1	回転ナデ - 回転ナデ - 回転ナデ - 回転ナ - ラケイ ズ	尾張型 4~5型	内面剥離(薄 地) 内外剥離 内 外底	25 22
22	環形 支座	灯明皿	S06	③	5	(10.8) /— (1.5) /—	1.8 · —	砂 —	良 好 好	2.677/1 2.677/1	回転ナデ / 回転ナ	輪文及び色調: 内 外輪文(2.83/4) 内外		25 22
23	須恵器	坪塙丸	AP11	—	Ⅲ	(11.2) / (6.8) (2.1) / (12.6)	4.0 · 0	砂 (～ 6.1の 砂粒をわず かに含む)	良 好 好	2.677/1 2.678/2 2.678/2	回転ナデ / 回転ナ - ラケイ ズ - 回転ナ - ラケイ ズ	輪文 T321井 行窓		26 22
24	須恵器	有蓋蓋 付	—	—	—	(12.0) /— (3.7) /—	1.0 · —	砂 (～ 6.1の 砂粒をわず かに含む)	良 好 好	2.677/1 2.677/1 10756/1	回転ナデ / 回転ナ - ラケイ ズ - 回転ナ - ラケイ ズ	輪文 内系		26 22
25	須恵器	盖付	AP12	—	II-III	— / (7.2) /—	— · —	砂 (～ 6.1の 砂粒をわず かに含む)	良 好 好	2.678/1 2.678/1 2.678/1	回転ナデ - しばり 三軸ナデ	輪文 T323～ T324井行 窓	2段波 横模様 波紋文 (6.0) 、波状模様 文 (6.0)	26 22
26	須恵器	ハソク	AO11	—	I-IV	— / (4.0) /—	— · —	砂 (～ 6.1の 砂粒をわず かに含む)	良 好 好	2.678/1 2.678/1	m軸ナデ / 回転ナ	繊維状文、平行 折継 (6.0.2)		26 22
27	灰土器	ハソク	AN9	—	I	(9.0) /— (4.1) /—	3.0 · 0	砂 (～ 6.1の 砂粒をわず かに含む)	良 好 好	2.678/1 2.678/1 2.678/1	回転ナデ - 押オサ エ / 回転ナ	波紋 (9.0.3) 、内面有輪付		26 22
28	須恵器	不明	AN6-AP8	—	表探	5(5.2) 厚さ1.7 /—	— · —	砂 (～ 6.1の 砂粒をわず かに含む)	不良 不 良	10758/1 2.676/1	ナデ - 押オサエ / ナデ	草先あち (孔径 3.0) ヘタ記 号、背面に自然剥 離		26 22
29	山茶碗	瓶	AO1	—	Ⅲ	(13.8) / (6.6) 5.1 /—	3.8 · 0	砂 (～ 6.1の 砂粒をわず かに含む)	良 好 好	2.677/2 2.678/2 2.678/2	回転ナデ / 回転ナ - ラケイ ズ	東濃式 内底無輪足、高台 に凹痕		26 22
30	古墳式 鉢	鉢	AO17	—	Ⅲ	(14.0) /— (2.9) /—	3.0 · —	やや粗 —	良 好 好	2.678/2 2.678/2 2.678/2	回転ナデ / 回転ナ - ラケイ ズ	輪目、輪文及び色 調: 灰白 古墳式 後日向		26 22
31	人皿	志野斑皿	BN4	—	Ⅲ	(15.0) /— (2.0) /—	1.0 · —	砂 —	良 好 好	— / 2.678/1	回転ナデ / 回転ナ - ラケイ ズ	人皿 (厚 石) /厚 石	輪文及び色調: 内 外輪文(3.0) 外表面有裂隙	26 22
32	須恵 陶器	■須恵 陶器	AO12	—	Ⅲ	— / (4.0) (1.0) /—	— · 0	砂 —	良 好 好	2.678/2 2.678/1	回転ナデ / 回転ナ	人形 分類無 高台無 底 I-ia	輪文及び色調: 内 外輪文(10.0) 底周外剥離摺合せ あり	26 22
33	須恵 陶器	■花 陶器	AO13	—	Ⅲ	— / (2.2) /—	— · —	砂 —	良 好 好	2.678/1 2.678/1 2.678/1	回転ナデ / 回転ナ	外表面 2段波の纹様 (6.0.1) 、輪文 及び色調: 白輪足 (3.07)		26 22
34	須恵 陶器	■花 陶器	B09	—	Ⅲ	— / (4.0) (1.5) /—	— · 0	砂 —	良 好 好	2.678/1 2.678/2 2.678/2	回転ナデ / 回転ナ - ラケイ ズ - 割り出し 窓台	外表面 透通網狀、共 同2		26 22
35	土師器	土器	TR2	—	—	(7.4) /— (1.7) /—	2.3 · —	砂 —	良 好 好	2.678/2 2.678/2 2.678/2	ヨコナデ / ヨコナ - ラケイ ズ			26 22
36	須恵器	不明 (用印付 け)	AN14	—	Ⅲ	■(7.6) 厚(4.0) 厚(1.3) /—	— · —	砂 (～ 6.2極 長の長さ2) ずかに含む)	良 好 好	2.678/1 2.678/1 2.678/2	回転ナデ / 回転ナ - ラケイ ズ	■BR.3g		26 22

表12 第1調査面出土土製品一覽表

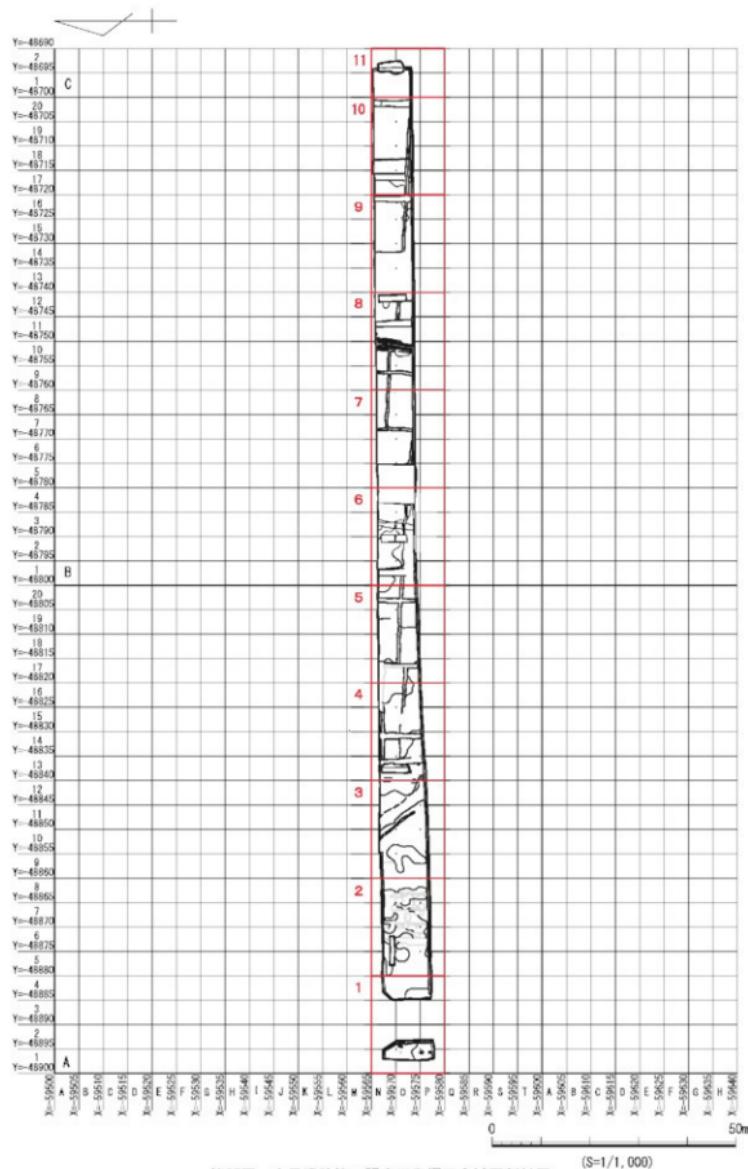
表13 第1調查面出土石器・石製品一覽表

説明 記号	放上 位置	基準 位置	出力位置		素材	長さ/面積/幅・厚さ (cm)			重さ (g)	難易度・その他	荷物 番号	荷物 名前	
			出土区 名	遺物 番号		長さ	幅	厚さ					
38	293	不明石跡	AN17	—	Ⅲ	浅井	(4.5)	0.6	0.6	2.6	—	26	23
39	130	引別大井	AN17	—	Ⅲ	砂井	30.3	7.4	2.0	214.6	—	26	23
40	6	不明石・印形石	AN17-AP13	—	Ⅰ	砂井	7.6	5.8	4.0	235.9	使用痕跡A	26	23
41	130-2	引別大井	AN17	—	Ⅲ	砂井	6.9	3.7	1.2	37.5	—	26	23
—	6-2	BP	AN17-AP13	—	Ⅰ	砂井	10.5	4.6	2.0	113.0	—	26	23

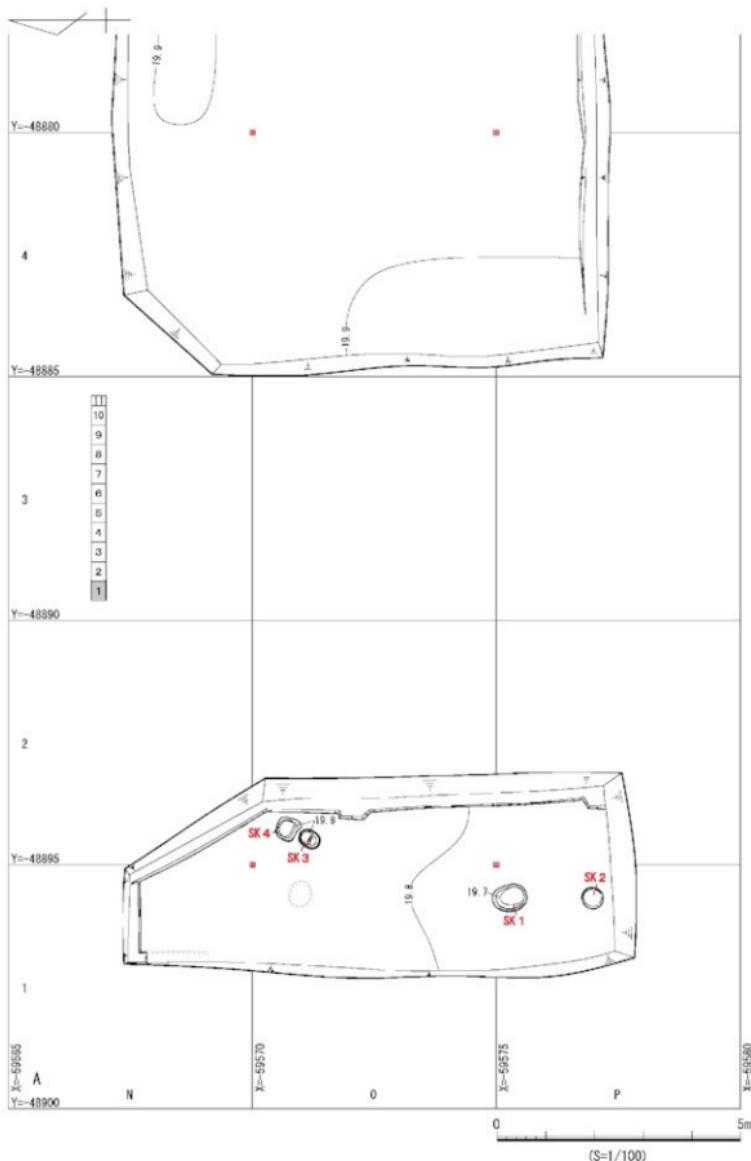
表14 第1調查面出土金屬製品一覽表

規格 取上 番号	取上 番号	種別	出土品種 区分		素材	長さ/幅さ/高さ・厚さ (cm)			重さ (g)	觀察・その他	特徴 番号	説明
			出土区・ グリット	層位		長さ	幅さ	高さ				
16	1255	錫鉛	SN21	a	銅	2.4	2.4	0.1	1.5	「毎符先主」切妻年1028	21	33
42	378	糸引	SN4	—	銅	6.7	0.8	0.8	11.0		26	23
45	926	糸引	SN10	—	銅	7.1	1.0	0.9	22.8		26	23
44	922	鍍金小 鏡背	SN10	—	銅	(5.3)	(2.2)	(0.6)	(6.9)		26	23
46	139	鍍金背	AN15	—	銅	2.3	2.3	0.1	1.4	「元符通宝」か	26	23
46	269	鋤刃	SN4	—	銅	1.1	1.1	1.0	8.1		26	23
46	269	鋤刃	AN15	—	銅	4.2	1.0	0.9	9.1		26	23

表15 SD6出土杭一覽表



第27図 六里遺跡第1調査面発掘区全域図割付図



第28図 第1調査面発掘区全域図分割図①



第29図 第1調査面発掘区全域図分割図②



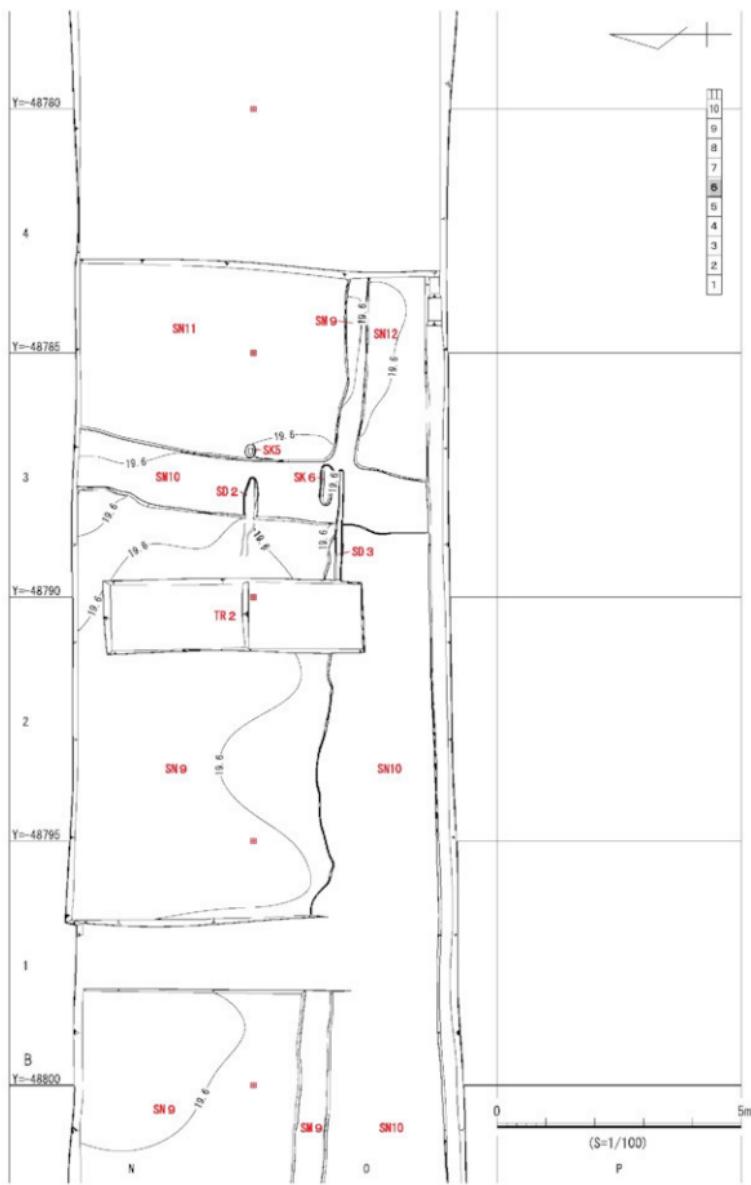
第30図 第1調査面発掘区全域図分割図③



第31図 第1調査面発掘区全域図分割図④



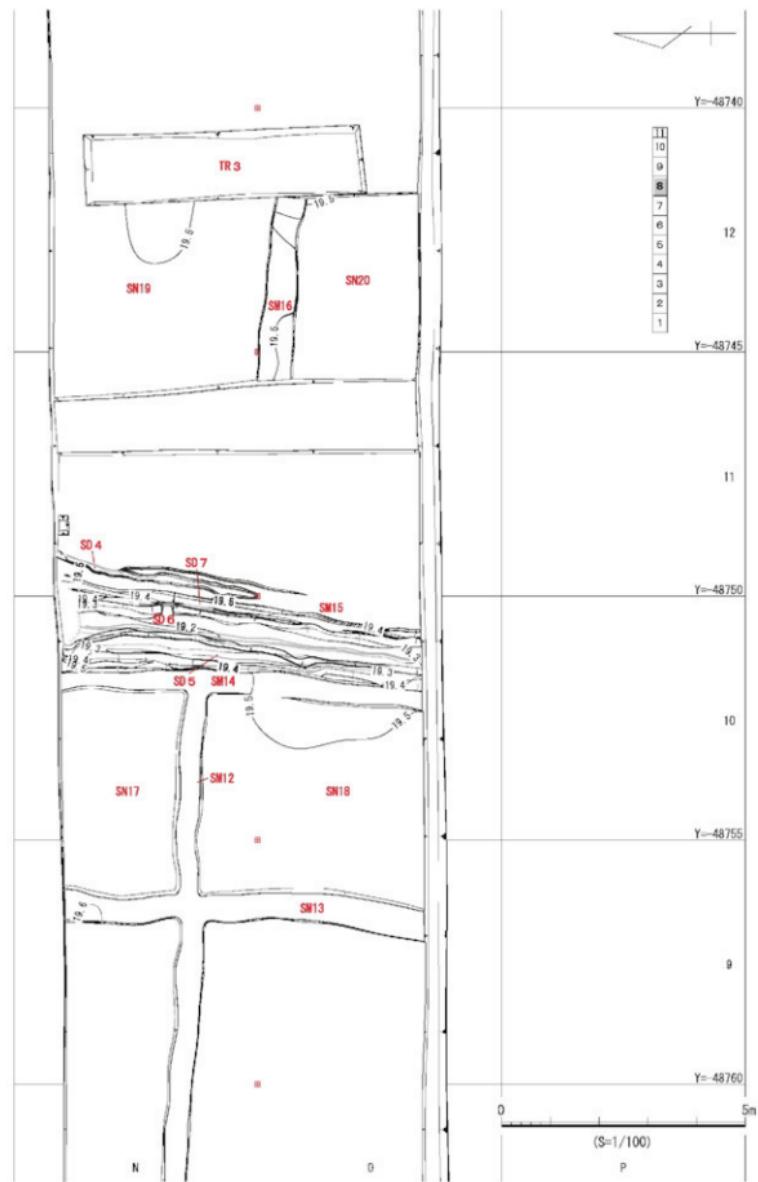
第32図 第1調査面発掘区全域図分割図(5)



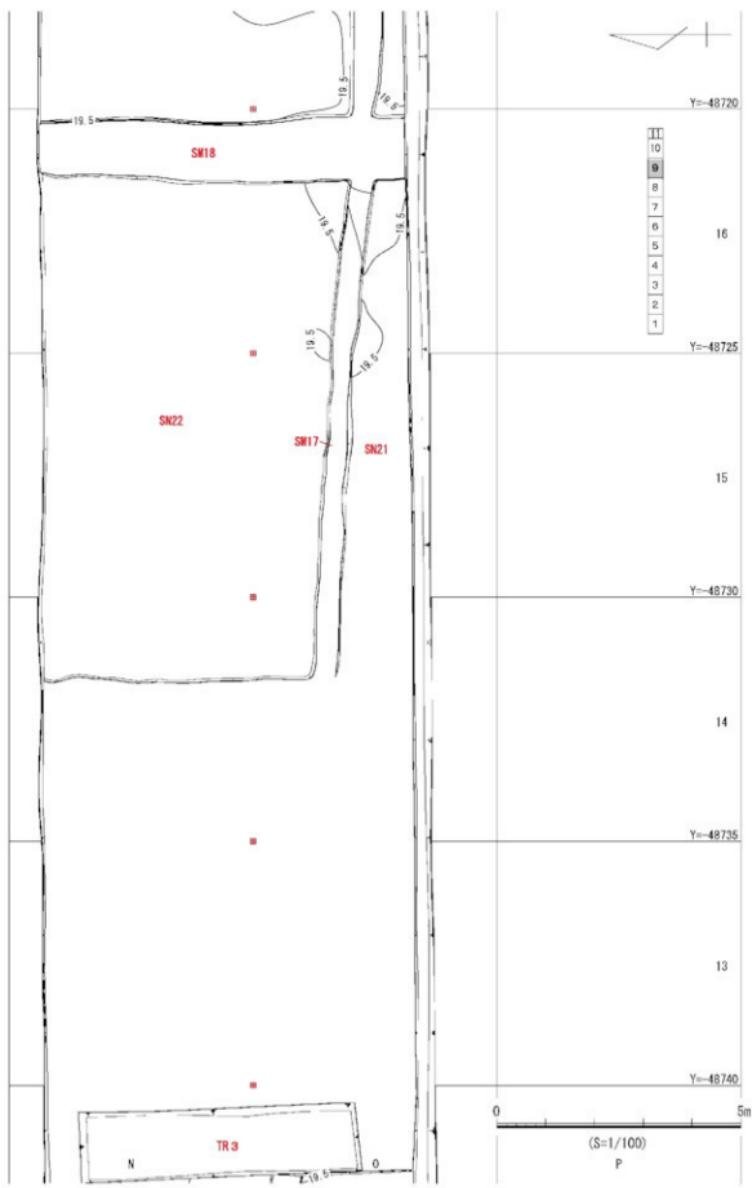
第33図 第1調査面発掘区全域図分割図⑥



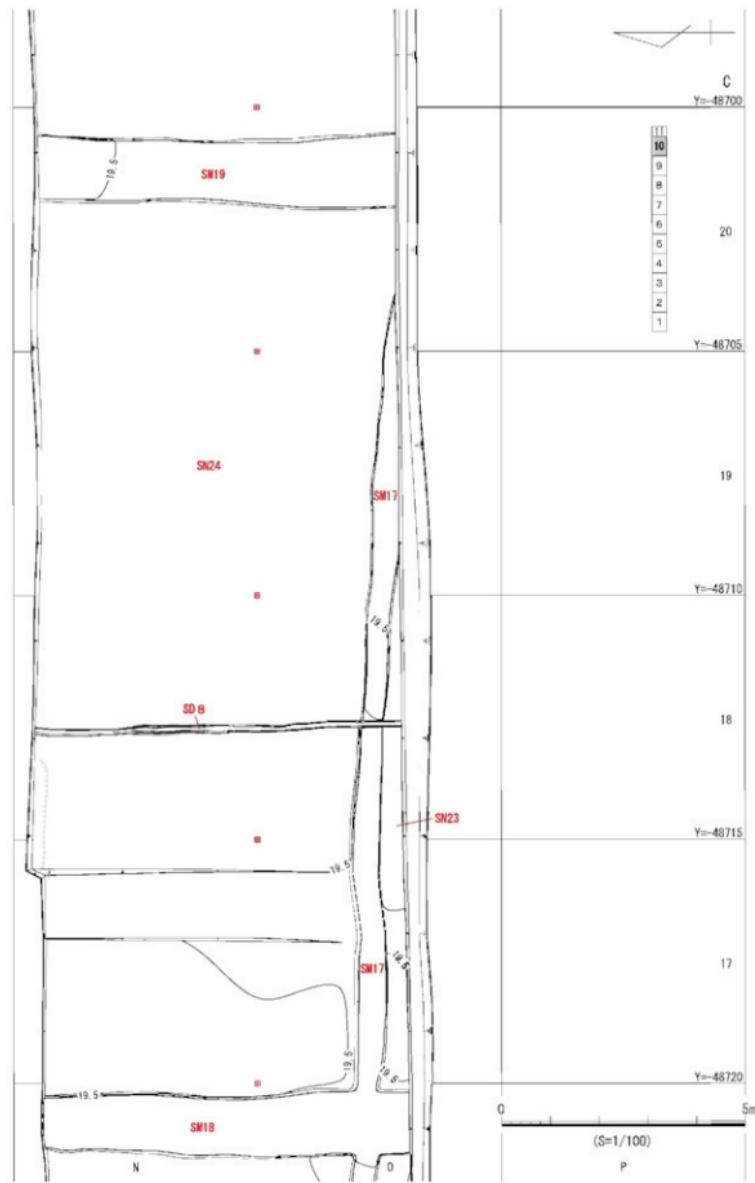
第34図 第1調査面発掘区全域図分割図⑦



第35図 第1調査面発掘区全域図分割図⑧



第36図 第1調査面発掘区全域図分割図(⑨)



第37図 第1調査面発掘区全域図分割図⑩



第38図 第1調査面発掘区全域図分割図①

第4節 第2調査面の遺構・遺物

第2調査面の遺構としては、堅穴建物や掘立柱建物、柱穴列、溝状遺構などがある。

1 堅穴建物

SI 1 (第39～42図)

検出状況 A0 4・AP 4 グリッドで検出した。上面の土層が搅乱されていたことや SD12・SD13 と重複していたことなどから検出作業は難航した。遺構の西側が条里公園の進入路にかかっていたため、検出できたのは全体の半分程度である。床面遺構掘削後に整地土を除去したところ、掘方の東隅付近から P 4 を検出したため、P 2 や P 5 を主柱穴とする古い段階の建物が存在し、建て替えが行われたと判断した。方形の平面形をもつと考えられ、長軸方位は北から N-41° -E である。SD12・13 と重複し、これらより古い。

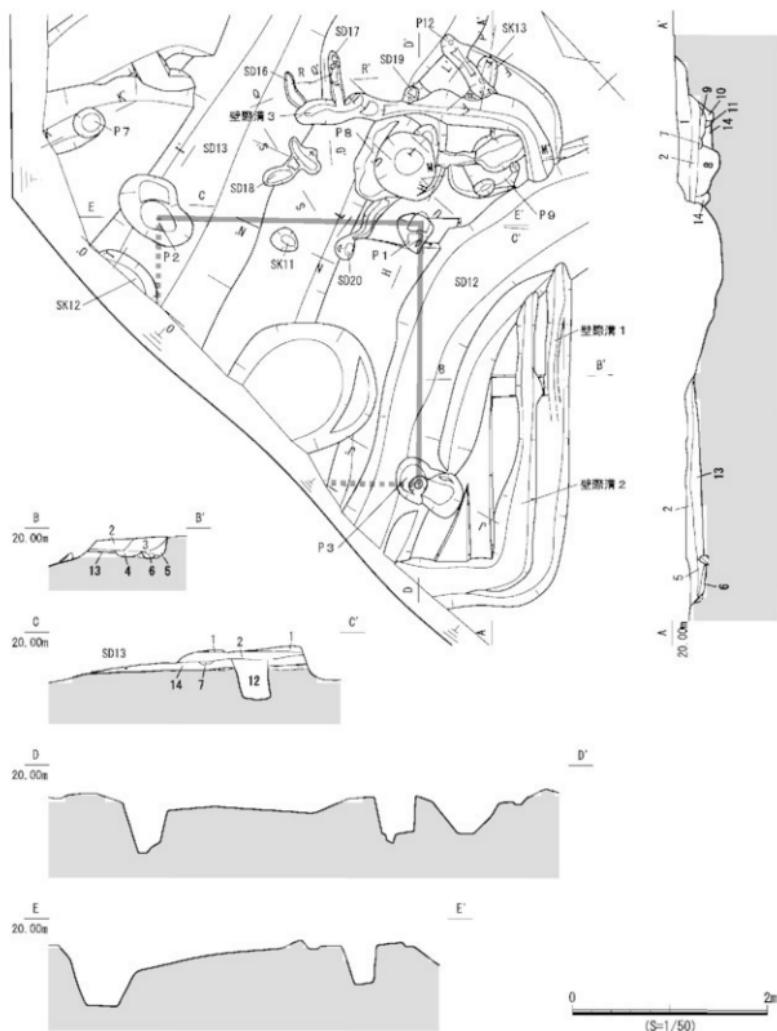
堆積状況 南東隅付近にテラス状の部分がみられ、A-A' の土層から SI 1 より新しい別遺構の可能性がある。2層には基盤層である V 層がブロック状に混入する。V 層のブロックが多量に混じる土によって床面が整地されていた (14・15 層)。

床面・掘方 主柱穴や壁際溝の堆積から、新段階の掘方は北西方向に移動したような状態と考えられる。新段階には整地土 (14 層・15 層) が伴うが、古段階には整地土がみられない。床面の硬化や貼床は確認できなかった。

付属遺構 壁際溝は、SD12 によって寸断された掘方南東壁面沿いの 2 条を壁際溝 1・壁際溝 2、SD12 以東を壁際溝 3 として調査した。遺構掘削の際には判別できなかったが、A-A' の土層観察によって、壁際溝 3 は掘方際の幅広で浅いもの (9 層) と内側の幅が狭く深いもの (10 層・11 層) の二重になっていることが判明した。壁際溝 1 と壁際溝 2 は掘方西壁で重複しており、壁際溝 1 の方が古い。以上から壁際溝 3 の 9 層が壁際溝 2 に、10・11 層が壁際溝 1 に接続すると考えられる。なお、SD13 の北側の掘方については、検出時に別の遺構と判断して整地土まで除去したため、壁際溝を検出することができなかった。

主柱穴は、P 1 を整地土上面、P 4 を掘方底面で検出したことから、これらの位置を基準として柱の配置を検討した。この結果、P 1～P 3 が新段階、P 4・P 2・P 5 を古段階の柱配置と判断した。P 1 は整地土上面で明確な形状が不明であり、基盤層である V 層に類似する堆積に達したした時点で掘削を終了したが (第39図)、整地土除去後に明瞭な掘方 (第41図) を確認した。埋土の上層が整地土に類似したため、掘方を誤認したと考えられる。P 2 は平面形が 2 基の遺構が重複したような形状で、底面が 2 段の掘り込みであることから、古段階と新段階の主柱穴と判断した。P 1 と同様の理由で、検出時に重複を見落としたと考えられる。P 3 は P 5 掘削後に検出したが、土層観察や掘方の状況から P 5 より新しい遺構であると判断した。柱痕跡と考えられる堆積 (J-J' 2 層) が認められ、掘方底面で柱の当たりの可能性がある小穴を検出した。P 4・P 5 ともに柱痕跡はみられないが、ともに明瞭な掘方をもつ。P 4 からほぼ完形の須恵器焼台 (47) が出土した。カマドは確認できなかった。P 8 がカマドと関連する遺構であれば、北東壁に設置されており、SD13 に削平された可能性がある。

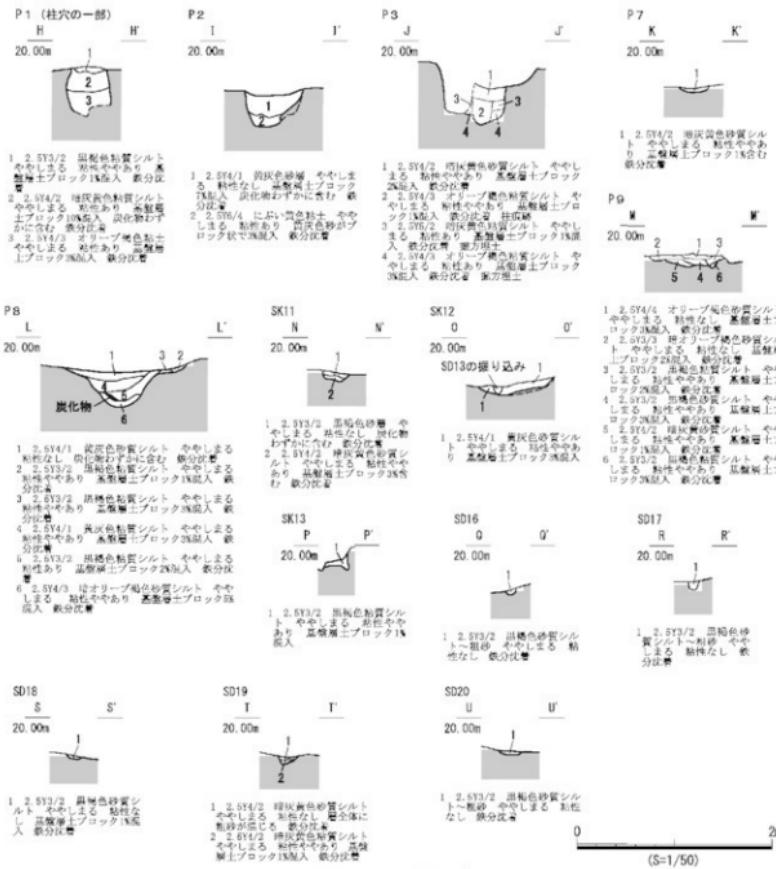
その他の遺構 床面上で検出した遺構の内、SD16～20 はほぼ同じ粗い砂が堆積した浅い溝状の遺構である。いざれも床面遺構より新しく、形状は不定形である。SD16～18 は SD13 の底面にもあたることや、人為的な堆積とは考えられないことから、床面遺構とはしなかった。P 7 は浅い窪み状の土坑であるが、



第39図 SI 1 遺構図①

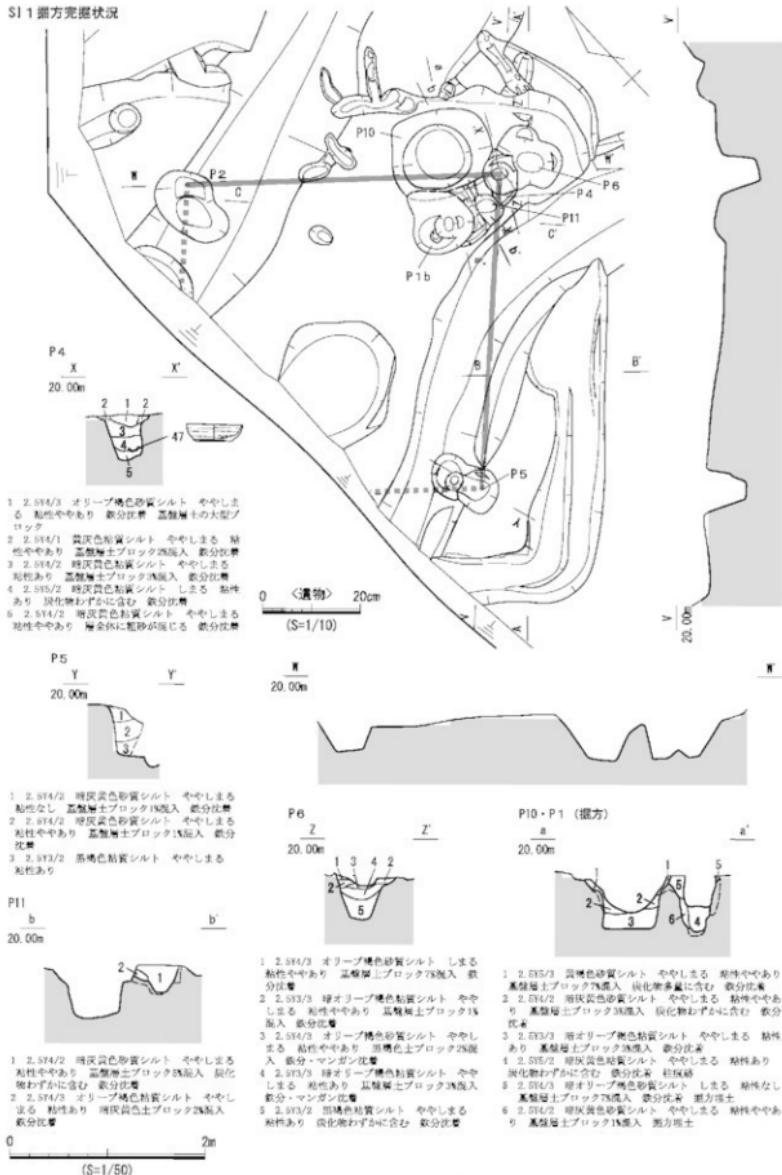
【图39A~C 土层注记】

- | 品種名 | 原産地 | 特徴 | 栽培方法 | 収量 | 特徴 |
|-------------------------|-------|--------|---------------|---------------|-----------|
| 2. 5/3/2 黒鳴門青色シャソリ | ややしまる | 粘性あり | 全量灌水栽培が望ましい | 化粧水栽培に含む | 鉄分沈着 |
| 2. 5/3/2 黒鳴門青色シャソリ | ややしまる | 粘性あり | 高麗薯芋ブロック25kg入 | 分根収穫 | |
| 3. 2/3/1 黒鳴門青色シャソリ | ややしまる | 粘性あり | 高麗薯芋ブロック35kg入 | 分根収穫 | |
| 4. 2/3/2 黒鳴門青色シャソリ | しまる | 粘性ややあり | 化粧水栽培に含む | 高麗薯芋ブロック55kg入 | 鉄分収穫 年間耕作 |
| 5. 2/3/1 黒鳴門青色シャソリ | ややしまる | 粘性あり | 高麗薯芋ブロック25kg入 | 分根収穫 | 整根土埋土 |
| 5. 2/3/5 黒鳴門青色シャソリ | ややしまる | 粘性なし | 高麗薯芋ブロック35kg入 | 分根収穫 | |
| 5. 2/3/5 黒鳴門青色シャソリ | ややしまる | 粘性なし | 高麗薯芋ブロック55kg入 | 分根収穫 | 整根土埋土 |
| 5. 5/20/上 | | | | | |
| 6. 5/17/堆土 | | | | | |
| 9. 2/3/1 深根油質シャソリ | ややしまる | 粘性あり | 高麗薯芋ブロック25kg入 | 分根収穫 | 整根3頭土 |
| 9. 2/3/1 深根油質シャソリ | ややしまる | 粘性あり | 高麗薯芋ブロック35kg入 | 分根収穫 | 整根3頭土 |
| 11. 5/4/3 ブラック油質シャソリ | ややしまる | 粘性なし | 高麗薯芋ブロック55kg入 | 分根収穫 | 整根3頭土 |
| 12. 5/1/堆土 | | | | | |
| 13. 2/3/5 時候適応シャソリ | しまる | 粘性ややあり | 高麗薯芋ブロック25kg入 | 分根収穫 | 油質土 |
| 13. 2/3/5 オリーブの葉の青色シャソリ | しまる | 粘性ややあり | 高麗薯芋ブロック35kg入 | 分根収穫 | 油質土 |
| 13. 2/3/5 オリーブの葉の青色シャソリ | しまる | 粘性ややあり | 高麗薯芋ブロック55kg入 | 分根収穫 | 油質土 |



第40図 SI 1遺構図②

SI 1 頂面完掘状況



第41図 SI 1 造構図③

位置的に壁際溝の痕跡である可能性がある。SK12は床面上で検出した遺構であるが、SD13の底面であるため、床面遺構としなかった。浅い窪み状の土坑である。P 8は上面の形状が不定形であるが、中段以下が円形となる。何度も掘り直したような堆積がみられ5層と6層の間には炭化物が堆積していた。なお、整地土除去後にP 8と同じ位置でP10を検出しており、P 8の本来の掘方を整地土上面の検出時に見落とした可能性も考えられる。P 9は、明確な掘方が確認できず、整地土を遺構と誤認して掘削したのかもしれない。この他、整地土下で検出した遺構にはP11があり、これらの遺構はP 4周辺に集中するが、掘削目的は不明である。P12は、前述のテラス部分で検出した溝状の遺構であるが、掘方壁面に沿っておらず、性格不明である。

遺物出土状況 埋土中から出土した遺物はほとんど土師器であり、わずかに須恵器が混じる。遺構ではP 8からの出土が多い。P 4の須恵器焼台(47)は、5層(第41図)上面で、口縁部を上に向けて出土した。

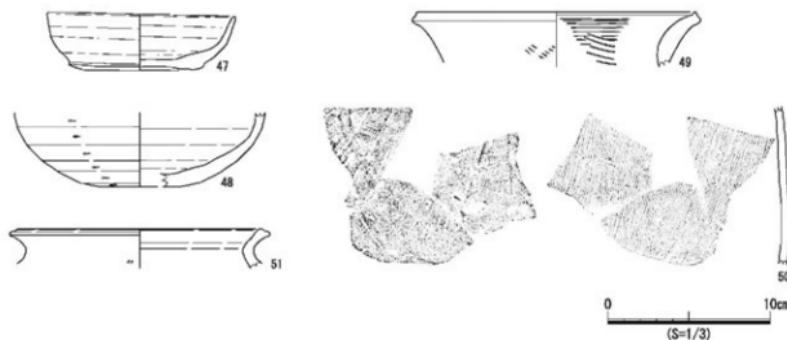
出土遺物 SI 1及びその付属遺構からは、縄文土器、須恵器、土師器が出土した。この内、6点を図示した。

47はP 4で出土した須恵器の焼台である。壺身A類と同様な形状をとるが、天井部にあたる部分に面がつくられる。壺・瓶類を焼成する際に焼台として使用されたもので、現段階で美濃須衛古窯跡群最古とされる藤原6号窯に類例がある¹⁰。窯道具が通常流通することは考えにくいため、近隣に須恵器焼成窯が存在した可能性がある。48はP 8から出土した壺又は瓶の底部である。外面が回転ヘラケヅリによって調整される。49～51は土師器の甕で、50はP 10からも出土した。49・50は甕A類と考えられる。49は口縁端部の面取りと摘み上げ、頸部の2段ナデが認められ、口径から丸底の小型甕と考えられる。51は宇田型甕の口縁部と思われるが、全体的に摩耗しているため調整は不明である。

所属時期 P 4で出土した47から、古段階はIV b期に位置付けられる。新段階は、SD12・SD13がIV c～IV d期の遺構であることから、古段階と大きな時期差はないと推定される。

SI 2・SK 7(第43図)

検出状況 AN 4からAN 5グリッドで検出した。発掘区北壁にかかっており、また、SD13に南側を削平

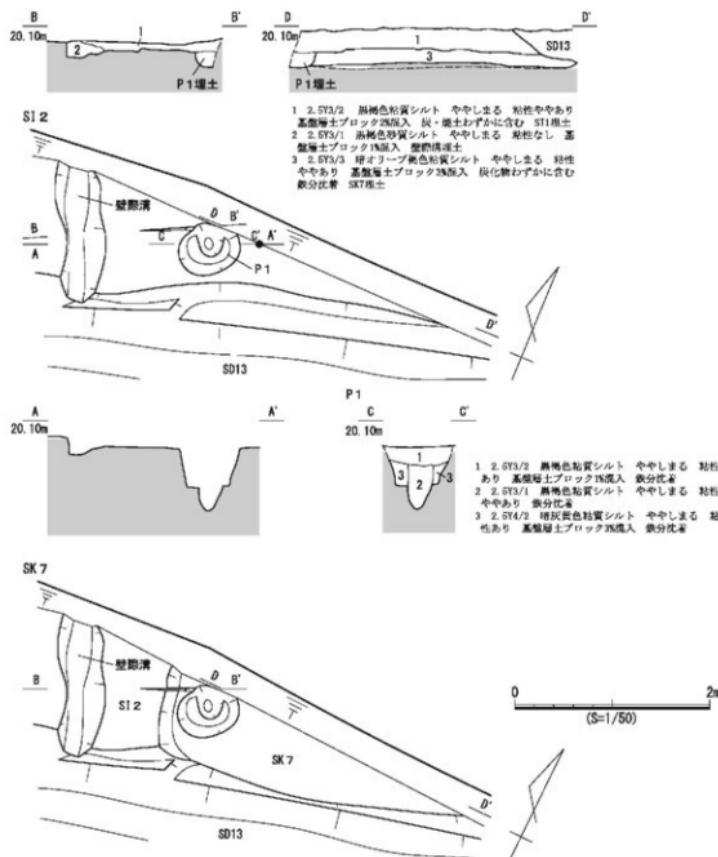


第42図 SI 1出土遺物

されているため全容は不明であるが、壁際構の状況から方形の平面形をもつと考えられる。なお、SD13の南側には続かないことから、SD13の範囲内に掘方の南西隅があると考えられる。本遺構の床面でSK7を検出した。SK7は底面が平らな竪穴状の土坑であり、SI2の掘方の可能性があるためここに掲載したが、他の竪穴建物のようにSI2と上端が一致しないため、分類上土坑として別の遺構番号を付した。SI2の長軸方位はN-70°-Eで、後述するSI7とほぼ同じである。

堆積状況 SI2・SK7とともに、埋土中に炭化物を含み、V層のブロックが混じる。SI2は壁際構の埋土が掘方壁際の三角堆積と一体になっており、廃絶後に掘方の壁面側から堆積が進んだと思われる。

床面・掘方 発掘区北壁の土層観察から、SI2は検出面より0.1mほど上まで掘方が残存していたと



第43図 SI2 及びSK7 遺構図

考えられる（第43図1層）。SI 2・SK 7とともに整地土や床面の硬化は確認できなかった。

付属遺構 SI 2 の壁際溝は、幅広で窪穴の内側の立ち上がりが緩い特徴がある。

主柱穴と考えられるP 1はSK 7の床面で検出したが、土層観察によってSI 2に伴う遺構であることを確認した。P 1の掘方は柱痕跡にあたる部分が一段深くなっていた。カマドは確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土師器が出土したのみで、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 SI 2・SK 7共にSD13より古いため、IV d期以前の遺構と考えられる。

SI 3（第44～46図）

検出状況 A0 6からAP 7グリッドで検出した。本遺構を検出した区画は、近年の土地改良によってV層まで削平されており、壁際溝や主柱穴以外は削平されていた。埋土が存在しないため、重複するSA 3との先後関係は不明である。壁際溝の形状から、方形の平面形をもつ遺構と考えられ、長軸方位は、N=48° -Wである。

堆積状況 埋土が残存していなかつたため不明である。

床面・掘方 掘方が削平され、残存していなかつた。

付属遺構 壁際溝は、擾乱により分断されているが、遺構の北東から南西にかけて半周する。北及び西部は一部の残存にとどまるが、D-D'で示されるように、北・西側では壁際溝が浅かった可能性がある。

主柱穴（P 1～4）は、壁際溝に囲まれた範囲の四隅で検出した。いずれも明確な掘方をもつが、柱痕跡はみられない。埋土は4基ともほぼ同じで、上層に炭化物がわずかに混じるオリーブ褐色の粘質シルト、下層に均質な黒褐色の粘質シルトの堆積が認められた。

P 5は、上層に焼土を多量に含む土が堆積する土坑である。特に2層（第45図）には多くの焼土ブロックが認められた。焼土の下層は、やや深い土坑状になっていた。付近にカマドが存在した可能性がある。

遺物出土状況 壁際溝で土師器片が、P 5の4層から土師器の甕（52）が出土した。

出土遺物 SI 3の付属遺構から土師器が出土した。この内、1点を図示した。

52は土師器甕の体部であり、胎土からA類と考えられる。外面は縦位のハケ調整、内面は板ナデによつて調整される。

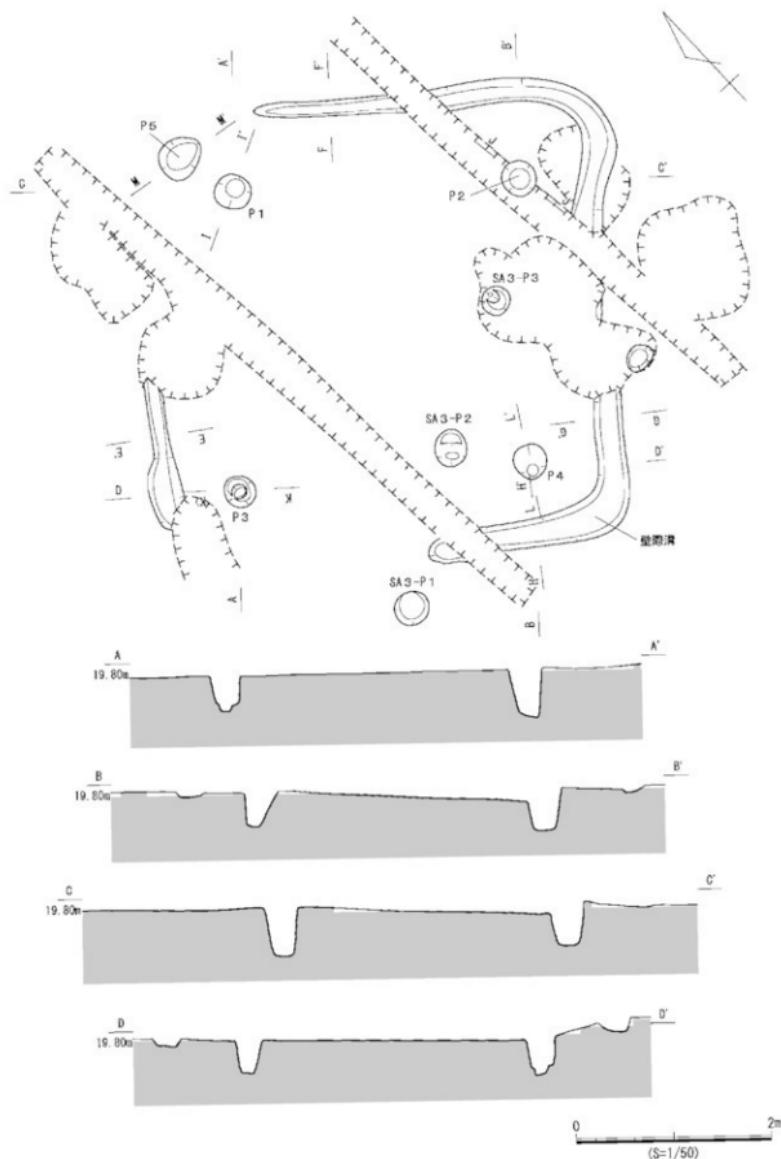
所属時期 時期は不明であるが、掘方の長軸方位や規模がSI 1に類似することから、同じIV b期に属する可能性がある。

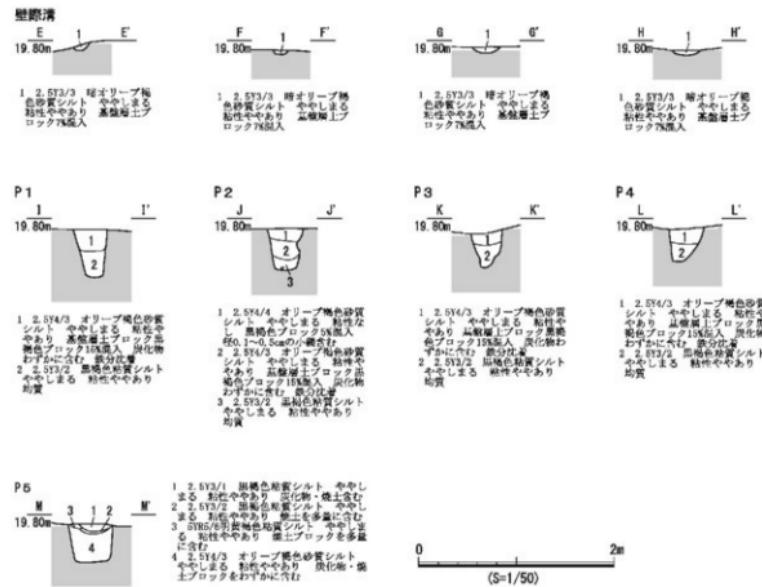
SI 4（第46・47図）

検出状況 A010からAP10で検出した。掘方西部が反転調査となつたため、2回に分けて掘削を行つた。隣接するSI 5やSI 6とは異なり、埋土が残存していた。南東の一部は発掘区外へ続く。明確な柱穴は確認できなかつたが、床面中央で並ぶように窪み状の土坑（P 1・P 2）を検出したため、これを柱穴と想定し、窪穴建物とした。今回検出した窪穴建物の中で、唯一溝状遺構（SD28）より新しいという特徴がある。平面形は方形で、長軸方位は、N=16° -Wである。

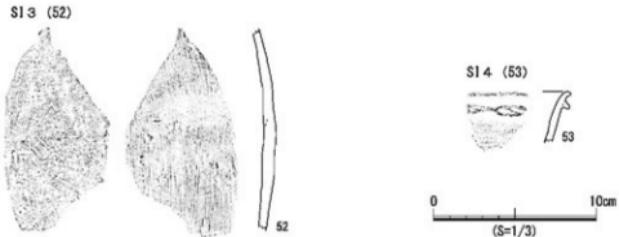
堆積状況 埋土はオリーブ褐色砂質シルトで、基盤層との区別は容易であった。整地土は基盤であるIV b層に似るが、黒褐色土ブロックが多量に混入していた。

床面・掘方 掘方は浅く、0.1m程度で床面に達した。床面は硬化した状況が認められなかつた。掘方は、底面中央部に掘り残しによる高まりがみられ、整地土によって平坦な床面が造成されていた。壁際溝の





第45図 SI 3 遺構図②

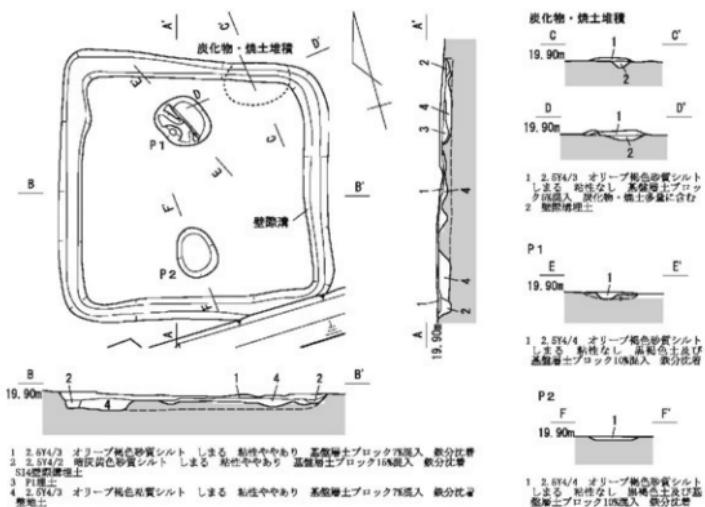


第46図 SI 3・SI 4 出土物

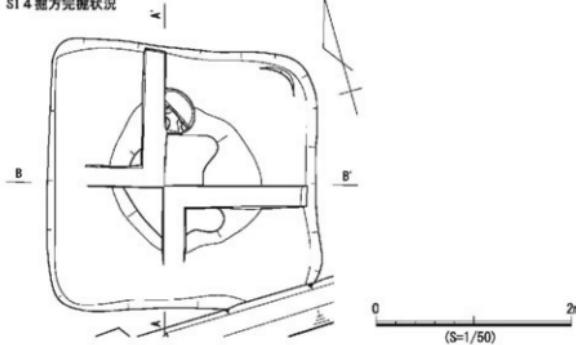
一部は、掘方底面より深くなることから、整地後に掘り込まれたと思われる。

付属遺構 壁際溝は、掘方の壁に沿って全周していた。一辺 3 m に満たない小型の竪穴建物にも関わらず、幅約 0.2 m の明瞭な掘り込みがみられた。

カマドは確認できなかったが、掘方北壁の東寄りの床面から壁際溝埋土上面にかけて、炭化物と焼土の堆積を検出した。炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、樹種は広葉樹で 6 世紀末から 8 世紀後半の曆年代が得られた（第 5 章第 3 節）。



SI 4 挖方完掘状況



第47図 SI 4 遺構図

P 1・P 2は黒褐色土ブロックが特に集中する範囲を遺構として掘削し、明確な掘り込みは確認できなかったが、位置的に柱穴になる可能性があると判断した。

遺物出土状況 特徴的な出土状況はみられなかった。

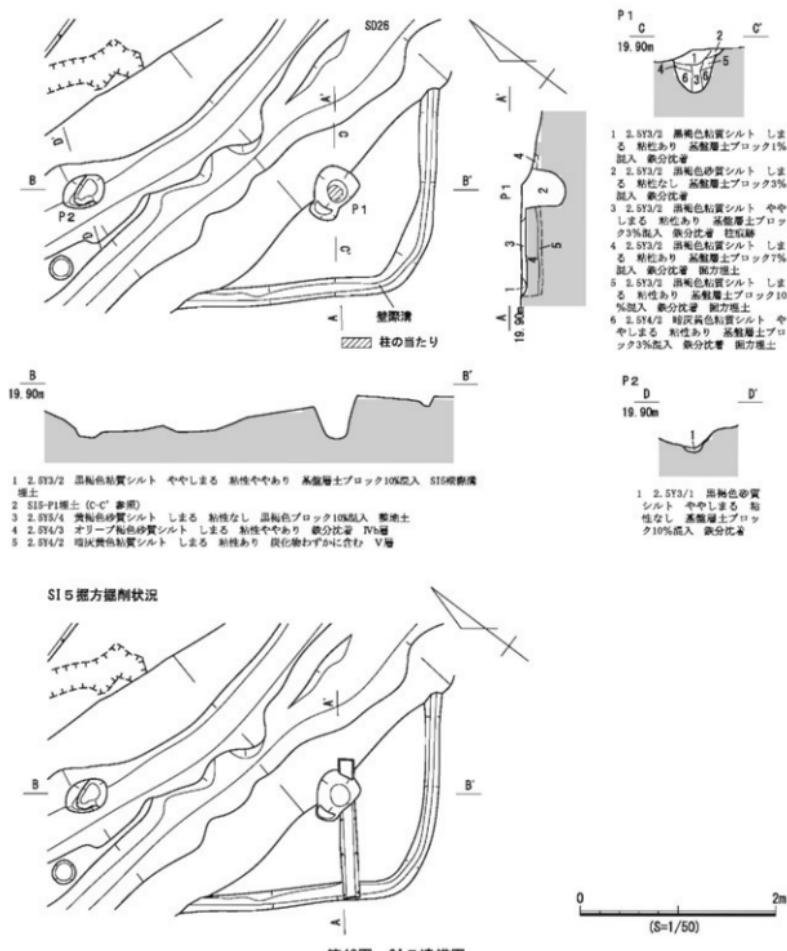
出土遺物 SI 4 及びその付属遺構からは縄文土器、須恵器、土師器が出土している。この内 1 点を図示した。

53は第II群A 2 i類である。口縁端部からやや離れた位置の外面に細い刻目突帯を施し、突帯の断面は三角形で、二枚貝による連続押圧が認められる。

所属時期 出土した炭化材の年代測定の結果でVI a 期～V b 期の年代が得られていること、SD28 より新しいことから、VI b 期以降に位置付けられる。

SI 5 (第48図)

検出状況 AN10 から A011 グリッドで検出した。削平により埋土が失われており、検出した段階で、壁際構と主柱穴 (P 1) が確認できた。遺構の大半は SD26 の掘削に伴って失われており、南隅のみ残存



第48図 SI 5 遺構図

していた。壁際溝の状況から、SD26 の北側にも遺構が続くはずであるが、SD30 の掘削や削平の影響で検出することができなかった。本来は方形の平面形をもつ遺構と考えられ、長軸方位は N-51° -E で、隣接する SI 6 とほぼ一致する。

堆積状況 埋土は削平により残存していなかった。掘方の整地土は、基盤層であるIV b 層に黒褐色土のブロックが多量に混じるもので、深さは 0.04 m 程度であった。

床面・掘方 削平により、床面は確認できなかった。掘方が壁際溝の底面より浅いため、整地後に壁際溝を掘削したと考えられる。

付属遺構 壁際溝は、検出した範囲で切れ目は認められなかった。

主柱穴 は、掘方内で検出した P 1 と、P 1 と掘方の隅を基準とした同心円上に配される P 2 とした。両者とも SD26 の掘削によって削平されており、P 2 は底面のみ検出した。P 1 は比較的遺存状態が良く、柱痕跡や柱の当たりを確認した。

遺物出土状況 掘方の整地土内から、縄文土器と土師器が出土した。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 SD26 より古いため、IV c 期以前の遺構と考えられる。

SI 6 (第 49 ~ 51 図)

検出状況 A011 から AP12 グリッドで検出した。SI 5 と同様に上面を削平されており、検出した段階で壁際溝や主柱穴 (P 1・2) を確認した。遺構の中央が SD30 によって削平されていた。平面形は 1 辺約 6 m の方形で、長軸方位は N-47° -E で SI 5 とほぼ一致する。

堆積状況 埋土は削平により残存していなかった。掘方の整地土は基盤層であるIV b 層に黒褐色土のブロックが多量に混じるもので、深いところで 0.08 m の堆積がみられた。

床面・掘方 削平により、床面は確認できなかった。掘方が壁際溝の底面より浅いため、整地後に壁際溝を掘削したと考えられる。土層断面から、掘方の底面は凹凸が激しかったと推定される。また A-A' の土層断面では、北東の掘方底面が 0.15 m 程度低く、北東に下がる地形と同様な傾斜が掘方底面についていた可能性がある。

付属遺構 壁際溝は掘方の西壁と北壁際で検出した。この内、掘方西壁では、掘方のやや内側で検出した。東辺で検出した P 3 は掘方東壁沿いに検出したが、P 2 の位置に近いため壁際溝ではなく、整地土の一部である可能性がある。SD30 以東は A-A' の土層断面図でも明らかなように、削平により整地土のみになったと推定される。

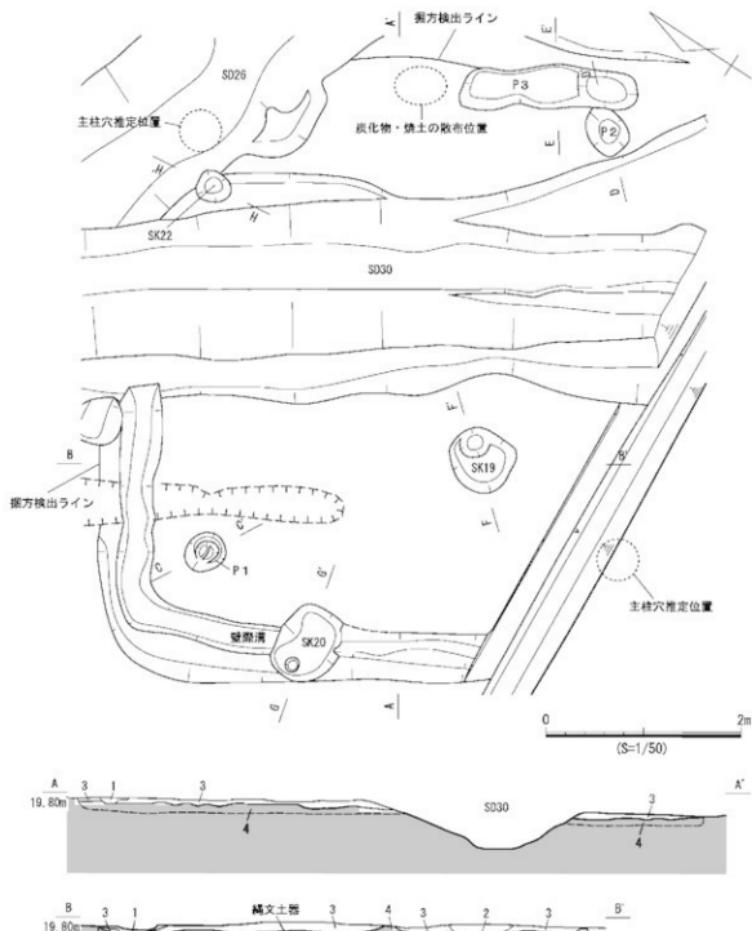
主柱穴 は、掘方北西隅で検出した P 1 と、P 1 の対角線上に位置する P 2 とした。P 1 は、土層観察によつて柱痕跡を確認した。P 2 は、柱痕跡が認められないが、明瞭な掘方をもつ。北の主柱穴は、SD26 に削平され、南の主柱穴は発掘区外に位置する可能性が高い。カマドは確認できなかつたが、P 3 の北側で植物根痕中に炭や焼土が含まれた場所があり、この部分にカマドが存在した可能性がある。

その他の関連遺構 検出面上で SK19・20 を検出した。掘方整地土や壁際溝を切っていることから、SI 6 より新しい遺構と考えられる。

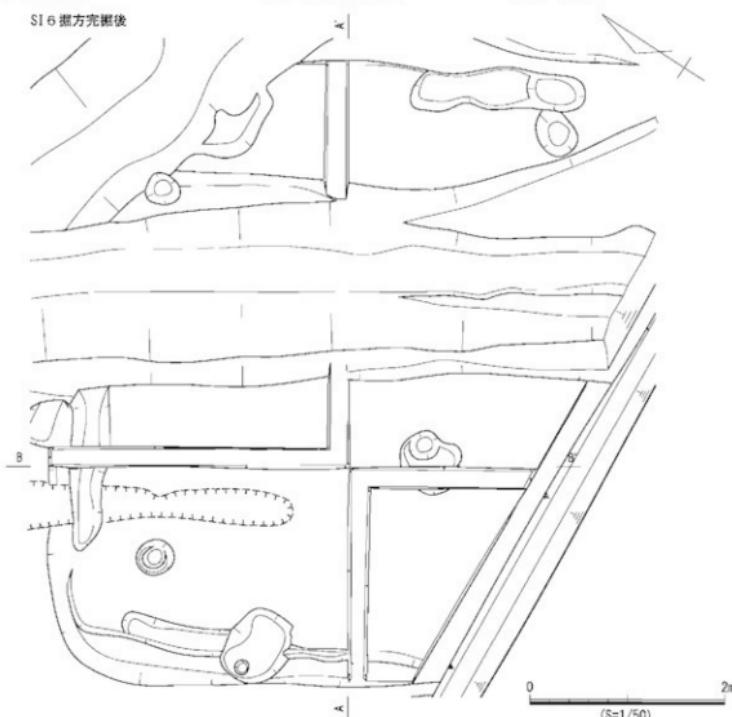
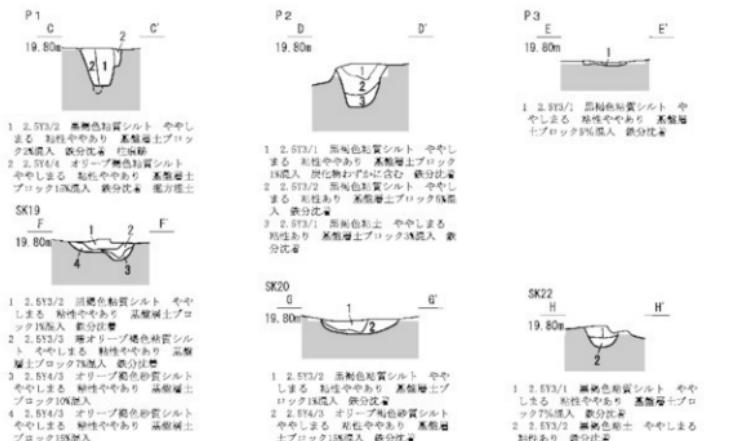
遺物出土状況 付属遺構や掘方埋土で縄文土器が多く出土したが、土師器や須恵器も認められる。

出土遺物 SI 6 及びその付属遺構からは、縄文土器、須恵器、土師器が出土した。この内 2 点を図示した。

54・55 は縄文土器である。54 は第 II 群 A-2 j 類とした。口縁端部からやや離れた位置の外面に刻目



第49図 SI 6遺構図①



第50図 SI 6 遺構図②

突帯を施す。突帯の断面は扁平で、二枚貝による連続押圧が認められる。55は浅鉢で第II群C 5類とした。体部の屈曲部から口縁部にかけての幅が短く、口縁部内面には口縁端部の貼り付けによって沈線状の溝みが生じる。内外面はミガキ調整を施す。

所属時期 SD26より古いため、IVc期以前の遺構と考えられる。

SI 7 (第52~55図)

検出状況 A018からA019グリッドで検出した。南壁の一部が発掘区外へ続く。今回検出した竪穴建物の中では比較的埋土の遺存状態が良好であった。SB 1-P 5と重複し、SB 1より古い遺構と考えられる。平面形は南北方向が若干短い長方形で、長軸方位はN-70°-Eである。

堆積状況 暗オリーブ褐色の粘質シルトが堆積しており、IVb層との区別は容易であった。掘方の整地土は比較的厚く入れられており、IVb層に多量の黒褐色土ブロックが混入する土が充填されていた。

床面・掘方 床面(整地土上面)はしまりがなく、硬化はみられない。掘方は、底面中央部に掘り残しによる高まりがみられ、整地土によって平坦な床面が造成されていた。なお、掘方の南東隅が2段になっていたが、発掘区壁際で検出範囲が狭いため詳細は不明である。

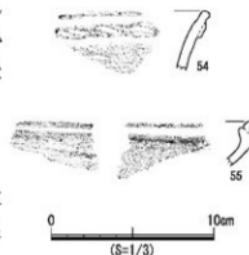
付属遺構 壁際溝は、掘方の北東隅から西壁にかけて検出した。カマドが設置された東壁には廻らない。SI 6等の壁際溝と比較すると、若干幅が狭い印象を受ける。また壁際溝の底面が掘方底面まで達しておらず、整地土内におさまることから、整地後に壁際溝を掘削したと考えられる。

主柱穴は、床面と掘方底面で検出作業を行ったが確認することはできなかった。床面上に平坦面を上に向けた河原石が2箇所に置かれており、これらが同心円上の位置にあたることから、礎石建ちの柱で、1箇所の河原石が失われ、もう1箇所が発掘区外に存在する可能性が考えられる。県内の礎石建ちの竪穴建物の類例は、桜本遺跡(国府町教育委員会1998)などにあるが、時期的に六里遺跡より新しく、礎石自体も大型の河原石が使われている点で異なる。しかし、上屋構造を想定できる柱穴が存在しないため、可能性を指摘しておきたい。なお、SI 7の北西隅に隣接して小穴(SI 7-P 1・P 2)は、土層や掘方の形状からは柱穴と断定できなかった。

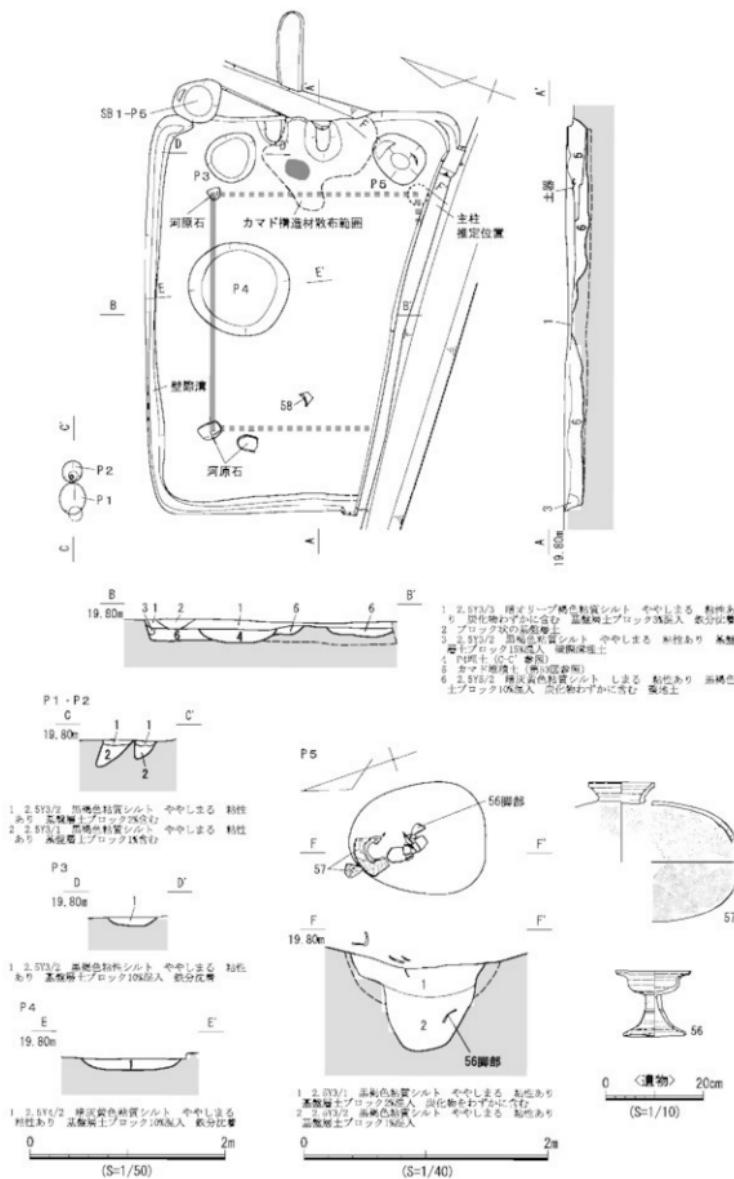
カマドは、壁際溝がない東壁に接して設置されていた。検出段階では、炭・焼土混じりの堆積土として検出した。これを除去したところ、燃焼部と考えられる被熱範囲とその周囲の変色、袖部の一部と考えられる粘土の盛り上がりを検出した。カマドの下には黒っぽい焼土混じりの土が堆積しており、これを完掘したところ、浅い土坑状となった。この土坑は整地土に掘り込まれており、整地後にカマドが築かれたと考えられる。また、カマドの東側に掘方外へ延びる煙道部を検出した。沿道部の埋土には炭化物や焼土が混じり、底部や壁面に被熱痕は認められなかった。

その他、カマドの両脇で、土坑を検出した(P 3・P 5)。共に、カマドの下部土坑より新しく、カマド構築後に設置されたと思われる。共に貯蔵穴と考えられる。P 4は床面中央のやや北寄りで検出した土坑であるが、性格は不明である。

遺物出土状況 須恵器の横瓶である58は床面上から出土した。また、壁際溝内から磨石・叩石類の石器(62)が出土しているが、その形態から縄文時代に属する遺物の可能性がある。カマドの被熱痕上

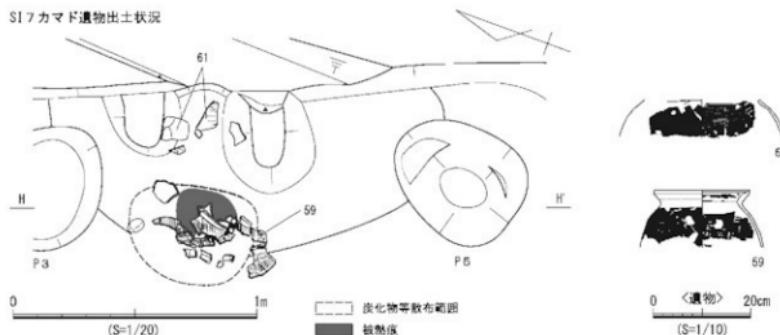


第51図 SI 6出土遺物

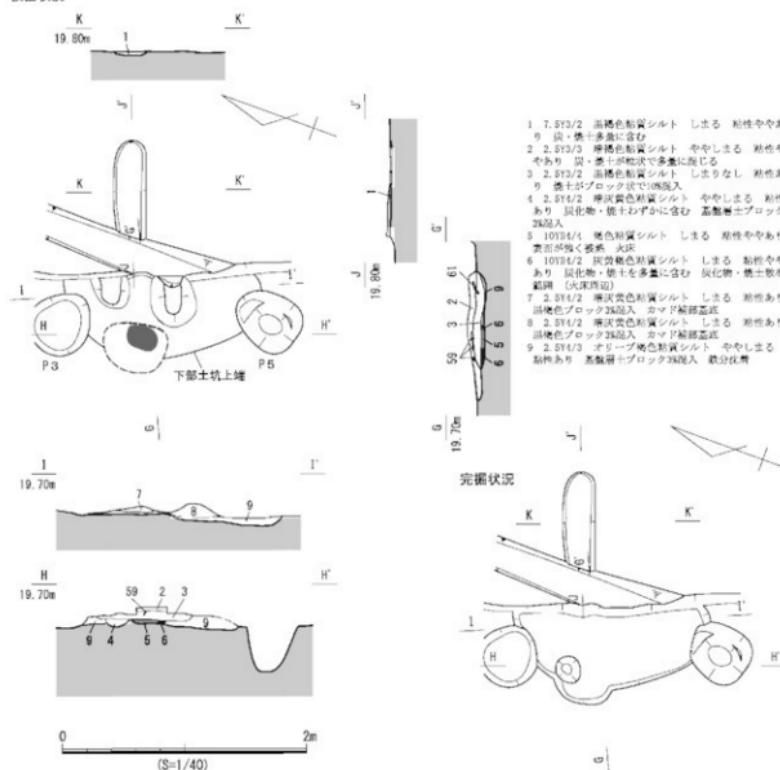


第52図 SI7 遺構図①

SI 7 カマド遺物出土状況

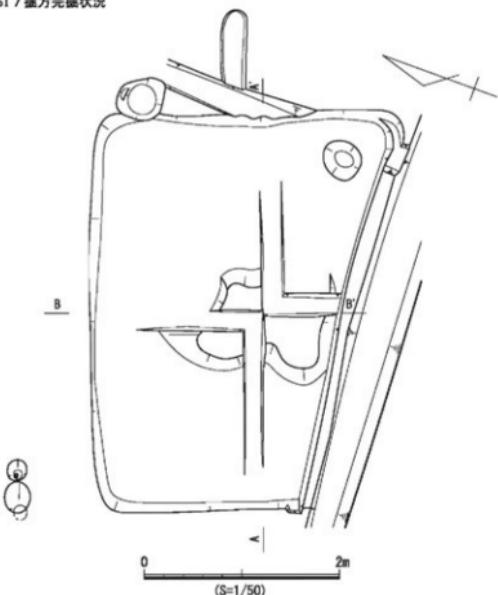


検出状況



第53図 SI 7 遺構図②

SI 7 振方完掘状況



第54図 SI 7 遺構図③

出土遺物 SI 7 及びその付属遺構から、縄文土器、須恵器、土師器、石器が出土した。この内、8点を図示した。

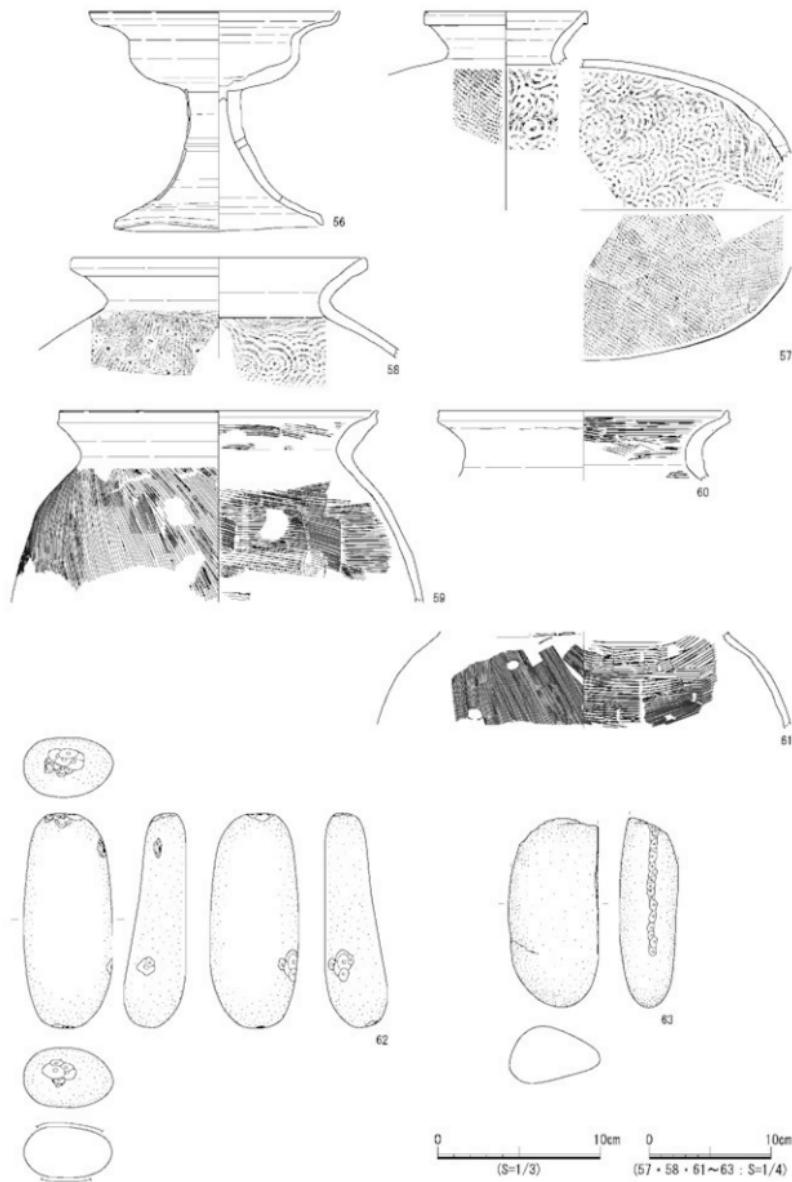
56は須恵器の高坏である。口縁部が受口状になる独特な器形をもち、全体的に非常に薄手で、焼成時の焼き彫れが頗著に残る。蘇原6号窯では身の部分のみ出土していたが、今回の発見によって高坏であったことが確認された²⁾。ただし、胎土などから美濃須衛窯産ではないと考えられる。57・58は須恵器の横瓶と考えられる。外面には細かいタタキ目、内面には同心円状の當て具痕が明瞭に残る。成形時に体部を粘土板で塞いだ箇所からタタキ目の向きが変化しているが、カキ目はみられない。

59～61は土師器の壺A類である。59・60の口縁端部は面取り・摘み上げがみられ、頸部を横ナデする。59・61は体部外表面に斜位、口縁部から体部の内面に横位の細かいハケ調整を施す。59は内外面とも同じハケ状工具が用いられるが、61は異なるハケが用いられる。

62・63は石器の磨石・叩石類である。62は砂岩の長楕円礫の短軸両端が強く敲打される他、扁平な2面に磨面、側縁にも複数の敲打痕が残る。複数の用途で同じ礫を使用したと考えられる。63は、砂岩の長楕円礫側縁に一列に敲打痕が残る。62・63とともに、第3調査面で出土した磨石・叩石類と類似性が高く、縄文時代晩期の石器と考えられる。

所属時期 P 5 から出土した 56 の時期から、IV b 期に位置付けられる。

面から出土した土師器の壺 (59) は外面を上に向けて平面的に置かれた状態で検出した。G-G' の土層断面でみられるように被熱痕 (5・6層) との間に3層を間に挟んでおり、また、体部下半から底部に掛けての破片が全くみられないため、カマドの廃絶に伴い儀礼的に並べられた可能性がある。袖部残存部の間からも 50 とほぼ同じ高さで土師器の壺 (61) が出土したが、59とは別個体である。P 5 からは、土師器や須恵器がまとまって出土した。遺物は 1 層 (F-F') に集中しており、横瓶 (57) の一部や特殊な形態の高坏 (56) など特徴的な遺物が含まれる。ただし、完形になる個体はみられなかった。なお、56は P 5 の 2 層から出土した破片とも接合した。



第55図 SI 7 出土遺物

2 挖立柱建物・柱穴列

SB 1・SB 2・SA 4（第56～58図）

検出状況 AN19からA020で検出した。SB 3やSI 7と隣接し、発掘区西部の竪穴建物群とは離れた一群を形成する。検出当初は、梁行2間、桁行4間の總柱建物と認識していたが、北から数えて3列目以南の柱穴に揃って重複がみられることから配置を検討し、柱間が2間×2間の2棟の總柱建物と結論付けた。

SB 1はP 1～P10の柱穴で構成されており、ほぼ等間隔に配置される。中央のP 5・P 6には重複が認められる。南側のP 8～P10はSB 2の北辺のP 1～P 3と重複しており、SB 2より新しいことを示す。また、P 4がSI 7と重複しており、これより新しい。東西方向が2.80m、南北方向が2.87mで僅かに南北方向が長い。長軸方位はN-37°-Wである。

SB 2はSB 1の南側に位置する。P 1～P 9の柱穴で構成されており、東西方向の柱間が僅かに長い。P 8とP 9は重複が認められる。また、南西隅の柱穴は発掘区外に位置すると考えられる。北東隅のP 3はSB 1のP10を含む2基の柱穴と重複しており、さらに南側のP 6・P 8にも同様な重複が認められることから、この柱穴列をSA 4とした。重複はSB 2が最も古く、次いでSA 4、SB 1の順となる。SB 2の規模は、東西方向が2.97m、南北方向が2.80mで東西方向が長い。長軸方位はN-53°-Eであり、これはSB 1と同じ軸方位である。

SA 4は柱間が3基の柱穴で構成されるが、P 2の南側に別の掘り込みが認められる（P 4）。長軸方位はN-37°-WでSB 1・SB 2と共に、柱間がSB 2の東西方向とほぼ同じであることから、両建物との関係が考えられるが、対応する柱穴が確認できないため関連は不明である。

堆積状況 遺構の重複で確認できないものを除き、ほとんどの柱穴で柱痕跡を確認した。

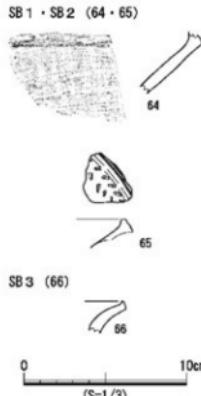
掘方 いずれもIV b層を掘り込む。柱穴の平面形は円形で、直径もほぼそろっているが、深さには若干ばらつきがある。柱の位置によってその深さに規則性はみられない。SB 1のP 2・P 4・P 7に鉄分の沈着によって変色した柱の当たりがみられる他、柱部分が一段深くなる掘方も認められる。これらの痕跡から、柱の直径は0.15m前後と推定される。

遺物出土状況 SB 1のP 8・P 9及びSB 2のP 1・P 2は、遺構の掘削後に2つの遺構であったことが判明したため、64・65（第56図）はどちらの遺構から出土したか記録を残すことができなかった。

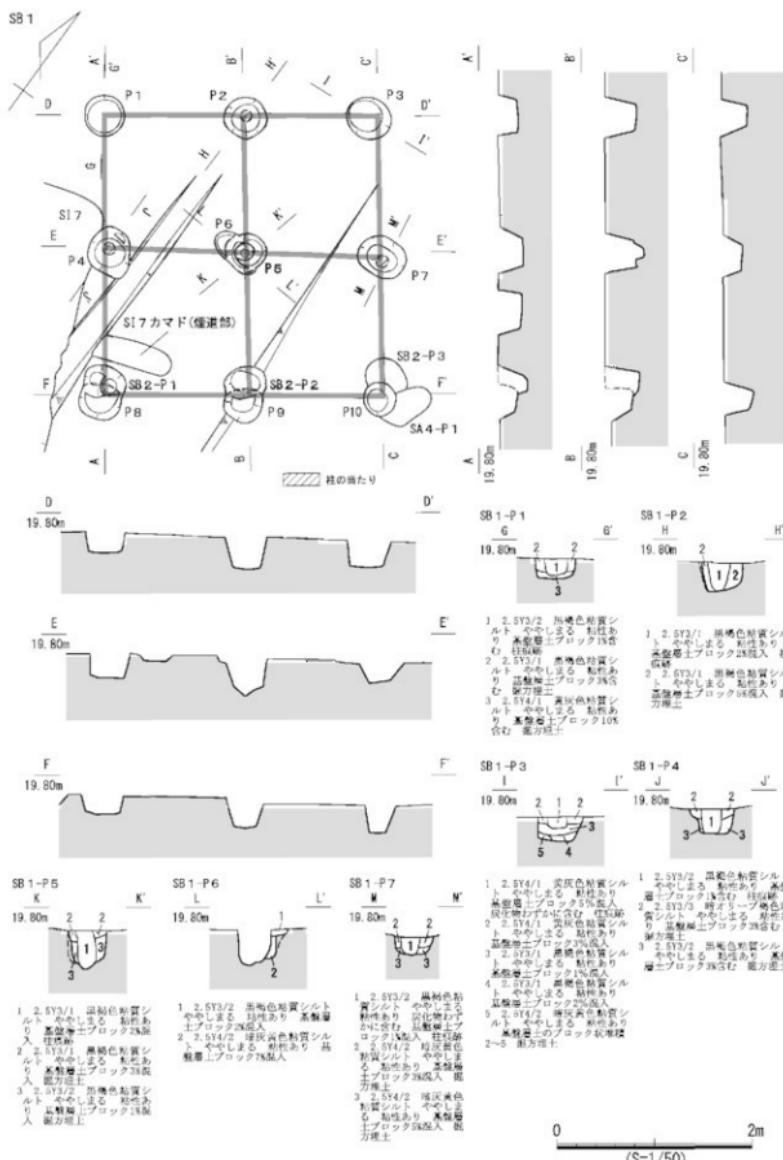
出土遺物 SB 1・SB 2及びSA 4の柱穴から、縄文土器と土師器が出土した。この内2点を図示した。

64は縄文土器で第II群C類とした。体部が屈曲する器形で、外面は横位のケズリ調整、内面にミガキ調整を施す。65は弥生時代末から古墳時代初頭の加飾口縁壺と考えられる。口縁内面にハの字状の連続刻みを施す。口縁端部には回線の痕跡が残る。

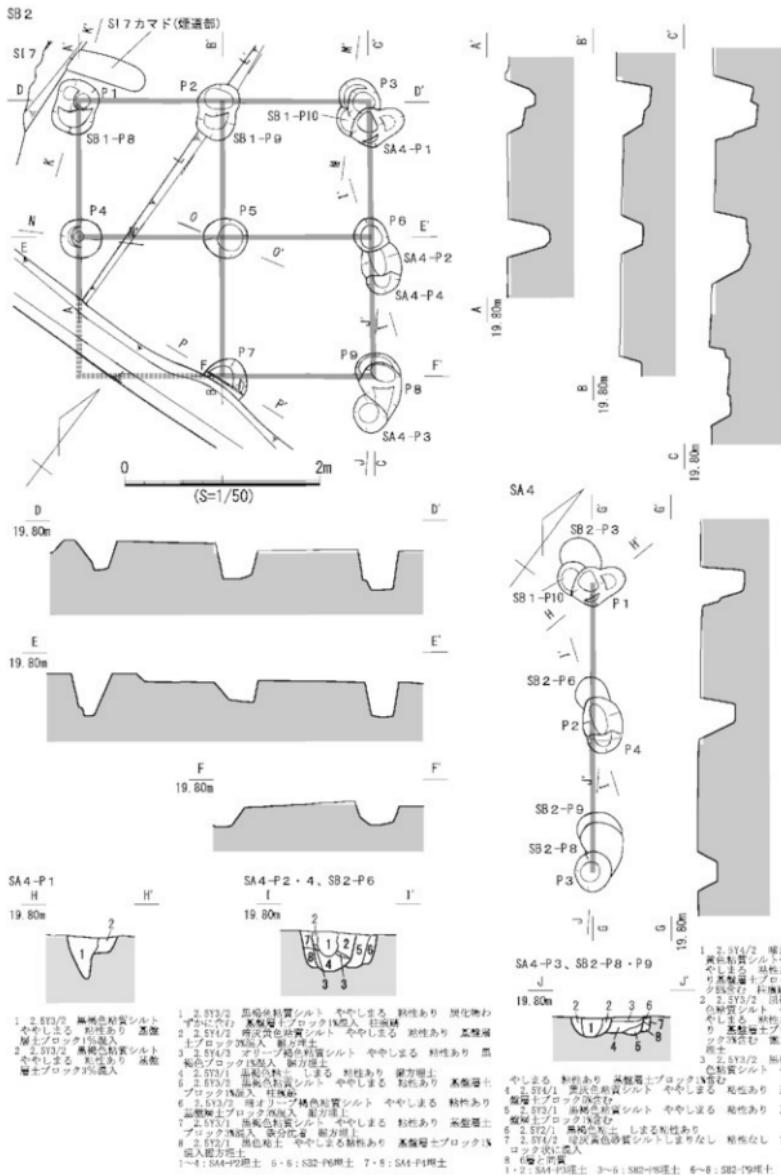
所属時期 SB 1はSI 7より新しく、IV b期以降に位置付けられる。SB 2はSB 1より古いが、SI 7の上屋構造との関係で同時に存在したとは考えにくく、SB 1と規格がほぼ一致する類似性から、SI 7→SB 2→SB 1の変遷を考えたい。なお、SA 4は、柱穴の重複からSB 1とSB 2の間に時期に設置されたと考えられる。



第56図 SB 1～SB 3出土遺物

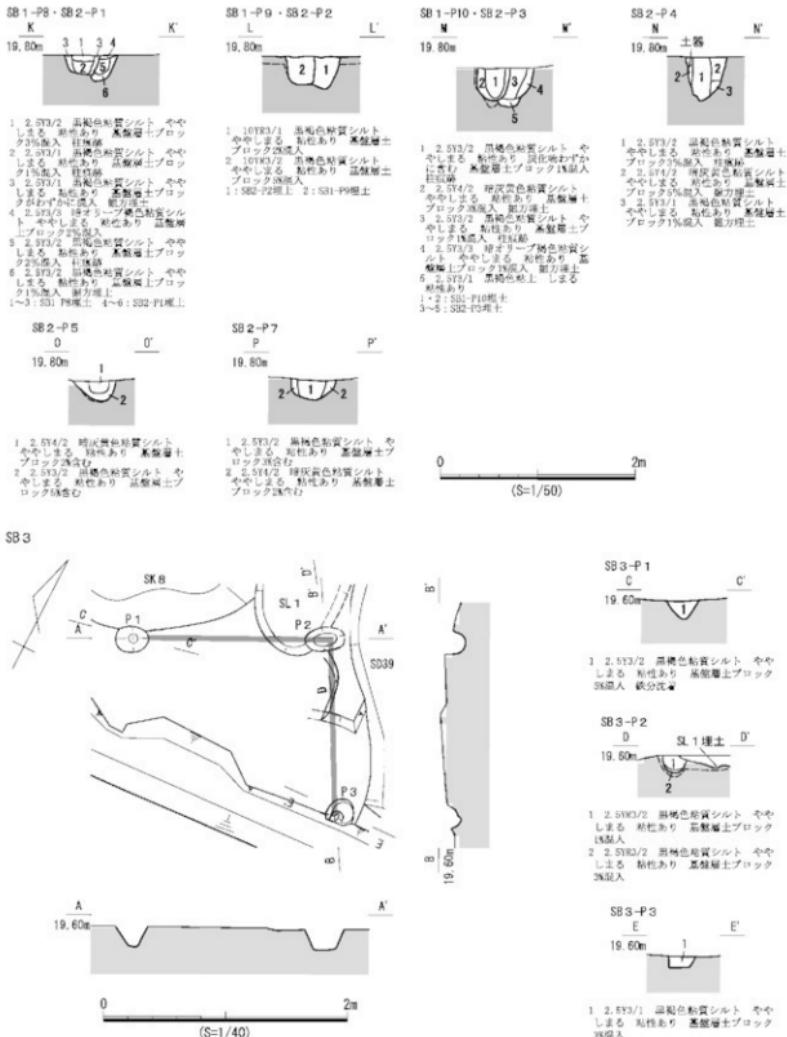


第57図 SB 1～SB 3・SA 4 清掃図①



第58図 SB 1 ~ SB 3 · SA 4 遺構図②

SB 1 及び SB 2 柱穴土層断面図



第59図 SB 1 ~ SB 3・SA 4 遺構図③

SB 3 (第 56・59 図)

検出状況 A020 から B01 グリッドで検出した。3基 (P 1 ~ P 3) が約 1.3 m の等距離で直角に配置される。柱間は SB 1・2 よりわずかに短い。SB 1・SB 2 に隣接し、柱間が類似することから掘立柱建物と判断した。長軸方位は N-63° -E であり隣接する SI 7 の長軸方位に近い。複数の遺構と重複するが、いずれの遺構よりも古い。

堆積状況 ほぼ単層で、柱痕跡はみられない。埋土には IV b 層のブロックが多く含まれる。

掘方 いずれも IV b 層を掘り込む。SB 1 の柱穴と比較すると掘方の規模が小さい。

遺物出土状況 特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 SB 3 を構成する柱穴からは、土師器が出土した。この内 1 点を図示した。

66 は土師器の甕 A 類である。口縁端部の面取りと摘み上げが認められる。

所属時期 周辺の遺構の様相や長軸方位の類似、位置関係から、SI 7 と同じ IV b 期に属する可能性がある。

SA 1 (第 60 図)

検出状況 A0 1 から A0 2 で検出した。柱穴 (P 1 ~ P 3) が、約 1.6 m の等間隔で一列に並んでおり、長軸方位は N-61° -E である。P 2 と P 3 が SD10 と重複し、これより古い。掘立柱建物の可能性もあるが、発掘区内で平行する柱穴の並びは確認できなかった。

堆積状況 それぞれの柱穴に、柱痕跡がみられる。P 2 は底面に粘性の高い黒褐色土が堆積しており、柱を置いた位置と推測される 2 段掘りの底面まで、柱痕跡が達していない特徴が認められる (SA 1 C - C' 3 層)。

掘方 いずれも V 層を掘り込む。柱穴の平面形は円形で、直径・深さともに類似する。すべての柱穴に柱が設置された可能性がある段が存在する。掘方が 2 段になった部分から、柱の直径は 0.2 m 弱と推定される。

遺物出土状況 P 1 と P 2 の埋土中から土師器が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 SD10 より古いため IV c 期以前の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

SA 2 (第 60 図)

検出状況 SA 1 南側の AP 1 ~ 2 グリッドで検出した。柱穴 (P 1 ~ P 3) が約 1.3 m の間隔で一列に並んでおり、長軸方位は N-70° -E である。P 3 は西側が発掘区外であり、また排水溝により上面を削平したことから、一部の検出にとどまった。掘立柱建物の可能性もあるが、発掘区内で平行する柱穴の並びは確認できなかった。

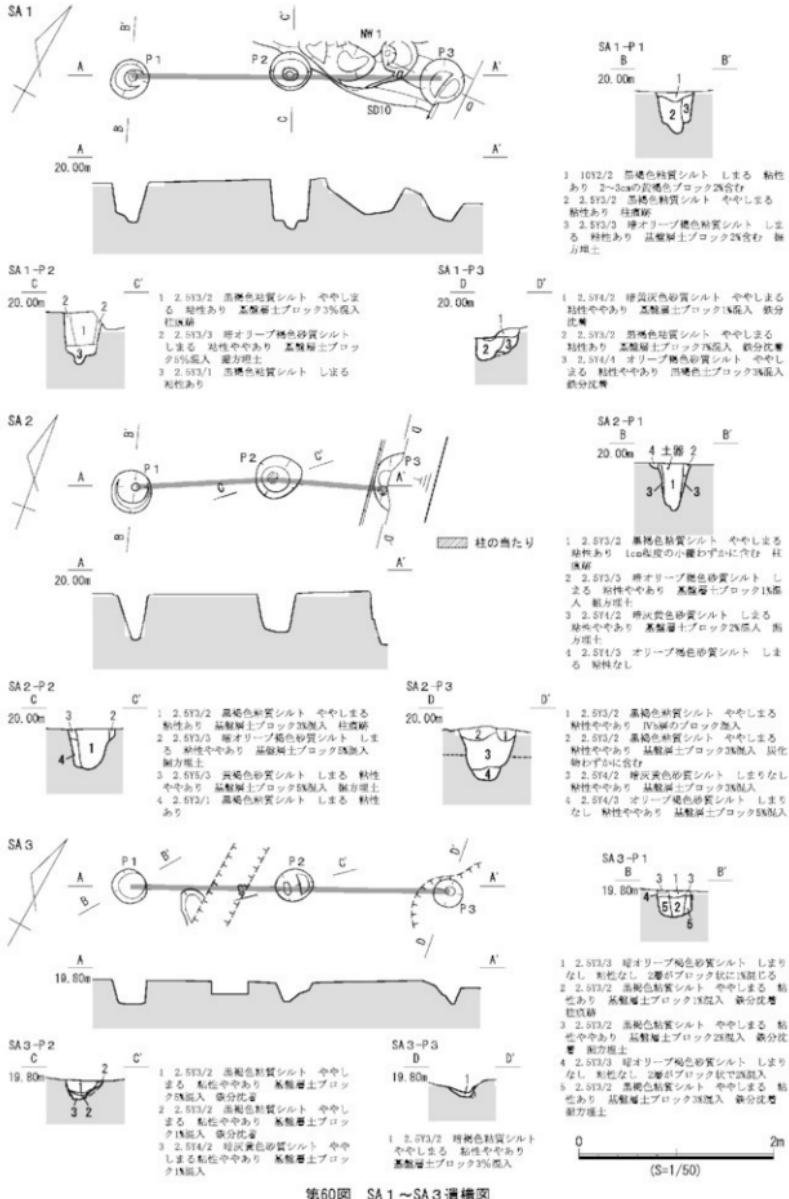
堆積状況 P 1・P 2 に柱痕跡が認められた。P 3 は 2 分の 1 以上が発掘区外であるため、柱痕跡を確認できなかった。

掘方 いずれも V 層を掘り込む。柱穴の平面形は円形で、直径・深さともに類似する。P 2 と P 3 には、鉄分が沈着して変色した柱の当たりが残る。柱痕跡から、柱の直径は 0.2 m 程度と考えられる。

遺物出土状況 P 1 から土師器が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 詳細な時期は不明であるが、検出された位置や長軸方位から、SA 1 と同じ IV c 期以前の遺



第60図 SA 1 ~ SA 3 遺構図

構と考えられる。

SA 3 (第60図)

検出状況 AP 6 から A0 7 グリッドで検出した。柱穴(P 1 ~ P 3)が約 1.6 m の間隔で一列に並んでおり、長軸方位は N-61° -E で、この方位は SA 1 とほぼ同じである。SI 3 と重複するが、SI 3 の埋土が残存していなかったため、その先後関係は確認できなかった。

堆積状況 P 1 のみ柱痕跡を確認した。P 2 + P 3 は、特徴的な堆積は認められなかった。

掘方 いずれも V 層を掘り込み、平面形が円形に近い形状をとる。掘方は浅いが、上面が削平されているため、柱穴掘方の底面に近い部分を検出したと考えられる。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

所属時期 詳細は不明であるが、長軸方位から SA 1 と同じ時期に位置付けられる可能性がある。

3 溝状遺構

SD 9 + SD14 (第61・62図)

検出状況 SD 9 は、AN 1 から A0 2 グリッドで検出した。東西方向に近い長軸で直線的に設置されている。SD14 は、AN 4 グリッドで検出した。SI 1 と重複しており、これより新しい。また SD13 と重複しているが、SD13 の南側には続かないことから、SD13 以東については SD13 と完全に重複していたと考えられる。SD 9 と SD14 は、位置的に同一遺構である可能性が高い。

堆積状況 ともに、埋土は単層で、基盤層土のブロックを含む。人為的に一括して埋め戻されたと考えられ、流水の痕跡は確認できなかった。

掘方 SD 9 の断面形状は逆台形に近い。底面の標高はやや東側が高い。一方 SD14 は浅い皿状であるが、上面が削平されている可能性がある。底面の標高は SD 9 より SD14 の方が高く、流水があった場合は、東から西へ向かって流れる。流水の痕跡はみられないものの、両溝の底面の標高に差があることから、水路として利用された可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器、須恵器、土師器が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

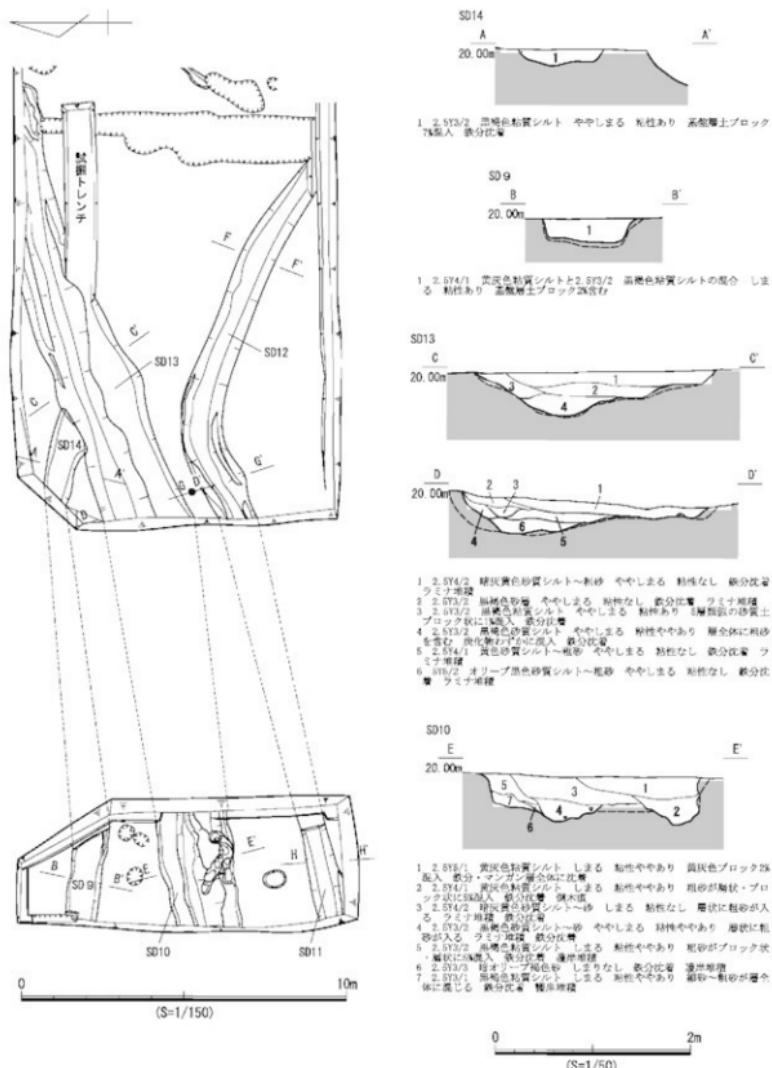
出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 SI 1 の廃絶以降に設置され、SD10 + SD13 に先行することから、IV b ~ IV c 期における比較的短期間に利用されていたと考えられる。

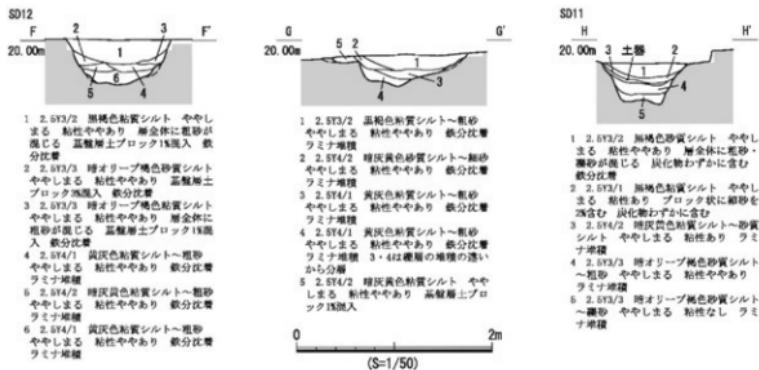
SD10 + SD13 (第61・63・64図)

検出状況 SD10 は、A01 + 2 グリッドで検出した。東西方向に近い長軸方位で、ほぼ直線的に設置されている。SD13 は、AN 4 から 7 グリッドで検出した。SD10 と同様に、東西方向に近い長軸方位で、ほぼ直線的に設置されている。重複から、SI 1 + SA 1 より新しく、SD14 より古い。SD10 と SD13 は位置的に同一遺構と考えられる。

堆積状況 SD10 の埋土には、同じ場所に複数回溝が設置された痕跡が認められる。土層断面 (E - E') の 5 ~ 7 層は 4 層や 3 層の肩となっており、人為的に埋め戻した堆積と思われる。3 ~ 4 層はラミナ堆積が認められ、自然堆積である。これを切る 2 層は底面や平面形状が不定な溝状の窪みの堆積土であり、1 層はこの堆積よりさらに新しい。なお 1 層は黄灰色土ブロックが混入することから、人為的な埋め戻



第61図 SD9～SD14遺構図①



第62図 SD9~SD14遺構図②

し土と考えられる。SD13 の埋土にも同様な堆積が認められる。

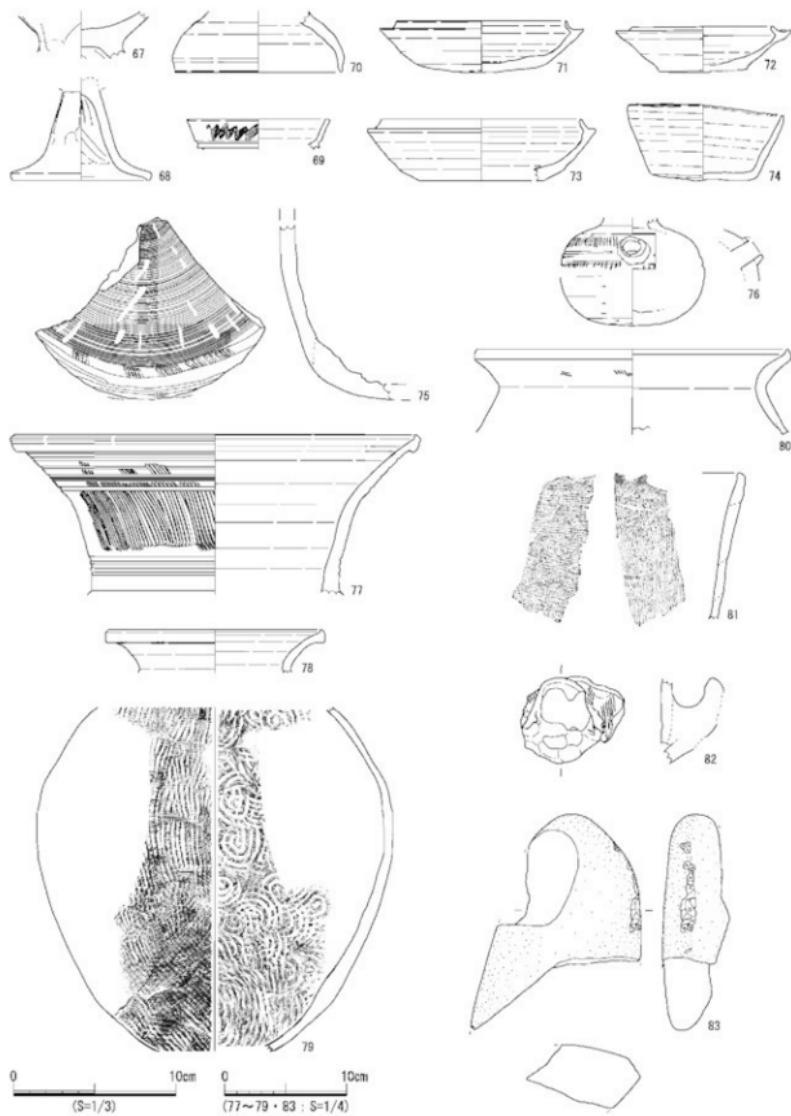
掘方 設置直後のSD10は、SD9と同様な逆台形の断面形をもつ溝状遺構だったと考えられる。再掘削による付け替えによって南側に移動したため、完掘状態では複数の段がある掘方になったと思われる。底面レベルは東西でほとんど差がみられない。SD13も掘方の北側が深く、南側が浅い2段の掘り込みになっており、SD10と同様である。SD13の底面の標高は東の方が高く、流水方向は東から西と考えられる。SD10はSD13より底面の標高が低いため、SD13からSD10に向かって流水があった可能性が高い。

遺物出土状況 埋土中及び底面付近から須恵器や土師器をはじめとする多数の遺物が出土した。意図的に廃棄したような状況はみられなかったが、SD9などと比較して破片が大きく、中には完形に近いものも含まれる。なお、SI1とSD13が切り合う付近で検出したSD19(第39図)は、粗い砂が堆積した非常に浅い溝状遺構であるが、埋土や検出した位置からSD13の一部であった可能性がある。SD19からは、埋土に半ば埋もれるようにしてほぼ完形の須恵器坏身B1類(92)が出土した。

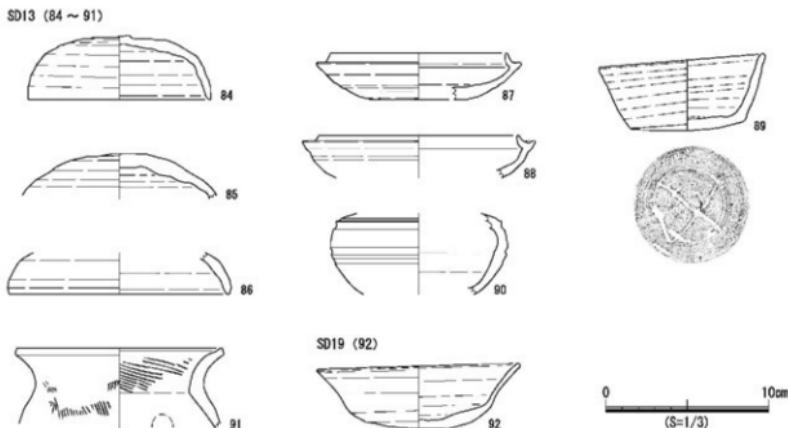
出土遺物 SD10及びSD13からは、繩文土器、須恵器、土師器、石器が出土した。この内26点を図示した。なお、SD19から出土した92についてもここに掲載する。

67・68は古墳時代中期の土師器と考えられる。67は台付甕の脚台部と体部の接合部破片、68は高壺の脚である。68の外面は板ナデのような調整によって面取りされている。69は器種不明であるが、陶質土器の可能性がある。非常に薄手で、外面に櫛描による波状文を施す。以上の遺物は5世紀代の遺物と考えられ、大野町教育委員会が実施した調査(第2章第2節参照)でも当該時期の堅穴建物が確認されていることから、関連が考えられる。

70~79、84~90、92は須恵器である。美濃須衛窯III期併行期のものが中心に出土している。70・84~86は壺蓋A類である。70は口縁部がやや内湾し、端部は内側で浅く傾斜面に調整される。残存部でケズリ調整は確認できない。84は天井部に丸みがあり、回転ヘラ切りがそのまま残る。85は天井部、86は口縁部であり、85は断面が明褐色で天井部外側に回転ヘラケズリを施す。86も回転ヘラケズリ調整が認められる。71~73・87・88は坏身A類である。71は受部が斜め上方に立ち上がり、口縁



第63図 SD10出土遺物



第64図 SD13・SD19出土遺物

部は外反しながら内傾気味に立ち上がる。外面には底部周縁に回転ヘラケズリ調整を施す。72は口径が小さく、底部から口縁部にかけて直線的に開き、底面が平底になる特徴的な器形をもつ。87は受部が斜め上方に突き出し、口縁部は強く外反して内傾する。回転ヘラケズリ調整は施さない。74・89・92は壊身B1類である。比較的残存状態の良い個体が出土しているが、セットになる壊蓋B類は出土していない。74・89は器形や法量に類似性があるが、74の方が器壁が薄い。また、74は回転ヘラ切り痕をナデ消す調整を施すのに対し、89は回転ヘラケズリによって調整している。なお、89の底面には「×」字状のヘラ記号が認められる。92は体部から口縁部が外反しながら開く器形をもち、底部外面は回転ヘラケズリによって調整される。75は提瓶の体部破片である。体部と底部の接合部にはタタキ目とケズリ調整の痕跡が残り、体部外面は同心円状のカキ目調整を施す。76・90はハソウである。76は体部の注口の高さで、ヘラ刻みによる刺突文が廻る。胎土から、美濃須衛窯産の可能性がある。77～79は甕である。77は外面に縦位のハケ目と横位の沈線を施す。78・79は小型で、79には同心円状の當て具痕と擬格子目状のタタキ目が明瞭に残る。

80・91は土師器の甕A類である。ともに口縁端部の面取りと摘み上げが認められる。81・82は土師器の瓶である。81は内外面に細密なハケ調整を施す。82は把手であり、外面に成形時の指オサエ痕が認められ、器壁外面にはハケ調整の痕跡が残る。

83は磨石・叩石類で、扁平な楕円礫の側縁に連続する敲打痕が認められる。

所属時期 出土した遺物は、Ⅲ～Ⅳ期に属している。大野町教育委員会の調査では、明確な溝状遺構が検出されていないため、本遺構は集落域の縁辺に設置された水路の一つと考えられる。SI 1より新しいことからⅣb期以降に設置され、出土した須恵器からⅣd期には埋没したと考えられる。

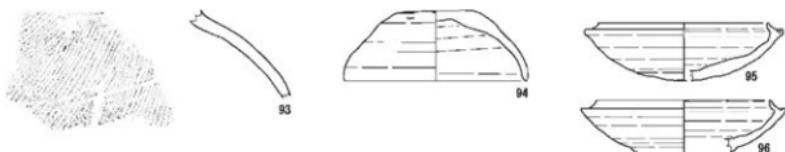
SD11・SD12（第61・62・65図）

検出状況 SD11は、AP 1からAP 2グリッドで検出した。東西方向に近い長軸方位で、ほぼ直線的に設

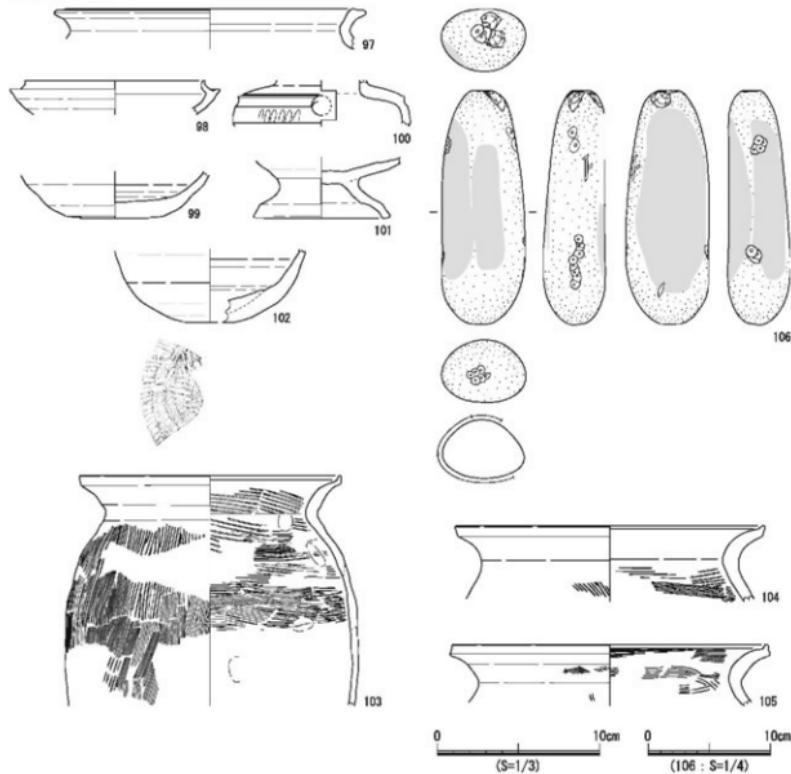
置かれている。SD12は、A0 4からAP 6グリッドで検出した。AP 6グリッド付近で南から発掘区内に入り、大きく湾曲してSD11の方に向きを変えている。SI 1と重複しており、これより新しい。SD11とSD12は、位置的に同一遺構と考えられる。

堆積状況 SD11・12ともに上層にはブロック混じりの堆積が認められ、人為的な埋め戻しが行われて

SD11 (93 ~ 96)



SD12 (97 ~ 106)



第65図 SD11・SD12出土遺物

いると思われる。下層にはラミナ堆積が観察されることから、一定の流水があったと考えられる。なお、G - G' の土層断面では、上面が削平されている影響か同様の堆積は確認できなかった。

掘方 SD11・12ともに断面が逆台形の形状をとる。SD12では、底面の標高に東西でほとんど差がみられなかつたが、SD11の方が底面の標高が低い。そのため、流水方向は東から西と考えられる。なお、SD11 挖方の壁面や底面には溝状遺構を掘削した道具の痕跡が残存していた。

遺物出土状況 埋土中及び底面付近から、須恵器や土師器をはじめとする遺物が出土した。特徴的な出土状況はみられなかつたが、完形品も含まれる。なお、95は遺構の埋土上面で出土した。

出土遺物 SD11及びSD12からは、須恵器、土師器、石器が出土した。この内14点を図示した。

93・97は土師器の宇田型甕と考えられる。93は体部で、外面にやや粗いハケ調整を施す。97は口縁部で口縁端部が横方向に引き出される。

94～96・98～102は須恵器である。94は壺蓋A類で、天井部が平坦で口縁部が内湾し、端部がやや尖り氣味になる。天井部周縁に回転ヘラケズリ痕が残る。95・96は壺身A類である。95は受部が巻き上がって端部が上を向き、口縁部は短く内傾し、端部のみ上方を向く。底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。96は底部が残存しないが、95に類似する器形をもつ。100はハソウで注口のやや下に、連続する刺突文が廻る。101は碗状の身に脚台部が付く器種で、「台付碗」とした。身の内底面に脚台部との接合時のものと考えられる不定方向のナデ痕が残る。102は壺頬と考えられる底部破片であり、底部外面に回転ヘラケズリ後についたタタキ目が認められる。

103～105は土師器壺A類である。103は口縁端部の面取りと摘み上げが顯著で、頸部は2段に横ナデされる。外面は斜位、内面には横位のハケ目が残るが、口縁部から頸部内面のハケ目は他より粗いため、2種類のハケが使われていると考えられる。

106は石器の磨石・叩石類である。断面が三角形に近い形状の長楕円窓を用いて、短軸側の両端2箇所及び側縁4箇所の計6箇所に敲打痕が残る。それぞれの敲打痕が対応した位置にあるため、もちろん替えて同じ作業を行ったと考えられる。この他、平坦面に複数の磨面が残る。

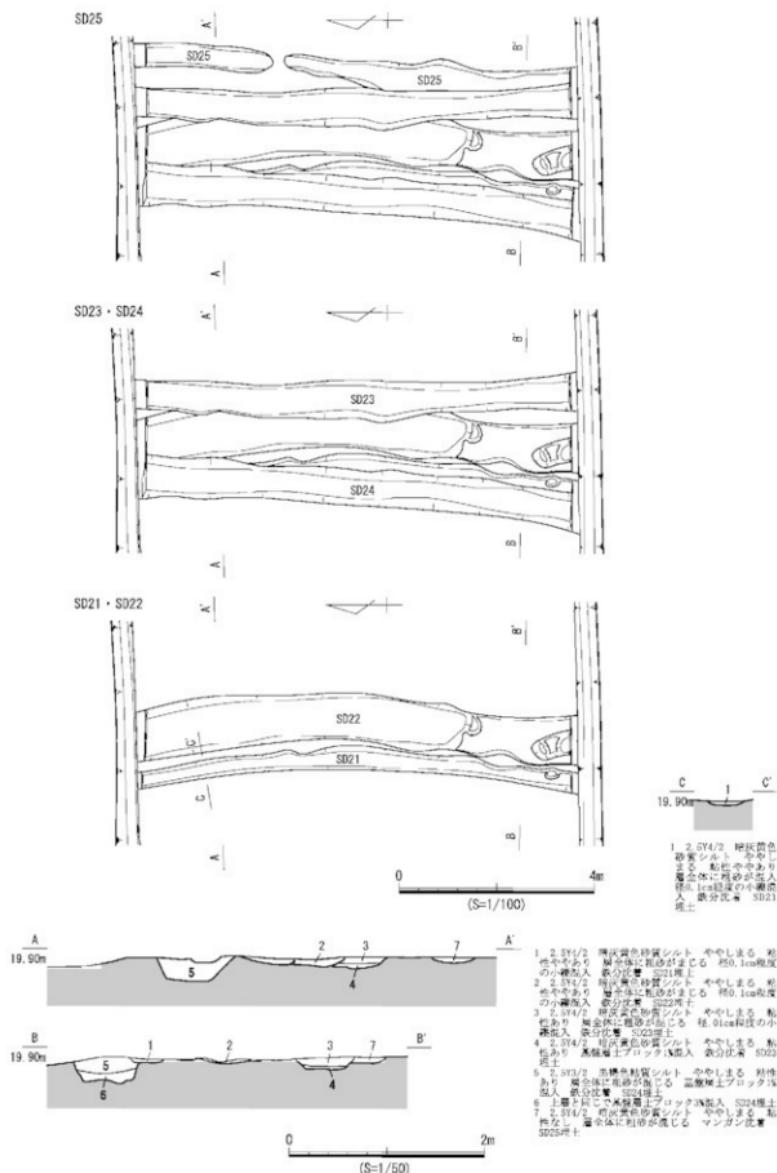
所属時期 SIより新しく、出土した須恵器に那加5号窯併行期のものが認められないことから、IVc期に位置付けられる。

SD21～SD25（第66・67図）

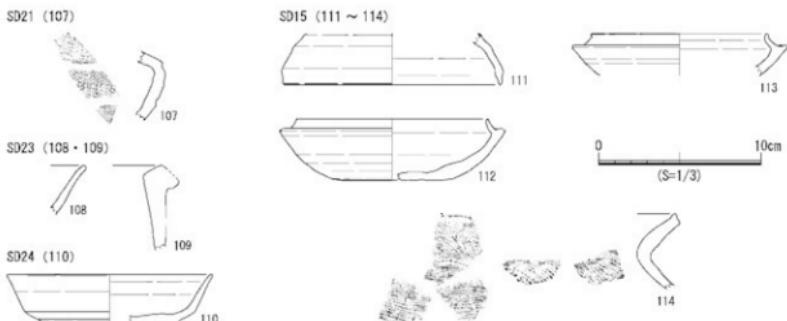
検出状況 AN 8からAP 9グリッドで検出した。いずれの溝状遺構も長軸方位が南北方向に近い。重複からSD25→SD23・SD24→SD21・SD22の順に設置されている。この構群の位置は条里公園敷地の東端にあたり、現在の地割と一致している。また、坪境溝と考えられるSD 6等から西へ約109mに位置することから、五里と六里的境をなす里境溝である可能性が高い。前掲の「条里の坪境の水路跡」（第1節参照）の北側を発掘区内でも検出したが、遺物の内容から現代に近い時期のものと考えられ、SD21～SD25の位置から、後世に西へ移動したと考えられる。なお、本遺構は第3節で推定したように、初期条里型水田の西端になる可能性がある。

堆積状況 砂質シルトが堆積しているものが多く、流水の痕跡は認められなかつた。SD24の上層（B-B' 5層）のみ、若干粘質のある埋土が堆積していた。埋土の状態から、以前にあった溝を埋めながら付け替えを繰り返したと考えられる。

掘方 SD21・SD22・SD25は浅く、SD23・SD24は断面形が逆台形となる明確な掘方をもつ。浅い溝状遺構は、



第66図 SD21～SD25遺構図



第67図 SD21~SD25・SD15出土遺物

上面が削平されていると考えられる。SD22 の底面は南側で凹凸がみられるが、他の底面は平坦である。南北で底面の標高に差がないため、流水方向は不明である。

遺物出土状況 特徴的な出土状況はみられなかった。なお、土器以外に鉄滓が出土しており、これについて成分分析を実施した（第5章第4節参照）。

出土遺物 SD21・SD22・SD23・SD24 から、須恵器、土師器、山茶碗、石器が出土した。この内4点を図示した。

107は須恵器ハソウと考えられる。屈曲部と体部の沈線間に、櫛状工具による連続刺突文を施す。

108は山茶碗の碗である。尾張型であるが詳細は不明である。

109は土師器の清郷型鍋である。口縁部が肥厚・面取りされ、やや内傾する。

110は須恵器の壺身B1類である。体部下半のケズリ調整によって、底部外面周縁に高台状の盛り上がりを形成している。胎土から美濃須衛窯産の可能性がある。

所属時期 山茶碗（108）が出土したSD23はⅦ期以降まで時期が降ると考えられるが、それ以外の遺構の設置年代は不明である。

SD15（第67・68図）

検出状況 AN 8グリッドからAP 9グリッドで検出した。SD21～SD25と重複して検出しており、いずれの溝より古い。里境溝群とは異なり長軸方位はN-49°-Wで、発掘区の中央で緩やかに湾曲する。

堆積状況 1層は粗砂や基盤層土ブロックを含む人為堆積であるが、その下層は自然堆積と考えられる。埋土の状況から、複数回溝が設置されたと考えられる。

掘方 断面形が逆台形の明確な掘方をもつ。V層下の自然流路埋土まで掘り込まれており、場所によつては埋土と基盤の区別が困難であった。遺構底面の標高差から、流水方向は北から南と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から、須恵器や土師器の他、本来はV層に含まれていたと考えられる縄文土器も出土している。

出土遺物 SD15からは、縄文土器、須恵器、土師器が出土した。この内4点を図示した。

111は須恵器の壺蓋A類である。111は胎土が灰赤色で、口縁端部がやや尖り気味に成形される。

112・113は壺身A類である。112は受部が短く斜め上方へ突きだし、口縁部が短く外反しながら内傾する。回転ヘラケズリ痕は認められない。113も112とほぼ同様の形態をもつ。

114は土器師の壺A類である。口縁端部に面取り・摘み上げを施す。体部外面と口縁部から体部の内面に細密なハケ調整を施す。

所属時期 時期のわかる出土遺物はIVc期に属し、自然堆積である4層から出土しているものも認められることから、IVc期には水路として機能していたと考えられる。

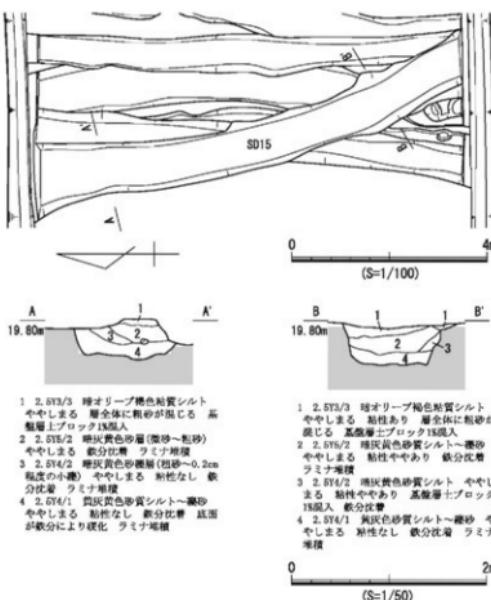
SD26(第69~72図)

検出状況 AN9からAP15グリッドで検出した。後述するSD30・SD31及び畝溝状遺構群SN27と重複しこれより古いが、その他の重複する全ての遺構より新しい。古墳時代に属する溝の中では最も長軸方位が東西方向に近く(N-72°-W)、検出した範囲で全長約24mに及ぶ。AN12から13グリッドにかけて若干蛇行がみられるが、ほぼ直線的に設置されている。

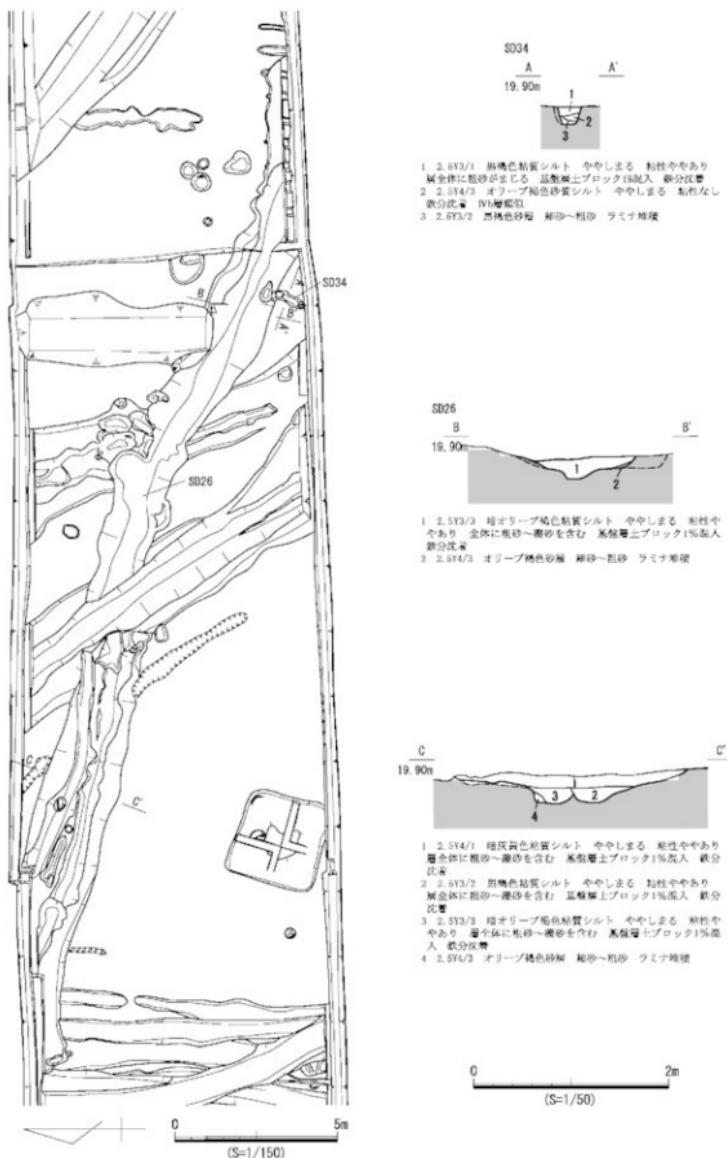
堆積状況 埋土の下層にわずかな流水の痕跡が認められるが、それ以外は基盤層土ブロックが混じるよく似た埋土が堆積している。埋土中には拳大の河原石が多く、遺物が多数含まれる。

掘方 SD30との交点以西は溝底面が複数に分かれており、AP15グリッド付近でも南東方向の深い部分と西へ延びる浅い部分に分かれる。C-C'の堆積状況から、改修や付け替えが行われた可能性が高い。底面の標高は、西側の方が若干高く、西から東へ流水があったと考えられるが、この方向は西側に位置するSD10・SD13などとは逆である。

遺物出土状況 多量の遺物が出土しているが、出土場所や層位にまとまりが認められない。第70図に本報告に掲載した遺物の出土位置と破片の接合状況を示した。遺物は、遺構全体から出土しており、特に偏る状況はみられない。また、遺構内の離れた箇所や重複するSD30・SD31から出土した遺物との接合が認められた。遺構内接合は、埋土の状況から遺物が流水で流されたとは考えにくいため、遺構を埋め戻す際に、同一個体の破片が異なる場所に混入したと考えられる。SD30・31出土遺物との接合については、SD26の埋土に含まれていたものが後のSD30・31の設置によって移動したと推定される。出土遺物の時期には、IV層中に含まれる縄文時代晚期の土器の他、堅穴建物と関連すると考えられるVIb期の須恵器も認められ、埋め戻す際に遺物が含まれる周囲の土を利用したと考えられる。なお、178は



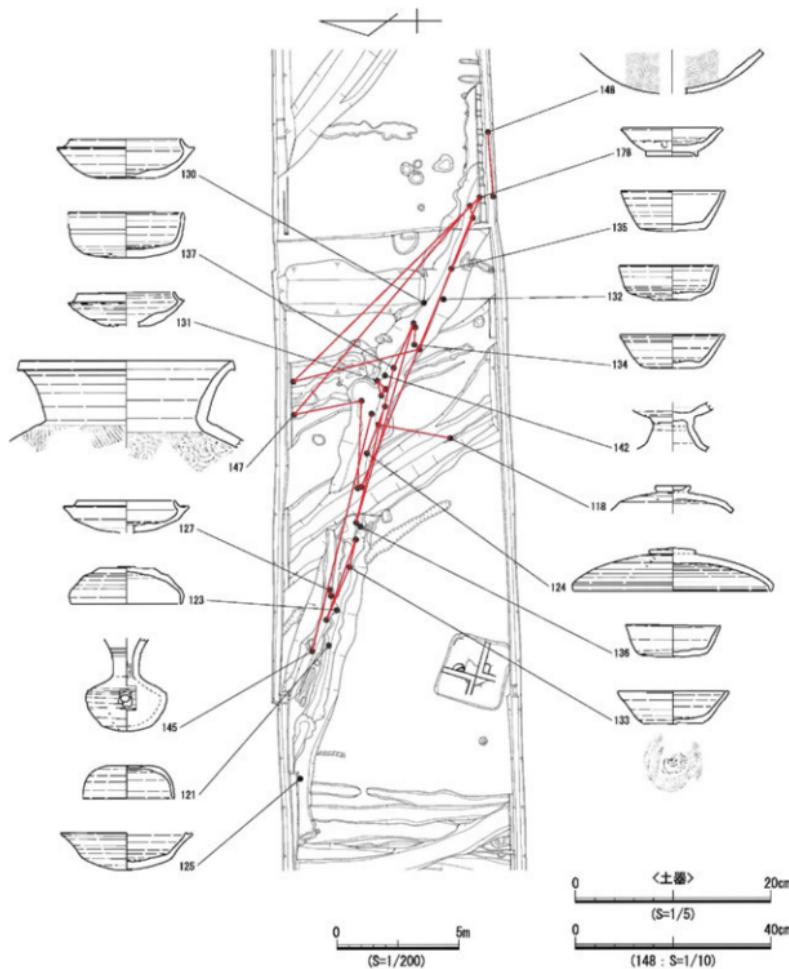
第68図 SD15遺構図



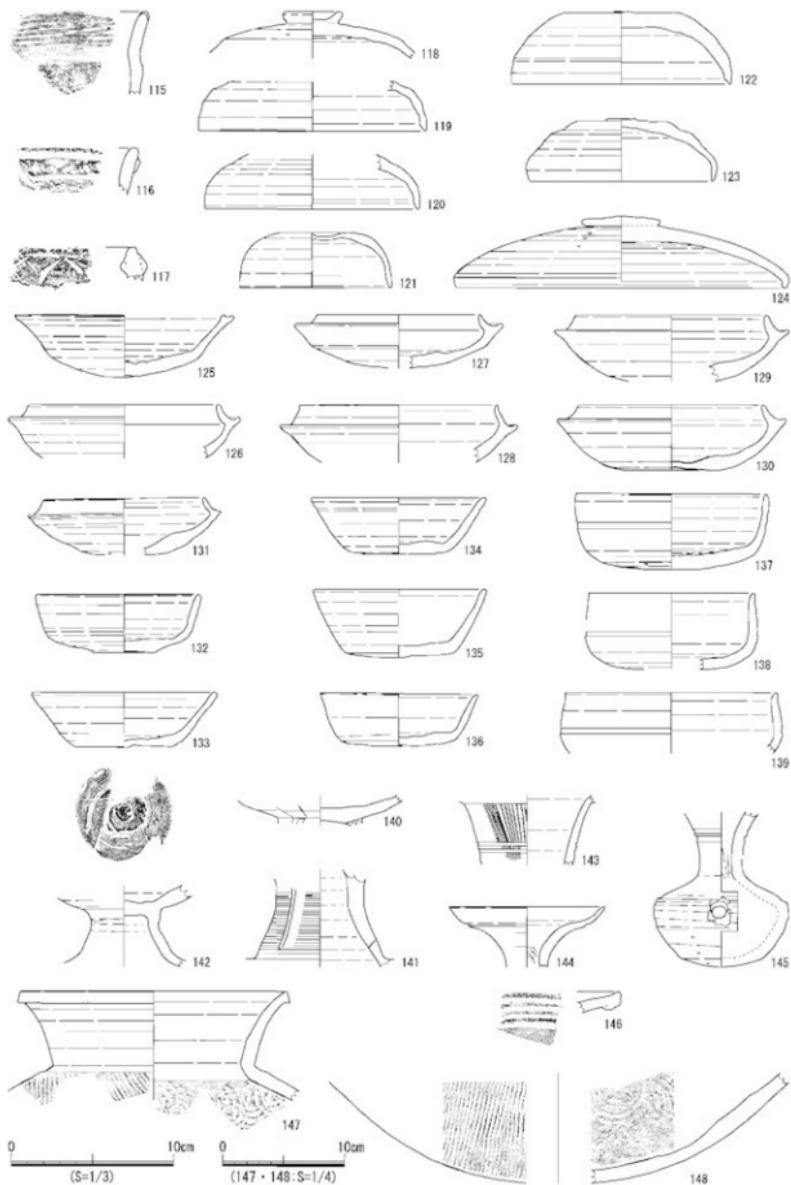
第69図 SD26遺構図

SD26 の埋土上面から 0.05 m 以内の表層で出土した灰釉陶器であり、SD31 出土破片と接合した。2 点の内 1 点は SD31 と重複する箇所から出土しているが、もう 1 点は発掘区南壁付近で出土しており、当該箇所で SD26 と重複する SN27（歛構状遺構群）と SD31 との関連性を示唆すると考える。

出土遺物 SD26 からは、縄文土器、須恵器、土師器、石器・石製品が出土している。この内、46 点を図示した。



第70図 SD26 主な遺物の出土位置



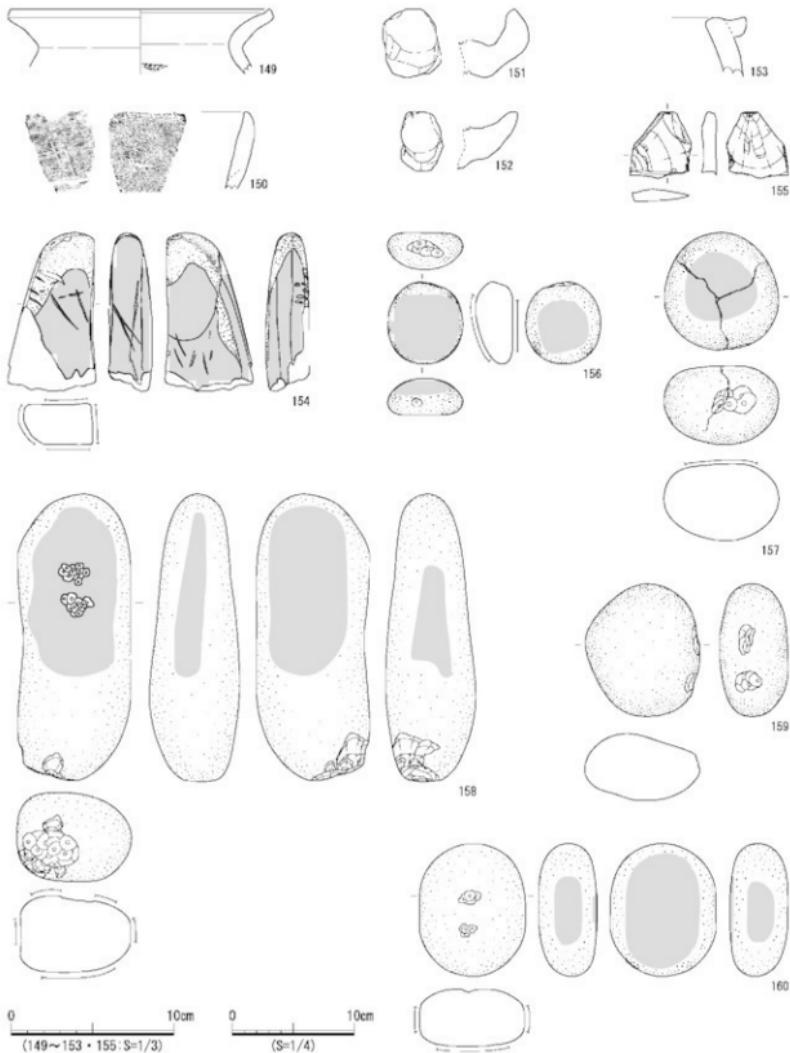
第71図 SD26出土遺物①

115～117は縄文土器である。いずれも縄文時代晚期（第II群）に属する。115はA2k類とした。口縁部外面を横位の条痕、体部外面をケズリ調整しておりA2c類に類似するが、口縁端部の面取りや連続刻みは認められない。また口縁端部に小突起状の突出がみられる。116はA2j類としたが、摩耗により突起の刻目工具が判別できない。117は口縁部内外面に突帯状の肥厚がみられ、外面に鋸齒状の沈線文を施す。第3調査面のNR3から出土した浅鉢（389）に同様のモチーフがみられる。

118～148は須恵器である。118は有蓋高坏の蓋である。天井部中央に環状の摘みが付される。118～123は坏蓋A類である。118・120は口径14cm以上の大型品で、灰色の色調をもつ。口縁端部内面が面状に調整される。121は、天井部が平坦で、体部から口縁部にかけて強く張る。122・123は天井部に回転ヘラ切り痕を残し、口縁部にかけて緩やかに開く。122は口縁端部内面に面取り調整がみられ、123は口縁端部が内湾する。124は坏蓋C類である。大型品で、丁寧に回転ヘラケズリされた天井部中央に扁平な擬宝珠摘みが付される。美濃須衛窯の那加5号窯期と考えられる。125～131は坏身A類である。125は底部内面の回転ナデ痕が顕著な溝状の凹凸になる。底部外面は回転ヘラケズリ調整を施す。126～130は口縁部の立ち上がりがやや高めで、底部外面に回転ヘラケズリ調整を施すなどや古手の特徴が認められる。131は身が浅く、体部外面に回転ヘラケズリ調整を施さない。受部に重ね焼きの融着痕が残る。132～139は坏身B1類である。胎土が美濃須衛窯に類似するものが多い。132は底部外面周縁の削り出しによって、底部が突出する。133～136は底部周縁に丸みがあることからB1類としたが、B2類に近い形状をとる。底部外面に回転ヘラ切り痕をそのまま残す。133は底部外面にヘラ記号が認められる。137～139は底部から体部にかけて丁寧な回転ヘラケズリによる丸みがあり、体部中程に一条の沈線を施す。このタイプの坏身は、初期の坏蓋B類とのセット関係が考えられている。140・141は高坏である。ともに方形透かしをもつ長脚高坏で、141の外面にはカキ目調整が認められる。142は台付碗で、SD12の101と同一器種である。143～145はハソウである。143は頸部が長い大型のハソウで、外面に櫛状工具による縦位の直線文を施す。145は体部下半をケズリ調整し、注口部のやや上の位置で屈曲する器形をとる。頸部には二条の沈線が廻る。146は壺類の可能性がある。断面が灰赤色で、外面に櫛描波状文を施す。147・148は壺である。ともに擬格子目状のタタキ目と同心円状の当て具痕が残る。胎土から美濃須衛窯産の可能性がある。

149～153は土師器である。149は壺A類で、口縁端部の面取り・摘み上げが認められ、口径から小型の壺と考えられる。150は瓶の口縁部から体部破片、151・152は把手である。150は外面に縦位、内面に横位の細密なハケ目が残る。153は清郷型錫の口縁部と考えられる。他の出土遺物よりも時期が新しいため、SD30・SD31に含まれていた遺物が、遺構掘削作業時に混入した可能性がある。

154～160は石器である。154を除き、縄文時代のものと考えられる。154は砥石である。扁平な砂岩礫を用いており4面に砥面が残るが、特に側縁部の摩耗が著しい。側面は手持ち砥石として用いたと考えられるが、広い砥面については置き砥石として使用した可能性もある。155は微細な連続剥離が認められる剥片である。剥離が不規則で細かいことから、使用又は偶発的に生じた剥離と考えられ、以下このような剥片をMFとした。石材はサヌカイトで、側縁に自然面が残る。側縁3箇所に不規則な剥離が認められる。156～160は磨石・叩石類である。花崗閃緑岩や安山岩を石材とし、いずれも磨面や敲打痕が複数箇所残る。156は扁平な円礫を用いて側縁両端に敲打痕、平坦面に磨面が認められる。157も同様であるが、敲打痕と磨面は1箇所ずつである。158は長椿円礫の短軸の側縁に慣れ状の敲打痕、



第72図 SD26出土遺物②

平坦面の4面に磨面、最も広い平坦面に2箇所の敲打痕が残る。159は同じ側縁の2箇所に同様な敲打痕がみられる。160は扁平な梢円縫の側縁3箇所と平坦面1箇所に磨面があり、磨面のない平坦面に敲打痕が残る。

所属時期 出土した遺物には時期幅がある。SI 5・SI 6やSD27・SD28より新しいことから、IV c期以降に設置され、最も新しい遺物からIV d期には埋没したと考えられる。

SD27～SD29（第73・74図）

検出状況 AN 9グリッドからAP11グリッドで検出した。SD27は長軸方位がN-44°-Wで直線的に設置され、発掘区北壁付近でSD26と重複しこれより古い。南壁付近ではSD28と重複しており、これより新しい。東側にはSI 5とSI 6が隣接するが、重複はみられない。またSD26の北へ続かないため、SD26と完全に重複していたと考えられる。SD28はSD27の西側に位置する。SD27と同様に北から西へ傾く長軸方位（N-51°-W）をもつが、中央付近で若干西へ湾曲している。SI 4と重複し、これより古い。SD29はSD27とSD28との間に設置されており、長軸方位は南北軸に近い（N-8°-W）。SD29の南端でSD28と重複しこれより古いが、SD28の南側へは延びずに途切れる。

堆積状況 SD27は、A-A' 1層にIV b層のブロックが混じる人為的な堆積、2層にはラミナ堆積がみられ、水路として使用された後に埋め立てられたと考えられる。SD28は、上層（B-B' 1～3層）にラミナ堆積がみられ、自然堆積で埋没したと思われる。4層は、BとCの位置で埋土の状況が異なっており、浚渫や改修が部分的に行われた可能性が考えられる。なお、土層断面B-B'では、SD28に先行する溝の痕跡（5・6層）も確認できる。SD29も堆積から、SD27・28と同様水路と考えられる。

掘方 SD27の断面は逆台形に近い形状をとる。底面の標高は北側がわずかに低い。浅い遺構であるが、SI 5・SI 6と同様に上面が大きく削平されていると思われる。SD28もSD27と同様に断面が逆台形に近い形状をとるが、埋土の上層部分に拡幅がみられ、完掘状況では2段の掘方となった。遺構底面の標高は南側が若干低い。なお、本遺構の掘方底面にはSD11と同様の掘削具の痕跡と思われる溝みが連続してみられた。SD29も断面が逆台形の遺構であり、SD27と同様浅い。

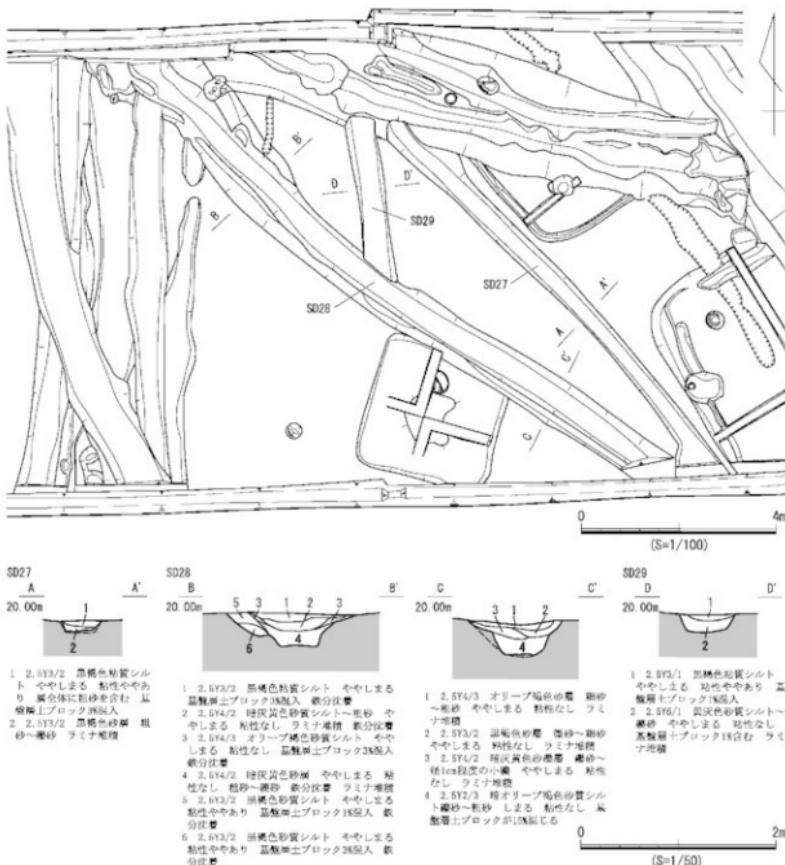
遺物出土状況 特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 SD27・SD28からは、縄文土器、須恵器、土師器が出土した。SD29からは縄文土器と土師器が出土した。この内、5点を図示した。

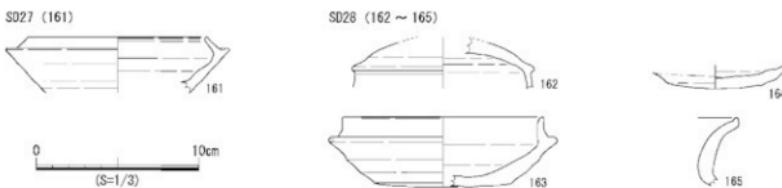
161～164は須恵器である。161は壺身A類で、口縁部が長く直線的に内傾する。162は壺蓋A類で、口縁部と体部の境に明瞭な棱部があり、5世紀代の須恵器と考えられる。163は壺身A類で、全体的に厚手で、焼成不良により灰白色をとる。底部外面に回転ヘラ切り痕を残すが、体部は受部まで回転ヘラケズリ調整される。164は壺身B 1類の可能性がある。底部外面に丁寧な回転ヘラケズリ調整を施す。

165は土師器の壺A類である。口縁端部の面取り・摘み上げがみられ、口縁部外面は横ナデ調整されるが、内面のハケ目は認められない。口縁端部外面付近に指オサエの痕跡が残る。

所属時期 SD28は、SI 5・SI 6と重複せず、長軸方位が類似しており、同時期の遺構である可能性がある。出土した須恵器からIV b期以前に設置されたと考えられる。SD27はSD28と出土した須恵器に時期差はみられないが、重複からSD28より古い。位置的にSI 5・6に近いことから、堅穴建物を設置する前に機能した水路と考えられる。SD29は重複関係ではSD28より古いが、別の構とSD28をつなぐ目的で設置された可能性も考えられる。



第73図 SD27～SD29遺構図

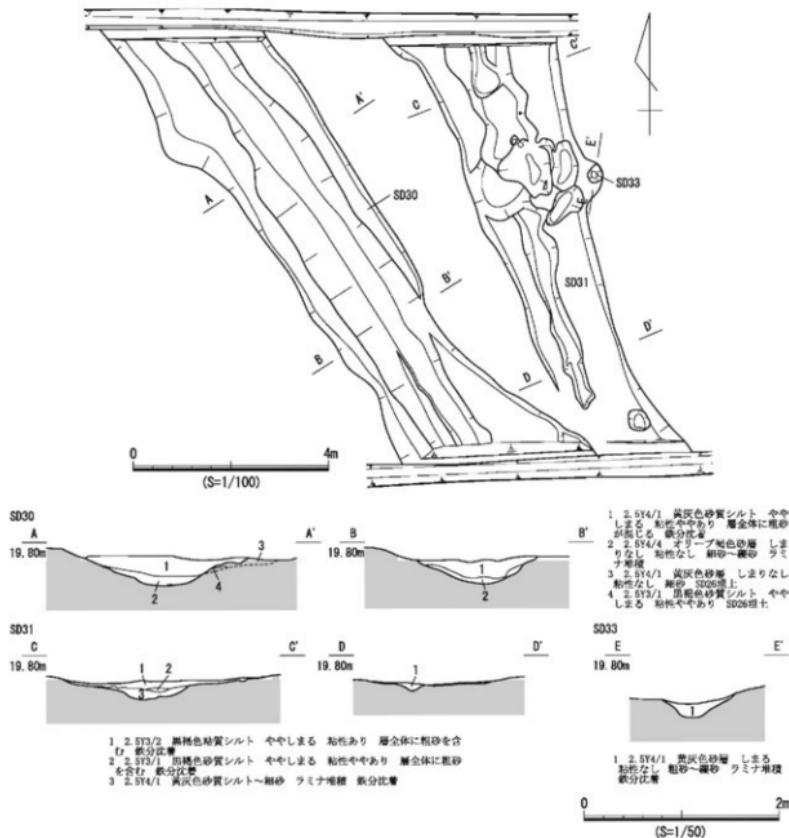


第74図 SD27・SD28出土遺物

SD30・SD31（第75・76図）

検出状況 AN10からAP13グリッドで検出した。SD30は、第1調査面で大畦畔の痕跡と考えたSM1の直下にあたり、長軸方位も同じ（N=36°-W）である。SD30が廃絶した後も区画として地割りが残存したと考えられる。SD31は、埋土と遺物包含層であるⅢ層の区別が困難であり、遺構検出時に掘り下げすぎてしまった部分も多い。長軸方位はSD30より若干南北方向に近く、N=18°-Wである。SI 5・SI 6やSD26などの遺構を削平しており、周辺の遺構の中では最も新しい。

堆積状況 SD30・SD31ともに下層にラミナ堆積がみられ、流水があったと考えられる。また、埋土の上層はⅢ層に酷似する。なお、SD30の底面は鉄分の沈着による硬化が認められた。



第75図 SD30・SD31遺構図

掘方 SD30は、断面形は緩やかに立ち上がる半円形をとる。掘方南端の平面形が南に向かって広がっており、改修や付け替えがあった可能性がある。掘方底面は遺構の南北で標高にほとんど差がないため、流水方向は不明である。SD31は、削平による影響で非常に浅く、本来の形状は不明である。検出範囲の中央部に性格不明の凹凸があり、その南北に砂質土が堆積する細い溝状の落ち込みが存在する。底面の標高は検出範囲の北端の方が若干低い。

遺物出土状況 SD30・SD31ともに出土遺物は破片が多い。172はSD30とSD31、178はSD26とSD31から出土した破片が接合した。

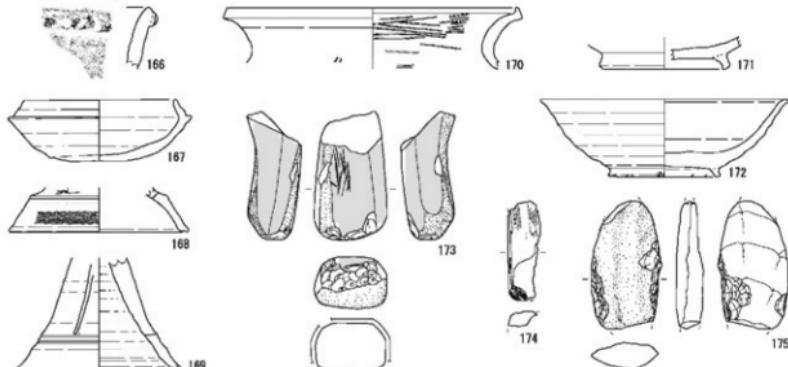
出土遺物 SD30・SD31からは、縄文土器、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗、石器・石製品が出土した。この内、14点を図示した。

166は縄文土器で、第Ⅱ群A 2 i類とした。口縁端部に近接した位置に刻目突帯が付される。摩耗により不明瞭であるが、刻目の原体は二枚貝と考えられる。

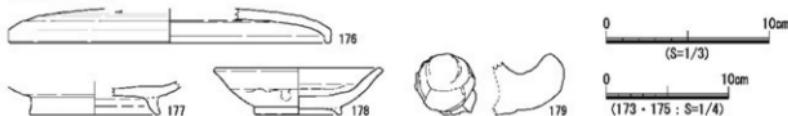
167～169・176は須恵器である。167は体部に丸みがあり、口縁部は直線的に内傾する。回転ヘラケズリ調整は認められない。168は器種不明の脚台部である。方形透かしがあり、外側に櫛描波状文が廻る。169は高坏である。長脚で方形透かしが認められる。体部下半に二条の沈線が廻る。176は壺蓋C類である。SD26の124とほぼ同じ器形と考えられる。

171・177・178は灰釉陶器である。いずれも碗と考えられるが、178は小碗で高台が低く、他の2点よりも時期が異なると考えられる。

SD30 (166～175)



SD31 (176～179)



第76図 SD30・SD31出土遺物

172は尾張型の山茶碗である。粗轍痕の残るやや高い高台が付され、底部から体部にかけて深碗のような丸みがあることから、初期の山茶碗と考えられる。

170・179は土師器である。170は甕A類で、口縁端部に面取り・摘み上げが認められる。内面にはやや粗い横位のハケ調整を施す。179は瓶の把手と考えられる。

173～175は石器・石製品である。173を除き、縄文時代の遺物と考えられる。173は砥石である。砂岩の長梢円碌3面に直線的な砥面が認められる。使用状況は不明であるが、短軸側の側縁に砥面より新しい敲打痕と剥離がみられ、叩石として転用されたと思われる。174は縁泥片岩製の石製品で、表面に成形時の削痕が残ることから、石棒の可能性がある。175はホルンフェルスの剥片で、背面側は自然面と考えられる。打点側の端部が折損している。両側縁に連続する剥離が認められるが特に背面に集中している。片側の側面は潰れ状になっているが、一方は剥片の形状を残す。打製石斧、又は粗製刃器の可能性がある。

所属時期 SD30は、SD26の廃絶後に機能した水路であることから、V期には設置されていた可能性はあるが詳細は不明である。SD31はSD30廃絶後、VIc期以降に設置されたと考えられる。

SD35・SD38（第77～79図）

検出状況 AN14からAO17グリッドで検出した。長軸方位はN-48°-Wである。本遺構の埋土上面から砂質で単層の埋土が特徴的なSD36・SD37などを検出したが、その性格は不明である。SD35は範囲が判然としなかつたため、断ち割り調査を実施して堆積状況を確認し（C-C'）、この結果に基づいてSD35を完掘した。その後、第3調査面の調査に伴うIVb層の人力掘削中にSD35と重なる位置で溝状遺構の肩を検出したため、再度断ち割り調査を実施した（D-D'）。この結果、底面がVII層まで達する溝状遺構であることが判明したため、この段階で検出した溝状遺構の掘削を行った。完掘後に実施した発掘区南北壁面の土層観察によって、下層で確認した溝状遺構が上層のSD35と同一の遺構であり、第2調査面から掘り込まれていたことを確認した。一方、SD38は掘方の西肩に比して東肩が判然とせず、SD35に平行する不定な平面形の溝状遺構として検出した。発掘区壁面の崩落などによって明確にはできなかつたが、最終的なSD35の規模や形状を勘案すると、SD38はSD35の埋土の一部であった可能性が高いと考えられる。なお、SD38の底面からは、5基の土坑を検出しておらず、SD38（SD35）より古い遺構と考えられる。

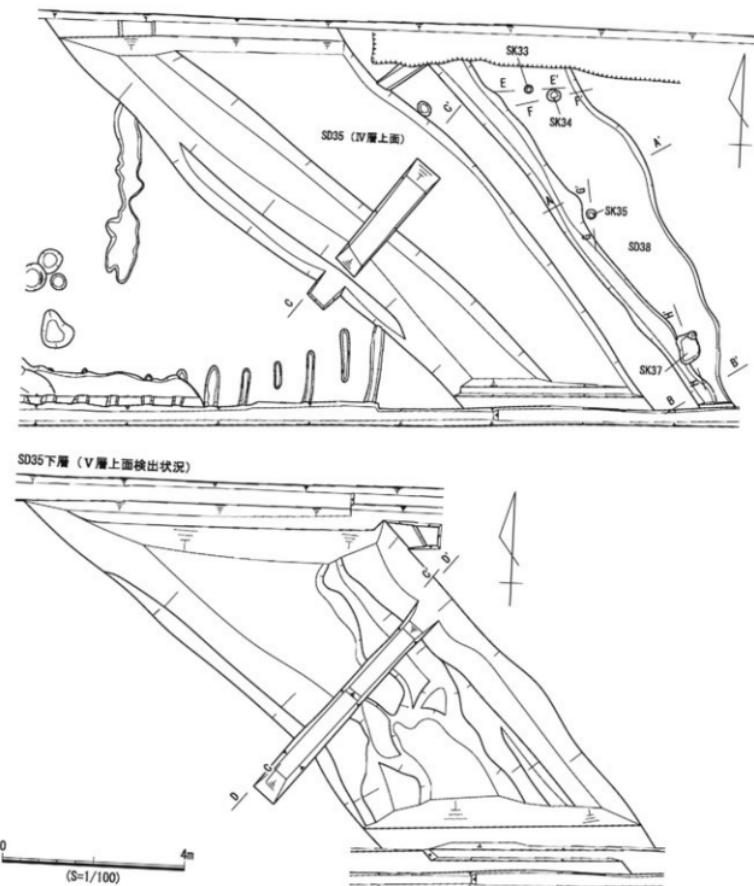
堆積状況 C-C'の土層断面3層に粗い砂が堆積しており、流水によって埋没したと考えられる。それ以外は一見基礎層に類似する堆積が主体であるが、1層や4層にブロック混じりの堆積が認められ、改修や埋め立てなどが行われていた可能性がある。D-D'の土層断面のうち、1・2層はC-C'3層の肩になっており、安定した堆積である。その下層は、砂やシルトが互層となったラミナ堆積であり、継続的な流水があったと考えられる。これらの埋土は3～6層、7～11層、12層の3段階に分けることができ、埋没と再掘削が繰り返された結果と考えられる。SD38は、B-B'の1層に比して2層の方が締まりがなく砂質が強いが、流水の影響によるものかは不明である。

掘方 SD35は断面形が半円形に近い形状をとるが、西肩がやや切り立っている。底面は砂礫層であるVII層まで達しており、南側の方が底面が深くなっている。前述のように、各段階の再掘削によって規模が変化したと考えられ、最終的にはSD38やC-C'1層のような浅い落ち込みになったと思われる。

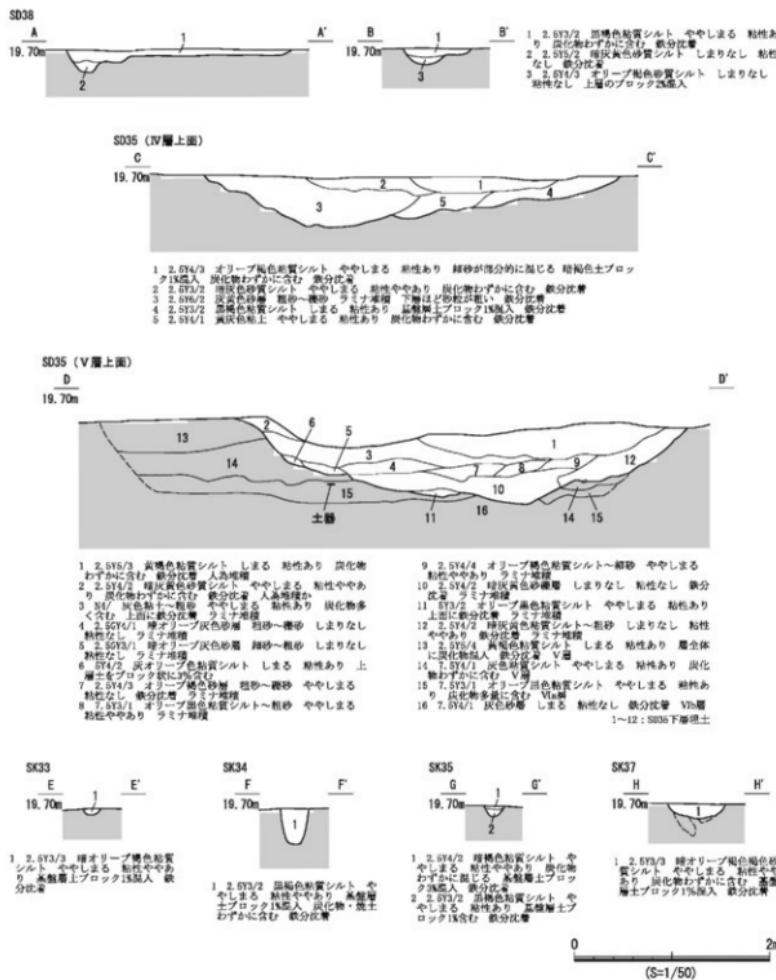
遺物出土状況 IV～VI層を掘削して設置されていることから、SD35の埋土には、多量の縄文土器が混

入していた。発掘区北壁に近い位置の埋土上面からは、193・194が面上にまとまって出土した(写真版14)。SD38はほとんど遺物が出土しなかったが、底面で検出したSK34から、穿孔のある土製の玉(196)が出土した。

出土遺物 SD35からは、縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、石器が出土した。この内、16点を図示した。なお、SK34から出土した玉(196)もあわせて掲載する。



第77図 SD35・SD38遺構図①

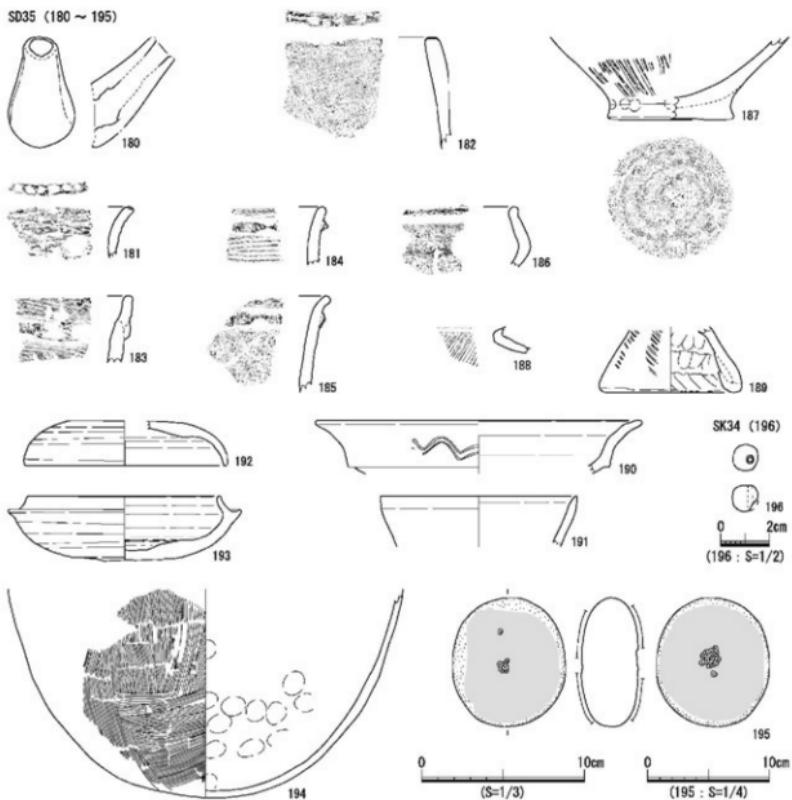


第78図 SD35・SD38遺構図②

180～187は縄文土器である。180は大型の注口土器の注口であり、後期(第I群)の遺物と考えられる。器壁との接合部から剥がれた破片であり、斜め上方を向いている。外面はナデ調整を施すが、注口内部は未調整である。181は第II群A 2 c類とした。口縁部が緩やかに外反して開く器形で、口縁端部に棒状工具による連続押圧を施し、外面には原体不明の横位の条痕調整を施す。182は第II群A 3 c類とし

た。口縁端部に二枚貝の連続押圧を施し、内外面はナデ調整のみで無文である。183～185は第II群A 2j類とした。口縁端部からやや離れた位置に突帯文を付し、突帯文状に幅広の押圧を施す深鉢で、いずれも貝殻を原体とする。183・184は外面に横位の二枚貝による条痕調整を施すが、185はナデ調整である。186は第II群C 5類とした。体部の屈曲部から口縁部にかけて直線的に内傾し、端部のみ折り返す。第3調査面のNR 3等で出土しているものと比較すると若干屈曲が弱い。187は深鉢の底部と考えられ、外面に縦位の条痕調整を施し、内面にはコゲが付着している。丸底の底部に粘土を附加することで平底としており、接合部には指オサエと横ナデの痕跡が残る。底面には粘土紐巻き上げの痕をナデ消した調整が残る。

188～191は古墳時代前期の土器器と考えられる。破片であるため詳細は不明であるが、概ね埴輪III式～松河戸II式に比定される土器群と思われる。188はS字状口縁台付壺の頸部、189は台付壺の脚台



第79図 SD35・SK34出土遺物

部と考えられる。189は接地面を粘土の貼り付けによって肥厚し、内面を指ナデにより調整した痕跡が明瞭に残る。190は二重口縁壺の口縁部で、外面に櫛状工具による波状文が描かれる。191は直口壺の可能性がある。

192・193は須恵器である。192は坏蓋A類である。埋土内から出土しており、全体的に潰れ気味で、器高が低い。天井部には回転ヘラ切り痕とその後に施された板ナデの痕跡が残るが、回転ヘラケズリ調整は認められない。焼成不良で、色調が灰白色である。193は埋土上面で検出した坏身A類である。口縁部は僅かに外反しながら内傾する。底部外面には192の天井部とほぼ同様の調整を施し、同じ時期のものと推定される。

194は土師器の甕A類の体部から底部である。193と折り重なるようにして出土しており、同時期のものと思われる。丸底で外面に細密なハケ調整を施し、内面には底部接合に伴う指オサエの痕跡が残る。

195は磨石・叩石類である。扁平な円礫を用いて、平坦面両面に磨面、磨面の中央部に敲打痕が残る。

196は土製品の玉である。孔は中央からやや寄った位置にある。一部欠損しており、摩耗のため外面調整は不明である。

所属時期 埋土の下層から出土した188・191が設置時期を示している可能性があり、Ⅲ期の前半に位置付けられる。また、上層や上面から出土した192・193から、IVc期の段階ではほぼ埋没していたと考えられる。

SD39（第80・83図）

検出状況 BN20からB01グリッドで検出した。この遺構を境に以東の基盤層がIVb層からIVa層に代わる。遺構の東でSD40、西でSK8・SK9と重複し、いずれより新しい。長軸方位はN-41°-Wである。

堆積状況 単層で色調がIVa層に類似するが、IVa層より粘質が強い。埋土に黒褐色土のブロックが混入する。

掘方 緩やかに肩が立ち上がる断面形をもち、底面は平らである。南北の掘方底面に標高差がほとんど無く、流水方向は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器の破片が出土している。出土した土器には、他の遺構や遺物包含層では確認できない、弥生時代高蔵式期に属する可能性がある土器が含まれる。この時期の遺物は、大野町では初見である。³³⁾

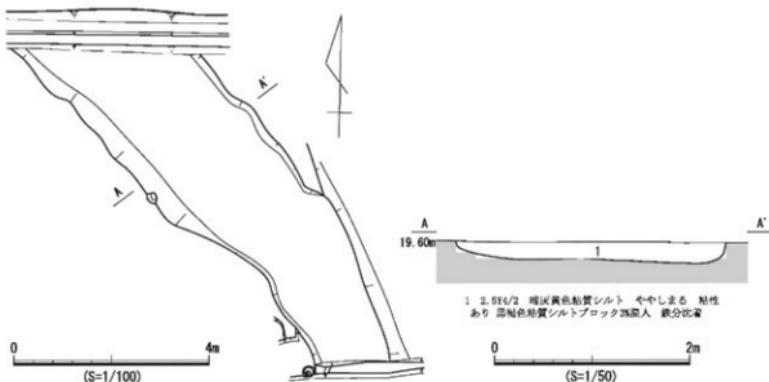
出土遺物 SD39からは、弥生土器、須恵器、山茶碗が出土した。この内、3点を図示した。

197・198は弥生土器の甕と考えられる。197は口縁の端部と体部上半にタタキ目のようなものもみられるが、摩耗により不明瞭である。198は体部下半の破片であるが、台付になる可能性がある。199は細頸壺の頸部の破片と考えられる。屈曲部の上に凹線が認められる。全体的に摩耗が激しく、詳細は不明である。

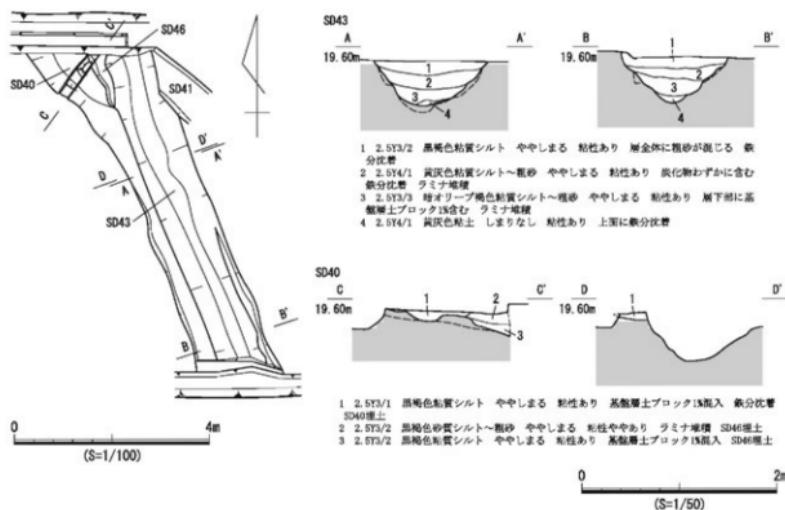
所属時期 弥生土器は高蔵式期の可能性があるがかなり摩耗しており、二次的に混入したと考えられる。また、出土した山茶碗は、埋土が粘質の強いシルトであることから、上層からの踏み込みなどに伴う可能性がある。長軸方位や周辺の構の状況から、古墳時代の遺構と考えられる。

SD40・SD43（第81・83図）

検出状況 BN1からB01グリッドで検出した。SD43は長軸方位がN-22°-Wで、周辺の構状遺構の中では最も南北軸に近く、直線的で明瞭な掘方をもつ。SD40はSD39とSD43に挟まれた発掘区北壁付近



第80図 SD39遺構図



第81図 SD40・SD43遺構図

でのみ確認した遺構であり、両遺構より古く、東側に位置するSD46より新しい。SD43とほぼ同じ位置に設置された浅い遺構だったと考えられる。

堆積状況 SD43の土層断面A-A' 1層は、層全体に粗砂が混じることから、人為的な堆積と思われる。その下層の2・3層にラミナ堆積がみられ、一定の水量あったと考えられる。4層は均質な粘土の堆積

が認められた。SD40は単層で、埋土中に基盤層のブロックが混入する。

掘方 SD43は、断面形は逆台形又は逆三角形に近い形状の掘方をもつ。遺構底面の標高は南側の方が若干高い。なお、SD40は残存状態が悪いため詳細は不明である。

遺物出土状況 特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 SD40から土師器、SD43から縄文土器と土師器が出土した。この内、2点を図示した。

200・201は土師器の壺A類である。ともに口縁端部の面取りと摘み上げが認められる。頸部には2段の横ナデが施され、201の外面のハケ目は一部ナデ消されている。

所属時期 壺A類が出土しており、SD46より新しいことから、IVa期以降の遺構と考えられる。

SD41（第82・83図）

検出状況 BN1からB02グリッドで検出した。検出した範囲では溝状遺構が複雑に重複するが、SD41はその中で最も新しく、明確に範囲を確認できた。長軸方位はN=37°-Wで、わずかに蛇行する。

堆積状況 埋土は単層である。埋土全体に粗砂や基盤層土ブロックが混じることから、人為的に埋め戻されたと思われる。流水の痕跡は確認できなかった。

掘方 断面形が逆台形に近い形状をとる。掘方底面の標高は南北でほとんど差がなく、流水の方向は不明である。

遺物出土状況 203はSD44から出土した破片と接合しており、重複するSD44の埋土に含まれていた可能性がある。

出土遺物 SD41からは、弥生土器・須恵器・土師器が出土している。この内2点を図示した。

202は弥生時代後期の壺の体部破片と考えられる。外面に柳描波状文や扇形の回転押圧文がみられる。

203は土師器の壺A類である。口縁端部に面取り・摘み上げが認められ、体部外面と口縁部から体部内面に細密なハケ調整を施す。口縁部外面はハケ目がナデ消されている。

所属時期 遺構の重複関係から、IVa期以降の遺構と考えられる。

SD42（第83・84図）

検出状況 BN2からB06で検出した。直線的に設置されており、掘方の西端でSD45と重複し、これより古い。また、長軸方位はN=65°-Wで、東に位置するSD50と類似する。検出位置が旧河道（第3章第1節参照）と集落域のある微高地の間であり、この溝状遺構の西側から徐々に地形が高くなる。

堆積状況 土層断面B-B'の1層はSD42の検出位置から北側へ広がっており、土質から、IIIb層に対応する堆積と思われる。そのため、埋土は2層～4層である。2層はラミナ堆積であり、流水の痕跡と思われる。B-B'の3層とA-A'の1層には基盤層土ブロックが混入し、対応する堆積と考えられる。B-B'の4層には、自然堆積と思われる粘質の強い堆積が認められた。なお、B-B'2層はA-A'では確認できず、上面が削平されたと考えられる。

掘方 断面は半円形をとる。掘方底面の標高は東の方が高いため、流水方向は東から西と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から出土した5点の内4点は、遺構西半の検出面から0.05m以内で出土しており、前述のIIIb層に対応する堆積から出土したと思われる。204のみ底面から出土した。

出土遺物 SD42からは、須恵器と土師器が出土した。この内2点を図示した。

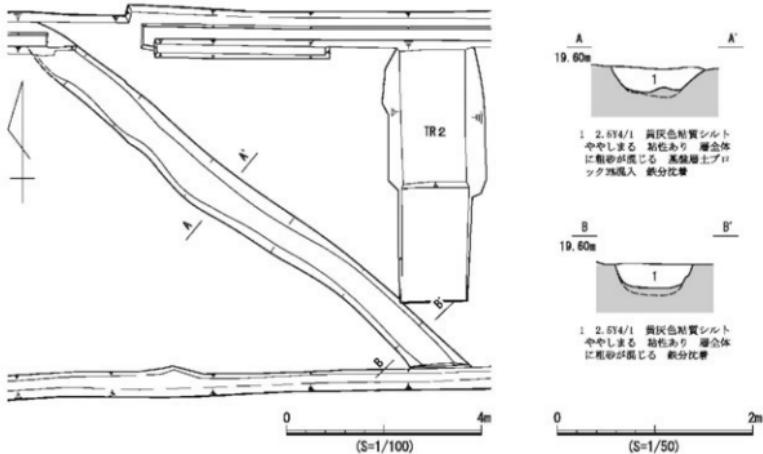
204は土師器の台付壺と考えられる。脚台部の内面にはしづり痕が残る。

205は須恵器の壺蓋A類である。口縁部が直線的に開き、端部を丸くおさめる。

所属時期 挖方底面から出土した 204 から、III期に属する可能性がある。

SD44・SD46（第 85～88 図）

検出状況 BN 2 から BO 3 グリッドで検出した。SD44 は東側で SD45、西側で SD46 と重複しており、これらより新しい。また、埋没後の埋土上面に SD41 が掘削された。当該範囲に集中する溝群の中では



第82図 SD41遺構図

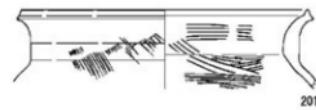
SD39 (197～199)



SD40 (200)



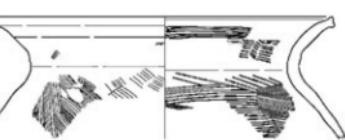
SD43 (201)



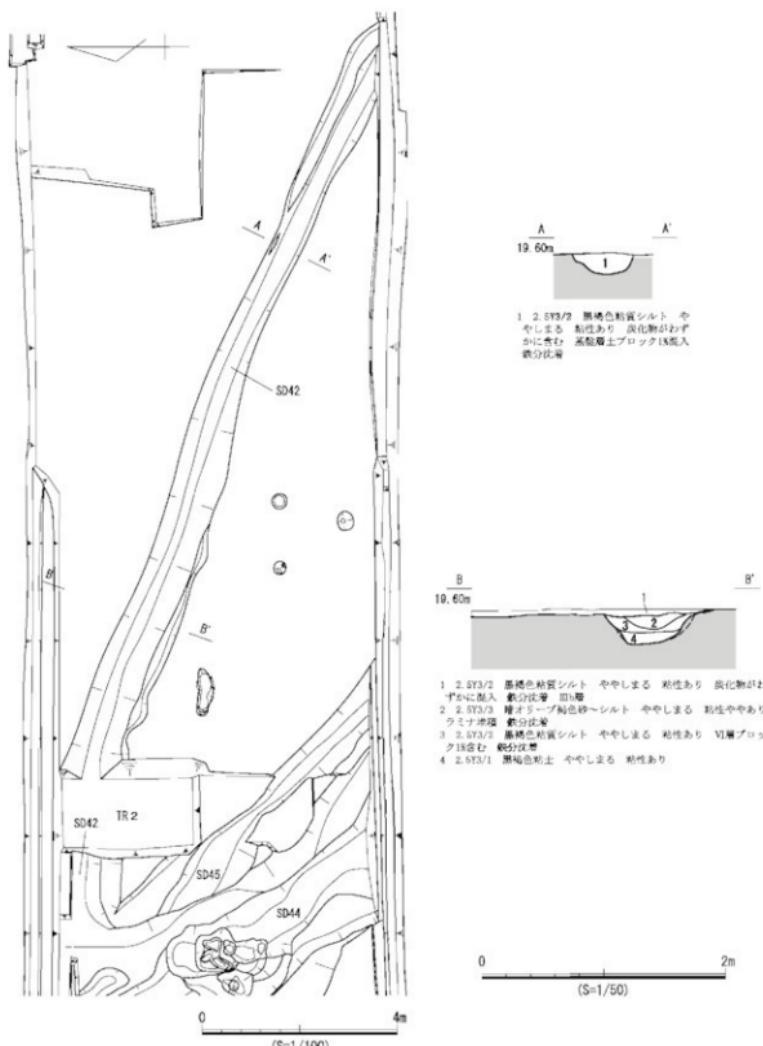
SD41 (202・203)



SD42 (204・205)



第83図 SD39～SD43出土遺物



第84図 SD42遺構図

最も幅が広く、約3mを測る。発掘区中央付近で僅かに湾曲しており、長軸方位はN-23°-Wである。SD46はSD44の西側で検出した溝状遺構であり、北端でSD40・SD43と重複している。いずれの遺構よりも古く大きく削平されているため、全容は不明である。

堆積状況 SD44の土層断面では、複数の溝状遺構が重複した状況が確認できる。最下層の9層と10層が最も初期の溝状遺構と考えられるが、流水の痕跡は認められない。一方、8層は9・10層を肩とし、断面形が逆台形をとる掘り込みである。ラミナ堆積が確認できることから、流水によって埋没したと考えられる。なお、平面でもこの堆積に伴う遺構底面の落ち込みを検出した（底面中央）。3～6層の段階では、溝の幅が広がっており、後述するP1・2を含めて大規模な改修が行われたと考えられる。3～6層もラミナ堆積であり、水路として継続的に利用されたと思われる。最終的に1・2層が堆積しているが、人為的に埋め戻したかどうかは不明である。SD46は埋土の残存状態が悪いため詳細は不明であるが、土層断面1層のみ、西側へ薄く堆積が広がる特徴が認められた。

掘方 完掘状態では2段の掘り込みとなった。発掘区北壁に接する部分の北西-南東方向の短い壅みは、SD45の痕跡である可能性がある。南側の底面の方が若干浅い。遺構底面のほぼ中央では、2基の土坑（P1・P2）を検出した（第86図）。溝状遺構の壁面や底面を削平するような掘方の状況から、溝状遺構設置後に掘削されたと考えられる。P1・P2とともに、底面に対して垂直又はやや斜めに杭（第86図E・F）が打ち込まれており、その根元に土器や礫が集積していた。使用されている杭は、Cのような角材もみられるが、ほとんどが先端に簡単な加工を施した丸木材（D）である。杭の先端は第3調査面のNR3まで達するまで打ち込まれており、頂部はP2の掘方上面から先が失われていることから、SD44の上層（1～7層）で確認できる溝状遺構の掘削によって折損した可能性がある。杭の配置は、SD44の長軸に対して直交する向きに分布している。P1・P2の埋土は、部分的に人為堆積と思われる部分も存在する（E-E'1層）が、杭の周囲はラミナ堆積や均質な黒色粘土の堆積（E-E'2・3層）が認められた。以上から、P1・P2は、流水の勢いを弱めるためのしがらみを備えた、一時的に水を溜めて利用する施設であった可能性がある。

遺物出土状況 第87図は主な遺物の出土位置を示した図である。いずれも検出面から0.3m以上下から出土しており、平面的な位置から前述の8層に含まれていたと考えられる。215の土師器壺は口縁部を欠くが、ほとんどの破片がP2の南側に集中している。SD44と重複するSD45の上層から出土した破片もあり（図87図右側の3点）、SD44が機能していた時期にも完全にSD45が埋まりきっていなかったことを示すと考えられる。213のみ、掘方底面から横位で出土した（写真図版15）。口縁部を欠くもののほぼ完形であり、祭祀に伴う可能性がある。

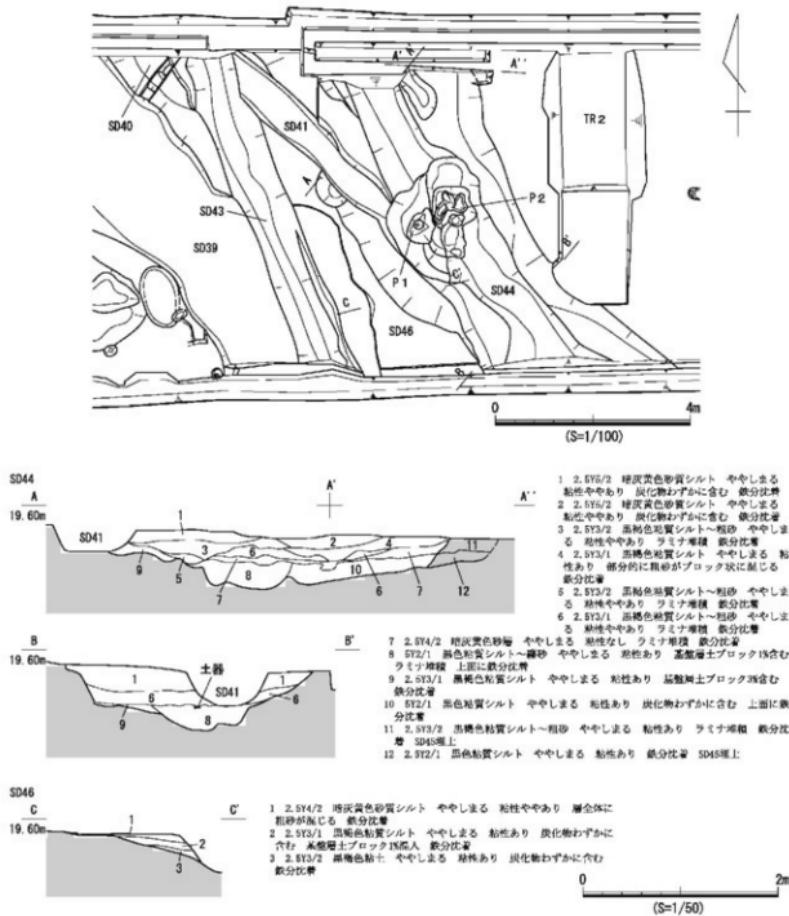
出土遺物 SD44から縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、木製品、SD46から土師器が出土した。この内11点を図示した。

206は弥生土器の壺の底部と考えられる。外面に縦位のハケ目を施す。207は土師器の宇田型壺と考えられる。口縁部がぐの字状に屈曲し、外面にハケ目を施す。208は土師器の高壺の脚部である。表面に面が作出され、断面が多角形状になる。内面にはしばり痕が残る。

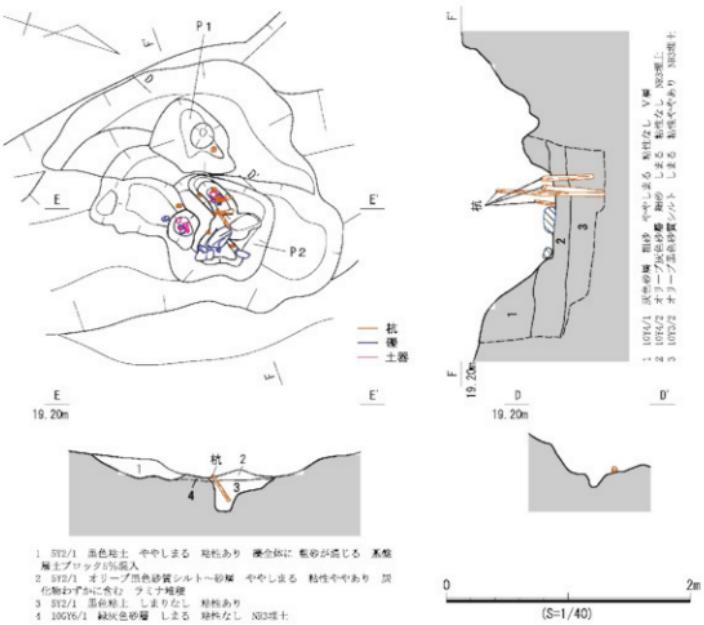
209～213は須恵器である。いずれも胎土が灰色で、重量感がある。209が有蓋高壺の蓋、210・211は壺蓋A類である。天井部の回転ヘラケズリ調整や口縁端部の面取り調整などに共通性がみられる。211のみほぼ完形である。212は壺身A類である。口縁部が外反しながら内傾して直立気味になる。残

存部位で回転ヘラケズリ調整は確認できない。213はハソウである。体部と頸部に二条ずつの沈線が廻り、体部の沈線の間にはヘラ状工具による連続刺突文が認められる。

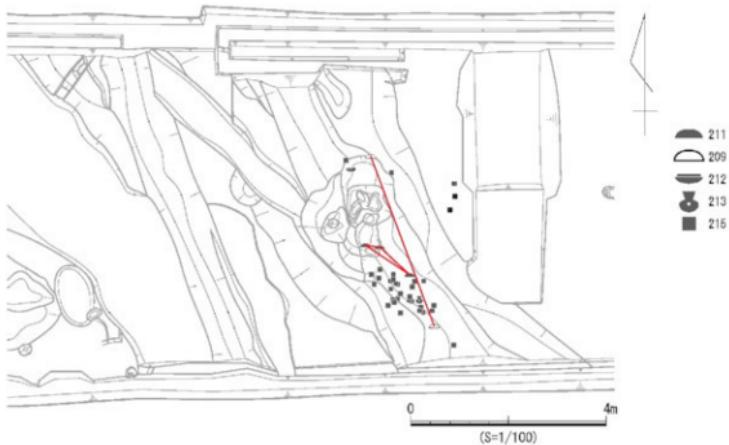
214～216は土師器の甕A類である。214は口縁部で、口縁端部が面取り・摘み上げされ、頸部には2段の横ナデを施す。内外面共に細密なハケ目が残るが、一部粗いハケが認められる。215は体部で、外面には継位、体部上半内面には横位の細密なハケ調整を施す。丸底の底部外面にはハケ調整より新しい、ヘラ状工具による刻みが認められる。216は214とほぼ同様の形態をとるが、残存部位でハケ目は



第85図 SD44・SD46遺構図①

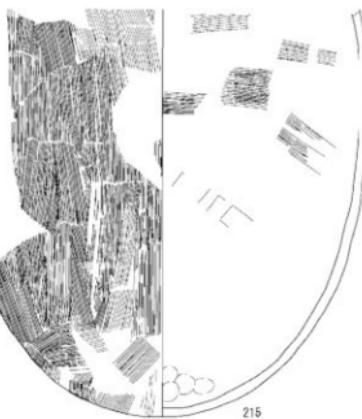
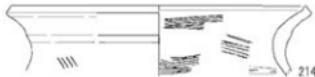
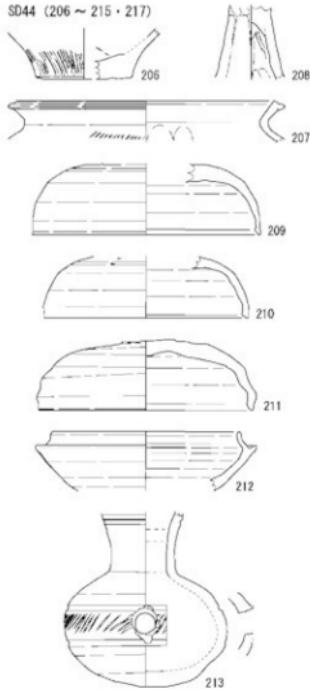


第86図 SD44・SD46遺構図②



第87図 SD44主な遺物の出土位置

SD44 (206 ~ 215・217)



SD46 (216)



第88図 SD44出土遺物

確認できない。

217は棒状の木製品である。出土位置や層位は前述の遺物集中地点に近い。長軸側の片面に丸みがあり、何らかの部材と考えられるが、両端が折損しているため用途は不明である。また、中央部に直径0.1cm程度の穴が開いているが、釘によるものがどうかは不明である。

所属時期 SD44は、出土した須恵器の時期からIVa期に設置された溝状遺構であり、同じ場所で複数の溝状遺構が設置されたと考えられる。SD46や後述するSD45も、SD44に先行する溝状遺構であり、SD44が継続して水路としての役割を担ったと推定される。なお、SD44から出土した須恵器の多くは、SI7で出土したものより一時期古いため、SI7が設置された時期には、西側のSD39やSD43の位置に水路が移っていた可能性がある。

SD45(第89・95図)

検出状況 BN2からBO3グリッドで検出した。SD44と重複しこれより古く、発掘区北壁付近でSD42と重複し、これより新しい。長軸方位はN-48°-Wで、北西-南東の軸に近い。

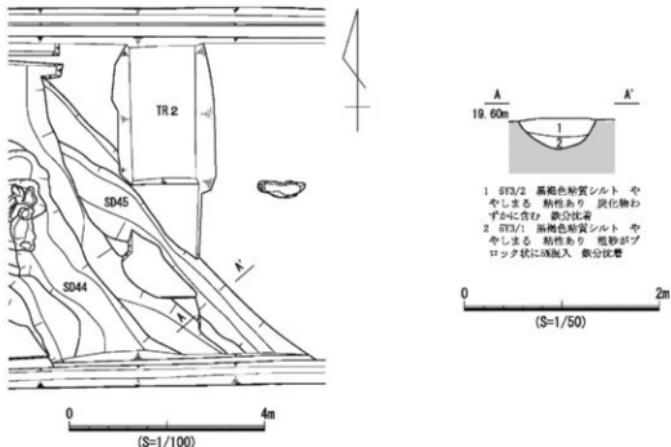
堆積状況 埋土に粘質があり、2層(A-A')には粗砂がブロック状に混じる。流水の痕跡は認められなかった。

掘方 断面形は半円形をとる。TR2の西側で底面が2段になるが、堆積の違いは確認できなかった。

遺物出土状況 土師器壺A類の215は、本遺構で出土した破片とも接合した。

出土遺物 SD45からは、土師器、須恵器が出土した。この内3点を図示した。

218は土師器の台付壺である。外面に縦位の板ナデのような痕跡が残る。219は須恵器の高杯である。外面が灰色、断面が明褐色で、SD44から出土した須恵器と共に通す。杯部底部の外面に回転ヘラケズリ調整を施す。220は土師器の壺A類である。口縁端部が面取り・摘み上げされ、頸部には2段の横ナデを施す。体部の内外面に細密なハケ目が残る。



第89図 SD45遺構図

所属時期 出土した須恵器からIV a期に属する遺構であり、SD44に先行する溝状遺構と考えられる。

SD47・SD48（第90図）

検出状況 B0 8からB012グリッドで検出した。SD47・SD48ともに発掘区の南壁から発し、湾曲して発掘区外に延びる。長軸方位はN-89° -Eでほぼ東西方向に近い。SD46・SD47西側のDN 5からD0 8グリッドの間には旧河道が存在し、第2調査面で最も地形が低いが、本遺構はこれよりやや標高が高い位置に設置されている。両遺構ともにSD49と重複してこれより古いが、SD47とSD48は発掘区内での重複はみられなかった。

堆積状況 SD47・SD48とともに、粘質が強い基盤層土ブロック混じりのシルトが堆積しており、流水の痕跡は認められなかった。

掘方 SD47・SD48ともに断面が半円形のよく似た形状をとる。SD47の掘方底面の標高は西が低いが、SD48は差がみられなかった。

遺物出土状況 SD47から土師器が1点のみ出土し、SD48からは遺物が出土しなかった。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 出土遺物や遺構の重複から判断することはできないが、掘方の形状や遺構の長軸方位が類似するSD43やSD50に近い時期とすれば、III期にまで時期が遡る可能性がある。

SD49（第91・95図）

検出状況 BN10からB010グリッドにおいて、第1調査面のSD 6直下で検出した。長軸方位はSD 6と同じ（N-6° -E）で、発掘区南壁付近でSD47・SD48と重複し、これより新しい。

堆積状況 SD49の土層は、中央の溝部分（2層）とその東西にある畦畔状の高まり（3層）に分かれる。2層は小礫を含む黒褐色の粘質シルトであり、流水の痕跡は認められない。3層は上面には帯状の鉄分が沈着しており、Ⅲ b層を耕土とする畦畔の可能性がある。なお、A-A'の断ち割り調査で確認した基盤層は、V層ではなく流路埋土であり、BN 5からB0 5グリッドに位置する旧河道から分かれた小規模な河道が存在したと考えられる。

掘方 本来の掘方はSD 6の掘削に伴って削平されたと考えられる。3層を除去したところ溝状の掘り込みの東西が浅いテラス状となつたが、その性格は不明である。

遺物出土状況 出土遺物はいずれも破片である。近世陶器も出土しているが、SD 6から出土した22（第25図）と同一個体であり、SD 6の埋土が部分的に残存していたと考えられる。

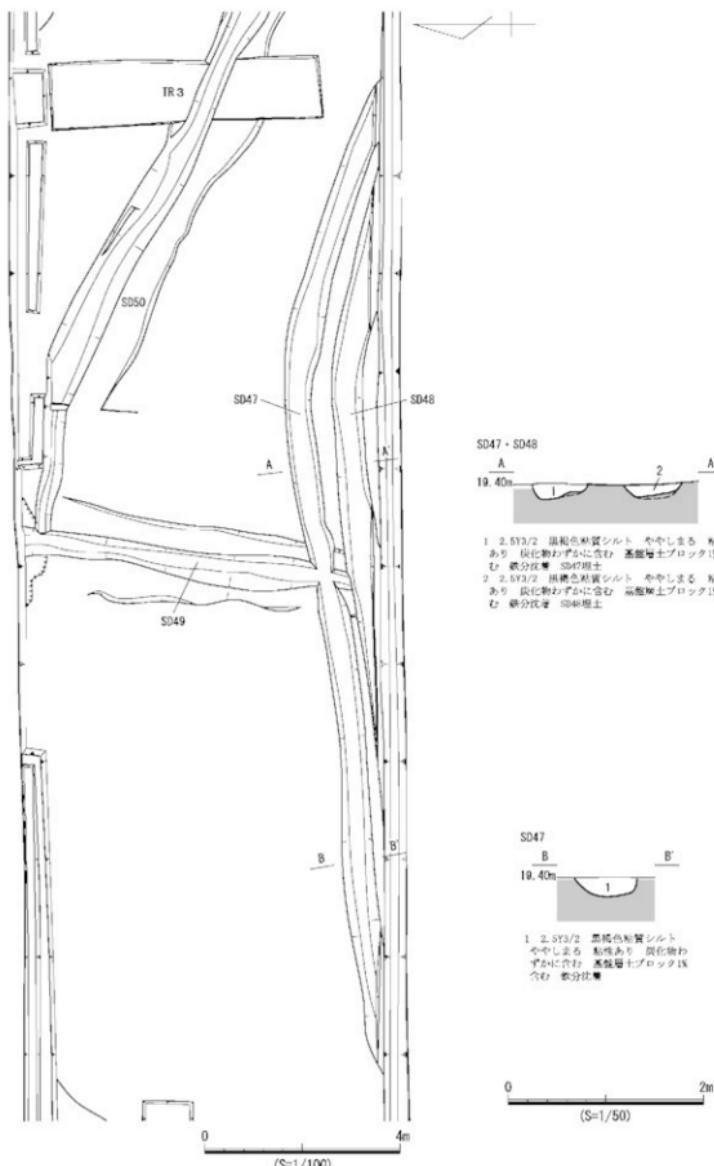
出土遺物 SD49からは、須恵器、土師器、近世陶器が出土した。この内2点を図示した。

221は須恵器の坏身C類である。底部外面に静止ヘラケズリを施す。胎土から美濃須衛製品ではないと考えられる。発掘区内から出土した坏身C類は221のみである。222は灰釉陶器の碗である。断面が角形の高台が付されており、K-14号窯式期の可能性がある。

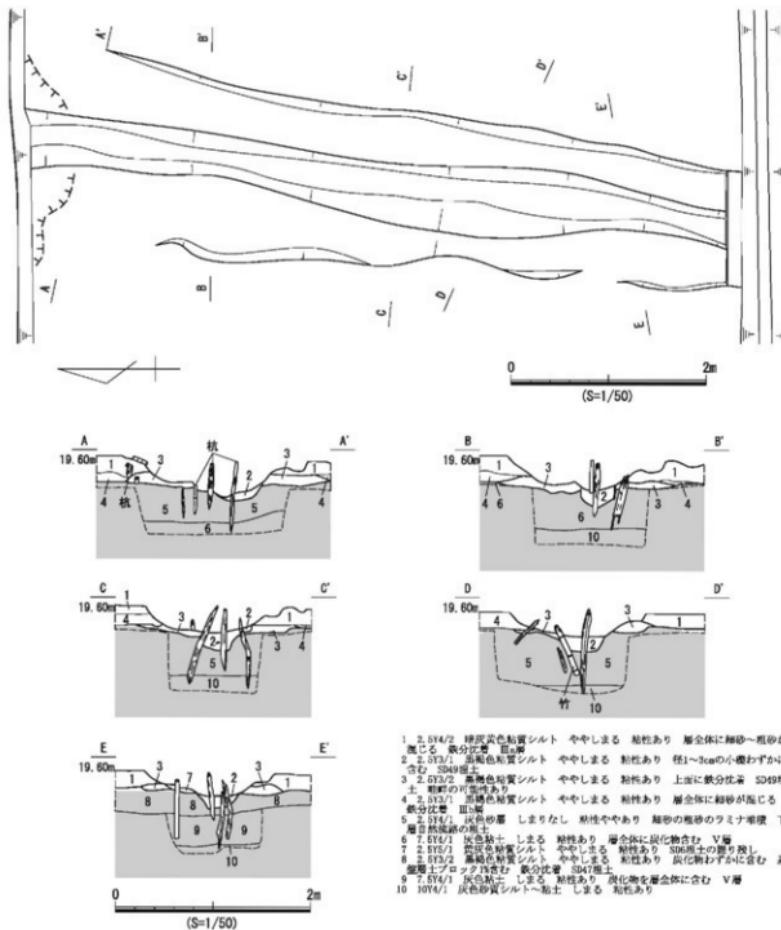
所属時期 出土した須恵器・灰釉陶器はV b期であるが、条里地割に関する遺構であることから、VI b期以降である可能性が高い。ただし、六里遺跡の他の遺構からは坏身C類が出土していない点は注目され、周辺の条里遺構の調査の蓄積を待って評価する必要がある。

SD50（第92・95図）

検出状況 BN11からB014グリッドで検出した。発掘区北壁付近で若干湾曲するが、ほぼ直線的に設置されている。長軸方位はN-63° -Wで、西側の旧河道上の低地を挟んだ西側に位置するSD42と一致する。



第90図 SD47・SD48遺構図



第91図 SD49遺構図

北端でSD49と重複し、これより古い。なお、基盤の断ち割り調査を実施したところ、SD49（第91図A-A'）で確認した旧河道堆積と同様な流路堆積を確認した（第92図A-A'）ため、この旧河道（に伴う低地）に沿って設置された構である可能性がある。

堆積状況 1層（第92図A-A'・B-B'）は、非常に浅いが幅広く堆積している。その下層の堆積は粘質が強く、ほとんど流れが無い状態で埋没した可能性がある。流水の痕跡は認められなかった。

掘方 断面が半円形に近い形状で、1層の堆積範囲がテラス状に広がっている。掘方底面の標高は遺構の両端でほぼ同じであり、流水方向は不明である。

遺物出土状況 土師器が検出面に近い高さから比較的多く出土している。

出土遺物 SD50 からは土師器が出土した。この内3点を図示した。

223・224は土師器のS字状口縁台付甕である。225は体部破片であるが、器壁の薄さやハケ目からS字状口縁台付甕である可能性が高い。223は口縁端部の外反が長く、刻み等も認められないことから、D類（財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1990）と考えられる。

所属時期 出土した土師器から、III期の前半に位置付けられる。

SD54(第93・95図)

検出状況 BN14 から B015 グリッドで検出した。平面形状はやや蛇行している。BN14 から B012 グリッドに溝状遺構が集中するが、その中で最も西に位置する。長軸方位がほぼ南北方向(N-3°-W)であるが、遺構の時期から条里地割との関係はないと考えられる。発掘区南壁付近で重複するSD57より古い。

堆積状況 粘質のある基盤層土ブロック混じりの土が堆積しており、流水の痕跡は認められない。

掘方 断面形は逆台形で、東側の SD60 と類似する。掘方の両端で底面の標高に差がないため、流水方向は不明である。

遺物出土状況 検出面に近い深さから、須恵器が1点のみ出土している。

出土遺物 SD54 から出土した遺物は226のみである。

226は坏身A類である。色調が灰色で、外面は受部下まで回転ヘラケズリ調整されている。SD44 出土の須恵器群と同時期のものと思われる。

所属時期 遺構の重複から SD56・SD57 より古い。SD57 がIV d 期の遺構と考えられることからそれ以前の遺構であり、226 の時期から IV a 期に位置付けられる可能性がある。

SD55・SD56(第93図)

検出状況 BN15 から BN17 グリッドで検出した。ともに検出した範囲の中央が、東へ緩やかに湾曲している。長軸方位は共に N-60°-E で、ほぼ平行している。SD56 は遺構の南端で SD57 と重複し、これより新しい。

堆積状況 両遺構とともに、粘質のある基盤層土ブロック混じりの埋土が堆積しており、流水の痕跡は認められなかつた。

掘方 両遺構とともに断面形が半円形をとる。幅はほぼ同じ(0.42 m)であるが、0.05 m程度 SD56 の方が深い。掘方底面の標高は南端の方がわずかに高い。

遺物出土状況 SD55 から須恵器が出土したが、特徴的な出土状況はみられなかつた。SD56 からは遺物が出土しなかつた。

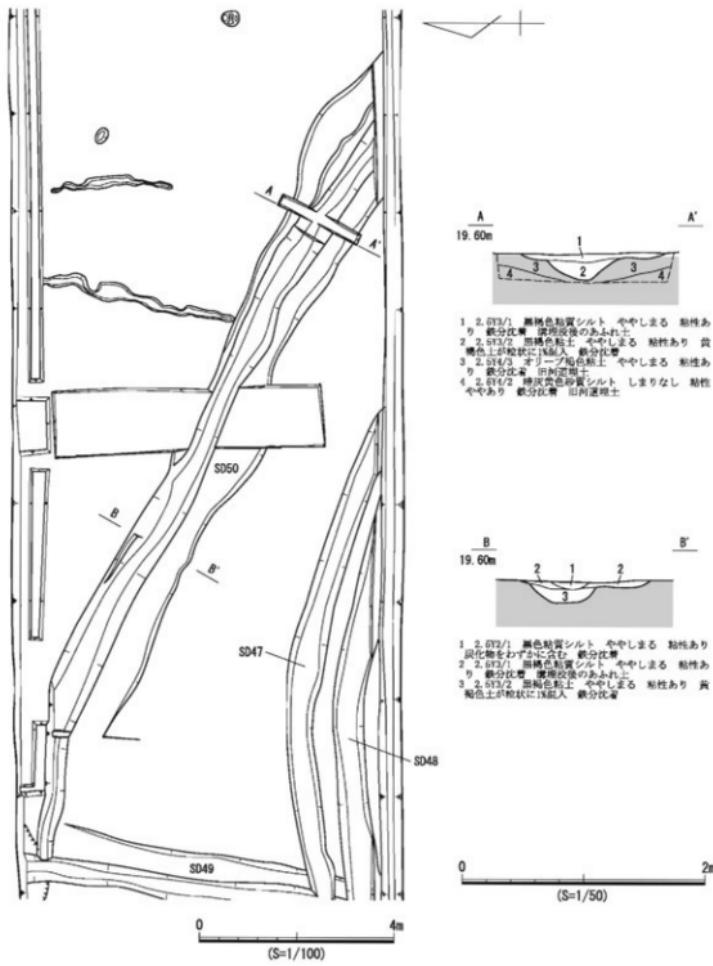
出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかつた。

所属時期 SD57 より新しいことから、IV d 期以降の遺構と考えられる。

SD57(第93・95図)

検出状況 BN15 から BN16 グリッドで検出した。長軸方位が、周辺の溝状遺構と同様に北から東へ傾き大きく蛇行する。南端で SD56 と重複しており、これより古い。

堆積状況 周囲の溝状遺構とは異なり、粗い砂の堆積がみられた(H-H' 2層)。一時的に流水があつ

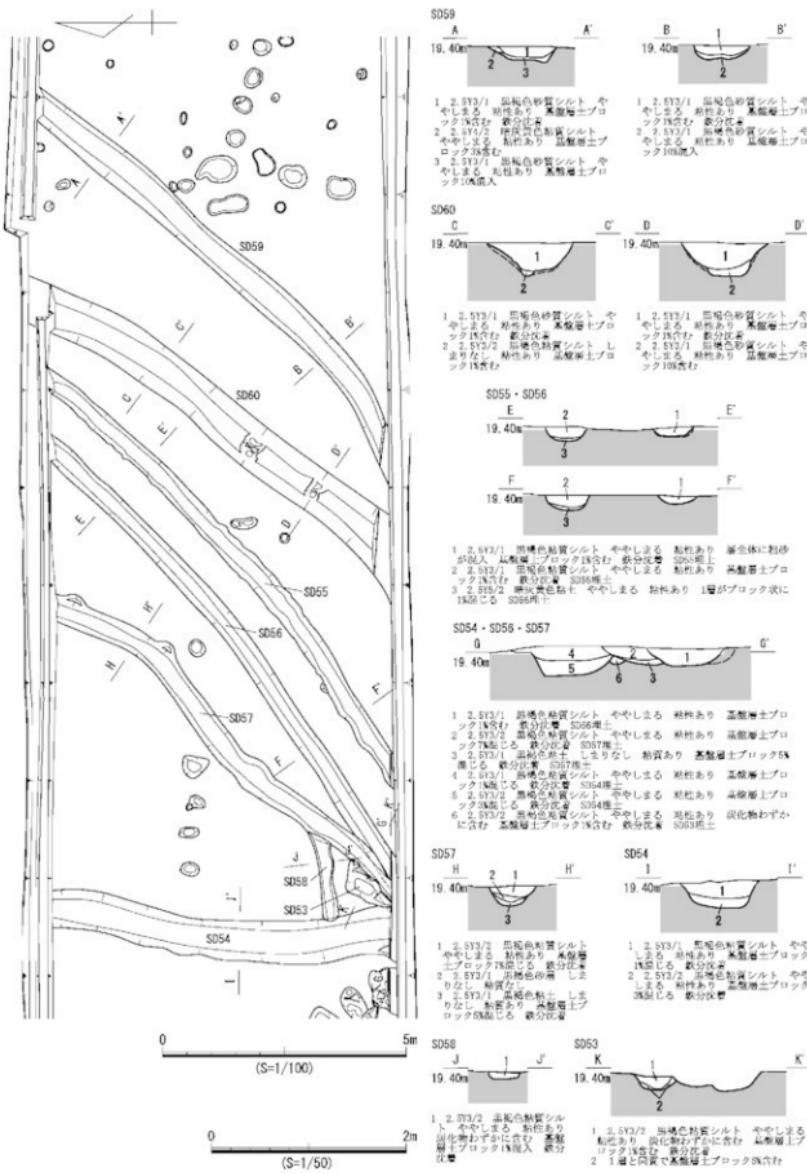


第92図 SD50遺構図

た可能性がある。

掘方 断面形は半円形をとる。底面の標高は南側の方がやや高い。

遺物出土状況 出土した須恵器壺蓋C類(227)は、BN15～B016グリッドのⅢ層から出土した破片と接合し、ほぼ完形の個体となった。遺構内の埋土表層から出土しているため、本来本遺構に含まれていた破片が、耕作などの影響で原位置から動いたと考えられる。



第93図 SD54～SD60遺構図

出土遺物 SD57 から出土した遺物は、227 のみである。

227 は須恵器の壺蓋C類である。天井部に擬宝珠摘みを付し、体部の3分の2程度まで回転ヘラケズリ調整される。内面に一文字と思われる墨書きが書かれているが、訛文は不明である。

所属時期 227 の時期から、IV d 期に属する遺構と考えられる。

SD58（第93図）

検出状況 B015 グリッドで検出した。SD54 と SD57 の間に東西方向で設置されている。遺構検出で SD54・SD57 と重複し、両遺構より古い。

堆積状況 粘質のある基盤層土ブロック混じりの土が堆積しており、流水の痕跡は認められない。

掘方 断面形は半円形をとる。底面は平らで、東西端部の比高差はほとんどない。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

所属時期 SD54・57 と重複することから、IV a 期以前の遺構と考えられる。

SD59（第93図）

検出状況 BN16 から B018 グリッドで検出した。南端付近で西に湾曲するが、ほぼ直線的に設置される。長軸方位は N-44° -W で、北東 - 南西方向に近い。

堆積状況 粘質のある基盤層土ブロック混じりの埋土が堆積しており、流水の痕跡は認められない。

掘方 掘方の断面形は逆台形に近い。掘方底面の標高は北側の方が僅かに低い。

遺物出土状況 検出面から 0.05 m 以内の表層から土師器が出土している。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 検出状況や長軸方位から、周囲の溝状遺構と同じ IV 期の遺構と考えられる。

SD60（第93図）

検出状況 BN16 から B017 グリッドで検出した。発掘区中央付近で若干蛇行する。長軸方位は、N-35° -E である。

堆積状況 粘質のある基盤層土ブロック混じりの埋土が堆積しており、流水の痕跡は認められない。

掘方 掘方の断面形は逆台形に近く、SD54 と類似する。掘方底面の標高は南北でほとんど差がない。土層断面 D-D' の位置とその約 1.5 m 北側の底面に崖みがあり、多量の基盤層土ブロックが混入する土が堆積していた。橋杭の痕跡である可能性もあるが、柱痕跡などは確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

所属時期 検出状況や長軸方位から、周囲の溝状遺構と同じ IV 期の遺構と考えられる。

SD61（第94図）

検出状況 BN19 から B020 グリッドで検出した。検出面である V 層上面に、黒褐色土がブロック状に散在するような検出状況であり、掘り込みはほとんど残存していなかった。長軸方位は N-52° -E で、北から南へ緩やかに湾曲する。

堆積状況 埋土はほとんど残存しておらず、上面の耕作によって削平されたと考えられる。

掘方 ほとんど残存していないため、詳細は不明である。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

所属時期 西側の溝状遺構群と同様な時期の遺構と考えられるが、詳細は不明である。

4 故溝状遺構群

SN26 (第96図)

検出状況 発掘区の東端のCN 1からCO 2グリッドで検出した。7条の溝状遺構が0.2～0.5mの間隔で設置された故溝状遺構群としたが、遺構の深浅により途切れているものが多い。長軸方位は北から東へ8°～13°傾き、SN26-D 7のみ22°で、若干傾きが大きい。

堆積状況 埋土は、上層であるⅢ層と類似する粘質シルトで、基盤層土ブロックを比較的多く含む。なお、本遺構の埋土を対象に実施した分析では、イネ科の花粉やプラント・オバールが検出されており、上層のⅢ層の影響が強いと思われる（第5章第2節）。

掘方 掘方の壁面や底面は不定形であり、取水や区画のために意図的に設置した溝ではないと考えられる。本来、本遺構の上面にあった耕土上面から掘り込まれた痕跡が、V層上面に残存した遺構と推定される。

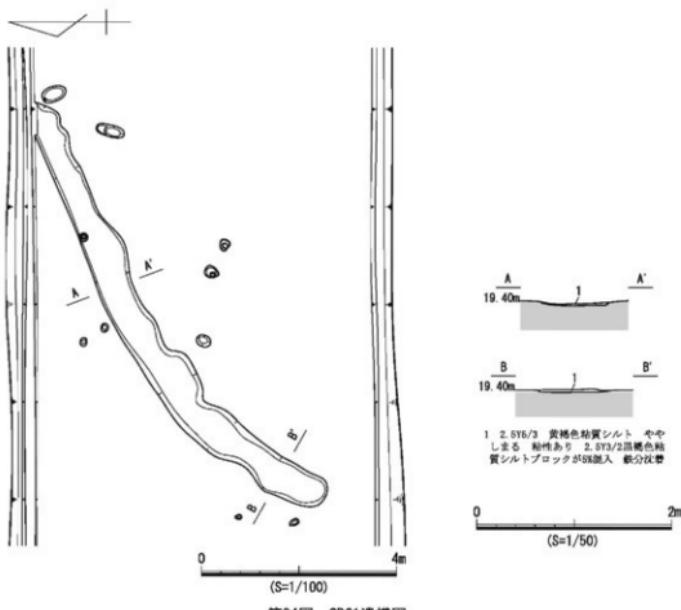
遺物出土状況 特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 繩文土器、須恵器、土師器が出土しているが、図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 出土した須恵器から、IV期以降の遺構と考えられる。

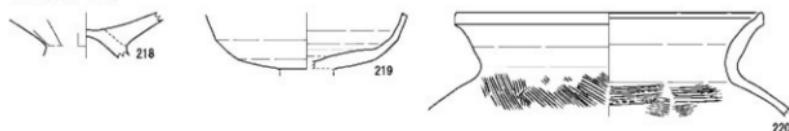
SN27 (第96・101図)

検出状況 A014からAP15グリッドで検出した。13条の溝状遺構が約0.5mの間隔で設置されている。長軸方位は、ほぼ南北軸に一致する。SD26やSD35と重複しており、これより新しい。両端が発掘区内



第94図 SD61遺構図

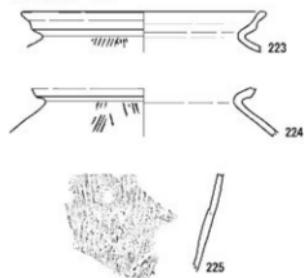
SD45 (218 ~ 220)



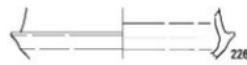
SD49 (221・222)



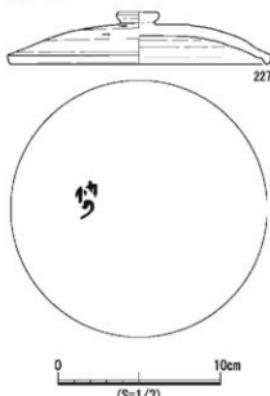
SD50 (223 ~ 225)



SD54 (226)



SD57 (227)



第95図 SD45・SD49・SD50・SD54・SD57出土遺物

に收まるのはD10・D12のみで、それ以外は南側が発掘区外へ続く。長軸方位から、SD31や里境溝状遺構群と関係する遺構と考えられる。

堆積状況 埋土は上層のⅢ層に類似する。本遺構の埋土を対象に実施した分析では、SN27-D13からコウヤマキ属の花粉が突出して多く検出され、同様な傾向が、長軸方位で類似する里境溝状遺構群のSD24でも確認できる。プラント・オパールについては全体的な検出数が少なく、特徴的な傾向はみられなかった。

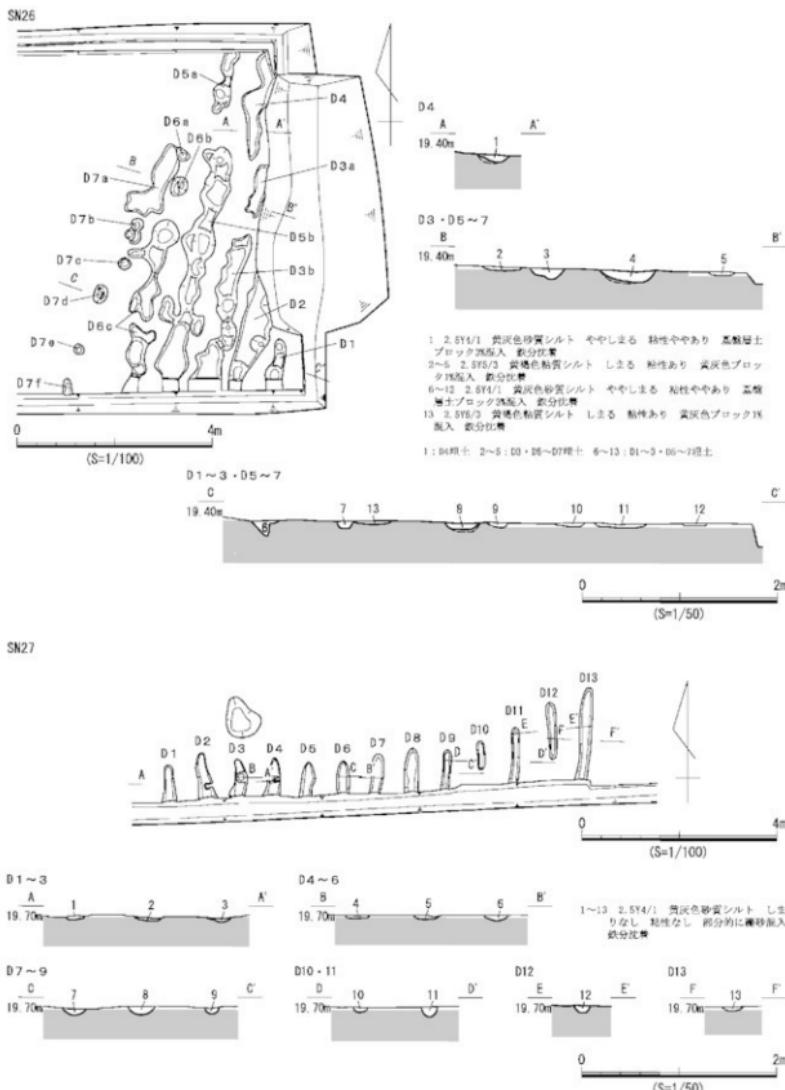
掘方 断面形は半円形をとるものが多い。掘方底面は凹凸が多く不定である。

遺物出土状況 特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 SN27からは須恵器、灰釉陶器、土師器が出土している。この内2点を図示した。

228は灰釉陶器の碗の口縁部と考えられるが、本来の形状は不明である。229は土師器壺A類である。口縁端部の面取り・摘み上げが認められ、頸部に2段の横ナデを施す。頸部には厚みがあり、頸部と体部の境を強くなることによって明瞭な段が形成される。体部外面はハケ調整を施すが、内面には認められない。

所属時期 灰釉陶器が出土していることや長軸方位から、VIc期に位置付けられる。



第96図 SN26・SN27遺構図

5 焼土遺構

SL 1 (第97・101図)

検出状況 AN20からBO 1グリッドで検出した。SI 7、SB 1、SB 2といった建物遺構と隣接する。遺構の東側はSD39と重複してこれより古く、西側で重複するSK 8より新しい。また、SB 3-P 2とも重複しており、これより新しい。遺構検出作業段階で炭化物や焼土の広がりを確認したため、SK 8・SK 9を堅穴建物、SL 1をそのカマドと考えたが、遺構掘削を進めた結果、それぞれ別の遺構であることが判明した。平面形が橢円形で、長軸方位はN=15° -Ⅷである。

堆積状況 多量の炭化物・焼土が混じる2層とわずかに炭が混じる3層に分けることができる。両層ともに基盤層上ブロックが多い。明確な被熱痕は認められなかつた。

掘方 2層及び3層を除去した結果、浅い壠鉢状の土坑となつた。この土坑の底面に硬化などは確認できなかつた。

遺物出土状況 埋土中から須恵器や土師器が出土した。須恵器(230)のみ埋土の底面付近から出土した。

出土遺物 SL 1からは須恵器、土師器が出土した。この内1点を図示した。

230は須恵器の有蓋高杯と考えられる。口縁部は内傾しながら直線的に立ち上がるがやや短い。受部と体部の境は明瞭である。外面ともに灰色で、断面が灰赤色の色調をとる点などはSD44出土の須恵器と類似するが、器壁が薄く残存部位で回転ヘラケズリ調整が認められない。

所属時期 230の時期から、SI 7等と同じIV b期の遺構である可能性がある。

6 土坑

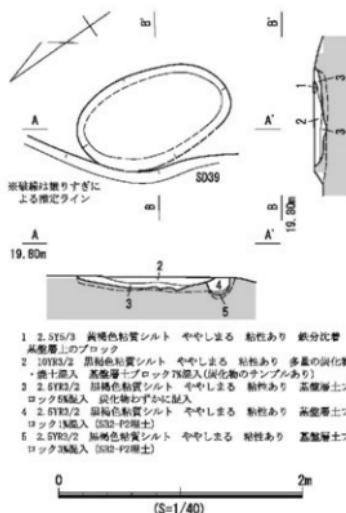
SK 8・SK 9 (第98・101図)

検出状況 AN20からBO 1グリッドで検出した。遺構の西側にSB 1・SB 2・SI 7、東側に溝状遺構群、南側にSB 3、東側にSL 1が隣接している。検出当初は複数の堅穴建物の重複と考えていたが、重複が確認できなかつたため、土層観察畦を残して全体に掘り下げを行つた。その結果、同質の埋土が堆積した2基の堅穴状の土坑と判明した。平面で重複は確認できなかつたが、土層断面の観察により、SK 8の方が新しいと判断した。遺構の東側で重複するSD39、SL 1より古い。

堆積状況 両遺構ともに、基盤層上ブロックが多量に混じる。

掘方 壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形が浅い皿状をとる。底面には部分的に凹凸があり、硬化等はみられなかつた。また、掘方の底面から柱穴など別の掘り込みは確認できなかつた。

遺物出土状況 SK 8の埋土上層から須恵器の有蓋高杯(231)が出土している。



第97図 SL 1 遺構図

出土遺物 SK 8・SK 9からは須恵器と土師器が出土している。この内、SK 8の1点を図示した。

231は須恵器の有蓋高壺である。口縁部は内傾しながら短く直線的に立ち上がる。受部と体部の境は明瞭で、脚部との接合痕周縁に回転ヘラケズリを施す。

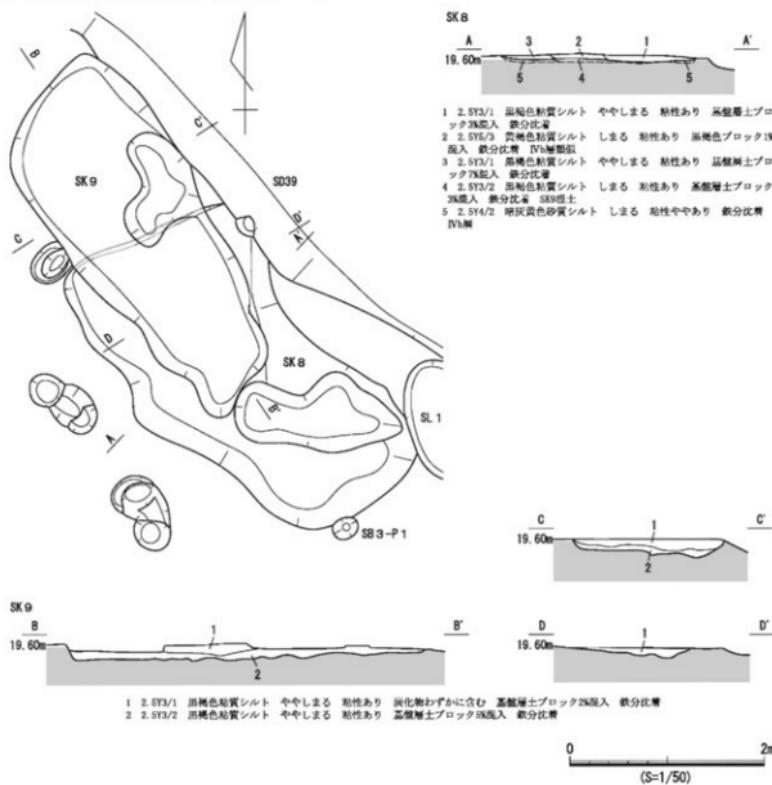
所属時期 出土した232の時期から、IV b期の遺構と考えられる。

SK10(第99・101図)

検出状況 A0 4グリッドのSI 1床面西端で検出した。遺構の一部が発掘区壁面にかかっており、全容は不明である。発掘区壁面での土層観察から、SI 1より新しい遺構と判断した。

堆積状況 埋土は3層に分けることができ、2・3層にはV層のブロックが多い。埋土中ほどに、径20cm程度の亜角礫が入れられていた。

掘方 上面をSI 1の掘削に伴って掘り下げてしまったため、掘方の全容は不明である。残存部分は皿状の断面形をとる。底面には凹凸が目立つ。



第98図 SK 8・SK 9遺構図

遺物出土状況 2・3層から土師器壺(232)がまとまって出土した。同一個体が含まれる可能性は高いが、ほとんど接合しなかった。

出土遺物 SK10からは須恵器、土師器が出土した。この内1点を図示した。

232は土師器の壺A類である。口縁端部に面取り・摘み上げが認められる。頸部の器壁が厚めで、外反が強い。

所属時期 SI 1との重複から、IV b期以降の遺構と考えられる。

SK14 (第99図)

検出状況 A0 4からA0 5グリッドで、SD13の掘方南壁で検出した。

堆積状況 2層は砂の互層であり、ラミナ堆積の可能性がある。底面近くの2層中から、長径約20cmの長楕円礫が横位で出土した。

掘方 SD13の壁面で検出したためSD13に削平されているように見えるが、埋土の堆積から、SD13と一体の遺構である可能性がある。平面形は不定形で、底面の標高はSD13底面より僅かに低い。

遺物出土状況 2層中から土師器が出土した。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 SD13と同時期とすれば、IV c～IV d期に位置付けられる。

SK25 (第99図)

検出状況 A013グリッドで検出した。SK26と重複し、これより古い。平面形は楕円形に近い形状をとる。

堆積状況 掘方壁面の中程に段がみられるがこの部分で堆積の変化はなく、同じ土が堆積していた。埋土はIV b層のブロックが多量に混入しており、人為的に埋め戻されたと考えられる。

掘方 半割調査で掘りすぎてしまったため図示していないが、本来は壁面中程の段が全周すると思われる。底面形も上端と同様に楕円形をとる。

遺物出土状況 特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 SD26より古いため、IV d期以前の遺構と考えられる。

SK26～SK28・SK30 (第99図)

検出状況 A014グリッドで検出した。SK28は平面形が不定形な形状をとる浅い土坑であるが、それ以外は平面形が円形となる明瞭な掘方をもつ。SK26とSK30が重複し、SK26の方が新しい。

堆積状況 いずれの土坑も埋土中にIV b層土のブロックが多量に混入している。SK26の4層は、IV b層と非常に似た堆積であり、SD35下層と同様に第3調査面の遺物包含層掘削中に確認した。なお、掘方の形状が異なるSK28にも同様な埋土が堆積している。

掘方 SK26・SK27・SK30は断面形が台形若しくは方形の明瞭な掘方をもつ遺構で、周辺に同様な遺構ではなく、異質な印象を受ける。SK28のみ断面形が皿状で浅い。

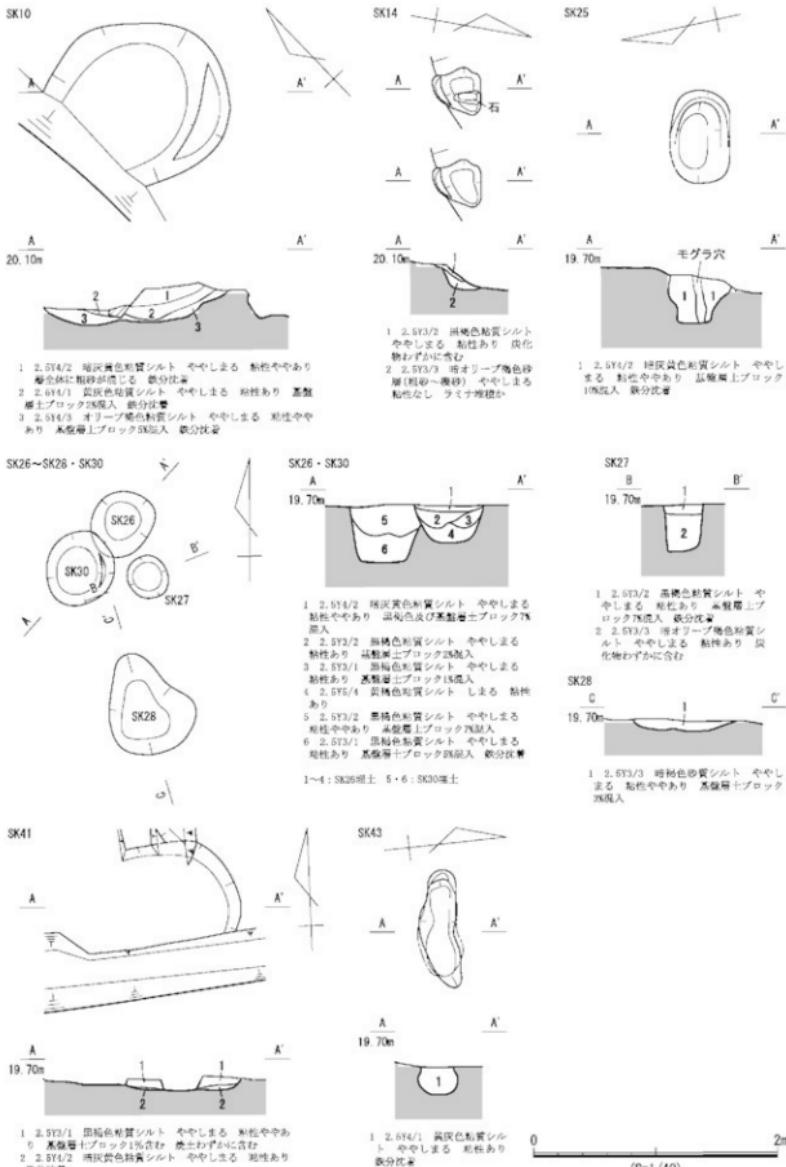
遺物出土状況 特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 出土した土師器からIV b期以降の遺構と考えられるが、詳細は不明である。

SK41 (第99図)

検出状況 B0 1グリッドで検出した。SD39と重複しており、これより新しい。また掘方底面からSB 3



第99図 その他の土坑遺構図

-P 3 を検出した。本遺構は、水田の取水管を保護するため掘り残した畦の下で確認した遺構であり、遺物包含層掘削の際に掘り下げすぎてしまったため、西半分のみ検出した。また、南側は発掘区外であるため、検出できたのは全体の 1/4 程度である。

堆積状況 1 層は IV b 層のブロックがわずかに混入する。2 層は、基盤の SD39 埋土に類似する。

掘方 浅い皿状の断面形をとる。

遺物出土状況 特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 重複関係では最も新しい遺構で、IV b 期以降の遺構と考えられる。

SK43 (第 99 図)

検出状況 BN 3 から BO 3 グリッドで検出した。平面形は、東西方向に細長い長楕円形をとる。

堆積状況 III 層に類似した埋土が堆積している。SD42 と SD45 の間には、SK42・SK44・SK45 と本遺構の 4 基があり、ほぼ同色の埋土が堆積しているが、SK43 は他の土坑の埋土に含まれる粗砂がみられない。

掘方 南北の掘方壁面が上端より広がって袋状になる。東西の壁面は直立し、掘方は明瞭である。底面は凹凸が目立つ。

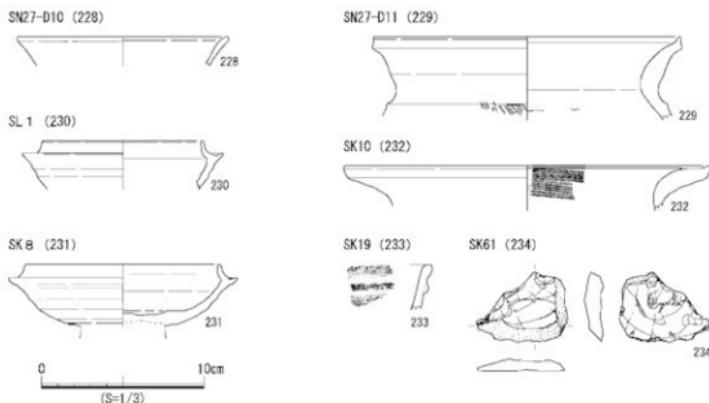
遺物出土状況 特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 長軸方位から条里プラン施行後の遺構と考えられ、埋土が III 層に類似することから、上層の耕作に関係する遺構と考えられる。

BN15 ~ BO20 グリッドの土坑群 (第 101 図)

BN15 ~ BO15 グリッド以東からは複数の土坑を検出したが、いずれも平面形や掘方底面が不定形で、締まりの悪い単層の埋土が認められる。これらの土坑の埋土は、①III 層に類似 (III 層系)、②粗砂を多量に含む黄灰色砂質シルト (黄灰色系)、③粗砂を含む黒褐色色粘質シルト (黒褐色系) の 3 種に分類可能



第100図 敷溝状溝跡群・焼土遺構・土坑出土遺物

であり、第101図にその分布を示した。①はBN18・19グリッド付近に散在し、検出位置にまとまりがない。②はBN15グリッドとB018グリッドに偏在しており、一列に並んでいるような印象を受ける。このような列状になる土坑は、稻荷遺跡発掘区西部でも確認した（第4章第3節）。なお、発掘区東端で検出したSN26の埋土も②に類似する。③はBN18・B018グリッド付近に集中しており、やや小型で深いものが多い。遺物は③のSK60、SK61、SK78、SK86、SK91から須恵器と土師器が、②のSK70から土師器が、それぞれ1点のみであるが出土しており、①からの出土遺物はない。

Ⅲ層からは多量のプラント・オパールが検出されており、水田耕作土である可能性が高いことはすでに述べた（第3章第1節）。①の土坑は、このⅢ層の耕作に伴う踏み込みなどの耕作痕であることが想定される。一方、Ⅲ層に似るが多量の粗砂が混じる②や、Ⅲ層とは全く色調や土質が異なる③については、Ⅲ層の耕作によって耕土が失われた水田に伴うことが予想される。②はSN26の長軸方位や土坑の並びから、条里プラン施行以前の水田、③は②以前の初期水田（湿田）に伴う可能性を考えたい。

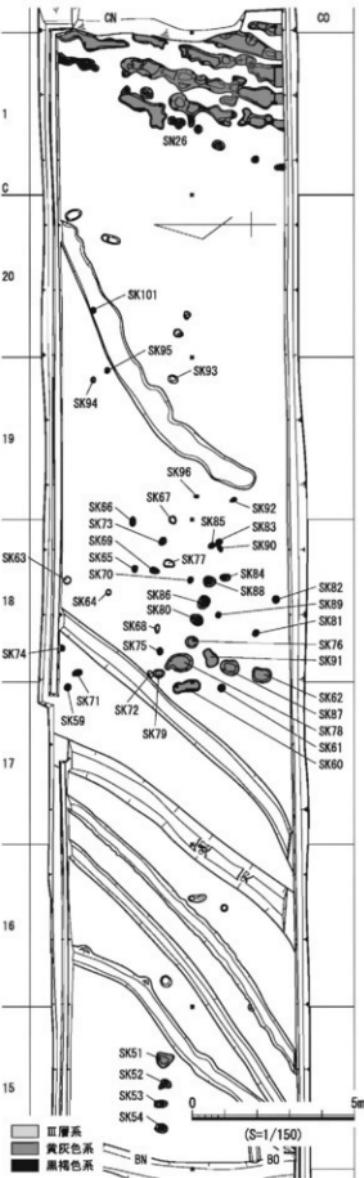
その他の土坑の出土遺物（第100図）

233は縄文土器の第II群A2i類とした。口縁端部から離れた外面に断面が蒲鉾形をとる素文突帯を施す。234は石器のスクレイパーである。チャートの横長剥片下端に連続剥離を施し、刃部とする。

7 遺物包含層出土遺物（第102図）

本項では、Ⅲ層から出土した遺物を掲載して報告する。全体としてはVII期の遺物が目立つが、VIII期の遺物も僅かに認められる。

235～239は須恵器である。IVb～IVc期に属するものが多い。235は壊身A類で、口縁部の立ち上がりが短く、受部がほとんど突出しない。胎土から美濃須衛窯産の可能性がある。236・237は高坏である。236は脚部外面にカキ目調整を施す。237は



第101図 BN15～B020土坑群の配置

薄手で、方形透かしが認められ、外面に櫛描波状文を施す。238は短頸壺と考えられる。236とよく似た色調をとる。239は横瓶である。閉塞部に近い破片であり、外面にカキ目とタタキ目が確認できる。内面は回転ナデ痕と当て具痕が明瞭に分かれている。

240～243は灰釉陶器である。いずれもVIb～VIc期に属すると考えられる。240は折縁皿で、体部中程が屈曲する。灰釉を濁け掛けで施す。241は碗であり、高い断面三角形の高台が付される。底部外面に「一」と書かれた墨書きが認められる。242は皿で内面全体に自然釉が付着する。243は段皿で内面に明瞭な稜を施し、外面には灰釉が認められる。

244～251は山茶碗である。244は尾張型の碗で、低く扁平な高台に粗穀痕が残る。245・246は厚手で胎土に砂が多く含むが胎土は精良であり、共に尾張型の7型式以降に比定される。247・248は東濃型の山茶碗で、器壁が薄く細い粘土紐状の高台が付される。247の内面にはタール状の付着物が認められる。249は尾張型の小碗で、250は小皿である。第4型式から第5型式の主要な変化として、小碗から小皿への変換があり（藤澤1994）、当該時期の資料と考えられる。251は片口鉢であるが胎土が精良であり、美濃須衛窯産の可能性がある。欠損しているが、高い断面三角形の高台が付くことが予想され、内面には静止指ナデ痕が認められる。また、底部と体部の接合痕が明瞭に残る。

252～255は古瀬戸系施釉陶器である。252は縁釉小皿である。口縁部内外面に鉄釉を施す。253は鉢皿である。口縁端部が摘み上げられ、細い帯状になる。口縁部内外面に灰釉を施す。他のものとは異なり、古瀬戸中期に位置付けられる。254・255は平碗と考えられる。内外面に灰釉を施す。

256は大窓で、端反皿又は丸皿の底部と考えられる。

257～260は貿易陶器である。概ね12世紀～14世紀の製品と考えられる。257は白磁の碗である。外面は露胎で、内面にのみ施釉がみられる。内面には一条の圓線が廻る。258～260は青磁の碗である。共に片彫による鎌蓮弁文を施す。259は底面のみ露胎となる。260は疊付きのみ露胎で薄手である。

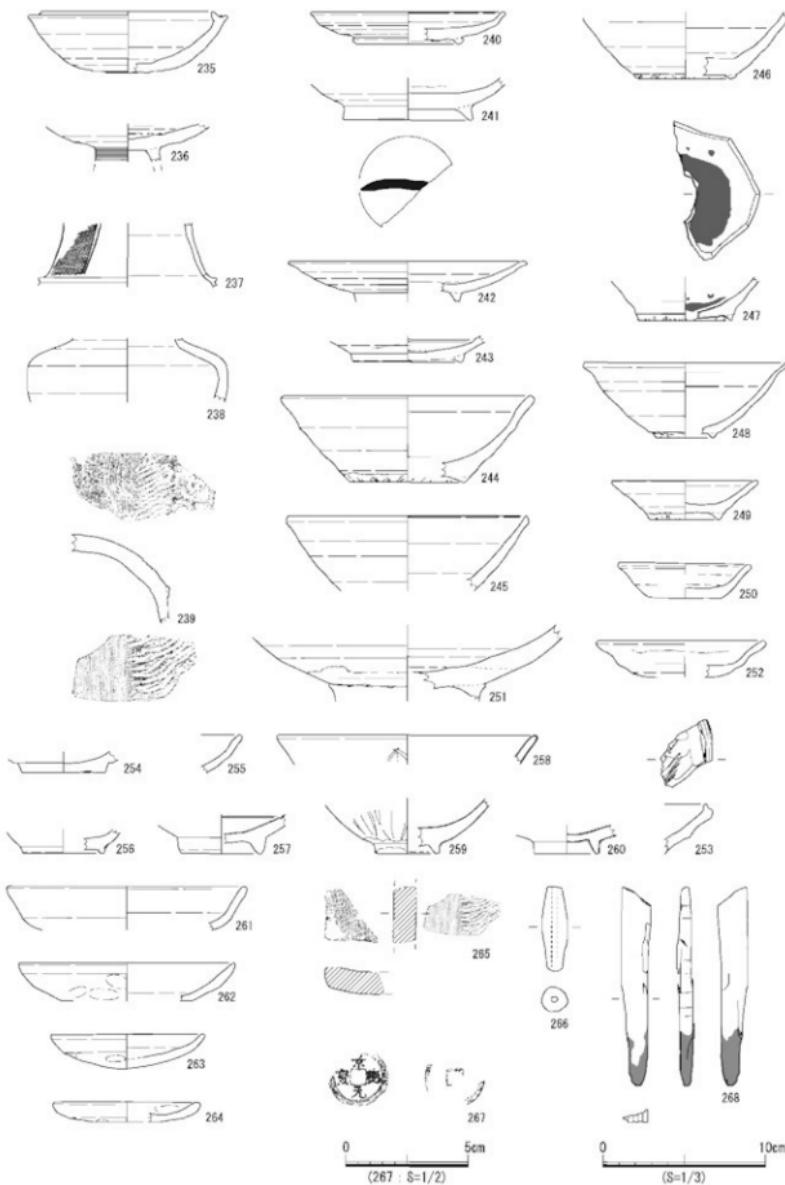
261～264は土師器皿である。いずれも口縁部内外面に一段の横ナデを施す中世前期の土師器皿で、山茶碗5型式～7型式に伴うとされる（小野木1997）。

265は平瓦である。側縁に近い部分の破片と考えられ、内面に布目痕が残る。266は土鍤である。中央部に最大径をもち、両端が細くなる形状をとる。外面はナデ調整される。267は銅錢である。一部欠損しているが、北宋錢で、初鉄年1004年の「景德元宝」と考えられる。268は木製品の火付け木である。片側の側縁に細かな工具痕が残り、何らかの部材を再利用したと考えられる。

注

1)・2) 渡邊博人氏の御教示による。

3) 竹谷勝也氏（大野町教育委員会）の御教示による。



第102図 第2調査面遺物包含層出土遺物

表16 第2調査面竪穴建物一覧表

遺構番号	地区割り		検出面	平面形	長軸(m)		短軸(m)		深さ(m)	長軸方位	切り合ひ		出土遺物
	南北	東西			上端	下端	上端	下端			新	旧	
SI 1	AO・AP	4	II基	方形	5.44	5.02	(5.36)	—	0.16	N 41° E	SD12 SD13 SD14 SD16 SD17 SD19 SD20 SK10	SK13 P9 H95 J1	
SI 2	AN	4-5	II基	方形か	(4.30)	(4.32)	(1.26)	—	0.20	N 70° E	SD13	SK 7 H2	
SI 3	AO・AP	6-7	II基	方形	4.81	4.72	4.76	4.66	0.00	N 48° W		H7	
SI 4	AO・AP	10	II基	方形	2.74	2.56	2.66	2.53	0.20	N 16° E		SD28 P1 B4 J24	
SI 5	AN-AO	10・11	II基	方形か	(2.66)	(2.60)	(2.11)	(2.10)	0.04	N 51° E	SD26	H2 J4	
SI 6	AO・AP	11-12	II基	方形	6.36	(4.96)	6.24	(4.88)	0.08	N 47° E	SD26 SD30 SK18 SK19 SK20	P2 H18 J119	
SI 7	AO	18-19	IV上	方形	4.00	3.90	3.20	3.04	0.11	N 70° E	SB 1-P 4	K1 P21 H128 J16 S2	

表17 第2調査面竪穴建物力マド等属性表

遺構名	地区割り		検出面	検出位置	燃焼部	袖部	下部土坑	煙道部	支脚柱	検出範囲(m)		出土遺物	備考
	南北	東西								長軸	短軸		
SI 4-炭化物・焼土堆積	AO	10	II基	北壁東寄り	無	無	無	無	無	0.66	0.43		炭化物・焼土の堆積のみ
SI 7-カマド	AO	19	IV上	東壁中央	下部土坑 埋土上面	一部 残存	有	掘方外へ突出 (1.08m)	なし	1.10	0.92	H80	燃焼部上面に 土面認識

表18 第2調査面竪穴建物主柱穴一覧表

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸(m)		短軸(m)		深さ(m)	切り合ひ		出土遺物
	南北	東西					上端	下端	上端	下端		新	旧	
SI 1-P 1	AO	4	II基	円形か	c	二段	0.66	0.14	(0.58)	0.08	0.62	SI 1-P 10	SI 1-P 11	III
SI 1-P 2	AO	4	II基	不定形	b4	二段	0.94	0.45	0.60	0.21	0.32			
SI 1-P 3	AO	4	II基	円形か	c	二段	(0.31)	0.07	0.40	0.08	0.40			SI 1-P 5
SI 1-P 4	AO	4	II基	円形か	b1	二段	0.54	0.10	(0.31)	0.16	0.46	SI 1-P 6	SI 1-P 10 SI 1-P 11	P1
SI 1-P 5	AO	4	II基	円形か	b1	台形か	(0.37)	(0.15)	0.41	0.21	0.46	SI 1-P 3		H2
SI 1-P 6	AO	4	II基	不定形	b2	二段	0.67	0.26	0.60	0.18	0.41	SI 1-P 9	SI 1-P 4	H2
SI 2-P 1	AN	5	II基	円形	c	半円形	0.64	0.08	0.61	0.12	0.64			
SI 3-P 1	AO	7	II基	円形	b5	方形	0.36	0.17	0.34	0.17	0.50			
SI 3-P 2	AO	7	II基	円形	b1	方形	(0.31)	0.20	0.36	0.20	0.44			
SI 3-P 3	AO	6	II基	円形	b5	二段	0.34	0.09	0.32	0.09	0.28			
SI 3-P 4	AP	7	II基	円形	b1	台形	0.35	0.11	0.34	0.11	0.34			
SI 4-P 1	AO	10	II基	不定形	a	不定形	0.54	0.47	0.47	0.36	0.06			
SI 4-P 2	AP	10	II基	梢円形	a	半円	0.50	0.37	0.45	0.31	0.03			J1
SI 5-P 1	AO	10	II基	円形	c	半円形	(0.50)	0.22	(0.38)	0.18	0.45			J2
SI 5-P 2	AN	10	II基	梢円形	a	二段か	(0.45)	0.22	(0.36)	0.14	(0.26)			
SI 6-P 1	AO	11	II基	円形	c	二段	0.42	0.15	0.40	0.13	0.38			H1
SI 6-P 2	AO	12	II基	円形	b2	方形	0.53	0.23	0.45	0.20	0.42			H1 J2

「切り合ひ」は床面重構同士のみ掲載

表19 第2調査面竪穴建物壁際溝一覧表

遺構名	地区割り 南北 東西	検出面	堆積	断面形	幅(m)		深さ (m)	切り合い		出土 遺物	
					上端	下端		新	旧		
SI1-壁際溝1	AO 4	II基	a	台形	0.14	0.06	0.08	SI1-壁際溝2			
SI1-壁際溝2	AO AP	4	II基	a	台形	S:0.28 W:0.28	S:0.12 W:0.17	S:0.08 W:0.05	SI1-壁際溝1	III	
SI1-壁際溝3	AO 4	II基	b1	下円形 /三角形	0.36	0.07	0.15	SI1-P8	SI1-P9		
SI2-壁際溝	AN 4	II基	a	台形	0.40	0.15	0.08				
SI3-壁際溝	AO 6 AP 7	II基	a	半円形 /台形	N:0.16 S:0.31 E:0.16 W:0.28	N:0.08 S:0.20 E:0.08 W:0.20	N:0.04 S:0.04 E:0.04 W:0.03			III	
SI4-壁際溝	AO AP	10	II基	a	台形	N:0.21 S:0.20 E:0.24 W:0.21	N:0.10 S:0.13 E:0.08 W:0.11	N:0.04 S:0.11 E:0.04 W:0.04	P1 J2		
SI5-壁際溝	AN 10 AD 11	II基	a	台形	0.18	0.09	0.04				
SI6-壁際溝	AO 11 AP 12	II基	a	半円形	N:0.40 W:0.30	N:0.16 W:0.08	N:0.09 W:0.06			H7 J1	
SI7-壁際溝	AO 18 AD 19	II基	a	台形	N:0.19 W:0.10	N:0.06 W:0.04	N:0.10 W:0.06			S1	

※「切り合い」は床面遺構同士のみ掲載

表20 第2調査面竪穴建物その他の床面遺構一覧表

遺構名	地区 南北 東西	検出面	平面形	堆積	長軸(m)		短軸(m)		深さ (m)	長軸 方位	切り合い		出土 遺物	備考	
					上端	下端	上端	下端			新	旧			
SI1-P7	AN 4	II基	円形	a	半円形	0.32	0.18	0.29	0.17	0.04	—				
SI1-P8	AO 4	II基	不定形	b4	二段	1.25	0.27	0.88	0.28	0.36	—		SI1-P10 SI1-壁際 溝3	P3 H16 貯藏穴 か	
SI1-P9	AO 4	II基	不定形	b4	不規則	(0.79)	(0.42)	0.55	(0.16)	0.13	—		SI1-壁際 溝3	SI1-P6	
SI1-P10	AO 4	II基	方形	b1	二段	1.00	0.47	0.89	0.47	0.53	N 60° W	SI1-P8 SI1-P4 SI1-P11	H2		
SI1-P11	AO 4	II基	方形状か	b4	二段	(0.50)	0.14	(0.41)	(0.17)	0.29	—		SI1-P1 SI1-P10	SI1-P4	
SI1-P12	AO 4	II基	幾状	a	三角形	(0.76)	—	0.19	0.03	0.09	—				埋土上 面に焼 土
SI3-P5	AO 7	II基	円形	—	方形	0.44	0.34	0.40	0.25	0.33	—				
SI6-P3	AO 12	II基	幾状	a	台形	1.80	1.60	0.45	0.36	0.03	N 33° W				
SI7-P1	AO 18	IV上	円形	b3	三角形	0.31	0.15	0.27	0.13	0.25	—				
SI7-P2	AO 19	IV上	円形	b1	二段	0.21	0.09	0.21	0.08	0.18	—				
SI7-P3	AO 19	IV上	円形	a	円形	0.50	0.37	0.50	0.39	0.09	—				貯藏穴
SI7-P4	AO 19	IV下	円形	a	半円形	1.02	0.76	0.99	0.78	0.12	—				J3
SI7-P5	AO 19	IV上	椭円形	b4	二段	0.57	0.20	0.43	0.15	0.35	N 19° E				E1 P6 H2R
															貯藏穴

※「切り合い」は床面遺構同士のみ掲載

表21 第2調査面掘立柱建物及び柱穴列の柱穴一覧表①

遺構名	地区 割り 南北 東西	検出面	平面形	堆積	断面形	長軸(m)		短軸(m)		深さ (m)	切り合い		出土 遺物
						上端	下端	上端	下端		新	旧	
SB1-P1	AO 19	IV上	円形	c	方形	0.41	0.30	0.39	0.30	0.20			
SB1-P2	AN 19	IV上	円形	c	方形	0.43	0.29	0.42	0.27	0.27			
SB1-P3	AN 19	IV上	円形	c	方形	0.46	0.34	0.38	0.30	0.26			
SB1-P4	AO 19	IV上	円形	c	方形	0.46	0.28	0.40	0.30	0.25		SI7	
SB1-P5	AO 19	IV上	円形	c	二段	0.39	0.08	0.37	0.07	0.40		SB1-P6	J1

表22 第2調査面掘立柱建物及び柱穴列の柱穴一覧表②

遺構名	地区割り		検出面	堆積	平面形	断面形	長軸(m)		短軸(m)		深さ(m)	切り合い		出土遺物		
	南北	東西					上端	下端	上端	下端		新	旧			
SB 1-P6	A0	19	IV上	b4	橢円形	二段	(0.30)	(0.23)	(0.17)	(0.31)	0.31	SB 1-P5		H1		
SB 1-P7	AN	20	IV上	c	半円形	—	0.50	0.33	0.40	0.24	0.18					
SB 1-P8	A0	19	IV上	c	円形か	方形	0.45	0.40	0.36	0.25	0.20		SB 2-P1	H3 J8		
SB 1-P9	A0	19	IV上	a	円形	方形	0.40	0.25	0.35	0.20	0.26		SB 2-P2			
SB 1-P10	A0	20	IV上	c	円形	方形	0.34	0.20	0.34	0.14	0.32		SB 2-P3	SA 4-P1		
SB 2-P1	A0	19	IV上	c	円形か	一段	0.46	0.30	(0.20)	0.20	0.26	SB 1-P8		H3 J8		
SB 2-P2	A0	19	IV上	a	円形	方形	0.45	0.30	(0.28)	0.15	0.30	SB 1-P9				
SB 2-P3	A0	20	IV上	c	円形	一段	(0.24)	0.16	0.43	0.16	0.40	SB 1-P10	SA 4-P1	H2		
SB 2-P4	A0	19	IV上	c	円形	二段	0.42	0.10	0.40	0.10	0.44					
SB 2-P5	A0	20	IV上	c	円形	半円形	0.43	0.16	0.39	0.15	0.20					
SB 2-P6	A0	20	IV上	c	円形	方形	(0.21)	(0.19)	0.35	0.16	0.34	SA 4-P2	SA 4-P4	H1		
SB 2-P7	A0	20	IV上	c	円形	半円形	0.45	0.26	(0.40)	(0.22)	0.20					
SB 2-P8	A0	20	IV上	b1	橢円形	二段	(0.37)	0.17	0.39	0.26	0.19	SA 4-P3	SB 2-P9	H1		
SB 2-P9	A0	20	IV上	a	円形か	(0.10)	(0.07)	0.46	0.33	0.17			SA 4-P3	SB 2-P8		
SB 3-P1	A0	20	IV上	b2	橢円形	三角形	0.26	0.06	0.20	0.06	0.15			SK 8		
SB 3-P2	B0	1	IV上	b2	橢円形	(0.32)	0.23	(0.20)	0.11	(0.12)	SL 1			H4		
SB 3-P3	B0	1	IV上	a	円形か	二段	0.22	0.17	(0.20)	(0.15)	0.10	SK 41		H2		
SA 3-P1	AP	6	II基	c	円形	方形	0.33	0.27	0.33	0.25	0.28					
SA 3-P2	A0	7	II基	b2	円形	二段	0.37	0.07	0.33	0.13	0.21					
SA 3-P3	A0	7	II基	c	円形	台形	0.30	0.10	0.28	0.10	0.10					
SA 1-P1	A0 - AP	1	II基	c	円形	二段	0.40	0.09	0.40	0.09	0.41			H1		
SA 1-P2	A0	1	II基	c	円形	二段	0.42	0.06	0.42	0.06	0.43	SD 10		H1		
SA 1-P3	A0	2	II基	c	円形	二段	(0.46)	0.12	(0.40)	0.20	0.49	SD 10				
SA 2-P1	AP	1	II基	c	円形	二段	0.42	0.08	0.41	0.08	0.48			H1		
SA 2-P2	AP	2	II基	c	円形	方形	0.48	0.27	0.42	0.26	0.41					
SA 2-P3	AP	2	II基	b1	円形	方形	0.57	(0.16)	(0.26)	(0.11)	0.56					
SA 4-P1	A0	20	IV上	b4	橢円形か	二段	0.53	0.17	(0.26)	0.20	0.42	SB 1-P10	SB 2-P3			
SA 4-P2	A0	20	IV上	c	円形	方形	0.43	0.16	0.43	0.09	0.39			SB 2-P6	SA 4-P4	
SA 4-P3	A0	20	IV上	c	円形	半円形	0.41	0.20	0.40	0.20	0.20			SB 2-P8	SB 2-P9	III
SA 4-P4	A0	20	IV上	b1か	不明	不明	(0.38)	(0.18)	(0.15)	(0.13)	0.35	SA 4-P2	SB 2-P6			

表23 第2調査面溝状遺構一覧表①

遺構名	地区割り		検出面	堆積	断面形	長さ(m)		幅A(m)		幅B(m)		深さA(m)	深さB(m)	長軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西				上端	下端	上端	下端	上端	下端				新	旧	
SD 9	AK A0	1 2	II基	a	右形	(2.64)	—	0.97	0.72	—	—	0.25	—	N 83° W			P2 H20
SD10	A0	1 2	II基	b4	二段	(3.51)	—	2.39	2.05	2.09	1.85	0.48	0.46	N 81° E			SD 1 FT2 H26 S1 H27
SD11	AP A0	1 2	II基	b2	右形	(3.18)	—	0.87	0.42	—	—	0.39	—	—	—		SK 2 P7 H27
SD12	AP A0	4 6	II基	b4	右形	(10.90)	—	1.36	0.37	1.05	0.40	0.26	0.45	N 79° W			SD 1 P19 H10 S1
SD13	AB A0	4 7	II基	b4	二段	(10.95)	—	2.44	0.54	2.40	0.50	0.37	0.66	N 75° E			S1 1 S1 2 SD 14 SD 16 SD 17 P47 SD 18 SD 19 SK 9 SK 10 SK 12 SK 14

表24 第2調査面溝状遺構一覧表②

遺構名	地区割り 南北東西	検出面	堆積	断面形	長さ(m)		幅A(m)		幅B(m)		深さA(m)	深さB(m)	長軸方位	切り合い		出土遺物
							上端	下端	上端	下端				新	旧	
					上端	下端										
SD14	AN 4	II基	a	半円形	(2.34)	—	0.86	0.64	—	—	0.17	—	N 77° W	SD13	SI 1	P4 K4
SD15	AN AP 8-9	II基	b4	台形	(9.30)	—	(1.01)	0.89	1.18	0.75	0.37	0.39	N 49° W	SD21 SD22 SD23 SD24 SD25		P9 K4 J13
SD16	AD 4	II基	a	半円形	0.43	0.37	0.11	0.08	—	—	0.03	—	N 15° E	SD13	SI 1	
SD17	AD 4	II基	a	台形	0.56	0.48	0.11	0.06	—	—	0.06	—	N 30° E	SD13	SI 1	
SD18	AD 6	II基	a	半円形	(0.63)	—	0.15	0.10	—	—	0.03	—	N 79° W	SD13		K1
SD19	AD 4	II基	a	半円形	(0.60)	—	0.23	0.19	—	—	0.03	—	N 84° E	SD13	SI 1	P2 K2
SD20	AD 4	II基	a	半円形	(1.97)	—	0.23	0.19	—	—	0.04	—	N 95° W	SI 1		K4
SD21	AN AP 8	II基	a	半円形	(9.00)	—	0.36	0.20	0.36	0.29	0.04	0.05	N 1° W	SD15 SD24 SD26		K6 P6
SD22	AN AP 8 9	II基	a	半円形	(9.00)	—	1.11	0.74	0.96	0.84	0.09	0.05	N 1° E	SD15 SD23 SD26		Y1 Y2 K11 P12 K7 S1
SD23	AN AD 9	II基	b2	台形	(9.05)	—	0.63	0.55	0.59	0.37	0.12	0.11	N 10° W	SD22		SD15 SD25 SD26 SD28
SD24	AN AD 8	II基	b2	台形	(9.05)	—	0.81	0.66	0.64	0.52	0.22	0.27	N 5° W	SD21		SD15 SD26 P7 K10
SD25	AN AP 9	II基	a	半円形	(9.16)	—	0.47	0.31	0.38	0.28	0.06	0.06	N 1° E	SD23		SD15 SD26 K1 H2
SD26	AN AP 9 15	IV上	b4	二段	(34.30)	—	2.28	1.57	0.68	0.17	0.30	0.33	N 72° W	S1 5 S1 6 SD21 SD22 SD28 SD23 SD29 P222 SD24 SD32 N470 SD25 SD34 J14 SD26 SD33 K17 SD27 SK23 SK25		
SD27	AN AP 10 11	II基	b2	方形	(9.65)	—	0.40	0.35	—	—	0.11	—	N 44° W	SD26 SD28 K22 J5		P3 K22
SD28	AN AP 9 11	II基	b4	二段	(13.10)	—	1.33	0.32	0.99	0.38	0.36	0.33	N 51° W	S1 4 SD26 SD27		K1 P29 K122 J9
SD29	AN AD 9 10	II基	b2	台形	(3.18)	—	0.66	0.40	—	—	0.18	—	N 8° W	SD26 SD28		K3 J1
SD30	AN AP 10 12	IV上	b2	半円形	(10.22)	—	2.36	0.60	2.15	0.55	0.34	0.33	N 36° W	S1 6 SD26 SD27 K21 P43 SK18 SK22 J76 S3		Y4 K21 P43 K24 SK22 J76 S3
SD31	AN AP 12 13	IV上	b2.5	二段	(8.45)	—	1.30	0.54	1.54	0.10	0.23	0.09	N 18° W	SD26 SD27 SD33 SK23		Y1 K4 P23 K59 J49
SD32	AD AP 13	IV上	a	半円形	(1.26)	—	0.82	0.59	—	—	0.07	—	N 2° E	SD26		J4
SD33	AN AD 12 13	IV上	a	半円形	(0.36)	—	(0.34)	(0.13)	—	—	(0.08)	—	—	SD21		P1 K1 J1
SD34	AD AP 13	IV上	b3	台形	(1.31)	—	0.23	0.13	—	—	0.18	—	N 17° E	SD26		

表25 第2調査面溝状遺構一覧表③

遺構名	地区割り 南北西	検出面	堆積	断面形	長さ (m)		幅A (m)		幅B (m)		深さ A (m)	深さ B (m)	長軸方位	切り合い		出土遺物	
					上端	下端	上端	下端	上端	下端				新	旧		
SD35 上層	AN AD	14 17	IV上	b3	二段	(11.90)	—	4.20	0.95	—	—	0.49	—	N 45° W	S235 S237 S227 S231 S232	K1 P4 H40	
SD35 下層	AN AD	14 17	IV上	b3	一段	(9.00)	—	(4.65)	(1.11)	—	—	0.62	—	N 45° W	S235 S237 S227 S231 S232	J61 S1	
SD36	AN AD	14	IV上	a	不定形	(5.90)	—	0.45	0.35	—	—	0.05	—	N 1° E	SD35	H3 J1	
SD37	AN AD	15 16	IV上	a	半円形	(4.80)	—	0.31	0.23	—	—	0.10	—	N 59° E	SD35	P1 H7 J1	
SD38	AN AD	16 17	IV上	b2	二段	(10.60)	—	2.28	0.11	0.68	0.18	0.23	0.16	N 41° W	SK36 SK34 SK35 SK37	Q2	
SD39	AN BO	20 1	IV上	a	半円形	(8.45)	—	2.70	2.10	—	—	0.20	—	N 41° W	S240 S243 SK8 SK9 SK41	Y1 P1 H20	
SD40	AN BO	20 1	IV上	a	二段か	(7.17)	—	0.90	0.15	(0.40)	—	0.10	0.06	—	SD43	S239 S240	H4
SD41	AN BO	1 2	IV上	a	台形	(10.35)	—	0.91	0.54	—	—	0.23	—	N 37° E	SD44 SD43 SD46	P4 H38	
SD42	AN BO	2 6	IV上	b2/a	台形/半円	(19.20)	—	1.05	0.25	0.62	0.33	0.28	0.21	N 65° W	SD45	P2 H3	
SD43	AN BO	1	IV上	b1	二段	(6.70)	—	1.15	0.33	1.08	0.20	0.45	0.50	N 22° W	SD41 SD40 SD44 SD46	H22 J6	
SD44	AN BO	2 3	IV上	b4	二段	(7.30)	—	(3.05)	0.48	2.30	0.60	0.55	0.60	N 23° W	SD45 SD46	P12 H158 J3	
SD45	AN BO	2 3	IV上	b4	半円形	(8.40)	—	0.78	0.29	—	—	0.30	—	N 45° W	SD44 SD42	P1 H16	
SD46	AN BO	1 2	IV上	b2	不明	(8.80)	—	(1.13)	—	—	—	(0.21)	(0.30)	—	S240 S241 S243 S244	H17	
SD47	BO	8 12	III基	a	半円形	(18.90)	—	0.62	0.33	0.60	0.40	0.20	0.14	N 89° E	SD49	H11	
SD48	BO	9 12	III基	a	半円形	(8.05)	—	0.60	0.40	—	—	0.13	—	N 89° E	SD49		
SD49	AN BO	10	III基	a	二段	(7.30)	—	1.85	0.13	1.50	0.25	0.25	0.28	N 6° E	SD47 SD48 SD49 SD50	T3 K1 P1 H2	
SD50	AN BO	11 14	III基	a	半円形	(14.25)	—	1.31	0.20	1.20	0.15	0.21	0.26	N 63° W	SD49	H70	
SD51	AN BO	13	III基	a	半円形	2.51	—	0.22	0.10	—	—	0.05	—	N 1° E			
SD52	AN BO	13	III基	a	半円形	(3.85)	—	0.39	0.33	—	—	0.05	—	N 10° E			
SD53	AN BO	14	III基	b2	半円形	(1.04)	—	0.44	0.21	—	—	0.14	—	N 28° W	SD56 SD57		
SD54	AN BO	15 15	III基	b1	台形	(7.04)	—	0.77	0.44	—	—	0.27	—	N 3° E	SD57 SD58	P1	
SD55	AN BO	15 17	III基	a	台形	(10.60)	—	0.42	0.32	0.39	0.28	0.09	0.07	N 48° E	SK55	P2	
SD56	AN BO	15 17	III基	b1	台形	(11.10)	—	0.42	0.22	0.46	0.31	0.15	0.16	N 50° E	SD67		
SD57	AN BO	15 16	III基	b2	半円形	(9.12)	—	0.48	0.26	—	—	0.20	—	N 39° E	SD56 SD54 SD58	P1	
SD58	BO	15	III基	a	台形	(1.69)	—	0.35	0.31	—	—	0.05	—	N 84° E	SD54 SD57		
SD59	AN BO	16 18	III基	a	台形	(10.20)	—	0.70	0.38	0.55	0.33	0.14	0.14	N 44° E		H3	
SD60	AN BO	16 17	III基	a	台形	(9.10)	—	0.89	0.34	0.87	0.34	0.30	0.34	N 35° E			
SD61	AN BO	19 20	III基	a	不明	(9.80)	—	0.72	0.63	0.72	0.65	0.02	0.02	N 52° E	SK97 SK101	SN5	

表26 第2調査面款溝状遺構群一覧表

遺構名	地区割り		検出面	堆積	断面形	長さ(m)		幅A(m)		幅B(m)		深さA(m)	深さB(m)	長軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西				上端	下端	上端	下端	上端	下端				新	旧	
SN26-D1	CD	1~2	Ⅱ基	a	不定形	(1.00)	—	0.23	0.22	—	—	0.01	—	N 8° E	■		
SN26-D2	CD	1~2	Ⅱ基	a	不定形	(1.85)	—	0.51	0.42	—	—	0.03	—	N 15° E			
SN26-D3	ON+CO	1~2	Ⅱ基	a	不定形	(4.80)	—	0.25	0.18	—	—	0.03	—	N 14° E			
SN26-D4	CN	1	Ⅱ基	a	不定形	(1.92)	—	0.29	0.12	—	—	0.04	—	N 10° E			
SN26-D5	ON+CO	1	Ⅱ基	a	不定形	(7.20)	—	0.62	0.29	0.32	0.20	0.12	0.06	N 11° E			P1 III II
SN26-D6	ON+CO	1	Ⅱ基	a	不定形	(4.70)	—	0.31	0.19	0.48	0.43	0.10	0.06	N 11° E			
SN26-D7	ON+CO	1	Ⅱ基	a	不定形	(6.05)	—	0.38	0.28	0.34	0.08	0.02	0.16	N 22° E			
SN27-D1	AO+AP	14	IV上	a	半円形	(0.70)	—	0.19	0.13	—	—	0.03	—	N 2° E	■	SD26	
SN27-D2	AO+AP	14	IV上	a	半円形	(0.92)	—	0.25	0.16	—	—	0.03	—	N 8° E	■	SD26	
SN27-D3	AO+AP	14	IV上	a	半円形	(0.78)	—	0.28	0.18	—	—	0.04	—	N 3° E	■	SD26 III	
SN27-D4	AO+AP	14	IV上	a	半円形	(0.73)	—	0.23	0.19	—	—	0.02	—	N 2° E	■	SD26	
SN27-D5	AO+AP	14	IV上	a	半円形	(0.72)	—	0.26	0.13	—	—	0.04	—	N 2° E	■	SD26 P1 III	
SN27-D6	AO+AP	14	IV上	a	半円形	(0.66)	—	0.25	0.13	—	—	0.05	—	N 4° E	■	SD26	
SN27-D7	AO+AP	15	IV上	a	半円形	(0.76)	—	0.22	0.14	—	—	0.05	—	N 8° E	■	SD26 III	
SN27-D8	AO+AP	15	IV上	a	半円形	(0.90)	—	0.28	0.15	—	—	0.09	—	N 3° E	■	SD26	
SN27-D9	AO+AP	16	IV上	a	半円形	(0.80)	—	0.13	0.08	—	—	0.05	—	N 5° E	■		
SN27-D10	AO	16	IV上	a	半円形	(0.82)	—	0.15	0.08	—	—	0.06	—	N 3° E	■	K1	
SN27-D11	AO	16	IV上	a	半円形	(1.15)	—	0.16	0.10	—	—	0.09	—	N 0° —	—	P1 BE	
SN27-D12	AO	16	IV上	a	半円形	(1.17)	—	0.17	0.12	—	—	0.06	—	N 3° E	■	P2 BE	
SN27-D13	AO	16	IV上	a	半円形	(1.77)	—	0.23	0.12	—	—	0.03	—	N 8° E	■	SD26	

表27 第2調査面焼土遺構一覧表

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸(m)		短軸(m)		深さ(m)	長軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西					上端	下端	上端	下端			新	旧	
SL1	BD	I	IV上	横円形	b2	半円形	1.24	1.16	(0.93)	0.65	0.09	N 15° E	SD29	SB3-P2 SE8	P1 BE

表28 六里遺跡第2調査面土坑一覧表①

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸(m)		短軸(m)		深さ(m)	長軸方位	切り合い		出土遺物	
	南北	東西					上端	下端	上端	下端			新	旧		
SK7	AN	5	Ⅱ基	方形か	a	台形	(3.36)	(3.24)	(1.16)	—	0.14	N 71° E	S12	S1		
SK8	AN+BO	20~1	IV上	不定形	b4	半円形	3.66	3.40	1.9E	1.65	0.05	—	SH3-P1 SD29 SK9	SD29 SK9	P5 BE	
SK9	AN+AO	20	IV上	不定形	b1	半円形	(3.64)	3.52	(1.66)	1.38	0.18	—	SD29	SK8	P1 BE	
SK10	AO	4	Ⅱ基	横円形か	b2	半円形	(1.50)	(0.98)	(1.02)	(1.00)	0.29	—	SD13	S11	P1 BE	
SK11	AO	4	Ⅱ基	不定形	b2	半円形	0.28	0.15	0.23	0.18	0.08	—	SD13	SE2		
SK12	AO	4	Ⅱ基	不規	a	半円形	0.73	(0.54)	0.17	(0.10)	0.09	—	SD13	SE2		
SK13	AO	4	Ⅱ基	不規	a	不定形	(0.49)	(0.49)	0.41	0.15	0.32	—	S11	P1		
SK14	AO	4~5	Ⅱ基	不明	b2	不明	(0.35)	0.17	(0.32)	0.25	0.19	—	SD13	SE2		
SK15	AP	7	Ⅱ基	円形	a	方形	0.29	0.18	0.21	0.14	0.10	—				
SK16	AP	9	Ⅱ基	円形	a	不定	0.31	0.06	0.28	0.11	0.29	—				
SK17	AN	10	Ⅱ基	円形か	a	不明	(0.24)	0.17	(0.18)	0.17	(0.02)	—	SD26			
SK18	AO	11	Ⅱ基	不定形	a	半円形	(0.47)	(0.31)	0.35	0.22	0.05	—	SD30	ST6		
SK19	AO	11	Ⅱ基	不定形	b4	二段	0.69	0.23	0.66	0.23	0.17	—	S16	SE J10		
SK20	AO	11	Ⅱ基	横円形	b4	半円形	0.79	0.70	0.64	0.36	0.15	N 79° E	S16	P1		
SK21	AN	12	IV上	不定形	a	不定形	0.50	0.44	0.45	0.36	0.15	—		H1		
SK22	AO	12	Ⅱ基	円形	b2	半円形	(0.36)	0.17	0.31	0.17	0.20	—	SD26	SD30		
SK23	AO	13	IV上	不明	a	不定形	(0.68)	(0.48)	0.45	0.10	0.10	—	SD26	SD31	H1	
SK24	AO	13	IV上	不明	a	不定形	L.05	0.98	(0.86)	(0.78)	0.07	—				
SK25	AO	13	IV上	横円形	a	不定形	0.68	0.15	0.49	0.23	0.39	N 77° E	SD26	J2		

表29 六里遺跡第2調査面土坑一覧表②

遺構名	地区割り		被出面	平 面 形	堆 積	断 面 形	長軸 (m)		短軸 (m)		覆さ (m)	長軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西					上端	下端	上端	下端			新	旧	
SK26	AO	16	IV上	円形	b4	逆台形	0.34	0.34	0.58	0.26	0.30	—	—	SK30	J1
SK27	AO	14	IV上	円形	b1	方形	0.33	0.22	0.33	0.20	0.36	—	—	—	J14
SK28	AO	14	IV上	不定形	a	不定形	0.85	0.47	0.66	0.36	0.14	—	—	—	J1
SK29	AO	14	IV上	不定形	a	不定形	0.27	0.17	0.21	0.16	0.05	—	—	—	—
SK30	AO	14	IV上	円形	b2	二段	(0.55)	0.36	0.56	0.34	0.47	—	—	SK26	R1 J2
SK31	AN	19	IV上	円形	b2	半円形	0.39	0.25	0.51	0.22	0.23	—	—	SD35	—
SK32	AN	16	IV上	円形	a	半円形	0.34	0.18	0.26	0.14	0.16	—	—	SD35	—
SK33	AN	16	IV上	円形	a	半円形	0.17	0.09	0.16	0.11	0.06	—	—	SD38	—
SK34	AN	16	IV上	円形	a	半円形	0.29	0.16	0.28	0.14	0.36	—	—	SD38	—
SK35	AO	16	IV上	円形	b1	半円形	0.21	0.08	0.20	0.09	0.10	—	—	SD38	—
SK36	AO	17	IV上	円形	b2	三角形	0.25	0.06	0.25	0.06	0.16	—	—	SD38	SK37
SK37	AO	17	IV上	不定形	a	不定形	0.57	0.45	0.45	0.34	0.15	—	—	SK36	SD38
SK38	AN	18	IV上	椭円形	a	半円形	0.66	0.52	0.19	0.05	0.06	N 15° W	—	SD39	SK 8
SK39	AN-AO	25	IV上	円形	a	半円形	0.31	0.18	0.31	0.16	0.10	—	—	SD39	SK 8
SK40	AO	20	IV上	椭円形	a	二段	0.92	0.24	0.39	0.09	0.13	N 45° S	—	SK 8	—
SK41	BO	1	IV上	楕円形か	b2/a	半円形か	(1.02)	(0.95)	(0.81)	(0.74)	0.12	—	—	SD39	SB 3-P3 P1
SK42	BO	3	IV上	円形	a	半円形	0.26	0.12	0.25	0.04	0.19	—	—	—	—
SK43	BN-SO	3	IV上	椭円形	a	プラスコ状	0.97	0.74	0.27	0.21	0.22	N 89° S	—	R1	—
SK44	BO	4	IV上	円形	b4	台形	0.39	0.21	0.30	0.21	0.13	—	—	—	—
SK45	BO	4	IV上	円形	b4	半円形	0.37	0.09	0.35	0.07	0.16	—	—	—	—
SK46	BN	13	Ⅲ基	椭円形	a	不定形	0.32	0.17	0.24	0.06	0.06	N 60° W	—	—	—
SK47	BO	14	Ⅲ基	不定形	a	不定形	0.35	0.27	0.29	0.24	0.04	—	—	—	—
SK48	BO	14	Ⅲ基	椭円形	a	不定形	0.53	0.41	0.38	0.22	0.05	N 76° W	—	—	—
SK49	BO	14	Ⅲ基	不定形	a	不定形	0.99	0.61	0.61	0.51	0.11	—	—	—	—
SK50	BO	14	Ⅲ基	不定形	a	不定形	0.73	0.58	0.42	0.30	0.14	—	—	—	—
SK51	BN	15	Ⅲ基	不定形	a	半円形	0.53	0.22	0.53	0.20	0.18	—	—	—	—
SK52	BN	15	Ⅲ基	不定形	a	不定形	0.39	0.20	0.27	0.10	0.08	—	—	—	—
SK53	BN	15	Ⅲ基	椭円形	a	半円形	0.46	0.29	0.21	0.14	0.08	N 2° W	—	—	—
SK54	BN	15	Ⅲ基	不定形	a	不定形	0.36	0.26	0.29	0.14	0.05	—	—	—	—
SK55	BO	15-16	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.23	0.14	0.18	0.10	0.04	—	—	SP55	—
SK56	BO	16	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.20	0.15	0.20	0.11	0.05	—	—	—	—
SK57	BN	16	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.34	0.25	0.33	0.26	0.05	—	—	—	—
SK58	BN-SO	16	Ⅲ基	椭円形	b1	二段	0.53	0.22	0.21	0.08	0.11	N 2° W	—	—	—
SK59	BN	17	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.19	0.08	0.19	0.08	0.09	—	—	—	—
SK60	BN-SO	17	Ⅲ基	不定形	a	不定形	0.85	0.74	0.35	0.27	0.03	—	—	R1	—
SK61	BO	17	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.22	0.17	0.22	0.16	0.07	—	—	R1	—
SK62	BO	17-18	Ⅲ基	不定形	a	不定形	0.57	0.48	0.44	0.32	0.09	—	—	—	—
SK63	BN	18	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.22	0.21	0.22	0.21	0.07	—	—	—	—
SK64	BN	18	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.17	0.16	0.16	0.14	0.06	—	—	—	—
SK65	BN	18	Ⅲ基	円形	a	方形	0.21	0.16	0.14	0.13	0.13	—	—	—	—
SK66	BN	18-19	Ⅲ基	椭円形	a	方形	0.28	0.14	0.23	0.07	0.09	N 4° W	—	—	—
SK67	BN	18-19	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.23	0.17	0.20	0.16	0.07	—	—	—	—
SK68	BN	18	Ⅲ基	椭円形	a	半円形	0.26	0.22	0.15	0.08	0.08	N 10° S	—	—	—
SK69	BN	18	Ⅲ基	椭円形	a	方形	0.28	0.18	0.19	0.10	0.12	N 20° S	—	—	—
SK70	BN-SO	18	Ⅲ基	円形	a	方形	0.19	0.05	0.14	0.05	0.16	—	—	R1	—
SK71	BN	18	Ⅲ基	椭円形	a	半円形	0.28	0.16	0.17	0.10	0.11	N 17° W	—	S1	—
SK72	BN	18	Ⅲ基	椭円形	a	方形	0.23	0.13	0.16	0.07	0.07	N 57° S	—	—	—
SK73	BN	18	Ⅲ基	椭円形	a	半円形	0.26	0.09	0.18	0.08	0.17	N 42° W	—	—	—
SK74	BN	18	Ⅲ基	不明	a	半円形	0.17	0.17	0.16	0.11	0.12	—	—	—	—
SK75	BN-SO	18	Ⅲ基	円形	a	不定形	0.21	0.16	0.16	0.10	0.05	—	—	—	—
SK76	BN	18	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.35	0.26	0.35	0.27	0.03	—	—	—	—
SK77	BN	18	Ⅲ基	不定形	a	不定形	0.34	0.29	0.22	0.17	0.04	—	—	—	—
SK78	BN	18	Ⅲ基	不定形	a	不定形	0.92	0.75	0.53	0.40	0.05	—	—	—	—
SK79	BN	18	Ⅲ基	不定形	a	半円形	0.32	0.26	0.21	0.20	0.07	—	—	—	—
SK80	BN-SO	18	Ⅲ基	不定形	a	不定形	0.42	0.34	0.32	0.24	0.04	—	—	—	—
SK81	BO	18	Ⅲ基	円形	a	台形	0.20	0.15	0.19	0.13	0.13	—	—	—	—
SK82	BO	18	Ⅲ基	円形	a	二段	0.21	0.05	0.21	0.04	0.12	—	—	—	—
SK83	BO	18	Ⅲ基	円形	a	方形	0.19	0.08	0.16	0.04	0.09	—	—	—	—
SK84	BO	18	Ⅲ基	椭円形	a	不定形	0.31	0.27	0.19	0.16	0.05	N 1° W	—	—	—
SK85	BO	18	Ⅲ基	椭円形	a	半円形	0.23	0.14	0.19	0.16	0.19	N 26° W	—	—	—
SK86	BO	18	Ⅲ基	椭円形	a	半円形	0.41	0.34	0.34	0.25	0.05	N 54° W	—	P1	—
SK87	BO	18	Ⅲ基	不定形	a	不定形	0.56	0.42	0.44	0.26	0.12	—	—	—	—
SK88	BO	18	Ⅲ基	円形	a	不定形	0.37	0.29	0.34	0.21	0.08	—	—	—	—

表30 六里遺跡第2調査面土坑一覧表③

遺構名	地区割り		被出面	平面形	堆積	断面形	長軸(m)		短軸(m)		深さ(m)	長軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西					上端	下端	上端	下端			新	旧	
SK96	BO	19	Ⅲ系	円円形	z	方形	0.14	0.09	0.12	0.07	0.09	N 3° E	—	—	SD61
SK97	BN	20	Ⅲ系	円円形	z	半円形	0.46	0.35	0.34	0.16	0.07	N 32° W	—	—	SD61
SK98	BN	20	Ⅲ系	複円形	z	二段	0.58	0.30	0.22	0.15	0.08	N 18° E	—	—	—
SK99	BN	20	Ⅲ系	不定形	z	一段	0.29	0.08	0.17	0.10	0.06	—	—	—	—
SK100	BN	20	Ⅲ系	円形	z	二段	0.25	0.23	0.22	0.19	0.02	—	—	—	—
SK101	BN	20	Ⅲ系	円形	z	二段	0.26	0.09	0.20	0.05	0.05	—	—	—	SD61
SK99	BO	18	Ⅲ系	円形	z	半円形	0.17	0.05	0.14	0.03	0.09	—	—	—	—
SK90	BO	18	Ⅲ系	複円形	z	半円形	0.22	0.17	0.13	0.09	0.02	N 55° S	—	—	—
SK91	BO	18	Ⅲ系	不定形	z	二段	0.56	0.63	0.40	0.23	0.05	—	—	—	P1
SK92	BO	19	Ⅲ系	複円形	z	半円形	0.21	0.13	0.13	0.07	0.11	N 28° W	—	—	—
SK93	BN	19	Ⅲ系	複円形	z	半円形	0.30	0.21	0.23	0.15	0.06	N 24° S	—	—	—
SK94	BN	19	Ⅲ系	複円形	z	半円形	0.15	0.13	0.14	0.11	0.05	—	—	—	—
SK95	BN	19	Ⅲ系	複円形	z	方形	0.16	0.10	0.14	0.08	0.12	—	—	—	—

表31 第2調査面出土土器観察表①

編 號 番 号	種類	番号	出土位置			口徑/底径 (最高/最低 (m))	口縫部 操作率 (X/12 ・底部 傷害度 数)	出土 (単位:m)	焼成	色調 (内面) (外面) (断面)	器面調査 内面/外面	分類 ・時期	文様・その他 (単位:m)	面 積 面 積 番 号
			出土土・ グリット	遺構番号	層位									
47	須恵器 (縦溝具)	SII-P4 ①	4	11.5/6.8/3.6 /—	9.2±1	高 —	87/ 87/ 87/ 87/87/1	圓輪ナデ/田 輪ナデ/圓輪 ハラツ	輪原6号 行窓	—	—	—	42	23
48	須恵器 (直・腹環)	SII-P8 SD12 ②	b f	—/(6.0) (6.0)/—	—±0	高(～±2の膨 脹を含む)	86/ 86/ 86/ 86/86/ 86/86/3	圓輪ナデ/不 定方角のナデ/ 圓輪ハラツ ズメ	輪内系	—	—	—	42	23
49	土師器	SII ③	a	(17.0)/— (3.4)/—	1.1±—	高(～±1の膨 脹を含む)	87/ 87/ 87/ 87/87/3	ハケ/横ナ デ・ハケ	—	—	—	42	23	
50	土師器	SII-P10 ① SII ②	1 a,2	—/(—/(9.7) —/—	—±—	高(～±2の膨 脹を含む)	87/ 87/ 87/ 87/87/2	87/ 87/ 87/ 87/87/2	横ナデ/ハケ	ハケ日(輪1.6 全数不明)	—	—	42	23
51	土師器	SII ③	a	(14.0)/— (2.6)/—	1.2±—	高(～±1の膨 脹を含む)	87/ 87/ 87/ 87/87/3	ハケ/横ナ デ・ハケ	—/ハケ	—	—	42	23	
52	土師器	SII-P5 ②	b	—/—/(12.6) /—	—±—	高(～±1の膨 脹を含む)	87/ 87/ 87/ 87/87/3	87/ 87/ 87/ 87/87/3	板ナデ/耐 リ/ハケ	ハケ日(幅 1.8、2枚)	46	23		
53	施文土器	SII-P5四脚 ①	b	—/—/(3.1) /—	1.0±—	中や低/高(～ 2の膨脹を含 む)	87/ 87/ 87/ 87/87/3	87/ 87/ 87/ 87/87/3	ナデ/ナデ/ 耐付突唇	須II群 突出部0.6、 須腰押印	46	24		
54	陶文土器	SII ①	s	—/—/(3.7) /—	1.0±—	中や低/高(～ 2の膨脹を含 む)	87/ 87/ 87/ 87/87/3	ナデ/ナデ/ 耐付突唇	須II群 1、 須腰押印	51	21			
55	織物器	SII-P5 四脚 ④	a	—/—/(2.0) /—	1.0±—	高(～±1の膨 脹を含む)	87/ 87/ 87/ 87/87/2	ミガキ/ミガ キ年	口縫部内面凹 凸	須II群	—	51	24	
56	須恵器	A019	SII ② SII-P5 III, —	(15.3)/—/2.7 /12.5/ —	4.4±1	高(～±2の膨 脹を含む)	87/ 87/ 87/ 87/87/1	圓輪ナデ・シ ボリ/田輪ナ デ・圓輪ハ ラツ	輪原6号 行窓	2段2方から 斜面中央 突出部(輪 0.4、2枚)、 擦くられ	55	23		
57	須恵器	SII ③ SII-P5	a —	(13.2)/— (28.6)/—	2.9±—	高 —	87/ 87/ 87/87/1	圓輪ナデ/当 て火候・田輪 ナデ・タタキ	体部上半に青 釉輪付	55	23			
58	須恵器	SII ①	i	(22.8)/— (8.2)/—	1.8±—	高 —	87/ 87/ 87/ 87/87/1	圓輪ナデ/当 て火候・田輪 ナデ・タタキ	輪原6号 行窓	55	24			
59	土師器	SIIカマド ①	—	(19.4)/— (11.0)/—	8.1±—	高(～±1の膨 脹を含む)	87/ 87/ 87/ 87/87/1	横ナデ・ハ ケ・横オサニ チ・横ナデ・ハ ケ	ハケ日(幅 2.2)	55	23			
60	土師器	SII	—	(17.6)/— (6.3)/—	2.9±—	高(～±2の膨 脹を含む)	87/ 87/ 87/ 87/87/1	横ナデ・ハ ケ/横ナデ	—	55	24			
61	土師器	SIIカマド	b	—/—/(8.0)/—	—±—	高(～±2の膨 脹を含む)	87/ 87/ 87/87/4	ハケ/横ナ デ・ハケ・指 サエ	ハケ日(幅 9.18 枚)内面(幅 2.0、7-8枚)	55	24			
62	陶文土器	浅鉢	SII-P9 ②	s	—/—/(3.0) /—	—±—	高(～±2の小 石含む)	87/ 87/ 87/ 87/87/2	ミガキ/ミガ キ/ナデ/耐 付	須II群 C	56	24		

表32 第2調査面出土土器観察表②

発 見 番 号	種別	器種	出土位置			口径/底径 /器高/最大幅 (cm)	口縁部 堆存率 (X/12) ・底部 堆体数	胎土 (単位: mm)	焼成	色調 (内面) 内面 外面	基面剥離 内面/外面	分類 ・内観	文様・その他 (単位: cm)	堆 積 層 番 号	
			出土箇 所名・ グリット	遺構 番号	層位										
65	赤生土 砂利・ 礫混入	加無口縁 壺	SD1-78	②	q	-/-/(1.8) —	1.0・—	■(～6.2の粒 石をむきかに 含む)	良 好	1078/2 1078/2 1078/2	模ナデ/模ナ デ	周回 I～II 式	口縁部内面 「ハ」の字状 透視剥離、口 縁基盤凹凸	56	24
66	土師器	甕A	SD3-P2	①	1	-/-/(2.0) —	1.0・—	■(～6.2の長 石付)	良 好	1078/6 1078/6 1078/6	模ナデ/模ナ デ			56	24
67	土師器	合せ甕	SD10	①	h	-/-/(2.0) —	—・—	■(～6.3の小 石を多く含 む)	良 好	1078/2 1078/6 1078/6	模ナデ/模ナ デ/模ナデ・削 りか			63	26
68	土師器	壺B	SD10	③	g	-/(8.3) /(6.3)/*	—・0	■(～6.2の砂 粒を少し含 む)	良 好	7.516/6 7.516/6 7.516/6	ナデ/斜方角 の透ナデ・シ ボリナデ・ 透オサズ	检测戸 日～サ 式		63	25
69	高質土 器類	不明	SD10	④	h	(8.6)/*-/ (1.9)/*-	1.7・—	■—	良 好	1078/1 1078/5	透転ナデ/透 転ナデ		内面自然剥離 層	63	24
70	須恵器	壺蓋A	SD10	②	i	(10.0)/*-/ (3.7)/*-	1.0・—	■—	良 好	1077/1 1077/1 1077/1	透転ナデ/透 転ナデ	須内系 TE217併 行層		63	—
71	須恵器	壺蓋A	SD10 SD10 SD13	① ② ③	b f 1	(16.4)/*-6.0/ 3.2/12.6	5.8・—	■(～6.1)の砂 粒を少し含 む)	良 好	1077/1 1077/1 1077/1	透転ナデ/透 転ナデ・回転 ヘラクズ・ 透転ナデ	加無井併 行層		63	24
72	須恵器	壺蓋A	SD10	②	1	8.6/5.4/2.8 /10.8	12.0・1	■(～6.2の砂 粒をむきかに 含む)	良 好	1077/1 1077/1 1077/1	透転ナデ/透 転ナデ・回転 ヘラクズ	須内系 7C段半		63	24
73	須恵器	壺蓋A	SD10	①	a	(12.2)/*-(7.7) /3.8/(16.0)	2.1・—	■(～6.1)の砂 粒をむきかに 含む)	良 好	1077/1 1077/1 1077/1	透転ナデ/透 転ナデ・回転 ヘラクズ・ 透転ナデ	检测6併 行層		63	—
74	須恵器	壺蓋B1	SD10	③	c	9.5/6.4/4.7/ —	11.5・1	■(～6.1)の砂 粒をむきかに 含む)	良 好	1077/1 1077/1 1077/1	透転ナデ/透 転ナデ・回転 ヘラクズ・ 透転ナデ	检测65 内外面に自然 剥離層		63	24
75	須恵器	深碗	SD10	②	e	-/-/(10.6) —	—・—	■(～6.1)の砂 粒をむきかに 含む)	良 好	1077/1 1077/1 1077/1	透転ナデ(一 次工具使用) /カタ目・タ キ後刷毛・ 板ナデ	PC代か 層	外面自然剥離 層	63	25
76	須恵器	ハンウ	SD10 SD10	① ②	L, g, b, 4, L, g	-/3.7/(6.7) /8.9	—・1	■(～6.2)の砂 粒を少し含 む)	良 好	1077/1 1077/1 1077/1	透転ナデ/透 転ナデ・回転 ヘラクズ	美濃坂 斎庭かく 吹同系(6 0.2)、外層 上半自然剥離 層	体形外曲 面透転ナデ 剥離かく 吹同系(6 0.2)、外層 上半自然剥離 層	63	24
77	須恵器	甕	SD10	①	f	(32.0)/*-/ (15.4)/*-	1.1・—	■(～6.2)の砂 粒をむきかに 含む)	良 好	1077/1 1077/1 1077/1	透転ナデ/透 転ナデ	检测5併 行層	ハケ豆(幅 2.59mm)、被 覆比較7名、 内面に自然剥 離層	63	25
78	須恵器	甕	SD10	③	g	(17.2)/*- (3.6)/*-	3.5・—	■—	良 好	1077/1 1078/1 1077/1	透転ナデ/透 転ナデ	检测6併 行層		63	25
79	須恵器	甕	SD10 SD10 SD12 —	① ② ③ —	d, L, g, 4, L, g I, g II II	-/-/(28.2) /—	—・—	■(～6.1)の砂 粒をむきかに 含む)	良 好	1077/1 1077/1 1077/1	透転ナデ/透 転ナデ・ 透転ナデ	透転 透転 透転	須内系 7C代	63	25
80	土師器	甕A	SD10	③	h	(19.0)/*- /(5.3)/*-	2.2・—	■(～6.1)の砂 粒を少し含 む)	良 好	1078/3 1078/3 1078/3	透 透 透	透 透 透	内外面剥離	63	25
81	土師器	甕	SD10	③	i	-/-/(9.0) —	—・—	■(～6.2)の砂 粒を少し含 む)	良 好	1078/4 1078/3 1078/1	ハケ/模ナ デ・ハケ		ハケ豆(幅 1.2, 1.3名)	63	25
82	土師器	甕	SD10	③	h	/ / (5.3)/*	—	■(～6.2)の砂 粒をむきかに 含む)	良 好	1078/3 1078/4 1078/3	ナデ/透オサ ウエナデ・ ハケ			63	25
83	須恵器	壺藏A	SD13	⑤	i	11.1/*-3.9/*	8.5・—	■(～6.1)の砂 粒を含む)	良 好	1077/1 1077/1 1077/1	透転ナデ・ナ ダ/透転ナデ 透転	检测65 併行層		64	24
84	須恵器	壺蓋A	SD13	③	d	-/-/(2.8) —	—・—	■(～6.4)の小 石をむきかに 含む)	良 好	1077/1 1077/2 1077/2	透転ナデ・不 定方向のナデ 透転ナデ・ 透転ナデ・ 透転	透 透	須内系 6併 行層	64	25
85	須恵器	壺蓋A	SD13	③	d	-/-/(2.8) —	—・—	■(～6.4)の小 石をむきかに 含む)	良 好	1077/1 1077/2 1077/2	透転ナデ・不 定方向のナデ 透転ナデ・ 透転	透 透	須内系 6併 行層	64	25

表33 第2調査面出土土器観察表③

発見 場所 番号	種類	種類	出土位置				口径/底径 /壁高/最大径 (cm)	口縁部 残存率 (0/1) / 底部 傷体质	胎土 (単位: mm) ・ 傷成	焼成	色調 (内面) (外面) (底面)	表面装飾 内面/外面	分類 ・ 時期	大様 (部位: cm)	特 徴 番 号	圖 版 番 号
			出土区・ グリット	遺構 番号	層位	出										
86	須恵器	环唇A		SD13	②	d	(13.5) / - / (2.6) / -	1.3 - -	壺(～φ10の砂 鉱をわずかに 含む)	良 好 N/A N/A N/A	田輪ナゲ/回 転ナゲ/田 輪ヘラケズリ	縄文ナ	縄文	64	25	
87	須恵器	环身A		SD13	③	e	(10.8) / (5.9) / 2.9 / (12.6)	1.3 - 0	壺 -	良 好 N/A N/A N/A	田輪ナゲ/回 転ナゲ/田 輪ヘラケズリ	縄文65 歩行期	縄文	64	25	
88	須恵器	环身A		SD13	②	f	(12.1) / - / (2.6) / (14.2)	1.0 - -	壺 -	良 好 N/A N/A N/A	田輪ナゲ/回 転ナゲ	縄文65 歩行期	縄文燒成	64	-	
89	須恵器	环身B1		SD13	①	1	10.1/7.1/4.7 /-	12.0 - 1	壺 -	良 好 N/A N/A -	田輪ナゲ/不 定方向のナゲ /直線ナゲ/田 輪ヘラケズリ	縄文65 歩行期	ヘラ配分	64	24	
90	須恵器	ハツウ		SD13	③	d	- / - / (5.0) / -	- - -	壺 -	良 好 N/A N/A -	田輪ナゲ/回 転ヘラケズリ	縄文系 T201～ T21歩行 期	64	25		
91	土師器	壺A		SD13	②	4	(12.5) / - / (4.9) / -	1.5 - -	壺(～φ1の砂 鉱を少し含 む)	良 好 SYTK74/ 10THS/4	横ナゲ/ハ ケ・ナゲ・指 オサエ・横ナ ゲ・ハケ			64	25	
92	須恵器	环身B1	SD13 SD13	② ②	1 a, c	12.4/6.6/4.0 /-	9.8 - 1	壺(～φ2の長 石多く含む)	良 好 N/A N/A N/A	田輪ナゲ/回 転ナゲ/田 輪ヘラケズリ	縄文65 歩行期		64	24		
93	土師器	字田甕か		SD11	a	- / - / (L. 4) / -	- - -	やや壺(～φ1の砂 鉱を少し含 む)	良 好 SYTK8/3 10THS/3 10THS/3	ナゲ・横オサ エ/ハケ	ハケ目(縦 3.6, 14枚)	66	27			
94	須恵器	环唇A		SD11	a	11.1 / - / 4.3 / -	8.0 - -	壺(～φ2の砂 鉱をわずかに 含む)	良 好 N/A N/A SYK/1	田輪ナゲ/回 転ナゲ/田 輪ヘラケズリ	縄文65 歩行期		66	25		
95	須恵器	环身A	AP1・2	SD11	a II	(10.0) / (4.0) / 3.6 / (12.2)	1.0 - 0	壺(～φ1の砂 鉱を多く含 む)	良 好 N/A N/A N/A	田輪ナゲ/不 定方向のナゲ /直線ナゲ/田 輪ヘラケズリ	縄文65 歩行期		66	27		
96	須恵器	环身A	SD11 SD11	① ②	b, 2 b, c	(10.6) / - / (3.2) / (12.6)	2.3 - -	壺(～φ1の砂 鉱をわずかに 含む)	良 好 N/A N/A N/A	田輪ナゲ/回 転ナゲ/田 輪ヘラケズリ	縄文65 歩行期		66	27		
97	土師器	字田甕か		SD12	③	e	(19.2) / - / (3.5) / -	1.0 - -	壺(～φ1の砂 鉱をわずかに含 む)	良 好 SYTK/4 SYTK/6 10THS/2	横ナゲ/横ナ ゲ	66	27			
98	須恵器	环身A		SD12	②	d	(10.9) / - / (2.1) / (12.9)	1.0 - -	壺 -	良 好 N/A N/A -	田輪ナゲ/回 転ナゲ	縄文66 歩行期		66	-	
99	須恵器	环身Aか		SD12	②	a	- / - / (6.0) / (2.9) / -	- - 1	壺(～φ1の砂 鉱をわずかに 含む)	良 好 N/A N/A -	田輪ナゲ/回 転ナゲ/田 輪ヘラケズリ	縄文65 歩行期		66	27	
100	須恵器	ハツウ		SD12	②	b	- / - / (2.8) / -	- - -	壺(～φ2の砂 鉱をわずかに 含む)	良 好 N/A N/A -	田輪ナゲ/回 転ナゲ	縄文系 T201～ T21歩行 期と同一個体 か		66	27	
101	須恵器	台付廣		SD12	②	f	- / 8.4 / (3.7) /-	- - 1	壺(～φ2の長 石を含む)	良 好 N/A N/A -	田輪ナゲ/不 定方向のナゲ /直線ナゲ/田 輪ヘラケズリ	縄文65 歩行期		66	25	
102	須恵器	壺類		SD12	②	a	- / (2.7) / (4.5) / -	- - 0	壺(～φ2の砂 鉱をわずかに 含む)	良 好 2.577/1 2.577/2 N/A	田輪ナゲ/回 転ナゲ/タ キの毛口輪ヘ ラケズリ	縄文65 歩行期		66	27	
103	土師器	壺A	A05	SD12	②	e, b, d II	(15.9) / - / (14.2) / -	1.0 - -	壺(～φ1の長 石をわずかに 含む)	良 好 7.5YTK8/4 7.5YTK8/4 10THS/4	横ナゲ/ハ ケ・指オサ エ・横ナゲ/横 ナゲ・ハケ・ 指オサエ			66	25	
104	土師器	壺A		SD12	①	a	(18.9) / - / (4.7) / -	2.2 - -	壺(～φ2の長 石を含む)	良 好 SYTK/6 SYTK/8 10THS/4	横ナゲ/ハケ /横ナゲ/ハ ケ	66	27			
105	土師器	壺A		SD12	②	e	(19.3) / - / (3.8) / -	1.0 - -	壺(～φ2の長 石をわずかに 含む)	良 好 7.5YTK8/6 7.5YTK8/2 2.5YTK/2	横ナゲ/ハ ケ・横ナゲ/ハ ケ			66	27	

表34 第2調査面出土土器観察表④

調査面番号	種別	基準	出土位置				口徑/底径 /最高・最大高 (cm)	口縁部 残存率 (0/12) ・底部 他体数	地土 (単位: m)	焼成	色調 (内面 /外面)	表面被覆 内面/外面	分類 ・時期	文様・その他 (単位: cm)	捲き番号	
			出土区・ グリット	遺構 番号	層位											
107	須恵器	ハソウ		SD21	②	a	-/-/(4.2)/ —	- - -	老 —	良 好 好	10Y7/2 10Y6/1 10Y7/1	直輪ナフ/回 輪ナフ/直輪 ヘラケズリ	畿内系 6C代	横位旋段面 状工具による 割り跡	67	27
108	山茶碗	碗		SD23	②	b	-/- (3.0)/—	1.0 + -	老 —	良 好 好	10Y6/3 10Y7/1 10Y7/1	直輪ナフ/回 輪ナフ	高麗窯	内面と口縁 輪沿いに外壁 自然剥離	67	27
109	土師器	滑輪型角		SD23	②	a	/ —/(5.2)/ —	1.0 +	やや高(～約2 cm)石・茶葉 實心等砂紋を多 量に含む)	良 好 好	10Y7/4 10Y7/4 10Y7/4	直輪ナフ/回 輪ナフ/直輪 ヘラナフ	美濃窯 輪底かま加付 行削		67	27
110	須恵器	环身B1		SD24	①	a	(12.5)/(7.9) 3.0/—	2.5 + 0	老(～約2の長 石等砂紋をわ ずかに含む)	良 好 好	10Y7/ 10Y7/3 10Y7/3	直輪ナフ/回 輪ナフ/直輪 ヘラ切り	畿内系 6C代		67	27
111	須恵器	环身A		SD15	②	4	(13.2)/ (3.1)/—	1.0 +	老 —	良 好 好	10Y5/ 10Y4/ 2.5YR6/2	直輪ナフ/回 輪ナフ	直輪窯		67	27
112	須恵器	环身A		SD15	②	g	(11.7)/(7.4) 3.9/(12.9)	1.0 + 0	老(～約1の砂 紋を少し含む)	良 好 好	10Y6/ 10Y6/ 10Y7/	直輪ナフ/回 輪ナフ/直輪 ヘラ切り底	美濃窯 行削期		67	27
113	須恵器	环身A		SD15	②	g	(10.7)/ (2.6)/(13.2)	1.3 +	老 —	良 好 好	10Y7/ 10Y7/ 10Y7/	直輪ナフ/回 輪ナフ	美濃窯 行削期		67	27
114	土師器	壺A		SD15	②	a	/ —/(4.6)/ —	1.0 +	老(～約2の長 石等砂紋を少 量含む)	良 好 好	10Y7/2 10Y7/4 2.5YR6/4	横ナフ/ハ ケ・ナフ/横 ナフ/ハケ			67	27
115	縄文土器	深鉢		SD26	②	b	-/-/(5.1)/ —	1.0 + -	利(火穴・ チャコト・鑿 等砂紋を多 量に含む)	良 好 好	10Y9R6/3 10Y9S/2 10Y9S/3	ナフ/ナフ 所リ・朱刷 (破底)	第Ⅱ群 A2b	口縁部小突 起石くろは族 次口縫か	71	27
116	縄文土器	深鉢		SD26	①	b	-/-/(2.9)/ —	1.0 + -	利(～約2の長 石・石等砂紋 を多量に含む)	良 好 好	10Y9R7/3 10Y9R6/3 10Y9S/3	ナフ/ナフ ナフ/ナフ	第Ⅱ群 A2j	帶(幅1.2)	71	27
117	縄文土器	浅鉢か		SD26	②	c	-/-/(2.17)/ —	1.0 + -	利(～約2の長 石・石等砂紋 を多く含む)	良 好 好	10Y9R6/3 10Y9R7/3 10Y9S/1	ナフ/ナフ ナフ/ナフ	第Ⅱ群 C	外面に衝撃 状の凹歯文	71	27
118	須恵器	环身A	SD26	②	b	-/-/(2.9)/ d	-/-/(2.9)/ —	- - -	老(～約1の黑 色絞を含む)	良 好 好	10Y6/ 10Y6/ 2.5YR6/1	直輪ナフ/回 輪ナフ/直輪 ヘラケズリ	畿内系 TK217行 削		71	27
119	須恵器	环身A		SD26	②	d, c	(14.0)/ (3.0)/—	1.9 + -	老 —	良 好 好	10Y6/ 10Y6/ 10Y6/	直輪ナフ/回 輪ナフ	畿内系 6C代		71	27
120	須恵器	环身A		SD26	①	d	(15.1)/ (3.4)/—	1.0 + 0	老(～約1の黒 色絞を少く含 む)	良 好 好	10Y6/ 10Y6/ 10Y6/	直輪ナフ/回 輪ナフ	畿内系 6C代		71	—
121	須恵器	环身A		SD26	①	a, c	(9.3)/—/3.5 —/—	1.2 + -	老 —	良 好 好	10Y6/ 10Y6/ 10Y6/	直輪ナフ/回 輪ナフ/直輪 ヘラ切り	畿内系 TK217行 削	直輪または 堆(外底)	71	27
122	須恵器	环身A		SD26	①	f	(13.3)/— /4.4 —/—	1.0 + -	老(～約2の暗 色絞・白色 絞・砂紋を少 量含む)	良 好 好	10Y7/1 10Y7/1 10Y7/1	直輪ナフ/ナ フ/直輪ナフ ヘラケズリ/直 輪ヘラ	直輪窯6J 行削		71	27
123	須恵器	环身A		SD26	②	d	(11.2)/— /3.8 —/—	2.9 + -	老(～約2の砂 紋を少く含む)	良 好 好	10Y6S/2 10Y6/ 10Y6/	直輪ナフ/回 輪ナフ/直輪 ヘラ切り版 ヘラケズリ	美濃窯 行削期		71	27
124	須恵器	环身C		SD26	②	e, b	(20.2)/— /4.4 —/—	1.5 + -	老(～約2の長 石を多く含 む)	良 好 好	10Y6/ 10Y6/ 10Y6/	直輪ナフ/回 輪ナフ/直輪 ヘラケズリ	加賀窯		71	27
125	須恵器	环身A		SD26	①	b	-/-3.7/(3.9) /(13.4)	- - 1	老(～約1の黒 色絞を少く含 む)	良 好 好	10Y6/ 10Y6/ 10Y6/	直輪ナフ/回 輪ナフ/直輪 ヘラ切り	畿内系 TK209～ 211行削		71	25
126	須恵器	环身A		SD26	②	d	(11.6)/—/— (3.3)/(14.2)	1.5 + -	老(～約1の白 色絞を少く含 む)	良 好 好	10Y6/ 10Y6/ 10Y6/2	直輪ナフ/回 輪ナフ/直輪 ヘラケズリ	畿内系 TK217行 削		71	—
127	須恵器	环身A		SD26	②	d	(9.9)/—/— (3.3)/(12.6)	1.0 + -	老 —	良 好 好	10Y7/ 10Y7/ 10Y7/	直輪ナフ/回 輪ナフ	体面外側及び 口縁部外面に 剥離物(底か)		71	28
128	須恵器	环身A		SD26	①	d	(12.0)/—/— (3.6)/(14.6)	1.0 + -	老 —	良 好 好	10Y7/ 10Y7/ 10Y7/	直輪ナフ/回 輪ナフ	畿内系 TK217行 削		71	—

表35 第2調査面出土土器觀察表⑤

地盤番号	種別	器種	出土位置		口部/底部 面積/最大径 (cm)	口部 操作半径 (cm)	底土 (単位: m)	構成	色調 (内面) (外面)	柄面調整 部(内面/外面)	分類	文様・その他 (単位: m)	西周番号		
			出土区 -グリット	遺構 番号											
129	須恵器	环身B1	SD26	②	d	(11.6) / (4.1) / (14.4) - - -	1.5 -	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	環身の伴 物	行差	71	28
130	須恵器	环身B1	SD26	②	d	(11.3) / (5.6) 4.0 / (14.0) - - -	1.0 - 0	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	環身の伴 物	行差	71	28
131	須恵器	环身B1	SD26	②	b, d c	9.8 / (5.4) / 3. 6 / 11.9 - - -	5.0 - 1	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	環身の伴 物	行差	71	25
132	須恵器	环身B1	SD26	②	d	(10.0) / 3.8 / 3. - 6 / - - - -	3.5 - 1	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	須恵器 腹底	行差	71	25
133	須恵器	环身B1	SD26	-	b	(11.2) / 6.2 / 3. 4 / - II ~ III	3.2 - 1	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	須恵器 腹底	行差	71	25
134	須恵器	环身B1	SD26	②	b	(10.4) / (5.6) 2.5 / - - - -	3.5 - 1	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	須恵器 腹底	行差	71	28
135	須恵器	环身B1	SD26	③	b, f II ~ III	(10.4) / 6.5 / 4. 2 / - - - -	1.8 - 1	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/ナ メ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	須恵器 腹底	行差	71	26
136	須恵器	环身B1	SD26	②	e	9.6 / 5.6 / 3.3/ - - -	7.0 - 1	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	須恵器 腹底	行差	71	26
137	須恵器	环身B1	SD26	②	c, d, e I, 2	(11.8) / 6.4 / 4. - 7 / - - - -	3.5 - 1	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	須恵器 腹底	行差	71	26
138	須恵器	环身B1	SD26	①	3	(16.2) / - - (4.7) / - - - -	1.0 -	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	須恵器 腹底	行差	71	28
139	須恵器	环身B1	SD26	①	3	(13.0) / - / (3.7) / - - - -	1.0 -	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	須恵器 腹底	行差	71	28
140	須恵器	环	SD26	②	p	- / - / (1.7) - - -	- - -	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	内面系 II ~ IV	3 方透かし、 内凹自然透かし 透かし	71	28
141	須恵器	有蓋高环	SD26	③	d	- / - / (5.6) - - -	- - -	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	内面系 II ~ IV	透かし	71	28
142	須恵器	台形瓶	SD26	①	f c	- / - / (5.6) - - -	- - -	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	内面系 II ~ IV	透かし	71	28
143	須恵器	ハソウ	SD26	②	s	- / - / (4.3) - - -	- - -	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	内面系 II ~ IV	透かし	71	28
144	須恵器	ハソウ	SD26	-	(9.6) / - (3.7) / - - - -	2.0 -	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	地底系 II ~ IV	透かし	71	28	
145	須恵器	ハソウ	SD26	①	d s	- / 4.8 / (9.6) /-	- - 1	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/ナ メ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	地底系 II ~ IV	透かし	71	26
146	須恵器	直瓶	SD26	①	3	- / - / (1.3) - - -	1.0 -	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	内面系 II ~ IV	透かし	71	28
147	須恵器	直瓶	SD26	⑤	c, e SD30 SD31	(21.6) / (3.9) / II ~ III	1.4 -	直 - - -	黄 好 好	凹 輪 凹 輪 凹 輪	凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ/凹 輪ナメ	内面系 II ~ IV	透かし	71	26

表36 第2調査面出土器觀察表⑥

通 報 番 号	種 別	器種	出土位置		口径/底径 /高さ/最大幅 (cm)	口縁部 堆存率 (0/12) ・底盤 物体数	胎土 (単位: ml)	構 成	色 調 (内面 /外面 /断面)	表面質感 内面/外面	分類 ・時 期	文様・その他 (単位: cm)	持 出 番 号	圖 版 番 号	
			出土区 域	遺 跡 番 号											
148	須恵器	壺	SD26		s —/—/(9.0)	— · —	密	良 好	96/ 95/ 96/	透け具足/タ タキ	美濃燒 西代		71	26	
149	土師器	壺A	SD26	①	b /(15.8)/— /(4.0)/—	1.5 · —	密(～φ1の長 石・黒等多形 石を少含む)	良 好	10YR8/5 10YR8/5 10YR8/2	織ナズ・ハケ /横ナズ			72	28	
150	土師器	壺	SD26	②	b —/—/(4.7)	1.0 · —	密(～φ1の長 石・黒等多形 石を少含む)	良 好	7.5YR7/6	ハケ(横拉)/ ハケ(斜引)・ ナズ			72	28	
151	土師器	壺 (把手)	SD26	①	c —/—/(4.2)	— · —	密(～φ1の長 石・チート・ 等砂粒を含む)	良 好	10YR7/5 10YR7/5	小羽・指ナ ズ・指腹・ 貼り付け			72	28	
152	土師器	壺 (把手)	SD26	②	c —/—/(3.6)	— · —	密(～φ1の長 石・黒等多形 石を含む)	良 好	10YR7/2 10YR7/4 2.5YR/1	2.5YR/1に上 り 透窓・羽羽・指 ナズ・指腹・ 貼り付け			72	28	
153	土師器	接觸型鏡	SD26	③	b —/—/(3.6)	1.0 · —	やや暗(～φ5 の長石・石英 天・黒等を含 む)	良 好	7.5YR5/4 7.5YR2/1 2.5YR/2	ナズ/ナダ			72	28	
161	須恵器	环身A	SD27	①	1 (11.0)/— (3.5)/(13.8)	1.0 · —	密(～φ1の黑 色陶を少含む)	良 好	96/ 96/ 97/	凹輪ナズ/凹 輪ナズ	鏡内系 TX217件 行削	体部外表面 輪付	74	28	
162	須恵器	环身A	SD28	①	c / / (3.1)	*	密(～φ1の長 石・黒等陶 をわずかに含 む)	良 好	IV4/1 2.5YR/1 2.5YR/1	凹輪ナズ/凹 輪ナズ	鏡内系 SC代		74	28	
163	須恵器	环身A	SD28	①	b (12.2)/(8.5) /4.3/(14.0)	2.5 · 1	密(～φ2の長 石をわずかに 含む)	不良	10YR8/2 10YR8/1 10YR8/2	凹輪ナズ/凹 輪ナズ・直取 ヘラヅミ・ 凹輪・ラ切り		墨元燒成	74	28	
164	須恵器	环身B1か	SD28	②	c —/6.0/(1.4)	— · 1	密(～φ1の長 石・黒等上絞 をわずかに含 む)	不良	2.5YR/3 2.5YR/3 2.5YR/3	凹輪ナズ/凹 輪ナズ・直取 ヘラヅミ		墨元燒成	74	28	
165	土師器	甕A	SD28	①	c / / (4.2)	1.0 · —	やや暗(～φ3 の長石・石英 をわずかに含 む)	良 好	10YR7/5 10YR7/5 10YR8/2	横ナズ/横ナ ズ・指腹底			74	28	
166	縄文土 器	深鉢	SD30	③	2 —/—/(3.8)	1.0 · —	やや暗(～φ2 の長石・ チャート・黒等 を多く含む)	良 好	10YR6/3 10YR6/4 10YR6/2	ナズ/ナダ・ 刻印文	筒II群 A21	夷舟(高9. D字軸へラ追 み)	76	28	
167	須恵器	环身A	SD26	②	c (9.4)/3.2/3. 8 /11.2	5.3 · 1	密(～φ1の長 石・黒等を含 む)か(含む)	良 好	10YR7/1 10YR7/1 10YR7/1	凹輪ナズ/凹 輪ナズ・直取 ヘラヅミ	筒側65	体部から底部 外常に自然輪 ヘラヅミ	76	26	
168	須恵器 (底端不明)	脚台	SD30	③	e —/(11.0) /(2.7)	— · 0	密(～φ1の長 石・黒等陶 をわずかに含 む)	良 好	2.5YR/6 2.5YR/1 2.5YR/1	ナズ/ナダ	鏡内系 6C代	透かし・模様 文(高9.0、7 .8)2枚	76	28	
169	須恵器	高坏	SD30	③	c —/—/(6.9)	— · —	密(～φ1の長 石をわずかに 含む)	良 好	10YR8/1 10YR8/1 10YR8/2	凹輪ナズ/凹 輪ナズ	鏡内系 TX217件 行削	2枚の纹様(高 0.1)・透かし	76	28	
170	土師器	甕A	SD30	①	a (17.8)/— (3.8)	1.5 · —	やや暗(～φ1 の石英砂利陶 を含む)	良 好	10YR7/2 10YR8/2 10YR7/2	ナズ・ハケ/ 横ナズ・ハケ			76	28	
171	灰陶陶 器	瓶か	SD30	⑦	s, g, 2 f	—/(7.2) /(2.0)	— · 0	密(～φ1の黑 色陶をわずかに 含む)	良 好	2.5YR/1 2.5YR/1 2.5YR/1	凹輪ナズ/凹 輪ナズ・直取 ヘラヅミ・ 貼り付け蓋	0-33	鏡部内面新し く原座	76	28
172	山茶瓶	瓶	SD30	⑦	b, c, l e f	(18.2)/6.8/4 .8/-	1.8 · —	密(～φ1の長 石・黒等陶を 多く含む)	良 好	10YR7/1 10YR7/1 10YR7/1	凹輪ナズ/凹 輪ナズ・直取 ヘラヅミ			76	26
176	須恵器	环身C	SD31	②	c —/(19.4)	1.1 · —	密(～φ2の長 石をわずかに 含む)	良 好	96/ 97/ 97/	凹輪ナズ/凹 輪ナズ・直取 ヘラヅミ	筒205		76	29	
177	灰陶陶 器	瓶	SD31	②	* —/(7.6) /(2.1)	— · 0	密(～φ1の長 石をわずかに 含む)	良 好	10YR7/1 10YR7/1 10YR7/1	凹輪ナズ/凹 輪ナズ・貼り付 け合	0-33	鏡部内面摩耗	76	29	
178	灰陶陶 器	小樽	SD26	②	a (10.0)/5.2/2 .9/-	1.4 · 1	密(～φ1の長 石をわずかに 含む)	良 好	2.5YR/2 2.5YR/2 2.5YR/2	輪画及び色 調: 灰釉 (淡山1) 2.5YR/2	筒27(淡 山1)	輪画及び色 調: 灰釉 (淡山1) 灰陶陶/持 け付け	76	29	

表37 第2調査面出土土器観察表⑦

河川番号	種別	形種	出土伝書			口縁部 底径 /底高 (cm)	口縁部 底存半 D/12 底部 断体数	胎土 (単位: mm)	焼成	色調 (内面) (外面) (新面)	表面加工 内面/外面	分類 ・ 時相	文様・その他 (単位: cm)	博 古 番 号	
			出土区・ グリット	遺迹 番号	層位										
179	土師器	把子		SD01	②	a	-/-/(3.7)/ —	- - -	淡石(～6.1の 鉢石・石英等 を含む)	1.0YR7/3 1.0YR8/3 1.0YR6/3	はがれにより 済度不均・沿 ナデ・指痕 痕・詰り付け			76	29
180	網文土器	往口土器 (往口型)		SD06	①	i	社(7.4)/幅 3.4 厚4.0/—	- - -	やや粗(～6.2 の鉢石・ チャート・雲 母を多量に 含む)	1.0YR7/1 1.0YR7/2 1.0YR6/1	済度粗しへ/ ナ デ	第Ⅰ群 A3c	孔径・地盤 1.9cm(付け 根)・底径 0.9cm(先端)	79	29
181	網文土器	横鉢		SU05	②	t	-/-/(2.2)/ —	1.0 -	やや粗(～6.4 の鉢石・ チャート・雲 母を多量に 含む)	1.0YR5/2 1.0YR4/1 1.0YR5/2		第Ⅱ群 A3c	口縁端部過渡 込み(神狀工 具による押 出)	79	29
182	網文土器	横鉢		SD05	①	r	-/-/(6.0)/ —	1.0 -	やや粗(～6.4 の鉢石・ チャート・雲 母を多量に 含む)	1.0YR8/2 2.0YR7/2 1.0YR8/2	ナデ/ナデ	第Ⅱ群 A3c	口縁端部過渡 込み(神狀工 具による押 出)	79	29
183	網文土器	横鉢		SD05	①	o	-/-/(4.1)/ —	1.0 -	やや粗(～6.3 の鉢石・ チャートを多 量に含む)	1.0YR7/2 1.0YR6/2 1.0YR6/1	ナデ/貝塚か ナ	第Ⅱ群 A3J	束帯(盛1.4、 貞御押正か)	79	29
184	網文土器	横鉢		SD05	①	r	-/-/(3.6)/ —	1.0 -	やや粗(～6.1 の鉢石・ チャートを多 量に含む)	1.0YR8/2 1.0YR5/2 1.0YR4/1	ナデ/指オサ エ/貝塚束帯	第Ⅱ群 A3J	束帯(盛0.7、 貞広の貝塚束 帯か)	79	29
185	網文土器	深鉢		SD05	②	r	-/-/(8.9)/ —	1.0 -	やや粗(～6.2 の鉢石・ チャート・雲 母を多量に含 む)	1.0YR7/2 1.0YR7/1 7.5YR4/2	ナデ/ナデ	第Ⅱ群 A3J	束帯(盛0.9、 貞広の貝塚束 帯)	79	29
186	網文土器	深鉢		SD05 SD46	① ①	i e, s	-/-/(3.7)/ —	1.0 -	やや粗(～6.3 の鉢石・石 英・チャー ト・雲母を多 量に含む)	1.0YR6/1 1.0YR7/1 N1.5/1		第Ⅱ群 A3d		79	29
187	網文土器	横鉢		SD05	①	r	-/-8.8/(5.1)/ —	- - 1	やや粗(～6.3 の鉢石・ チャート・ 雲母を多 量に含む)	1.0YR7/3 1.0YR7/3 1.0YR7/3	ナデ/指オサ エ・条紋(貝 塚束帯)	第Ⅱ群 A3d	束帯上部の 帶き上げ山腹 存・内外蓋ス ト付省	79	29
188	土師器	S字状口縁 合口型		SD05	②	o	-/-/(1.6)/ —	- - -	淡石(～6.0の 鉢石・石英等 を含む)	1.0YR8/2 1.0YR8/2 N1.5/	ナデ・ハケ 泡オサエ/ハ ケ	古時 代前期		79	29
189	土師器	台行突	AN14	SD05	①	a III	-/8.3/(4.0)/ —	- - 1	淡石(～6.0の 鉢石・石英等 を含む)	1.0YR7/1 1.0YR7/1 1.0YR7/1	指オサエ/ハ ケ	古時 代前期		79	29
190	土師器	裏口縁 蓋		SD05	—	(20.0)/— (3.3)/—	1.0 -	淡石(～6.0の 鉢石・石英等 を含む)	2.5YR8/3 2.5YR8/3 2.5YR7/2	ナデ/ナデ	云雷地 模様(重ね 模様)	成次文(ヘラ 模様)・重ね 模様(3.1)	79	29	
191	土師器	直口盤 か		SD05	①	s	(12.0)/— (3.3)/—	1.0 -	淡石(～6.0の 鉢石・石英等 を含む)	1.0YR8/2 1.0YR8/2 1.0YR8/2	不明/不明	云雷地 模様		79	29
192	須恵器	环透人		SD05	①	c	12.4/-2.8/ —	6.0 -	淡石(～6.0の 鉢石・石英等 を含む)	2.0YR7/2 2.0YR7/2 2.0YR7/2	圓輪ナデ/直 輪ナデ/圓輪 ナデ	圓輪地 模様ナデ/直 輪地 模様ナデ/圓 輪地	圓輪地 模様ナデ/直 輪地 模様ナデ/圓 輪地	79	26
193	須恵器	环透人		SD05	①	a	11.7/3.5/4.0/ 14.3	6.0 - 1	淡石(～6.0の 鉢石・石英等 を含む)	1.0YR7/1 2.0YR7/1 1.0YR7/1	圓輪ナデ/直 輪ナデ/圓輪 ナデ	圓輪地 模様ナデ/直 輪地 模様ナデ/圓 輪地	圓輪地 模様ナデ/直 輪地 模様ナデ/圓 輪地	79	26
194	土師器	壺A		SD05	①	a	-/-/(12.8)/ —	- - 1	淡石(～6.0の 鉢石・石英等 を含む)	1.0YR8/3 1.0YR8/3 N1.5/	ナデ・指オサ エ/ハケ		ハケ目(幅 0.6、7条)	79	26
195	秀生土器	壺		SD09	②	a	-/-/(5.8)/ —	1.0 -	淡石(～6.0の 鉢石・石英等 を含む)	1.0YR8/2 1.0YR7/3	不明/ハケ	乳生中 期	内面タキカ ヒ	83	29
196	秀生土器	台付壺 か		SD09	②	b	-/-/(5.4)/ —	- - -	淡石(～6.0の 鉢石・石英等 を含む)	2.5YR7/2 1.0YR7/4 2.0YR8/1	指ナデ/ハケ	乳生中 期		83	29
197	秀生土器	錐輪壺		SD09	②	a	-/-/(3.9)/ —	- - -	淡石(～6.0の 鉢石・石英等 を含む)	1.0YR8/3 1.0YR7/4 1.0YR8/3	済度不均・調 整不明	乳生中 期	高茎式か	83	29

表38 第2調査面出土土器観察表⑧

発 現 数 量 目 名	種 別	器種	出土位置		口径/底径 /断高/最大幅 (cm)	口盤部 推存率 (X/12) -底部 僅体數	地 土 (厚さ: cm)	焼 成	色 調 (内面 /外面 /断面)	表面 調整 内面/外面	分類 ・時 期	文様・その 他の (単位: cm)	博 物 館 番 号	國 際 番 号	
			出土区・ グリット	通 査 番 号	層 位										
200	土師器	甕A		SD40	⑥	a -/-/(5.0)/ -	1.0・-	密(～5.2cm 底を含む)	良 好 2.578/2	10YR6/2 10YR5/2 2.578/3	不明/不明			83	29
201	土師器	甕A		SD43	⑨	3 (17.4)/- /(4.9)/-	1.0・-	密(～6.1cm 石・石英を少 量含む)	良 好 2.578/3	10YR7/4 10YR7/4 10YR8/3	横ナデ・ハケ /ハケ			83	29
202	赤生土 器	甕か		SD41	①	d -/-/(4.2)/ -	-・-	密(～6.2cm 底や土等砂粉 を多く含む)	良 好 2.577/1	2.578/1 2.577/1	ナデ・指オサ エ/ハケか	先住後 期	波文状(沈 縫0.1、直面 押土灰(薄))	83	29
203	土師器	甕A		SD41	①	d (20.6)/- /(7.5)/-	2.0・-	密(～6.2cm 石・石英等砂 粉を多く含む)	良 好 2.578/1	10YR7/4 10YR8/3 2.578/1	横ナデ・ハケ /横ナデ・泥 オサエ・ハケ			83	29
204	土師器	台付甕		SD42	①	e -/-/(3.1)/ -	-・-	やや粗(～6.2cm の長石・石英 等砂粉を多量に 含む)	良 好 2.577/3	10YR7/3 10YR5/1 2.577/1	不明/横ナ デ・シボリ麻		畿内系 TK317(伴 行期)	83	30
205	須恵器	灰窓A		SD42	②	a (2.0)/- /(1.8)/-	1.2・-	密	良 好 2.577/1	2.578/1 2.577/1	凹輪ナデ/圓 輪ナデ			83	30
206	赤生土 器	甕か		SD44	⑦	j -/(6.0) /(3.2)/-	-・-	やや粗(～6.3cm の長石・石英 等・チートを 多く含む)	良 好 2.578/1	10YR6/1 10YR6/1 2.578/1	小明/ハケ			83	30
207	土師器	平田甕		SD44	⑩	f (15.8)/- /(2.6)/-	2.0・-	密(～6.1cm の長石・石英を 含む)	良 好 2.578/1	10YR8/1 10YR5/1 2.578/1	指ナデ/横ナ デ・ハケ	松戸戸 田式		83	30
208	土師器	高耳		SD44	⑩	i -/-/(4.6)/ -	-・-	密(～6.1cm の長石・赤玉色 をわずかに含 む)	良 好 2.578/4	10YR7/4 10YR5/4 2.578/4	指オサエ・枝 型底・指オサ エ・枝型底	松戸戸 田式		83	30
209	須恵器	有蓋高 脚		SD44	⑩	a, l (4.0)/- /(4.4)/-	1.5・-	密(～6.1cm の砂粉を少 量含む)	良 好 2.578/ 30/ 30/	35/ 30/ 30/	凹輪ナデ/圓 輪ナデ・凹輪 ヘラグリ		畿内系 TK45～ 209併行 期	83	30
210	須恵器	灰窓A		SD44	⑩	b (2.6)/- /(3.8)/-	1.5・-	密(～6.2cm の長石・チート 等砂粉を少 量含む)	良 好 2.578/1	36/ 36/ 2.578/1	凹輪ナデ/圓 輪ナデ・凹輪 ヘラグリ		畿内系 TK45～ 209併行 期	83	30
211	須恵器	灰窓A		SD44	⑩	j, k 13.0/-/4.4/ -	10.8・-	密(～6.1cm の砂粉をわざか に含む)	良 好 2.578/ 35/ 36/	35/ 35/ 36/	凹輪ナデ/圓 輪ナデ・圓 輪ナデ・ヘラ グリ・ヘラ グリ		畿内系 TK45～ 209併行 期	83	26
212	須恵器	灰窓A		SD44	⑩	k (11.4)/- (3.7)/(13.6)	1.0・-	密(～6.2cm の砂粉を含む)	良 好 2.578/ 37/	37/ 36/ 37/	凹輪ナデ/圓 輪ナデ		畿内系 TK45～ 209併行 期	83	30
213	須恵器	ハシウ		SD44	⑩	c -/-1.6/ (10.5)/-	-・1	密(～6.2cm の長石・黒色粘土 を含む)	良 好 2.578/1	34/ 33/ 10YR5/1	凹輪ナデ/圓 輪ナデ・凹輪 ヘラグリ・後ナ ゲ飾		口縁型: 沈 縫2.5cm、 全体形状: ヘラ グリ・圓輪 形直にしたる 漆刷込み反復 模様(周回0.3m), 全体部前面上半 部無釉面	83	26
214	土師器	甕A	B02	SD44	⑩	a II (18.2)/ (4.4)/-	1.0・	密(～6.2cm の長石・砂粉を 含む)	良 好 2.578/4 10YR5/4 10YR7/4	10YR6/3 10YR7/4 10YR7/3	ハケ/横ナ デ・ハケ			83	30
215	土師器	甕A		SD44	⑩	f, h, j, b u, e (25.0)/(35. 6)	-・1	密(～6.1cm のチートト ーを数箇所含む) ～6.2cmの長 石等砂粉を含 む)	良 好 2.578/3	10YR6/3 10YR6/2 10YR6/3	ハケ・指オサ エ/ハケ		ハケ目(短 径2.1m), 底部形状: ヘラ グリ指き	83	26
216	土師器	甕A		SD46	⑩	a (19.2)/ (3.9)/-	1.5・-	密(～6.2cm の長石・砂粉 を含む)	良 好 2.578/3 10YR7/4 10YR7/3	10YR7/3 10YR7/4 10YR7/3	横ナデ/横ナ デ			83	30
217	土師器	台付甕		SD45	⑩	b -/-/(2.8)/ -	-・-	やや粗(～6.2cm の長石・砂粉 を含む)	良 好 2.578/3	10YR7/3 10YR6/3 10YR7/3	不明(原M)/ 板ナデ/指		畿内系 TK317(伴 行期)	83	30
218	須恵器	高耳	T32	SD45	⑩	b -/-/(3.8)/ -	-・-	やや粗(～6.2cm の長石・砂粉 を含む)	良 好 2.578/3	10YR7/3 10YR7/4 10YR7/1	凹輪ナデ/圓 輪ナデ・凹輪 ヘラグリ			83	30
219	須恵器	高耳		SD45	⑩	c (18.8)/- (6.4)/-	1.8・-	密(～6.2cm の長石・砂粉 を含む)	良 好 2.578/1	10YR7/3 10YR7/3 10YR6/1	横ナデ/ハケ /横ナデ・ハ ケ			83	30
220	土師器	甕A		SD45	⑩	c (18.8)/- (6.4)/-	-・-	密(～6.2cm の長石・砂粉 を含む)	良 好 2.578/1	10YR7/3 10YR7/3 10YR6/1	横ナデ/ハ ケ			83	30

表39 第2調査面出土土器観察表⑤

地 點 番 号	種別	基層	出土位置			口径/底径 (最高/最大径 (m))	口部 堆存半 (X/12) ・底部 堆体数	胎土 (単位: m)	焼成	色調 (内面) (外面)	器面調査 内面/外面	分類 ・時期	文様・その他 (単位: cm)	埠 頭 番 号	
			出土基・ グリット	遺構 番号	層位										
221	須山器	坪身C		SD49	②	2	-/(12.0) (1.8)/-	- - 0	老(-~1.0)の黒 色等砂をわずかに含む)	良 好	SY7/1 SY7/2 SY7/3	回転ナデ/回 転ナデ・ヘラ 切り・延り付 け高台	東濃系 輪IV併 行期		95 30
222	灰釉陶 器	網か		SD49	⑤	a	-/(6.0) (1.7)/-	- - 0	透 -	良 好	SY7/1 SY7/2 SY7/3	回転ナデ/回 転ナデ・延 り付け高台	E-14		95 30
223	土師器	S7字吹口縁 付鉢型		SD50	③	b	(14.0)/- (2.0)/-	1.8 +	やや透(-~1.0) の砂粒をわずかに含む)	良 好	SY7/2/4 SY7/2/4 SY7/2/3	回転ナデ/回 転ナデ・延 り付け高台			95 30
224	土師器	S7字吹口縁 付鉢型		SD50	③	b	-/-/(3.0)/-	- - +	やや透 -	良 好	SY7/2/3 SY7/2/3 SY7/2/3	ナデ/ハケ			95 30
225	土師器	S7字吹口縁 付鉢型小		SD50	⑤	a	-/-/(6.0)/-	- - +	やや透(-~1.0) の砂粒をわずかに含む)	良 好	SY7/2/3 SY7/2/3 SY7/2/3	板ナデ/ハケ			95 30
226	須恵器	坪身A		SD51	②	a	-/-/ (3.1)/(12.8)	- - +	透(-~1.0)の良 好等砂をわずかに含む)	良 好	SY6/ SY6/ SY6/	回転ナデ/回 転ナデ・輪IV ヘラケヌメ	室内系 TK43~ 209行 期		95 30
227	須恵器	牙頭C	SN15 SN16 SN16	SD67	①	a III III~IV	(15.9)/- /3.2 /-	3.5 +	透(-~2.0)の良 好等砂をわずかに含む)	不良	SY7/1 SY7/2 SY7/2	回転ナデ/ナ デ・回転・ラ ケヌメ・延り 付け	加65	墨書き(口) 文字か 運転先成	95 26
228	灰釉陶 器か	碗		SG27-D10	①	a	(13.0)/- (1.8)/-	1.0 +	透 -	良 好	SY2/1 SY2/1 SY2/2	回転ナデ/回 転ナデ			100 30
229	土師器	甕A		SG27-D11	①	2	(18.8)/- (5.2)/-	2.0 +	透(-~1.0)の良 好・石英少 量含む)	良 好	SY2/2/4 SY6/6 SY7/6	板ナデ・延 り・横ナデ・ ハケ			100 30
230	須恵器	有輪高环		SL1	③	b	(9.0)/- (3.0)/(12.3)	1.0 +	透(-~2.0)の良 好等砂をわずかに含む)	良 好	SY5/ SY5/ SY5/2	回転ナデ/回 転ナデ	室内系 TK217行 期		100 30
231	須恵器	有輪高环		SK8	a	(11.8)/- (3.8)/(14.1)	5.0 +	透(-~1.0)の良 好・黑色化 度含む)	良 好	SY7/ SY7/ SY7/	回転ナデ/回 転ナデ・回転 ヘラケヌメ	室内系 TK217行 期		100 26	
232	土師器	甕A		SK10	①	2	(22.0)/- (2.8)/-	1.0 +	やや透(-~2.0) の灰石・石 英等砂を多量に含 む)	良 好	SY7/2/3 SY7/2/3 SY7/2/3	板ナデ・ハケ ・横ナデ・ハ ケ			100 30
233	圓文土 器	深鉢		SK19	①	4	-/-/(2.9)/-	1.0 +	やや透(-~2.0) の灰石・ チャート・雲 母等砂を多量に含 む)	良 好	SY7/2/3 SY7/2/3 SY7/2/3	ナデ/ナデ	日野郡 A21	実埋(昭0.7、 昭日刻)	100 30
235	須恵器	坪身	B016	-	III	(10.4)/(4.1) /2.8/(12.2)	1.0 + 0	透(-~2.0) チャート・雲 母等砂をわずかに含 む)	不良	SY8/1 SY8/1 SY8/1	回転ナデ/回 転ナデ・回転 ヘラケヌメ	東濃系 輪IV 209行 期	透型輪成	102 31	
236	須恵器	有蓋高环	B014	-	III	-/-/(2.3)/-	- - +	透(-~1.0)の良 好等砂をわずかに含 む)	良 好	SY7/ SY7/ SY7/	回転ナデ/回 転ナデ・回転 ヘラケヌメ・カ キ目	室内系 TK217行 期		102 31	
237	須恵器	高折	B01	-	III	-/-/(4.0)/-	- - +	透(-~2.0)の良 好・チャート・ 雲母等砂を含む)	良 好	SY7/ SY7/ SY7/	ナデ/	E-初か	3万каしし 織被状皮	102 31	
238	須恵器	瓶壺型	A04	-	IIIb	-/-/(3.9)/-	- - +	透(-~1.0)の良 好等砂を少 量含む)	良 好	SY6/ SY6/ SY6/	回転ナデ/回 転ナデ	室内系 TK217行 期以降	体外外面上 自然純付着	102 31	
239	須恵器	横瓶	B02	-	III	-/-/(5.4)/-	- - +	透(-~1.0)の良 好・黑色化 度含む)	良 好	SY7/1 SY7/1 SY7/1	回転ナデ・當 量灰・カキ 目・タガキ	薄葉6行 期	外側自然輪付 着	102 31	
240	灰釉陶 器	西輪庄	B01	-	III	(11.8)/(6.2) /2.0/-	1.8 + 0	透 -	良 好	SY7/1 SY7/1 SY7/1	回転ナデ/回 転ナデ・回 転切り抜・延 り付け舞台	0-63	埴裏及び色 調: 灰釉 (2.5%)/2 灰釉焼付塗	102 31	
241	灰釉陶 器	碗	BN11	-	III	-/(7.0) (2.0)/-	- - 0	透(-~1.0)の良 好色をわずかに含 む)	良 好	SY7/1 SY7/1 SY7/1	回転ナデ/回 転ナデ・回 転・糸脱 糸切り抜・延 り付け舞台	E-72	墨書き(一) 内面自然輪付 着・窓と破綻 痕・織被及び色 調: 灰釉 (SY7/3)	102 26	
242	灰釉陶 器	直	B019	-	III	(14.3)/- (2.0)/-	1.0 + -	透 -	良 好	SY7/2 SY7/2 SY7/2	回転ナデ/回 転ナデ	E-72	体部内面自然 輪付着	102 31	

表40 第2調査面出土土製品観察表⑩

発 見 番 号	種別	基盤	出土位置			口徑/底径 /壁高/最大幅 (cm)	口縁部 残存率 (0/12) ・底部 切欠部 有無	底土 (単位: m)	構成	色調 (内面) (外面)	基面調整 内面/外面	分類 ・時期	文様・その他 (単位: cm)	持 出 番 号	國 籍 番 号
			出土区 グリッド	遺構 番号	層位										
243	灰陶 器	設置	BN15	—	III	—/(6.4) (1.6)/—	— · 0	底(～φ1の長 石をわずかに含む)	良 好	2. SYR/1 2. SYR/1 SYR/1	円輪ナデ/圓 輪ナデ・圓輪 ヘラ切り	沙T2	輪孔及び色 調: 灰輪 (H7.3) 内面自然焼付 等	102	31
244	山茶碗	網	BN11	—	III	(15.0)/(7.0) 5.3/—	2.1 · 0	底(～φ2の長 石・黒土粒を わずかに含む)	良 好	2. SYR/1 2. SYR/1 2. SYR/1	圓輪ナデ/圓 輪ナデ・貼り 付け糞灰	尾頭型 型式	粗段底	102	31
245	山茶碗	網	BN4	—	III	(14.6)/— (4.7)/—	3.0 · 0	やや底(～φ3 の石英等砂粒 を含む)	良 好	2. SYR/1 2. SYR/1 2. SYR/1	圓輪ナデ/圓 輪ナデ	尾頭型 型式	—	102	31
246	山茶碗	網	309	—	III	—/(5.6) (4.1)/—	— · 0	底(～φ3の石 英・チャート をわずかに含 む)	良 好	10TRB/1 10TRB/1 10TRB/1	圓輪ナデ/圓 輪ナデ・圓輪 系切口・貼 付け高台	尾頭型 8-9型 式	腹部内面 粗段底	102	31
247	山茶碗	網	BN8	—	III	—/(5.8) (2.7)/—	— · 0	底(～φ1の長 石をわずかに 含む)	良 好	2. SYT/2 2. SYT/2 2. SYT/2	圓輪ナデ・指 ナデ・圓輪ナ デ・圓輪系切 口・指ナデ	尾頭型 型式	内面尾状 付焼物、等 等	102	31
248	山茶碗	網	AN19	—	III	(12.3)/(3.3) 1.6/—	1.0 · 0	底(～φ1の長 石をわずかに 含む)	良 好	BTY/1 BTY/1 BTY/1	圓輪ナデ/圓 輪ナデ・貼 付け糞灰	尾頭型 8-9型 式	高台焼付	102	31
249	山茶碗	小網	BN15	—	III	(8.8)/(4.3) 2.4/—	1.5 · 1	やや底(～φ1 の長石をわずか に含む)	良 好	BTY/1 BTY/1 BTY/1	圓輪ナデ/圓 輪ナデ・圓輪 系切口・貼 付け糞灰	尾頭型 型式	—	102	31
250	山茶碗	小風	BN14	—	III	7.8/4.4/2.2/ —	11.6 · 1	底(～φ1の長 石をわずかに 含む)	良 好	2. SYR/1 2. SYR/1 2. SYR/1	圓輪ナデ/圓 輪ナデ・圓輪 ヘラ切り	尾頭型 型式	—	102	26
251	山茶碗	片口鉢	BN19	—	III	—/(4.7)/—	— · —	底 —	良 好	BTY/1 BTY/1 BTY/1	圓輪ナデ・脊 止模ナデ/圓 輪ナデ・圓輪 系切口	美濃型 鉢脚	外腹にみじ ん風あり、足部 内面焼付	102	31
252	古窯 ¹⁷	輪ぬ小皿	BN4	—	III	(9.6)/(3.0) 2.2/—	2.0 · 0	底(～φ1の長 石・黒土粒を わずかに含 む)	良 好	2. SYR/1 2. SYR/1 2. SYR/1	圓輪ナデ/圓 輪ナデ・圓輪 系切口	六窓バ 後田型	輪ぬ及び 色調: 灰輪 (H7.4) 口縁部内外面 焼付	102	31
253	古窯 ¹⁷	鋸風	AC19	—	III	—/(3.1)/—	1.0 · —	底(～φ1の長 石をわずかに 含む)	良 好	2. SYR/1 2. SYR/1 2. SYR/1	圓輪ナデ/圓 輪ナデ	六窓バ 中里型	輪ぬ及び 色調: (H7.2) 体部・脚部内面 焼付	102	31
254	古窯 ¹⁷	平窯	C01	—	III	—/(5.1)/(1.3) —	— · 1	底 —	良 好	— 2. SYT/1 2. SYT/1	輪ぬヘラズ り・圓輪系 底・削り出 し高台	六窓バ 後三~ IV窓六 脚	輪ぬ及び 色調: 灰輪 (H7.4)	102	31
255	吉窯 ¹⁷	平窯	CN1	—	III	—/(3.4)/—	1.0 · —	底 —	良 好	— BTY/1	同輪ナデ/圓 輪ナデ	吉窓戸 後四脚	輪ぬ及び 色調: (H7.2)	102	31
256	火窯	環灰瓦 丸瓦	BN8	—	III	—/(5.6) (1.5)/—	— · 0	底 —	良 好	BTY/1 BTY/1	同輪ナデ/圓 輪ナデ・貼 付け糞灰	大窓 丸一~二脚	輪ぬ及び 色調: 灰輪 (H7.4)	102	31
257	質晶 陶器器	白磁器	BN6	—	III	—/(5.6) (2.1)/—	— · 0	底 —	良 好	BTY/1 BTY/1	同輪ナデ/圓 輪ヘラズ り・削り出 し高台	見附風呂に 灰 輪(6.2), 輪ぬ及び 色調: 白磁器 (H7.4)	102	31	
258	質晶 陶器器	青磁器	BN20	—	III	(16.0)/— (1.8)/—	1.0 · —	底 —	良 好	— —	—	—	片形風呂井 文、輪ぬ及び 色調: 青磁器 (H7.4)	102	31
259	質晶 陶器器	青磁器	AN20 AG20	—	III	—/(3.8) (3.4)/—	— · 0	底 —	良 好	— —	不規/削り出 し高台	大窓井 分筋模 窓空青 質晶器	大窓井 分筋模 窓空青 質晶器	102	31
260	質晶 陶器器	青磁器	BN9	—	III	—/(4.0) (1.8)/—	— · 1	底 —	良 好	— —	—/削り出 し高台	片形風呂井 文、輪ぬ及び 色調: 青磁器 (H7.4)	102	31	
261	土師器	里	BN16	—	III	(14.3)/— (2.7)/—	1.1 · —	底 —	良 好	10TRB/1 10TRB/1 10TRB/1	横ナデ/横ナ デ	—	—	102	31
262	土師器	里	BN13	—	III	(13.0)/— (2.4)/—	1.2 · —	底 —	良 好	2. SYR/2 2. SYR/2 2. SYR/1	横ナデ/横ナ デ・沿オナ ダ	—	—	102	31

表41 第2調査面出土土製品観察表①

測量番号	種類	器種	出土位置			素材	長軸/短軸(幅)/厚さ(cm)	重さ(g)	範囲・その他の特徴	標記番号	図版番号
			出土区・グリット	遺構番号	層位						
263	土師器	三	RN19	—	III	(9.4)/3.2/2 —/—	1.6×1 —	7.5VBS/3 7.5VBT/3 2.5VBS/4	棒ナギ・横ナギ・棒ナギ・横ナギ・ 棒ナギ	102	31
264	土師器	三	RN2	—	III	(8.6)/(4.6) 1.1/2/—	2.0×0 —	10YR7/2 10YR7/2 10YR7/2	不定方向のナ ジ・横ナギ・ 棒ナギ	102	31

表42 第2調査面出土土製品一覧表

測量番号	取上番号	器種	出土位置			素材	長軸/短軸(幅)/厚さ(cm)	重さ(g)	範囲・その他の特徴	標記番号	図版番号
			出土区・ グリット	遺構番号	層位						
196	300	土玉	SX34	①	I	土	1.1	1.0	1.1	0.9	6.00.0.2ca
266	1479-5	平瓦	BO16	—	III	土	(3.4)	(3.5)	1.4	21.8	1.50.0.3ca
266	2552-1	土鉢	RN10	—	III	土	6.1	1.6	1.5	11.2	1.50.0.3ca

表43 第2調査面出土石器・石製品一覧表

測量番号	取上番号	器種	出土位置			素材	長軸/短軸(幅)/厚さ(cm)	重さ(g)	範囲・その他の特徴	標記番号	図版番号	
			出土区・ グリット	遺構番号	層位							
62	4439	磨石・研磨石	S17	地盤	①	砂岩	17.6	7.3	4.9	925.1	使用痕分類ABC	66 32
63	2440	磨石・研磨石	S17	④	e	砂岩	(16.4)	7.5	4.8	(747.2)	使用痕分類E	66 32
83	989	磨石・研磨石	S010	①	f	砂岩	(17.7)	(12.3)	(5.4)	(870.4)	使用痕分類E	66 32
106	4307	磨石・研磨石	S012	②	n	砂岩	19.2	6.8	5.1	991.1	使用痕分類ABC	66 33
154	3351	砾石	S226	①	砂岩	13.0	7.2	3.5	446.7	—	72 32	
155	3566	M.F	S226	②	砂岩	4.0	3.6	0.9	15.0	—	72 32	
156	622	磨石・研磨石	S226	—	サヌカイト	6.6	6.2	3.1	183.9	使用痕分類AB	72 33	
157	3563	磨石・研磨石	S226	②	n	花崗閃长岩	9.6	9.3	6.3	816.5	使用痕分類AB	72 33
158	3503	磨石・研磨石	S226	②	n	安山岩	23.4	9.2	7.4	2500.0	使用痕分類ABC	72 33
159	3500	磨石・研磨石	S226	②	d	花崗閃长岩	10.8	9.4	5.5	794.3	使用痕分類E	72 33
160	4153	磨石・研磨石	S226	③	b	安山岩	10.8	8.7	4.7	749.9	使用痕分類ABC	72 33
173	2528	砾石	S230	①	b	砂岩	10.1	6.0	3.8	385.0	—	76 32
174	2512	石礫	S230	②	a	褐色片岩	(6.0)	(2.0)	(0.9)	(16.8)	—	76 32
175	2516	打削石斧・破成石	S230	①	n	ホルンフェルス	(16.1)	5.7	2.2	(168.2)	—	76 32
195	4012	磨石・研磨石	S235	①	l	花崗閃长岩	10.5	9.3	4.8	734.2	使用痕分類ABC	79 33
224	4822	スレーベィバー	SK01	①	チャート	4.2	5.6	1.1	26.4	—	100 32	
—	3320	磨石・研磨石	S226	①	砂岩	(11.3)	6.9	(4.0)	(442.6)	使用痕分類ABC	—	
—	3521	磨石・研磨石	S226	②	d	砂岩	(11.0)	11.3	4.2	(818.1)	使用痕分類ABC	—
—	3019	磨石・研磨石	S226	①	e	砂岩	(16.0)	5.4	4.7	(621.3)	使用痕分類ABC	—
—	4311	磨石・研磨石	S222	③	n	砂岩	(6.6)	(10.0)	(3.6)	(363.9)	使用痕分類ABC	—
—	2439	銅片	SK71	①	チャート	2.2	2.0	0.6	3.0	—	—	
—	60	銅片	CO1	—	石灰岩	1.3	1.5	0.6	0.9	—	—	

表44 第2調査面出土金属製品一覧表

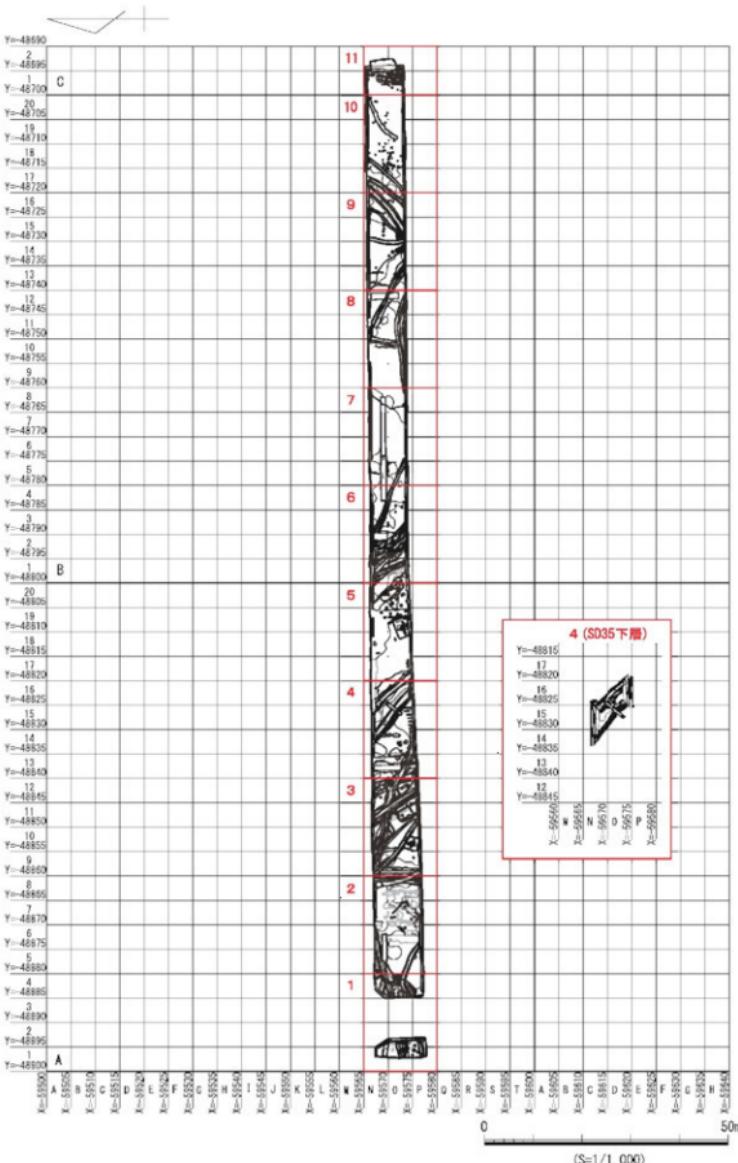
測量番号	取上番号	器種	出土位置			素材	長軸/短軸(幅)/厚さ(cm)	重さ(g)	範囲・その他の特徴	標記番号	図版番号	
			出土区・ グリット	遺構番号	層位							
267	1763	鍔斧	306	—	III	鉄	2.3	2.3	0.1	1.7	「景雲元年」初耕1004	102 23
—	2446	釘か	A013	—	III	鉄	2.1	0.6	0.5	1.8	—	—

表45 第2調査面出土木製品一覧表

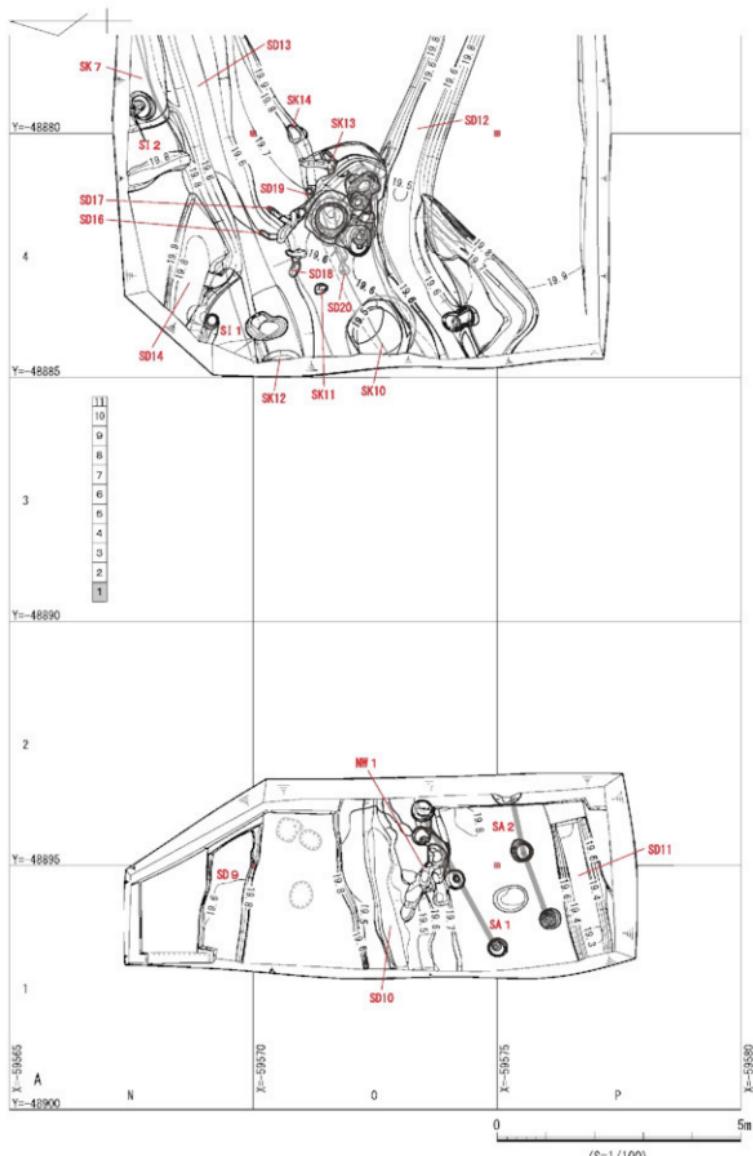
測量番号	取上番号	器種	出土位置			素材	長軸/短軸(幅)/厚さ(cm)	重さ(g)	範囲・その他の特徴	標記番号	図版番号
			出土区・ グリット	遺構番号	層位						
217	2368	柳枝状製品	—	SD64	⑤	木	(23.2)	2.3	1.5	穿孔	88 33
268	1414	火付木	BQ20	—	木	12.1	1.8	0.9	—	—	102 33
1409	不明	CO1	—	木	(2.8)	(3.8)	(1.3)	—	自然木の可能性有り	—	—

表46 SD44出土杭一覧表

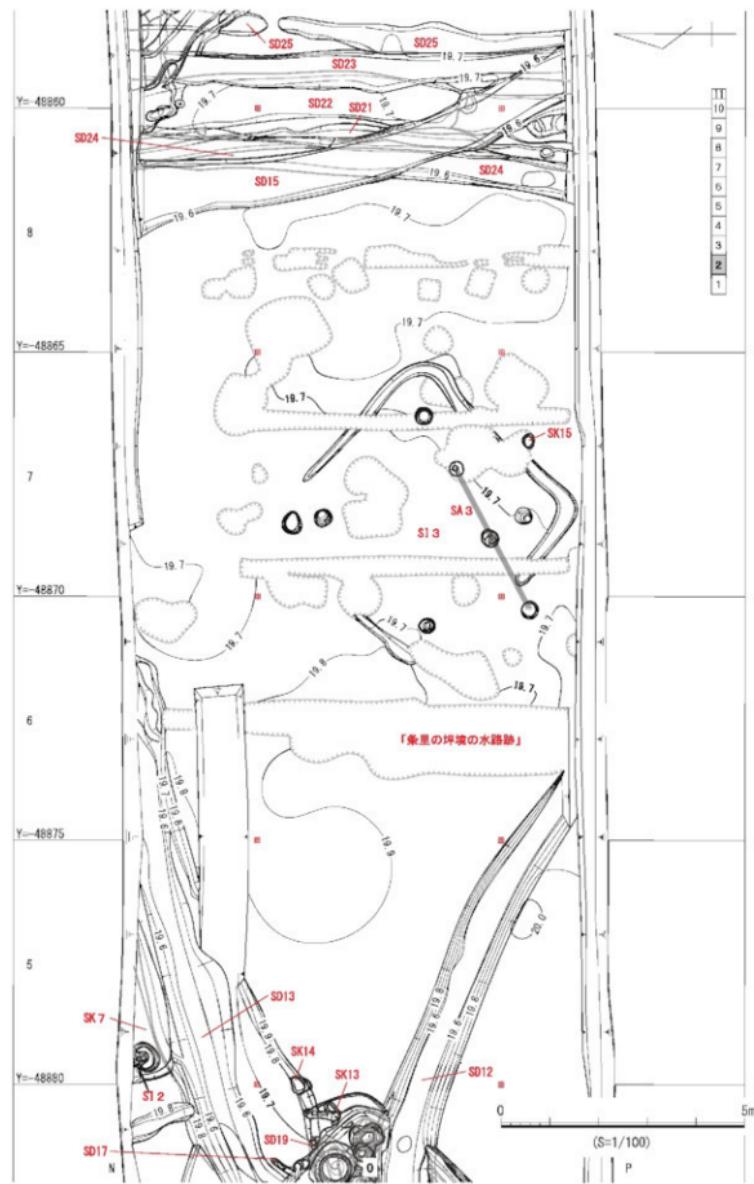
測量番号	取上番号	素材	形態	長軸/短軸(幅)/厚さ(cm)		備考	測量番号	素材	形態	長軸/短軸(幅)/厚さ(cm)		備考	測量番号			
				出土区・ グリット	遺構番号	層位				長軸/短軸(幅)/厚さ(cm)	備考					
—	2284	木	角材	(53.3)	2.7	2.4	—	—	C	4494	木	角材	89.5	4.3	3.2	88 1
—	2357	木	丸木	(19.0)	3.1	(1.6)	配合3点	—	—	4495	木	丸木	(52.7)	4.0	3.6	—
D	4500	木	丸木	68.3	4.2	3.8	配合2点	88	—	4496	木	丸木	(34.4)	4.0	3.6	—
—	3714	木	角材	(66.3)	(4.7)	(3.9)	—	—	—	4497	木	角材	(75.0)	3.7	3.4	—
—	4137	木	丸木	(63.2)	3.6	3.6	配合3点	—	—	4498	木	丸木	(33.1)	3.4	3.2	配合4点
—	4138	木	丸木	(42.0)	4.1	4.5	配合2点	—	—	4499	木	丸木	(34.2)	2.3	2.4	配合4点



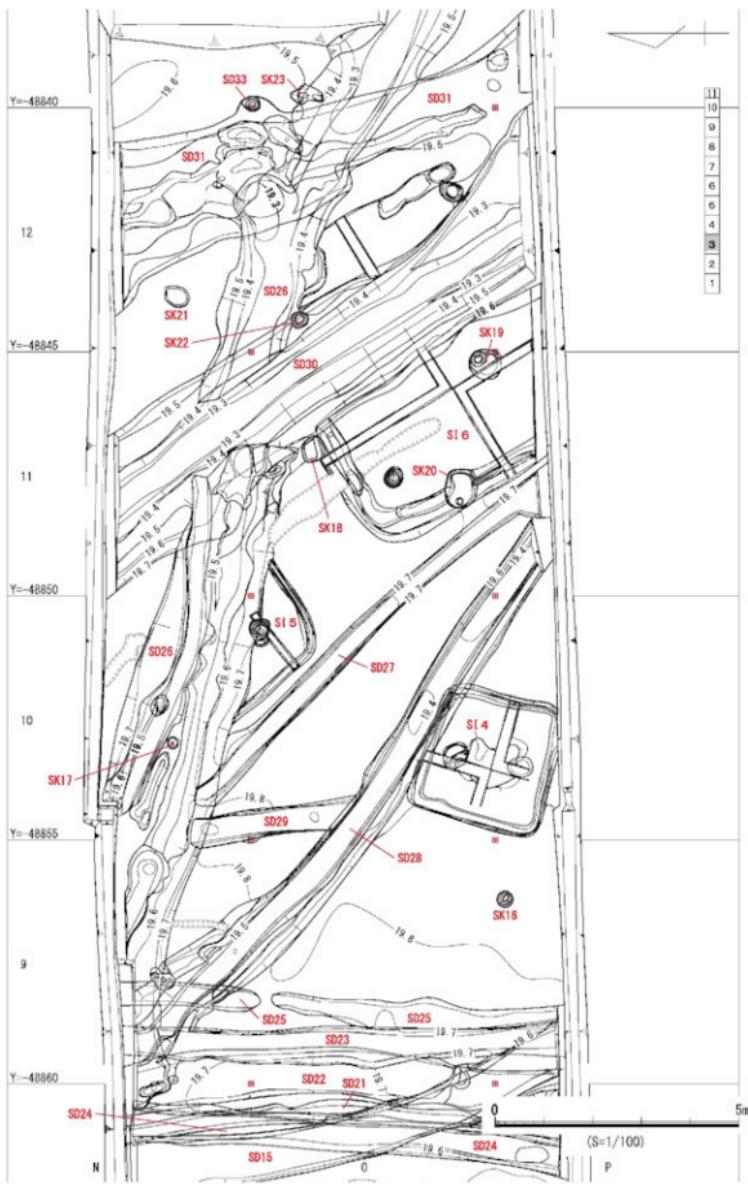
第103図 第2調査面発掘区全域図(左)と



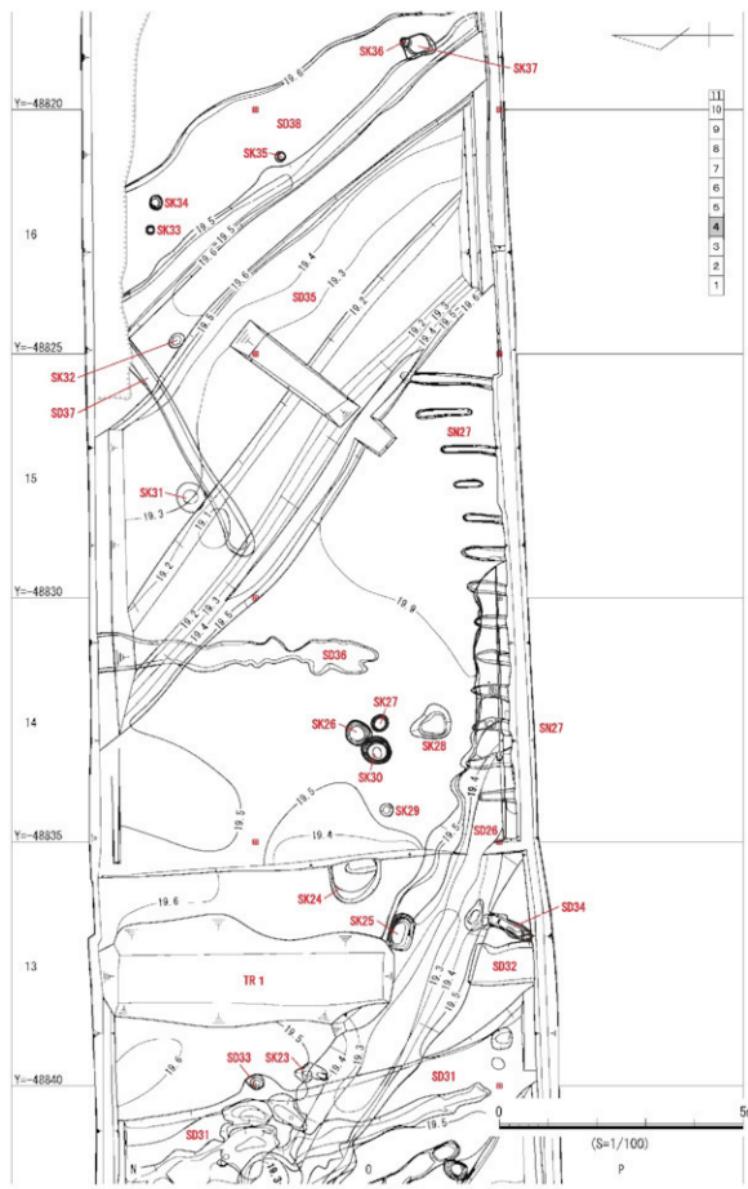
第104図 第2調査面発掘区全域図分割図①



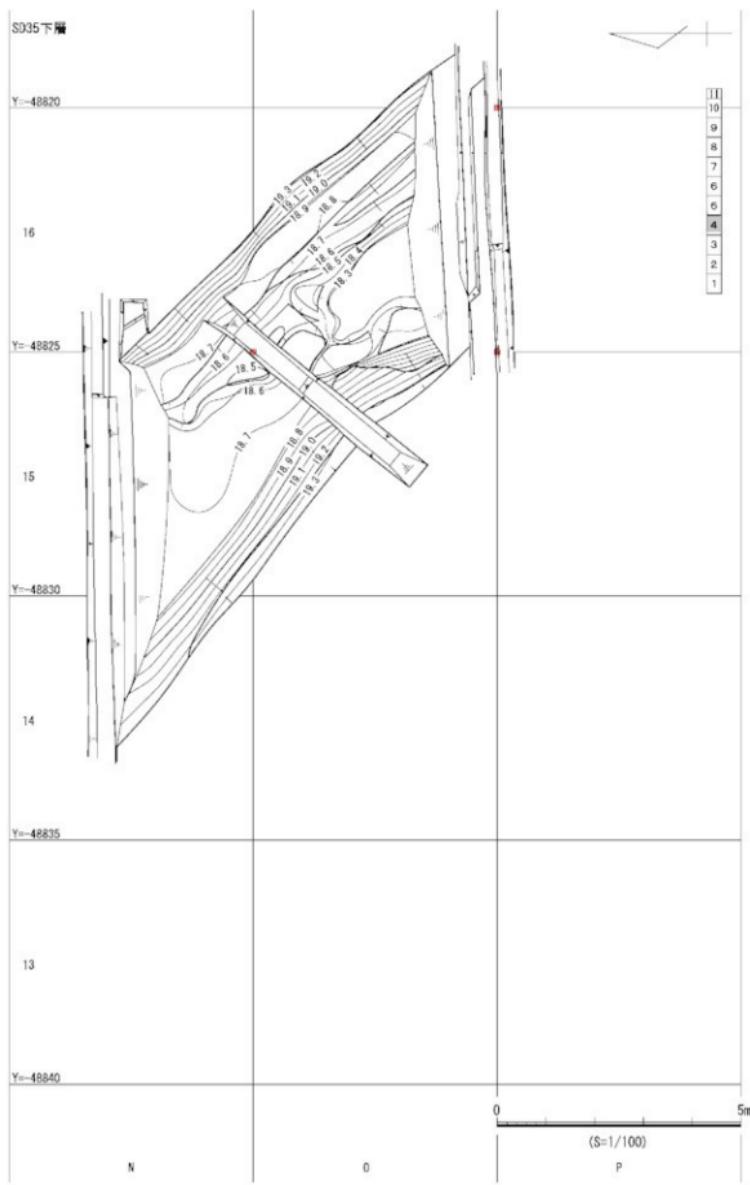
第105図 第2調査面発掘区全域図分割図②



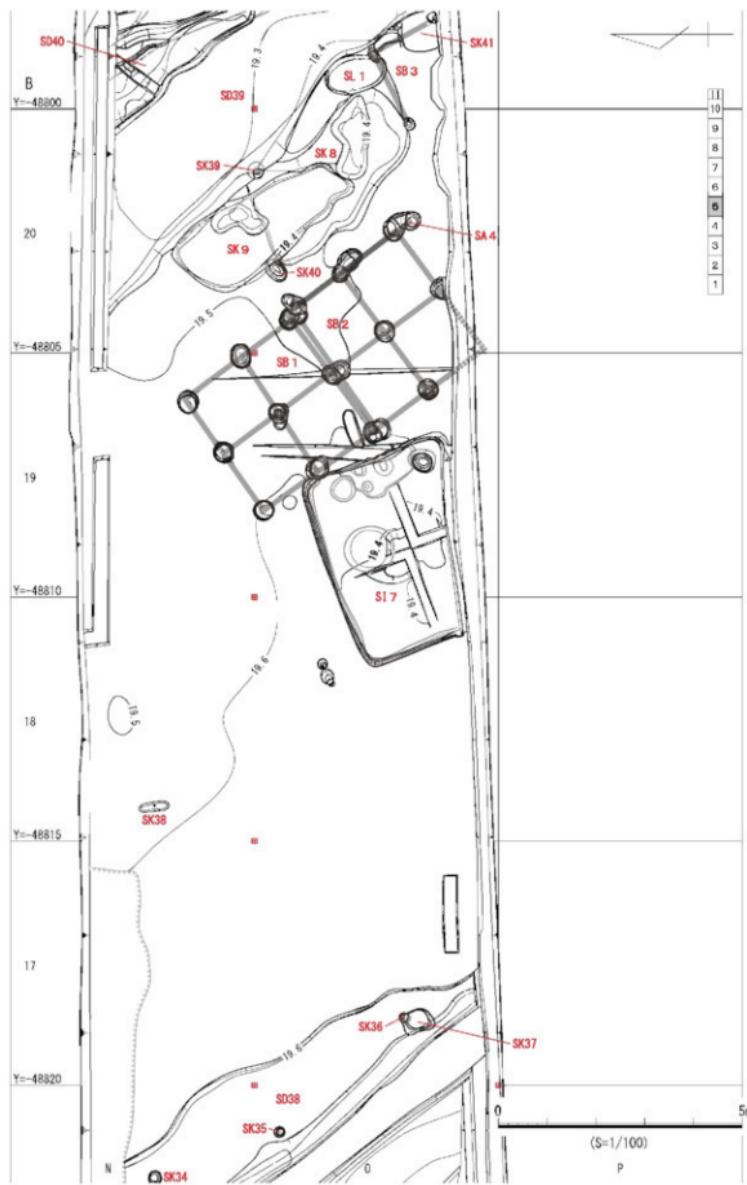
第106図 第2調査面発掘区全域図分割図③



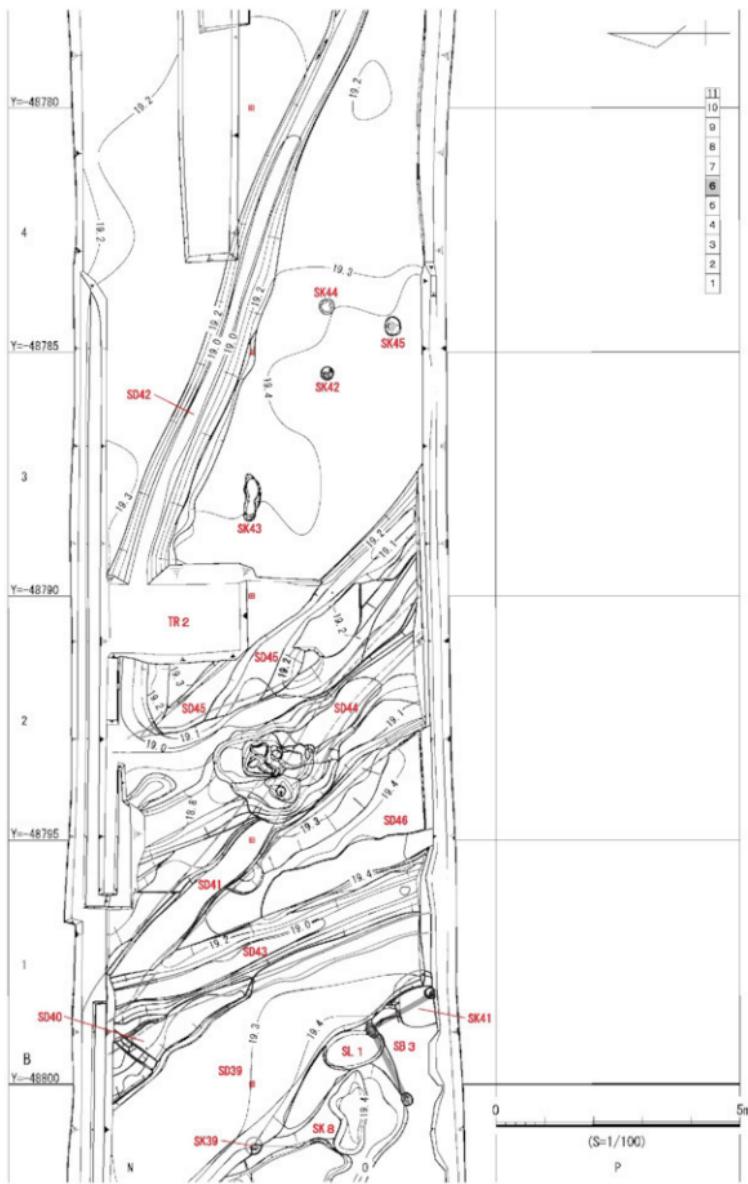
第107図 第2調査面発掘区全域図分割図④



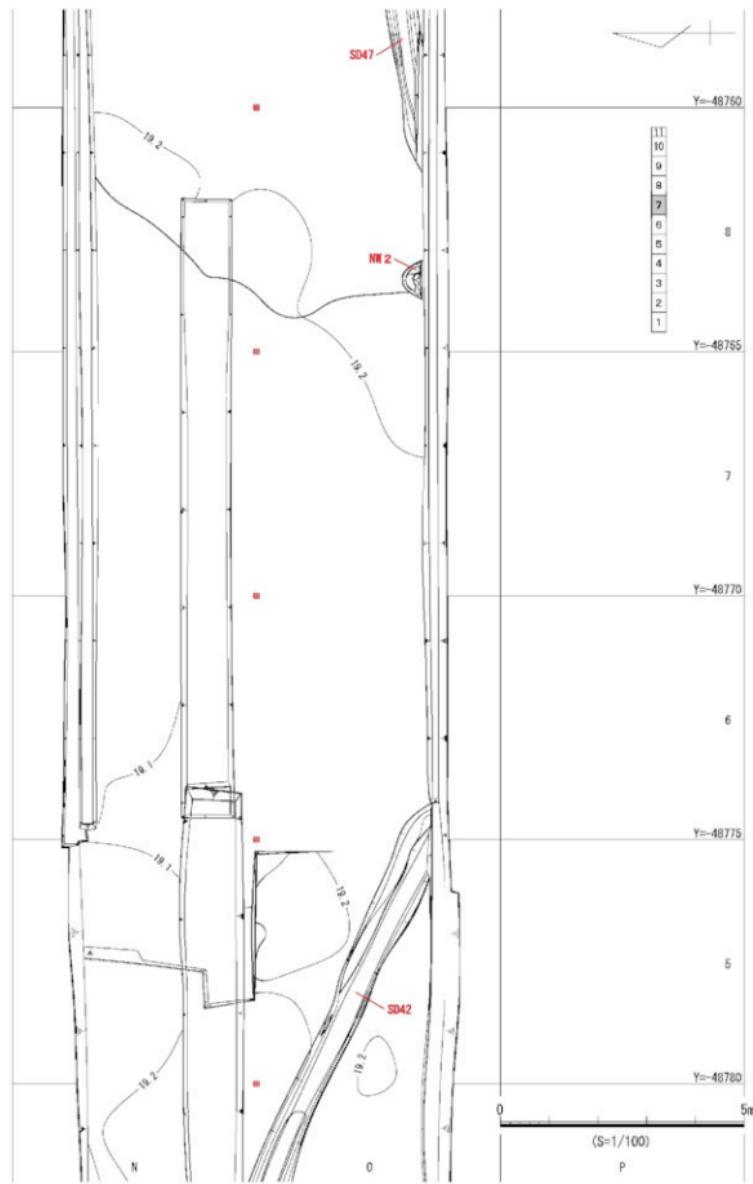
第106図 第2調査面発掘区全域図分割図⑤ (SD35 V層上面)



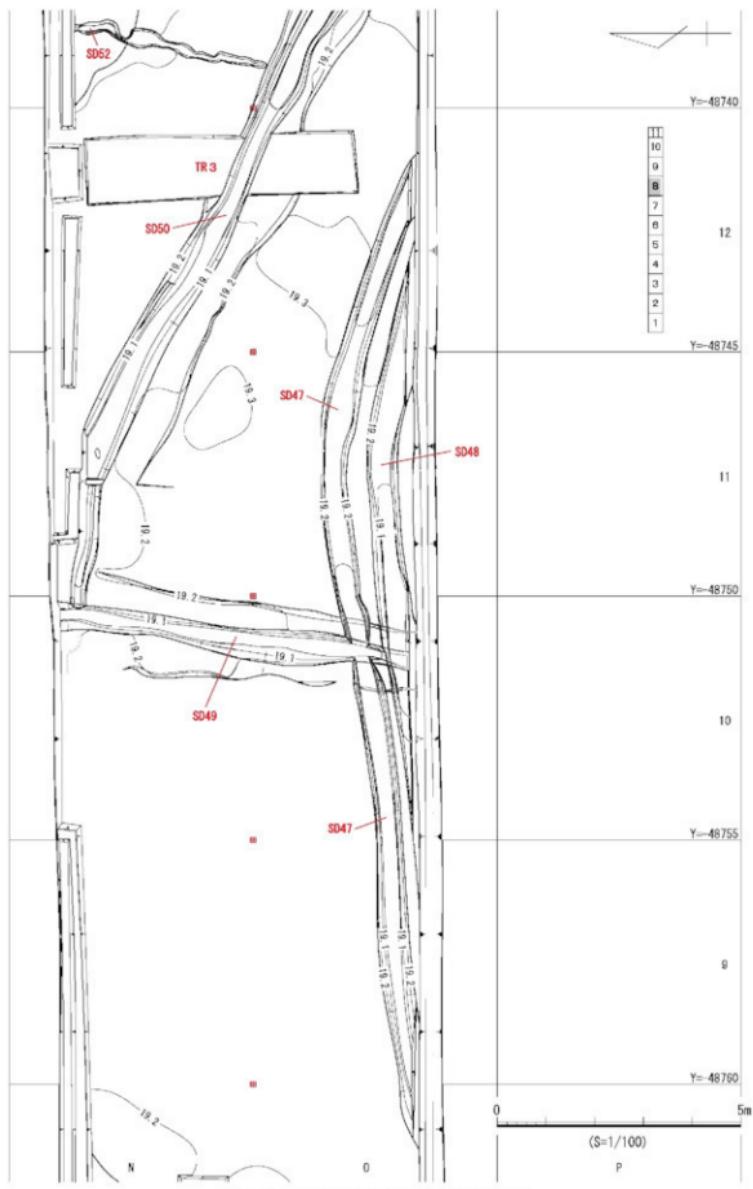
第109図 第2調査面発掘区全域図分割図⑥



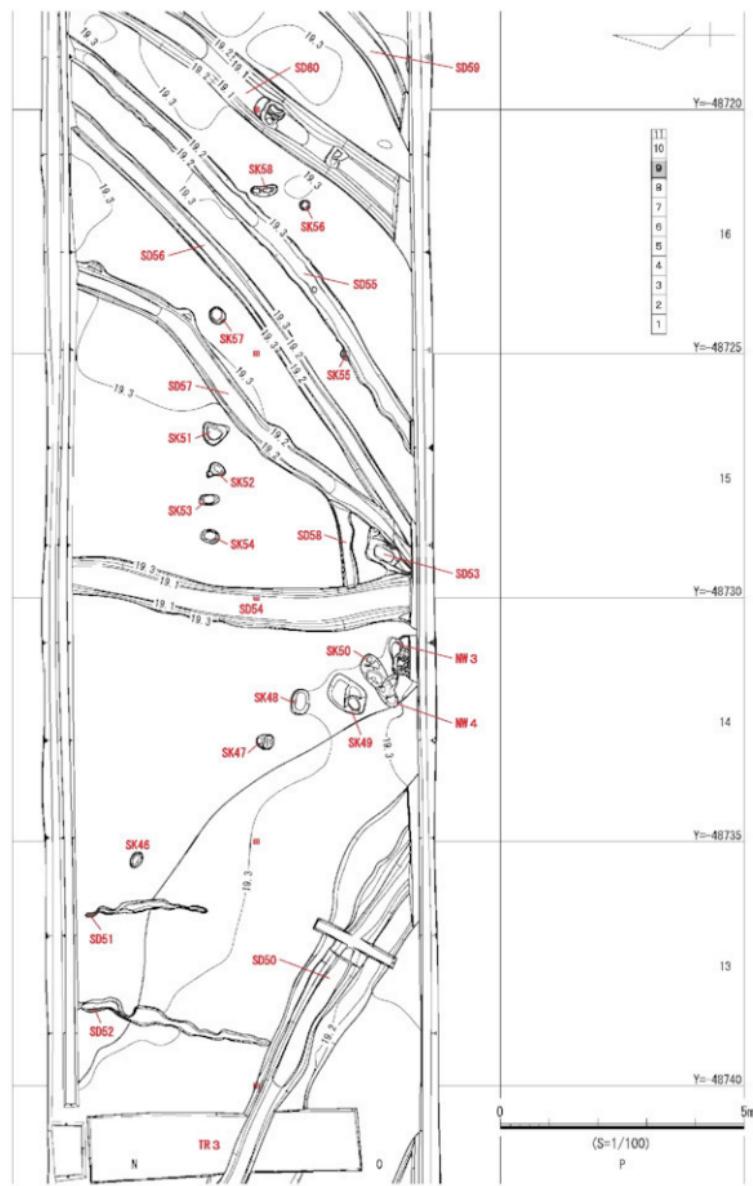
第110図 第2調査面発掘区全域図分割図⑦



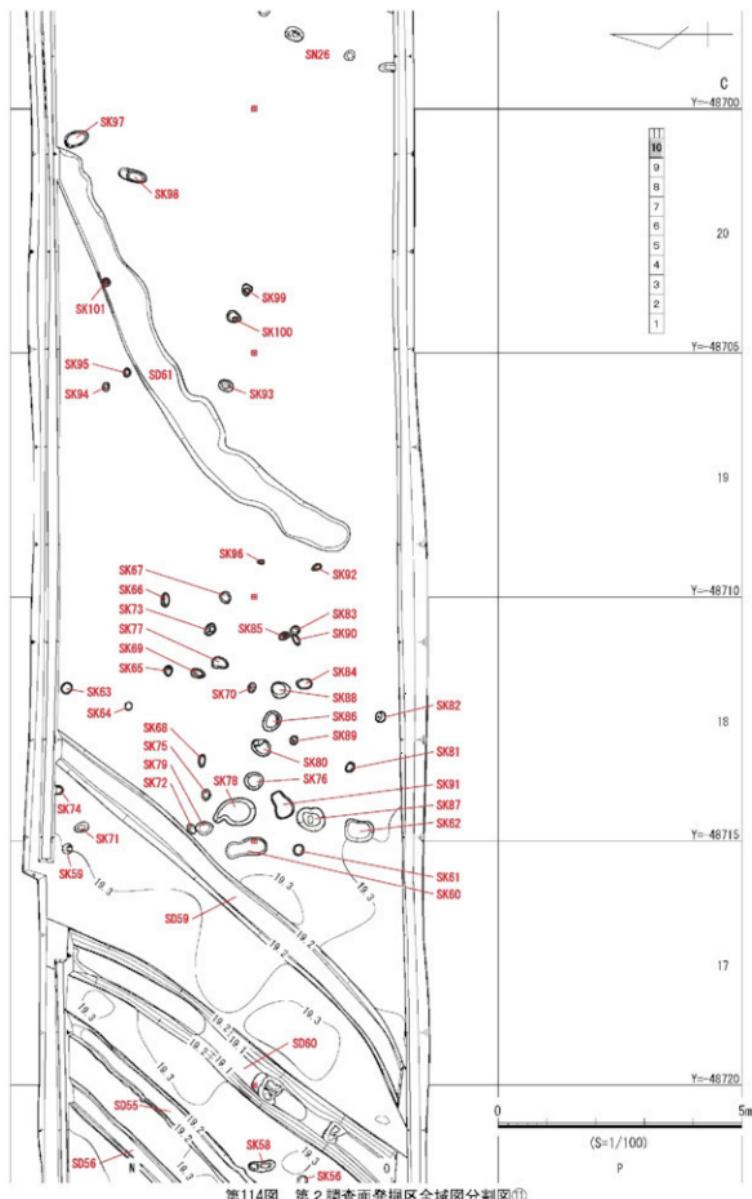
第111図 第2調査面発掘区全域図分割図⑧



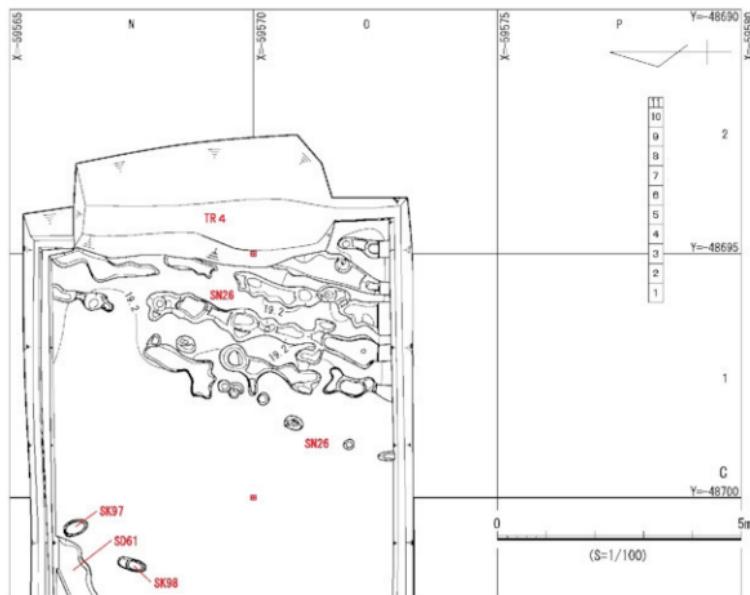
第112図 第2調査面発掘区全域図分割図⑨



第113図 第2調査面発掘区全域図分割図⑩



第114図 第2調査面発掘区全域図分割図⑪



第115図 第2調査面発掘区全域図分割図②

第5節 第3調査面の遺構・遺物

第3調査面の遺構・遺物は、すべて縄文時代晚期中葉～後葉に属すると考えられる。遺構の内容について記載し、出土遺物による検討を踏まえた遺構の時期的変遷については第6章で詳述する。遺構の種別は、土器埋設遺構や焼土、溝状遺構、土坑などがあり、同一面で自然流路を確認した。

1 土器埋設遺構

SJ 1 (第116・121図)

検出状況 A013グリッドで検出した。他の土器埋設遺構とは若干離れた位置にあり、SD62以西にあるものはこの1基のみである。検出した段階では底部を欠損した269とその内側に落ち込んだ破片のみが露出した状態であり、掘方の掘削によって、270の底部を確認した。埋設土器は、長軸がN-40°-Eで、地面に対し40°の角度で斜位に設置されていた。270と269の口縁部を合わせ、270が269に深く被る形態をとる。埋設土器を復元した結果、270は口縁の一部、269は体部下半を欠いており、269とは接合しない同一個体と思われる底部を確認した。土圧等により269がつぶれたのちに、ほぼ同じ高さに位置する269体部下半と270の上部が何らかの原因で削平されたと考えられる。

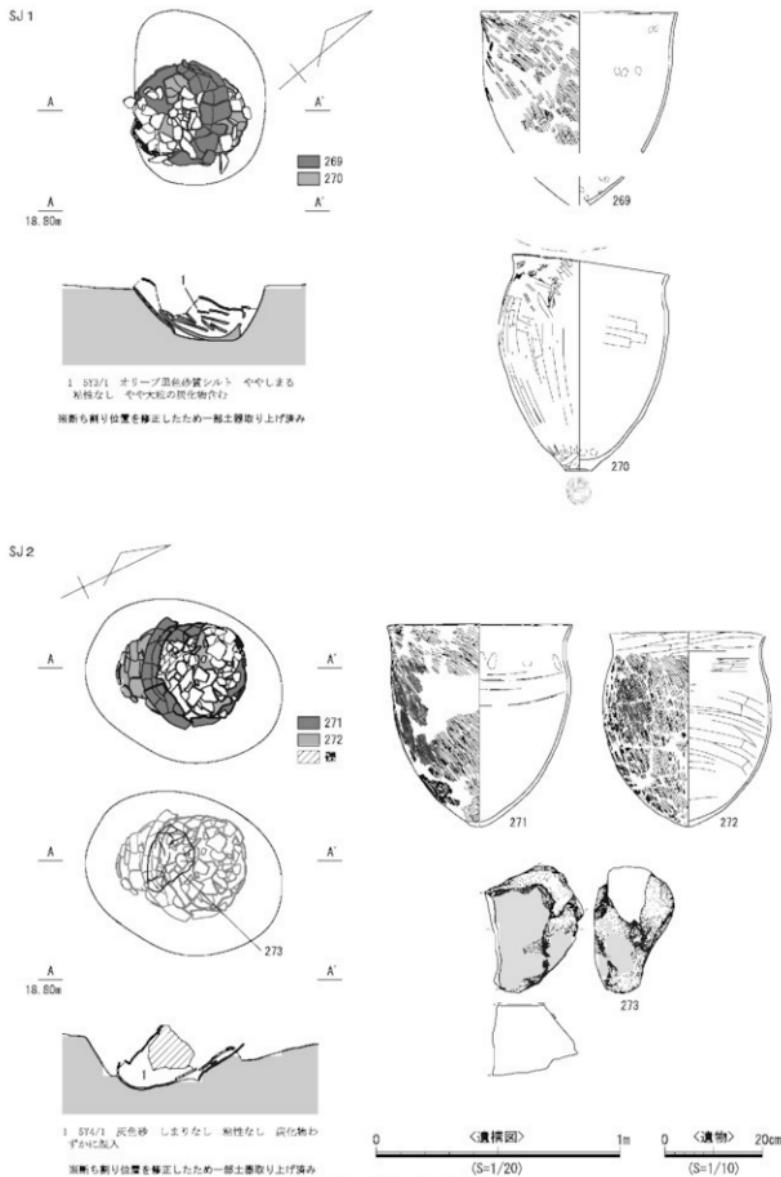
堆積・掘方 埋設土器内と掘方の埋土は、ともに重複するNR2の埋土と酷似しており、範囲は不明瞭であった。掘方の規模は埋設土器よりやや大きく、底面は土器を設置する深さや形状で掘り込まれておらず、斜位に設置するための埋め戻しなどは認められなかった。

出土遺物 269は第II群A 1 a類とした。頸部と体部の境は不明瞭で、最大径は口縁部にある。口縁部から体部にかけての外面上に連続する粗い条痕を斜位に施し、内面には板ナデのような調整痕が残る。この条痕は、戸入村平遺跡やいんべ遺跡の報告（岐阜県文化財保護センター1994、2000）において、「粗いミガキ」と表記された棒状工具による調整と同一と考えられる。以下の記述には「粗い条痕」と表現した。底部も出土したが、前述のように接合しない。底面は残存していないが、271と同様に尖底になるとされる。口縁端部は尖り気味で連続刻みは認められない。270は第II群A 2 a類とした。口縁部がやや開き気味になり、頸部と体部の境はやや不明瞭である。269とは異なり、明確な底面が認められる。口縁部外面にはミガキのような調整、体部外面には縦位のケズリ、内面には板ナデのような調整痕が残る。口縁端部はやや面取り気味で、連続する鋸歯状のヘラ刻みを施す。

所属時期 埋設土器からI b期に位置付けられる。

SJ 2 (第116・121図・122図)

検出状況 A015グリッドで検出した。検出した段階では北側の271のみが検出面上に露出した状態であったため、その口縁部を基準として軸を設定し、掘り下げや土器の取り上げを行った。しかし、掘削の過程で、271の内側に272があることが判明したため、軸を設定し直して調査を行った。埋設土器は、長軸方位がN-25°-Eで、地面に対し35°の角度で斜位に設置されていた。271と272の口縁部を合わせ、271が272に深く被る形態をとる。また、土器の内部には最大径20cm程度の亜角縁（273）が入れ込まれていた。この縁の上面にはつぶれた埋設土器の破片がのっていたため、設置当初から縁が入れ込まれていた可能性が高い。埋設土器は、復元の結果271・272ともに、一部を欠くもののほぼ完形に近い形状となった。土圧でつぶれた状態で埋没したと考えられる。



第116図 SJ 1・SJ 2 遺構図

堆積・掘方 埋設土器内と掘方の埋土は、ともに基盤層であるVI b 層と酷似するが、僅かに砂の粒子が細かく感じられた。掘方の規模は埋設土器よりやや大きいが、底面は土器を設置する深さや形状で掘り込まれており、斜位に設置するための埋め戻しなどはみられなかった。

出土遺物 271 は第II群 A 1 a 類とした。269 と非常によく似た器形や調整をもち、法量もほぼ同じである。底部外面には丸みがあり、明確な底面が認められない。口縁端部は尖り気味になる。272 は第II群 A 1 b 類とした。内面には板ナデのような横位の調整痕が残る。底部外面には丸みがあり、明確な底面が認められない。口縁端部は尖り気味になる。

273 は石皿・台石類である。砂岩の亜角礫の2面に広い磨面が残る。側面は自然面の起伏によって、磨面が飛び地状となっている。

所属時期 埋設土器から I b 期に位置付けられる。

SJ 3 (第117・122図)

検出状況 A015 グリッドで検出した。第2調査面のSD35 の断ち割り調査を実施した段階で一部を検出していたが、当初はVI層中の土器片と考えていた。検出した標高は、SD35 のほぼ底面にあたる。埋設土器は、長軸方位が N-22° -E で、地面に対してほぼ水平の横位に設置されていた。274 と 275 の2個体が用いられているが、274 の口縁部は東を向いて合わせ口形態をとらない。また、274 は 275 の口縁部を覆うように出土したことから、274 を 275 の蓋として利用したと考えられる。なお、両土器を復元した結果、275 はほぼ完形となったが、274 は底部を欠き、蓋として利用された当初から欠損していたと考えられる。

堆積・掘方 埋設土器内と掘方の埋土は、ともに基盤層であるVI b 層と酷似する。掘方の規模は埋設土器よりやや大きいが、掘方の東端を SD35 の断ち割り調査によって削平してしまったため検出できなかった。掘方の深さは、復元した 275 の横位に置いた際の最大径よりかなり浅いが、これは上面を SD35 によって削平されていることによるといえる。

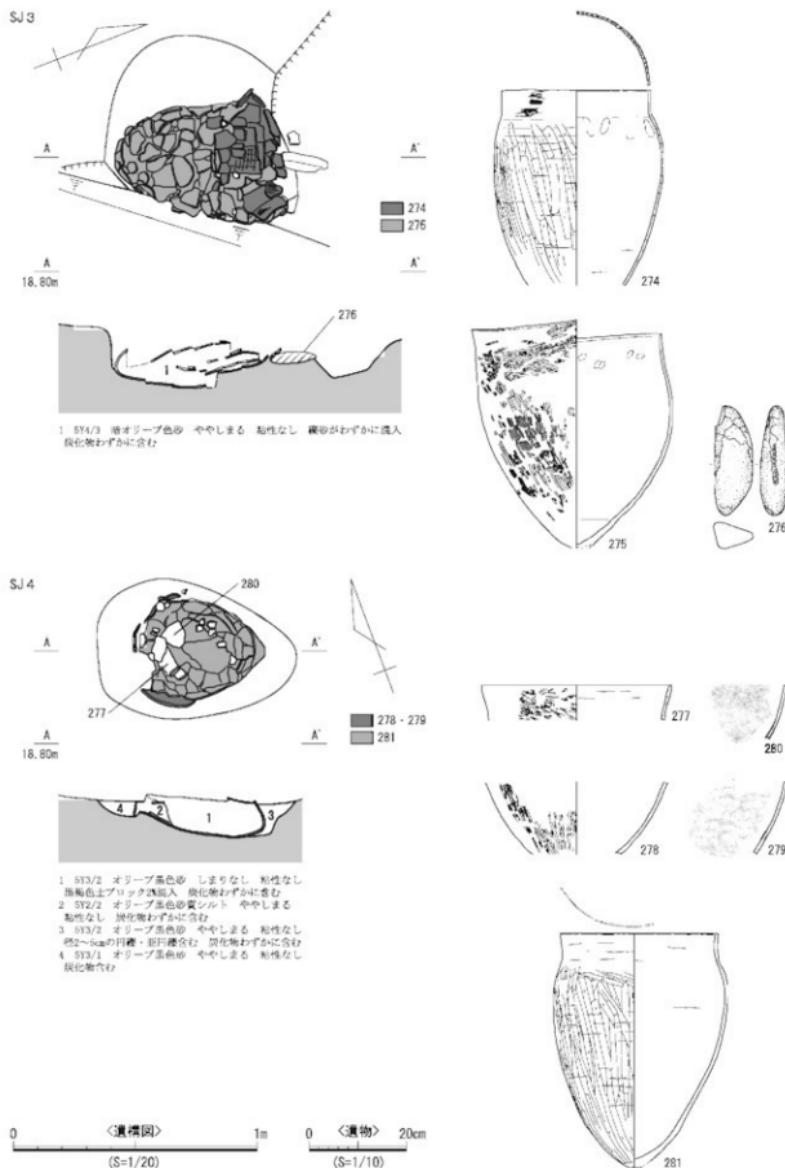
出土遺物 274 は第II群 A 2 a 類とした。口縁部は内傾しながら、直線的に立ち上がる。275 と比較すると、胎土が白っぽく器壁に厚みがあり、丁寧に成形されている。体部外面には縦位のケズリ調整を施し、その影響か外面に輪積痕が露出している。口縁部外面には工具不明の横位の条痕が廻る。口縁部端部に連続する指頭押圧による連続刻みが認められる。275 は第II群 A 1 a 類とした。269 や 271 と同様の器形をとるが、大きく歪んでおり、口縁部が水平にならない。口縁部外面には横位、体部には斜位の粗い条痕を施す。内面には草茎状工具によると考えられるナデ調整が残る。底面は欠損により残存していない。口縁端部は 269・271 と同様に尖り気味になる。

276 は磨石・叩石類である。砂岩で、埋設土器の口縁部北側の基盤層上面で出土した。断面が三角形に近い形状をとり、最も尖った側縁部に連続する敲打痕が残る。

所属時期 埋設土器から I b 期に位置付けられる。

SJ 4 (第117・123図)

検出状況 A015 グリッドで検出した。第2調査面 SD35 の断ち割り調査で本遺構を確認した。検出当初から土器の断面が検出面に露出しており、土器を半截したような状態となっていた。埋設土器内部の埋土を掘削した結果、土器内部に落ち込んだ破片がほとんどみられなかった。当初から半截されていた可能性も考えたが、蓋として設置された土器も本体である 281 と同様な標高までしか残存していないこと



第117図 SJ 3・SJ 4 遺構図

から、後世の削平と判断した。遺構上面にVI a層が堆積し、特に搅乱された様子は認められなかったことから、VI a層堆積前に地面から露出した部分が削平されたと考えられる。長軸方位はN=70° Wで地面に対し24°の角度で斜位に設置されていた。281の口縁部に、立て掛けるように置かれた277と278が蓋と考えられ、279や280も内部に倒れ込んだ蓋の一部である可能性がある。なお、277～280は、胎土等からいずれも別の個体と考えられる。

堆積・掘方 棚内外で異なる堆積が認められた。1層は土器内への流入土、2層は埋設直後に土器へ流入した埋土、3・4層は設置の際の掘方埋土と思われる。掘方は、埋設土器の長軸より若干大きく、底面は土器を設置する深さや形状で掘り込まれており、斜位に設置するための埋め戻しなどはみられなかった。

出土遺物 277は第II群A 1 a類とした。278も外面に斜位の粗い条痕が認められる深鉢で、第II群A 1類に含めた。279は深鉢の体部下半であり、外面にケズリ調整を施すことから第II群A 2類に含めた。280は外面に条痕調整のような痕跡が残るがナデ消されている。第II群A 1類に含めたが詳細は不明である。281は274と同様な器形をもつ。第II群A 2 a類とした。口縁部外面は横位のナデ調整を施し、体部は縦位のケズリ調整を施す。外面に輪積痕が露出する点も274と共通する。口縁端部は面取り気味で、ヘラ刻みが認められる。底部は尖底に近いが、僅かに面が形成される。

所属時期 埋設土器からI b期に位置付けられる。

SJ 5 (第118・123図)

検出状況 AN16グリッドで検出した。SK115を精査した際に埋設土器の上面の一部が露出し、SK115の掘削を進めた後に埋設土器を確認したため、SK115と重複する土器埋設遺構と考えた。しかし、SK115の出土土器は、SJ 5の埋設土器より新しい様相を示すことから、SK115の底面にSJ 5の上半が地上に露出した状態で埋設され、SK115と同時に埋没したと考えられる。このことは、SK115が人為的な遺構ではなく、生活面上の窪地であった可能性を示す。

埋設土器の長軸方位は、N=71° -Wで、SJ 4とほぼ同じである。また、埋設状態の土器上半が欠損しているにもかかわらず、内部に破片の落ち込みが見られない点も同様である。ただし、口縁部が東に向いている点や、横位に設置されている点は異なる。埋設土器は、本体である283と蓋と考えられる282からなる。282は破片の状態で283の口縁部を覆うように被せられていた。282・283ともに検出面から上部が失われており、削平された可能性が高い。282を接合した結果、体部上半の2/3程度まで復元でき、底部破片は確認できなかったことから、埋設時に282の上半の破片が用いられ、土器の下半は当初から用いなかつたと考えられる。なお、埋設土器の南側から石刀(357)が出土したが、SK115の埋土上面で出土したことから、SJ 5より新しいと考えられる。

堆積・掘方 SK115の埋土と本遺構の掘方埋土は、非常によく似ており、埋設土器内部の堆積も同様であった。なお、SJ 5の掘方は埋設土器より一回り大きく、底面はほぼ平坦であった。

出土遺物 282は第II群A 3 c類とした。口縁部が直線的に開くバケツ形の器形をとり、外面に縦位の板ナデのような痕跡が残る。口縁端部の面取りは認められない。283は第II群A 1 b類とした。口縁部と体部外面の境の条痕は、体部の調整後に横位に施す。底部は体部からやや突出し、径の小さい面が形成される。口縁端部には連続する指頭押圧による連続刻みが認められる。

所属時期 埋設土器からI b期に位置付けられる。

SJ 6 (第 118・124 図)

検出状況 A016 グリッドで検出した。第2調査面の SD35 を掘削する際に土器の一部が露出した。同一個体の深鉢（284）の破片を、平面形が円形に近い形状に組んでおり、内部にやや小型の深鉢（285）が横位の状態で収められていた。埋設土器は、284 の口縁部から体部上半の大型破片を下に敷き、その上に底部を欠く 285 を置いた後、284 の口縁部破片を 285 の底部欠損部を塞ぐように立て、残りの破片の外面を上にした状態で二重に被せ、蓋とする。284 を箱状に組み立てて設置した状態といえる。284 は復元した結果、体部下半を欠いていることが判明した。285 の長軸方位は N=50° -W である。

堆積・掘方 掘方の埋土は SD35 と同時に掘削してしまったため、観察できなかった。掘方は埋設土器よりもかなり大きめに掘られている。土器の内部には VI b 層に類似する砂質の堆積がみられ、鉄分が濃く沈着していた。

出土遺物 284 は第II群 A 2 b 類とした。第II群 A 2 a 類の 274 に似た特徴を備えるが、口縁部外面に突帯文を施す。突帯は上下のナデ調整によって断面が三角形に近い形状をとり、突帯上には平面形状が D 字状となる連続する刻み（以下「D字刻み」という。）をヘラ状工具により施す。西之山式に伴う初期の突帯文土器と考えられる。285 は第II群 A 2 c 類とした。口縁端部は二枚貝による押引状の連続刻みが認められる。

所属時期 埋設土器から I c 期に位置付けられる。

SJ 7 (第 119・124 図)

検出状況 A017 グリッドで検出した。遺物包含層掘削作業中に、遺構検出面より若干下がった位置で、内面を上に向けた状態で 287 が出土したため、埋設土器の上半を誤って取り上げてしまったと考えていた。しかし、同グリッドにおける遺物包含層出土土器の接合作業において、わずかに接合したのみであったことから、元々破片のみの埋設土器であったか、土器の埋設後間もなく壊された可能性がある。長軸方位は N=40° -W で、横位に設置されていたと推定される。

堆積・掘方 遺物包含層掘削作業で上面まで掘り下げてしまったため、堆積状況を観察できなかった。掘方は埋設土器よりやや大きめに掘られており、底面はほぼ平坦である。

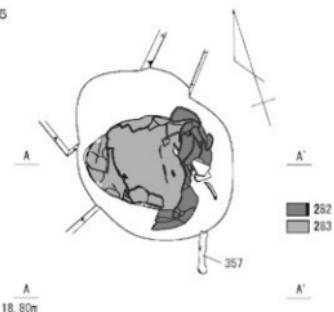
出土遺物 287 の他、口縁部の破片である 286 が出土した。胎土から同一個体ではないと考えられる。286 は第II群 A 1 a 類とした。内面にも横位の調整が認められるが、不明瞭である。口縁端部はやや尖り気味である。287 は外面に斜位の粗い条痕を施すことから、A 1 類に含めた。口縁部は残存していない。体部下半外面に土器表面の割れ目に沿った炭化物の痕跡が残る。また底部外面に断面が V 字状になるヘラ刻みが認められる。

所属時期 埋設土器から I b 期に位置付けられる。

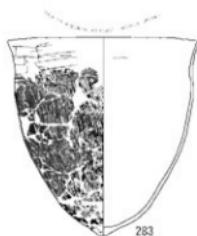
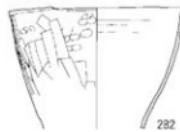
SJ 8 (第 119・124・125 図)

検出状況 A018 グリッドで検出した。検出当初はわずかに土器が露出している状態であり、埋設土器の大半が埋没していた。埋設土器の長軸方位は N=14° -W で、地面から約 25° の斜位で設置されていた。埋設土器の本体と思われる 288 は、口縁部が半周程度しか残存しておらず、内部への破片の落ち込みもわずかであった。蓋として利用されたと思われる土器は 2 個体あり、290 は口縁部から体部上半にかけてがほぼ残存しており、289 は口縁部の一部のみが出土した。289 は 290 の下で出土しており、289 を設置した後に、290 の外面を上にした状態で、290 を覆うように被せたと思われる。290・288 ともに検

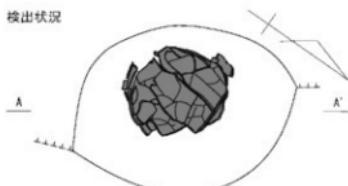
SJ 5



I SY3/2 オリーブ褐色砂(礁砂) ややしまる 粘性なし 水化物わずかに含む



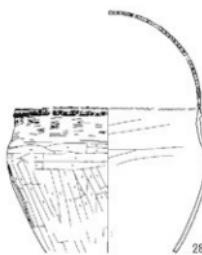
SJ 6



上部破片除去後



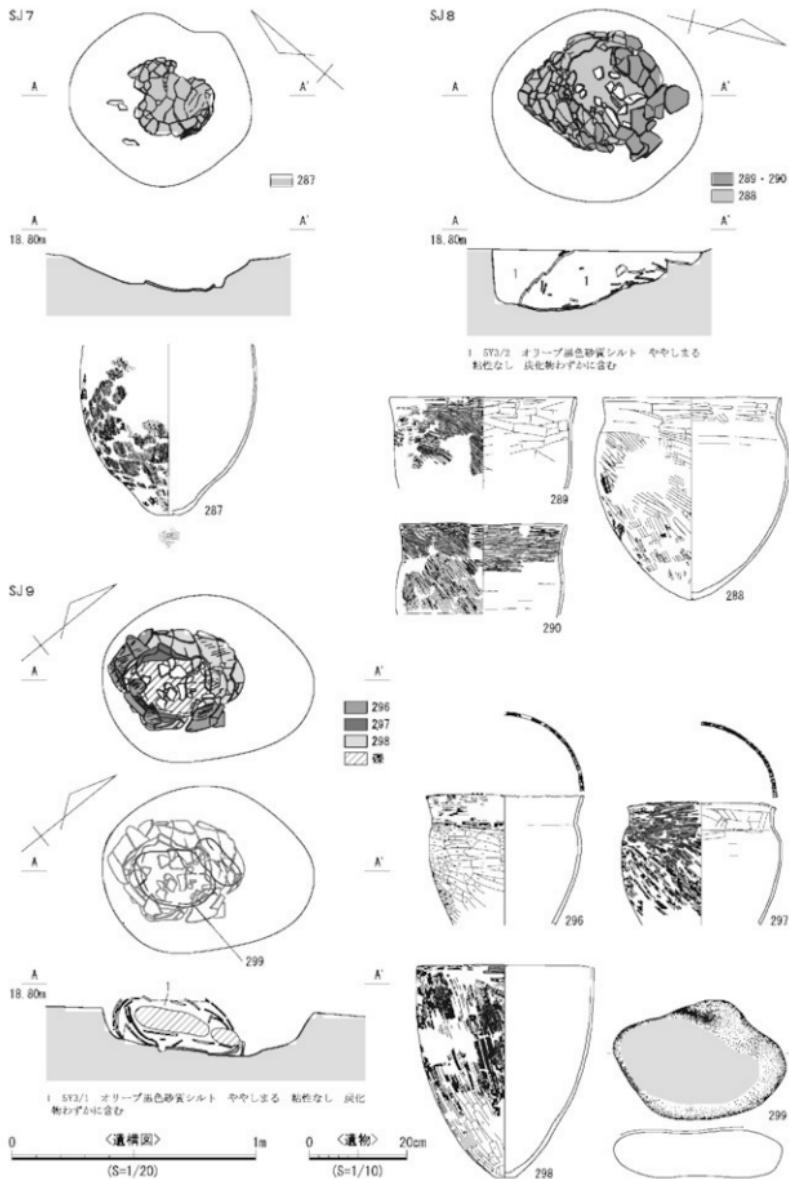
I SY オリーブ褐色砂 しまりなし 粘性なし 上層の層の
変遷により一部薄く鉛分沈着



0 <遺構図> 1m
(S=1/20)

0 <遺物> 20cm
(S=1/10)

第118図 SJ 5・SJ 6 遺構図



第119図 SJ 7～SJ 9遺構図

出面付近が欠けていることから、上面が削平された可能性が高い。

堆積・掘方 掘方はVI b層より若干細かい砂質の堆積で埋没していた。また、掘方の底面は基盤に含まれる粗い砂が露出し鉄分が沈着していたため、土層の境は明瞭であった。埋設土器の内部は掘方の埋土と同質で、違いは認められなかった。掘方は埋設土器よりやや大きめで、その底面は土器を設置する深さや形状で掘り込まれており、斜位に設置するための埋め戻しなどはみられなかった。

出土遺物 埋設土器の他、埋設土器内で出土した土器4点を図示した。時期的に埋設土器より新しい土器であり、埋設土器が削平された際に上層から落ち込んだと推定される。288は第II群A 1 b類とした。体部上半に最大径をもつ器形で、口縁部は比較的直線的に開く。体部に幅の広い条痕を斜位に施す。体部と同様な調整が口縁部内面にも認められる。口縁端部は尖り気味で、底面は体部から僅かに突出し、中央が陥る。289・290は第II群A 1 a類とした。289は内面には横位の板ナデのような痕跡が残る。口縁端部は尖り気味で面取りしない。290は289より体部上半に張りがあり、内面にも外側と同じ工具による調整を横位に施す。口縁端部は尖り気味で面取りしない。291は第II群A 2 c類とした。面取りした口縁端部に二枚貝を用いたD字刻みを施す。292は第II群A 2 c類としたが、口縁部が内傾する特徴がある。口縁端部の面取りが顕著で、外側に粘土のはみ出しが認められ、二枚貝によるD字刻みを施す。なお、口縁部の外側には、放射状の線刻がみられる。293は第II群B 3類とした。口縁部と体部の境に明瞭な段が認められ、口縁端部下の外側に一条の沈線が廻る。口縁部は直立し、内外面ともミガキによって調整される。294は第II群C 3類とした。波状口縁をもち、波頂部に中央を指頭回円によって囲ませた小突起が付される。

295は用途は不明であるが、加工のある礫である。泥岩の亜角礫で節理に沿って欠損している。断面が角柱状で、短軸側の側面と平坦面1面に大きな剥離が認められる。何らかの未成品の可能性もあるが判断できなかった。

所属時期 埋設土器以外の土器は西之山式から五貫森式に属すると考えられるが、埋設土器は1時期古い稻荷山式段階に属することから、I b期に位置付けられる。

SJ 9 (第119・125・126図)

検出状況 AN18グリッドで検出した。検出当初は北側の掘方が全く認識できなかったため、全容は不明であった。周囲の掘り下げを行い296を検出した時点では、3個体の土器を利用した埋設土器であることが判明した。しかしこの時点でも不明な点が多く、最終的な埋設状況を確認したのは整理等作業で土器の接合を実施した後となった。接合作業の結果、ほぼ完形の砲弾型深鉢(298)と2個体の底部を欠く頸部屈曲深鉢(296・297)からなり、土器の遺存状態は良好であった。埋設の状況は、296を地面から18°の角度で斜位に設置し、口縁部を合わせて297を置く。296は外側を上に向かって破片の状態で297に被せられていたと考えられる。297は底部を欠いており、その蓋として298を使用したと考えられる。長軸方位は、N-40°-Eである。なお、埋設土器の内部から、最大長が約30cmと20cmの円礫が出土した。大きい方(299)は石皿・台石類で、これらの礫の下から外側を外に向かって埋設土器の破片が出土しており、円礫が埋設土器の上に置かれた可能性が高い。

堆積・掘方 掘方及び埋設土器の埋土はVI b層と酷似していた。掘方は埋設土器よりやや大きめで、その底面は土器を設置する深さや形状で掘り込まれており、斜位に設置するための埋め戻しなどはみられなかった。

出土遺物 296は第II群A 2 c類とした。丸みのある体部から口縁部が直線的に開く。口縁端部には二枚貝による押引状の連続刻みが認められる。297第II群A 2 c類としたが、口縁部の立ち上がりが直線的であることや体部外面のケズリ調整後、条痕調整を施す特徴がある。口縁端部は面取りや一枚貝による連続刻みに伴う外面への粘土のはみ出しが目立つ。298は第II群A 3 a類とした。体部上半の外面は工具不明の斜位の条痕による調整調整、下半から底部にかけてケズリ調整を施す。口縁端部下の外面には横位方向の条痕も認められる。口縁端部は面取りされるが、連続刻みは認められない。

299は石皿・台石類である。花崗岩製で、扁平な円礫の片面に比較的広い磨面が残る。

所属時期 埋設土器から、I c期に位置付けられる。

SJ10（第120・126図）

検出状況 AN18グリッドで検出した。この埋設土器を検出した基盤はVII層に類似する様が多い堆積であり、掘方の検出は比較的容易であった。検出当初は底部をなく北側の300のみ露出した状態であり、南側の301は完全に埋まっていた。300は体部下半をほとんどなくものの、底部破片のみ遺構検出面上で出土した。埋設土器の長軸方位はN-19°-Eで、地面から30°の角度で斜位に設置されていた。300の方が若干口径が大きく、301の方が内側となるが、重なりは口縁部のみである。300の内部からは5個の円礫・亜円礫が出土し、特に301の口縁部付近に集中していた。これらの礫の下には土器片がなく、また位置にまとまりがあることから、何らかの目的で埋設時に入れ込まれたと考えられる。

堆積・掘方 掘方及び埋設土器の埋土は、VI b層に類似する砂質土であるが、基盤の影響で若干礫が多い。掘方は埋設土器より大きめで、底面は土器の形状に合わせて掘り込まれており、斜位に設置するため埋め戻しなどはみられなかった。

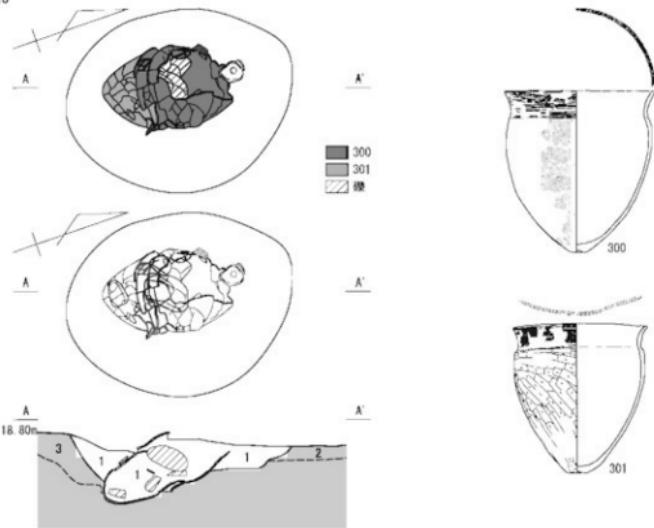
出土遺物 300と301が埋設土器である。300・301ともに第II群A 2 c類とした。300は体部に丸みがあり、頸部が直線的に開く。体部のケズリはナデによって単位が不明瞭となっている。底部は突出することなく窄まり、底面のみ大きく窪む。口縁端部は面取りされ、二枚貝によるD字刻みを施す。301は口縁部は緩やかに外反する。体部外面のケズリ調整の単位は300より明瞭に残る。底面は300と同様の凹み底になる。口縁端部はヘラ状工具によるD字刻みを施す。

所属時期 埋設土器から、I c期に位置付けられる。

SJ11（第120・126図）

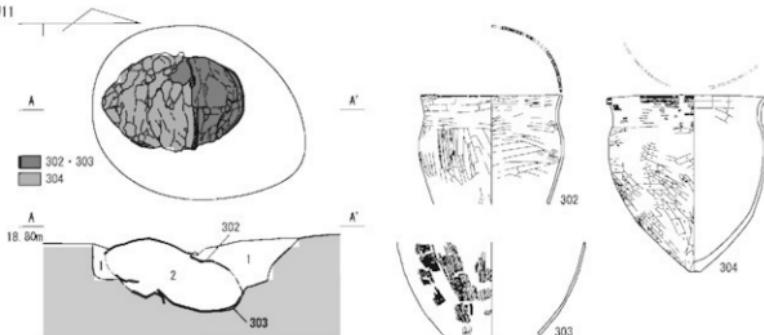
検出状況 AN19グリッドで検出した。検出当初は南側の304のみが遺構面に露出しており、302・303は完全に埋没していた。埋設土器の長軸方位はN-1°-Eで、南北方向に近い。また埋設土器は、地面から25°の斜位に設置されていた。埋設土器を確認した時点では、2個体の上器による合わせ口形態と考えていたが、整理等作業において接合作業を実施した結果、302と303が別個体であることが判明した。302は口縁部から体部上半の破片で口縁部は半周程度残存しており、303は302より大型の土器の体部破片で、口縁部や底部は残存していないかった。土器の重ね合わせから考えると、304の口縁部を下にして斜位に設置した後に、303を頸部方向を304に向けて置き、その上に304と口縁部を合わせて302を被せたと考えられる。302と303の間が土圧でつぶれることなく空間が保たれているが、半周程度残る302が支えになったと推定される。なお、断面図では303の破片の長さが約30cm程度あるが、土器片の遺存状態が悪く、上半部が接合できなかつたため、図示したのは体部下半の約20cmである。なお、304に接する部分が頸部であることは確認した。

SJ10



- 1 SY3/2 オリーブ色粘土シルト～砂 ややしまる 粘性ややあり 2～3cmの小穂多量に含む 变化物わざかに合む 厚方進土
- 2 SY3/2 オリーブ色粘土必須シルト しまる 粘性ややあり 1～2cmの小穂多量に含む 基盤となっている自然道路
- 3 SY4/2 灰青リープの壁 しまる 粘性なし 壁面上面が酸化により赤茶 壁盤となっている自然道路

SJ11

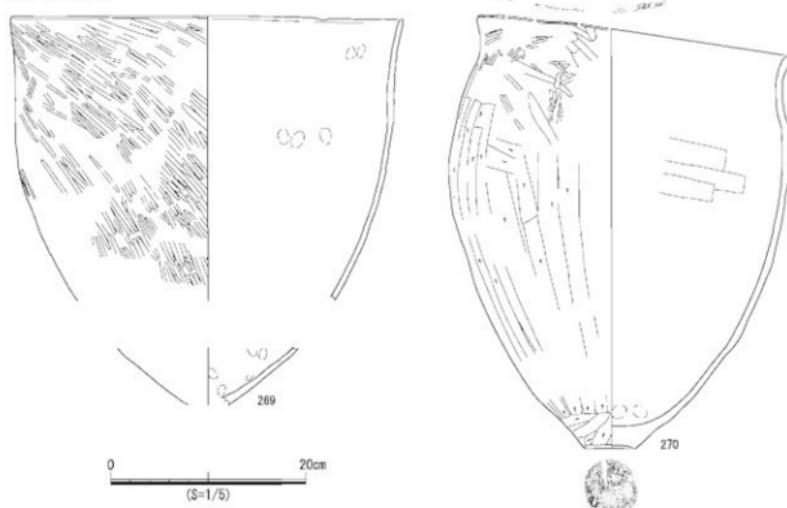


- 1 SY1/1 オリーブ色砂 ややしまる 粘性なし 径1～2cmの砂円錐多量に含む 灰色土ブロック15塊入
- 2 SY3/2 オリーブ色粘土必須シルト ややしまる 粘性あり 小穂や瓦片わざかに含む 2～3cmの重円錐わざかに含む 变化物わざかに合む

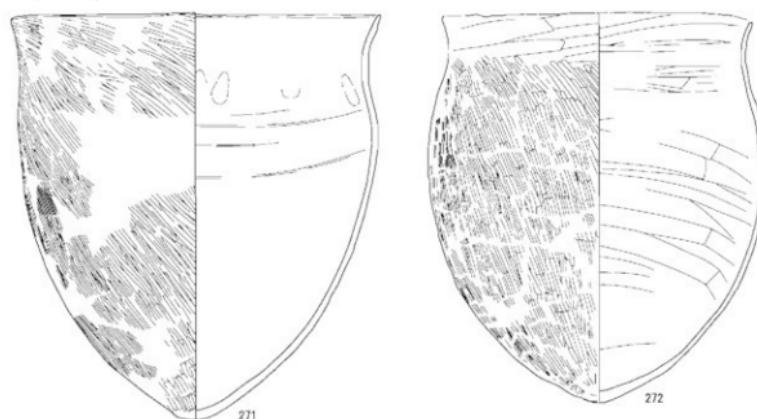


第120図 SJ10・SJ11遺構図

SJ 1 (269・270)

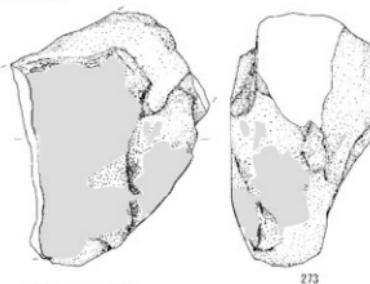


SJ 2 (271・272)

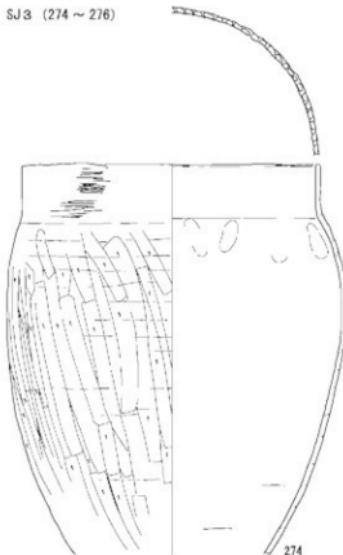


第121図 土器埋設遺構出土遺物①

SJ 2 (273)

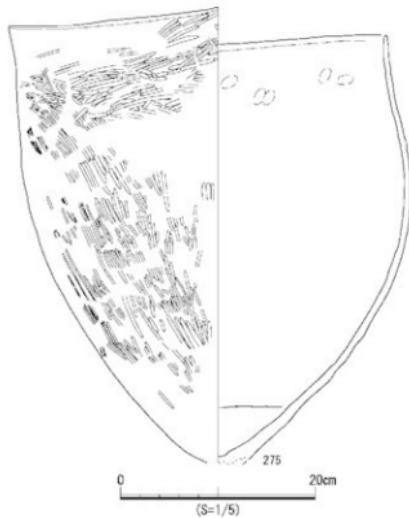


SJ 3 (274 ~ 276)

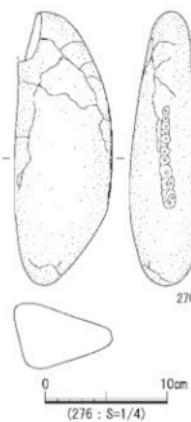


273

274



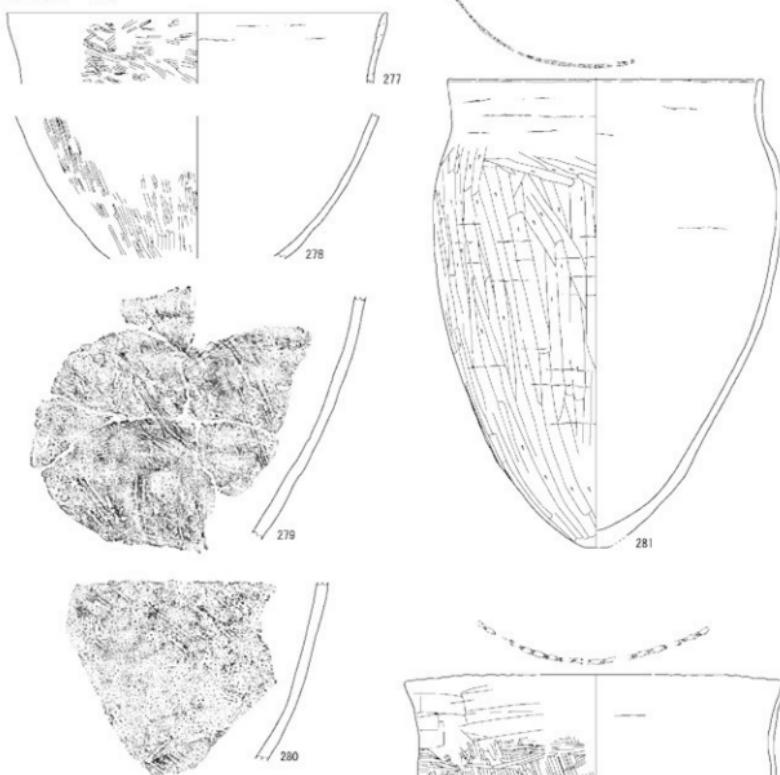
0 20cm
(S=1/5)



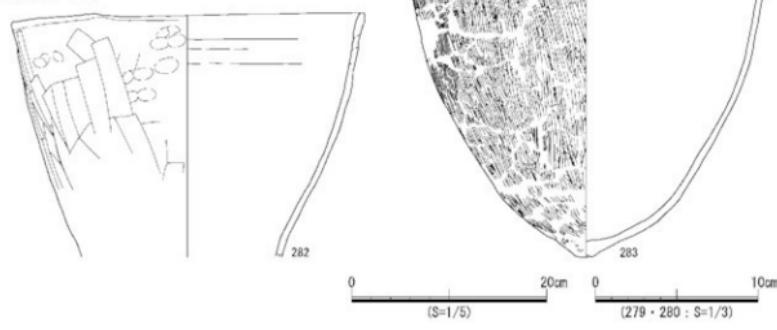
0 10cm
(276 : S=1/4)

第122図 土器埋設遺構出土遺物②

SJ 4 (277 ~ 281)

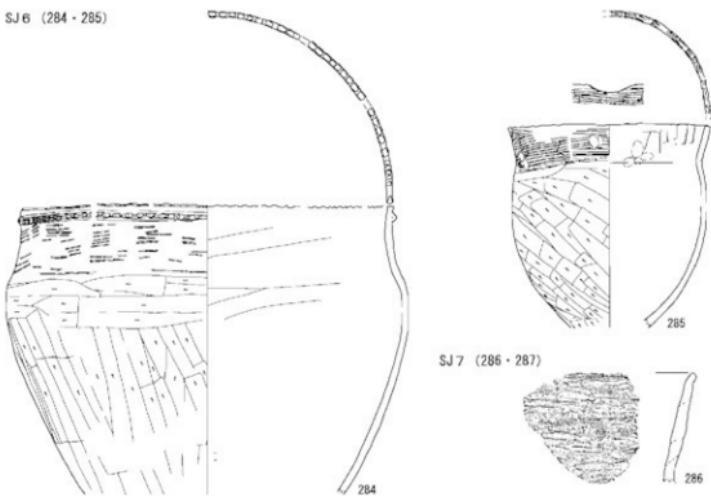


SJ 5 (282 ~ 283)



第123図 土器埋設遺構出土遺物③

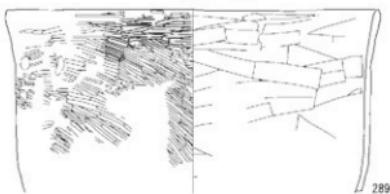
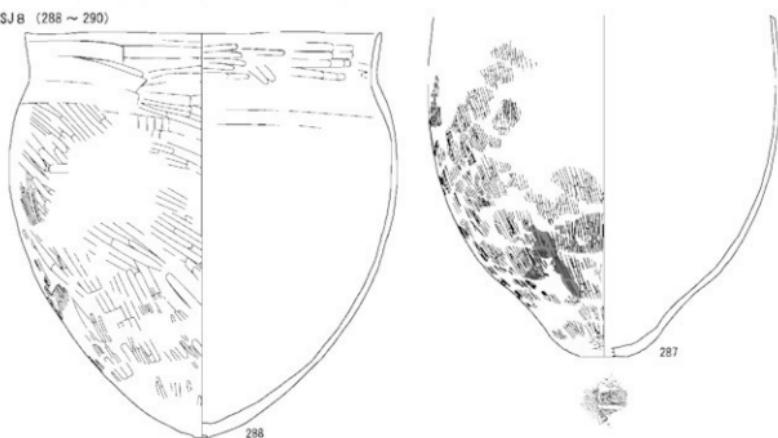
SJ 6 (284・285)



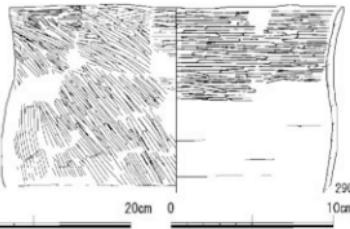
SJ 7 (286・287)



SJ 8 (288～290)



289



(S=1/5)

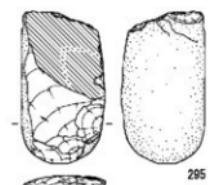
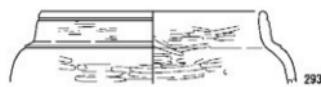
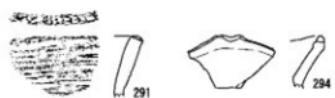
20cm

(286: S=1/3)

10cm

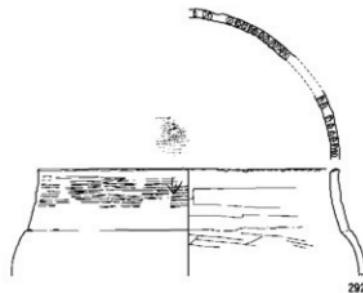
第124図 土器埋設遺構出土遺物④

SJ8 (291 ~ 295)

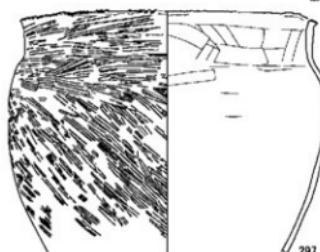
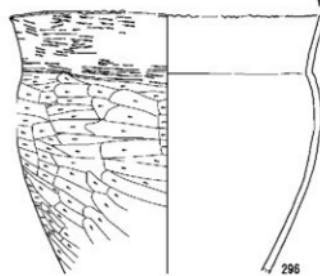


0 20cm
(S=1/5)

0 10cm
(291・293・294 : S=1/3)

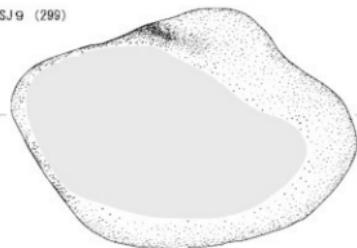


SJ9 (296 ~ 298)



第125図 土器埋設構造出土遺物⑤

SJ9 (299)

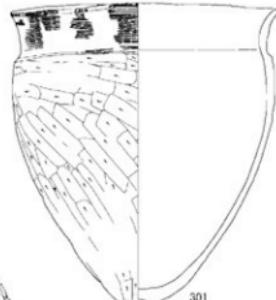


299

SJ10 (300・301)

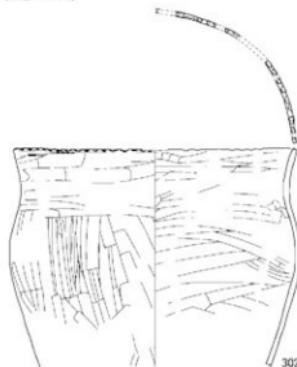


300



301

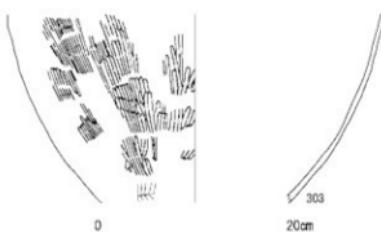
SJ11 (302～304)



302



304



303

0
20cm
(S=1/5)

第126図 土器埋設遺構出土遺物⑥

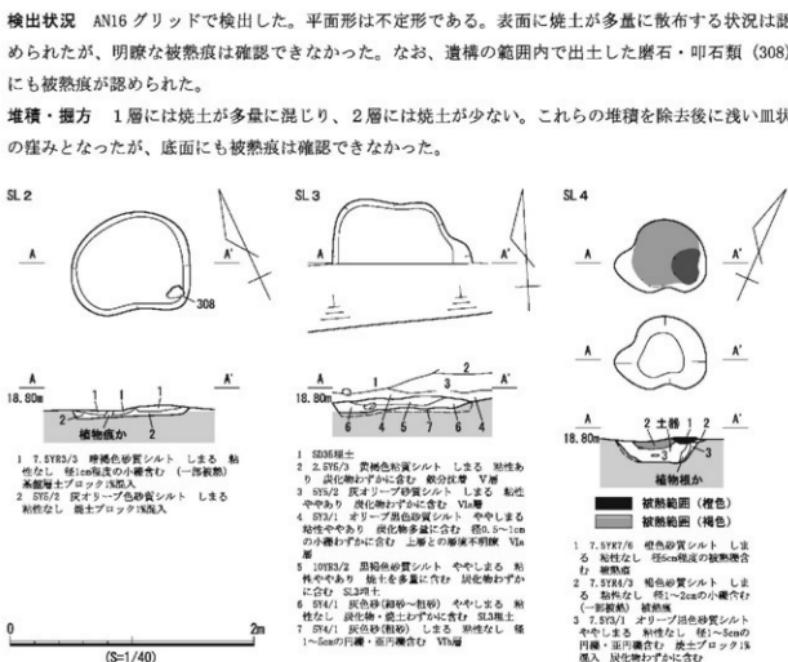
堆積・掘方 掘方はVI b層に類似する砂質土であったが、埋設土器内部にはやや粘質があるシルトの堆積が認められた。埋設土器がつぶれなかつたため、隙間から粒子の細かいシルトが流入したと考えられる。なお、本遺構の埋設土器内の埋土について築い作業を実施したが、微細遺物は確認できなかった。掘方は埋設土器よりやや大きめで、その底面は土器を設置する深さや形状で掘り込まれており、斜位に設置するための埋め戻しなどは認められなかつた。

出土遺物 302・303は第II群A 6類とした。302はA 2類に似た器形をもつが、頸部と体部の境が不明瞭で口縁部外面及び内面に横位、体部には縦位の板ナデのような調整を施す。口縁端部には棒状工具による連続する押圧が認められる。303は深鉢の体部で、棒束状工具による斜位の条痕を施す。304は第II群A 2 d類とした。突帯は幅約1cmで、二枚貝によるD字刻みを施す。突帯の上端をナデ、下端を未調整とする垂れ下がり状の断面形をもつ。西之山式段階の突帯文と考えられ、松本氏の分類におけるA 1類に相当する（松本2009）と思われる。口縁端部は面取りされ、二枚貝による押引が認められる。

所属時期 埋設土器から、I c期に位置付けられる。

2 焼土遺構（第127・129図）

SL 2



第127図 SL 2～SL 4 遺構図

出土遺物 埋土中から縄文土器や石器が出土した。現地作業終了後に実施した埋土の篠い作業では、土器や石器の他、骨片が出土した。この内、縄文土器と石器4点を図示した。

305は第II群A 2類、306は第II群C 6類とした。306は素文突帯を施した浅鉢で、内外面ともミガキによって調整される。

307は石鐵である。サヌカイト製で、先端が小さく尖り、側縁部が僅かに肩を張った形状をとる。

308は磨石・叩石類である。遺構埋土に半ば埋もれるように出土した。砂岩製の扁平な河原石を素材とし、平坦面と側縁合わせて4箇所に敲打痕が残る。

所属時期 出土した土器の時期から、I c期に位置付けられる。

SL 3

検出状況 A018グリッドで検出した。遺構の南側が発掘区外へ続く。表面に焼土が多量に散布する状況がみられたが、明瞭な被熱痕は確認できなかった。

堆積・掘方 SL 2と同様に、1層には焼土が多量に混じり、2層には焼土が少ない。これらの堆積を除去後に浅い皿状の窪みとなったが、底面にも被熱痕は確認できなかった。

出土遺物 埋土中から縄文土器や石器が出土した。現地作業終了後に実施した埋土の篠い作業によつて、土器や石器の他、骨片の可能性がある白色片が出土した。この内石器1点を図示した。

309は縦長剥片の打点側側縁を刃部とするスクレイパーと思われる。サヌカイト製で、刃部と反対側の端部両側縁に剥離がみられ、摘み状になる。

所属時期 出土土器から判断はできないが、周囲の遺構と同様 I b～I c期に属すると考えられる。

SL 4

検出状況 A017グリッドで検出した。検出面上に被熱痕が残存しており、橙色の範囲の西側にやや色の濃い褐色の範囲が広がっていた。

堆積・掘方 被熱痕の断面を確認する断ち割りを実施したところ、平面形が不定形をとる深さ0.2m程度の土坑を確認した。被熱によって変色した土はこの土坑の埋土であるが、土坑の性格は不明である。

出土遺物 埋土中から、縄文土器や石器が出土した。現地作業終了後に実施した埋土の篠い作業によつて、土器片や石器の他、他の焼土遺構と同様骨片が出土した。この内縄文土器4点を図示した。

310は第II群A 1類とした。直線的に聞く形状をとり、内外面はナデ調整される。311は第II群A 2e類とした。口縁端部に二枚貝によるD字刻みを施す。312は第II群A 2f類とした。311に似るが口縁端部の刻みが認められない。313は第II群C 3類とした。波状口縁をもつ浅鉢であり、体部と頸部の境で屈曲し、口縁部が外反しながら外傾する器形になると思われる。内外面ともにミガキ調整されるが、外面には条痕調整の痕跡が認められる。口縁端部下の内面に一条の沈線を施す。

所属時期 310のように福井山式の土器もみられるが、311・312は西之山式に属すると考えられることから、I c期に位置付けられる。

3 溝状遺構

SD62（第128・129図）

検出状況 AN14からA014グリッドで検出した。長軸方位はN-23°-Wである。検出当初は発掘区南壁の観察から、NR 1やNR 3のように、VIa層（B-B' 6層）上面から掘り込む流路と考えていた（B-

B' 3層)。しかし、発掘区北壁では同質の堆積が認められなかつたため、再度南壁を精査し、3層が、VI a層上面のSD62 (B - B' 8層) とは別の掘り込みと判断した。この掘り込みの範囲を遺構掘削時には明確にできなかつたため、本遺構の南部の埋土は時期の異なる3層の堆積を含む。また、発掘区南壁の土層では、SD62 西岸に盛り土状の堆積 (B断面 9 ~ 20層) が観察でき、本遺構の掘削剝土を積み上げた土堤状の遺構の可能性が考えられる。ただし、発掘区北壁ではこの堆積は認められず、残存部についても遺物包含層掘削時に掘り下げてしまった可能性が高い。

堆積・掘方 埋土は、粘質があり炭化物を多量に含む上層 (A - A' 1層) と黒っぽい色調をとる砂質の堆積がみられる下層 (A - A' 2層) に分けられる。流水の痕跡は認められなかつた。掘方は遺構の北部と南部で様相が異なり、前述の時期の降る掘り込みの影響と思われる。

遺物出土状況 埋土中で出土した土器はいずれも細片であり、意図的な投棄などはみれなかつた。

出土遺物 SD26 からは、縄文土器、石器が出土した。この内、26点を図示した。

314は他の縄文時代晩期の土器と比して黄色味の強い精良な胎土が特徴で、くの字状に屈曲する口縁部の外面に3条の沈線を施す。後期後葉の凹線文系土器に類似するため第I群に含めたが、詳細は不明である。315は第II群A 1 a類とした。316~320は第II群A 2 c類とした。317は口縁端部の連続刻みをヘラで施し、その他は二枚貝が用いられる。二枚貝による刻みは316が刺突状で、それ以外はD字状となる。321は第II群A 2 e類とした。口縁端部にヘラ状工具によるD字刻みを施す。322~324は第II群A 3類で、322はa類、323・324をc類とした。322は二枚貝によると思われる条痕、323はケズリ、324はナデによって調整される。322と323の口縁端部は、面取りに伴うナデにより凹み状になっている。323の口縁部内外面には強い横ナデ調整が認められる。325は第II群A 6類とした。口縁部はやや開き気味で内外面はナデ調整される。326は第II群A 2 b類とした。口縁部の外面に断面が三角形の素文突帯を施す。内外面ともに比較的丁寧なナデ調整が認められる。327は第II群C類とした。内外面ともに丁寧なミガキによって調整される。口縁端部下の内面には沈線、外面には突帯が剥がれたような痕跡が残る。外面の一部に赤彩が残存している。328は注口土器と考えられる。剥がれた注口部の周囲に連続刻みが認められる。

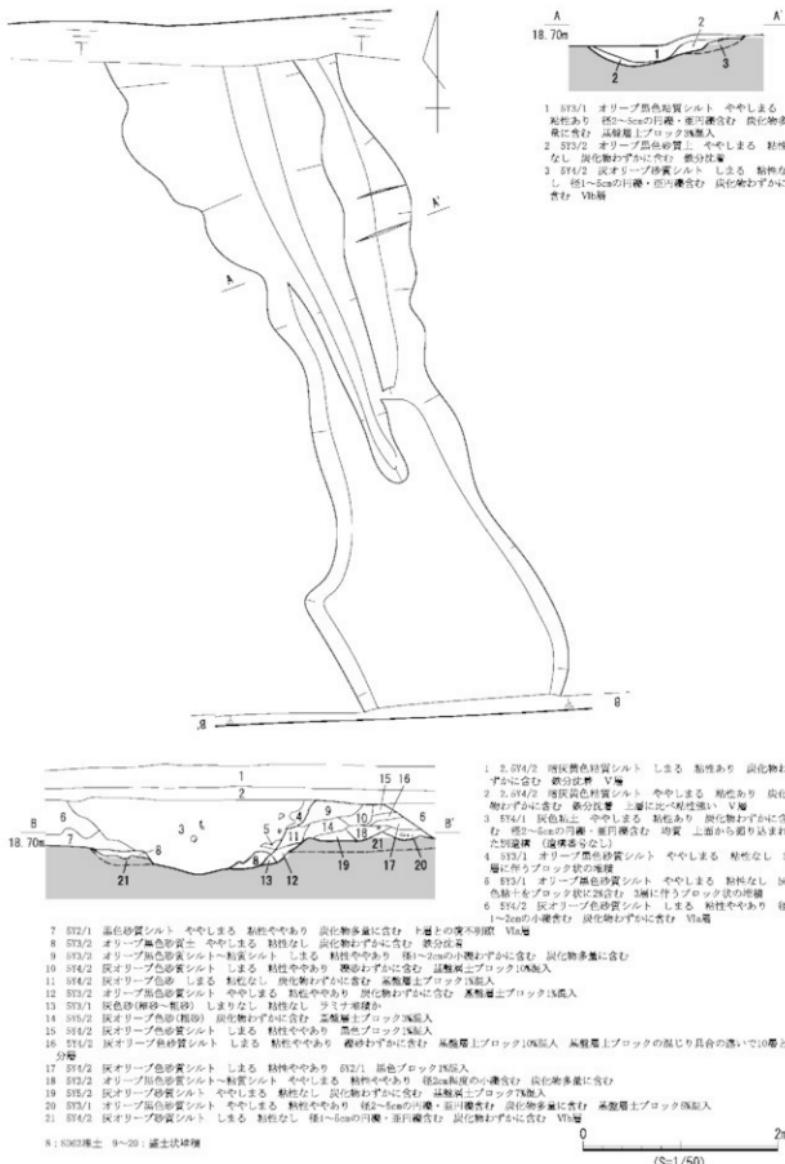
329はスクレイパーである。下呂石製で素材となる剥片の背面と側面を加工して形を整え、下端に刃部を作出している。打点側には自然面が残る。330は磨石・叩石類である。砂岩の扁平な円礫を素材とし、平坦面に各1箇所、長軸側の側縁に各1箇所、短軸側の側縁に1箇所の計5箇所に敲打痕が残る。また平坦面の1面には磨面も認められる。

所属時期 西之山式期が主体を占めることから、I c期に位置付けられる。なお、本遺構以東のVI a層には五貫森式段階の土器が多く認められるが、本遺構の埋土に混入しないことから、五貫森式段階には埋没していた可能性がある。

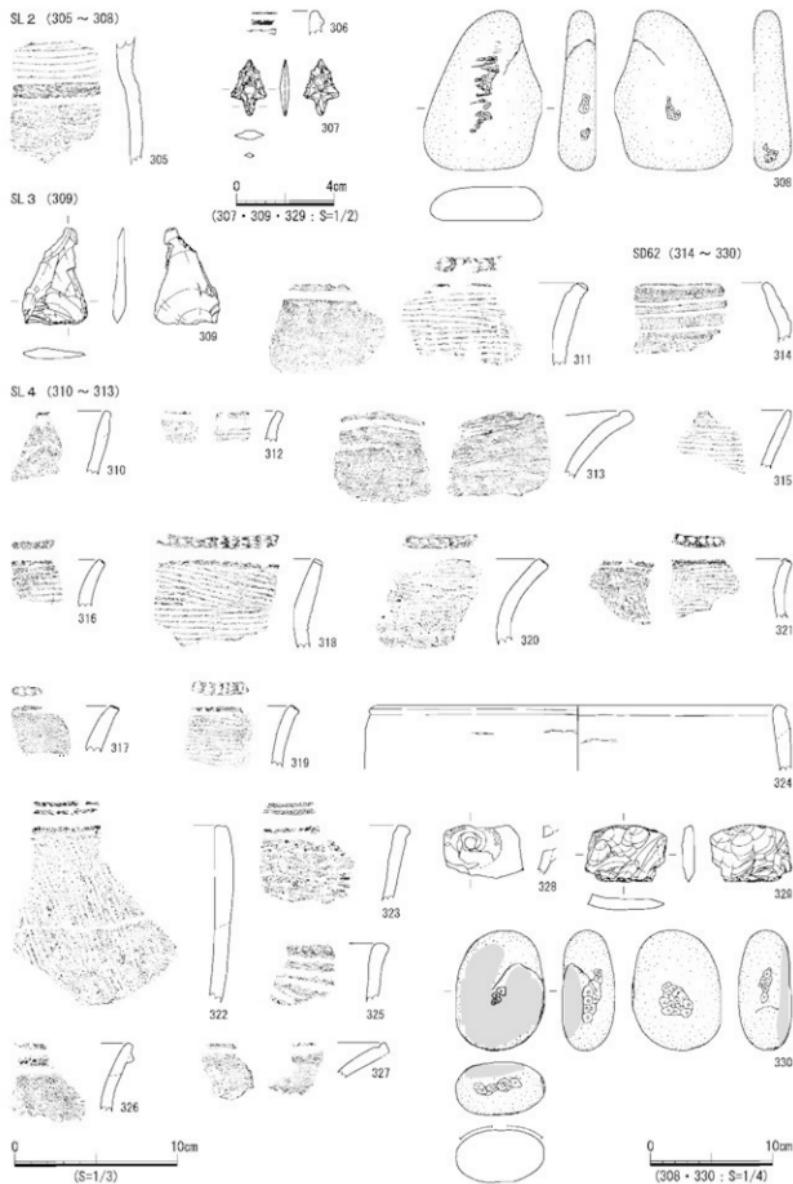
4 土坑

SK106 (第130・134図)

検出状況 A012グリッドで検出した。本遺構周辺には土坑が集中しており、SK108・SK110と重複しこれらより新しい。検出した段階で遺構の南端で焼土 (4層) を確認した。遺構埋土の観察から、焼土はブロック状の混入であり、被熱痕ではないと判断した。土坑の平面形は不定形である。



第128図 SD62遺構図



第129図 SL 2 ~ SL 4 及びSD62出土遺物

堆積・掘方 埋土の土質はVI b層に類似しており、VI b層より炭化物を多く含む。堆積状況は複雑で、複数の土坑が重複していた可能性がある。なお、埋土中から、石皿・台石類である342を含む径10～20cm程度の円礫が複数出土した。断面形は逆台形をとる。

遺物出土状況 6層上面で出土した339は、外面を外に向かた状態で検出した。この他埋土中から、骨片の可能性がある白色粒が出土した。

出土遺物 本遺構からは、縄文土器・石器が出土した。この内4点を図示した。

339は第II群A1 b類とした。口縁部外面と内面を横ナデにより調整し、口縁端部には棒状工具による連続する押圧が残る。340は内傾する口縁部で、内外面ともナデによる調整が認められる。浅鉢の可能性があるが、詳細は不明である。341は第II群D類とした。内面に単節斜縄文を施す浅鉢又は壺と考えられるが、器面の状態から口径が大きい可能性が高く、浅鉢と思われる。縄文を施す内面に赤彩が認められる。外傾する口縁部の外面に縄文を施す土器の類例ははいづめ遺跡（岐阜県教育委員会1989）にも認められ、大洞B C～C式期の土器とされている。

342は石皿・台石類である。扁平な砂岩の円礫を用いたと考えられるが、折損により原形を留めていない。一方の平坦面には磨面、もう一方には敲打痕が残る。

所属時期 山土した339等の土器から、I b期に位置付けられる。

SK112（第130図）

検出状況 A014グリッドで検出した。本遺構は検出段階から炭化物が露出しており、遺構の埋土上面西部から炭化材がまとまって出土した。炭化材には板材の可能性があるものも含む。平面形は楕円形に近い形状で、長軸方位はN-31°～Eである。

堆積・掘方 埋土の土質はVI b層に類似し、オリーブ黒色土のブロックが混入する。掘方は浅い皿状である。

遺物出土状況 炭化材の他、埋土中から縄文土器が出土した。なお、炭化材は全てクリで、年代測定により、¹⁴C年代2775±20～2750±20という結果を得た（第5章第3節）。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 ¹⁴C年代2600年後半から2800年前半は「凸帯文系土器」の第1期とされ（中村2008）、西之山式期にあたる。また、当該グリッドのVI a層から西之山期の土器がまとまって出土したことから、本遺構はI c期に位置付けられる可能性がある。

SK113（第130・135図）

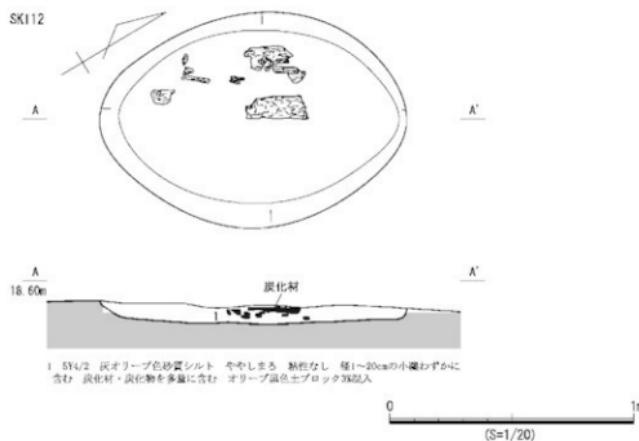
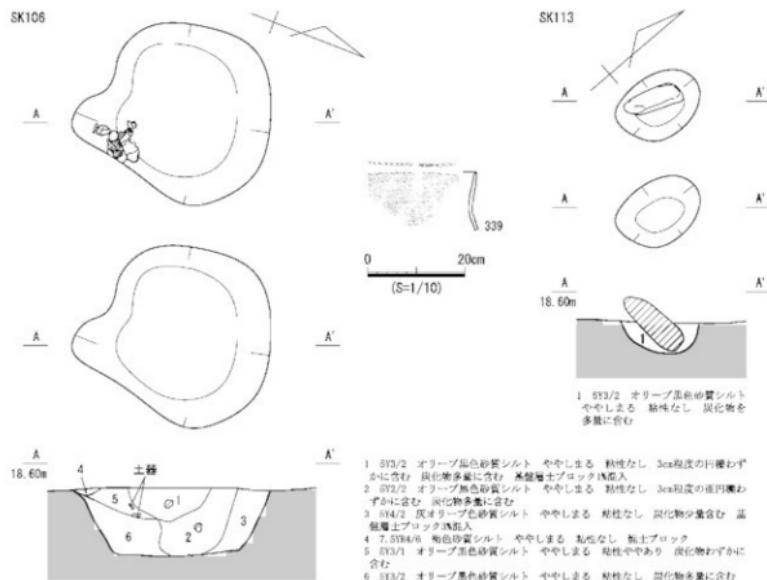
検出状況 A014グリッドで検出した。長楕円礫が検出面に突き出すような状態で検出したため、礫の周囲を精査した結果、礫を立てるための掘方を確認した。礫は河原石であり、加工の痕跡はみられない。何らかの目的で立てられた立石と考えられる。

堆積・掘方 掘方の埋土はVI b層に類似し、炭化物を含む。平面形は南北方向に長く、楕円形に近い形状をとる。立石の底面は掘方の底面とは接していない。

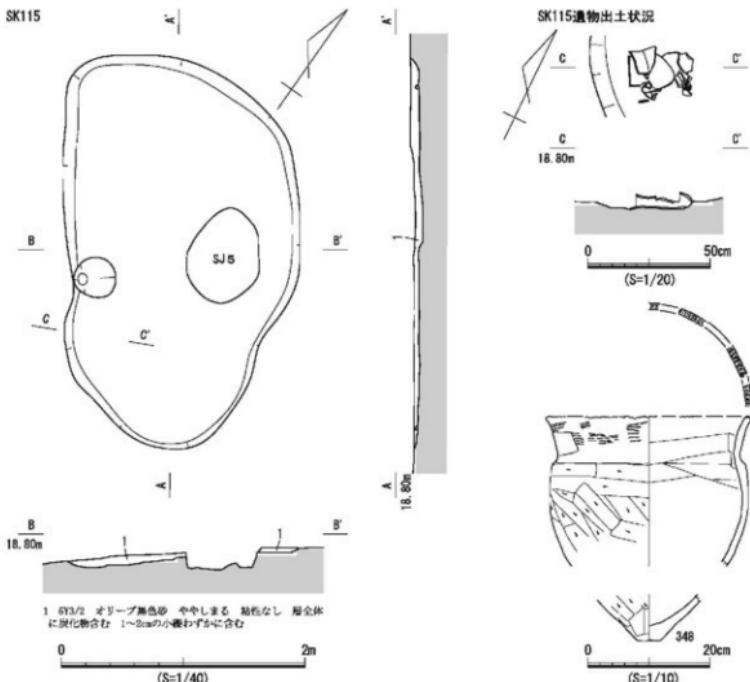
遺物出土状況 埋土中から縄文土器が出土したが、特徴的な出土状況は認められなかった。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 当該グリッドのVI a層から西之山期の土器がまとまって出土したことから、本遺構もI c期に位置付けられる可能性がある。



第130図 SK106・SK112・SK113遺構図



第131図 SK115遺構図

SK115 (第131・135図)

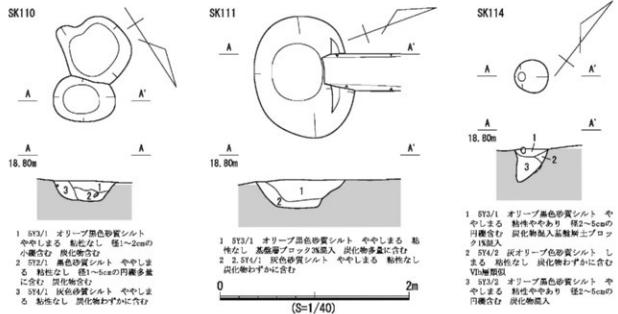
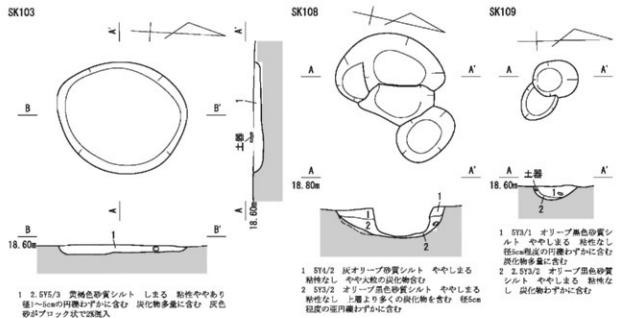
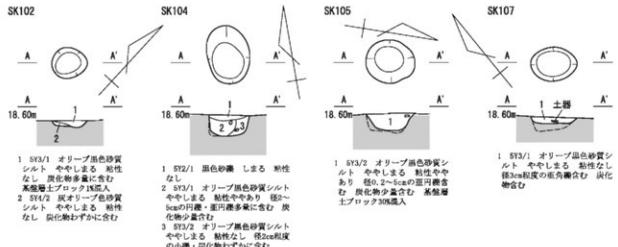
検出状況 AN16からAO17グリッドで検出した。本遺構と重複してSJ 5が設置されている。また、重複するSK114は本遺構より新しい。遺構の平面形は不定形で、深さは0.05m程度である。下記のとおり、人為的な遺構ではない可能性もあるが、348の出土状況などから土坑として取り扱った。

堆積・掘方 掘方の埋土はVI a層に類似し、炭化物を多量に含む。断面形は浅い皿状で、明確な立ち上がりはみられない。

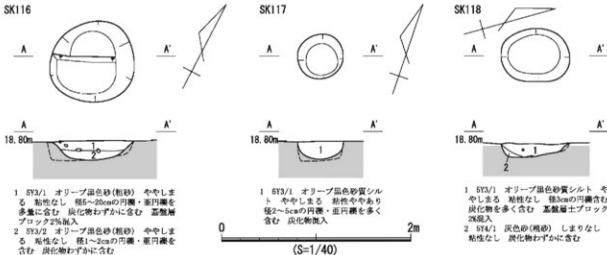
遺物出土状況 本遺構の南端付近の底面から、体部下半を欠く第II群A 2 c類の小型深鉢(348)がつぶれた状態で出土した。この他、埋土中から土器が比較的多く出土したが、いずれの遺物もSJ 5より新しい特徴を備えており、本遺構はSJ 5より新しいと考えられる。そのため本遺構は人為的なものではなくVI a層が落ち込んだ皿状の窪地であり、SJ 5はその窪地に設置され、当初から埋設土器が露出していたと考えられる。なお、本遺構埋土上面のSJ 5南側で石刀(357)が出土した。

出土遺物 本遺構からは、繩文土器・石器が出土した。この内、10点を図示した。

348～350は第II群A 2 c類とした。348は体部下半を欠くが、同一個体とみられる底部が出土した。



第132図 その他の土坑遺構図①



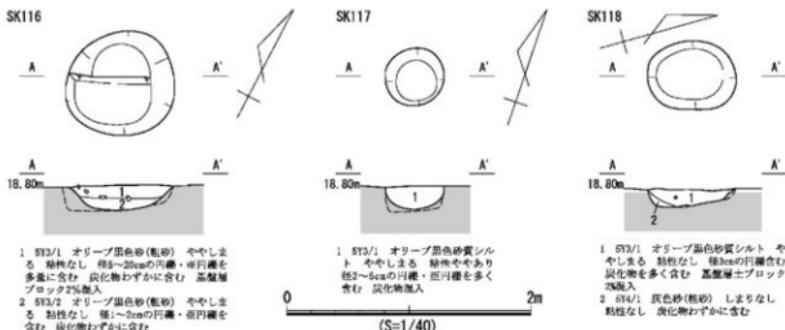
第133図 その他の土坑遺構図②

底部は平底でわずかに中央が壅む。口縁部外面には二枚貝による横位の条痕調整を施すが、一部、板のような工具でナデ消されている。口縁端部は面取りされ、二枚貝によるD字刻みが認められる。349・350は口縁部で、348と同様な調整がみられる。351は第II群A 2 類とした。突带上に連続するヘラ刻みがあり、口縁端部もヘラ状工具によるD字刻みが認められる。352は第II群B 1 類とした。体部上半から頸部にかけて窄まり、口縁部は外反しながら開く。口縁部外面と内面に横位のナデ調整、体部外面にミガキ調整を施す。353・354は第II群C 3 類とした。353は体部に丸みがあり、口縁部は直線的に開く。内外面はミガキ調整が認められる。354は波状口縁で、口縁部は緩やかに外反しながら開く。口縁部の内外面にミガキ調整が認められる。355は深鉢の底部で、外面は斜位のケズりによって調整される。平底でわずかに中央が壅む。

356はM Fである。サヌカイト製で打点と反対方向の端部に剥離が認められ、側縁には自然面が残る。357は体部の断面形状が片刃状となることから石刀とした。泥岩製で、体部中程から折損している。刃部が内側に反る形態で、頭頂部は研磨による複数の面が形成されている。全面に成形時の研磨痕が残る。所属時期 出土した348をはじめとする土器は西之山式期のものであり、本遺構はI c期に位置付けられる。

その他の土坑（第132～135図）

SK103は長径1.35 mの平面形が梢円形をとる遺構であり、掘方の形状がSK112に類似する。SK104は1層に砂礫が多く、その1層から土器片が比較的多く出土した。SK105は第3調査面の遺構の中で最も西で検出した土坑であり、礫やVI b層のブロックが多い特徴的な埋土で埋没していた。埋土の浅い位置から遺物がまとまって出土した。SK107～110はSK106の周間に集中する土坑群である。この内、SK110の2層はSK104・SK105の埋土に類似する砂礫層であった。それ以外はVI 1層に類似する炭化物の多い埋土が認められた。SK107とSK110からは、SK106と同様の骨片の可能性がある白色骨が出土した。SJ 1に隣接するSK111は、SK106などと同様な埋土で埋没した土坑であるが、堆積状況から2基の土坑である可能性が考えられる。SK111と重複するSK114は、埋土や掘方の状態から人為的遺構ではない可能性がある。SK116は、他の遺構とは異なり纏混じりの粗い砂で埋没しているが、これは当該付近で基



第133図 その他の土坑遺構図②

底部は平底でわずかに中央が窪む。口縁部外面には二枚貝による横位の条痕調整を施すが、一部、板のような工具でナデ消されている。口縁端部は面取りされ、二枚貝によるD字刻みが認められる。349・350は口縁部で、348と同様な調整がみられる。351は第II群A 2 b類とした。突带上に連続するヘラ刻みがあり、口縁端部もヘラ状工具によるD字刻みが認められる。352は第II群B 1類とした。体部上半から頭部にかけて窄まり、口縁部は外反しながら開く。口縁部外面と内面に横位のナデ調整、体部外面にミガキ調整を施す。353・354は第II群C 3類とした。353は体部に丸みがあり、口縁部は直線的に開く。内外面はミガキ調整が認められる。354は波状口縁で、口縁部は緩やかに外反しながら開く。口縁部の内外面にミガキ調整が認められる。355は深鉢の底部で、外面は斜位のケズリによって調整される。平底でわずかに中央が窪む。

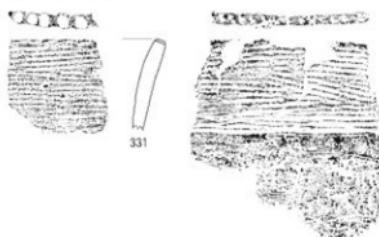
356はMFである。サヌカイト製で打点と反対方向の端部に剥離が認められ、側縁には自然面が残る。357は体部の断面形状が片刃状となることから石刀とした。泥岩製で、体部中程から折損している。刃部が内側に反る形態で、頭頂部は研磨による複数の面が形成されている。全面に成形時の研磨痕が残る。

所属時期 出土した348をはじめとする土器は西之山式期のものであり、本遺構はI c期に位置付けられる。

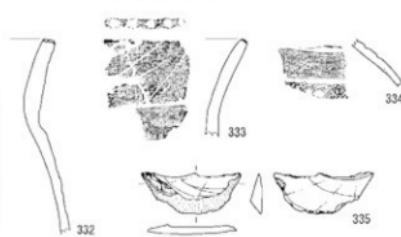
その他の土坑（第132～135図）

SK103は長径1.35mの平面形が楕円形をとる遺構であり、掘方の形状がSK112に類似する。SK104は1層に砂礫が多く、その1層から土器片が比較的多く出土した。SK105は第3調査面の遺構の中で最も西で検出した土坑であり、礫やVI b層のブロックが多い特徴的な埋土で埋没していた。埋土の浅い位置から遺物がまとまって出土した。SK107～110はSK106の周囲に集中する土坑群である。この内、SK110の2層はSK104・SK105の埋土に類似する砂礫層であった。それ以外はVI a層に類似する炭化物の多い埋土が認められた。SK107とSK110からは、SK106と同様の骨片の可能性がある白色粒が出土した。SJ1に隣接するSK111は、SK106などと同様な埋土で埋没した土坑であるが、堆積状況から2基の土坑である可能性が考えられる。SK115と重複するSK114は、埋土や掘方の状態から人為的な遺構ではない可能性がある。SK116は、他の遺構とは異なり標混じりの粗い砂で埋没しているが、これは当該付近で基

SK103 (331・332)



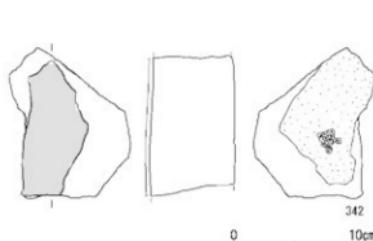
SK104 (333～336)



SK105 (337・338)



SK106 (339～342)



0 10cm
(342: S=1/4)

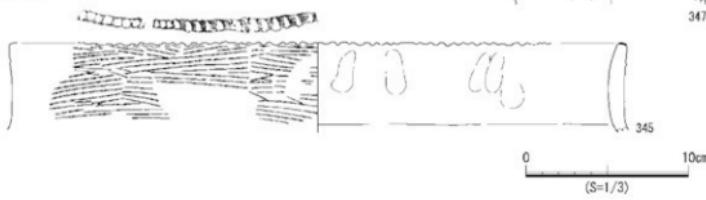
SK107 (343)



SK110 (344)



SK111 (345～347)

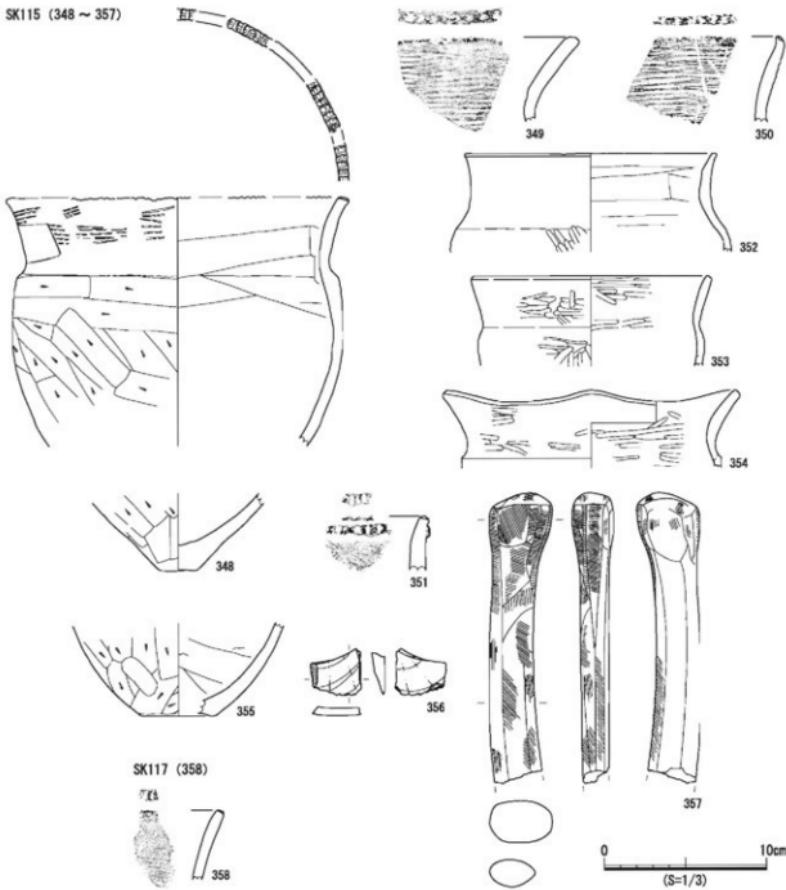


0 10cm
(S=1/3)

第134図 土坑出土遺物①

盤となっているⅦ層の影響とみられる。SK117・SK118は類似する埋土の堆積が認められ、いずれも土器が出土した。

いずれの土坑からも縄文土器や石器が出土したが、特徴的な出土状況は認められなかった。これら



第135図 土坑出土遺物②

の土坑で出土した遺物を第134・135図に掲載した。SK103出土の331・332は第II群A 2 c類とした。口縁端部の連続刻みは、331が棒状工具による押圧、332は二枚貝による刺突で異なる。SK104出土の333は第II群A 1 b類とした。外面に横ナデを施し、内面には単位の細かい調整痕が残る。端部にはヘラ状工具によるD字刻みが認められる。334は第II群D類で壺と思われる。磨消繩文による模様が描かれ、外面に赤彩の痕跡が残る。東日本系の上器と考えられる。335・336はMFである。ともに自然面が残るサヌカイトで、剥片の側縁2箇所に連続する剥離が認められる。SK105の337はA 1 a類とし

た。338は浅鉢と考えられるが、詳細は不明である。SK107出土の343は第II群A 1 b類とした。外面に横位のケズリ調整、内面にナデ調整を施し、口縁端部にはヘラ状工具によるD字刻みが認められる。SK110出土の344は第II群D類で、壺類の体部上半と考えられる。外面に磨消繩文による模様が認められる。外面には赤彩の痕跡が残る。東日本系で大洞B C～C 1式に比定される。SK111出土の345・346はともに第II群A 2 c類で、口縁端部にヘラ状工具によるD字刻みを施す。347は小型の土器で、口縁部に横位の条痕、体部に縱位のケズリ調整を施す。器壁が薄く、口縁端部には刺突状のヘラ刻みを施す。遺物包含層出土の447を小型化したような形態をもつことから、ミニチュア土器（第II群E類）とした。SK117出土の358は外反する口縁部の内外面に横ナデ調整を施し、口縁端部には不明瞭なヘラ刻みが認められる。第II群A 2類の可能性はあるが、細分はできなかった。

各土坑の所属時期は出土遺物から、SK104・SK105・SK107・SK110がI b期、SK103・SK111がI c期と考えられ、その他は判断できなかった。

5 自然流路

NR 1（第136・137図）

第3調査面の発掘区西端であるAN 8からAP10グリッドで検出した。流水等による自然堆積によって埋没しており、埋土中に含まれる繩文土器はごく僅かである。NR 1の上層は複雑な堆積状況が認められ、本遺構以東の堆積とは大きく異なる。NR 1の底面はVII層が露出しており、VI a層上面まで同流路の埋土が認められることから、他の第3調査面の遺構より埋没時期は新しい。底面の標高には南北で差がなく、流水方向は確認できなかった。

出土した遺物の内、1点を図示した。359は第II群A 1 b類としたが、内外面の調整は摩耗により不明瞭である。なお、NR 1からは359以外の土器がほとんど出土しておらず、NR 3とは様相を異にする。

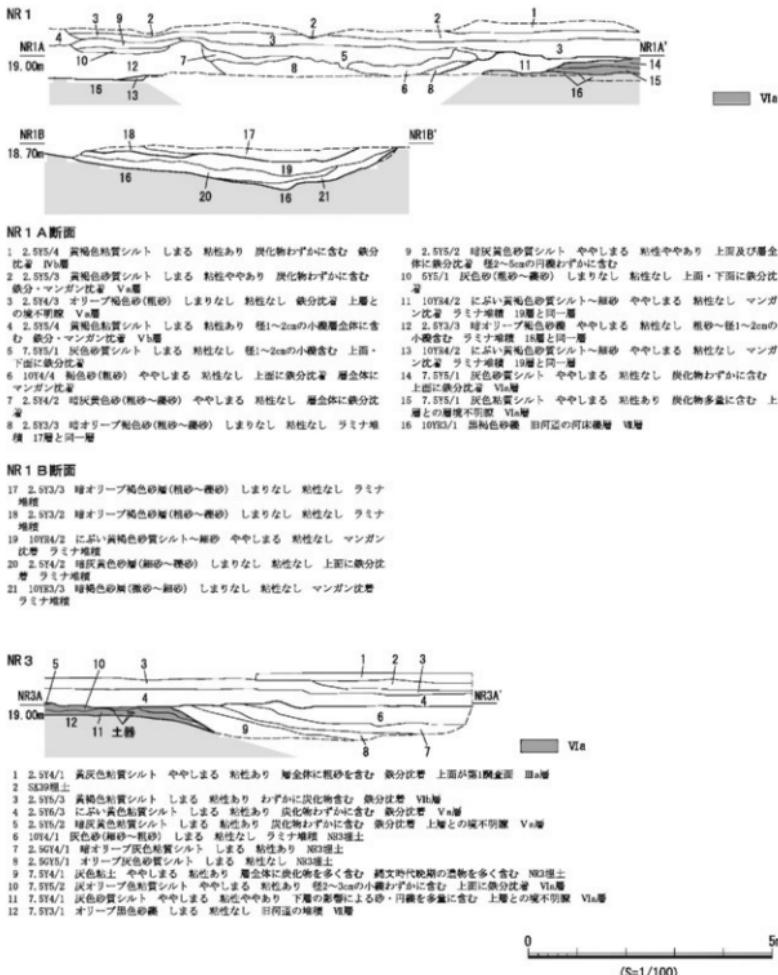
NR 2（第157図）

AN12からAO14グリッドで検出した。発掘区南壁から北西方向へ延びているが、AN12グリッドでVI b層と埋土の判別がつかなくなった。明確な流水の痕跡は認められなかつたが、SJ 1をはじめとする遺構より古く、埋土に繩文土器が含まれないことから、晩期の遺構群が形成される前の河道と判断し完掘はしなかつた。

NR 3（第136～139図）

第3調査面の発掘区東端であるAN19グリッド以東で検出した。今回確認したのは南北方向の西肩のみで東肩は確認していない。埋土は流水や滯水による自然堆積と考えられる。NR 1と同様にVI a層上面まで埋土の堆積が確認できることから、最終的な埋没時期は、他の第3調査面の遺構より新しい。埋土の人力掘削を行った範囲は検出した肩の位置から東へ2m、深さ0.3m程度の範囲であるが、多量の遺物が出土した（第137～139図）。遺物が出土したのは主に9層の粘土層であるが、重機によるNR 3底面の確認調査では顕著な出土状況が確認できなかつたため、肩に近い付近のみと推定される。底面は図示できなかつたが、検出面から約1m程度下で確認した砂礫層（VII層）と考えられる。

出土遺物は、繩文土器・石器がある。他の遺構にみられない五貫森式新段階～馬見塚式の特徴をもつた土器が出土した。土器はNR 3に投棄されたものの他、西側の遺構群から流入したものも含まれると思われる。NR 3で出土した遺物の内45点を図示した。以下分類ごとに記載する。



第136図 NR 1・NR 3 土層断面図

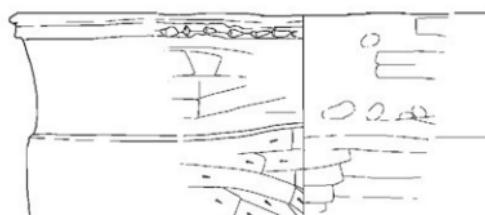
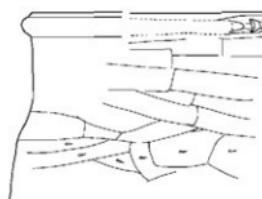
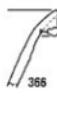
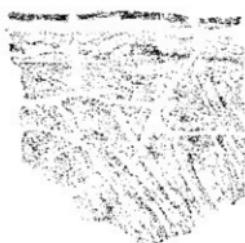
第II群A 1類 (360) 360はa類とした。口縁端部に鋸歯状のヘラ刻みを施す。

第II群A 2類 (361・362・364～370・374～376) 361・362はc類とした。体部に強い丸みがあり、口縁部が外反する。同類の埋設上器と比較すると小型である。口縁端部に二枚貝による刺突状の連続刻みが認められる。362は頸部口縁部が内傾する特徴があり、292と同じ器形になると考えられる。口縁

NR 1 (359)



NR 3 (360 ~ 370)



0 10cm
(S=1/3)

第137図 NR 1・NR 3出土遺物①

端部には二枚貝によるD字刻みが認められる。364～370はi類とした。364～368は口縁端部外面に接して垂れ下がり形の突帯を施す一群で、松本氏の分類による「突帯文A2類」にあたる（松本2009）と思われる。364は緩やかに外反しながら開く口縁部で、外面に条痕調整を施す。突帯の幅は1.3cmを測り比較的太い。突帯上面には二枚貝による連続押圧が認められる。365は体部に丸みがあり、頸部から屈曲して口縁部が直線的にやや開く。体部は横位のケズリ調整、口縁部にナデ調整を施す。突帯は上面にヘラ状工具によるD字刻みを施す。口縁端部はやや尖り気味になる。366・367は外傾する口縁部で、断面がやや尖り気味になる高い突帯が特徴である。外面には二枚貝の可能性がある工具で横位の条痕調整を施す。突帯上面には二枚貝の押圧が認められる。368も二枚貝を押圧した突帯をもつが、口縁端部に突帯がほぼ接しており、新しい要素の可能性がある。369・370は口縁端部から離れた位置に突帯を施し、口縁部外面のナデ調整や口縁端部が外側に引き出されること、突帯状にヘラ状工具によるD字刻みを施すことが共通している。369は365と同様体部にケズリ調整を施すが、頸部との境に段が設けられ、口縁部の開きも大きい。374～376はj類とした。374ははいづめ遺跡4号土器棺に類例が見られ、馬見塚式に比定されている。体部から口縁部が外反及び内傾し、二枚貝条痕を施す部位が非常に長い。口縁端部は折り返される。体部外面は上半が横位、下半が斜位にケズリ調整される。375にも二枚貝の幅広な押圧を施した突帯が認められる。376は突帯の幅は狭い（0.7cm）が体部に付す事例で、二重突帯文の可能性がある。

第II群A3類（363・371～373） 363はc類とした。体部外面をケズリ調整し、口縁部の内外面を揃んで強くなでの痕跡が残る。口縁端部は面取りされる。371～373はe類とした。外面はケズリやナデによって調整され、口縁端部外面下に刻目突帯を施す。突帯の刻みは371が二枚貝によるD字刻み、372が二枚貝の押圧、373がヘラ状工具によるD字刻みでそれぞれ異なる。372は、突帯下に横位のミガキ状の調整痕が残り、口縁端部を外面側に折り返す特徴がある。

第II群A5類（377） 377はa類とした。口縁端部に断面が三角形に近い突帯を付し、突帯上と口縁端部の刻みの痕跡が残る。

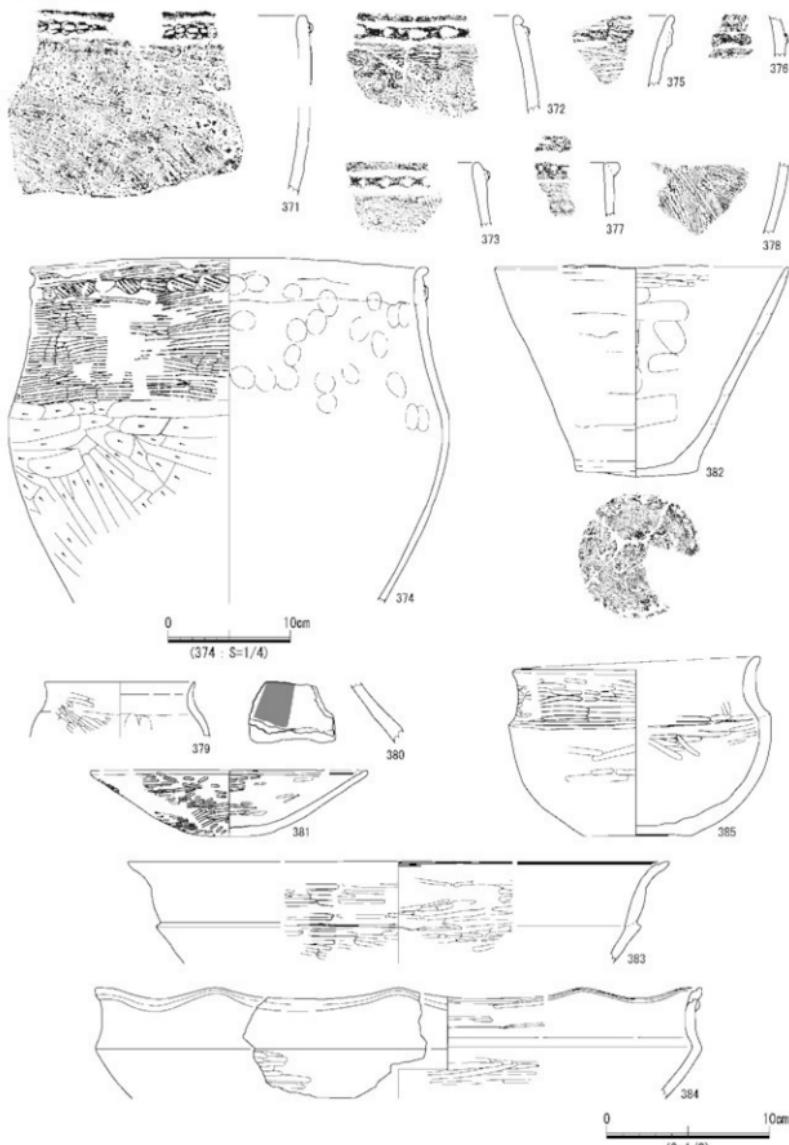
第II群A6類（378） 378は外面に煤が付着するため深鉢と考えられるが、他の土器に認められない細かい条痕を外面に施す特徴がある。

第II群A7類（392～395） いずれも深鉢の底部と考えられる。392は尖り気味の底部に小さな底面を設けた形状で、底面が窪む。外面はケズリ調整されており、頸部屈曲深鉢の底部と考えられる。393・394は平底の深鉢で、393の外面のケズリ調整後、粘土を充填して平底を作出した痕跡が残る。394はその痕跡が不明瞭であるが、同じように突出した形状をとる。このような技法は「凸帯文土器」の土器製作技法の一つで、近畿地方に限らず広い地域で認められるとしている（中村2008）。395には外面に条痕が認められる。底部は外周のみ厚く充填され、凹底となる。

第II群B類（379・380） 379は1類とした。口縁部が短く外反し、体部に丸みがある器形をとる。外面にミガキ調整が認められる。380は壺の頸部と考えられる。外面に漆のような付着物が認められ、長方形の直線的な模様が描かれる。

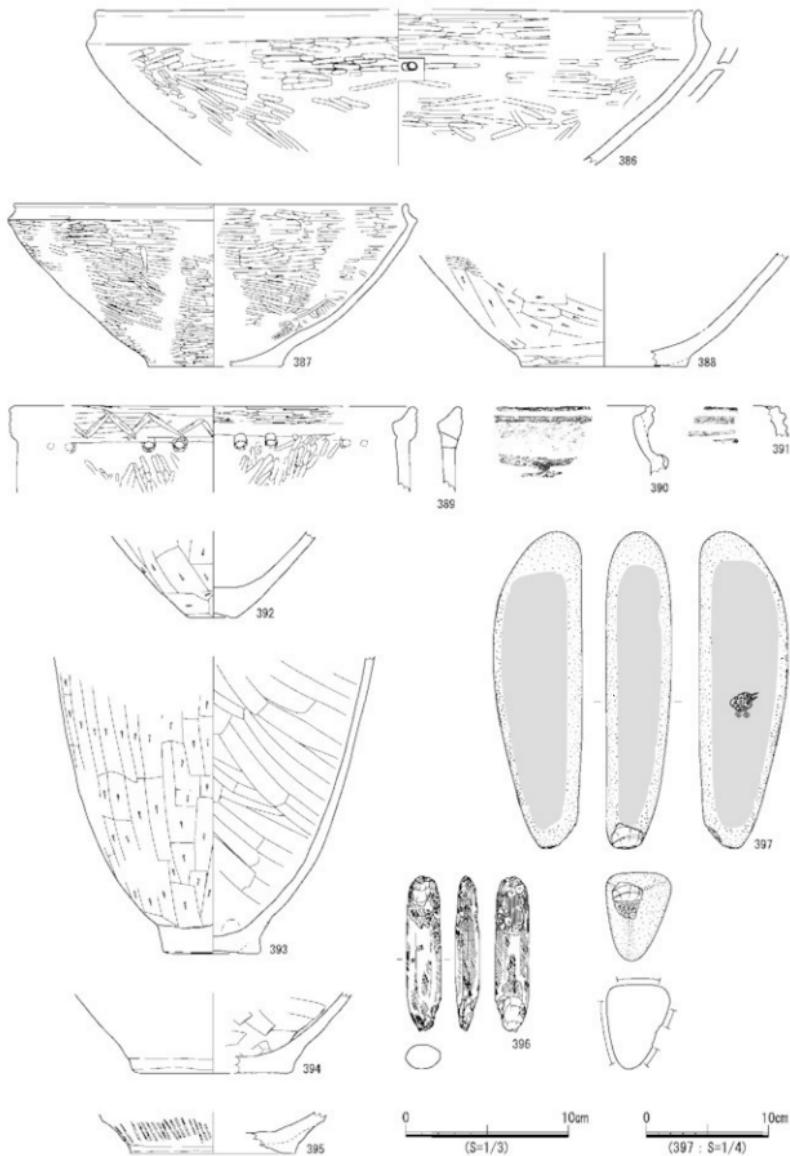
第II群C類（381～389） 381は1類とした。皿状の器形で底部から体部にかけて直線的に開く。内外面にミガキ調整を施し、口縁部内面に1条の沈線が認められる。382は2類とした。煤やコゲが付着しており、煮沸具と考えられるが、器高より口径が大きいことから、浅鉢に含めた。内面はナデやミガキ

NR 3 (371 ~ 385)



第136図 NR 1・NR 3出土遺物②

NR 3 (386 ~ 397)



第139図 NR 1・NR 3 出土遺物③

によって比較的丁寧に調整されるが、外面はナデ調整のみである。底面は種子や草茎状の圧痕が残り、未調整である。383は3類とした。内外面にミガキ調整を施し、口縁端部内面には1条の沈線が認められる。384・385は4類とした。体部の屈曲部から口縁部が外反・内傾し、口縁部は小波状になる。「凸帯文系土器」の第3期において登場するとされる器形（中村2008）で、図上復元するにあたっては、三重県松ノ木遺跡 SH 6出土の浅鉢（三重県埋蔵文化財センター1993）を参考とした。体部外面と内面にミガキ調整を施し、口縁部内面に1条の沈線を施す。口縁端部外面がやや肥厚している。385は器高の低い、頸部屈曲深鉢のような器形をとる。体部と頸部の境は明瞭で、口縁部は内傾しながら外反する。外面の口縁部にミガキ、体部はケズリ調整後ナデ調整され、体部の一部はさらにミガキ調整されている。内面は頸部の屈曲部のみミガキ状の痕跡が残る。底面は平底で、体部からの突出などはみられない。386～388は5類とした。387の方が屈曲が強く口縁部が短い。ともに口縁端部のみ肥厚し、386は口縁端部下の内面に1条の沈線が認められる。386・387ともにほぼ全面横位のミガキ調整を施すが、口縁部外面のみナデ調整である。387の底部は体部から突出する平底で、底面にはナデ調整を施す。386には穿孔が認められるが、焼成後であることから補修孔と考えられる。388も同様な器種の体部と考えられるが、ミガキ調整は体部上半のみで、ケズリ調整痕を残す。内面には赤彩の痕跡が認められる。底部は387と同様に平底である。389は口縁部が直線的に立ち上がり、ほとんど開かない。口縁部の内外面を肥厚し、外面には3条の横位沈線と鋸歯状沈線を施す。内面は肥厚のため受口状となる。肥厚部の下には2箇所の穿孔が認められるが、焼成前に内面から外面に向けてあけられている。破片の端には別の穿孔の痕跡があるため、2箇所1単位の文様として図上復元した。体部内外目には継位のミガキ調整を施す。SD26の117は、口縁部の形状と鋸歯状の沈線が共通する。

第II群D類（390・391） 390は浅鉢の口縁部である。頸部の屈曲部に眼鏡状浮文を施し、口縁端部外面を肥厚し、1条の沈線を描く。頸部外面にはミガキ調整が認められる。391は横位の連続する沈線文を施し、内外面をミガキ調整する。ともに、中部高地や北陸地方の影響を受けた土器と考えられ、390のようなモチーフは大洞C2式に認められる。

石器・石製品（396・397） 396は石棒と考えられる。両端が折損しているが、顕著な研磨痕が残る。泥岩製で、敲打後に研磨した痕跡が残ることから、製作中に破損した可能性がある。397は磨石・叩石類である。砂岩で、細長く断面が三角形になる河原石の3面に磨面、最も尖った部分と磨面中央に敲打痕が残る。剥離と磨面の切り合いから、磨石を叩石として転用したと考えられる。

6 遺物包含層出土遺物

第3章第1節で述べたように、IV層からVIa層が第3調査面の遺物包含層である。IV・V層は自然堆積で流水や滞水の影響によるため、ここに含まれる遺物は基本的に二次堆積と考えられる。一方VIa層はVIb層が土壤化した堆積であり、繩文時代以降の搅乱を受けていない状態と考えられる。

表47に、VIa層で出土した繩文土器の破片数（接合前）を、各グリッド1m²あたりの点数で示した。西から述べると、まずA010グリッドに遺物の集中が認められる。11・12グリッドでは比較的小ないが、13グリッドにおいて土器の集中がみられ、14グリッドで一旦減る。15グリッドで東に向かうにつれ出土量が徐々に増え、19グリッドで最も量が多くなる。今回の調査で検出した遺構をみると、Ib期で最も西に位置するSK106はA012グリッド、東はSJ8のA018グリッドに位置する。一方Ic期では、

13グリッドでSJ11のある19グリッドまで認められる。東側の土器出土量が多い一因として、まずI b期・I c期の活動範囲が重なっていることが上げられる。また、土器の内容をみると、I c期の遺構であるSD62の東側(15グリッド以東)では、西側では確認できないI c期よりも新しい要素をもった土器が認められる。このことは、15グリッド以東においてI d期以降に土器の廃棄場所として集中的に利用された可能性を示している。なお、19グリッドについては、遺物包含層掘削作業でNR 3の出土遺物が混入しており、出土量の多さはその影響と思われる。

本項では、土器の出土状況とその内容から、発掘区を以下のとおり区分して記載した。なお、⑤はIV・V層、トレンチや排水溝、重機掘削などで出土した遺物とした。

① AN 9～AP12 グリッド

② AN13～AO14 グリッド、

③ AN15～AO18 グリッド

表47 各グリッドにおけるVIa層出土土器の量

各グリッドにおけるVIa層出土純文土器の点数(接合前)

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	合計
AN	0			14	37	112	148	136	309	178	338	640	1912
AO	0	3	244	61	113	906	356	442	115	769	371	1489	4869
AP	0	11											11
合計	14	244	78	150	1018	504	578	424	947	709	2129	6792	

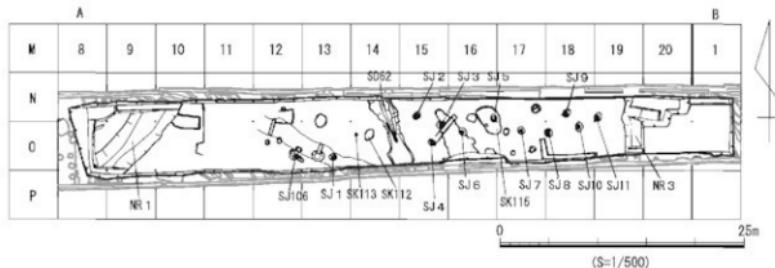
第3調査面グリッド面積(m²)

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	合計
AN	4.48	10.69	11.60	11.70	11.99	12.06	12.21	12.50	12.78	13.06	13.35	13.63	139.75
AO	11.43	25.00	25.00	25.00	25.00	24.80	23.74	22.58	21.41	20.25	19.09	19.99	263.29
AP	1.20	3.48	3.10	2.03	1.05	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	10.86
合計	39.07	39.60	38.73	37.95	36.85	35.95	35.08	34.19	33.31	32.44	33.62	34.90	

1m²あたりの土器出土点数(点/m²)

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	平均
AN	0.00	0.00	0.00	1.20	3.11	9.29	12.12	10.88	24.18	13.63	25.32	46.96	13.68
AO	0.00	0.12	9.76	2.44	4.52	36.53	15.00	19.57	5.37	37.98	19.43	74.49	18.49
AP	0.00	3.16	0.00	0.00	0.00								1.01
平均	0.36	6.16	1.94	3.95	27.63	14.02	16.48	12.40	28.43	21.86	63.33	16.41	

(参考) 主要遺構とグリッドの配置



④AN・A019 グリッド

⑤IV・V層・その他

①9～12 グリッド（第140図）

第II群A 1類の土器が目立つが、全体的に土器の接合率が悪く細片が多い。AN・A013 グリッド以東で顕著となる第II群A 2 c類の土器も A012 グリッドではわずかに認められるが、大半は I b 期を主体とする土器群と考えられる。

第II群A 1類（398・399） 398・399 は 1 b 類とした。398 は緩やかに外傾する口縁部で、内外面は磨滅により調整が不明瞭であるが、粗い条痕は認められない。口縁端部には連続刻みの痕跡が残る。399 も外傾する口縁部であり、外面には横位のナデ、内面に粗い条痕のような痕跡が残る。

第II群A 2類（400・401） 400 は c 類とした。口縁部で、やや器壁が厚い。外面にナデ消されたような条痕の痕跡が残る。口縁端部には連続する棒状工具による押圧が認められる。c 類の可能性もあるが、口縁部の傾きから a 類に含めた。401 は c 類とした。外反する口縁部で、口縁部に二枚貝によるD字刻みが認められる。

第II群A 3類（402） 402 は c 類とした。やや内傾する口縁部で、口縁端部は面取りされ、外面にケズリ調整が認められる。

第II群A 7類（409） 409 は深鉢の底部と考えられる。底面付近のみ突出する狭小な平底が認められ、SJ 5 の 283 と類似する。

第II群C類（403～405） 403 は 2 類とした。体部から口縁部にかけて直線的に開く器形をもち、内面にミガキ調整、外面にナデ調整を施す。404 は 3 類とした。頸部が屈曲し、口縁部が外反する器形になると考えられる。外面にナデの他、ケズリ調整を施す。口縁端部には、両端を押圧することで作出された平面形が長方形の突起が認められる。近畿地方の築原式浅鉢A類（家根 1994）に類似する土器の可能性がある。405 は口縁部内面に段が認められ、内外面はミガキ調整される。406 は浅鉢の底部と考えられる。平底で、外面に縦位のナデ調整を施す。

第II群D類（407・408） 407・408 ともに器種は不明である。407 は地文に単節斜縄文を施し、平行沈線や連続する棒円形文、円形刺突が認められる。408 は外面に横位の平行沈線と連続刺突による文様が認められる。内面にはミガキ調整を施す。東日本系の土器と考えられるが、詳細は不明である。

土製品（410・411） 410・411 は管玉と考えられる。ともに折損していると思われるが、摩耗が著しいため調整は不明である。

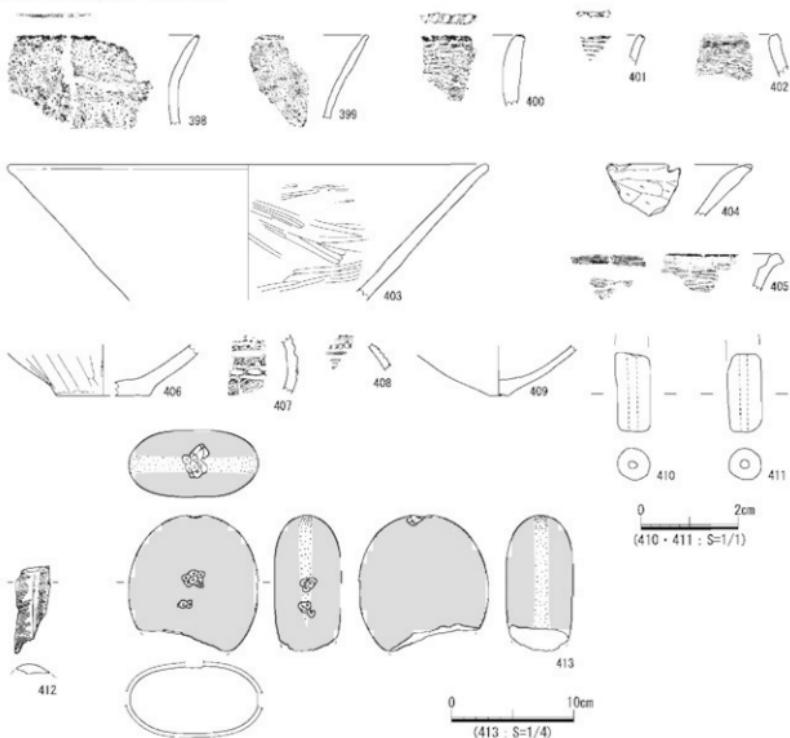
石器・石製品（412・413） 412 は断面形から石刀の可能性がある。泥岩の摺理面から剥がれており、成形時の研磨痕が残る。413 は磨石・叩石類である。折損しているが、扁平な円錐の両面に広く磨面が残り、平坦面の1面と側縁に敲打痕が認められる。

②A13～A014 グリッド（第140～144図）

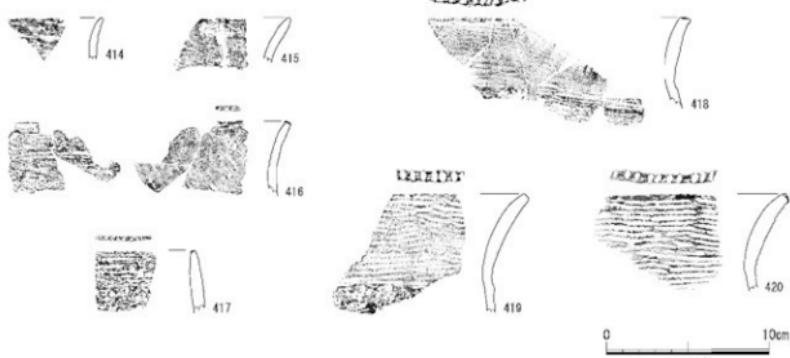
I c 期に埋没した可能性が高い SD62 以西で出土した土器群で、第II群A 2 c 類を主体とする。時期的に古い第II群A 1類を含むものの、AN・A015 グリッド以東の土器群との違いは明瞭で、西之山式の一括資料として評価される内容の上器群になる可能性がある。また、第II群A 2 c 類と、SJ 6 出上の A 2 b 類及び SJ 9 出土の A 3 a 類との共伴が、本グリッドの出土遺物で確認できる点でも注目される。

第II群A 1類（414～416・459） 414 は a 類とした。口縁端部に鋸歯状のヘラ刻みが認められる。

AN 9 ~ AP12 グリッド (398 ~ 413)



AN13 ~ A014 グリッド (414 ~ 420)



第140図 遺物包含層 (Via層) 出土遺物①

415・416・459はb類とした。外面は横位のナデ調整、416と459の内面には粗い条痕が認められる。

第II群A 2類 (417～444・448・449・457) 417はa類とした。口縁部が直立し、外面はケズリ調整と思われる。口縁端部には尖り気味で僅かに面取りが認められ、ヘラ状工具による連続する細かいD字刻みが認められる。448はb類とした。口縁部が外反及び内傾する、SJ 6出土の284に似た器形をもつ深鉢で、内外面はナデ調整を施す。突帯は幅0.7cmで断面形が三角形に近く、ヘラによって鋸歯状の刻みが巡り、口縁端部外面にも同様な刻みが認められる。449は外反しながら開く口縁部をもつ器形で、口縁端部に粘土紐を貼り付け、その外面に指頭又は棒状工具による連続押圧を施す。貼り付けた粘土の内側は凹んで沈線状になっている。口縁部のない外面は横ナデ、体部外面にはケズリ調整が認められる。厳密には「突帯文を付す土器」とは言えないが、粘土紐を口縁端部に付加し刻む手法をとることから、b類に含めた。

418～438はc類とした。418は口縁端部に棒状工具による連続する押圧が認められる。419～421は口縁端部の連続刻みをヘラ状工具で施す。419・420は鋸歯状、421はD字の形状をとる。423～436は口縁端部の連続刻みを二枚貝の刻み・刺突で施す。器形は424や433のように頸部から口縁部が長く、やや外反の強いものと、SJ 6出土の285のように、口縁部から頸部が短く、直線的に開くもの(425・435)が認められる。口縁端部の連続刻みはD字形(422～432)と刺突状(433～435)のものがみられるが、いずれも単位が非常に細かい。437は口縁端部を二枚貝の押引するもので、器壁が厚く重量感がある。口縁端部の粘土が押引によって外面側に僅かに引き出される。438は口縁端部の内外面に二枚貝による刻みを施す特徴がある。c類に含めたが詳細は不明である。439～441はe～gとした一群で、口縁端部内面に沈線や沈線状の段をもつ。c類と比べ、丁寧に成形される印象がある。439はe類とした。口縁部内面に沈線状の段を設け、口縁端部外面に二枚貝によるD字刻みを施す。440はf類とした。口縁端部内面は沈線で、口縁端部に刻みはみられない。441・457はg類とした。波状口縁で、口縁端部に刻みは認められない。457は内外面ミガキ調整が認められ、波頂部指頭押圧を施す。441・457は、五貫森式に伴うとされる保美型深鉢に類似する器形ともいえるが、口縁内面の押圧がないことなど異なる点が多い¹⁾。442～444はk類とした。442は口縁端部に連続刻みがなく、口縁部外面の条痕調整がほとんどナデ消されている。443は口縁部外面を横ナデ調整し、口縁端部をヘラ刻みする。444は二枚貝による条痕調整は認められるが、口縁端部に刻みを施さない。

第II群A 3類 (445～447) 445・446はa類とした。口縁端部を面取りし、体部に斜方向の条痕を施す。条痕の工具は二枚貝と考えられる。446は、口縁端部が面取りされず、条痕は棒束状の工具と推測される。447はb類とした。口縁部外面に横位の条痕、体部外面に横位・斜位のケズリ調整を施し、口縁端部に二枚貝によるD字刻みを施すなど、A 2 c類に類似する調整が認められる。

第II群A 6類 (450・451) 450は口縁部が開く器形であり、体部は直線的で丸みが認められない。頸部の屈曲は不明瞭である。口縁部内外面は板状工具による横ナデ、体部外面はケズリ後にナデ調整を施す。451は口縁部がやや直立気味で、内外面ともナデによって調整される。内面には板状の工具痕が認められるが、外面は不明瞭で輪積痕が顕著に残る。

第II群A 7類 (464・465) 464はA 2類の体部から底部と考えられる。外面に縦位のケズリ調整を施す。底面は径が小さく、凹みが深い。465は体部から突出する平底の底部であるが、器形は不明である。

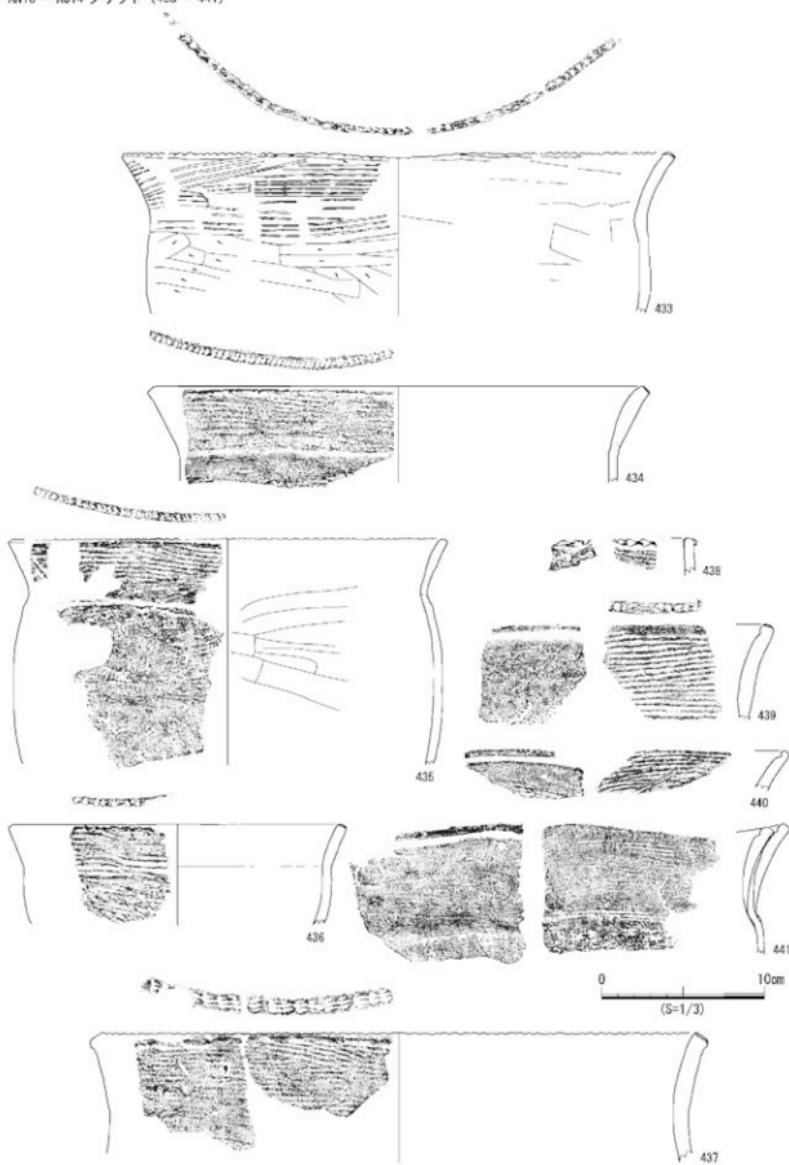
第II群B類(452～454) 452は壺の口縁と考えられる。緩やかに外反し、口縁端部のみ外側に折り返す。

AN13～AN14 グリッド (421～432)



第141図 遺物包含層 (V1e層) 出土遺物②

AN13～AO14 グリッド (433～441)



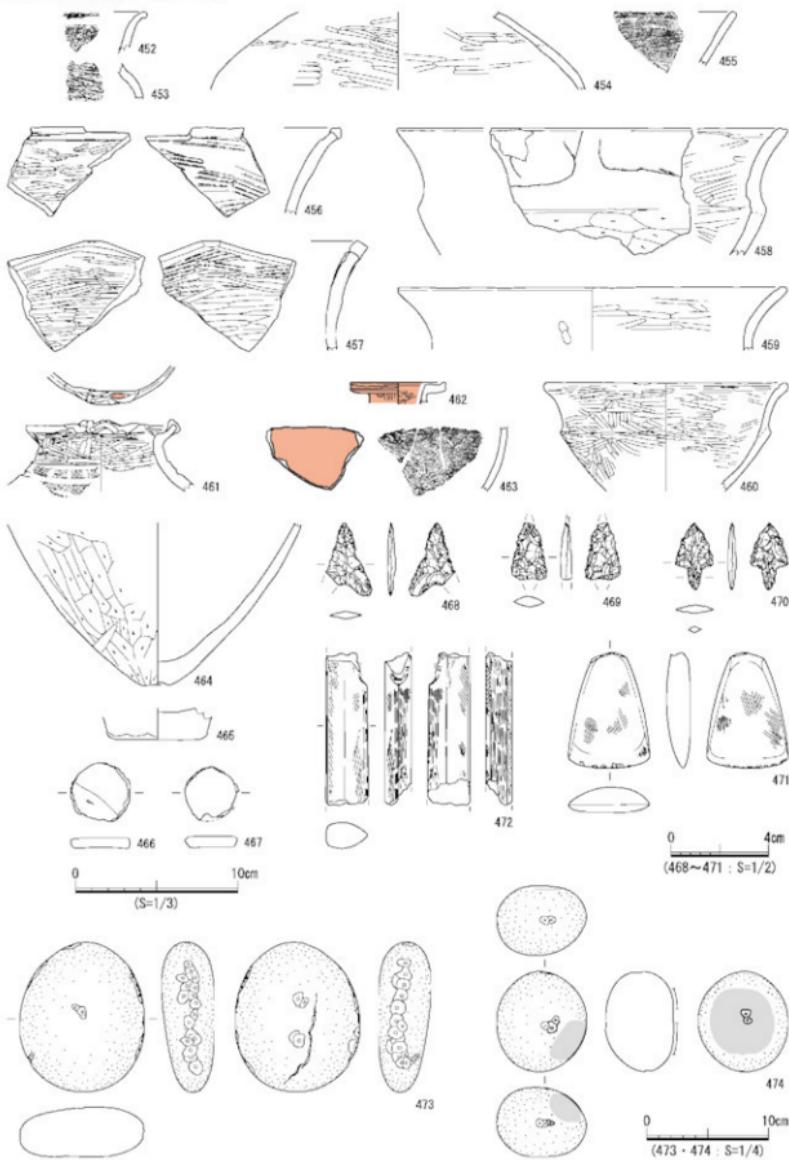
第142図 遺物包含層 (V1a層) 出土遺物③

AN13～A014 グリッド (442～451)



第143図 遺物包含層 (V1a層) 出土遺物④

AN13～AO14 グリッド (452～474)



第144図 遺物包含層 (VIIa層) 出土遺物⑤

内外面ともミガキ調整され、外面には赤彩の痕跡が認められる。453が小型の壺の体部で、外面にミガキ調整を施す。454は大型の壺の体部上半と考えられ、内外面にミガキ調整が認められる。

第II群C類 (455・456・458・460) 455は2類とした。口縁部が直線的に開き、内外面にはミガキ調整が認められる。456・458・460は3類とした。内外面にミガキ調整、外面の一帯に条痕調整が認められる。口縁部に平面形が長方形の突起が付されており、近畿地方の篠原式の影響が考えられる。458は体部外面にケズリ調整、内面にミガキ調整を施す。口縁部外面に、幅0.2cm程度の細い線で沈線文が描かれる。460は458と似た器形であるが、小型で内外面とも粗いミガキ調整が認められる。

第II群D類 (461～463) 461は壺の口縁部から体部と考えられる。口縁部内外面にはミガキ調整され体部上半外面には単節繩文と沈線、沈線、連続刺突による文様が認められる。口縁部内面と外面に赤彩の痕跡が残る。口縁端部には粘土組を貼り合わせた複雑な突起が付される。462も壺類の口縁部と考えられる。受口状の器形で、内外面に赤彩が残る。いずれも東日本系の土器と考えられる。463は丸みの強い体部であり、外面は無文で内面に赤彩が認められる。11類に含めたが詳細は不明である。

土製品 (466・467) 466・467は土器を加工した円盤状の土製品（加工円盤）である。466の外面にはケズリ調整が認められることから体部と考えられる。467は摩耗が著しく、調整は不明である。

石器・石製品 (468～474) 468～470は石鎌である。468・470はサヌカイト、469は下呂石を石材とする。468は無茎鎌で基部に深い抉りをもつ。469は有茎鎌と考えられるが、先端と茎を欠損している。先端が小さく尖り、側縁部の肩が張った形状をとる。470も有茎鎌で、形状は469と類似する。471は磨製石斧である。蛇紋岩製で、長軸4.7cmを測る小型品である。側縁に面が無く尖り気味になる。刃部には複数の剥離が認められるが、使用に伴う剥離かは不明である。472は両端が折損しているが、刃部を作出する断面形状から石刀と判断した。他の石棒類と同じ泥岩製で、刃部の背面には明瞭な平坦面がみられ、刀の「区（まち）」にあたる部分が明瞭に作出されている。473・474は磨石・叩石類である。ともに砂岩が用いられる。473は扁平な円礫の平坦面の両面と、長軸側の側縁に敲打痕が残る。側縁の敲打痕は列状で連続して残る。474は円礫で、平坦面と側縁の一部に磨面、平坦面と短軸側の側縁計4箇所に敲打痕が残る。

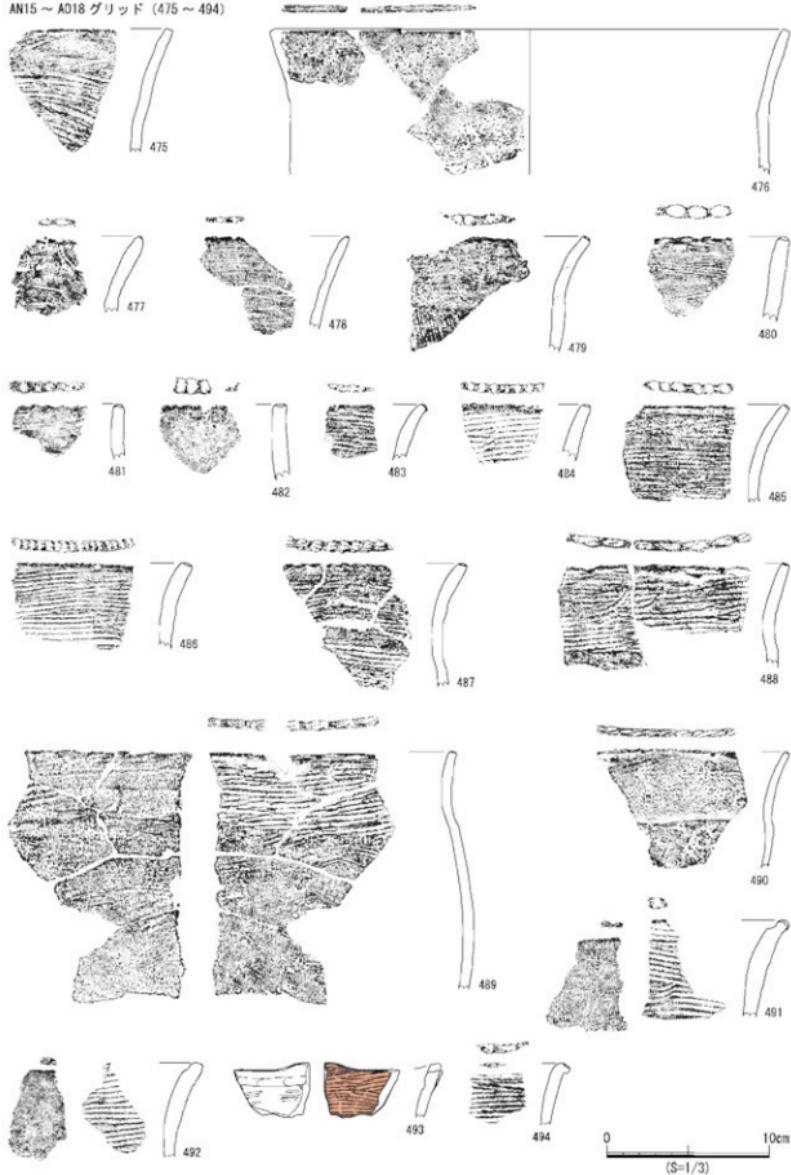
③ AN15～A018 グリッド

表47ではA016の出土遺物が少ないが、この部分に第2調査面のSD35が掘り込まれているためであり、全体として、1m²あたり10点以上の出土量がある。I b～I c期の土器埋設遺構やI c期の焼土や土坑が分布する一帯で、当該期の遺物に加え、I d期に属すると考えられる土器が認められる。突帯文をもつ土器は、NR 3と比較すると多様性や量に乏しく、NR 3出土遺物との時期的な差を示している可能性がある。

第II群A 1類 (475～479・497) 475・497はa類、476～479はb類とした。476は口縁端部が面取りされ、やや瘤む。477は口縁端部に連続する指頭押圧を施す。478・479は口縁端部にヘラ状工具による連続刻みを施し、478の内面には粗い条痕が認められる。

第II群A 2類 (480～496・498～504・510～518) 480～482はa類とした。口縁部が直立気味で、1類と比較すると器壁が厚い。480は明瞭な指頭による連続押圧、外面にハケ状工具による条痕を施す。481は、口縁端部に棒状工具による連続する押圧が認められ、外面にナデ消されたような条痕の痕跡が残る。482は外面に横ナデ調整を施し、口縁端部に鋸歯状のヘラ刻みが廻る。510～512はb類とした。

AN15 ~ A018 グリッド (475 ~ 494)



第145図 遺物包含層 (VIIa層) 出土遺物⑥

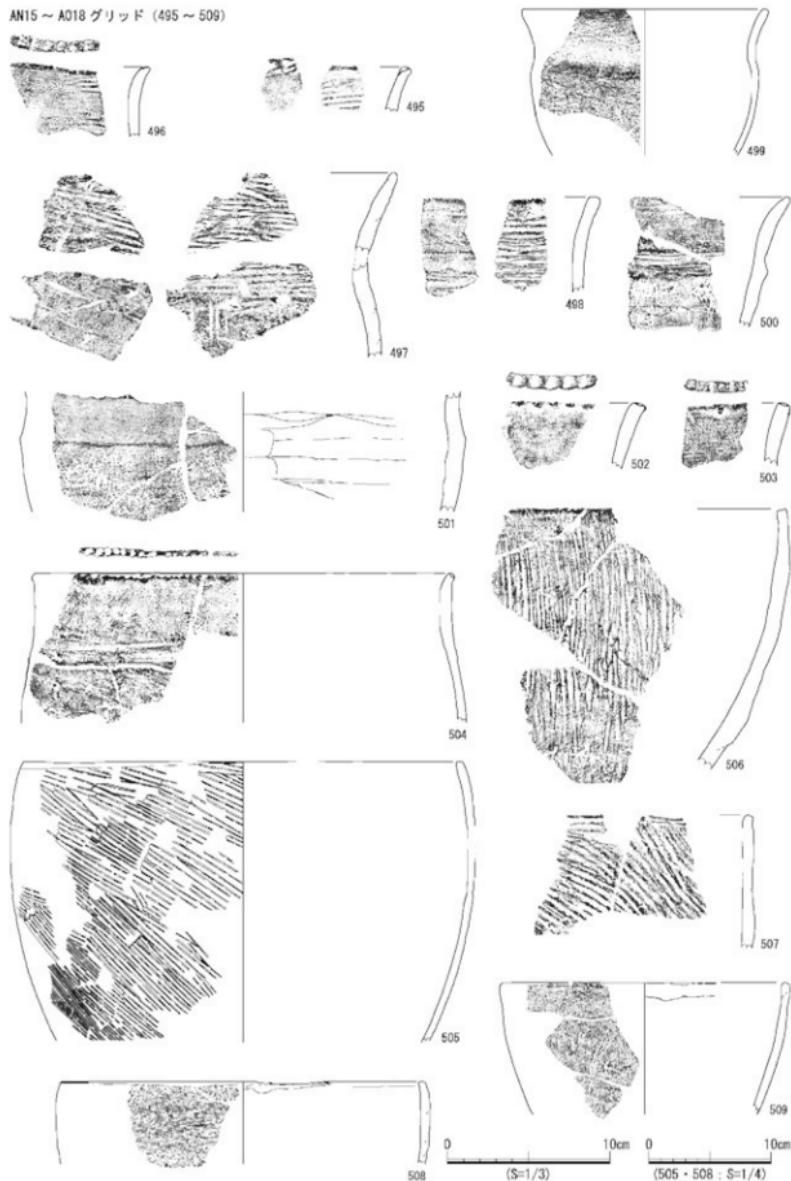
510は外反する口縁部で、内外面はナデ調整を施す。口縁端部からやや離れた位置に幅1.1cmの断面形が三角形の突帯が付される。ヘラによって鋸歯状の刻みが巡り、口縁端部外面にも同様な刻みが認められる。448とは口縁部の傾きが異なるが、突帯や口縁端部外面の刻みなどに共通点が認められる。511・512は510と同様の位置に断面形が蒲鉾形の素文の突帯を施す。483～490はc類とした。483～485は口縁端部に連続するヘラ刻みを施し、483は刺突状、484・485は鋸歯状の形状をとる。486～489は口縁端部を二枚貝の刻み・刺突で連続して行う。489は体部に最大径をもつ器形をとり、口縁部の外傾が弱い。口縁端部の連続刻みはD字形で、いずれも単位が細かい。490は口縁端部に二枚貝の押引を施す。494もc類としたが、口縁部端部の粘土が明瞭に外へ引き出され、端部に二枚貝を押圧する。513～515はd類とした。突帯の位置が口縁端部からやや離れた位置である点が、SJ11出土の304と異なる。突帯の幅は0.8～0.9cmで、口縁端部と突帯上に二枚貝による連続刻みを施す。491～493はe～g類の口縁端部内面に沈線や沈線状の段をもつ一群である。491はe類で、内面に幅0.7cmの太い沈線が認められ、口縁端部外面に二枚貝によるD字刻みを施す。492はf類で、491より沈線がやや細い。493はg類で、波状口縁もしくは突起をもち、口縁端部内面に沈線が認められる。非常に丁寧なつくりで、胎土も精良である。外面に条痕調整が認められるが、その上に赤彩がみられる。浅鉢などの精製土器の可能性もある。495・496は面取りがやや弱く、口縁端部の内面側に二枚貝による連続刻みを施すh類とした。保美C貝塚の資料の中で、増子氏が「原体が二枚貝・ヘラ状工具・棒の先端等の刺突列の位置が口端内角から内面へ移動」し、「保美C式に削成し五貫森式まで存続する」(増子2013)とした一群と関連する可能性も考えられる。516～518はi類とした。516は、口縁端部に近接した位置に垂れ下がり形の素文突帯を施す。517も口縁端部に近接する位置に突帯を施すが、断面形が三角形に近い。突帯上面にヘラ状工具によるD字刻みを施す。518は口縁端部が残存していないが、端部から離れた位置に素文突帯が認められるため、i類に含めた。498～504はk類とした。498は口縁端部を面取りするが、連続刻みが認められない。はいづめ遺跡10号上器棺に類似する。499・500は体部外面をケズリ調整し、頸部と体部の境目に明瞭な段をもつが、口縁部外面はナデ調整で口縁端部の連続刻みが認められない。502・503は口縁部外面がナデ調整で、口縁端部を連続刻みする。504は、口縁部が僅かに外反し頸部の屈曲は弱いが、体部と口縁部外面には明瞭な調整の違い(ケズリとナデ)が認められる。口縁端部には連続する鋸歯状のヘラ刻みを施す。

第II群A 3類 (505～509) 505～507はa類とした。505は口縁端部を面取りし、体部に斜方向の条痕を施す。条痕の工具は棒束状工具の可能性がある。506も同様の器形と考えられるが、条痕の方向が縦位に近い。507は、口縁端部が面取りされず、条痕の工具は二枚貝と推測される。508・509はc類とした。外面にナデやケズリ調整を施す。

第II群A 5類 (519) 519はb類とした器壁が薄く黒色の胎土をもつ土器で、器種は深鉢と考えられる。幅0.6cmの断面形が三角形になる突帯を2重に廻らし、その間に同様の突帯による区画文を配する。突帯はヘラ状工具により連続刻みされ、外面にミガキのような調整が認められる。系統不明の土器であるが、同様の胎土や突帯文をもつ土器は他に2点出土している(591・628)。

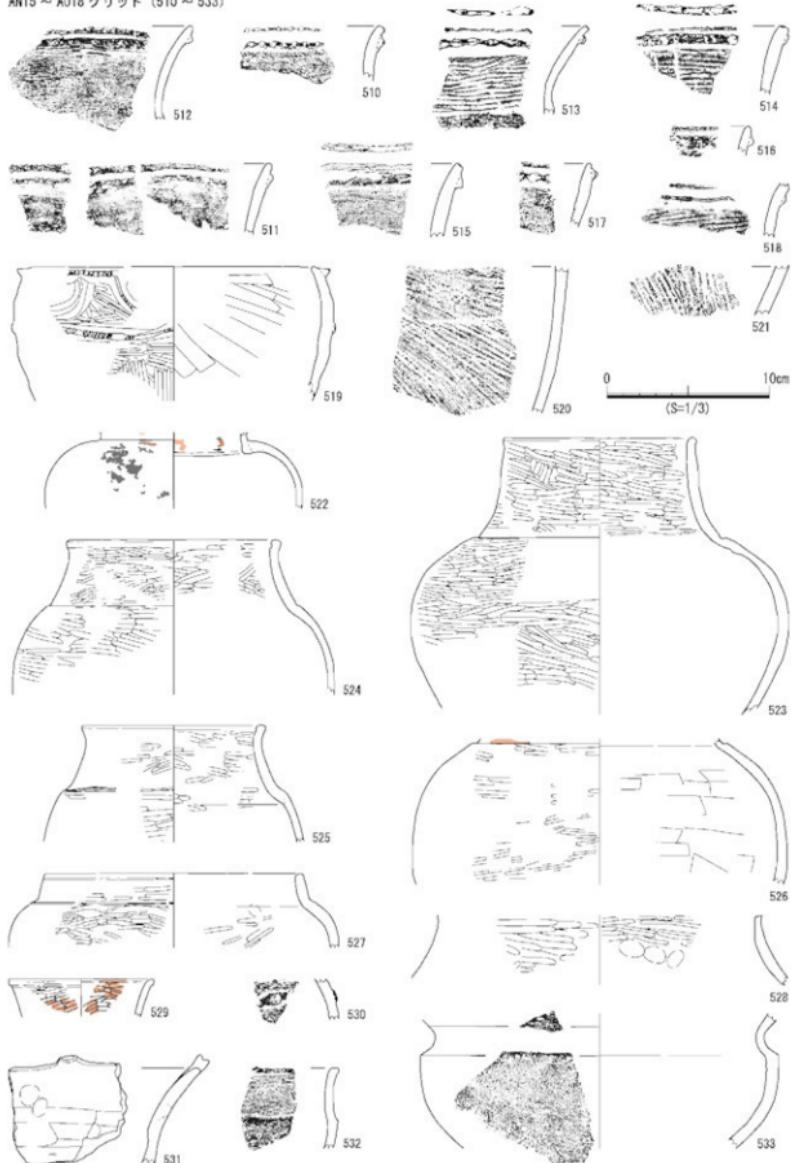
第II群A 6類 (520・521) 520・521は器形不明の深鉢であるが、外面調整が特徴的であるため、抽出して掲載した。520は二枚貝と思われる条痕を斜位で密に施す。521はハケ状の工具による条痕調整が認められる。

AN15～A018 グリッド (495～509)



第146図 遺物包含層 (V1a層) 出土遺物⑦

AN15～A018 グリッド (510～533)



第147図 遺物包含層 (V1a層) 出土遺物⑧

第Ⅱ群A 7類(549～553) 549～553は深鉢の底部である。549～551は頸部屈曲深鉢の可能性が高い。549は径の小さい底部をもつb類、550・551は底面に明瞭な凹みが認められることからc類に分類した。552・553は平底で、552は体部から底部が突出するd類、553は突出しないf類とした。

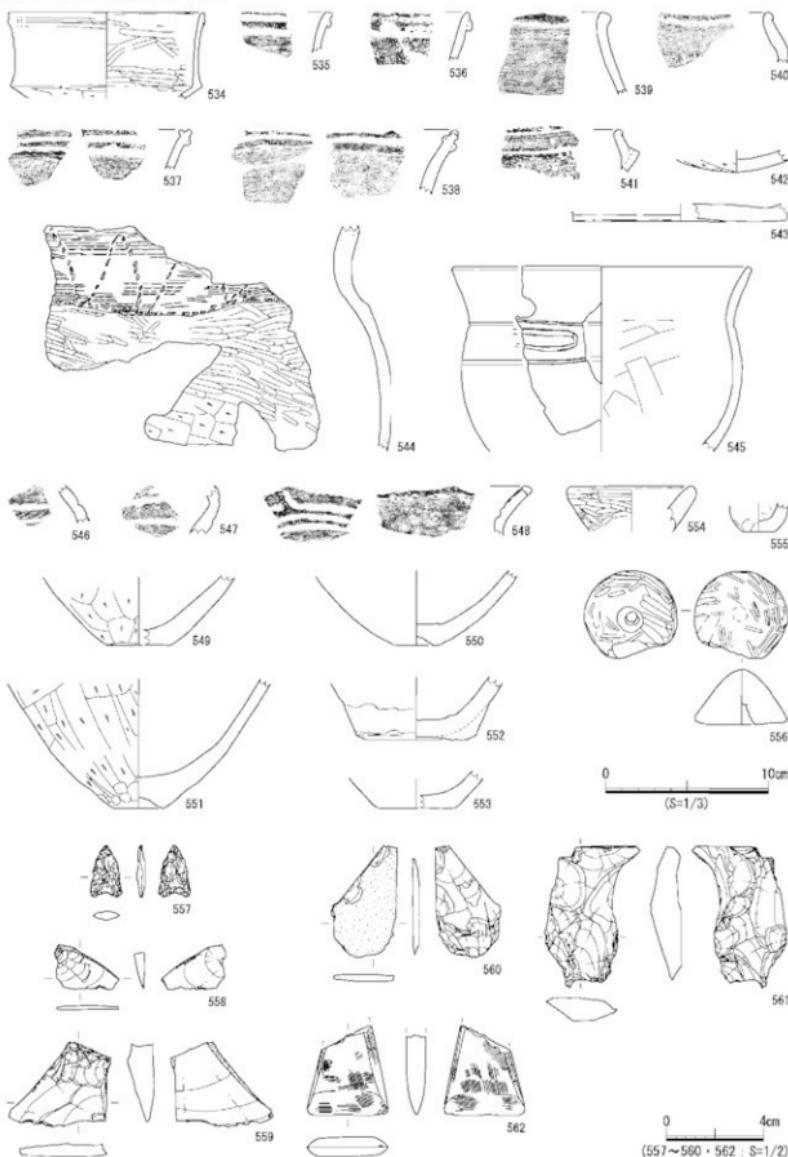
第Ⅱ群B類 (522～530) 522は1類とした。体部に強い丸みをもつ器形で、体部外面に漆のような付着物が認められる。523～526は2類とした馬見塚F地点型とされる壺である。口縁部が内傾し、端部付近が外反する。体部に丸みを持ち、最大径は体部上半に位置する。口縁部及び体部外面と口縁部内面にミガキ調整、体部内面にナデ調整を施す。馬見塚F地点型壺の大きな特徴である頸部と体部の境の沈線は、非常に細い工具で上方から刻まれるため、横から見ると段がついているように感じられる。526は体部で、頸部と体部の境に赤彩の痕跡が残る。527は3類とした。SJ 8出土の293と同様な器形で、頸部を廻る明瞭な段と口縁端部外面下の沈線が特徴である。この他、528は大型の壺の頸部、529は口縁端部のみが外反する壺の口縁部と考えられる。530は体部に刻目突帯を施す壺類の可能性があるため、4類とした。

第Ⅱ群C類 (531～543) 531は3類とした。頂部に指オサエのある小突起を口縁部に付す浅鉢で、体部外面にケズリ調整を施す。532・533は4類とした。外反する口縁部が内傾する器形で、ともに体部外面にケズリ調整が認められる。NR 3出土の385に類似する器形と考えられる。539～541は5類とした。539は頸部が長いタイプで、他の2点は短い。540・541は体部外面にケズリ調整が認められる。541は体部と頸部の接着部をずらすことにより、屈曲部に段を作り出し、細い沈線を廻らす。534～538は6類とした突帯を施す浅鉢である。いずれも幅が0.5～0.8cmの細い素文突帯が認められ、ミガキ調整を施す。534は器壁が薄手で、口径が比較的小さい。口縁部が緩やかに外反しながら外傾する。体部外面にケズリ調整を施す。535は、外反する口縁部の端部下外面に素文突帯を施す。536は突帯下の外面にケズリ調整を施す。537は外面だけでなく、内面にも突帯を施す。538は口縁端部に三角形の小突起が認められる。542・543は浅鉢の底部と考えられる。542は尖底気味の丸底で底面が存在しない。外面にはケズリ調整を施す。家根氏のC 3類にあたり（家根 1994）、篠原式段階の可能性がある。543は平底の大型浅鉢の底部と考えられる。非常に丁寧なミガキ調整（磨研）によって成形されている。539のような逆「く」字形口頸部浅鉢の底部と考えられる。

第Ⅱ群D類 (544～548) 544は頸部屈曲深鉢の1種で、頸部に明瞭な段をもち、口縁部外面に二枚貝による横位の条痕、体部外面の上半にケズリ調整後ミガキ調整を施す。頸部外面に横位の列点、口縁部には鋸歯状の列点文が認められる。瀬戸内地方に起源をもつ土器と考えられ、西之山式と併行する時期に比定される。西日本の突帯文系土器群に含まれるため異系統とするには語弊はあるが、特徴的な土器であるためD類に含めた。545は頸部が屈曲し体部に丸みのある浅鉢であるが、体部上半の外面に、半裁竹管状工具による2条の沈線と方形の区画文を施す。546・547は壺形の器形と考えられる。外面に磨消繩文による文様が描かれ、546は外面に赤彩が残る。大洞C式段階の土器と思われるが、詳細は不明である。548は浅鉢と考えられる。口縁端部に小突起が認められ、口縁部内面に「入」字状の沈線と平行沈線による文様が描かれる。大洞A式段階に位置付けられる可能性がある。

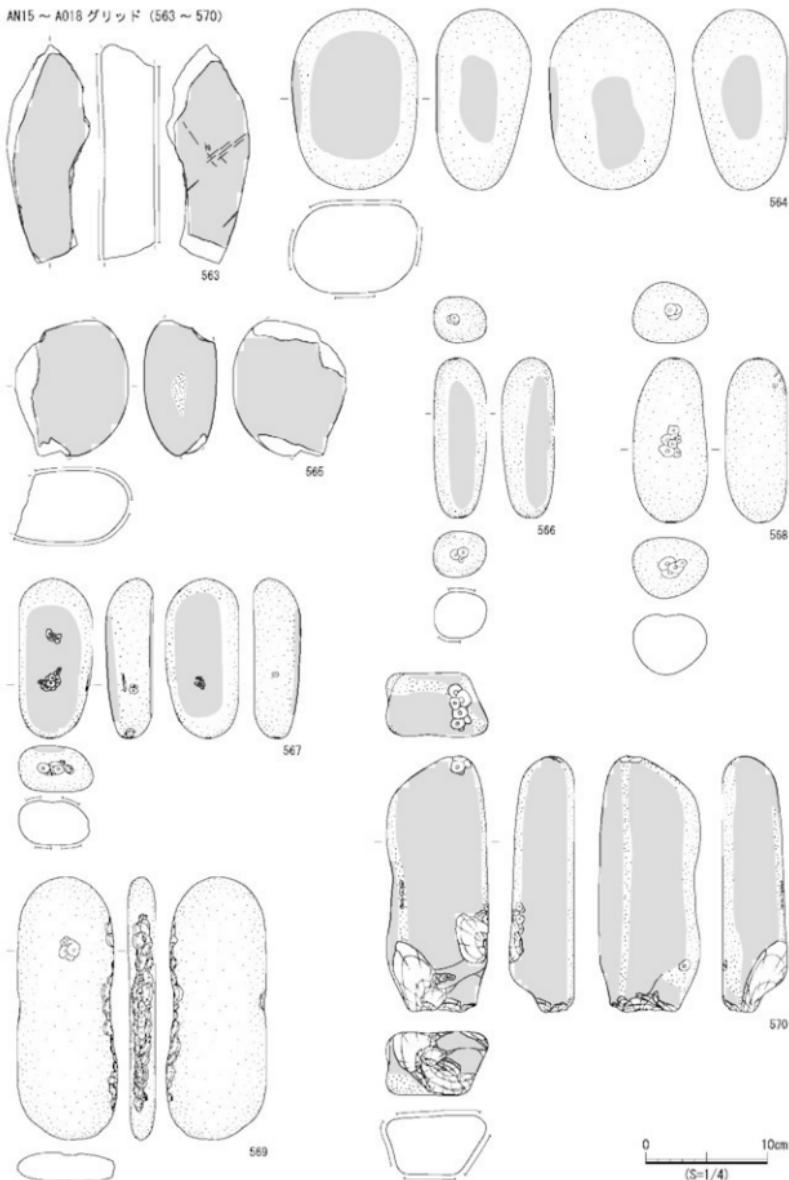
第Ⅱ群E群 (554・555) 554は器壁に厚みがあり、口縁部が直線的に開く。内外面はミガキ調整される。555は平底の底部で、体部は丸みがある。外面には指オサエによる成形痕が残る。ともにミニチュア土器と考えられるが詳細は不明である。

AN15～A018 グリッド (534～562)



第148図 遺物包含層 (Via層) 出土遺物⑨

AN15 ~ A018 グリッド (563 ~ 570)



第149図 遺物包含層 (V1a層) 出土遺物⑩

土製品 (556) 556は断面形が三角形の円錐形の土製品である。外面にはミガキ調整を施し、平坦面に穿孔が認められるが貫通はしていない。この孔は焼成前に穿たれており、粘土を搔き出した痕跡が明瞭に残る。

石器・石製品 (557～570) 557は石鎌である。下呂石を石材とし、無茎鎌で基部に抉りをもつ。先端が小さく尖り、側縁部の肩が張った形状をとる。558～560はM.Fである。558・559はサヌカイト、560はチャートを石材とする。いずれも原石の自然面を残す。558は横長剥片の側縁2箇所に微細な連続剥離が認められる。559は折損しており、背面側の上端に成形のためと思われる剥離が集中し、下端に微細な連続剥離が認められる。560は縱長の剥片を利用し、下端に微細な連続剥離がみられる。腹面にも複数の剥離が認められるが、成形を意図したものかどうかは不明である。561はネガティブな剥離面が全体に認められるため石核とした。サヌカイトで、短軸側の側面に自然面を残す。562は磨製石斧である。蛇紋岩製で、長軸は基部の折損のため不明であるが、幅が3.3cmであるため小型品と思われる。371とは断面形状が異なり、扁平で両側縁に斜めの面を成形して尖らせている。563は石皿・台石類である。泥岩を石材とし、両面が平滑になるまで使い込まれているが、大きく破損している。564～570は磨石・叩石類である。570を除き、砂岩が利用されている。564は4面の磨面のみで、敲打痕は認められない。565は、側縁のごく僅かな部分を除いてほぼ全面に磨面が認められる。566は長梢円錐の短軸の両端に敲打痕が残るが、磨面も認められる。567は短軸側の端部1箇所と平坦面と長軸側の側縁に敲打痕が認められる。平坦面と側縁の4箇所の敲打痕は端部からほぼ等距離に位置しており、石材を回転させながら敲打したと考えられる。568も長梢円錐を用いて短軸側の側縁に潰れ状の敲打痕が残るが、磨面は認められない。569は扁平な長梢円錐の側縁に連続する敲打痕を残すもので、敲打によって側縁が内湾するほど使い込まれている。570は流紋岩の亜角礫を石材としており、短軸側の端部に一部敲打痕が残る。敲打痕とは反対側の端部に複数の剥離が認められるが、目的は不明である。

④ AN19・A019 グリッド

VI a層で最も縄文土器の出土量が多い地区である。遺物包含層掘削の際にNR 3の埋土の一部をVI a層として掘り上げた影響もあるが、時期的に古い土器も遺存状態が良い状態で出土したことから、I b期の段階からI d期にかけて、自然流路で意図的な土器の廃棄が行われた可能性もある。

第Ⅱ群A 1類 (571・572) 571は外面はナデ調整され、口縁端部に刺突状のヘラ刻みが認められる。器形からA 1類に含めたが、時期的に新しい粗製深鉢の可能性もある。572も571とほぼ同様な器形・調整をもつ深鉢である。

第Ⅱ群A 2類 (573～584・588～590・592・593) 573はa類とした。口縁部が直立気味の深鉢で、外面をナデ調整し、口縁端部に棒状工具による連続押圧が廻る。574～580・582はc類とした。574は口縁端部の刻みを棒状工具による押圧、575はヘラ刻みで施す。576～579は口縁端部に二枚貝による連続刻みが認められる。576～578は頸部の段と屈曲、体部のケズリ調整が確認できる。580は口縁端部の刻みを二枚貝による押圧・押引で施す。582は口縁部端部の粘土が明瞭に外へ引き出され、端部に二枚貝で刻む。581はe類とした。外面が大きく剥がれているが、残存部分に二枚貝による条痕が認められる。内面には幅0.6cmの沈線、口縁端部に二枚貝によるD字刻みを施す。583はh類とした。面取りが弱く、口縁端部の内面側に二枚貝による連続刻みを施す。588・589はi類とした。588は体部外面にケズリ調整、口縁部に二枚貝による横位の条痕調整を施す。突帯の幅は1.4cmあり、ヘラ刻みによるD

字刻みは比較的幅が広い。589は内外面が磨滅しており調整不明である。突帯にはヘラ状工具によるD字刻みが認められるが、刻みの間隔が広い特徴がある。590も垂れ下がり形の突帯を施し、口縁端部は強く外反する。深鉢ではない可能性がある。592・593はj類とした。口縁部に幅広で潰れ状の突帯を施す。592は突帯にヘラ状工具によるD字刻みを施す。体部外面はケズリ調整、口縁部外面は二枚貝による条痕調整が認められる。593も口縁端部から離れた位置に突帯を施すが、素文である。外面にはナデ調整を施す。584はk類とした。口縁部が外反し、体部にやや丸みがある器形をもつ。体部外面にケズリ調整、口縁部に横位のナデ調整を施す。調整の違いによって口縁部と体部の区別は明瞭であるが、c類ほどの屈曲は認められない。

第II群A3類 (585・586・594) 585はa類とした。口縁端部を面取りし、体部に斜方向の条痕を施す。条痕の工具は二枚貝の可能性がある。586はc類とした。外面はナデによって調整される。594はe類とした。口縁端部から離れた位置に素文の突帯を施す。外面ともナデ調整される。

第II群A5類 (587・591) 587はa類とした。外反する深鉢の口縁部で、口縁端部に接して断面形が三角形に近い幅1.0cmの刻目突帯を施す。刻目は二枚貝のD字刻みで、口縁端部は面取りし、内外面にはナデ調整を施す。形態はNR3出土の377に類似するが、587の方が突帯の刻みが細かく、口縁端部の連続刻みが認められない。591はb類とした。口縁端部からやや離れた位置に、断面形が三角形に近い細い突帯を施す。突帯はヘラにより細かく刻まれる。

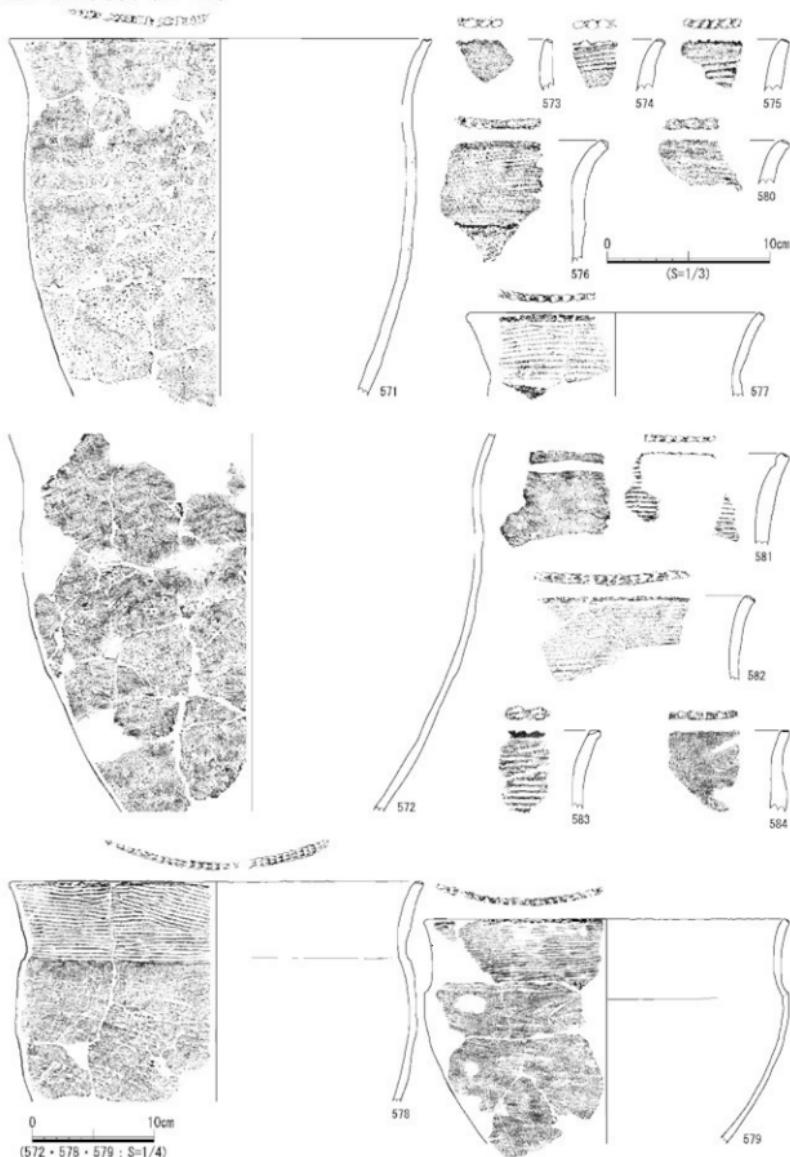
第II群A6類 (595・596) 595・596は器形不明の深鉢であるが、595は内面に幅0.2cmの沈線文が認められる。沈線は458の浅鉢に描かれた文様に似て細い。596は摩耗により外面調整が不明であるが、内面に横位の条痕調整を施す特徴が認められる。

第II群A7類 (605～608) 605・607はb類とした。頸部屈曲深鉢の底部と考えられる。体部下半が尖り気味で、狹小な底面が認められる。606はd類とした。平底で体部から底部が突出し、底部の付加部分の周縁に指オサエの痕跡が残る。608はe類とした。平底の底部で体部から底部が突出しない。

第II群C類 (597～603) 597は2類とした。直線的に開く浅鉢の口縁部で、内面に1条の沈線を廻らせる。ミガキ調整は認められない。口縁部の形状や内面の沈線が、NR3出土の382に類似する。598・599は3類とした。598は外面に二枚貝による条痕調整を施した後、ナデやミガキ調整を行う。599は頂部に指オサエのある小突起を口縁部に付す浅鉢で、内外面にミガキ調整を施す。本来は531に類似する器形と考えられる。600は4類とした。NR3出土の385や、533に類似した鉢状の器形になるとを考えられる。601～603は5類とした。601・602は頸部から口縁部が長いタイプであり、601は体部外面にケズリ調整、口縁部にミガキ調整を施す。602の口縁部はやや直立しており、補修孔と思われる穿孔が認められる。603は頸部から口縁部が短いタイプであるが、口縁端部の折り返しなく、端部から離れた位置に素文突帯のような状態で付される。胎土が粗く、著しく摩耗しているため調整は不明である。

第II群D類 (604) 604は碗形の器形をもつ浅鉢で、口縁部を内側に拡張し、受口状になる。体部外面上半に網文を施文後に3条の沈線を引き、その間に2段の鍵の手文を施文する。鍵の手は角が丸いS字に近い形状をとる。上から3条目の沈線よりDはミガキ調整され、文様は認められない。体部上半にはわずかに赤彩が残存する。この鍵の手状の連続文をもつ土器は「雷文土器」と呼称され、中部・東海地方に分布し、大洞B C～C 1併行期とされている（重久1985）。重久氏の集成には、岐阜県の出土例として、北裏遺跡（大江他1973）と（中野）山越遺跡（戸田1982）の事例が紹介されている。北裏遺跡

AN19～AO19 グリッド (571～584)



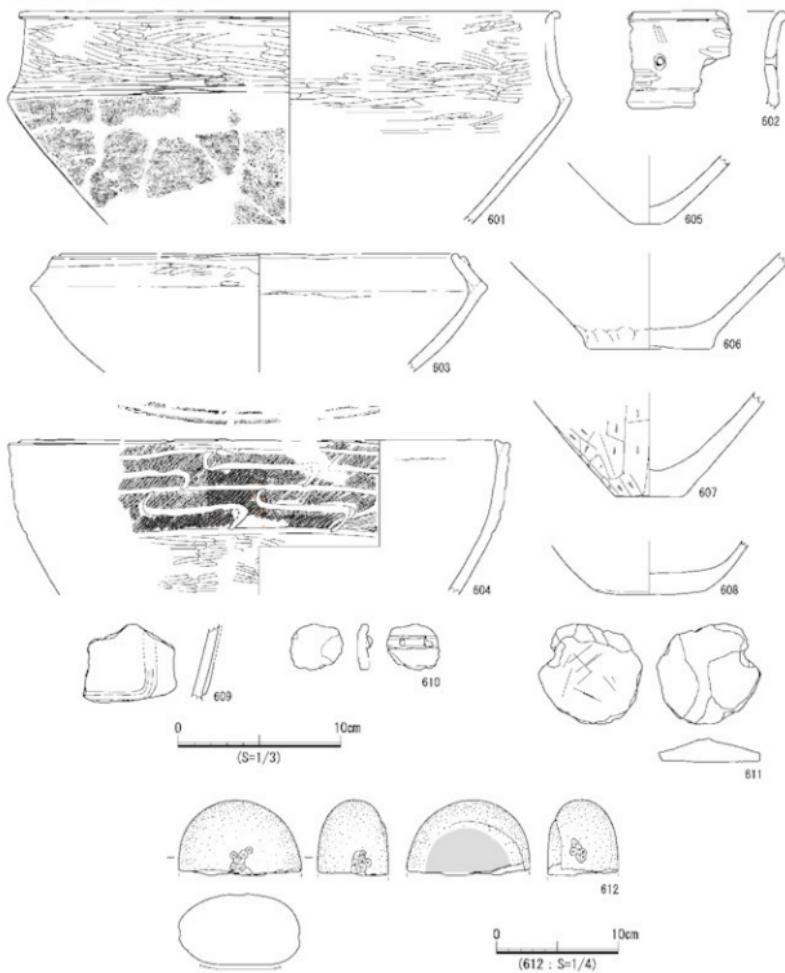
第150図 遺物包含層 (Vila層) 出土遺物⑪

AN19 ~ AO19 グリッド (585 ~ 600)



第151図 遺物包含層 (Via層) 出土遺物⑫

AN19～A019 グリッド (601～612)



第152図 遺物包含層 (Via層) 出土遺物⑩

のものは左上がりである点は共通するが、鍵の手の長さが短く鍵部分が開き気味で、若干穿孔気が異なる。また、縄文地紋も認められない。

第II群E類 (609) 609は舟形とされる土器の可能性がある。この土器は、底面が梢円形で体部外面に隆帯による方形区画を施す特徴的な器形をもつ。609は体部で隆帯の一部が残存する。なお、642は舟形の底部と考えられる。

土製品 (610・611) 610・611は加工円盤である。610の外面には突帯が残存しており、口縁部付近の破片と考えられる。611は底部を加工しており、周縁に打ち欠いたような痕跡が認められる。

石器・石製品 (612) 612は磨石・叩石類である。安山岩の円礫で、中程で折損している。平坦面1面と側縁に敲打痕、もう一方の平坦面に磨面が認められる。

⑤IV・V層・その他

本項では、第2調査面におけるトレンチや排水溝の掘削の際に出土した遺物、IV・V層の重機掘削や発掘区壁面崩落時の排土などで出土した遺物を一括して記載する。IV・V層は第3調査面遺構群の廃絶以降に堆積した土であり、NR 3よりさらに新しい時期の遺物も認められる。

第II群A1類 (613) 613はb類とした。外面はナデ調整され、口縁端部に工具不明の刻みが認められる。

第II群A2類 (614～616・621～625) 614・615はc類とした。口縁端部に二枚貝による連続刻みが認められる。621～624はi類とした。621は口縁部の外反が強く、口縁部に二枚貝による横位の条痕調整を施す。突帯に二枚貝による幅の広いD字刻みを施す。622にも同様な刻目突帯が認められるが、口縁部が直立気味である。623は断面が蒲鉾形の突帯にヘラ状工具によるD字刻みを施す。刻みの間隔は短いが幅広な印象を受ける。624は突帯に二枚貝によるD字刻みを施す。刻みが幅広であるため押圧にもみえるが、j類と比べると突帯が高く細い。625はj類とした。624は小型の深鉢で口縁端部に連続する二枚貝の押圧が認められるが、突帯が低いため口縁部が肥厚しているようにみえる。616はk類とした。口縁部が外反し、体部にやや丸みがある器形をもつ。口縁部に横位のナデ調整を施す。調整の違いによって口縁部と体部の区別は明瞭であるが、c類ほどの屈曲は認められない。口縁端部には船歯状のヘラ刻みを施す。

第II群A3類 (617～620) 617はa類とした。口縁端部を面取りし、体部に斜方向の条痕を施す。条痕の工具は二枚貝の可能性がある。618は、外面が摩耗しているが条痕調整はみられないためc類とした。619・620はd類とした。外面に竹管状工具による粗い条痕を施す。

第II群A4類 (626・627) 626・627は体部と口縁部である。626には二枚貝押圧のある突帯、627には口縁端部下を彫る素文突帯が認められる。

第II群A5類 (628) 628はb類とした。口縁端部からやや離れた位置に断面三角形の細い突帯を付し、突帯をヘラにより細かく刻む。器壁が薄く、黒褐色の胎土をもつ。

第II群A7類 (641) 641はd類とした。底部に粘土を付加した部分が突出し、底面が壅む。突出部の外面には体部とは方向の異なる横位のケズリ調整を施す。

第II群B類 (629・630) 629・630はB4類とした。629は口縁部、630は体部で、共に突帯が付され、630の刻目には二枚貝が用いられる。

第II群C類 (631～636) 631・632は3類とした。631は外面にナデ、内面にミガキ調整を施し、体部外面をケズリ調整する。口縁端部に粘土紐を組み合わせた小突起を付す。632は内外面にミガキ調整

IV・V層地 (613 ~ 636)



第153図 遺物包含層(IV・V層地)出土遺物①

を施し、口縁端部に指オサエによってB字状の突起を作出する。633・634は4類とした。633は波状口縁、634は小波状口縁をもつ浅鉢で、共に口縁部が外反及び内傾する。634はNR3出土の384と同様な器形になると考えられる。635・636は6類とした。635は内傾する口縁部の外面に、梢円形で幅広の押圧をもつ突帯を施す。今回の調査でこのタイプの突帯文は他に出土しておらず、時期的に新しい要素と考えられる。636は口縁端部を外面側に拡張し、その下に素文突帯を施す碗形の浅鉢で、体部外面にケズリ調整を施す。底部は体部からやや突出する平底である。口縁端部や突帯の様相が、NR3などで出土した1類の深鉢との関連を伺わせる。

第II群D類(637～640) 637は壺類の体部と考えられる。外面に磨消繩文による施文と赤彩の痕跡が認められる。大洞C式段階の土器の可能性があるが、詳細は不明である。638・639は太い横位の平行沈線と眼鏡状付帯文が特徴の土器で、共に浅鉢と思われる。639は沈線と同様の工具を用いた列点文も認められる。文様構成から浮線網状文系の土器との関連が考えられる。眼鏡状付帯文はNR3出土の390、横位の平行沈線は391にも認められるが、VIa層や第3調査面の他の遺構からは出土しておらず、当遺跡の出土土器の中では、時期的に新しい要素と考えられる。640は壺の体部と考えられるが、体部に横位の突帯を廻らせ、そこから斜め下に2条の隆帯を垂下する。隆帯の連結部はボタン状に粘土を貼り付け、隆帯上には沈線が引かれる。

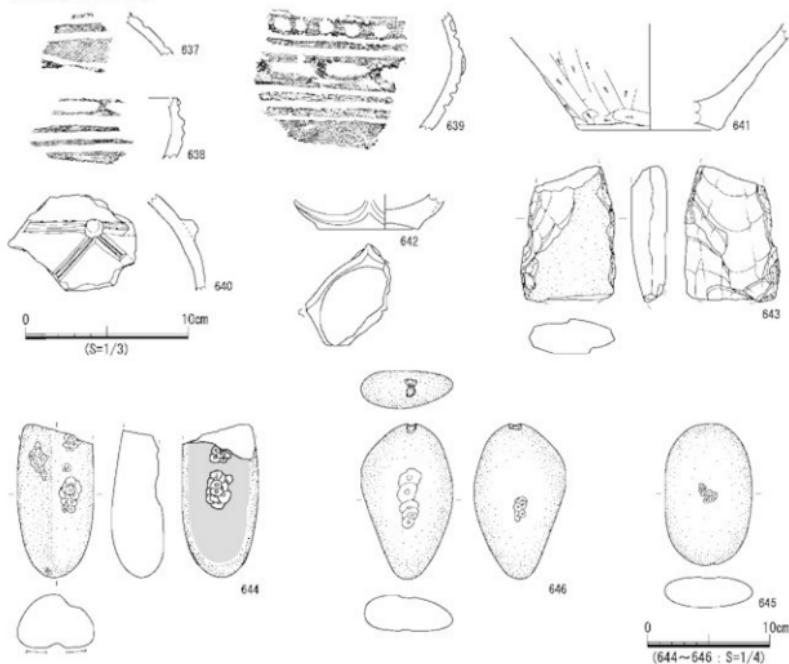
第II群E類(642) 642は舟形とされる土器の底部である。梢円形をとる底面と、体部の隆帯による区画が残存する。

石器・石製品(643～646) 643は打製石斧である。刃部と基部が共に折損している。粘板岩を石材とし、背面には自然面が残る。側縁には成形のための連続する剥離が認められる。644～646は磨石・叩石類である。いずれも砂岩である。644は長梢円礫の側縁2面に擦り鉢状の深い敲打痕が残る。645は扁平な梢円礫の両面に敲打痕が残り、短軸側の端部には打欠きのような剥離が認められる。646も扁平な梢円礫を用いるが、敲打痕は平坦面1面のみである。

注

1) 松本氏の御教示による。

IV・V層他 (637~646)



第154図 遺物包含層(IV・V層他)出土遺物②

表48 第3調査面土器埋設遺構一覧表

遺構名	地区割り		検出面	御方 (m)			主軸方位	設置形態	設置角度	埋設形態	組み合わせ (第Ⅱ群)	切り合い 新 旧	
	南北	東西		長軸	短軸	深さ							
SJ1	AN	14	Vlb層上面	0.75	0.64	0.26	N 40° E	斜位	40°	合口	A1a類+A2a類	— VS 2	
SJ2	AN	15	Vlb層上面	0.81	0.74	0.27	N 25° E	斜位	35°	合口	A1a類+A1b類	— —	
SJ3	AN	15	Vlb層上面	(0.75)	(0.70)	0.25	N 22° E	横位	—	土器片蓋	A2a類+A1a類	— —	
SJ4	AO	15	Vlb層上面	0.80	0.57	0.16	N 70° W	斜位	24°	土器片蓋	A1a類+A2a類+A2c類	— —	
SJ5	AN	16	Vlb層上面	0.78	0.60	0.16	N 74° W	横位	—	土器片蓋	A6類+A1b類	SK115	
SJ6	AO	16	Vlb層上面	0.85	(0.70)	0.20	N 60° W	—	鳥形	—	A2b類+A2c類	— —	
SJ7	AO	17	Vlb層上面	0.74	0.70	0.13	N 40° W	横位か	—	不明	— + A1類	— —	
SJ8	AO	18	Vlb層上面	0.89	0.74	0.28	N 14° W	斜位	26°	土器片蓋	A1a類+A1b類	— —	
SJ9	AN	18	Vlb層上面	0.87	0.67	0.19	N 40° E	斜位	18°	土器片蓋	A2c類+A3a類	— —	
SJ10	AN	AO	18	Vlb層上面	0.95	0.74	0.31	N 19° E	斜位	30°	合口	A2c類+A2c類	— —
SJ11	AN	19	Vlb層上面	0.90	0.72	0.30	N 1° E	斜位	25°	土器片蓋	A6類+A2d類	— —	

表49 第3調査面焼土遺構一覧表

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積形	長軸 (m)		短軸 (m)		深さ (m)	長軸方位	切り合い 新 旧	出土遺物
	南北	東西				上端	下端	上端	下端				
SL2	ASH-AO	16	Vlb上	不規則	—	—	0.92	0.86	0.78	0.72	0.06	—	J12 S7
SL3	AO	16	Vlb上	不規則	—	半円形	1.10	0.93	(0.49)	(0.54)	0.09	—	J8 S1
SL4	AO	17	Vlb上	不規則	—	半円形	0.74	0.55	0.58	0.33	0.20	—	J23 S9

表50 第3調査面溝状遺構一覧表

遺構名	地区割り		検出面	断面形	堆積	長さ (m)		幅A (m)		幅B (m)	深さ (m)	長軸方位	切り合い 新 旧	出土遺物	
	南北	東西				上端	下端	上端	下端						
SD62	AN-AO	14-16	Vlb上	b2/b4	平凹	(6.90)	—	1.62	0.31	1.91	1.00	0.19	0.19	N 23° W	J206 S6

表51 第3調査面土坑一覧表

遺構名	地区割り		検出面	草平面形	堆積	断面形		長軸 (m)		短軸 (m)		深さ (m)	長軸方位	切り合い 新 旧	出土遺物
	南北	東西				上端	下端	上端	下端	上端	下端				
SK102	AN	12	Vlb上	円形	b3	半円形	0.36	0.24	0.31	0.21	0.08	—	—	J2	
SK103	AN-AO	13	Vlb上	円形	a	半円形	1.35	1.20	1.17	1.01	0.10	—	—	J34	
SK104	AO	12	Vlb上	複円形	b4	方形	0.61	0.38	0.45	0.33	0.22	N 5° W	—	J20 S2	
SK105	AO	12	Vlb上	円形	a	台形	0.48	0.28	0.46	0.26	0.18	—	—	J22	
SK106	AO	12	Vlb上	不定形	b4	二段	0.78	0.48	0.67	0.53	0.26	—	—	SK2 SK108 J16 S1	J16 S1
SK107	AO	12-13	Vlb上	複円形	a	半円形	0.49	0.39	0.38	0.26	0.07	N 51° W	—	SK109 J7	
SK108	AO	12	Vlb上	複円形	b1	半円形	1.13	0.50	(0.60)	0.36	0.28	N 14° W	—	SK106 J9	
SK109	AO	12	Vlb上	円形	b2	半円形	0.43	0.28	(0.34)	0.24	0.14	—	—	SK107 J4	
SK110	AO	12	Vlb上	複円形	b4	台形	0.60	0.37	(0.46)	0.30	0.21	N 67° W	—	SK106 NR2 J12	
SK111	AO	13	Vlb上	複円形	b4	段	1.30	1.00	0.89	0.53	0.29	N 78° W	—	SK112 J20	
SK112	AO	14	Vlb上	複円形	a	半円形	1.26	1.13	0.87	0.70	0.82	N 31° E	—	J8	
SK113	AO	14	Vlb上	複円形	a	半円形	0.35	0.20	0.26	0.14	0.13	N 3° E	—	J3	
SK114	AO	16	Vlb上	円形	b2	不定形	0.35	0.08	0.34	0.10	0.36	—	—	SK116 J1	
SK115	AN-AO	16-17	Vlb上	不定形	b1	半円形	3.70	3.03	1.89	1.76	0.08	N 34° W	—	SK114 SJ5 JH1 S2	
SK116	AN	17	Vlb上	不定形	a	半円形	0.87	0.48	0.85	0.67	0.20	—	—	J8	
SK117	AO	17	Vlb上	円形	a	半円形	0.50	0.41	0.48	0.33	0.20	—	—	J16	
SK118	AO	17	Vlb上	複円形	a	半円形	0.72	0.54	0.62	0.42	0.14	N 17° E	—	J6	

表52 第3調査面出土土器観察表①

両 面 番 号	種別	器種	出土位置		口径/底径 /器高(大径 (mm))	口径部 残存率 (%)	底土 (単位:mm) 成	色調 (内面) (外面)	裏面調査 内面/外面	分類 ・ 時期	文様・その他の (単位:cm)	持 印 番 号	両 面 番 号			
			出土区・ グリット	遺構 番号												
			層位													
269	縄文土器	深鉢	SJ1	—	40.0/— (39.9)/—	11.6+—	粗(～φ3.5) チート等砂粒 を多く含む)	灰 色	10YR7/3 10YR6/2 10YR5/1	板ナデ・板 オサニ・粗 い条痕	第Ⅱ群 A1a	伝統～煮沸内 面コガ付(傳 状、2枚)	121	34		
270	縄文土器	深鉢	SJ1	—	(32.1)/5.0/ 45.0/35.0	2.2+1	やや粗(～φ3.0) 長石・石英等砂 粒を多く含む)	灰 色	10YR5/2 2.5YR1/2 2.5YR1/1	板ナデ・粗 い条痕/ミガ キ・不規方 角のナデ・ ケズリ	第Ⅱ群 A2a	口縁端部直続 刷込み(～ラ死 み・複数回)、 蓋端部直続 刷込み	121	34		
271	縄文土器	深鉢	SJ2	—	37.9/1.9/41. 9/—	11.0+1	やや粗(～φ3.0) 長石・石英等砂 粒を多く含む)	灰 色	2.5YR7/2 10YR6/2 10YR5/1	ナデ・粗 い条痕/板 オサニ・粗 い条痕	第Ⅱ群 A1a	蓋端部内面コ ガ付唇	121	34		
272	縄文土器	深鉢	SJ2	—	31.8/0.8/40. 0/34.6	8.6+0	やや粗(～φ4.0) 長石・石英・ チート等砂粒 を多く含む)	灰 色	10YR7/2 10YR7/2 K3	板ナデ・板 ナデ・粗 い条痕	第Ⅱ群 A1b		121	34		
273	縄文土器	深鉢	SJ3	—	(30.5)/— (40.0)/—	9.5+—	やや粗(～φ3.0) 長石・石英等砂 粒を多く含 む)	灰 色	2.5YR6/2 2.5YR6/3 2.5YR6/1	ナデ・板ナ デ・粗い条 痕・板	第Ⅱ群 A2a	口縁端部直続 刷込み(複数回 2枚)	122	34		
274	縄文土器	深鉢	SJ3	①	1	—	やや粗(～φ3.0) 長石・石英等砂 粒を多く含 む)	灰 色	2.5YR6/2 2.5YR6/3 2.5YR6/1	ナデ・板ナ デ・粗い条 痕・板	第Ⅱ群 A2a		122	34		
275	縄文土器	深鉢	SJ3	②	1	—	やや粗(～φ3.0) 長石・石英等砂 粒を多く含 む)	灰 色	2.5YR6/2 2.5YR6/3 2.5YR6/1	ナデ・板ナ デ・粗い条 痕・板	第Ⅱ群 A2a		122	34		
276	縄文土器	深鉢	SJ3	③	1	—	やや粗(～φ3.0) 長石・石英等砂 粒を多く含 む)	灰 色	2.5YR6/2 2.5YR6/3 2.5YR6/1	ナデ・板ナ デ・粗い条 痕・板	第Ⅱ群 A2a		122	34		
277	縄文土器	深鉢	SJ4	—	(39.0)/— (7.2)/—	1.5+—	やや粗(～φ3.0) チート等砂粒 を多く含む)	灰 色	10YR7/2 10YR7/2 10YR7/1	ナデ・輪 模・粗 い条痕	第Ⅱ群 A1a		123	37		
278	縄文土器	深鉢	SJ4	①	a 1	—/(16.0) —	—/(—)	やや粗(～φ3.0) チート等砂粒 を多く含む)	灰 色	10YR8/2 2.5YR7/2 10YR8/2	ナデ・粗 い条 痕	第Ⅱ群 A1	外面部ス付 唇	123	37	
279	縄文土器	深鉢	SJ4	—	—/(—)(14.9) —	—+—	やや粗(～φ3.0) 長石・石英・ チート等砂粒 を多く含む)	灰 色	10YR7/4 10YR6/6 10YR7/3	ナデ/ケズ リ(一部ナデ 剥落)	第Ⅱ群 A2	外面部ス付 唇	123	37		
280	縄文土器	深鉢	SJ4	—	—/(11.0) —	—+—	やや粗(～φ3.0) 長石・石英・ 長身母粒を多 く含む)	灰 色	7.5YR6/6 10YR6/3 10YR6/3	ナデ・朱 漆調査後ナ デ剥落	第Ⅱ群 A1	外面部ス付 唇	123	37		
281	縄文土器	深鉢	SJ4	②	1	(32.3)/2.7 /48.0/35.9	2.6+1	やや粗(～φ3.0) 長石・石英・ 長身母粒を多 く含む)	灰 色	10YR7/2 10YR6/2 10YR6/2	ナデ・輪 模・板ナデ・ ケズリ・輪 模	第Ⅱ群 A2a	口縁端部直続 刷込み(～ラ死 み・複数回)、 裏面部ス付 唇	123	36	
282	縄文土器	深鉢	SJ5	①	1	(36.0)/— (35.1)/—	5.2+—	やや粗(～φ3.0) 長石・石英・ 長身母粒を含 む)	灰 色	10YR7/3 10YR7/3 2.5YR4/2	ナデ・輪 模・板ナ デ・粗 い条 痕	第Ⅱ群 A2c	外面部ス付 唇	123	36	
283	縄文土器	深鉢	SJ5	②	1	—	(38.8)/0.9 /41.0/—	1.0+1	やや粗(～φ4.0) チート等砂粒 を多く含む)	灰 色	10YR8/1 2.5YR7/6 10YR8/1	ナデ・板ナ デ・粗 い条 痕	第Ⅱ群 A1b	口縁端部直続 刷込み(複数回 2枚)	123	36
284	縄文土器	深鉢	SJ6	—	a —	37.8/— (29.5)/41.2	11.6+—	やや粗(～φ3.0) 長石等母粒を含 む)	灰 色	10YR5/1 2.5YR4/2 10YR5/1	ナデ・板ナ デ・粗 い条 痕	第Ⅱ群 A2b	口縁端部直続 刷込み(複数回 2枚)	124	36	
285	縄文土器	深鉢	SJ6	—	—	20.0/— (20.9)/—	7.8+—	やや粗(～φ3.0) 長石・石英等砂 粒を含む)	灰 色	10YR6/2 10YR6/2 2.5YR7/4	板ナデ・粗 い条痕/板 オサニ・粗 い条痕	第Ⅱ群 A2c	口縁端部直続 刷込み(複数回 2枚)	124	36	
286	縄文土器	深鉢	SJ7	—	—/(—)(6.8) —	—/(—)(6.8) —	やや粗(～φ3.0) 長石・石英・ 長身母粒をやや 多く含む)	灰 色	10YR6/2 10YR6/2 10YR6/2	粗 い条 痕/粗 い条 痕	第Ⅱ群 A1a	口縁端部直 続刷込み(複 数回)	124	—		
287	縄文土器	深鉢	SJ7	—	—/(—)(1.6) —/(35.0)/—	—+0	粗(～φ3.0) の長 石・チートを 多く含む)	灰 色	10YR7/3 2.5YR2/3	小形(?) ナデ・粗 い条 痕・ケズ リ(剥落)	第Ⅱ群 A1	外面部のビビ りで黄褐色の 付着、底部外 面削除下部 付着	124	36		

表53 第3調査面出土土器観察表②

通 路 番 号	種別	基種	出土位置			口縁部 直径/ 高さ/ 最大径 (m)	口縁部 操作半 (O/12) ・底部 側面数	胎土 (単位: mm) 焼成	色調 (内面/外面) (新面)	表面調査 内面/外面	分類 ・時期	文様・その他の (単位: cm)	回 復 度 番 号		
			出土区・ グリッド	遺構 番号	層位										
288	南土路	深鉢	SJB	SJB ②	—	(36.4)/2.2 /41.5/39.7	b. 8.1	やや粗(～ゆるい) 長石・チャート・黒物等 焼成物を多量に含む)	良好	10Y8R/2 10Y8R/3 10Y8/1	板ナブ・淮 い施乳・板 ナブ・淮 い施乳	第Ⅱ群 A1b	外面スラ付着	124	35
289	南X土路	深鉢	SJB	SJB ②	—	(38.0)/— /(18.7)/—	2.0. —	やや粗(～ゆるい) 長石・チャート・黒物等 焼成物を多量に含む)	良好	2.5Y4/2 10Y8T/1 2.5Y4/1	板ナブ・淮 い施乳・板 ナブ・淮 い施乳	第Ⅱ群 A1a		124	36
290	南土路	深鉢	SJB	SJB ② ①	1	34.0/ /(18.0)/—	9.5. —	やや粗(～ゆるい) 長石・石英等 焼成物を多量に含 む)	良好	2.5Y8/2 2.5Y8/2 2.5Y8/1	淮い施 板ナブ/淮 い施乳	第Ⅱ群 A1a		124	36
291	南土路	深鉢	SJB	SJB ②	—	—/—/(3.8)/—	—	やや粗(～ゆるい) 長石・石英等 焼成物を多量に含む)	良好	10Y8S/3 7.5Y8S/4 7.5Y8S/6	ナデ/条纹	第Ⅱ群 A2c	口縁部直線 削み(～切目・ D型)	125	—
292	南土路	深鉢	SJB	SJB ② a Via Via	—	(30.8)/— /(16.9)/—	2.8. —	粗(～ゆるい) 長石・チャート・ 焼成物を多量に含 む)	良好	10Y8S/1 10Y8T/3 10Y8/1	板ナブ/淮 い施乳(二枚 一部アーチ形 し・ケズリ)	第Ⅱ群 A2c	口縁部直線 削み(～火具押 し)、輪刷	125	36
293	南土路	袋	SJB	SJB ②	—	(13.8)/— /(4.4)/—	1.1. —	粗(～ゆるい) 長石・石英等 焼成物を少量含む)	良好	2.5Y3/1 2.5Y4/2 2.5Y6/2	ミガキ/ミ ガキ	第Ⅱ群 B3	口縁部外直 線(横削)	125	—
294	南X土路	浅鉢	SJB	SJB ①	1	—/—/(3.2)/—	1.0. —	やや粗(～ゆるい) 長石・石英等 焼成物を含む)	良好	10Y8S/2 10Y8S/2 10Y8S/4	ナデ/ナデ	第Ⅱ群 C3	口縁部小斜線 (辺位要)	125	—
295	南土路	深鉢	SJB	SJB ① AN18	— Via	32.4/— /(26.5)/—	9.0. —	やや粗(～ゆるい) 長石・石英等 焼成物を多量に含 む)	良好	10Y8L/2 10Y8L/1 10Y8L/2	ナデ/条纹 (～波浪)・ ケズリ	第Ⅱ群 A2c	口縁部直線 削み(～火具押 し)、波状外 面スラ付着 体部斜面コグ 付着	125	36
297	南土路	深鉢	SJB	—	—	29.4/— /(26.1)/—	11.5. —	やや粗(～ゆるい) 長石・石英等 焼成物を含む)	良好	10Y8R/2 10Y8R/3 10Y8R/1	板ナブ/淮 い施乳(～次 波)	第Ⅱ群 A2c	口縁部直線 削み(～火具 押し)、波状外 面スラ付着	125	36
298	南X土路	深鉢	SJB	SJB ① AN18	— Via	36.0/3.8/43. 6 /36.4	9.8. —	やや粗(～ゆるい) 長石・石英等 焼成物を多量に含 む)	良好	10Y8T/3 7.5Y8S/2 7.5Y8S/3	ナデ/淮 い施乳(～次 波)	第Ⅱ群 A3b	体部下平面 コグ付着	125	36
300	南土路	深鉢	SJ10	SJ10 SJ10 SJ10 SJ10 SJ10	1 — 1 1 a	30.7/2.4 /33.1/50.7	11.5. —	やや粗(～ゆるい) 長石・石英等 焼成物を多量に含 む)	良好	7.5Y8S/2 7.5Y8S/2 7.5Y8R/1	ナデ/体部 不規則・淮 い施乳(～次 波)・ケズリ	第Ⅱ群 A2c	口縁部直線 削み(～火具 押し)、体部外 面スラ付着	125	36
301	南土路	深鉢	SJ10	SJ10	— 1	27.3/4.1/36. 6 /27.6	11.0. +	粗(～ゆるい) 長石・チャート等 焼成物を多量に含 む)	良好	2.5Y6/2 2.5Y6/1 2.5Y6/1	不規則・淮 い施乳(～次 波)・ケズリ	第Ⅱ群 A2c	口縁部直線 削み(～火具 押し)、外 面スラ付着	126	36
302	南土路	深鉢	SJ11	—	—	28.4/— /(22.4)/—	6.0. —	粗(～ゆるい) 長石・チャート等 焼成物を多量に含 む)	良好	10Y8T/3 10Y8S/2 10Y8S/1	板ナブ/板 ナデ	第Ⅱ群 A5	口縁部直線 削み(～火具 押し)、工具 による押印、 外面部スラ、内 面コグ付着	126	36
303	南土路	深鉢	SJ11	—	—	—/—/(19.3) /—	—	粗(～ゆるい) 長石・チャート等 焼成物を多量に含 む)	良好	10Y8T/3 10Y8S/3 10Y8S/3	ナデ/淮 い施乳(～東 洋式工具)	第Ⅱ群 A5	外面スラ、内 面コグ付着	126	37
304	南土路	深鉢	SJ11	SJ11	— 2	32.0/2.0/36. 1/32.3	10.5. +	やや粗(～ゆるい) チャート等 焼成物を含む)	良好	10Y8S/1 10Y8S/1 10Y8S/1	板ナブ・ナ デ/淮(二 次波)・ ケズリ	第Ⅱ群 A2d	口縁部直線 削み(～火具 押し)、工具 による押印、 内面コグ付着	126	36
305	南土路	深鉢	SJ2	SJ2 ①	a	—/—/(7.8) /—	—	粗(～ゆるい) チャート等 焼成物をやや多く含 む)	良好	10Y8T/1 10Y8S/3 10Y8S/3	ナデ/淮 い施乳(～ 波)	第Ⅱ群 A2		129	38
306	南土路	浅鉢	SJ2	SJ2 ①	1	—/—/(1.5) /—	1.0. —	粗(～ゆるい) 長石・石英等 焼成物を多量に含 む)	良好	10Y8S/1 10Y8S/2 10Y8S/1	ミガキ/ミ ガキ	第Ⅱ群 C6	表面突起(編 0.6)	129	38
310	南土路	深鉢	SJ4	SJ4 ②	a	—/—/(3.9) /—	1.0. —	やや粗(～ゆるい) 長石・チャート等 焼成物をやや多く含 む)	良好	10Y8S/4 10Y8S/4 10Y8S/4	ナデ/ナ デ・淮(二 次波)・ 粘土層	第Ⅱ群 A1		129	—

表54 第3調査面出土土器観察表③

施 設 管 理 番 号	種別	番場	出土位置			口径部 底部 (cm)	口径部 底部 (cm)	出土 (単位: cm)	傾 倒	色調 (内面) (外面) (断面)	番面調査 内面/外面 (断面)	分類 ・ 特徴	文様・その他 (単位: cm)	保 持 者	回 収 番 号
			出土区・ グリット	法 機 番 号	層位										
311	鉄火上部	深鉢		SL4 ①	1-2	-/-/(5.1)/ —	1.0 -	赤(～±3°の チャート・露頭 をやや多く含む) (?)	良好	10YR6/3 10YR7/2 10YR7/3	ナデ/朱灰 (二枚貝)	第Ⅱ群 A2e	口縁周辺鉢 底み(二枚貝・ 内面)、口縁部 内面凹凸(底 0.5cm)	129	38
312	陶文土器	深鉢		SL4 ②	—	-/-/(1.9)/ —	1.0 -	赤(～±1.5°の チャート・露頭 をやや多く含む) (?)	良好	10YR5/2 10YR6/2 10YR5/2	ナデ/朱灰 (二枚貝か)	第Ⅱ群 A2f	口縁周辺鉢 底み(二枚貝) (?)	129	—
313	陶文土器	浅鉢		SL4 ①	3	-/-/(4.2)/ —	1.0 -	赤(～±2°の チャート・露頭 を多く含む)	良好	10YR6/2 7.5YR3/3 7.5YR3/3	ミダキ/朱 (一枚貝)	第Ⅱ群 C3	口縁部内面沈 積(底0.5cm)、 底 口縁	129	38
314	陶文土器	深鉢		SD62 ①	a	-/-/(3.7)/ —	1.5 -	やや赤(～±1.0°の 良石・赤茶等の 鉢を多く含む)	良好	2.5Y7/3 2.5Y7/3 2.5Y7/3	ナデ/ナデ (二枚貝)	第Ⅰ群 A1	3枚の横割沈 積(0.2cm)	129	38
315	陶文土器	深鉢か		SD62 ①	c	-/-/(3.6)/ —	1.0 -	赤(～±0.5°の 良石・チャート・ 露頭を多く含む)	良好	10YR6/2 10YR6/2 2.5Y5/3	ナデ/朱灰 (二枚貝)	第Ⅱ群 A1a	口縁部内面沈 積(底0.5cm)、 底 口縁	129	—
316	陶文土器	深鉢		SD62 ①	a	-/-/(3.9)/ —	1.0 -	やや赤(～±0.5°の 良石・赤茶等の 鉢を多く含む)	良好	2.5Y6/3 10YR7/3 2.5Y6/3	ナデ/朱灰 (二枚貝)・ 内面ナデ削	第Ⅱ群 A2d	口縁周辺鉢 底み(一枚貝・ 剥離)	129	—
317	陶文土器	深鉢		SD62 ①	a	-/-/(2.9)/ —	1.0 -	やや赤(～±0.5°の 良石等鉢形を含む) (?)	良好	10YR5/3 10YR5/2	ナデ/ナデ (二枚貝)	第Ⅱ群 A2e	口縁周辺鉢 底み(ハラコ・ 内面)、外 面スス付	129	—
318	陶文土器	深鉢		SD62 ①	a	-/-/(5.4)/ —	1.0 -	やや赤(～±1.0°の 良石・石英・ チャート等の鉢 を多く含む)	良好	2.5Y6/3 2.5Y6/3 2.5Y6/3	ナデ/朱灰 (二枚貝)	第Ⅱ群 A2e	口縁周辺鉢 底み(一枚貝・ ?)	129	38
319	陶文土器	深鉢		SD62 ①	c	-/-/(3.9)/ —	1.0 -	赤(～±0.5°の 良石・赤茶等の 鉢を多く含む)	良好	2.5Y7/1 10YR6/4 2.5Y7/1	ナデ/朱灰 (二枚貝)・ 内面ナデ削	第Ⅱ群 A2e	口縁周辺鉢 底み(二枚貝・ ?)	129	38
320	陶文土器	深鉢		SD62 ①	c	-/-/(3.3)/ —	1.0 -	赤(～±0.5°の 良石・赤茶等の 鉢を多く含む)	良好	10YR6/3 10YR6/3 2.5Y7/1	ナデ/朱灰 (一枚貝)・ 内面ナデ削	第Ⅱ群 A2e	口縁周辺鉢 底み(一枚貝・ ?)	129	38
321	陶文土器	深鉢		SD62 ①	1	-/-/(3.6)/ —	1.0 -	やや赤(～±0.5°の 良石・石英・ チャート等の鉢 を多く含む)	良好	10YR3/2 10YR4/1 10YR3/2	ナデ/朱灰 (二枚貝)	第Ⅱ群 A2e	口縁周辺鉢 底み(ハラコ・ ?)、口 縁部内面沈 積(0.1cm)、 口縁部外面スス付	129	38
322	陶文土器	深鉢		SD62 ①	a	-/-/(10.9) /-	1.0 -	赤(～±0.5°の 良石・赤茶等の 鉢を多く含む)	良好	2.5Y5/3 10YR7/3 2.5Y6/1	ナデ/ナ デ・朱灰(二 枚貝)	第Ⅱ群 A2a	口縁周辺に凹 部	129	38
323	陶文土器	深鉢		SD62 ①	a	-/-/(4.7)/ —	1.0 -	やや赤(～±0.5°の 良石・赤茶等の 鉢を多く含む) (?)	良好	2.5Y6/2 2.5Y5/3 2.5Y6/2	ナデ/ナ デ・ケズリ	第Ⅱ群 A2e	口縁周辺外 面に強い横ナ デ	129	—
324	陶文土器	深鉢		SD62 ①	a	(34.43) / (4.03)	1.8 -	やや赤(～±0.5°の 良石・赤茶等の 鉢を多く含む)	良好	2.5Y5/3 10YR7/4 2.5Y4/1	ナデ/ナ デ・体軸調 整は不明	第Ⅱ群 A2e		129	38
325	陶文土器	深鉢		SD62 ②	a	-/-/(3.7)/ —	1.0 -	赤(～±0.5°の 良石・赤茶等の 鉢を多く含む)	良好	2.5Y7/2 10YR5/3 2.5Y7/1	ナデ/ナデ (二枚貝)	第Ⅱ群 A6	口縁部厚 ・直取りなし	129	—
326	陶文土器	深鉢		SD62 ①	1	-/-/(4.4)/ —	1.0 -	赤(～±0.5°の 良石・チャート等 の鉢を多く含む)	良好	2.5Y6/1 10YR6/3 2.5Y4/1	ミガキか/・ ナデ・赤茶	第Ⅱ群 A2b	陶文土器(底 0.8cm)	129	38
327	陶文土器	深鉢		SD62 ①	a	-/-/(2.1)/ —	1.0 -	やや赤(～±0.5°の 良石等鉢形を含む) (?)	良好	10YR3/2 10YR4/2 2.5Y6/4	ミガキ/ミ ガキ	第Ⅱ群 C	口縁部外 面にハラコ・ 切妻口付近 のハラコか、 口縁部内面 底基部(底0.5cm) 外面	129	38
328	陶文土器	括口土器 か		SD62 ①	c	-/-/(3.1)/ —	—	やや赤(～±0.5°の 良石等鉢形を含む) (?)	良好	2.5Y6/1 SYR5/3 10YR6/2	相オサエ/ 不明	第Ⅱ群 B	括口の刃間に 底基部(底0.5cm) 外・内面付	129	38
329	陶文土器	深鉢		SK103 ①	a	-/-/(5.6)/ —	1.0 -	やや赤(～±0.5°の 良石・石英・ チャート等の鉢 を多く含む) (?)	良好	10YR5/2 10YR4/2 10YR5/2	ナデ/朱灰 (二枚貝)	第Ⅱ群 A2c	口縁周辺鉢 底み(二枚貝・ 剥離)、体軸部 外・内面付	134	39
330	陶文土器	深鉢	SK103 ②	SK103 ③	1	-/-/(12.0) /-	1.0 -	やや赤(～±0.5°の 良石・石英・ チャート等の鉢 を多く含む) (?)	良好	10YR5/2 10YR4/2 10YR5/2	ナデ/朱灰 (二枚貝)	第Ⅱ群 A2c	口縁周辺鉢 底み(二枚貝・ 剥離)、体軸部 外・内面付	134	39

表55 第3調査面出土土器観察表④

通 数 番 号	種別	器種	出土位置			口縁部 直径 /高さ(最大径 (cm))	口縁部 残存率 (%)	胎土 (単位: mm)	焼成 度	色調 (内面) (外面) (断面)	基面調査 内面/外面	分類 ・時期	文様・その他の (単位: cm)	説 明	通 数 番 号
			出土区・ グリッド	遺構 番号	層位										
333	縄文土器	深鉢	SK104 ②	a	-/-/(6.0)/-	1.0・-	やや粗(～6.1)の 石器・チャート等 等の粒を少含む	LOYRA/1 LOYRA/2 LOYRA/3	良好	ナデ・丸い 朱塗/ナデ	第Ⅱ群 A1b	口縁部差統 間み(へり前 み・2.7cm、外 面スス付着)	134	39	
334	縄文土器	甕 立たは 柱口千溝	SK104 ①	1	-/-/(3.0)/-	1.0・-	焼(～6.0)の臺形 等の粒を代表的	LOYRA/2 LOYRA/3	良好	ナデ/ミガ キ・底凹溝 調文	第Ⅱ群 D	表面調査: 区 域内底(在縄編 0.3、調文 外面序 部、後7.7に露 頭が立つ)	135	39	
335	縄文土器	深鉢	SK105 ②	a	-/-/(2.4)/-	1.0・-	焼(～6.2)の チャート等砂粒 を多量含む	LOYRA/1 LOYRA/2 LOYRA/3	良好	ナデ・粗い 朱塗/ナデ	第Ⅱ群 A1a	136	-		
336	縄文土器	浅鉢か	SK106 ②	a	-/-/(3.3)/-	1.0・-	やや粗(～6.1)の 石器・黄赤等砂 粒を含む	LOYRA/2 LOYRA/3	良好	ナデ/ナ デ・ミガキ	第Ⅱ群 C	137	-		
339	縄文土器	深鉢	SK106 ⑤	1	-/-/(12.0)/-	1.0・-	やや粗(～6.3)の 石器・黄赤等砂 粒を多量に 含む	LOYRA/2 LOYRA/3	良好	ナデ/ナ デ・丸い朱 直	第Ⅱ群 A1b	口縁部差統 間み(へり直 しによる神正)	138	39	
340	縄文土器	浅鉢か	SK106 ②	/	-/(2.3)/-	1.0・-	やや粗(～6.2) 石器等砂粒を含 む	LOYRA/1 LOYRA/2 LOYRA/3	良好	ナデ/ナデ	第Ⅱ群 C	139	-		
341	縄文土器	浅鉢か	SK106 ②	a	-/-/(1.6)/-	1.0・-	焼(～6.1)の 砂粒をわずかに含 む	LOYRA/1 LOYRA/2 LOYRA/3	良好	ナデ/半燒 鉄鋼灰	第Ⅱ群 D	外面序	140	39	
343	縄文土器	深鉢	SK107 ①	1	-/-/(4.5)/-	1.0・-	焼(～6.1)の 石器・石英等砂 粒を多量に含む	LOYRA/1 LOYRA/2 LOYRA/3	良好	ナデ/ケズ リ	第Ⅱ群 A1b	口縁部差統 間み(へり直 し・2.0cm、外 面スス付着)	141	39	
344	縄文土器	甕 立たは 柱口千溝	SK110 ②	1-2	-/-/(2.7)/-	1.0・-	焼(～6.1)の石器 をわずかに含 む	LOYRA/1 LOYRA/2 LOYRA/3	良好	ナデ・ミ ガキ・底凹 溝	第Ⅱ群 D	区域内底(2 年・4.6m)、調 文、外側斜 面、文様底部	142	39	
346	縄文土器	深鉢	SK111	a	(37.8) / (6.5) / -	1.5・-	やや粗(～6.1) 石器・黄赤等砂 粒を少量含む	LOYRA/1 LOYRA/2 LOYRA/3	良好	ナデ・抹 ナデ/底凹 溝(一 枚貝)	第Ⅱ群 A2a	口縁部差統 間み(へり直 し・2.0cm、外 面スス付着)	143	39	
346	縄文土器	深鉢	SK111 ②	1	-/-/(4.1)/-	1.0・-	やや粗(～6.3) 石器・黄赤等砂 粒を含む	LOYRA/2 LOYRA/3	良好	ナデ/朱塗 (一枚貝)	第Ⅱ群 A2b	口縁部差統 間み(へり直 し・2.0cm、外 面スス付着)	144	39	
347	縄文土器	豆子ル ア 土器	SK111	a	(10.7) / (6.5) / -	2.0・-	焼(～6.1)の 石器・石英等砂 粒を少量含む	LOYRA/2 LOYRA/3	良好	ナデ/朱塗 (二枚貝)	第Ⅱ群 B	口縁部差統 間み(へり直 し・2.0cm、外 面スス付着)	145	39	
348	縄文土器	深鉢	SK115 ④	1	(21.0) / 2.3 (18.0) / -	5.0・1	やや粗(～6.2) 石器・石英等砂 粒を含む	LOYRA/1 LOYRA/2 LOYRA/3	良好	ボタナ/ケ ズリ・板ナ ゲ・一 枚貝・朱 塗(二枚貝)	第Ⅱ群 A2c	口縁部差統 間み(二枚貝 ・外面スス内面 コグ付)	146	38	
349	縄文土器	深鉢	SK115 ①	a	-/-/(5.3)/-	1.0・-	やや粗(～6.2) 石器・黄赤等砂 粒を多量に含む	LOYRA/1 LOYRA/2 LOYRA/3	良好	ナデ/朱塗 (一枚貝)	第Ⅱ群 A2c	口縁部差統 間み(一枚貝 ・2.0cm)	147	39	
350	縄文土器	深鉢	SK115 ②	a	-/-/(5.3)/-	1.0・-	やや粗(～6.1) 石器・黄赤等砂 粒を含む	LOYRA/1 LOYRA/2 LOYRA/3	良好	ボタナ/朱 塗(一枚貝)	第Ⅱ群 A2c	口縁部差統 間み(一枚貝 ・2.0cm)	148	39	
351	縄文土器	深鉢	SK115 ②	1	-/-/(3.4)/-	1.0・-	やや粗(～6.1) 石器・黄赤等砂 粒を多量に含 む	LOYRA/1 LOYRA/2 LOYRA/3	良好	木明/不明	第Ⅱ群 A2b	口縁部差統 間み(へり直 し・2.0cm、削 除・痕跡 D.0、0.6)	149	39	
352	縄文土器	甕	SK115 ④	1	(15.6) / (6.1) / -	2.0・-	やや粗(～6.1) 石器・黄赤等 砂粒を多量に 含む	LOYRA/2 LOYRA/3 LOYRA/3	良好	板ナ ゲ/ナ デ・ミ ガキ	第Ⅱ群 B	外面スス付着	150	39	
353	縄文土器	深鉢	SK116 ①	a	(14.6) / (6.6) / -	1.0・-	やや粗(～6.1) 石器・黄赤等 砂粒を多量に 含む	LOYRA/2 LOYRA/3 LOYRA/3	良好	ミガ キ・ナ デ・ミ ガキ	第Ⅱ群 C	外面スス付着	151	39	
354	縄文土器	深鉢	SK116 ①	a	(17.8) / (6.8) / -	1.4・-	やや粗(～6.2) 石器・黄赤等 砂粒を多量に 含む	LOYRA/2 LOYRA/3 LOYRA/3	良好	ミガ キ/ミ ガキ・ケ ズリ	第Ⅱ群 C3	段次上層(4層 目)	152	39	

表56 第3調査面出土土器観察表⑤

通 数 番 号	種別	番号	出土位置			口径5 底径3 (mm)	出土 (単位: mm)	積成 個体数	色調 (内面 (外面)) (黒面)	器皿複数 内面/外面 (黒面)	分類 ・時期	文様・その他 (単位: cm)	通 数 番 号	
			出土区 グリット	法規 番号	層位									
355	調文土器	深鉢	SK116 ① SK116 ②	a a	-/(4.6) /(5.7) / -	-	0	やや丸(-~φ1.0) 美石・石英・黒 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	10YR4/1 10YR5/3 10YR5/3	板ナデ・輪 模様/ケズ リ	第Ⅱ群 A2a		135 39
358	調文土器	深鉢	SK117 ②	a	-/-/(4.3) - / -	1.0 -	やや丸(-~φ1.0) 美石・石英・黒 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	10YR4/2 7. SYR6/4 10YR5/3	ナデ/ナデ ナデ/ナデ ナデ/ナデ	第Ⅱ群 A2a	口縁端部透続 輪み(へフ羽 み、2重)	135 39	
359	調文土器	深鉢	SK11	-	-/-/(9.3) - / -	1.0 -	丸(-~φ0.8) 美石・チャート・ 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	10YR6/4 10YR6/3 2. SYR1/1	ナデ・斑ナ サエ/不 規則・斑オナ ス	第Ⅱ群 A1b		137 40	
360	調文土器	深鉢	SK3	-	-/-/(4.2) - / -	1.0 -	やや丸(-~φ1.0) 美石等を多量に 含む)	良好 良好 良好	7. SYR5/6 10YR4/2 2. SYR1/1	ナデ/粗 ナデ	第Ⅱ群 A1a	口縁端部透続 輪み(へフ羽 み、2重)	137 -	
361	調文土器	深鉢	SK3	-	(19.4) / - /(11.6) / -	2.5 -	やや丸(-~φ1.0) 美石等を多量に 含む)	良好 良好 良好	7. SYR4/2 10YR4/2 2. SYR1/1	板ナデ/ケ ズリ・全強 (二枚貝)	第Ⅱ群 A2c	口縁端部透続 輪み(二枚貝 刺繍)。外周ス ト付	137 39	
362	調文土器	深鉢	AN19	-	-/-/(6.2) - / -	1.3 -	やや丸(-~φ1.0) 美石・石英・黒 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	2. EYR6/2 10YR7/1 SYR1/1	ナデ/朱強 (二枚貝)	第Ⅱ群 A2a	口縁端部透続 輪み(二枚貝 ?)	137 40	
363	調文土器	深鉢	SK3	-	-/-/(14.2) - / -	1.0 -	やや丸(-~φ1.0) 美石・石英・ 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	10YR7/2 10YR6/2 10YR6/2	ナデ/ナ デ・ケズリ	第Ⅱ群 A3c	外周ス付裏	137 40	
364	調文土器	深鉢	SK3	-	(30.0) / - /(6.9) / -	1.8 -	やや丸(-~φ1.0) 美石等を多量に 含む)	良好 良好 良好	10YR4/1 SYR6/6 10YR5/2	ナデ・斑ナ サエ・斑オナ ス・朱強	第Ⅱ群 A21	肩口突起(二枚 貝押印、楕 1.3)。外周ス ト付裏	137 40	
365	調文土器	深鉢	SK3	-	(29.0) / - /(11.6) / -	1.0 -	やや丸(-~φ1.0) 美石・石英・ 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	10YR7/2 10YR6/4 10YR6/4	ナデか・版 ナデ・ケズ リ	第Ⅱ群 A2a	肩口突起(二枚 貝押印、楕 1.1)。	137 40	
366	調文土器	深鉢	SK3	-	-/-/(4.7) - / -	1.0 -	やや丸(-~φ1.0) 美石・石英・ 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	10YR6/3 10YR6/3 10YR6/3	ナデ/朱強 (二枚貝か)	第Ⅱ群 A21	肩口突起(二枚 貝押印、楕 1.1)	137 40	
367	調文土器	深鉢	SK3	-	-/-/(2.9) - / -	1.0 -	やや丸(-~φ1.0) 美石・石英・ 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	2. SYR7/2 10YR7/2 10YR7/2	ナデ/朱強 (二枚貝か)	第Ⅱ群 A21	肩口突起(二枚 貝押印、楕 1.3)	137 -	
368	調文土器	深鉢	SK3	-	-/-/(3.1) - / -	1.0 -	やや丸(-~φ1.0) 美石・チャート・ 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	10YR5/1 2. EYR4/4 7. SYR4/1	ナデ/朱強 (一枚貝か)	第Ⅱ群 A21	肩口突起(一枚 貝押印、楕 1.0)	137 40	
369	調文土器	深鉢	SK3	-	(34.8) / - (12.7) / -	1.2 -	やや丸(-~φ1.0) 美石等を多量に 含む)	良好 良好 良好	10YR7/3 10YR7/3 10YR4/1	板ナデ・ジ オサエ・版 ナデ・ケズ リ	第Ⅱ群 A21	肩口突起(ハフ 羽み・ジオ・版 0.8)。外周ス ト付裏	137 40	
370	調文土器	深鉢	SK3	-	-/-/(4.5) - / -	1.0 -	やや丸(-~φ1.0) 美石等を多量に 含む)	良好 良好 良好	2. EYR2/2 10YR7/3 10YR4/1	ナデ/ナデ ナデ/ナデ ナデ/ナデ	第Ⅱ群 A21	肩口突起(ハフ 羽み・ジオ・版 0.9)	137 40	
371	調文土器	深鉢	SK3	-	-/-/(11.0) - / -	1.0 -	やや丸(-~φ2.0) 美石・石英・ 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	10YR5/2 10YR5/2 10YR2/1	ナデ・板ナ デ/ケズリ	第Ⅱ群 A3a	肩口突起(一枚 貝押印、楕 1.0)。外周ス ト付裏	138 40	
372	調文土器	深鉢	SK3	-	-/-/(6.0) - / -	1.0 -	やや丸(-~φ1.0) チャート・ 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	10YR7/1 10YR7/1 10YR7/1	板ナデか/ ナデ・ケズ リ	第Ⅱ群 A3a	肩口突起(一枚 貝押印、楕 0.9)	138 40	
373	調文土器	深鉢	SK3	-	-/-/(4.0) - / -	1.0 -	やや丸(-~φ1.0) 美石・石英・ 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	2. EYR6/2 2. EYR6/2 2. EYR4/1	板ナデか/ ナデ・ケズ リ	第Ⅱ群 A3a	肩口突起(楕 0.9)。	138 40	
374	調文土器	深鉢	SK3	-	(32.0) / - (28.3) / -	3.8 -	やや丸(-~φ2.0) 美石・チャート・ 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	10YR7/2 10YR7/2 10YR7/2	板ナデ・ジ オサエ・ナ デ・ケズリ・ ズカ付付帶	第Ⅱ群 A2j	肩口突起(一枚 貝押印、楕 1.0)。外周ス ト付裏	138 38	
375	調文土器	深鉢	SK3	-	-/-/(4.4) - / -	1.0 -	やや丸(-~φ1.0) 美石・石英・ 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	10YR4/1 10YR5/2 10YR5/2	ナデ/朱強 (一枚貝)	第Ⅱ群 A2j	肩口突起(一枚 貝押印、楕 0.7)。二重 壁か	138 40	
376	調文土器	深鉢	SK3	-	-/-/(2.6) - / -	-	やや丸(-~φ1.0) 美石・チャート・ 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	10YR6/2 7. SYR4/4 7. SYR4/4	ナデか/ナ デ/ナデ	第Ⅱ群 A2j	肩口突起(一枚 貝押印、楕 0.7)。口縁 部透続剥剝(不 明瞭)	138 40	
377	調文土器	深鉢	SK3	-	-/-/(3.4) - / -	1.0 -	やや丸(-~φ1.0) 美石・石英・ 母母等を多量に 含む)	良好 良好 良好	10YR6/2 10YR7/3 10YR7/3	ナデ/ナデ ナデ/ナデ ナデ/ナデ	第Ⅱ群 A3a	肩口突起(一枚 貝押印、楕 1.0)。口縁 部透続剥剝(不 明瞭)	138 -	

表57 第3調査面出土土器観察表⑥

出 土 遺 跡 編 號	種 別	層 位	出土位置		口徑 /高さ /底面 (最大幅 (m))	口縁部 残存率 (%)	動土 (単位: m)	積 分	色 調 (内面) (外面)	器面調整 内面/外面	分類 ・時期	文様・その他 (単位: cm)	海 岡 書 号
			出土区 グリッド	遺構 番号									
378	縄文土器	深鉢か、	NB3	—	—/—/(4.3) /—	— * —	やや歪(～φ2.0) 良石・チャート・ ・白母等砂粒 を含む)	BY3/1 BY3/6 BY7/1	板ナガ/柔 軟(工具不 明)・ミガキ	第Ⅱ群 A5	条痕の工具2箇 所あり(2箇半 位のものとハ ケ状のものの 外室ス付)	138	41
379	縄文土器	壺	NB3	—	(9.2) /— (3.4) /—	1.0 * —	やや歪(～φ2.0) 良石・チャート・ ・白母等砂粒 を含む)	BY3/6 BY3/6 2.5Y7/1	ナゲ・滑 キ/ミガキ	第Ⅱ群 B1		138	41
380	縄文土器	壺か	NB3	—	—/—/(3.7) /—	— * —	歪(～φ1.9) 良石・白母等砂 粒を少許含む)	Z.5Y4/1 Z.5Y7/2 Z.5Y6/1	ナゲ/ナ ゲ・ケツリ	第Ⅱ群 B	擦痕による 板模様	138	39
381	縄文土器	浅鉢	NB3	—	(17.0)/(6.0) (4.1) /—	3.1 * 1	やや歪(～φ2.0) 良石・白母等砂 粒を含む)	BY3/2 BY3/2 2.5Y4/1	ミガキ/ナ ゲ・滑オナ シ(工具)・ ミガキ	第Ⅱ群 C1		138	41
382	縄文土器	浅鉢	NB3	—	(18.0)/7.5 (15.0) /—	1.0 * 1	やや歪(～φ2.0) 良石・白母等砂 粒を多量に含 む)	10Y3/6 10Y7/4 2.5Y6/1	滑ナゲ・板 ナゲ・ミガ キ/ナゲ	第Ⅱ群 C2	外茎ス付 壺・口縁内 面コロコロ 底堅厚・櫛狀 年造状の压痕	138	41
383	縄文土器	浅鉢	NB3	—	(33.0) /— (6.3) /—	1.0 * —	やや歪(～φ2.0) 良石・白母等砂 粒を含む)	10Y3/5 NO/3	ナゲ・ミガ キ/ナゲ・ ミガキ	第Ⅱ群 C3	口縁内面凹 溝(2条)・幅 狭	138	41
384	縄文土器	浅鉢	NB3	—	[37.2) /— (6.8) /—	1.2 * —	やや歪(～φ2.0) 良石・白母等砂 粒を含む)	Z.5Y6/3 Z.5Y6/5 2.5Y6/1	ナゲ・ミガ キ/ナゲ・ ミガキ	第Ⅱ群 C4	口縁内面凹 溝(2条)・小 底沈	138	41
385	縄文土器	深鉢	NB3	—	(15.0)/6.6 (11.0) /—	4.9 * 1	歪(～φ2.0)の石 を少々。 の石英・白母等 砂粒を多量に含 む)	7.5Y3/1 10Y3/2 2.5Y3/1	ナゲ・ミガ キ(周面部の み)/ミガキ ナゲ・ミガ キ・滑ナゲ ・ミガキ	第Ⅱ群 C4		138	41
386	縄文土器	浅鉢	NB3	—	[37.0) /— (9.5) /—	1.4 * —	歪(～φ2.0)の石 を少々。 白母等砂粒 を含む)	Z.5Y3/1 10Y3/1 10Y3/1	ミガキ/ミ ガキ	第Ⅱ群 C5	口縁内面凹 溝(2条)・時 間深・外茎ス付	139	41
387	縄文土器	浅鉢	NB3	—	24.0/(8.1) (10.0) /— (25.1) /—	6.4 * 0	歪(～φ1.9) 良石・白母等砂 粒を多量に含 む)	10Y3/2 10Y3/2 10Y3/2	ミガキ/ミ ガキ・ケツ リ後ナゲ(底 面のみ)	第Ⅱ群 C5		139	38
388	縄文土器	浅鉢	AN19 AN29	Vla Vla	— /—/(10.2) (7.0) /—	— * 0	歪(～φ2.0)の石 を多く含む)	10Y3/5 10Y3/5 M/4	ナゲ・ミガ キ/ミ ガキ・ケツ リ	第Ⅱ群 C5	内茎ス付	139	—
389	縄文土器	浅鉢	NB3	—	(24.6) /— (5.0) /—	1.3 * —	やや歪(～φ1.9) 良石をねじ込 み含む)	BY3/2 BY3/2 2.5Y3/1	ミガキ/ミ ガキ	第Ⅱ群 C	腹斜状斜面 文・横波立花 (M.3)尾平 (内面から底盤 0.5)	139	41
390	縄文土器	浅鉢	NB3	—	—/—/(4.3) /—	1.0 * —	歪(～φ2.0) 良石・白石・白 母等砂粒を含 む)	10Y7/5 10Y7/5 10Y7/5	ナゲ/ミガ キ	第Ⅱ群 D	口縁外側疣 突・横波立花 (M.3)尾平 (内面から底盤 0.5)	139	41
391	縄文土器	浅鉢か	NB3	—	—/—/(1.9) /—	1.0 * —	歪(～φ2.0) 良石・白母等砂 粒を少許含む)	Z.5Y3/1 Z.5Y3/1 Z.5Y3/2	ミガキ/ナ ゲ	第Ⅱ群 D	腹斜・平行底 盤(M.2)	139	41
392	縄文土器	浅鉢	NB3	—	-/2.8/(5.3) /—	— * 1	やや歪(～φ2.0) 良石・白石・白 母等砂粒を含 む)	10Y6/2 10Y6/2 10Y6/2	ナゲ/ケ ツリ	第Ⅱ群 E7.5		139	—
393	縄文土器	浅鉢	NB3	—	-/5.9/(19.3) /—	— * 1	やや歪(～φ2.0) 良石・チャート・ ・白母等砂粒を 多量に含む)	10Y8/3 2.5Y7/2 2.5Y6/1	板ナゲ・稚 形・ミガキ/ケ ツリ	第Ⅱ群 E7.5	外茎ス付 壺・内面コロ 付壺	139	41
394	縄文土器	深鉢か	NB3	—	-/(9.2) (4.8) /—	— * 0	やや歪(～φ2.0) 良石・白石・白 母等砂粒を多量 に含む)	10Y8/1 10Y7/2 10Y7/2	板ナゲ/不 明(摩滅)	第Ⅱ群 E7.5	内面コロ付壺	139	—
395	縄文土器	深鉢	NB3	—	-/(10.0) (2.0) /—	— * 0	やや歪(～φ2.0) 良石・白石・白 母等砂粒を多量 に含む)	BY3/1 10Y7/3 BY3/1	ナゲ/ミ ガキ	第Ⅱ群 E7.5		139	—
396	縄文土器	深鉢	NB3	—	-/(5.5) /—	1.0 * —	やや歪(～φ2.0) 良石・白石・白 母等砂粒を多量 に含む)	10Y5/3 10Y5/3 10Y3/1	マメツ/—	第Ⅱ群 E10.5	口縁周辺縫 隙	140	42

表58 第3調査面出土土器観察表⑦

発 現 場 名	推 測 地 域	層 位	出土位置		口部 残存 率(%)	口部 残存 率(%)	出土 量(単 位: m ³)	出土 量(単 位: m ³)	性 質	形 成	色 調 (内面 (外 面) (断面))	蓄 留 部 位 (内面 外 面)	分 類	文 様 (単 位: cm)	出 土 年 代
			出土区 域 (グリット)	遺構 番号											
399 調文土器	深林	A012	—	Vta	—/(—/(5.2)/—)	1.0+~	やや灰(～6.2) 灰石・石英・ 雲母等砂物を多く 含む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	白 黄 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	いい朱色 (板ナメ)	第Ⅱ群 K1b	41b	—	
400 調文土器	深林	A012	—	Vta	—/(—/(4.3)/—)	1.0+~	やや灰(～6.1) 灰石・石英等砂 物を多く含む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	白 黄 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・朱色 ナデ・赤色 (二枚貝)	第Ⅱ群 K2a	41c	—	
401 調文土器	深林	A012	—	Vta	—/(—/(1.9)/—)	1.0+~	やや灰(～6.1) 灰石・石英等砂 物を多く含む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	白 黄 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・朱色 ナデ・赤色 (二枚貝)	第Ⅱ群 K2c	41d	—	
402 調文土器	深林か	A010	—	Vta	—/(—/(2.6)/—)	1.0+~	やや灰(～6.1) 灰石・石英等砂 物を多く含む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	白 黄 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・ナ デ・ケズリ	第Ⅱ群 K3c	41e	—	
403 調文土器	深林	A010	—	Vta	(29.2)/—/(8.4)/—	1.6+~	やや灰(～6.2) 灰石・石英等砂 物を多く含む(?)	0.092/2 0.092/6 0.092/12	白 黄 灰	0.092/2 0.092/6 0.092/12	ミガキナ ナ・ケズリ	第Ⅱ群 K4	41f	49	
404 調文土器	西林か	A010	—	Vta	—/(—/(3.2)/—)	1.0+~	やや灰(～6.1) 灰石・チャート等 を含む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	白 黄 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ミガキナ ナ・ケズリ	第Ⅱ群 K3d	41g	—	
405 調文土器	深林	A012	—	Vta	—/(—/(2.3)/—)	1.0+~	やや灰(～6.2) 灰石等砂物を少 なく含む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	白 黄 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ミガキナ ミガキ	第Ⅱ群 C	41h	—	
406 調文土器	西林か	A012	—	Vta	—/(—/(5.5)/—/(3.2)/—)	—~1	やや灰(～6.2) 灰石等砂物を含 む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	白 黄 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・版ナ ナ・ケズリ	第Ⅱ群 C	41i	—	
407 調文土器	不明	A012	—	Vta	—/(—/(3.6)/—)	—~1	やや灰(～6.1) 灰石等砂物を含 む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	白 黄 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・葉輪 ナデ・輪火	第Ⅱ群 D	41j	51	
408 調文土器	不明	A012	—	Vta	—/(—/(1.7)/—)	—~1	透(～6.1)の砂物 をわずかに含 む(?)	0.278/2 0.278/6 0.278/12	透 白 灰	0.278/2 0.278/6 0.278/12	ミガキナ ミガキ	第Ⅲ群 D	41k	61	
409 調文土器	深林	A011	—	Vta	—/(1.1)/(3.1)/—	—~1	やや灰(～6.2) 灰石等砂物を含 む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	白 黄 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	半磨・不削 K7	第Ⅱ群 K7	41l	50	
410 調文土器	深林	A014	—	Vta	—/(—/(2.5)/—)	1.0+~	透(～6.1)の チャート等砂物 を含む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	透 白 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・ミガ キ	第Ⅱ群 K1a	41m	—	
411 調文土器	深林	A013	—	Vta	—/(—/(2.7)/—)	1.0+~	やや灰(～6.2) チャート等砂物 を含む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	透 白 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・ナデ ナ・ケズリ	第Ⅱ群 K1b	41n	—	
412 調文土器	深林	A013	—	Vta	—/(—/(4.4)/—)	1.0+~	やや灰(～6.2) 灰石・石英・ 雲母等砂物を含 む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	透 白 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	いい朱色 (板ナメ)	第Ⅱ群 K1c	41o	—	
413 調文土器	深林	A014	—	Vta	—/(—/(3.8)/—)	1.0+~	やや灰(～6.1) 灰石・石英・ 雲母等砂物を含 む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	透 白 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・ケズ リ	第Ⅱ群 K2	41p	42	
414 調文土器	深林	A013	—	Vta	—/(—/(5.6)/—)	1.0+~	やや灰(～6.2) 灰石等砂物を多 く含む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	透 白 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・版ナ ナ・ケズリ	第Ⅱ群 K1d	41q	—	
415 調文土器	深林	A013	—	Vta	—/(—/(2.7)/—)	1.0+~	やや灰(～6.2) チャート等砂物 を含む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	透 白 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	半磨・不削 K7	第Ⅱ群 K7	41r	—	
416 調文土器	深林	A013	—	Vta	—/(—/(4.4)/—)	1.0+~	やや灰(～6.2) 灰石・石英・ 雲母等砂物を含 む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	透 白 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	いい朱色 (板ナメ)	第Ⅱ群 K1e	41s	—	
417 調文土器	深林	A014	—	Vta	—/(—/(3.8)/—)	1.0+~	やや灰(～6.1) 灰石・石英・ 雲母等砂物を含 む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	透 白 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・ケズ リ	第Ⅱ群 K2	41t	42	
418 調文土器	深林	A013	—	Vta	—/(—/(5.6)/—)	1.0+~	やや灰(～6.2) 灰石等砂物を多 く含む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	透 白 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・版ナ ナ・ケズリ	第Ⅱ群 K1d	41u	43	
419 調文土器	深林	A013	—	Vta	—/(—/(7.2)/—)	1.0+~	やや灰(～6.1) 灰石・チャート 等砂物を含む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	透 白 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・朱色 (板ナメ)	第Ⅱ群 K2c	41v	43	
420 調文土器	深林	A013	—	Vta	—/(—/(6.0)/—)	1.0+~	やや灰(～6.2) 灰石・チャート 等砂物を多く含 む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	透 白 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・朱色 (板ナメ)	第Ⅱ群 K2b	41w	43	
421 調文土器	深林	A013	—	Vta	(25.0)/—/(8.9)/—	1.7+~	やや灰(～6.1) 灰石・チャート 等砂物を多く含 む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	透 白 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	版ナデ・ 版ナデ・ケズ リ	第Ⅱ群 K2c	41x	43	
422 調文土器	深林	A013	—	Vta	(18.0)/—/(5.5)/—	1.5+~	やや灰(—)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	透 白 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・朱色 (板ナメ)	第Ⅱ群 K2c	41y	—	
423 調文土器	深林	A014	—	Vta	(20.0)/—/(5.9)/—	1.2+~	やや灰(～6.2) 灰石・チャート 等砂物を多く含 む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	透 白 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・朱色 (板ナメ)	第Ⅱ群 K2c	41z	—	
424 調文土器	深林	A013	—	Vta	—/(—/(8.7)/—)	1.1+~	やや灰(～6.2) 灰石・チャート 等砂物を多く含 む(?)	0.078/2 0.078/6 0.078/12	透 白 灰	0.078/2 0.078/6 0.078/12	ナデ・朱色 (板ナメ)	第Ⅱ群 K2b	41aa	—	

表59 第3調査面出土土器観察表⑧

地質番号	種別	種類	出土位置			口徑/底径 ×標高/最深 (cm)	口径部 被覆在存 (Y/I)	被覆 体数	出土 (単位: m)	積成	色版 (内面) (外面)	表面剥離 部のみ(内面/ 外面)	分類・ 時期	文様・その他 (単位: cm)	国 籍番号
			出土区 グリット	直横 番号	層位										
420	縄文土器	深鉢	A013	—	Vla	(33.6) /— (18.7) /—	1.0 ×—	やや粗(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む	良好	10YR7/2 10YR7/4 10YR8/1	ナデ/条痕 (二枚貝)、 ケズリ	良且群 A2c	口縁端部剥離 部のみ(二枚貝、 印字)	141	43
426	縄文土器	深鉢	A013	—	Vla	— /—(9.6) /—	1.0 ×—	やや粗(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む	良好	10YR7/2 10YR7/4 10YR8/1	ナデ/条痕 (二枚貝)、 ケズリ	良且群 A2c	口縁端部剥離 部のみ(二枚貝、 印字)、外縁部 付着	141	43
427	縄文土器	深鉢	A014	—	Vla	— /—(5.0) /—	1.0 ×—	悪(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む	良好	10YR5/2 10YR5/3 10YR5/8	ナデ/条痕 (一枚貝)	良且群 A2c	口縁端部剥離 部のみ(一枚貝、 印字)	141	—
428	縄文土器	深鉢	A013	—	Vla	(24.0) /— (15.5) /—	1.0 ×—	やや粗(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む	良好	10YR5/2 10YR5/3 10YR8/1	ナデ/条痕 (一枚貝)、 ケズリ	良且群 A2c	口縁端部剥離 部のみ(一枚貝、 印字)	141	44
429	縄文土器	深鉢	A014	—	Vla	— /—(4.5) /—	1.0 ×—	やや粗(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む	良好	10YR6/2 10YR6/3 10YR8/2	ナデ/条痕 (二枚貝)	良且群 A2c	口縁端部剥離 部のみ(二枚貝、 印字)	141	—
430	縄文土器	深鉢	A014	—	Vla	— /—(3.7) /—	1.0 ×—	やや粗(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む	良好	10YR4/2 10YR4/3 10YR7/2	ナデ/条痕 (一枚貝)	良且群 A2c	口縁端部剥離 部のみ(一枚貝、 印字)	141	—
431	縄文土器	深鉢	A014	—	Vla	— /—(4.3) /—	1.0 ×—	やや粗(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む	良好	10YR7/2 2.5YT/3 2.5YT/7	ナデ/条痕 (一枚貝)	良且群 A2c	口縁端部剥離 部のみ(一枚貝、 印字)、外縁部 付着	141	—
432	縄文土器	深鉢	A014	—	Vla	— /—(3.3) /—	1.0 ×—	悪(～5.5) 石、チャート等 被覆を含む(?)	良好	10YR7/2 10YR7/3 10YR7/8	ナデ/条痕 (二枚貝)	良且群 A2c	口縁端部剥離 部のみ(二枚貝、 印字)	141	—
433	縄文土器	深鉢	A014	—	Vla	(33.6) /— (9.8) /—	3.5 ×—	やや粗(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む	良好	10YR4/2 10YR4/3 10YR7/3	ナデ/条痕 (一枚貝)、 ケズリ	良且群 A2c	口縁端部剥離 部のみ(一枚貝、 印字)、外縁部 付着	142	43
434	縄文土器	深鉢	A013	—	Vla	(30.0) /— (6.2) /—	2.1 ×—	やや粗(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む	良好	2.5YT/2 10YR5/2 2.5YT/1	ナデ/条痕 (一枚貝、ナ カマ)	良且群 A2c	口縁端部剥離 部のみ(一枚貝、 印字)、外縁部 付着	142	43
435	縄文土器	深鉢	A013	—	Vla	(26.1) /— (13.8) /—	1.8 ×—	やや粗(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む	良好	10YR7/2 10YR7/3 2.5YT/8	ナデ/条痕 (一枚貝)、 ケズリ	良且群 A2c	口縁端部剥離 部のみ(一枚貝、 印字)	142	44
436	縄文土器	深鉢	A014	—	Vla	(19.8) /— (6.2) / (20.8)	1.1 ×—	やや粗(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む	良好	10YR5/3 10YR5/4 10YR7/2	ナデ/条痕 (二枚貝)、 ケズリ	良且群 A2c	口縁端部剥離 部のみ(二枚貝、 印字)	142	—
437	縄文土器	深鉢	A013	—	Vla	(36.8) /— (8.0) /—	1.6 ×—	やや粗(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む	良好	10YR2/1 10YR2/3 10YR4/4	ナデ/条痕 (一枚貝)	良且群 A2c	口縁端部剥離 部のみ(一枚貝、 印字)	142	46
438	縄文土器	深鉢	A013	—	Vla	— /—(2.2) /—	1.0 ×—	やや粗(～5.5) 石、表面等 被覆を含む(?)	良好	10YR1/1 10YR1/2 10YR1/3	ナデ/条痕 (一枚貝)	良且群 A2c	口縁端部内外 剥離(一枚貝、 印字)	142	—
439	縄文土器	深鉢	A013	—	Vla	— /—(5.9) /—	1.0 ×—	やや粗(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む	良好	2.5YT/3 10YR7/2 10YR7/4	ナデ/条痕 (二枚貝)	良且群 A2c	口縁端部内外 剥離(一枚貝、 印字)	142	45
440	縄文土器	深鉢	A014	—	Vla	— /—(2.4) /—	1.0 ×—	悪(～5.5) 石、表面等 被覆を少量化す	良好	10YR8/1 10YR8/2 10YR8/4	ナデ/条痕 (一枚貝)	良且群 A2c	口縁端部内外 剥離(一枚貝、 印字)	142	—
441	縄文土器	深鉢	A013	—	Vla	— /—(8.0) /—	1.0 ×—	悪(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む(?)	良好	10YR5/2 10YR5/3 10YR7/2	ナカマ/条痕 (一枚貝)、 ケズリ	良且群 A2c	口縁端部内外 剥離(一枚貝、 印字)	142	45
442	縄文土器	深鉢	A014	—	Vla	— /—(6.4) /—	— ×—	やや粗(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む	良好	2.5YT/3 10YR7/4 2.5YT/6	ナデ/条痕 (一枚貝)	良且群 A2c	外縁部付着	143	46
443	縄文土器	深鉢	A013	—	Vla	(31.0) /— (21.0) /—	1.8 ×—	やや粗(～5.5) 石、表面等 被覆を多量に含む	良好	10YR5/2 10YR5/3 10YR7/1	ナデ/条痕 (一枚貝)、 ケズリ	良且群 A2c	口縁端部剥離 部のみ(一枚貝、 印字)、外縁部 付着	143	46
444	縄文土器	深鉢か	A013	—	Vla	— /—(3.2) /—	1.0 ×—	悪(～5.5) 石、表面等 被覆を含む(?)	良好	10YR5/1 10YR5/2 2.5YT/6	ナデ/条痕 (一枚貝)	良且群 A2c	—	143	—

表60 第3調査面出土土器観察表⑨

通 数 番 号	種別	番種	出土位置			積 成	色調 (内面) (外面)	背面縫隙 内面/外面	分類 ・ 時期	文様・その他 (単位: cm)	備 考	固 定 番 号		
			出土区・ グリット	遺構 番号	層位									
			口径/底径 /高さ (cm)	口径/底径 /最大径 (cm)	出土 個体数									
445	調査土器	深鉢	A013	—	Vla	—/—/(4.0)/—	1.0 × —	やや丸(～φ1)の 良石・裏面等部 を多く含む	丸好 7.5YR5/4 LYTR4/2 LYTR4/2	ナデ/▲ 折ナデ/▲ 横二枚貝	横Ⅱ群 A3a	外腹ス付量 143	47	
446	調査土器	深鉢	AN14	—	Vla	—/—/(3.4)/—	1.0 × —	やや丸(～φ1)の 良石・チャート等 を多く含む	丸好 7.5YR5/4 LYTR4/2 LYTR4/3	ナデ/▲ 折ナデ/▲ (編笠状工 具)	横Ⅱ群 A3a	—	—	
447	調査土器	深鉢	A013	—	Vla	(31.6)/— (11.5)/—	2.0 × —	やや丸(～φ2)の 良石・チャート等 を多く含む	丸好 LYTR4/3 LYTR4/2 LYTR4/3	ナデ/▲ 折ナデ/▲ ケズリ模ナ デ	横Ⅱ群 A3b	口縁端部酒瓶 瓶み(二枚貝) 印記、体部外 面黒帯有	143	47
448	調査土器	深鉢	A014	—	Vla	(32.0)/— (6.5)/—	2.7 × —	やや丸(～φ2)の 良石・裏面等部 を多く含む	丸好 2.5YR3/2 LYTR5/3 2.5YR3/2	ナデ/ナデ	横Ⅱ群 A3b	口縁端部(ヘラ 印記)、良石 印記、口縁部 外側酒瓶形(マツ 丸み)、變状有	143	48
449	調査土器	深鉢	A013	—	Vla	(25.3)/— (10.0)/—	1.3 × —	やや丸(～φ2)の 良石・チャート等 を多く含む(代 り)	丸好 LYTR7/3 LYTR7/4 LYTR7/4	ナデ/—	横Ⅱ群 A3b	口縁端部(延 長6.0)、口縁端 部内斜面	143	48
450	調査土器	深鉢	AN13	—	Vla	(17.0)/— (20.2)/—	2.8 × —	やや丸(～φ4)の 良石・裏面等部 を多く含む	丸好 LYTR6/2 2.5YR5/3 LYTR5/1	ナデ/ナ デ/▲ ナデ/ケズリ 模ナデ	横Ⅱ群 A3b	外腹ス、内 面コグ付量	143	41
451	調査土器	深鉢	A013	—	Vla	(16.8)/— (10.0)/—	2.1 × —	やや丸(～φ2)の チャート等部 を多く含む(代 り)	丸好 LYTR6/3 LYTR6/2 LYTR6/2	ナデ/ナデ/ ナデ	横Ⅱ群 A3b	外腹ス付量	143	49
452	調査土器	甕	AN14	—	Vla	—/—/(2.6)/—	1.0 × —	壺(～φ1)の良 石・裏面等部 を多く含む	丸好 7.5YR4/3 LYTR4/2 LYTR4/2	ミガキ/ミ ガキ	横Ⅱ群 B	外腹赤彩	144	—
453	調査土器	甕	A014	—	Vla	—/—/(2.2)/—	— × —	壺(～φ1)の チャート等部 を多く含む(代 り)	丸好 LYTR6/3 LYTR6/3 LYTR6/3	ナデ/ミガ キ/ミガキ	横Ⅱ群 B	—	144	—
454	調査土器	甕	A013	—	Vla	—/—/(4.5)/—	— × —	やや丸(～φ1)の 良石・裏面等部 を多く含む(代 り)	丸好 LYTR7/2 LYTR6/2 2.5YR5/1	ナデ/ミガ キ/ナデ/ ミガキ	横Ⅱ群 B	—	144	—
455	調査土器	深鉢	A014	—	Vla	—/—/(2.6)/—	1.0 × —	壺(～φ1)の良 石・裏面等部 を多く含む(代 り)	丸好 2.5YR3/2 LYTR4/1 LYTR4/1	ミガキ/ミ ガキ	横Ⅱ群 C2	—	144	—
456	調査土器	深鉢	A013	—	Vla	—/—/(5.4)/—	1.0 × —	やや丸(～φ3)の 良石・裏面等部 を多く含む	丸好 LYTR5/2 LYTR5/2 LYTR5/2	ミガキ/ミ ガキ/▲ ガキ	横Ⅱ群 C3	口縁端部方形 の小突起	144	49
457	調査土器	深鉢	A014	—	Vla	—/—/(6.7)/—	1.0 × —	壺(～φ2)の良 石・裏面等部 を多く含む(代 り)	丸好 LYTR4/3 LYTR4/4 LYTR4/3	ミガキ/▲ ガキ(直 角)、ミガキ	横Ⅱ群 C2a	口縁端部内面 直角(4.0)、酒 瓶形に押捺正 規、波紋口縁	144	45
458	調査土器	深鉢	AN14	—	Vla	(20.4)/— (12.8)/(24. 0)	2.0 × —	壺(～φ2)の良 石・チャート等 を多く含む(代 り)	丸好 LYTR7/2 LYTR6/2 LYTR6/2	ミガキ/ナ デ	横Ⅱ群 C3	輪郭に荒る 区画文、口縁部 内面斜面	144	41
459	調査土器	深鉢	A013	—	Vla	(20.8)/— (13.9)/—	1.2 × —	やや丸(～φ5)の 良石・石英・黑 砂等部を含む	丸好 LYTR6/2 LYTR6/2 LYTR6/2	ミガキ/ナ デ	横Ⅱ群 C3	口縁端部内面 直角(4.0)、外 面スカーフ	144	—
460	調査土器	深鉢	A014	—	Vla	(14.8)/— (6.7)/—	2.8 × —	壺(～φ1)の良 石・裏面等部 を多く含む	丸好 LYTR6/2 LYTR6/2 LYTR6/2	ミガキ/ミ ガキ	横Ⅱ群 C3	口縁端部小突 起、酒瓶形 、合掌(外 面、口縁部内 面)	144	49
461	調査土器	甕	AN14	—	Vla	(9.0)/— (4.4)/—	4.0 × —	壺(～φ1)の良 石・チャート等 砂等部を含む	丸好 LYTR6/3 LYTR6/3 LYTR6/3	ミガキ/ナ デ/ミガ キ/当葉編 目	横Ⅱ群 D	—	144	61
462	調査土器	甕	A013	—	Vla	(3.8)/— (1.3)/—	3.0 × —	壺 —	丸好 LYTR7/3 LYTR7/3 LYTR7/3	ミガキ/ミ ガキ	横Ⅱ群 D	全腹赤彩	144	51
463	調査土器	甕	A013	—	Vla	—/—/(3.9)/—	— × —	やや丸(～φ1)の 灰石・裏面等部 を多く含む	丸好 LYTR6/3 LYTR2/2 LYTR3/1	ナデ/ミガ キ	横Ⅱ群 D	内腹赤彩	144	51
464	調査土器	深鉢	AN14	—	Vla	—/1.6 (10.0)/—	— × 1	やや丸(～φ2)の 良石・石英・ チャート等部 を多く含む (含む)	丸好 LYTR6/3 LYTR6/3 LYTR6/3	ナデシカ/ ケズリ	横Ⅱ群 A3c	内面コグ付量	144	50

表61 第3調査面出土土器観察表⑩

遺物番号	種別	形種	出土位置			口径/高径 /底径(最大径 (m))	口径 底径 (mm)	底土 (単位: m) (成層)	傾倒 状況	色調 (内面 (外面) (断面))	器面彫刻 内面/外面	分類 ・時期	文様・その他 (単位: m)	伴 同 遺 物 番 号
			出土区・ グリッド	遺構 番号	層位									
465	陶文土器	深鉢か	A013	—	Vla	—/(4.8) /(1.9)/—	— · 0	やや粗(～φ5の 底石・石英・ チート・墨岩等 砂利を多量に 含む)	好	7.5YR6/6 10YR7/2 10YR7/3	ナデ/ナデ	第Ⅱ群 A14	144	—
475	陶文土器	深鉢	AN18	—	Vla	—/(7.5) —	L.0 · —	やや粗(～φ5の 底石・チート・ 墨岩等砂利を 含む)	好	7.5YR7/2 10YR6/2 10YR7/2	ナデ/ナ デ・粗・条 痕	第Ⅱ群 A18	145	42
476	陶文土器	深鉢	A018	—	Vla	(3.1.2)/— (3.0.0)/—	L.5 · —	やや粗(～φ5の 底石・チート・ 墨岩等砂利を 含む)	好	10YR6/6 10YR4/2 SY5/1	ナデ/ナ デ・クズリ 後ナデ	第Ⅱ群 A18	145	42
477	陶文土器	深鉢	A017	—	Vla	—/(4.6) —	L.0 · —	やや粗(～φ5の 砂利を多量に 含む)	好	10YR6/2 10YR7/2 10YR4/1	ナデ/ナデ	第Ⅱ群 A18	145	—
478	陶文土器	深鉢	A018	—	Vla	—/(5.7) —	L.0 · —	薄(～φ5の チート等砂利 を少量含む)	好	SYR6/4 7.5YR5/2 2.5YR4/1	糊/朱痕/ 板ナデ	第Ⅱ群 A18	145	42
479	陶文土器	深鉢	AN15	—	Vla	—/(7.1) —	L.0 · —	やや粗(～φ5の 砂利を多量に 含む)	好	10YR6/6 10YR7/1 10YR2/1	ナデ/ナ デ・粗・条 痕	第Ⅱ群 A18	145	42
480	陶文土器	深鉢	AN18	—	Vla	—/(5.3) —	L.0 · —	やや粗(～φ5の 底石・石英等砂 利を多量に含 む)	好	10YR7/4 10YR4/2 SY4/1	ナデ/朱痕 (ケタ状工 藝)・ケズリ 后	第Ⅱ群 A18	145	42
481	陶文土器	深鉢	A018	—	Vla	—/(3.0) —	L.0 · —	やや粗(～φ5の 底石・石英等砂 利を多量に含 む)	好	10YR5/2 10YR6/2 10YR6/2	ナデ/朱痕 (二枚貝)	第Ⅱ群 A18	145	42
482	陶文土器	深鉢	A018	—	Vla	—/(4.3) —	L.0 · —	やや粗(～φ5の 底石・石英等砂 利を含む)	好	10YR7/2 7.5YR6/4 10YR7/2	板ナデ/板 ナデ	第Ⅱ群 A18	145	42
483	陶文土器	深鉢	A017	—	Vla	—/(3.4) —	L.0 · —	やや粗(～φ5の 底石・チート・ 墨岩等砂利を 含む)	好	10YR2/2 10YR2/3 10YR4/1	ナデ/朱痕 (二枚貝)	第Ⅱ群 A18	145	—
484	陶文土器	深鉢	AN18	—	Vla	—/(3.8) —	L.0 · —	薄(～φ2の 底石・石英等砂 利を多量に含 む)	好	7.5YR6/4 7.5YR6/4 SY6/1	板ナデ/朱 痕	第Ⅱ群 A18	145	—
485	陶文土器	深鉢	A016	—	Vla	—/(5.7) —	L.0 · —	やや粗(～φ5の 底石・チート・ 墨岩等砂利を 多量に含む)	好	7.5YR6/4 10YR6/3 2.5YR6/2	ナデ/朱痕 (二枚貝)	第Ⅱ群 A18	145	—
486	陶文土器	深鉢	A017	—	Vla	—/(5.20) —	L.0 · —	やや粗(～φ5の 底石・チート・ 墨岩等砂利を 多量に含む)	好	2.5YR6/2 10YR7/4 10YR6/2	ナデ/朱痕 (二枚貝)	第Ⅱ群 A18	145	—
487	陶文土器	深鉢	A018	—	Vla	—/(7.7) —	L.0 · —	薄(～φ1の 底石・石英等砂 利を含む)	好	2.5YR6/3 10YR6/3 2.5YR6/1	ナデ/朱痕 (二枚貝)・ ケズリ	第Ⅱ群 A18	145	—
488	陶文土器	深鉢	AN16	—	Vla	(18.0)/(— (11.4)) —	L.0 · —	やや粗(～φ5の 底石・チート・ 墨岩等砂利を 含む)	好	10YR3/1 10YR6/3 10YR2/1	ナデ/ナ デ・ケズリ	第Ⅱ群 A18	145	44
489	陶文土器	深鉢	AN16	—	Vla	—/(14.6) /—	L.0 · —	やや粗(～φ5の 底石・チート・ 墨岩等砂利を 含む)	好	N2/ 10YR5/2 2.5YR4/1	板ナデ/朱 痕/ケズリ/後 ナデ・朱 痕(二枚貝) 半束縫テープ 后	第Ⅱ群 A18	145	44
490	陶文土器	深鉢	A016	—	Vla	—/(7.1) —	L.0 · —	薄(～φ3の 底石・チート・ 墨岩等砂利を 含む)	好	10YR5/2 10YR6/3 10YR5/2	ナデ/朱痕 ナデ消し・ ケズリ	第Ⅱ群 A18	145	44
491	陶文土器	深鉢	A017	—	Vla	—/(6.0) —	L.0 · —	やや粗(～φ3の 底石・チート・ 墨岩等砂利を 含む)	好	10YR6/2 10YR6/4 10YR5/1	ナデ/朱痕 (二枚貝)	第Ⅱ群 A18	145	45
492	陶文土器	深鉢	AN17	—	Vla	—/(5.8) —	L.0 · —	やや粗(～φ5の 底石・石英・ 墨岩等砂利を 含む)	好	10YR7/2 10YR7/3 10YR6/4	ナデ/朱痕 委直(二枚 貝)	第Ⅱ群 A18	145	—
493	陶文土器	深鉢	AN16	—	Vla	—/(3.3) —	— · —	薄(～φ1の 底石・石英等砂 利をわずかに含 む)	好	2.5YR6/1 2.5YR7/1 2.5YR6/1	ミガキ/朱 痕(二枚貝)	第Ⅱ群 A18	145	45
494	陶文土器	深鉢	AN15	—	Vla	—/(3.8) —	L.0 · —	やや粗(～φ2の 底石・石英等砂 利を含む)	好	10YR7/3 10YR7/3 SY7/4	ナデ/朱痕 (二枚貝)	第Ⅱ群 A18	145	—

表62 第3調査面出土土器観察表⑪

調査番号	種別	種類	出土位置			口幅/底径 /高さ(最大径) (cm)	口径 内側 外側 (cm)	底土 (単位: m)	供 成 度	色調 (内面) (外面) (断面)	被面膜 内面/外面 (断面)	分類 時期	文様・その他 (単位: cm)	後 期 番 号	四 肢 番 号
			出土区・ グリット	遺構 番号	層位										
495	縄文土器	圓鉢	AN17	—	Vla	—/—/(2.8) /—	1.0 × —	やや粗(～φ2.5) 長石・石英等砂 粒を含む)	貝 貝	10Y86.3/ 10Y86.4/ 10Y86.1	ナデ/朱痕 (二枚貝)	第Ⅱ群 A2b	口縁端部酒 呑み二枚貝・ 貝	146	46
496	縄文土器	圓鉢	A015	—	Vla	—/—/(4.3) /—	1.0 × —	やや粗(～φ2.5) 長石・チャート・ 雲母を多量に含 む)	貝 貝	10Y87.3/ 10Y88.3/ 10Y88.1	ナデ/朱痕 (二枚貝)	第Ⅱ群 A2b	口縁端部酒 呑み二枚貝・ 貝	146	46
497	縄文土器	圓鉢	AN17	—	Vla	—/—/(6.0) /—	1.0 × —	やや粗(～φ3.0) 長石・チャート・ 雲母等砂粒 を含む)	貝 貝	10Y87.2/ 10Y87.2/ 10Y87.1	朱(二枚貝) ナデ/朱痕 (二枚貝)・ ケズリ	第Ⅱ群 A2a	—	—	—
498	縄文土器	深鉢	AN15	—	Vla	/—/(5.8) /—	1.0 × —	やや粗(～φ3.0) 長石・石英等砂 粒を含む)	貝 貝	10Y84.2/ 10Y85.2/ 10Y82.1	ナデ/朱痕 (縦文状工具 D)	第Ⅱ群 A2a	外面スス付着	146	—
499	縄文土器	圓鉢	A017	—	Vla	—/—/(9.0) /—	1.0 × —	やや粗(～φ4.0) 長石・チャート・ 雲母等砂粒 を含む)	貝 貝	10Y86.1/ 10Y84.2/ 10Y84.1	ナデ/朱痕 ナデ/ケズ リ後ナデ	第Ⅱ群 A2a	口縁端部外面ス ス、藍色内面 コゲ付着	146	46
500	縄文土器	深鉢	AN18	—	Vla	—/—/(8.0) /—	1.0 × —	濃(～φ1.5)の 長石・雲母を多量 に含む)	貝 貝	SY3.1/ SY3.1/ SY3.1	ナデ/強ナ ダ・ケズリ	第Ⅱ群 A2a	外面スス付着	146	46
501	縄文土器	深鉢	A017	—	Vla	—/—/(7.4) /—	— × —	濃(～φ1.5)の 長石・チャート・ 雲母等砂粒を含 む)	貝 貝	2.5TY3.3/ 2.5TY3.4/ 2.5TY3.3	ナデ/ナ ダ・ケズリ	第Ⅱ群 A2a	—	—	—
502	縄文土器	深鉢	AN17	—	Vla	—/—/(4.0) /—	1.0 × —	やや粗(～φ2.0) 長石・石英・ 雲母等砂粒を含 む)	貝 貝	10Y86.4/ 10Y86.4/ 10Y86.1	ナデ/ナデ	第Ⅱ群 A2a	口縁端部酒 呑み(「フ」字 形・二字)	146	46
503	縄文土器	圓鉢	A015	—	Vla	—/—/(3.9) /—	1.0 × —	濃(～φ1.5)の 長石・チャート・ 雲母等砂粒を含 む)	貝 貝	7.5SYB.4/ 7.5SYB.3/ 7.5SYB.3	ナデ/ナデ	第Ⅱ群 A2a	口縁端部酒 呑み(「枚貝・ 印字、瓦波狀」) 口縁端部外面 酒呑み(「枚 貝・印字、外 面スス付着	146	46
504	縄文土器	圓鉢	AN15	—	Vla	—/—/(9.2) /—	1.9 × —	やや粗(～φ3.0) 長石・チャート・ 雲母等砂粒を多量 に含む)	貝 貝	10Y87.1/ 10Y88.2/ 10Y87.1	ナデ/ナ ダ・ケズリ	第Ⅱ群 A2a	口縁端部酒 呑み(「喇叭 形・圓錐狀」)	146	46
505	縄文土器	深鉢	A017	—	Vla	(36.0) /— (23.0) /—	1.8 × —	やや粗(～φ2.5) 長石・チャート・ 雲母等砂粒を含 む)	貝 貝	7.5SYB.4/ 7.5SYB.5/ 7.5SYB.4	ナデ/朱痕 (縦文状工具 D)	第Ⅱ群 A2a	—	—	—
506	縄文土器	深鉢	A017	—	Vla	—/—/(16.5) /—	1.0 × —	やや粗(～φ3.0) 長石・石英等砂 粒を含む)	貝 貝	10Y85.2/ 10Y87.3/ 10Y84.1	強ナデ/朱 痕(縦文状工 具D)	第Ⅱ群 A2a	外面スス付着	146	47
507	縄文土器	深鉢	A017	—	Vla	—/—/(8.3) /—	1.0 × —	濃(～φ1.5)の 長石・石英等砂 粒を含む)	貝 貝	7.5SYB.4/ 7.5SYB.4/ 7.5SYB.5	ナデ/朱痕 (二枚貝)	第Ⅱ群 A2a	外面スス・内 面コゲ付着	146	—
508	縄文土器	圓鉢	A015	—	Vla	(29.4) /— (6.8) /—	1.1 × —	やや粗(～φ2.5) 長石・チャート・ 雲母等砂粒 を含む)	貝 貝	10Y87.2/ 10Y88.2/ 10Y87.2	ナデ/ナ ダ・ケズリ	第Ⅱ群 A2a	外面スス付着	146	47
509	縄文土器	深鉢	A015	—	Vla	(17.6) /— (8.1) /—	1.1 × —	やや粗(～φ2.5) 長石・石英・ チャート・雲母 等砂粒を含む)	貝 貝	10Y87.2/ 10Y88.2/ 10Y85.1	ナデ/ナデ	第Ⅱ群 A2a	外面スス付着	146	47
510	縄文土器	圓鉢	A015	—	Vla	—/—/(3.4) /—	1.0 × —	やや粗(～φ2.0) 長石・チャート・ 雲母等砂粒 を含む)	貝 貝	S3.1/ 10Y86.3/ 10Y85.1	ナデ/ナ ダ・ケズリ	第Ⅱ群 A2b	貝口端部(無 1.1、喇叭狀、 兩次火候) 口縁端部外面 酒呑み(「フ 字形・喇叭 狀」)	147	48
511	縄文土器	深鉢	AN15	—	Vla	—/—/(4.3) /—	1.0 × —	やや粗(～φ2.5) 長石・石英・ チャート・雲母 等砂粒を含む)	貝 貝	10Y85.2/ 10Y86.2/ 10Y86.2	ナデ/ナデ	第Ⅱ群 A2b	文様交差(横 1.0)	147	48
512	縄文土器	深鉢	A015	—	Vla	—/—/(5.8) /—	1.0 × —	やや粗(～φ2.5) 長石・石英等砂 粒を含む)	貝 貝	10Y86.2/ 10Y85.2/ 10Y86.2	ナデ/ナデ	第Ⅱ群 A2b	文様交差(横 0.9)	147	48
513	縄文土器	圓鉢	AN16	—	Vla	—/—/(6.4) /—	1.0 × —	やや粗(～φ4.0) 長石・チャート・ 雲母等砂粒 を含む)	貝 貝	10Y86.2/ 10Y85.3/ L.5Y4.1	ナデ/朱痕 (一枚貝・ ケズリ)	第Ⅱ群 A2d	貝口端部(無 0.8、喇叭狀) 口縁端部外面 酒呑み(「一枚 貝・喇叭 狀」)	147	48

表63 第3調査面出土土製品観察表⑫

遺 跡 名 称 番 号	種 類	出土位置			口径/底径 ×高さ/ 最大径 (cm)	口径部 底面 寸法 ・底盤 軸脚 枚数	地土 (単位: m)	焼 成 度	色調 (内面/外 面)(新/古)	器面彫刻 内面/外 面	分類 ・時期	文様・その他 (単位: cm)	堆 積 層 番 号									
		出土区・ グリット	遺構 番号	層位																		
514 青文土器	陶杯	AN18	—	Vla	-/-/(4.3)/ —	1.0・—	やや粗(～φ3.0) 底石・チャコ ト・雲母等砂粒 を含む)	良 好	7. SYE/4 10YRE/4 2. SYE/1	ナデ/条痕 (二枚貝)	昔日群 A2d	周日突堤(幅 0.6、二枚貝・ 口縁)、1段階 堆積物用み(二 枚貝手形)	147	48								
515 青文土器	陶杯	A015	—	Vla	-/-/(4.0)/ —	1.0・—	やや粗(～φ3.0) 底石・チャコ ト・雲母等砂粒 を含む)	良 好	10YRE/2 10YRE/2 10YRE/2	極ナデ/条 痕(二枚貝 手形)	昔日群 A2d	川端遺跡 堆積物用み(二 枚貝手形)	147	48								
516 青文土器	陶杯	A018	—	Vla	-/-/(1.6)/ —	1.0・—	やや粗(～φ1.6) 底石・チャコ ト・雲母等砂粒 を含む)	良 好	2. SYE/1 10YRE/3 2. SYE/1	木明/木明	昔日群 A2d	青文突堤(幅 0.6m)	147	—								
517 青文土器	陶杯	AN18	—	Vla	-/-/(3.0)/ —	1.0・—	やや粗(～φ3.0) 底石・チャコ ト・雲母等砂粒 を含む)	良 好	10YRE/1 10YRE/2 10YRE/3	木明/木明	昔日群 A2d	周日突堤(幅 0.8、ヘラ刺 み、口縁)	147	—								
518 青文土器	陶杯	AN18	—	Vla	/-(3.0)/ —	*	素(～φ4.0) 底石・チャコ ト・雲母等砂粒 を含む)	良 好	10YRE/2 10YRE/2 10YRE/3	ナデ/条痕 (二枚貝)	昔日群 A2d	青文突堤(幅 1.0m)	147	48								
519 青文土器	陶杯	AN18	—	Vla	(17.0)/— (8.3)/(20.0)	1.0・—	やや粗(～φ4.0) 底石・チャコ ト・雲母等砂粒 を含む)	良 好	10YRE/1 10YRE/1 10YRE/1	ナデ/ミガ キ	昔日群 A2d	周日突堤(二 重)、高次区段 青文、外側ス カス、内面コグ 付蓋	147	48								
520 青文土器	陶杯	A016	—	Vla	-/-/(3.0)/ —	*	やや粗(～φ3.0) 底石・当砂粒 を含む)	良 好	10YRE/2 10YRE/2 2. SYE/2	極ナデ/条 痕(二枚貝)	昔日群 A6	外面ス付蓋	147	—								
521 青文土器	陶杯	A016	—	Vla	-/-/(3.1)/ —	*	やや粗(～φ3.1) 底石・チャコ ト・雲母等砂粒 を含む)	良 好	10YRE/1 2. SYE/1 2. SYE/1	ナデ/条痕 (ハク形状 M)	昔日群 A6	周日突堤	147	—								
522 青文土器	壺	A017	—	Vla	-/-/(4.7)/ —	—	素(～φ4.7) 底石(～φ2.0) 等砂粒を含む)	良 好	10YRE/4 10YRE/1 10YRE/1	張ナデ/ナ デ	昔日群 B1	外面部凹、付 蓋物あり塗抹	147	49								
523 青文土器	壺	A017	—	Vla	(11.0)/— (17.0)/(23. 2)	3.4・—	素(～φ1.0) チャコト に(含む)	良 好	SYE/1 10YRE/2 SYE/1	ナデ・ミガ キ/ミガ キ	昔日群	周辺外縁施 工(40.2)	147	41								
524 青文土器	壺	A017	—	Vla	(12.4)/— (9.5)/—	2.0・—	やや粗(～φ2.0) 底石・チャコ ト・雲母等砂粒 を含む)	良 好	10YRE/2 10YRE/3 SYE/3	ナデ・ミガ キ/ミガ キ	昔日群	口縁内面化 粧(40.2)、整 理外縁は設状	147	—								
525 青文土器	壺	AN17	—	Vla	(11.0)/— (7.1)/—	2.5・—	やや粗(～φ1.0) 底石・石英・雲 母等砂粒を含 む)	良 好	10YRE/2 10YRE/2 10YRE/1	ミガキ/ナ デ/ミガ キ・ケズリ ミガキ	昔日群 B2	周辺面施粧 (40.1)	147	49								
526 青文土器	壺	A017	—	Vla	-/-/(9.0)/ —	*	やや粗(～φ2.0) 底石・チャコ ト・雲母等砂粒 を含む)	良 好	2. SYE/1 10YRE/2 10YRE/2	ナデ/ミガ キ/ミガキ	昔日群 B2	口縁内面化 粧(40.2)整 理外縁	147	49								
527 青文土器	壺	A017	—	Vla	(15.7)/ (4.6)/—	1.2・—	素(～φ2.0) 底石・当砂粒 を含む)	良 好	SYE/1 10YRE/1 SYE/1	擦オサエ・ ミガキ/ミ ガキ	昔日群 B3	内面水彩	147	49								
528 青文土器	壺	AN16	—	Vla	-/-/(4.2)/ —	*	素(～φ1.0) 底石等砂粒 を含む)	良 好	10YRE/2 10YRE/2 2. SYE/1	ミガキ/ナ デ/ミガ キ・ケズリ ミガキ	昔日群 B3	—	147	—								
529 青文土器	壺	A017	—	Vla	-/-/(2.3)/ —	1.0・—	素(～φ2.0) 底石・チャコ ト・雲母等砂粒 を含む)	良 好	7. SYE/1 7. SYE/1 7. SYE/1	ミガキ/ミ ガキ	昔日群 B3	内面水彩	147	—								
530 青文土器	壺	A018	—	Vla	-/-/(2.7)/ —	*	やや粗(～φ1.0) 底石等砂粒 を含む)	良 好	2. SYE/2 10YRE/2 2. SYE/1	木明/木明	昔日群 B4d	体面に周日突 堤(幅0.6m、 ヘラ刺み、3 寸)	147	—								
531 青文土器	陶杯	AN18	—	Vla	-/-/(6.7)/ —	1.0・—	素(～φ2.0) 底石・チャコ ト・雲母等砂粒 を含む)	良 好	10YRE/4 10YRE/2 10YRE/2	ナデ/極ナ デ/ナデ・ ケズリ	昔日群 C3	口縁周辺小突 起	147	49								
532 青文土器	陶杯	A015	—	Vla	-/-/(4.9)/ —	1.0・—	やや粗(— —)	良 好	10YRE/1 10YRE/2 10YRE/1	ナデ/ナ デ・ケズリ ミガキ	昔日群 C4	外側ス付蓋	147	—								
533 青文土器	陶杯	AN15	—	Vla	-/-/(8.3)/ —	*	やや粗(～φ1.0) 底石・石英・雲 母等砂粒を含 む)	良 好	10YRE/4 10YRE/3 10YRE/1	ナデ/ナ デ・ケズリ ミガキ	昔日群 C4	—	147	50								
534 青文土器	陶杯	AN16	—	Vla	(12.0)/— (5.3)/—	2.1・—	やや粗(～φ2.0) 底石・チャコ ト・石英・雲母等 砂粒を含む)	良 好	10YRE/2 2. SYE/3 SYE/1	ミガキ/ナ デ/ケズリ ミガキ	昔日群 D6	青文突堤(幅 0.5)	148	50								

表54 第3調査面出土土製品観察表⑩

浅 都 番 号	種別	性質	出土位置			地質 層位	地質 層位 (単位: m)	地質 層位 (単位: m)	地質 層位 (単位: m)	色調 (内面) (外面) (表面)	表面調査 内面/外面 (表面)	分類 時期	文様 (単位: cm)	特 徴	因 数 番 号	
			出土区 グリット	遺構 番号	層位											
			口絵/底絵 /背景/最大径 (cm)	・高さ 等級 個体数												
636	縄文土器	西鉢	A018	—	Vla	—/—/(2.6) —	1.0+—	やや粗(～φ1)の 黄土石等物を少 量ずつ含む	良 好	10YR6/1 10YR6/2 10YR6/2	ミガキ／ミ ガキ	第Ⅱ群	黒文安帶(幅 2.7)	148	—	
636	縄文土器	西鉢	A017	—	Vla	—/—/(3.0) —	1.0+—	やや粗(～φ2)の チャート・黒 等物を少許含む	良 好	10YR3/1 10YR4/2 10YR4/2	ナヅ／ナヅ	第Ⅱ群	黒文安帶(幅 2.8cm)	148	—	
637	縄文土器	西鉢	A018	—	Vla	—/—/(2.2) —	1.0+—	粗(～φ1)の 灰 石・チャート等 物をわずかに 含む	良 好	10YR6/2 10YR6/2 5%1	ミガキ／ミ ガキ	第Ⅱ群	内外面黒文安 帶(内面幅2.5 cm・外面幅0.7 cm)	148	60	
638	縄文土器	西鉢	A016	—	Vla	—/—/(3.7) —	1.0+—	粗(～φ1)の 灰 石・黒母等砂 岩を含む	良 好	10YR4/1 10YR4/2 10YR6/2	ミガキ／ミ ガキ	第Ⅱ群	口縁部内外面 黒文安帶(幅 0.7cm)、口縁 部縦割り状況	148	60	
639	縄文土器	西鉢	A016	—	Vla	—/—/(5.1) —	1.0+—	粗(～φ1)の 灰 石・チャート・ 黒母等砂岩を わずかに含む	良 好	2.5%4/1 2.5%4/2 10YR6/1	ミガキ／ミ ガキ	第Ⅱ群	C5	148	60	
640	縄文土器	西鉢	A016	—	Vla	—/—/(3.1) —	1.0+—	やや粗(～φ3)の 灰 石・チャート・ 黒母等砂岩 を多く含む	良 好	10YR6/1 10YR6/1 10YR7/1	赤ナヅ／ナ サツニア ヅ・ミガキ	第Ⅱ群	C5	148	—	
641	縄文土器	西鉢	A016	—	Vla	—/—/(2.6) —	1.0+—	やや粗(～φ3)の 灰 石・チャート・ 黒母等砂岩 を多く含む	良 好	2.5%4/1 10YR6/2 10YR6/3	ミガキ／ミ ガキ・ケズ リ	第Ⅱ群	C5	148	—	
642	縄文土器	西鉢か	A017	—	Vla	—/—/(1.4) —	—+1	やや粗(～φ3)の 灰 石・チャート・ 黒母等砂岩 を含む	良 好	2.5%4/1 2.5%4/2 2.5%4/2	ナヅ／ケズ リ	第Ⅱ群	C5	丸底のため底 張なし	148	60
643	縄文土器	西鉢か	A017	—	Vla	—/13/(1.1) /—	—+1	粗(～φ1)の 灰 石・チャート・ 黒母等砂岩を 含む	良 好	2.5%4/1 2.5%4/2 2.5%4/2	ナヅ／ナヅ	第Ⅱ群	C5	148	60	
644	縄文土器	西鉢	A017	—	Vla	—/—/(13.9) /—	—+—	やや粗(～φ3)の 灰 石・石英・黑 瓦・チャート・ 黒母等砂岩 を多く含む	良 好	10YR7/1 10YR6/2 10YR7/3	ナヅ／ナ サツニア ヅ・ミガキ	外壁縫隙次列 灰瓦	D	148	46	
645	縄文土器	西鉢か	A016	—	Vla	(18.0)/— (11.4)/—	1.0+—	やや粗(～φ1)の 灰 石・チャート等 物を少 量含む	良 好	10YR3/1 10YR7/3 10YR3/1	ナヅ／ナ サツニア ヅ・後ナヅ	第Ⅱ群	D	半裁竹織成工具 により区画化築 成(約0.2)、 外縁スラッシュ 内面コガラ・垂	148	61
646	縄文土器	壺か	A018	—	Vla	—/—/(2.4) —	—+—	粗(～φ1)の 灰 石・黒母等砂 岩を含む	良 好	10YR6/2 10YR6/1 10YR6/1	不列／ミガ キ	第Ⅱ群	D	縫隙織成(内面 縫隙・外縁縫隙 充てん)、外縁 垂れ	148	61
647	縄文土器	壺か	A018	—	Vla	—/—/(3.0) —	—+—	粗(～φ1)の 灰 石・チャート・ 黒母等砂岩 を含む	良 好	7.5%6/6 7.5%6/6 7.5%6/6	ナヅ／不列	第Ⅱ群	D	縫隙織成(内面 縫隙・外縁縫隙)	148	61
648	縄文土器	西鉢	A016	—	Vla	—/—/(3.0) —	1.0+—	やや粗(～φ2) の 灰 石・黒母等砂 岩を含む	良 好	10YR3/2 10YR4/3 10YR3/1	ナヅカ／ミ ガキ	第Ⅱ群	D	口縁部小切 取・平行法縫 合(約0.3)、外縁 スラッシュ	148	61
649	縄文土器	深鉢	A016	—	Vla	—/(4.0) (4.3)/—	—+0	やや粗(～φ2) の 灰 石・チャート・ 黒母等砂岩 を多く含む	良 好	7.5%6/3 10YR6/2 10YR7/1	ナヅ／ケズ リ	断面スラッシュ	A7b	148	—	
650	縄文土器	深鉢	A016	—	Vla	—/2.4/(4.6) /—	—+1	やや粗(～φ2) の 灰 石・石英・ チャート等砂岩 を多く含む(合む)	良 好	10YR4/1 10YR6/5 10YR4/1	ナヅ／ケズ リ・ラブナヅ	第Ⅱ群	A7c	断面スラッシュ	148	60
651	縄文土器	深鉢	A017	—	Vla	(3.0)/(7.9) /—	—+1	やや粗(～φ2) の 灰 石・チャート等砂 岩を多く含む(合 む)	良 好	10YR6/3 10YR7/3 10YR6/4	ナヅ／ケズ リ・泡オサ ル	第Ⅱ群	A7c	断面外縁凹み 時の抉り抜が れる	148	—
652	縄文土器	深鉢	A017	—	Vla	—/(6.2)/(3.8) /—	—+1	やや粗(～φ2) の 灰 石・チャート等砂 岩を多く含む(合 む)	良 好	10YR4/1 10YR6/3 10YR4/1	ナヅ／不列	第Ⅱ群	A7d	148	60	
653	縄文土器	深鉢か	A016	—	Vla	—/—/(2.3) /—	—+0	やや粗(～φ1)の 灰 石・チャート等砂 岩を少 量含む	良 好	10YR6/3 10YR6/2 10YR4/1	ナヅ／ナヅ	第Ⅱ群	A7d	148	—	
654	縄文土器	ア 士器	A016	—	Vla	(7.4)/— (12.8)/—	3.1+—	やや粗(～φ1) の 灰 石・チャート等砂 岩を含む(合 む)	良 好	10YR6/3 10YR6/3 10YR6/3	ナヅ／ミガ キ	第Ⅱ群	E	148	61	

表65 第3調査面出土土製品観察表⑩

通 数 記号	測 量 用 具 記号	測 量 用 具 記号	出土位置			口径/底径 /厚さ(最大径 (cm))	口縁部 残存率 (X/12) ・底部 倒伏 個体数	出土 (単位: m)	傾 斜	色調 (内面) (外面) (底面)	基面調査 内面/外面	分類 ・時期	文様・その他 (単位: cm)	堆 積 層 記 号
			出土区・ グリット	遺構 番号	層位									
555	六里土層 ア 上部	AN06	—	Vla	—	— / (2.0) / — / (1.6) / —	— · 1	やや粗(～ゆるい) 灰岩・石灰岩等 を含む	SY5/1 SY5/2 SY5/2	ナデ/ナ デ・指オサ ニ	第Ⅱ群 B	—	148 51	
571	六里土層 深部	AN09	—	Vla	(26.0) / — / (21.9) / —	4.2 · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード 等、雲母等の物 質を多く含む	SY6/2 SY6/2 SY6/2	ナデ(一何面 凹)/ナデ/ ナデ(工具不 規)	第Ⅱ群 A1a	口縫隙部透視 刷込み(へら刷 込み、斬突状)	150 46		
572	六里土層 深部	AN09	—	Vla	— / — / (31.0) / —	— · —	粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード等 を多く含む	SY6/2 SY6/2 SY4/1	ナデ/ナ デ・指オサ ニ	第Ⅱ群 A1b	—	148 42		
573	六里土層 深部	AN09	—	Vla	— / — / (3.1) / —	— · —	粗(～ゆるい) 灰岩等の物 質の粒を含む)	SY6/2 SY6/3 SY6/1	ナデ/ナ デ	第Ⅱ群 A2a	口縫隙部透視 刷込み(導工狀 工具による削正)	150 —		
574	六里土層 深部	AN09	—	Vla	— / — / (3.2) / —	1.0 · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード 等、雲母等の物 質を含む)	SY6/2 SY6/2 SY6/2	ナデ/角模 型(二枚貝 か)	第Ⅱ群 A2c	口縫隙部透視 刷込み(導工狀 工具による削正)	150 —		
575	六里土層 深部	AN09	—	Vla	— / — / (3.2) / —	1.0 · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード 等、雲母等の物 質を含む)	SY6/2 SY6/2 SY6/2	ナデ/角模 型(二枚貝 か)	第Ⅱ群 A2c	口縫隙部透視 刷込み(へら刷 込み、斬突状)	150 —		
576	六里土層 深部	AN09	—	Vla	— / — / (7.6) / —	1.0 · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード 等、雲母等の物 質を多く含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/条 理・ケズリ	第Ⅱ群 A2e	口縫隙部透視 刷込み(二枚貝 か)、外側ス トレス	150 —		
577	六里土層 深部	AN09	—	Vla	(17.8) / — / (6.1) / —	1.0 · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩等の物質を 多く含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/条 理・ケズリ	第Ⅱ群 A2f	口縫隙部透視 刷込み(一枚貝 片)、外側ス トレス	150 44		
578	六里土層 深部	AN09	—	Vla	(33.9) / — / (18.0) / —	2.5 · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード等 を多く含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/条 理(二枚貝) ケズリ	第Ⅱ群 A2g	口縫隙部透視 刷込み(一枚貝 片)、外側ス トレス	150 44		
579	六里土層 深部	AN09	—	Vla	(29.0) / — / (18.4) / —	1.9 · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード 等、雲母等の物 質を多く含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/条 理(二枚貝) ケズリ	第Ⅱ群 A2h	口縫隙部透視 刷込み(一枚貝 片)、底面削 正	150 44		
580	六里土層 深部	AN09	—	Vla	— / — / (2.7) / —	1.0 · —	粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード 等、雲母等の物 質を含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/条 理(二枚貝)	第Ⅱ群 A2i	口縫隙部透視 刷込み(一枚貝 片)	150 —		
581	六里土層 深部	AN09	—	Vla	— / — / (5.6) / —	1.0 · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード 等、雲母等の物 質を含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/角模 型(二枚貝)	第Ⅱ群 A2j	口縫隙部透視 刷込み(一枚貝 片)、外側ス トレス	150 45		
582	六里土層 深部	AN09	—	Vla	— / — / (5.20) / —	1.0 · —	粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード等 を多く含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/条 理(二枚貝)	第Ⅱ群 A2k	口縫隙部透視 刷込み(一枚貝 片)	150 —		
583	六里土層 深部	AN09	—	Vla	— / — / (4.8) / —	— · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード 等、雲母等の物 質を多く含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/角模 型(二枚貝)	第Ⅱ群 A2l	口縫隙部透視 刷込み(一枚貝 片)	150 46		
584	六里土層 深部	AN09	—	Vla	— / — / (5.6) / —	1.0 · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード 等、雲母等の物 質を含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/ナ デ・ケズリ	第Ⅱ群 A2m	口縫隙部透視 刷込み	150 46		
585	六里土層 深部	AN09	—	Vla	(32.6) / — / (25.2) / —	3.0 · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード等 を多く含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/条 理(二枚貝)	第Ⅱ群 A2n	内面透光化物 質	150 45		
586	六里土層 深部	AN09	—	Vla	— / — / (4.0) / —	1.0 · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード 等、雲母等の物 質を含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/ナ デ	第Ⅱ群 A2o	—	150 —		
587	六里土層 深部	AN09	—	Vla	— / — / (3.7) / —	1.0 · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード 等、雲母等の物 質を含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/ナ デ	第Ⅱ群 A2p	口縫隙部透視 刷込み	150 48		
588	六里土層 深部	AN09	—	Vla	(35.2) / — / (24.7) / —	3.5 · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード等 を多く含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/条 理(二枚貝) ケズリ	第Ⅱ群 A2q	口縫隙部透視 刷込み(一枚貝 片)	150 45		
589	六里土層 深部	AN09	—	Vla	— / — / (3.7) / —	1.0 · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード 等、雲母等の物 質を多く含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/ナ デ	第Ⅱ群 A2r	口縫隙部透視 刷込み(一枚貝 片)	150 —		
590	六里土層 深部	AN09	—	Vla	— / — / (2.1) / —	1.0 · —	やや粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード 等、雲母等の物 質を多く含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/ナ デ	第Ⅱ群 A2s	東安帝寺(幅 1.0)	150 —		
591	六里土層 深部	AN09	—	Vla	/ / (2.6) / —	1.0 · *	粗(～ゆるい) 灰岩・チヤード等 を多く含む)	SY7/2 SY7/2 SY7/2	ナデ/ナ デ	第Ⅱ群 A2t	周日崇佛(幅 0.8、ヘラ刷 込み)	150 —		

表66 第3調査面出土土器品観察表⑮

通 数 量 番 号	種別	基準	出土位置			地質/底質 /標高/最大径 (cm)	口縁部 周長(Φ)(X) ・底部 厚さ(cm)	地土 (単位: m)	積成 度	色調 (内面) (外面) (底面)	表面開裂 内面/外面 (底面)	分類 ・時期	文様・その他 (単位: cm)	通 数 量 番 号	
			出土区・ グリット	遺構 番号	層位										
592	焼火土器	焼鉢	A019	—	Vla	—/—/(9, 9) —	L.0 · —	やや粗(～φ4.0) 黄土・葉母等砂 粒を含む)	良 好	7.5YR5/4 7.5YR5/3 2.5Y5/1	ナデ/条痕 (二枚貝)	第Ⅱ部 A21	斜目波帯(幅 1.2、二枚貝・ 印文)、外面ス ト付帯	151 48	
593	焼火土器	焼鉢	A019	—	Vla	(21.43) /— (4, 3) · —	1.2 · —	やや粗(～φ4.0) 黄土・チャート等 砂粒を含む)	良 好	10YR5/2 10YR7/3 2.5Y4/1	ナデ/不規	第Ⅱ部 A21	葉文突起(幅 0.8)	151 48	
594	焼火土器	焼鉢	A019	—	Vla	(10.6) /— (B. 3) · —	1.0 · —	黒(～φ2.0)の 黄土・黒斑を多く 含む)	良 好	2.5Y2/1 2.5Y2/1 2.5Y2/1	ナデ/ナデ	第Ⅱ部 A5e	葉文突起(幅 0.8)、内面凹 凸化物付帯、外 面ストローキ	151 48	
595	焼火土器	焼鉢か	A019	—	Vla	—/—/(5, 6) —	— · —	黒(～φ2.0)の 長石・チャート・ 黄斑移動を多く 含む)	良 好	10YR6/2 10YR7/1 10YR6/1	ナデ/ケズ リ	第Ⅱ部 A6	内面に沈文 (幅0.2)、内面 コガレ付帯	151 49	
596	焼火土器	焼鉢	A019	—	Vla	—/—/(6, 9) —	— · —	やや粗(～φ4.0) 黄土・チャート等 砂粒を含む)	良 好	10YR6/2 10YR7/3 2.5Y5/1	条痕状の開 隙痕(工具不 明)／不明	第Ⅱ部 A6		151 —	
597	焼火土器	焼鉢か	A019	—	Vla	—/—/(3, 8) —	1.0 · —	やや粗(～φ4.0) 黄土・チャート等 砂粒を多量に 含む)	良 好	7.5YR6/4 7.5YR6/4 7.5YR6/2	ナデ/ナデ	第Ⅱ部 C2か	口縁外側内面沈 文(幅0.2)	152 —	
598	焼火土器	焼鉢	A019	—	Vla	(29.0) /— (13.7) · —	1.4 · —	やや粗(～φ4.0) 長石・葉母等砂 粒を含む)	良 好	10YR4/1 10YR4/1 10YR2/1	ミガキ(一組 の縦溝)、底 凹状・柱状 壁面ナデ	第Ⅱ部 C3		151 49	
599	焼火土器	焼鉢	A019	—	Vla	—/—/(5, 3) —	1.0 · —	やや粗(～φ4.0) 長石・葉母等砂 粒を含む)	良 好	10YR5/2 10YR7/2 10YR5/2	ナデ/ミガ キ／ナデ・ ミガキ	第Ⅱ部 C3	底面状況・底 面に擦痕押 出	151 49	
600	焼火土器	焼鉢	A019	—	Vla	—/—/(4, 3) —	1.0 · —	やや粗(～φ4.0) 長石・葉母等砂 粒を多量に含む)	良 好	10YR4/1 10YR5/3 10YR4/1	ナデ/ナデ	第Ⅱ部 C4		151 —	
601	焼火土器	焼鉢	A019	—	Vla	(32.7) /— (13.1) / (34. 7) · —	4.1 · —	黒(～φ2.0)の 長石・チャート等 砂粒を含む)	良 好	7.5YR5/2 7.5YR5/2 N/2	ナデ/ミガ キ/ケズリ	第Ⅱ部 C5	底面外側凸 起(幅0.3)	152 45	
602	焼火土器	焼鉢	A019	—	Vla	—/—/(6, 0) —	1.0 · —	黒(～φ2.0)の 長石・チャート等 砂粒を含む)	良 好	6.5Y4/1 10YR5/2 2.5Y4/1	ナデ/ミガ キ/ナデ・ ミガキ	第Ⅱ部 C6	底面外側改 良(幅0.1)、補 修孔	152 50	
603	焼火土器	西鉢	A019	—	Vla	(24.2) /— (7.3) / (28.1) —	3.1 · —	やや粗(～φ4.0) 長石・チャー ト・葉母等砂 粒を含む)	良 好	10YR8/1 10YR7/2 10YR4/1	ナデ/ミ ガキ・ケズ リ	第Ⅱ部 C6	葉文突起(幅 0.8)	152 45	
604	焼火土器	西鉢	A019	—	Vla	(29.0) /— (9.5) · —	2.1 · —	やや粗(～φ4.0) チャート等を含 む)	良 好	6.5Y3/1 10YR5/2 2.5Y4/1	ナデ/ミガ キ	第Ⅱ部 D	葉文突起(幅 0.8)、外面改 良	152 45	
605	焼火土器	焼鉢	A019	—	Vla	—/2.1 / (4.2) —	— · 1	やや粗(～φ4.0) 長石・チャート等 砂粒を多量に 含む)	良 好	6.5Y7/1 10YR7/3 2.5Y5/1	ナデ/不規	第Ⅱ部 A7b		152 —	
606	焼火土器	焼鉢	A019	—	Vla	—/(7.3) / (5.9) —	— · —	やや粗(～φ4.0) 長石・葉母等砂 粒を含む)	良 好	10YR6/3 10YR7/2 10YR7/2	ナデ/深 溝(～0.2)・ナ デ(底面不 明)・指オサ	第Ⅱ部 A7d	内面ログ付帯	152 50	
607	焼火土器	焼鉢	A019	—	Vla	—/(4.2) / (6.4) —	— · 1	やや粗(～φ4.0) 長石・チャー ト・葉母等砂 粒を多量に含 む)	良 好	10YR6/2 7.5YR5/4 2.5Y4/1	ナデ/ケズ リ	第Ⅱ部 A7d		152 50	
608	焼火土器	西鉢か	A019	—	Vla	—/6.8 / (3.3) —	— · 1	やや粗(～φ4.0) 長石・葉母等砂 粒を少量化)	良 好	10YR5/1 10YR5/1 10YR5/1	ナデ/ナデ ・カ	第Ⅱ部 A7e		152 50	
609	焼火土器	角形土器	A019	—	Vla	—/—/(3.7) —	— · —	やや粗(～φ4.0) 長石・葉母等砂 粒を含む)	良 好	10YR3/1 10YR3/2 10YR3/2	ナデ/ナデ	第Ⅱ部 E	底面開裂(幅 0.5)	152 51	
610	焼火土器	焼鉢	A019 —A014	—	IVb~V	—/—/(5.9) —	1.0 · —	やや粗(～φ4.0) 長石・葉母等砂 粒を含む)	良 好	10YR5/3 10YR5/2 10YR5/2	ナデ/破 片/不規	第Ⅱ部 A1b	口縁開裂連続 (幅0.2)・外 面スリップ付 帯	152 42	
611	焼火土器	焼鉢	A019 —A014	—	IVb~V	—/—/(6.8) —	1.0 · —	やや粗(～φ4.0) 長石・葉母等砂 粒を含む)	良 好	10YR5/2 10YR4/2 10YR5/2	ナデ/条痕 (二枚貝)・ ケズリ	第Ⅱ部 A2c	口縁開裂連続 (幅0.2)・外 面スリップ付 帯	152 44	

表67 第3調査面出土土製品観察表⑯

通 報 號	種 類	標 識	出土位置		口徑/底径 (cm)/最 大高 (cm)	口部形 状/底座 等特 徴	断土 (単位: m)	積 層	色 調 (内面 外 面) (新面)	前面深 度 (内面/外 面)	分類 ・時 期	文様・その他 (単位: cm)	圖 版 號		
			出土区、 グリット	遺構 番号											
615	調査土器	深鉢	AN10 -A014	-	IVe-V	-/-/(5, 5) /-	1.0 -	今や瓶(～約5の 石右、石英、雲 母等砂を多量 に含む)	良 好	10YR7/3 10YR7/4 10YR7/5	ナデ/朱赤 (一枚貝、 タマズ)	第Ⅱ群 K2c	口縁端紅斑 (一枚貝、 タマズ)	153	-
616	調査土器	深鉢	AN10 -A014	-	IVe-V	(20, 0) / - /(8, 5) / -	1.3 -	今や瓶(～約5の 石右、石英、雲 母等砂を多量 に含む)	良 好	10YR7/1 10YR7/2 10YR7/3	板ナマク/白 (一枚貝、 タマズ)	第Ⅱ群 K2b	口縁端紅斑 (一枚貝、 タマズ)	153	46
617	調査土器	深鉢	AN19	-	V	(28, 0) / - /(11, 0) / -	2.1 -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	7, SYR7/6 SYR7/6 SYR7/6	ナデ/白 (一枚貝、 タマズ)	第Ⅱ群 K3a	口縁端紅斑 (一枚貝、 タマズ)	163	47
618	調査土器	深鉢	A012	-	V	(17, 2) / - /(5, 0) / -	1.2 -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	10YR7/2 10YR7/3 10YR7/5	ナデ/板ナ マク/不明	第Ⅱ群 K3c	口縁端紅斑 (一枚貝、 タマズ)	163	-
619	調査土器	深鉢	AN15	-	V	/ / (6, 1) /-	1.0 -	今や瓶(～約5の 石右、石英、雲 母等砂を多量 に含む)	良 好	10YR7/2 10YR7/3 10YR7/5	ナデ/朱赤 (一枚貝、 タマズ)	第Ⅱ群 K3d	口縁端紅斑 (一枚貝、 タマズ)	153	47
620	調査土器	深鉢	A015	-	IVe-V	-/-/(4, 1) /-	- -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	10YR7/3 10YR7/2 10YR7/5	ナデ/朱赤 (一枚貝、 タマズ)	第Ⅱ群 K3d	口縁端紅斑 (一枚貝、 タマズ)	153	47
621	調査土器	深鉢	A012	-	V	(27, 0) / - /(5, 0) / -	1.7 -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	2, SYT7/3 2, SYT7/3 2, SYT7/2	ナデ/板ナ マク/檜原 (一枚貝)	第Ⅱ群 K2l	口縁端(檜原 1.0、一枚貝、 タマズ)	153	48
622	調査土器	深鉢	A012	-	V	-/-/(5, 4) /-	1.0 -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	10YR7/2 10YR7/3 2, SYT7/1	ナデ/板ナ マク/不明	第Ⅱ群 K2l	口縁端(檜原 0.8、一枚貝、 タマズ)	153	48
623	調査土器	深鉢	AP10	-	-	-/-/(17, 3) /-	1.0 -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	10YR7/3 10YR7/3 10YR7/1	ナデ/板ナ マク/	第Ⅱ群 K2l	口縁端(檜原 1.1、一枚貝、 タマズ)	163	48
624	調査土器	深鉢	AP15	-	V	-/-/(6, 2) /-	1.0 -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	10YR7/3 7, SYR7/6 10YR7/3	ナデ/板ナ マク/不明	第Ⅱ群 K2l	口縁端(檜原 1.0、一枚貝、 タマズ)	163	48
625	調査土器	深鉢	AP12	-	IVe-Via	-/-/(7, 8) /-	1.0 -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	10YR7/2 10YR7/3 10YR7/3	ナデ/朱赤 (一枚貝、 タマズ)	第Ⅱ群 K2j	口縁端(檜原 0.8、二枚貝、 タマズ)	163	48
626	調査土器	深鉢	AP12	-	IVe-V	-/-/(3, 5) /-	- -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	2, SYT7/3 2, SYT7/3 SYT7/3	ナデ/朱赤 (一枚貝、 タマズ)	第Ⅱ群 K2l	口縁端(檜原 1.1、一枚貝、 タマズ)	163	48
627	調査土器	愛憎窓か	AP12	-	IVe-V	-/-/(3, 3) /-	1.0 -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	10YR7/3 10YR7/3 10YR7/3	ナデ/朱赤 (一枚貝)	第Ⅱ群 K2l	實文対訛(檜 原)	163	48
628	調査土器	不明	AP10	-	IVe-V	-/-/(4, 2) /-	1.0 -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	10YR7/3 10YR7/3 10YR7/3	ナデ/板ナ マク/	第Ⅱ群 K5b	伝統的腰帶文 (40.0)、済生 上織紋ヘア編	163	48
629	調査土器	豊か	AP10	-	IVe-V	-/-/(1, 7) /-	1.0 -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	10YR7/3 10YR7/3 10YR7/3	ナデ/ナデ /ナデ	第Ⅱ群 K5b	腰帶(40.0、 タマズ)	163	-
630	調査土器	豊か	A012	-	V	-/-/(3, 9) /-	- -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	10YR7/4 10YR7/4 10YR7/5	ナデ/朱赤 か	第Ⅱ群 K5c	腰帶(40.0、 タマズ)	163	-
631	調査土器	深鉢	AN10 -A014	-	IVe-V	-/-/(6, 8) /-	1.0 -	今や瓶(～約5の 石右、石英、雲 母等砂を多量 に含む)	良 好	10YR7/3 10YR7/3 10YR7/1	ミガキ/ナ ダ・タマズ	第Ⅱ群 K3	口縁端紅斑 (タマズ)	163	49
632	調査土器	深鉢	-	紹土	-/-/(3, 6) /-	1.0 -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	10YR7/2 10YR7/2 10YR7/2	ミガキ/ミ ガキ	第Ⅱ群 K3	縫隙外頭面紅 斑(タマズ)	163	49	
633	調査土器	深鉢	AN19	-	IVe-V	/ / (3, 2) /-	1.0 -	今や瓶(～約5の 石右、石英、雲 母等砂を多量 に含む)	良 好	10YR7/2 10YR7/4 10YR7/5	ナデ/ミガ キ/	第Ⅱ群 C4	口縁端(檜原 0.6)、波紋	153	50
634	調査土器	深鉢	AP12	-	V	-/-/(4, 7) /-	1.0 -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	10YR7/3 10YR7/3 10YR7/3	ナデ/ミガ キ/	第Ⅱ群 C4	心状口縁	163	50
635	調査土器	深鉢	AP11	-	IVe-Va	-/-/(2, 4) /-	1.0 -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	10YR7/4 10YR7/4 10YR7/5	ナデ/不明 /不明	第Ⅱ群 C5	實文対訛(檜 原)	163	50
636	調査土器	深鉢	AP12 A011	-	IVe-Vla VIIb	(25, 8) / (7, 2) (5, 0) / -	4.1 -	今や瓶(～約5の 石右、石英等砂 を多量に含む)	良 好	10YR7/3 10YR7/3 10YR7/3	ナデ/タマ シ/タマズ (タマズ)	第Ⅱ群 C5	腰帶(タマズ) 心状口縁	163	45

表68 第3調査面出土土製品観察表①

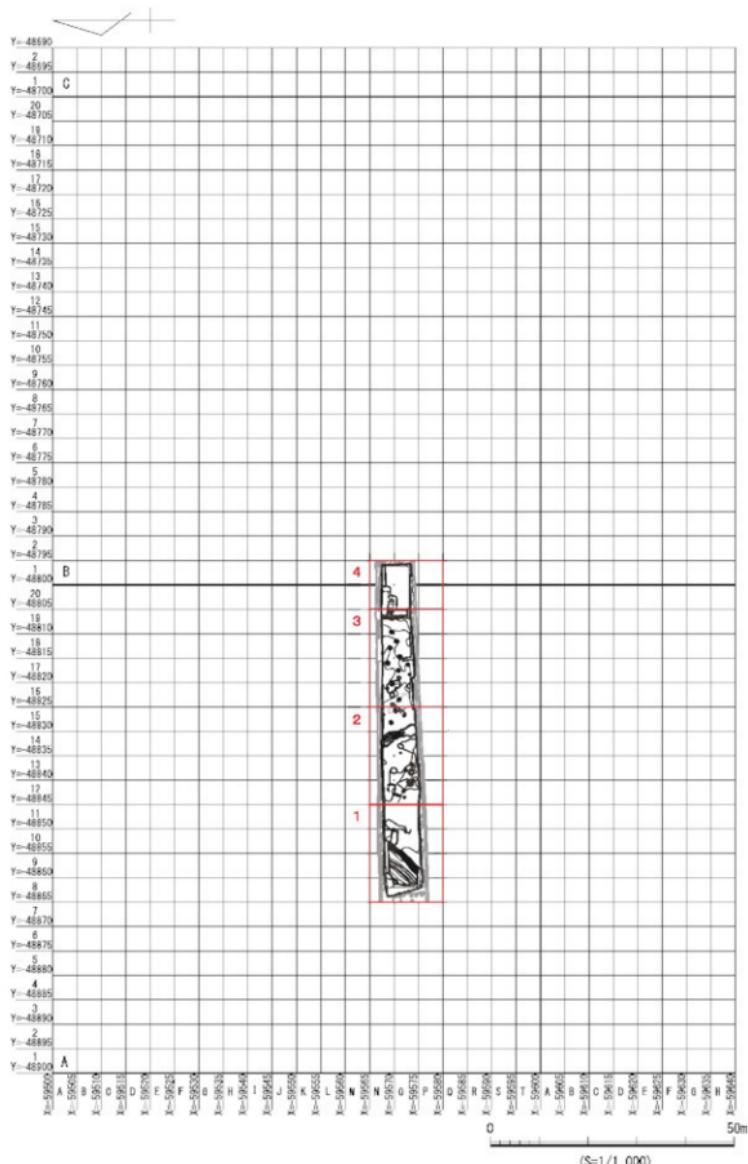
遺物番号	種別	種類	出土位置			口底/底径 ×高さ/最大径 (cm)	口縁部 残存率 (X/12) ・底部 偏位	粘土 (単位: mm) 供成	色調 (内面) (外側) (断面)	鏡面調査 内面/外側	分類 時期	文様・その他 (単位: cm)	検出番号	回収番号
			出土区・ グリット	遺構 番号	層位									
637	織文土器	壺	AP10		IV~V	/ / (2.5) /	-	やや粗(～φ1)の 灰石・石英等を 粒と少量含む	10YR3/2 及 10YR3/2 10YR4/1	ナデ/ミガ キ・黒鉛削 織文	鏡Ⅱ群 D	摩氏織文(沈継 幅0.4、赤継 0.5)	154	51
638	織文土器	浅鉢	AO19		IVb~V	/ / (3.8) /	1.0+	やや粗(～φ1)の 灰石・石英・墨 等の砂粒を含む	10YR7/3 及 10YR6/3 10YR5/1	不明/不明	鏡Ⅱ群 D	黒織紋厚2、 沈継(3条、幅 0.6)	154	51
639	織文土器	深鉢	AP12	-	V	-/-/(7.3) /	-	やや粗(～φ1)の 灰石・赤色粒等 の砂粒を含む	10YR8/6 及 10YR6/3 10YR5/1	ナデ(基盤次 丁真小)/ミ カキカ	鏡Ⅱ群 D	沈継(半縮れ)雪 状工具10種 0.3、黒織紋厚 文、半凹文(手 竹)	154	51
640	織文土器	壺か	AO13	-	IVa	-/-/(5.9) /	-	やや粗(～φ3)の 灰石・チャート 等の砂粒を含む	2.5Y4/1 10YR5/2 及 2.5T5/2	ナデ/ナデ	鏡Ⅱ群 D	黒赤文(細 目)、株市狀 に横0.2の沈 継、丁型の小 突起、外周辺 付層	154	51
641	織文土器	深鉢	AP12	-	V	-/(6.4)/(6.5) /-	-	やや粗(～φ2)の 灰石・石英等 の砂粒を含む	10YR2/1 及 10YR7/3 10YR2/1	ナデ/ケズ リ	鏡Ⅱ群 A7d		154	-
642	織文土器	舟形土器	AP10		IV~V	/ (6.1)/(2.2) /	-	やや粗(～φ2)の 灰石・石英・墨 等の砂粒を含む (-付)	10YR4/1 及 10YR3/2 10YR5/3	ナデ/ナデ	鏡Ⅱ群 E	弧状兆文(幅 0.7)	154	51

表69 第3調査面出土土製品一覧表

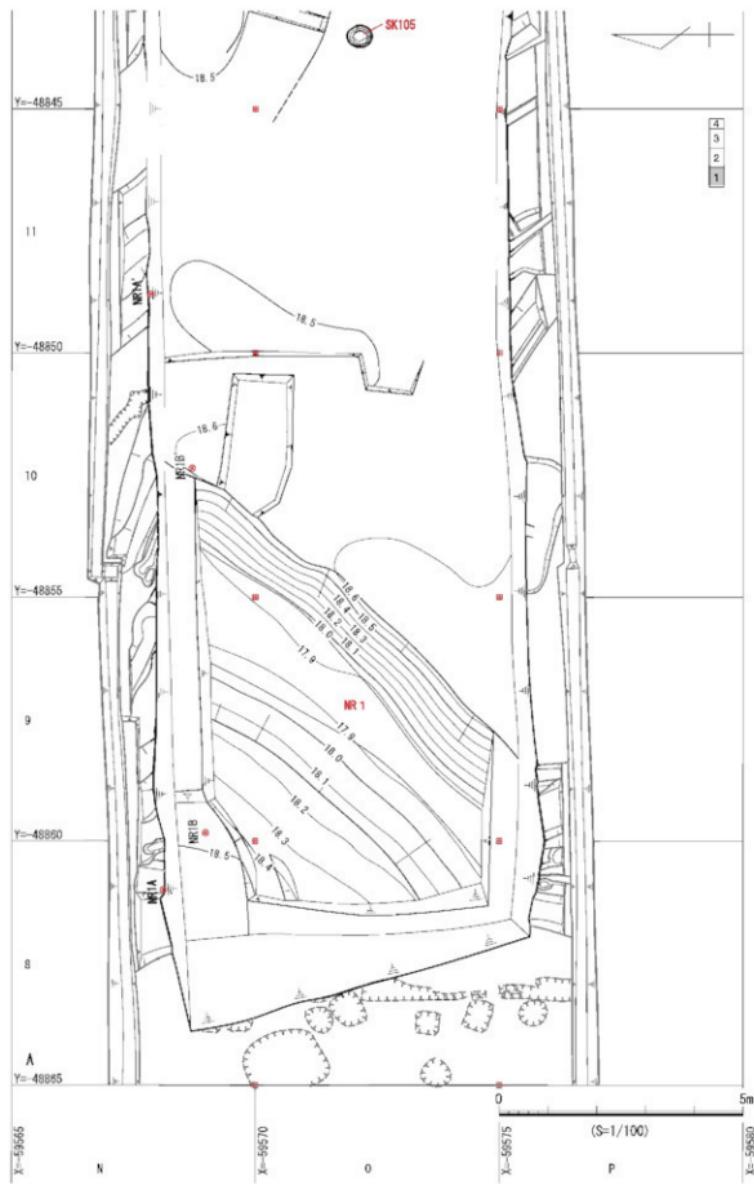
遺物番号	段上 番号	種類	出土位置			素材	長軸/短軸/幅・厚さ (cm)	重さ (g)	絞跡・その他	検出番号	回収番号
			出土区・ グリット	遺構 番号	層位						
410	4699-18	甕	AO12	Vla	土	(1.6)	0.7	0.7	0.9 J.幅0.2cm	140	51
411	4699-19	甕	AO12	Vla	土	(1.6)	0.7	0.7	0.8 J.幅0.2cm	140	51
466	4686-02	加工凹盤	AN13	Vla	土	3.7	3.5	0.6	10.4	144	51
467	4667-39	加工凹盤	AN14	Vla	土	3.2	3.0	0.7	8.0	144	51
556	4633-1	円錐形土製品	AO16	Vla	土	6.7	(6.3)	3.4	87.9 J.径1.6cm	148	41
610	4787-72	加工凹盤	AO19	Vla	土	3.2	2.8	1.0	7.5 加工突起(幅0.8cm、一枚具 D)	152	51
611	4794-2	加工凹盤	AO19	Vla	土	6.2	6.2	1.5	43.3 茎部破片を加工	152	51

表70 第3調査面出土石器・石製品一覧表

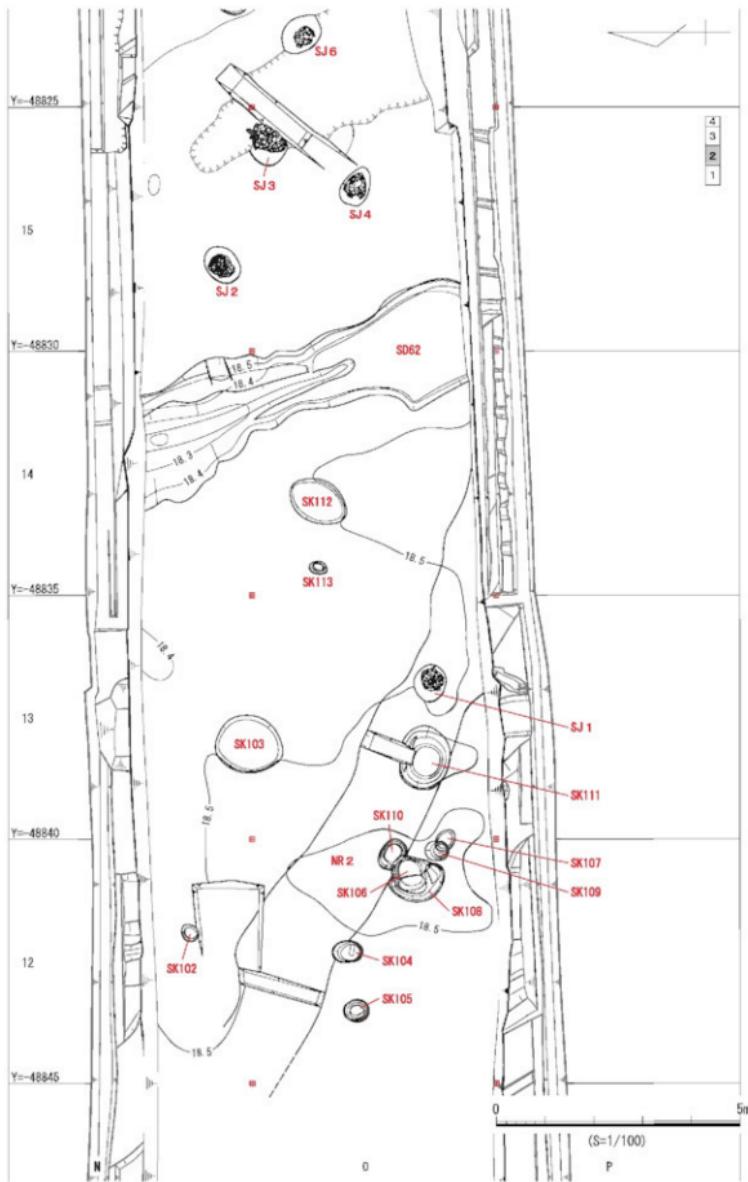
標識番号	出土位置 番号	基準 番号	出土位置			形状	長軸/短軸/幅・厚さ (cm)			重量 (g)	説明・その他	傳令番号	伝令番号
			出土区・ グリット	直機 番号	層位								
207	6020	石器	SL2	①	J	メガカイト	2.3	1.9	0.4	0.8	ふるい作業で出土	129	62
168	4684	石器	AN13	—	Vta	メガカイト	3.0	(1.6)	0.4	(1.1)	基礎切削	144	62
169	4689-32	石器	AO13	—	Vta	下足石	(2.3)	1.4	0.6	(1.5)	先端部・基礎切削	144	62
170	4692-60	石器	AO14	—	Vta	メガカイト	2.7	1.6	0.4	1.0	—	141	52
167	4622	石器	AN18	—	Vta	下足石	2.0	1.3	0.4	0.7	—	148	52
309	6019	スレーブバー スレーブバー	SL3	—	メガカイト	3.9	2.7	0.7	5.3	ふるい作業で出土	129	52	
329	4745-49	スレーブバー スレーブバー	SK102	①	I	トヨ石	2.3	3.2	0.6	5.6	—	129	52
561	4614-3	石器	AO18	—	Vta	メガカイト	8.2	4.6	1.8	70.3	—	148	42
336	4817	VF	SK104	①	J	メガカイト	2.4	6.1	0.8	10.7	—	134	52
336	5817-2	VF	SK104	①	I	メガカイト	2.6	4.5	1.0	5.8	—	134	52
366	4663	VF	SK116	④	a	メガカイト	2.8	3.0	0.8	7.0	—	135	52
558	4614-6	VF	AO18	—	Vta	メガカイト	1.7	2.6	0.4	1.6	—	148	42
559	5637-2	VF	AN16	—	Vta	メガカイト	2.3	3.9	1.1	13.0	—	148	52
560	4613-2	VF	AO18	—	Vta下層	チャート	4.6	2.6	0.3	4.6	—	148	42
—	4614-6	VF	AO18	—	Vta	砾石	3.8	8.9	1.9	41.7	—	—	—
—	4613-78	刮削	AO19	NB3	—	メガカイト	3.0	1.6	0.7	3.6	—	—	—
—	4696-61	刮削	SDX62	①	a	メガカイト	4.0	2.3	0.8	10.2	—	—	—
—	4696-62	刮削	SDX62	①	b	メガカイト	2.4	2.1	0.4	2.1	—	—	—
—	4696-63	刮削	SDX62	①	c	メガカイト	1.8	1.4	0.2	0.7	—	—	—
—	4697-47	刮削	SDX62	②	a	下足石	2.6	0.8	0.4	0.9	—	—	—
—	6016	刮削	SL4	①	I・2	下足石	0.8	0.7	0.1	0.1	—	—	—
—	6017	刮削	SL4	①	3	メガカイト	1.6	1.0	0.2	0.6	—	—	—
—	5018	刮削	SL4	②	—	砾石	1.3	1.1	0.2	0.3	—	—	—
—	5019-2	刮削	SL4	②	—	メガカイト	1.6	1.2	0.2	0.3	—	—	—
—	5019-3	刮削	SL4	②	—	メガカイト	0.9	0.6	0.1	0.1	—	—	—
—	5018-4	刮削	SL4	②	—	砾石	1.1	0.6	0.1	0.1	—	—	—
—	5018-5	刮削	SL4	②	—	メガカイト	2.3	1.1	0.3	0.7	—	—	—
—	5018-6	刮削	SL4	②	—	メガカイト	1.2	0.7	0.2	0.1	—	—	—
—	5018-7	刮削	SL4	②	—	メガカイト	1.1	0.6	0.1	0.1	—	—	—
—	5020-2	刮削	SL2	①	1	メガカイト	2.0	1.1	0.4	0.8	—	—	—
—	6021	刮削	SL2	①	—	下足石	0.8	0.6	0.1	0.1	—	—	—
—	5020-3	刮削	SL2	①	2	下足石	1.2	1.1	0.2	0.6	—	—	—
—	5020-3	刮削	SL2	①	2	下足石	1.4	0.7	0.1	0.1	—	—	—
—	5020-3	刮削	SL2	②	2	下足石	1.0	0.6	0.1	0.1	—	—	—
—	4620	刮削	AN18	—	Vta	チャート	2.6	1.9	0.6	3.5	—	—	—
—	4614-6	刮削	AO18	—	Vta	メガカイト	2.3	2.0	0.2	1.6	—	—	—
—	4625-2	刮削	AO17	—	Vta	メガカイト	2.2	2.2	0.6	3.7	—	—	—
396	4842	石器	NB3	—	Vta	砾石	9.6	2.1	1.6	43.2	褐色丸形容か	139	62
375	4795	石刀	SK116	②	a	砾石	(17.8)	3.8	2.6	(196.4)	黒色丸形容か	135	62
473	4666	石刀	AN14	—	Vta	砾石	(9.2)	2.6	1.6	(75.1)	黒色丸形容か	144	52
412	4749-2	石刀か 石器	AO18	—	Vta	砾石	(5.2)	(2.1)	(0.6)	(7.7)	—	140	52
171	4665	石器	AN14	—	Vta	砾石	4.7	2.3	1.0	22.8	—	144	52
563	4615	剥離石斧	AO18	—	Vta	砂粒石	(3.6)	3.3	0.8	(14.9)	—	148	52
643	4642	剥離石斧	AO12	—	V	砂粒石	(8.2)	5.8	2.2	140.0	—	154	52
—	4795-45	剥離石斧	AO19	—	Vta	砂粒石	(5.6)	2.9	0.6	(19.5)	—	—	—
273	6006	石器・竹石	SJ2	—	Vta	砂粒石	(24.1)	(19.3)	16.2	(8360.0)	—	122	53
299	4992	石器・竹石	SJ9	—	Vta	砂粒石	24.3	34.6	10.6	11600.0	—	126	53
242	4799	石器・竹石	SK06	①	3	砂粒石	(12.3)	(8.6)	7.0	(1100.0)	—	124	53
563	4631	石器・竹石	AO18	—	Vta	砂粒石	(17.4)	(6.6)	(4.4)	(778.2)	—	149	53
276	4978	砾石・竹石	SJ3	—	Vta	砂粒石	22.4	8.0	5.3	1300.0	使用済分類B	122	64
308	4998	砾石・竹石	SL2	②	I	砂粒石	12.9	9.2	3.1	851.0	使用済分類C	129	64
320	4698	砾石・竹石	SDX62	②	a	砂粒石	9.8	7.3	4.3	463.3	使用済分類ABDE	129	64
397	4614	砾石・竹石	NB3	—	Vta	砂粒石	26.9	7.3	5.4	1400.0	使用済分類ABCD	139	64
113	4734	砾石・竹石	AO11	—	Vta	砂粒石	(11.0)	10.6	5.6	985.0	使用済分類ABCD	145	64
479	4667	砾石・竹石	AO13	—	Vta	砂粒石	12.2	10.2	4.3	767.1	使用済分類AB	144	64
474	4659-2	砾石・竹石	AO13	—	Vta	砂粒石	6.1	7.6	5.7	464.5	使用済分類ABCD	144	64
161	4614	砾石・竹石	AO17	—	Vta	砂粒石	14.7	10.3	7.7	1800.0	使用済分類AB	149	64
565	4626	砾石・竹石	AO17	—	Vta	砂粒石	(11.0)	(9.3)	5.9	(861.3)	使用済分類AB	149	64
566	4694	砾石・竹石	AO15	—	Vta	砂粒石	13.1	4.4	3.8	344.3	使用済分類ABCD	149	64
167	4611-2	砾石・竹石	AO17	—	Vta	砂粒石	12.0	6.0	3.4	489.0	使用済分類ABCD	149	64
568	4660	砾石・竹石	AO15	—	Vta	砂粒石	13.6	6.1	5.0	630.3	使用済分類BC	149	64
569	4629	砾石・竹石	AO18	—	Vta	砂粒石	21.4	8.2	2.3	717.1	使用済分類BCDE	149	64
570	4642	砾石・竹石	AN18	—	Vta	成形砂	21.0	8.3	5.3	1600.0	成形砂丸形容か	149	54
612	4786	砾石・竹石	AO19	—	Vta	成形砂	(6.0)	10.0	5.8	(488.8)	使用済分類ABDE	162	—
511	2965	砾石・竹石	AO19	—	V	成形砂	(12.0)	6.2	4.3	(43.2)	使用済分類AB	161	64
645	4672	砾石・竹石	AN18-AN14	—	Vta-V	成形砂	11.0	7.1	2.6	356.4	使用済分類C	164	—
646	4672	砾石・竹石	AN18-AN14	—	Vta-V	成形砂	12.6	7.5	3.1	361.8	使用済分類ABCD	164	—
—	4623	砾石・竹石	AO17	—	Vta	成形砂	(4.6)	(8.6)	(5.2)	(253.4)	使用済分類BC	—	—
—	4797	砾石・竹石	AN19	—	Vta	成形砂	(7.6)	(4.2)	(2.6)	(72.1)	使用済分類AB	—	—
—	4637	砾石・竹石	AN18	—	Vta	成形砂	(6.2)	(7.6)	(7.6)	(330.0)	使用済分類AB	—	—
—	4768-23	砾石・竹石	AO19	—	Vta	成形砂	(5.1)	(1.6)	(4.6)	(21.2)	使用済分類AB	—	—
—	4685	砾石・竹石	AN13	—	Vta	成形砂	(9.6)	7.7	3.2	(378.8)	使用済分類ABD	—	—
—	4687-2	砾石・竹石	AO13	—	Vta	成形砂	(12.9)	(8.6)	(5.6)	(882.1)	使用済分類A	—	—
—	5615	砾石・竹石	AO18	—	Vta	成形砂	(9.0)	10.3	6.3	846.5	使用済分類AB	—	—
296	4998	上工のあら砂	SJ8	—	Vta	成形砂	16.4	8.6	7.4	1400.0	—	125	53



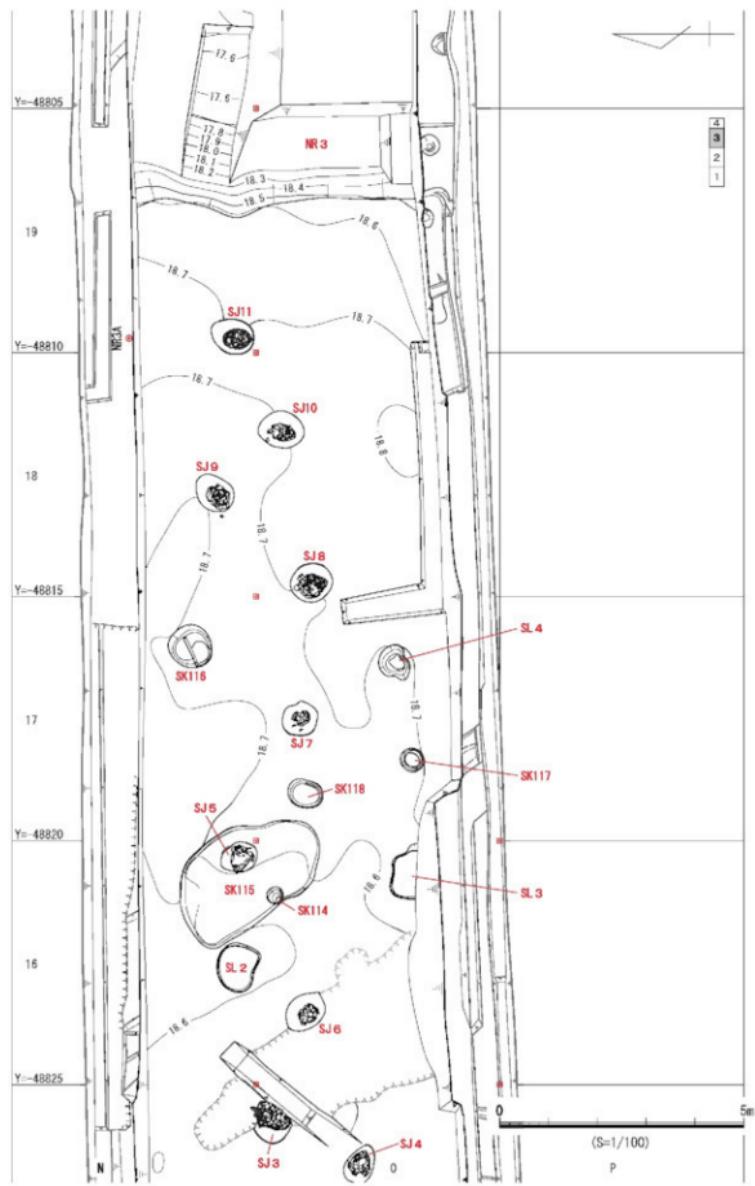
第155図 第3調査面発掘区全域図剖付図



第156図 第3調査面発掘区全域図分割図①



第157図 第3調査面発掘区全域図分割図②



第158図 第3調査面発掘区全域図分割図③



第159図 第3調査面発掘区全域図分割図④

報告書抄録

ふりがな	ろくりいせき・いなりいせき						
書名	六里遺跡・稻荷遺跡						
副書名							
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番号	第139集						
編著者名	長谷川幸志						
編集機関	岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 Tel.058-237-8550						
発行年月日	2018年1月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
六里遺跡	岐阜県 揖斐郡大野町 六里・小衣斐	21403	11625	35° 27' 42"	136° 37' 43"	20140509 ~20141215	2,332.0 m ²	記録保存 調査
稻荷遺跡	岐阜県 揖斐郡大野町 六里	21403	11401	35° 27' 42"	136° 37' 56"	20140526 ~20141203	1,091.0 m ²	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
			古代	中世	近世	現代	
六里遺跡	散布地	縄文時代	畦畔	19条	縄文土器	16,239点	大野郡条里的 里境・坪境と
	集落跡	弥生時代	水田区画	25面	弥生土器・土師器	9,444点	考えられる溝
	その他の墓	古墳時代	畝溝状遺構群	2箇所	須恵器	1,989点	状遺構や大野
	生産遺跡	古代	竪穴建物	7軒	灰釉陶器	762点	町初となる縄
		中世	掘立柱建物	3棟	中近世陶磁器	1839点	文時代晚期の
		近世	柱穴列	4列	土製品	12点	土器埋設遺構
			溝状遺構	62条	石器・石製品	101点	11基を確認。
			土器埋設遺構	11基	木製品	3点	
			土坑	118基	など	など	
稻荷遺跡	集落跡	古墳時代	畦畔	1条	縄文土器	39点	発掘区東部で
	生産遺跡	古代	竪穴建物	18軒	弥生土器・土師器	6,049点	奈良時代から
		中世	溝状遺構	18条	須恵器	6,110点	平安時代にか
			畝溝状遺構群	1箇所	灰釉陶器	1,321点	けての竪穴建
			柱穴状遺構	10基	中近世陶磁器	762点	物群18軒を確
			土坑	127基	土製品	2点	認。竪穴建物
			など		石器・石製品	11点	から猿投産の
					須恵器大甕出		土。

要 約	<p>六里遺跡は縄文時代晚期から近世までの複合遺跡であり、今回の発掘調査では主に縄文時代晚期、古墳時代、中世以降の遺構を確認した。第1調査面では、条里地割に規制された中世以降の水田跡を確認し、坪境と考えられる溝状遺構を検出した。第2調査面では、古墳時代前期から後期にかけての遺構を確認し、平安時代の溝状遺構や復原条里における五里と六里の里境と考えられる溝状遺構群を検出した。古墳時代前期には幅3mを超える溝状遺構が設置され、当該地における本格的な土地利用が開始された。古墳時代後期の遺構は、発掘区西部の微高地と東部の低地に分かれて分布し、その状況から微高地に集落域、低地に水田域が存在したと考えられる。第3調査面では、縄文時代晚期後半の十器埋設遺構11基などを確認した。遺構は、大きく東海地方の縄文土器編年における稻荷山式期と西之山式期に分けられること、遺物包含層や自然流路から五貫森式期や馬見塚式期の土器が出土することから、当該期において継続的に人々の活動があったと考えられる。</p> <p>稻荷遺跡は古代から中世にかけての複合遺跡であり、今回の発掘調査では主に古代の遺構を確認した。検出した遺構は、発掘区東部の微高地と西部の低地に分かれて分布し、その状況から微高地に集落域、低地に水田域が存在したと考えられる。古墳時代後期に竪穴建物や溝が認められ、奈良時代後半に竪穴建物が増加し、平安時代前半にかけて集落が営まれた。竪穴建物の1軒からは、底部を欠く猿投産須恵器の大甕が潰れた状態で出土し、意図的な廃棄が行われた可能性がある。集落の最終段階に設置された溝状遺構の長軸方位は南北軸から傾いており、条里地割施行以前の集落であったことが予想される。なお、遺物包含層であるⅢ層上面で検出した南北方向の畦畔は、条里の坪境と考えられる。</p>
-----	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

岐阜県文化財保護センター 第139集

六里遺跡・稻荷遺跡 (第1分冊)

2018年1月31日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1
印 刷 株式会社 もとすいんさつ